



『Cisco Nexus 3000 シリーズ NX-OS ユニキャストルーティング構成ガイド、10.1(x)』

最終更新：2025 年 7 月 16 日

シスコシステムズ合同会社

〒107-6227 東京都港区赤坂9-7-1 ミッドタウン・タワー

<http://www.cisco.com/jp>

お問い合わせ先：シスコ コンタクトセンター

0120-092-255（フリーコール、携帯・PHS含む）

電話受付時間：平日 10:00～12:00、13:00～17:00

<http://www.cisco.com/jp/go/contactcenter/>



目次

はじめに :

はじめに xxxi

対象読者 xxxi

表記法 xxxi

Cisco Nexus 3000 シリーズ スイッチの関連資料 xxxii

マニュアルに関するフィードバック xxxiii

通信、サービス、およびその他の情報 xxxiii

第 1 章

新機能および変更された機能に関する情報 1

新機能および変更された機能に関する情報 1

第 2 章

ユニキャスト ルーティング機能のプラットフォーム サポート 3

ユニキャスト ルーティング機能のプラットフォーム サポート 3

第 3 章

概要 7

ライセンス要件 7

レイヤ 3 ユニキャスト ルーティングについて 7

ルーティングの基礎 8

パケット交換 8

ルーティング メトリック 9

パス長 9

Reliability 9

ルーティング遅延 10

帯域幅 10

負荷	10
通信コスト	10
ルータ ID	10
自律システム	11
コンバージェンス	12
ロード バランシングおよび等コスト マルチパス	12
ルートの再配布	12
アドミニストレーティブ ディスタンス	13
スタブ ルーティング	13
ルーティング アルゴリズム	14
スタティック ルートおよびダイナミック ルーティング プロトコル	15
内部および外部ゲートウェイ プロトコル	15
ディスタンス ベクトル プロトコル	15
リンクステート プロトコル	16
レイヤ 3 仮想化	17
CiscoNX-OS フォワーディング アーキテクチャ	17
ユニキャスト RIB	17
隣接マネージャ	18
ユニキャスト転送分散モジュール	18
FIB	18
ユニファイ転送テーブル	19
ハードウェア フォワーディング	19
ソフトウェア転送	20
レイヤ 3 ユニキャスト ルーティング機能のまとめ	20
IPv4 and IPv6	20
Open Shortest Path First (OSPF)	20
EIGRP	20
BGP	21
RIP	21
スタティック ルーティング	21
レイヤ 3 仮想化	21
Route Policy Manager	21

ファーストホップ冗長プロトコル	22
オブジェクト トラッキングの設定	22
関連項目	22

第 4 章

IPv4 の設定 23

IPv4 の概要	23
複数の IPv4 アドレス	24
アドレス解決プロトコル	24
ARP キャッシング	25
ARP キャッシュのスタティックおよびダイナミック エントリ	25
ARP を使用しないデバイス	26
Reverse ARP	26
プロキシ ARP	27
ローカル プロキシ ARP	27
Gratuitous ARP	28
収集スロットル	28
ICMP	28
ICMP 到達不能サポートによる送信元インターフェイスの設定	29
仮想化のサポート	29
ECMP を使用した IPv4 ルート	29
IPv4 の前提条件	29
注意事項と制約事項	29
デフォルト設定	30
IPv4 の設定	30
IPv4 アドレス指定の設定	30
複数の IP アドレスの設定	32
スタティック ARP エントリの設定	32
プロキシ ARP の設定	33
ローカル プロキシ ARP の設定	34
無償 ARP の設定	35
IP ダイレクト ブロードキャストの設定	36

IP 収集スロットルの設定	37
ハードウェア IP 収集スロットルの最大値の設定	38
ハードウェア IP 収集スロットルのタイムアウトの設定	39
ICMP 送信元 IP フィールドのインターフェイス IP アドレスの設定	39
IP パケットのソフトウェア転送のログギングの設定	40
IPv4 設定の確認	42
IPv4 の設定例	42
その他の参考資料	42
IPv4 の関連資料	43
標準	43

第 5 章

IPv6 の設定	45
IPv6 について	45
IPv6 アドレス形式	46
IPv6 ユニキャスト アドレス	47
集約可能グローバル アドレス	47
リンクローカル アドレス	49
IPv4 互換 IPv6 アドレス	49
ユニーク ローカル アドレス	50
サイトローカル アドレス	51
IPv4 パケット ヘッダー	51
簡易 IPv6 パケット ヘッダー	51
IPv6 の DNS	55
IPv6 のパス MTU ディスカバリ	55
CDP IPv6 アドレスのサポート	56
IPv6 の ICMP	56
IPv6 ネイバー探索	57
IPv6 ネイバー送信要求メッセージ	57
IPv6 ステートレス自動設定	59
IPv6 ルータ アドバタイズメント メッセージ	59
IPv6 ネイバー リダイレクト メッセージ	61

仮想化のサポート	62
ECMP を使用した IPv6 ルート	62
IPv6 の前提条件	62
IPv6 の注意事項および制約事項	62
デフォルト設定	63
IPv6 の設定	63
IPv6 アドレッシングの設定	63
システム ルーティング モードの構成	65
ALPM の構成	67
IPv6 ネイバー探索の構成	69
オプションの IPv6 ネイバー探索	72
IPv6 パケット検証の構成	74
IPv6 ステートレス自動構成の定義	75
IPv6 設定の確認	76
IPv6 の設定例	77
その他の参考資料	77
関連資料	77
標準	77

第 6 章

OSPFv2 の設定	79
OSPFv2 について	79
Hello パケット	80
ネイバー情報	80
隣接関係	81
指定ルータ	81
エリア	82
リンクステートアドバタイズメント	83
LSA タイプ	83
リンク コスト	85
フラッドイングと LSA グループ ペーシング	85
リンクステートデータベース	86

不透明 LSA	86
OSPFv2 およびユニキャスト RIB	86
認証	87
簡易パスワード認証	87
暗号化認証	87
MD5 認証	87
高度な機能	87
スタブ エリア	88
Not-So-Stubby Area	88
仮想リンク	89
ルートの再配布	89
ルート集約	89
OSPFv2 スタブ ルータ アドバタイズメント	90
複数の OSPFv2 インスタンス	90
SPF 最適化	91
BFD	91
仮想化のサポート	91
OSPFv2 の前提条件	91
注意事項と制約事項	91
デフォルト設定	92
基本的な OSPFv2 の設定	92
OSPFv2の有効化	92
OSPFv2インスタンスの作成	93
OSPFv2 インスタンスのオプション パラメータの設定	95
OSPFv2でのネットワークの設定	96
エリアの認証の設定	98
インターフェイスの認証の設定	100
高度なOSPFv2の設定	103
境界ルータのフィルタ リストの設定	103
スタブ エリアの設定	104
Totally Stubby エリアの設定	106

NSSA の設定	106
仮想リンクの設定	109
再配布の設定	111
再配布されるルート数の制限	113
ルート集約の設定	115
スタブルート アドバタイズメントの設定	117
デフォルト タイマーの変更	118
OSPFv2 インスタンスの再起動	121
仮想化による OSPFv2 の設定	121
OSPFv2 設定の確認	123
OSPFv2 統計情報の表示	124
OSPFv2 の設定例	124
その他の参考資料	125
関連資料	125
MIB	125

第 7 章

OSPFv3 の設定	127
OSPFv3 について	127
OSPFv3 と OSPFv2 の比較	128
Hello パケット	128
ネイバー情報	129
隣接関係	130
指定ルータ	130
エリア	131
リンクステート アドバタイズメント	132
LSA タイプ	132
リンク コスト	135
フラッドイングと LSA グループ ペーシング	135
リンクステート データベース	136
マルチエリア隣接関係 (Multi-Area Adjacency)	136
OSPFv3 と IPv6 ユニキャスト RIB	136

アドレス ファミリのサポート	137
認証	137
高度な機能	137
スタブ エリア	138
Not-So-Stubby Area	138
仮想リンク	139
ルートの再配布	139
ルート集約	140
高可用性およびグレースフル リスタート	140
複数の OSPFv3 インスタンス	141
SPF 最適化	141
BFD	142
仮想化のサポート	142
OSPFv3 の前提条件	142
OSPFv3 の注意事項および制約事項	142
デフォルト設定	143
基本的なOSPFv3の設定	143
OSPFv3の有効化	143
OSPFv3インスタンスの作成	144
OSPFv3でのネットワークの設定	147
OSPFv3IPSec 認証の設定	150
高度なOSPFv3の設定	155
境界ルータのフィルタ リストの設定	155
OSPFv3 のスタブ エリアの構成	157
Totally Stubby エリアの設定	158
NSSA の設定	158
マルチエリアの隣接関係の設定	161
仮想リンクの設定	162
再配布の設定	164
再配布されるルート数の制限	166
ルート集約の設定	168

デフォルト タイマーの変更	170
グレースフル リスタートの設定	172
OSPFv3 インスタンスの再起動	174
仮想化による OSPFv3 の設定	174
OSPFv3 の設定の確認	176
OSPFv3のモニタリング	177
OSPFv3 の設定例	178
関連項目	178
その他の参考資料	178
関連資料	178
MIB	178

第 8 章**EIGRP の設定 179**

EIGRP に関する情報	179
EIGRP コンポーネント	179
信頼性の高いトランスポート プロトコル	180
ネイバー探索およびネイバー回復	180
拡散更新アルゴリズム	181
EIGRP ルート更新	181
内部ルート メトリック	182
外部ルート メトリック	182
EIGRP とユニキャスト RIB	182
高度な EIGRP	183
アドレス ファミリ	183
認証	183
スタブ ルータ	184
ルート集約	184
ルートの再配布	184
ロード バランシング	185
Split Horizon	185
仮想化のサポート	186

EIGRP の前提条件	186
注意事項と制約事項	186
デフォルト設定	187
基本的な EIGRP の設定	188
EIGRP 機能の有効化	188
EIGRP インスタンスの作成	189
EIGRP インスタンスの再起動	191
EIGRP インスタンスのシャットダウン	192
EIGRP のパッシブ インターフェイスの設定	192
インターフェイスでの EIGRP のシャットダウン	193
高度な EIGRP の設定	193
EIGRP での認証の設定	193
EIGRP スタブ ルーティングの設定	195
EIGRP のサマリー アドレスの設定	196
EIGRP へのルートの再配布	197
再配布されるルート数の制限	199
EIGRP でのロードバランスの設定	201
hello パケット間のインターバルとホールド タイムの調整	202
スプリット ホライズンの無効化	203
EIGRP の調整	203
EIGRP の仮想化の設定	205
EIGRP の設定の確認	207
EIGRP 統計情報の表示	208
関連項目	208
その他の参考資料	208
関連資料	208
MIB	209

第 9 章

IS-IS の設定	211
IS-IS について	211
IS-IS の概要	211

IS-IS エリア	212
NET およびシステム ID	213
DIS	213
IS-IS 認証	213
メッシュ グループ	214
過負荷ビット	214
ルート集約	215
ルートの再配布	215
プレフィックスの抑制のリンク	215
ロード バランシング	216
BFD	216
仮想化のサポート	216
高可用性およびグレースフル リスタート	216
複数の IS-IS インスタンス	217
IS-IS の前提条件	217
IS-IS に関する注意事項および制限事項	217
デフォルト設定	217
IS-IS の設定	218
IS-IS コンフィギュレーション モード	219
ルータ コンフィギュレーション モード	219
ルータ アドレス ファミリ コンフィギュレーション モード	219
IS-IS 機能の有効化	219
IS-IS インスタンスの作成	220
IS-IS インスタンスの再起動	222
IS-IS のシャットダウン	223
インターフェイスでの IS-IS の設定	223
インターフェイスでの IS-IS のシャットダウン	225
エリアでの IS-IS 認証の設定	225
インターフェイスでの IS-IS 認証の設定	226
メッシュ グループの設定	228
指定中継システムの設定	228

ダイナミック ホスト交換の設定	228
過負荷ビットの設定	229
接続ビットの設定	229
hello パディングの一時モードの設定	229
サマリー アドレスの設定	230
再配布の設定	231
再配布されるルート数の制限	233
パッシブインターフェイスプレフィックスのみのアドバタイズ	234
インターフェイスでのプレフィックスの抑制	235
厳密な隣接モードのディセーブル化	236
グレースフル リスタートの設定	238
仮想化の設定	239
IS-IS の調整	241
IS-IS 設定の確認	243
IS-IS の監視	244
IS-IS の設定例	245
関連項目	245

第 10 章

基本的 BGP の設定	247
ベーシック BGP の概要	247
BGP 自律システム	248
4 バイトの AS 番号のサポート	248
アドミニストレーティブ ディスタンス	248
BGP ピア	249
BGP セッション	249
プレフィックス ピアのダイナミック AS 番号	249
BGP ルータ ID	250
BGP パスの選択	250
ステップ 1 : パス ペアの比較	251
ステップ 2 : 比較順序の決定	253
ステップ 3 : ベスト パス変更の抑制の決定	253

BGP およびユニキャスト RIB	254
BGP の仮想化	254
BGP の前提条件	254
BGP に関する注意事項と制約事項	255
CLI コンフィギュレーション モード	255
グローバル コンフィギュレーション モード	256
アドレス ファミリ設定モード	256
ネイバー コンフィギュレーション モード	256
ネイバー アドレス ファミリ コンフィギュレーション モード	257
BGP のデフォルト設定	258
基本的 BGP の設定	258
BGP 機能のイネーブル化	258
BGP インスタンスの作成	259
BGP インスタンスの再起動	261
BGP のシャットダウン	261
BGP ピア設定	262
デフォルト スタティック ルートをすべての BGP VRF に配布	264
更新アナウンス遅延タイマーの構成	266
BGP 再接続間隔の構成	267
プレフィックス ピアのダイナミック AS 番号の設定	268
BGP 情報の消去	269
ベーシック BGP の設定の確認	273
BGP 統計情報の表示	275
BGP サマリ統計情報の表示	276
InQ および OutQ カウンタに関する考慮事項	277
ベーシック BGP の設定例	278
関連項目	278
次の作業	278
その他の参考資料	278
関連資料	278
MIB	279

第 11 章

高度な BGP の設定 281

拡張 BGP の概要 281

ピア テンプレート 282

認証 282

ルート ポリシーおよび BGP セッションのリセット 282

eBGP 283

eBGP ネクストホップ変更なし 284

iBGP 284

AS 連合 284

ルート リフレクタ 285

機能ネゴシエーション 286

ルート ダンプニング 286

ロードシェアリングおよびマルチパス 287

ルート集約 287

BGP 条件付きアドバタイズメント 288

BGP ネクスト ホップ アドレス トラッキング 288

Site of Origin 289

ルートの再配布 289

ラベル付きユニキャスト ルートとラベルなしユニキャスト ルート 290

BFD 290

BGP の調整 290

BGP タイマー 291

ベストパス アルゴリズムの調整 291

マルチプロトコル BGP 291

BGP モニタリング プロトコル 291

RFC 5549 292

拡張 BGP の前提条件 292

拡張 BGP に関する注意事項と制限事項 292

BGP のデフォルト設定 295

高度な BGP の設定 295

インターフェイスでの IP 転送の有効化 295

BGP セッション テンプレートの設定	296
BGP peer-policy テンプレートの設定	299
BGP peer テンプレートの設定	301
プレフィックス ピ어링の設定	304
IPv4 および IPv6 アドレス ファミリ向け IPv6 リンク ローカル経由の BGP インターフェイス ピ어링の設定	305
BGP 認証の設定	308
BGP セッションのリセット	309
ネクストホップ アドレスの変更	309
BGP ネクスト ホップアドレス トラッキング	310
ネクスト ホップ フィルタリングの設定	311
ネクストホップセルフによるリフレクト ルートの制御	311
セッションがダウンした場合のネクストホップ グループの縮小	312
機能ネゴシエーションのディセーブル化	312
eBGP の設定	313
eBGP ネクストホップ変更なしの構成	313
eBGP シングルホップ チェックの無効化	314
eBGP マルチホップの設定	314
同じ自律システムで eBGP ルートの構成	314
高速外部フェールオーバーのディセーブル化	316
AS パス属性の制限	316
ローカル AS サポートの設定	316
AS 連合の設定	317
独自の自律システムを含む自律システム パスの設定	318
ルート リフレクタの設定	319
ルート ダンプニングの設定	321
ルート削除遅延の構成	322
ロード シェアリングおよび ECMP の設定	322
最大プレフィックス数の設定	323
ダイナミック機能の設定	323
集約アドレスの設定	323

BGP ルートの抑制	324
BGP 条件付きアドバタイズメントの設定	325
ルートの再配布の設定	327
再分配による BGP 減衰の無効化	328
マルチプロトコル BGP の設定	329
元の BGP 拡張コミュニティ サイトの構成	331
BGP の調整	331
仮想化の設定	336
BMP の設定	337
BGP 属性フィルタリングの設定とエラー処理	339
BGP 更新メッセージからのパス属性の取り消しとしての処理	340
BGP 更新メッセージからのパス属性の破棄	340
拡張属性エラー処理のイネーブル化またはディセーブル化	341
取り消されたパス属性または破棄されたパス属性の表示	341
BGP グレースフル シャットダウン	342
BGP グレース フル シャットダウンに関する情報	342
グレースフル シャットダウンの認識とアクティブ化	343
グレースフル シャットダウンのコンテキスト	343
ルート マップによるグレースフル シャットダウン	344
注意事項と制約事項	346
グレースフル シャットダウン タスクの概要	346
リンクのグレースフル シャットダウンの設定	347
GRACEFUL_SHUTDOWN コミュニティに基づく BGP ルートのフィルタリングとローカル プリファレンスの設定	348
すべての BGP ネイバーのグレースフル シャットダウンの設定	350
GRACEFUL_SHUTDOWN コミュニティを使用したすべてのルートのプリファレンスの制 御	351
GRACEFUL_SHUTDOWN コミュニティのピアへの送信の防止	352
グレースフル シャットダウン情報の表示	353
グレースフル シャットダウンの設定例	354
グレースフル リスタートの設定	356

拡張 BGP の設定の確認	358
BGP 統計情報の表示	360
BGP 向け BFD の構成例	361
関連項目	361
その他の参考資料	361
関連資料	362
MIB	362

第 12 章

BGP 追加パスの設定	363
BGP 追加パスについて	363
概要	363
パスの隠蔽の例	364
最適ではないのホット ポテト ルーティングの例	364
BGP 追加パスの利点	365
BGP 追加パスの機能	365
追加パスの選択	366
選択したパスの一部をアドバタイズ	366
注意事項と制約事項	366
BGP 追加パスの設定	366
アドレス ファミリーごとの追加パスの設定	367
ネイバーごとの追加パスの設定	368
ピア ポリシー テンプレートを使用した追加パスの設定	369
追加パスのフィルタリングおよび設定操作	371
BGP 追加パスの設定例	372
BGP 追加パスの送受信機能	372
ピア ポリシー テンプレートを使用する BGP 追加パス	373
BGP 追加パスの設定の確認	373

第 13 章

ECMP リカバリ	375
ECMP リカバリに関する情報	375
ECMP リカバリの注意事項と制限事項	375

デフォルト設定	376
ECMP リカバリの構成	376
ECMP リカバリ構成の確認	377
ECMP リカバリの構成例	377

第 14 章

ホスト ルートの ECMP の構成 379

ホスト ルートの ECMP に関する情報	379
ホスト ルートの ECMP の注意事項	379
ホスト ルートの ECMP の前提条件	380
デフォルト設定	380
ホスト ルートの ECMP の構成	380
ホスト ルートの ECMP 機能の有効化	380
ホスト ルート機能の ECMP の無効化	381
重み付け ECMP over BGP の構成	382
重み付け ECMP over BGP の構成	382
SDN/非同種ファブリック	382
使用例に対する解決策	383
重み付け ECMP over BGP の構成に関する注意事項と制限事項	383
リンク帯域幅 EXTCOMM フィールドの表示	383
ダイナミック ECMP グループのサイズ変更の構成	384
ダイナミック ECMP グループのサイズ変更の確認	384
ホスト ルートの ECMP 構成の確認	385
ホスト ルートに ECMP を構成する例	385
その他の参考資料	385
関連資料	385

第 15 章

RIP の設定 387

RIP 情報	387
RIP の概要	387
RIPv2 認証	388
Split Horizon	388

ルートのフィルタリング	389
ルート集約	389
ルートの再配布	389
ロード バランシング	390
仮想化のサポート	390
RIP の前提条件	390
注意事項と制約事項	390
デフォルト設定	390
RIP の設定	391
RIP 機能のイネーブル化	391
RIP インスタンスの作成	392
RIP インスタンスの再起動	394
インターフェイスでの RIP の設定	394
RIP 認証の設定	395
パッシブ インターフェイスの設定	396
ポイズン リバーズを指定したスプリット ホライズンの設定	397
ルート集約の設定	397
ルートの再配布の設定	398
仮想化の設定	399
RIP の調整	402
RIP の設定の確認	403
RIP 統計情報の表示	403
RIP の設定例	404
関連項目	404
その他の参考資料	404
関連資料	405
標準	405

直接接続のスタティック ルート	408
完全指定のスタティック ルート	408
フローティング スタティック ルート	408
スタティック ルートのリモート ネクスト ホップ	409
BFD	409
仮想化のサポート	409
スタティック ルーティングの前提条件	409
スタティック ルーティングの注意事項および制約事項	410
静的ルーティングのデフォルト設定	410
スタティック ルーティングの設定	410
スタティック ルーティングの設定	410
仮想化の設定	411
その他の参考資料	412
関連資料	412

第 17 章

レイヤ 3 仮想化の設定	413
レイヤ 3 仮想化	413
レイヤ 3 仮想化の概要	413
VRF およびルーティング	414
VRF-Lite	414
VRF 認識サービス	415
Reachability	415
フィルタリング	416
到達可能性とフィルタリングの組み合わせ	416
VRF の注意事項と制約事項	417
VRF-Lite の注意事項と制限事項	417
VRF ルート リークの注意事項と制約事項	418
デフォルト設定	418
VRF の設定	419
VRF の作成	419
インターフェイスへの VRF メンバーシップの割当て	420

ルーティングプロトコル用の VRF パラメータの設定	421
VRF 認識サービスの設定	423
VRF スコープの設定	424
VRF の設定の確認	425
VRF の設定例	425
その他の参考資料	427
関連資料	427
標準	428

第 18 章

ユニキャスト RIB および FIB の設定 429

ユニキャスト RIB および FIB についての情報	429
レイヤ 3 整合性チェッカー	430
FIB テーブル	430
仮想化のサポート	431
ユニキャスト RIB および FIB の管理	431
モジュールの FIB 情報の表示	431
ユニキャスト FIB でのロードシェアリングの設定	432
ルーティング情報と隣接情報の表示	435
レイヤ 3 整合性チェッカーのトリガー	436
FIB 内の転送情報の消去	437
ルートのメモリ要件の見積もり	438
ユニキャスト RIB 内のルートの消去	438
ユニキャスト RIB および FIB の確認	439
その他の参考資料	439
関連資料	440

第 19 章

Route Policy Manager の設定 441

Route Policy Manager の概要	441
プレフィックス リスト	441
プレフィックス リストのマスク	442
MAC リスト	442

ルートマップ	443
一致基準	443
設定変更	444
アクセスリスト	444
BGP の AS 番号	444
BGP の AS パス リスト	444
BGP のコミュニティ リスト	445
BGP の拡張コミュニティ リスト	445
ルートの再配布およびルート マップ	446
Route Policy Manager の注意事項と制約事項	446
Route Policy Manager のデフォルト設定	447
Route Policy Manager の設定	447
IP プレフィックス リストの設定	448
MAC リストの設定	449
AS パス リストの設定	450
BGP AS-path 属性の置き換え	451
完全な AS パスの置き換え	452
AS パスでの選択した AS 番号の置き換え	453
コミュニティ リストの設定	455
拡張コミュニティ リストの設定	456
ルートマップの設定	458
Route Policy Manager の設定の確認	464
Route Policy Manager の設定例	464
関連項目	465
その他の参考資料	465
関連資料	465
標準	465

ポリシーベース ルーティングの設定	467
ポリシーベース ルーティングの概要	467
ポリシー ルートマップ	468

ポリシーベース ルーティングの set 基準	468
ポリシーベース ルーティングの前提条件	469
ポリシーベース ルーティングの注意事項と制約事項	469
デフォルト設定	470
ポリシーベース ルーティングの設定	470
ポリシーベース ルーティング機能のイネーブル化	470
ルート ポリシーの設定	471
ポリシーベース ルーティングの設定の確認	474
ポリシーベース ルーティング統計情報の表示	474
ポリシーベース ルーティング統計情報の消去	474
ポリシーベース ルーティングの設定例	475
関連項目	475
その他の参考資料	475
関連資料	475
標準	476
ポリシーベース ルーティングの機能の履歴	476

第 21 章

双方向フォワーディング検出の設定 477

BFD に関する情報	477
非同期モード	477
BFD の障害検出	478
BFD エコー機能	478
セキュリティ	479
仮想化のサポート	479
BFD の前提条件	479
注意事項と制約事項	479
デフォルト設定	481
BFD の設定	482
設定階層	482
BFD 設定のタスク フロー	482
BFD 機能のイネーブル化	482

グローバルな BFD パラメータの設定	483
インターフェイス上での BFD の設定	485
ポート チャネルの BFD の設定	486
BFD エコー機能の設定	487
BGP での BFD の設定	489
PIM (Protocol Independent Multicast) での BFD の設定	490
OSPFv2 での BFD の設定	491
スタティック ルートの BFD の設定	492
IPv6 の BFD を構成する	493
IPv6 のグローバルな BFD パラメータの構成	493
IPv6 のインターフェイス BFD パラメータの構成	494
OSPFv3 での IPv6 用 BFD の設定	495
IPv6 スタティックルートの BFD の構成	496
IPv6 の BFD エコー モードの構成	497
IPv6 の BFD セッション エコー間隔の構成	498
IPv6 の BFD スロー タイマーの構成	498
IPv6 の BFD エコー インターフェイスの構成	499
BFD 設定の確認	500
BFD のモニタリング	500

 第 22 章

『Configuring HSRP』	501
HSRP について	501
HSRP の概要	502
HSRP for IPv4	503
HSRP のバージョン	504
HSRP 認証	504
HSRP メッセージ	504
HSRP ロード シェアリング	505
オブジェクト トラッキングおよび HSRP	505
仮想化のサポート	506
HSRP サブネット VIP	506

HSRP の前提条件	507
HSRP の注意事項と制約事項	507
HSRP のデフォルト設定	508
『Configuring HSRP』	508
HSRP 機能のイネーブル化	509
HSRP バージョン設定	509
IPv4 の HSRP グループの設定	509
HSRP 仮想 MAC アドレスの設定	511
HSRP の認証	512
HSRP オブジェクト トラッキングの設定	514
HSRP プライオリティの設定	518
HSRP のカスタマイズ	518
HSRP 設定の確認	519
HSRP の設定例	520
その他の参考資料	521
関連資料	521
MIB	521

第 23 章

VRRP の設定	523
VRRP の概要	523
VRRP の動作	523
VRRP の利点	525
複数の VRRP グループ	526
VRRP ルータのプライオリティおよびプリエンプション	527
VRRP のアドバタイズメント	527
VRRP 認証	528
VRRPv3	528
仮想化のサポート	528
VRRP の注意事項と制約事項	528
VRRP のデフォルト設定	529
VRRP の設定	530

VRRP 機能のイネーブル化	530
VRRP グループの設定	531
VRRP プライオリティの設定	532
VRRP 認証の設定	534
アドバタイズメント パケットのタイム インターバルの設定	535
プリエンプションのディセーブル化	536
VRRP インターフェイス ステート トラッキングの設定	538
VRRPv3 の設定	539
VRRPv3 の有効化	539
VRRPv3 グループの構成	540
FHRP クライアント前の初期化前遅延時間の構成	542
VRRPv3 コントロールグループの設定	543
VRRPv2 設定の確認	544
VRRPv3 設定の確認	545
VRRP 統計情報の表示	546
VRRPv2 の設定例	546
VRRPv3 の構成例	547
その他の参考資料	548
関連資料	548

第 24 章

オブジェクト トラッキングの設定	549
オブジェクト トラッキングについて	549
オブジェクト トラッキングの概要	549
オブジェクト トラッキング リスト	550
仮想化のサポート	551
オブジェクト トラッキングに関する注意事項と制約事項	551
オブジェクト トラッキングのデフォルト設定	551
オブジェクト トラッキングの設定	551
インターフェイスに対するオブジェクト トラッキングの設定	552
ルート到達可能性に対するオブジェクト トラッキングの設定	553
ブール式を含むオブジェクト トラッキング リストの設定	553

パーセンテージしきい値を含むオブジェクト トラッキング リストの設定	555
重みしきい値を含むオブジェクト トラッキング リストの設定	557
オブジェクト トラッキングの遅延の設定	558
非デフォルト VRF に対するオブジェクト トラッキングの設定	560
オブジェクト トラッキングの設定の確認	561
オブジェクト トラッキングの設定例	562
関連項目	562
その他の参考資料	562
関連資料	562
標準	562

付 録 A :

IETF RFC	563
IETF RFC	563

用語集 ?

用語集	?

【注意】シスコ製品をご使用になる前に、安全上の注意（www.cisco.com/jp/go/safety_warning/）をご確認ください。本書は、米国シスコ発行ドキュメントの参考和訳です。リンク情報につきましては、日本語版掲載時点で、英語版にアップデートがあり、リンク先のページが移動/変更されている場合がありますことをご了承ください。あくまでも参考和訳となりますので、正式な内容については米国サイトのドキュメントを参照ください。また、契約等の記述については、弊社販売パートナー、または、弊社担当者にご確認ください。

THE SPECIFICATIONS AND INFORMATION REGARDING THE PRODUCTS REFERENCED IN THIS DOCUMENTATION ARE SUBJECT TO CHANGE WITHOUT NOTICE. EXCEPT AS MAY OTHERWISE BE AGREED BY CISCO IN WRITING, ALL STATEMENTS, INFORMATION, AND RECOMMENDATIONS IN THIS DOCUMENTATION ARE PRESENTED WITHOUT WARRANTY OF ANY KIND, EXPRESS OR IMPLIED.

The Cisco End User License Agreement and any supplemental license terms govern your use of any Cisco software, including this product documentation, and are located at: <https://www.cisco.com/c/en/us/about/legal/cloud-and-software/software-terms.html>. Cisco product warranty information is available at <https://www.cisco.com/c/en/us/products/warranty-listing.html>. US Federal Communications Commission Notices are found here <https://www.cisco.com/c/en/us/products/us-fcc-notice.html>.

IN NO EVENT SHALL CISCO OR ITS SUPPLIERS BE LIABLE FOR ANY INDIRECT, SPECIAL, CONSEQUENTIAL, OR INCIDENTAL DAMAGES, INCLUDING, WITHOUT LIMITATION, LOST PROFITS OR LOSS OR DAMAGE TO DATA ARISING OUT OF THE USE OR INABILITY TO USE THIS MANUAL, EVEN IF CISCO OR ITS SUPPLIERS HAVE BEEN ADVISED OF THE POSSIBILITY OF SUCH DAMAGES.

Any products and features described herein as in development or available at a future date remain in varying stages of development and will be offered on a when-and if-available basis. Any such product or feature roadmaps are subject to change at the sole discretion of Cisco and Cisco will have no liability for delay in the delivery or failure to deliver any products or feature roadmap items that may be set forth in this document.

Any Internet Protocol (IP) addresses and phone numbers used in this document are not intended to be actual addresses and phone numbers. Any examples, command display output, network topology diagrams, and other figures included in the document are shown for illustrative purposes only. Any use of actual IP addresses or phone numbers in illustrative content is unintentional and coincidental.

The documentation set for this product strives to use bias-free language. For the purposes of this documentation set, bias-free is defined as language that does not imply discrimination based on age, disability, gender, racial identity, ethnic identity, sexual orientation, socioeconomic status, and intersectionality. Exceptions may be present in the documentation due to language that is hardcoded in the user interfaces of the product software, language used based on RFP documentation, or language that is used by a referenced third-party product.

Cisco and the Cisco logo are trademarks or registered trademarks of Cisco and/or its affiliates in the U.S. and other countries. To view a list of Cisco trademarks, go to this URL: <https://www.cisco.com/c/en/us/about/legal/trademarks.html>. Third-party trademarks mentioned are the property of their respective owners. The use of the word partner does not imply a partnership relationship between Cisco and any other company. (1721R)

© 2021 Cisco Systems, Inc. All rights reserved.



はじめに

この前書きは、次の項で構成されています。

- [対象読者](#) (xxxix ページ)
- [表記法](#) (xxxix ページ)
- [Cisco Nexus 3000 シリーズ スイッチの関連資料](#) (xxxix ページ)
- [マニュアルに関するフィードバック](#) (xxxix ページ)
- [通信、サービス、およびその他の情報](#) (xxxix ページ)

対象読者

このマニュアルは、Cisco Nexus スイッチの設置、設定、および維持に携わるネットワーク管理者を対象としています。

表記法

コマンドの説明には、次のような表記法が使用されます。

表記法	説明
bold	太字の文字は、表示どおりにユーザが入力するコマンドおよびキーワードです。
<i>italic</i>	イタリック体の文字は、ユーザが値を入力する引数です。
[x]	省略可能な要素（キーワードまたは引数）は、角かっこで囲んで示しています。
[x y]	いずれか1つを選択できる省略可能なキーワードや引数は、角カッコで囲み、縦棒で区切って示しています。
{x y}	必ずいずれか1つを選択しなければならない必須キーワードや引数は、波かっこで囲み、縦棒で区切って示しています。

表記法	説明
[x {y z}]	角かっこまたは波かっこが入れ子になっている箇所は、任意または必須の要素内の任意または必須の選択肢であることを表します。角かっこ内の波かっこと縦棒は、省略可能な要素内で選択すべき必須の要素を示しています。
variable	ユーザが値を入力する変数であることを表します。イタリック体が使用できない場合に使用されます。
string	引用符を付けない一組の文字。 string の前後には引用符を使用しません。引用符を使用すると、その引用符も含めて string とみなされます。

例では、次の表記法を使用しています。

表記法	説明
screen フォント	スイッチが表示する端末セッションおよび情報は、スクリーンフォントで示しています。
太字の screen フォント	ユーザが入力しなければならない情報は、太字のスクリーンフォントで示しています。
イタリック体の <i>screen</i> フォント	ユーザが値を指定する引数は、イタリック体の screen フォントで示しています。
<>	パスワードのように出力されない文字は、山カッコ (<>) で囲んで示しています。
[]	システム プロンプトに対するデフォルトの応答は、角カッコで囲んで示しています。
!、#	コードの先頭に感嘆符 (!) またはポンド記号 (#) がある場合には、コメント行であることを示します。

Cisco Nexus 3000 シリーズ スイッチの関連資料

Cisco Nexus 3000 シリーズ スイッチ全体のマニュアルセットは、次の URL にあります。

<https://www.cisco.com/c/en/us/support/switches/nexus-3000-series-switches/tsd-products-support-series-home.html>

マニュアルに関するフィードバック

このマニュアルに関する技術的なフィードバック、または誤りや記載もれなどお気づきの点がございましたら、HTML ドキュメント内のフィードバック フォームよりご連絡ください。ご協力をよろしくお願いいたします。

通信、サービス、およびその他の情報

- シスコからタイムリーな関連情報を受け取るには、[Cisco Profile Manager](#) でサインアップしてください。
- 重要な技術によって求めるビジネス成果を得るには、[Cisco Services](#) [英語] にアクセスしてください。
- サービスリクエストを送信するには、[Cisco Support](#) [英語] にアクセスしてください。
- 安全で検証済みのエンタープライズクラスのアプリケーション、製品、ソリューション、およびサービスを探して参照するには、[Cisco DevNet](#) [英語] にアクセスしてください。
- 一般的なネットワーク、トレーニング、認定関連の出版物を入手するには、[Cisco Press](#) [英語] にアクセスしてください。
- 特定の製品または製品ファミリの保証情報を探すには、[Cisco Warranty Finder](#) にアクセスしてください。

シスコのバグ検索ツール

[シスコのバグ検索ツール](#) (BST) は、シスコ製品とソフトウェアの障害と脆弱性の包括的なリストを管理する Cisco バグ追跡システムへのゲートウェイとして機能する、Web ベースのツールです。BST は、製品とソフトウェアに関する詳細な障害情報を提供します。



第 1 章

新機能および変更された機能に関する情報

次の表は、『Cisco Nexus 3000 シリーズ NX-OS ユニキャスト ルーティング コンフィギュレーション ガイド、リリース 10.1(x)』に記載されている新機能および変更機能をまとめたものです。それぞれの説明が記載されている箇所も併記されています。

- [新機能および変更された機能に関する情報（1 ページ）](#)

新機能および変更された機能に関する情報

次の表では、『Cisco Nexus 3000 シリーズ NX-OS ユニキャスト ルーティング構成ガイド、リリース 10.1(x)』に記載されている新機能および変更機能をまとめています。この表は、このマニュアルのすべての変更点、または特定のリリースのすべての新機能を網羅しているわけではありません。

表 1: 新機能および変更された機能

特長	説明	変更が行われたリリース	参照先
BGP インターフェイス ピアリング：範囲 AS サポート	AS リストと範囲を含むことができるルートマップを指定できるようになりました。	10.1(1)	IPv4 および IPv6 アドレスファミリー向け IPv6 リンクローカル経由の BGP インターフェイスピアリングの設定（305 ページ）
インバウンド BGP as-path 置換ポリシー	インバウンドおよびアウトバウンドルートマップの BGP AS パス属性を置換または削除できます。	10.1(1)	BGP AS-path 属性の置き換え（451 ページ）

特長	説明	変更が行われたリリース	参照先
IS-IS でのリンク プレフィックスの抑制	不要なインターフェイス アドレスのアドバタイズを抑制して、コンバージェンス時間を改善できます。	10.1(1)	パッシブインターフェイス プレフィックスのみのアド バタイズ (234 ページ) インターフェイスでのプレ フィックスの抑制 (235 ページ)



第 2 章

ユニキャスト ルーティング機能のプラットフォーム サポート

この章では、Cisco Nexus プラットフォームスイート全体でサポートされていない機能のプラットフォーム サポートについて定義します。

- [ユニキャスト ルーティング機能のプラットフォーム サポート \(3 ページ\)](#)

ユニキャスト ルーティング機能のプラットフォーム サポート

次の表に、各機能でサポートされるプラットフォームと、それらが最初に導入されたリリースを示します。最初の製品リリースでサポートされるプラットフォームの詳細については、リリース ノートを参照してください。

拡張 BGP

[高度な BGP の設定 \(281 ページ\)](#) に戻ります。

機能	サポートされるプラットフォームまたはラインカード	サポートされるようになった最初のリリース	プラットフォームの例外
BGP インターフェイスピアリングの SVI インターフェイス	Cisco Nexus 3000 シリーズ スイッチ。	Cisco NX-OS Release 9.3 (6)	

HSRP

『[Configuring HSRP](#)』 (501 ページ) に戻ってください。

機能	サポートされるプラットフォームまたはラインカード	サポートされるようになった最初のリリース	プラットフォームの例外
VXLAN 上の HSRP	Cisco Nexus 3132Q-V スイッチ Cisco Nexus 31108PC-V スイッチ Cisco Nexus 31108TC-V スイッチ	Cisco NX-OS リリース 7.0(3)I71	

IPv6 ルーティング (IPv6 Routing)

[IPv6 の設定 \(45 ページ\)](#) に戻ってください。

機能	サポートされるプラットフォームまたはラインカード	サポートされるようになった最初のリリース	プラットフォームの例外
IPv6 ルーティング	Cisco Nexus 3000 シリーズ スイッチ	-	Cisco Nexus 34180YC スイッチ

IS-IS

[IS-IS の設定 \(211 ページ\)](#) に戻ってください。

機能	サポートされるプラットフォームまたはラインカード	サポートされるようになった最初のリリース	プラットフォームの例外
IS-IS セグメント ルーティング	Cisco Nexus 3132 スイッチ Cisco Nexus 3172 スイッチ Cisco Nexus 3164Q-40GE スイッチ Cisco Nexus 31128PQ-10GE スイッチ	7.0(3)I7(3)	

Policy-Based Routing : ポリシーベース ルーティング

[ポリシーベース ルーティングの設定 \(467 ページ\)](#) に戻ってください。

機能	サポートされるプラットフォームまたはラインカード	サポートされるようになった最初のリリース	プラットフォームの例外
ポリシーベース ルーティング	Cisco Nexus 3000 シリーズ スイッチ	-	Cisco Nexus 34180YC スイッチ



第 3 章

概要

この章では、Cisco NX-OS でのレイヤ 3 ユニキャスト ルーティング プロトコルの基本概念を紹介します。

この章は、次の項で構成されています。

- [ライセンス要件 \(7 ページ\)](#)
- [レイヤ 3 ユニキャスト ルーティングについて \(7 ページ\)](#)
- [ルーティング アルゴリズム \(14 ページ\)](#)
- [レイヤ 3 仮想化 \(17 ページ\)](#)
- [Cisco NX-OS フォワーディング アーキテクチャ \(17 ページ\)](#)
- [レイヤ 3 ユニキャスト ルーティング機能のまとめ \(20 ページ\)](#)
- [ファーストホップ冗長プロトコル \(22 ページ\)](#)
- [オブジェクト トラッキングの設定 \(22 ページ\)](#)
- [関連項目 \(22 ページ\)](#)

ライセンス要件

Cisco NX-OS ライセンス方式の推奨の詳細と、ライセンスの取得および適用の方法については、『[Cisco NX-OS ライセンス ガイド](#)』および『[Cisco NX-OS ライセンス オプション ガイド](#)』を参照してください。

レイヤ 3 ユニキャスト ルーティングについて

レイヤ 3 ユニキャスト ルーティングには 2 つの基本的動作（最適なルーティング パスの決定およびパケットの交換）があります。ルーティング アルゴリズムを使用すると、ルータから宛先までの最適なパス（経路）を計算できます。この計算方法は、選択したアルゴリズム、ルート メトリック、そしてロード バランシングや代替パスの探索などの考慮事項により異なります。

ルーティングの基礎

ルーティングプロトコルは、メトリックを使用して、宛先までの最適なパスを調べます。メトリックとは、パス帯域幅などの、ルーティングアルゴリズムが宛先までの最適なパスを決定するために使用する測定基準です。パスを決定しやすいように、ルーティングアルゴリズムは、ルート情報（IP 接続先アドレス、および次のルータまたはホップのアドレスなど）を含むルーティングテーブルを初期化して維持します。宛先とネクストホップの関連付けにより、ルータは、接続先までの途中にあるネクストホップとなる特定のルータにパケットを送信すると、最適なパスで IP 接続先まで届けられることを判定できます。ルータは、着信パケットを受信すると、接続先アドレスをチェックし、このアドレスをネクストホップと関連付けようとします。ルートテーブルの詳細については、「[ユニキャスト RIB](#)」の項を参照してください。

ルーティングテーブルには、パスの優先度に関するデータなど、その他の情報が含まれていることもあります。ルータは、メトリックを比較して最適なルートを決めます。これらのメトリックは、使用しているルーティングアルゴリズムの設計によって異なります。「[ルーティングメトリック](#)」の項を参照してください。

各ルータは互いに通信し、さまざまなメッセージを送信して、そのルーティングテーブルを維持します。ルーティング更新メッセージはこれらのメッセージのいずれかであり、ルーティングテーブルのすべてまたは一部で構成されます。ルータは、他のすべてのルータからのルーティング更新情報を分析して、ネットワークトポロジの詳細な図を構築できます。ルータ間で送信されるメッセージのもう1つの例であるリンクステートアドバタイズメントは、送信ルータのリンク状態を他のルータに通知します。リンク情報を使用して、ルータが、ネットワーク宛先までの最適なルートを決めるようにすることもできます。詳細については、「[ルーティングアルゴリズム](#)」の項を参照してください。

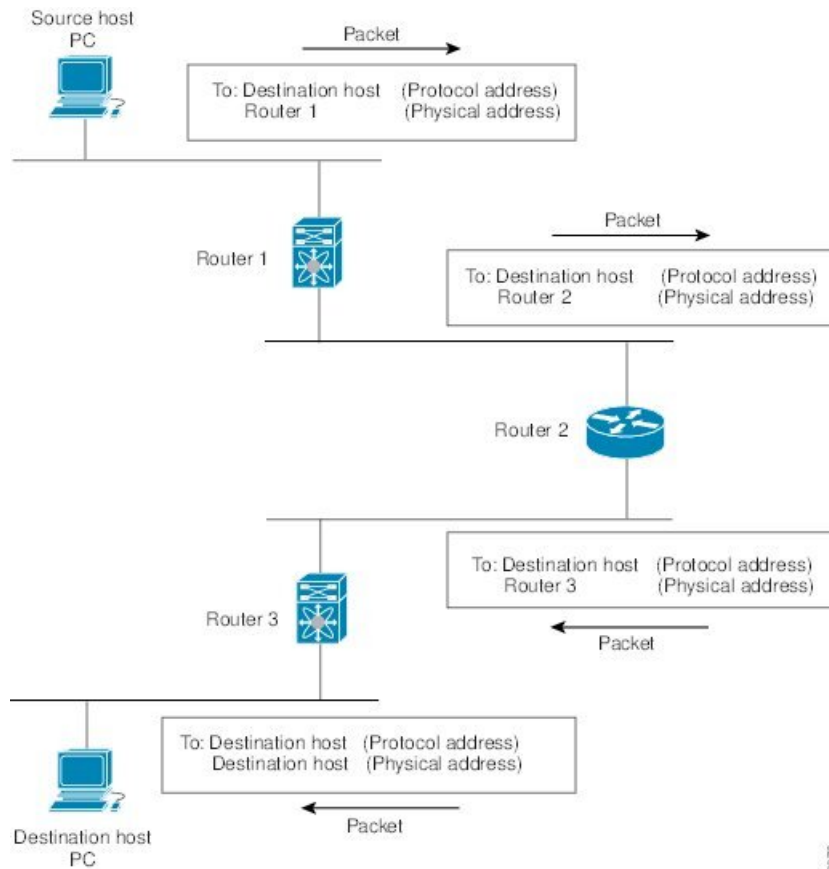
パケット交換

パケット交換では、ホストが、パケットを別のホストに送信する必要があることを決定します。なんらかの方法でルータのアドレスを入手したら、送信元ホストはパケットを明確に、宛先ホストの IP（ネットワーク層）アドレスを含むルータの物理（メディアアクセスコントロール（MAC）レイヤ）アドレス宛に送信します。

ルータは宛先の IP アドレスを調べ、ルーティングテーブルでその IP アドレスを探します。ルータがパケットの転送方法を認識していない場合は、通常はパケットをドロップします。パケットの転送方法がわかった場合、ルータは、宛先の MAC アドレスをネクストホップルータの MAC アドレスに変更し、パケットを送信します。

ネクストホップが宛先のホストである場合や、同じ交換決定処理を行う別のルータである場合があります。パケットがインターネットワークを介して移動するにつれ、パケットの物理アドレスは変化しますが、プロトコルアドレスは一定のままです（次の図を参照）。

図 1: ネットワークを介したパケット ヘッダーの更新



ルーティング メトリック

ルーティング アルゴリズムは、多くの異なるメトリックを使用して最適なルートを決めます。高度なルーティング アルゴリズムは、複数のメトリックに基づいてルートを選択している場合があります。

パス長

パスの長さは、最も一般的なルーティング メトリックです。一部のルーティング プロトコルでは、各ネットワーク リンクに恣意的なコストの割り当てが可能です。この場合、パスの長さは、経由した各リンクに関連付けられたコストの合計となります。それ以外のルーティング プロトコルでは、パケットが送信元から宛先までに経由する必要がある、ルータなどのネットワーク間製品の通過回数を指定するメトリックであるホップ数が定義されます。

Reliability

ルーティング アルゴリズムとの関連における信頼性は、各ネットワーク リンクの信頼性（ビット誤り率で示される）です。一部のネットワーク リンクは、他のネットワーク リンクよりダウンする頻度が高い場合があります。ネットワークがダウンした後、特定のネットワーク リン

クが他のリンクより容易に、または短時間に修復される場合もあります。信頼性のランクを割り当てるときに考慮できる信頼性係数は、一般的にネットワーク リンクに割り当てる任意の数値です。

ルーティング遅延

ルーティング遅延は、送信元から宛先に、インターネットワークを通過してパケットを移動するために必要な時間の長さです。遅延は、中間のネットワーク リンクの帯域幅、経由する各ルータでのポートキュー、中間の全ネットワーク リンクでのネットワークの輻輳状況、パケットが移動する物理的な距離など、多くの要素に応じて異なります。ルーティング遅延はいくつかの重要な変数の組み合わせであるため、一般的で便利なメトリックです。

帯域幅

帯域幅は、リンクで使用可能なトラフィック容量です。たとえば、10 ギガビット イーサネット リンクは1 ギガビット イーサネット リンクより容量が大きく、優れています。帯域幅は、リンクで達成可能な最大スループットですが、帯域幅のより大きいリンクを経由するルートが、帯域幅のより小さいリンクを経由するルートより優れているとは限りません。たとえば、帯域幅の大きいリンクの方が混雑していると、実際には、パケットを宛先に送信するためにさらに長い時間がかかる場合があります。

負荷

負荷は、ルータなどのネットワーク リソースの使用状況の度合いです。負荷は、CPU 使用状況や処理される1秒あたりのパケット数など、さまざまな方法で計算できます。これらのパラメータを継続的にモニタすると、リソースに負担がかかる場合があります。

通信コスト

通信コストは、リンク上でルーティングするための稼働コストの測定単位です。通信コストは重要なメトリックの1つで、特にパフォーマンスより稼働コストの削減が優先される場合に使用されます。たとえば、専用回線での回線遅延が公衆回線より大きくても、使用時間に応じて課金される公衆回線上でなく、自身の専用回線上でパケットを送信できます。

ルータ ID

各ルーティング プロセスには、ルータ ID が関連付けられています。ルータ ID は、システムのあらゆるインターフェイスに設定できます。ルータ ID を構成しなかった場合、Cisco NX-OS は次の基準に基づいてルータ識別子を選択します。

- Cisco NX-OS は、他のあらゆるインターフェイスよりも loopback0 を優先します。loopback0 が存在しなかった場合、Cisco NX-OS は、他のあらゆるインターフェイスタイプよりも、最初のループバック インターフェイスを優先します。
- ループバック インターフェイスを構成しなかった場合、Cisco NX-OS はルータ識別子として構成ファイルの最初のインターフェイスを使用します。Cisco NX-OS がルータ識別子を選択した後にいずれかのループバック インターフェイスを構成した場合は、ループバック

インターフェイスがルータ識別子となります。ループバック インターフェイスが `loopback0` ではなく、後で `loopback0` を IP アドレスで設定した場合は、ルータ ID が `loopback0` の IP アドレスに変更されます。

- ルータ ID の元であるインターフェイスが変更されると、新しい IP アドレスがルータ ID となります。他のどのインターフェイスの IP アドレスが変更されても、ルータ ID はまったく変更されません。

自律システム

自律システム (AS) とは、単一の技術的管理エンティティにより制御されるネットワークです。自律システムにより、グローバルな外部ネットワークが個々のルーティング ドメインに分割され、これらのドメインでは、ローカルのルーティングポリシーが適用されます。この構成により、ルーティング ドメインの管理と一貫したポリシー設定が簡素化されます。

各自律システムは、ルートの再配布により動的にルーティング情報を交換する、複数の内部ルーティング プロトコルをサポートできます。地域インターネット レジストリにより、インターネットに直接接続する各公共自律システムに一意の番号が割り当てられます。この自律システム番号で、ルーティング処理と自律システムの両方が識別されます。

Cisco NX-OS は 4 バイト AS 番号をサポートしています。次の表は、AS 番号の範囲を示します。

表 2: AS 番号

2 バイト番号	AS ドット表記での 4 バイト番号	プレーンテキスト表記での 4 バイト番号	目的
1 ～ 64511	0.1 ～ 0.64511	1 ～ 64511	公共 AS (RIR により割り当てられる)
64512 ～ 65534	0.64512 ～ 0.65534	64512 ～ 65534	専用 AS (ローカルの管理者により割り当てられる)
65535	0.65535	65535	予約済み (Reserved)
なし	1.0 ～ 65535.65535	65536 ～ 4294967295	公共 AS (RIR により割り当てられる)

専用自律システム番号は内部ルーティング ドメインに使用されますが、インターネット上にルーティングされたトラフィック向けに、ルータにより変換される必要があります。ルーティング プロトコルを、専用自律システム番号が外部ネットワークにアダプタイズされるように設定しないでください。デフォルトでは、Cisco NX-OS は専用自律システム番号をルーティング 更新情報から削除しません。



(注) 公共ネットワークおよび専用ネットワークの自律システム番号は、インターネット割り当て番号局 (IANA) により管理されています。予約済み番号の割り当てを含む自律システム番号の詳細について、または、AS 番号の登録を申請するには、次の URL を参照してください。

[//www.iana.org/](http://www.iana.org/)

コンバージェンス

ルーティング アルゴリズム測定の本質となる要素の 1 つは、ルータがネットワーク トポロジの変化に対応するために要する時間です。リンク障害など、なんらかの理由でネットワークの一部が変化すると、さまざまなルータのルーティング情報が一致しなくなる場合があります。変化したトポロジに関する情報が更新されているルータと、古い情報が残っているルータがあるためです。コンバージェンスとは、ネットワーク内のすべてのルータが更新され、ルーティング情報が一致するまでにかかる時間の長さです。コンバージェンス時間は、ルーティング アルゴリズムによって異なります。コンバージェンスが速い場合は、不正確なルーティング情報によるパケット損失の可能性が小さくなります。

ロード バランシングおよび等コスト マルチパス

ルーティング プロトコルでは、ロード バランシングまたは等コスト マルチパス (ECMP) を使用して、複数のパス上のトラフィックを共有できます。ルータは、特定のネットワークへのルートを複数検出すると、最もアドミニストレーティブ ディスタンスの低いルートをルーティング テーブルにインストールします。ルータが、同じアドミニストレーティブ ディスタンスと宛先までのコストを持つ複数のパスを受信し、インストールすると、ロード バランシングが発生する場合があります。ロード バランシングでは、すべてのパス上にトラフィックが配布され、負荷が共有されます。使用されるパスの数は、ルーティング プロトコルによりルーティング テーブルに配置されるエントリの数に制限されます。Cisco NX-OS は、宛先までの 16 のパスをサポートします。

Enhanced Interior Gateway Routing Protocol (EIGRP) は、等コストでないロード バランシングもサポートしています。詳細については、「[EIGRP の設定 \(179 ページ\)](#)」を参照してください。

ルートの再配布

ネットワークに複数のルーティング プロトコルが設定されている場合は、各プロトコルにルートの再配布を設定して、ルーティング情報を共有するように設定できます。たとえば、OSPF (Open Shortest Path First) を設定して、ボーダー ゲートウェイ プロトコル (BGP) で検出したルートをアドバタイズできます。また、スタティック ルートを、どのダイナミック ルーティング プロトコルにも再配布できます。他のプロトコルからのルートを再配布するルータは、再配布されたルートの固定ルート メトリックを設定し、異なるルーティング プロトコル間で互換性のないルート メトリックの問題を防ぎます。たとえば、EIGRP から OSPF に再配布されたルートには、OSPF が認識できる固定リンク コスト メトリックが割り当てられます。

ルート再配布では、アドミニストレーティブ ディスタンス（「[アドミニストレーティブ ディスタンス](#)」セクションを参照）の使用によっても、2つの異なるルーティングプロトコルで検出されたルートが区別されます。優先ルーティングプロトコルには、より低いアドミニストレーティブディスタンスが与えられており、そのルートが、より高いアドミニストレーティブディスタンスが割り当てられた他のプロトコルからのルートに優先して選択されます。

アドミニストレーティブ ディスタンス

アドミニストレーティブディスタンスは、ルーティング情報源の信頼性を示す評価基準です。値が高いほど信頼性の評価は低くなります。一般的にルートは、複数のプロトコルを通じて検出されます。アドミニストレーティブディスタンスは、複数のプロトコルから学習したルートを区別するために使用されます。最もアドミニストレーティブディスタンスが低いルートがIPルーティングテーブルに組み込まれます。

スタブ ルーティング

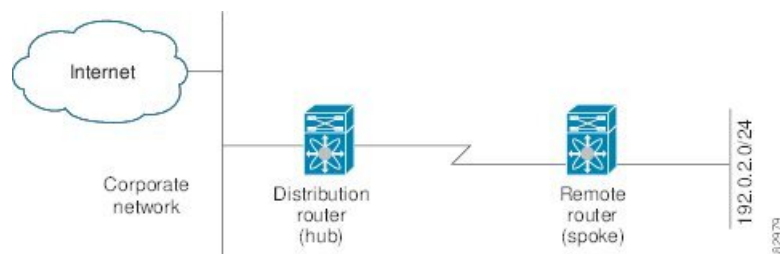
スタブ ルーティングはハブ アンド スポーク型ネットワーク トポロジで使用できます。このトポロジでは、1つ以上の終端（スタブ）ネットワークが1台のリモートルータ（スポーク）に接続され、そのリモートルータは1つ以上のディストリビューションルータ（ハブ）に接続されています。リモートルータは、1つ以上のディストリビューションルータにのみ隣接しています。リモートルータへ流れるIPトラフィックのルートは、ディストリビューションルータ経由のルートのみです。このタイプの設定は、ディストリビューションルータが直接WANに接続されているWANトポロジで使用するのが一般的です。ディストリビューションルータは、さらに多くのリモートルータに接続できます。ディストリビューションルータが100台以上のリモートルータに接続されていることも、よくあります。ハブ アンド スポーク型トポロジでは、リモートルータがすべての非ローカルトラフィックをディストリビューションルータに転送する必要があります。これにより、リモートルータが完全なルーティングテーブルを保持する必要はなくなります。通常、分散ルータは、デフォルトのルートのみをリモートルータに送信します。

指定されたルートのみが、リモート（スタブ）ルータから伝播されます。スタブ ルータは、サマリー、接続されているルート、再配布されたスタティックルート、外部ルート、および内部ルートに対するクエリーすべてに、応答として「inaccessible」というメッセージを返します。スタブとして設定されているルータは、自身のスタブ ルータとしてのステータスを報告するために、特殊なピア情報パケットがすべての隣接ルータに送信されます。

スタブ ルータの状態を通知するパケットを受信した隣接ルータは、ルートについてはスタブ ルータに照会しません。また、スタブ ピアを持つルータは、そのピアについては照会しません。スタブ ルータは、ディストリビューションルータを使用して適切なアップデートをすべてのピアに送信します。

次の図は、単純なハブ アンド スポーク型の構成を示しています。

図 2: 単純なハブ アンド スポーク ネットワーク



スタブルーティングを使用する場合でも、リモートルータにルータをアドバタイズできます。この単純なハブ アンド スポーク ネットワークの図は、リモートルータが、分散ルータを介してのみ、企業ネットワークとインターネットにアクセスできることを示しています。この例では、企業ネットワークとインターネットへのパスが常に分散ルータを経由するため、リモートルータ上の完全なルート テーブルの機能は無意味です。より大規模なルート テーブルを使用しても、リモートルータに必要なメモリの量が削減されるだけです。使用される帯域幅とメモリは、分散ルータでルートを要約し、フィルタリングすると、削減できます。このネットワーク トポロジでリモートルータは、他のネットワークから検出されたルートを受信する必要はありません。これは、宛先がどこであっても、リモートルータは、すべての非ローカルトラフィックを分散ルータに送信する必要があるためです。真のスタブネットワークを設定するには、リモートルータへのデフォルト ルートのみを送信するよう、分散ルータを設定する必要があります。

OSPF はスタブ エリアをサポートしており、EIGRP はスタブ ルータをサポートしています。



(注) EIGRP スタブルーティング機能は、スタブ デバイスだけで使用します。スタブ デバイスは、コア中継トラフィックが通過しないネットワーク コアまたはディストリビューション レイヤに接続されたデバイスとして定義されます。リモートルータへ流れる IP トラフィックのルートは、ディストリビューション ルータ経由のルートのみです。スタブ デバイスがディストリビューション デバイス以外の EIGRP ネイバーを持つことはできません。この制限を無視すると、望ましくない動作が発生します。

ルーティング アルゴリズム

ルーティングアルゴリズムによって、ルータが到達可能性情報を収集して報告する方法、トポロジの変化に対応する方法、宛先までの最適ルートを決定する方法が決まります。ルーティングアルゴリズムにはさまざまなタイプがあり、各アルゴリズムがネットワークやルータリソースに与える影響もさまざまです。ルーティングアルゴリズムは、最適なルートの計算に影響するさまざまなメトリックを使用します。ルーティングアルゴリズムは、スタティックまたはダイナミック、内部または外部など、タイプで分類できます。

スタティック ルートおよびダイナミック ルーティング プロトコル

スタティック ルートは、手動で設定するルート テーブル エントリです。スタティック ルートは、手動で再設定しない限り、変更されません。スタティック ルートは設計が簡単で、ネットワークトラフィックが比較的予想しやすい環境や、ネットワーク設計が比較的単純な環境での使用に適しています。

スタティック ルーティング システムはネットワークの変化に対応できないため、絶えず変化する今日の大規模ネットワークには使用すべきではありません。今日のほとんどのルーティング プロトコルは、ダイナミック ルーティング アルゴリズムを使用しています。このアルゴリズムでは、着信ルーティング更新メッセージを分析して、ネットワーク状況の変化に合わせて調整します。メッセージがネットワークが変化したことを示している場合は、ルーティング ソフトウェアはルートを再計算し、新しいルーティング アップデート メッセージを送信します。これらのメッセージがネットワークを通過すると、ルータがそのアルゴリズムを再実行し、それに従ってルーティング テーブルを変更します。

適切であれば、ダイナミック ルーティング アルゴリズムをスタティック ルートで補完することができます。たとえば、各サブネットワークに IP デフォルト ゲートウェイまたは、ラストリゾートルータ（ルーティングできないすべてのパケットが送信されるルータ）へのスタティック ルートを設定する必要があります。

内部および外部ゲートウェイ プロトコル

ネットワークを、一意のルーティング ドメインまたは自律システムに分割できます。自律システムは、管理ガイドラインの特定のセットで規制された共通の管理機関の下での内部ネットワークの一部です。自律システム間でのルートを設定するルーティング プロトコルは、外部ゲートウェイ プロトコルまたはドメイン間プロトコルと呼ばれます。BGP は、外部ゲートウェイ プロトコルの例です。1つの自律システム内で使用されるルーティング プロトコルは、内部ゲートウェイ プロトコルまたはドメイン内プロトコルと呼ばれます。EIGRP および OSPF は、内部ゲートウェイ プロトコルの例です。

ディスタンス ベクトル プロトコル

ディスタンス ベクトル プロトコルは、ディスタンス ベクトル アルゴリズム（Bellman-Ford アルゴリズムとも呼ばれます）を使用します。このアルゴリズムにより、各ルータは、そのルーティング テーブルの一部または全部を隣接ルータに送信します。ディスタンス ベクトル アルゴリズムでは、ルートが、ディスタンス（宛先までのホップ数など）および方向（ネクストホップルータなど）により定義されます。その後、これらのルートは、直接接続されたネイバー ルータにブロードキャストされます。各ルータは、これらの更新情報を使用して、ルーティング テーブルを確認し、更新します。

ルーティング ループを防ぐために、ほとんどのディスタンス ベクトル アルゴリズムはポイズン リバーズを指定したスプリット ホライズンを使用します。これは、インターフェイスで検出されたルートを到達不能として設定し、それをそのインターフェイスで、次の定期更新中にアドバタイズするという意味です。この機能により、ルータによるルート更新が、そのルータ自体に返信されなくなります。

ディスタンス ベクトル アルゴリズムは、一定の間隔で更新を送信しますが、ルート メトリックの値の変更に応じて、更新を送信することもできます。このように送信された更新により、ルート コンバージェンス時間の短縮が可能です。Routing Information Protocol (RIP) はディスタンス ベクトル プロトコルの 1 つです。

リンクステート プロトコル

リンクステートプロトコルは、最短パス優先 (SPF) と呼ばれ、情報を隣接ルータと共有します。各ルータはリンクステートアドバタイズメント (LSA) を構築し、ここに、各リンクおよび直接接続されたネイバー ルータに関する情報が含まれます。

各 LSA にはシーケンス番号があります。ルータが LSA を受信し、そのリンクステートデータベースを更新すると、その LSA はすべての隣接ネイバーにフラッドされます。ルータが同じシーケンス番号の 2 つの LSA (同じルータからの) を受信した場合は、LSA 更新ループを防ぐために、ルータは最後に受信した LSA をネイバールータにフラッドしません。ルータは、受信直後に LSA をフラッドするため、リンクステートプロトコルのコンバージェンス時間は最小となります。

ネイバー ルータの探索と隣接関係の確立は、リンクステート プロトコルの重要な部分です。ネイバー ルータは、特別な hello パケットを使用して探索されます。このパケットは、各ネイバー ルータのキープアライブ通知としても機能します。隣接関係は、ネイバー ルータ間のリンクステート プロトコルの一般的な動作パラメータ セットで確立されます。

ルータが受信した LSA は、そのリンクステートデータベースに追加されます。各エントリは、次のパラメータで構成されます。

- ルータ ID (LSA を構築したルータの)
- ネイバー ID
- リンク コスト
- LSA のシーケンス番号
- LSA エントリの作成時からの経過時間

ルータは、リンクステート データベース上で SPF アルゴリズムを実行し、そのルータの最短パス ツリーを構築します。この SPF ツリーを使用して、ルーティング テーブルにデータが入力されます。

リンクステートアルゴリズムでは、各ルータはネットワークの全体像をそのルーティングテーブルに構築します。リンクステートアルゴリズムが小さな更新を全体的に送信するのにに対し、ディスタンスベクトルアルゴリズムは、より大きな更新をネイバールータのみに送信します。

リンクステートアルゴリズムは、より短時間でコンバージェンスするため、ディスタンスベクトルアルゴリズムより、ルーティングループがやや発生しにくくなっています。ただし、リンクステートアルゴリズムはディスタンスベクトルアルゴリズムより、大きな CPU パワーとメモリを必要とします。リンクステートアルゴリズムは、実装とサポートにより多くの費用がかかる場合があります。一般的に、リンクステートプロトコルはディスタンスベクトルプロトコルよりもスケーラブルです。

OSPF は、リンクステート プロトコルの一例です。

レイヤ3 仮想化

Cisco NX-OS は、複数の仮想ルーティングおよび転送（VRF）インスタンスおよび複数のルーティング情報ベース（RIB）をサポートしているため、複数のアドレスドメインがサポートされます。各 VRF は RIB に関連付けられており、この情報が転送情報ベース（FIB）によって収集されます。VRF は、レイヤ3 アドレス指定ドメインを表します。各レイヤ3 インターフェイス（論理または物理）は、1 つの VRF に属します。詳細については、「[レイヤ3 仮想化の設定](#)」を参照してください。

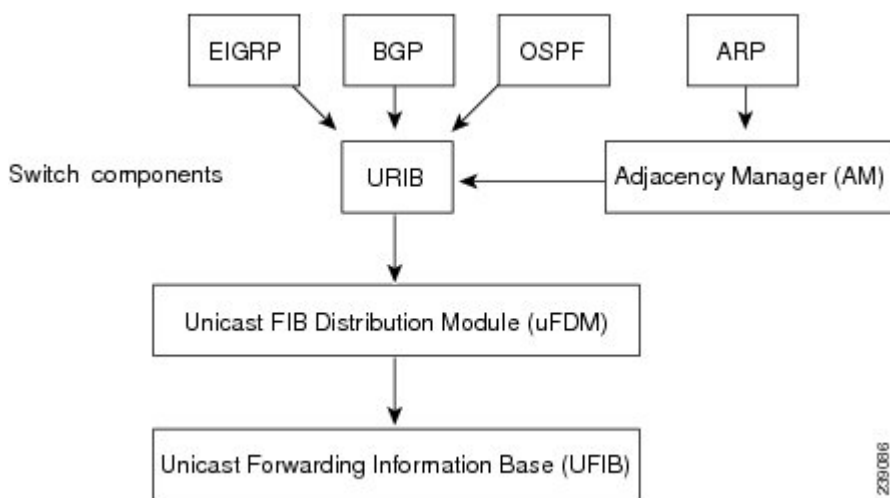
Cisco NX-OS フォワーディング アーキテクチャ

Cisco NX-OS フォワーディング アーキテクチャは、スイッチにおけるすべてのルーティング アップデートの処理および転送情報の入力を担います。

ユニキャスト RIB

Cisco NX-OS の転送アーキテクチャは、次の図に示すように、複数のコンポーネントから構成されています。

図 3: Cisco NX-OS 転送アーキテクチャ



ユニキャスト RIB は、直接接続のルート、スタティック ルート、ダイナミック ユニキャスト ルーティングプロトコルで検出されたルートを含むルーティングテーブルを維持しています。また、アドレス解決プロトコル（ARP）などの送信元から、隣接情報を収集します。ユニキャスト RIB は、ルートに最適なネクストホップを決定し、さらにユニキャスト FIB 分散モジュール（FDM）のサービスを使用して、ユニキャスト転送情報ベース（FIB）にデータを入力します。

各ダイナミック ルーティング プロトコルは、タイムアウトしたあらゆるルートについて、ユニキャスト RIB を更新する必要があります。その後、ユニキャスト RIB はそのルートを削除し、そのルートに最適なネクスト ホップを再計算します（代わりに使用できるパスがある場合）。

隣接マネージャ

隣接マネージャは、ARP、Open Shortest Path First version 2（OSPFv2）、ネイバー探索プロトコル（NDP）、静的な設定を含む、異なるプロトコルの隣接情報を維持しています。最も基本的な隣接情報は、これらのプロトコルで探索されたレイヤ3からレイヤ2へのアドレスマッピングです。発信レイヤ2パケットは、隣接情報を使用して、レイヤ2ヘッダーの作成を終了します。

隣接マネージャは、ARP 要求による、レイヤ3からレイヤ2への特定のマッピングの探索をトリガーできます。新しいマッピングは、対応する ARP 返信を受信し、処理すると、使用できるようになります。

ユニキャスト転送分散モジュール

ユニキャスト転送分散モジュールは、ユニキャスト RIB およびその他の送信元からの転送パス情報を配布します。ユニキャスト RIB は、ユニキャスト FIB がハードウェア転送テーブルにプログラムする転送情報を生成します。また、ユニキャスト転送分散モジュールは、新規挿入されたモジュールへの FIB 情報のダウンロードも行います。

ユニキャスト転送分散モジュールは、隣接情報を収集し、ユニキャスト FIB でのルートの更新時に、この情報およびその他のプラットフォーム依存の情報を書き直し（リライト）します。隣接情報およびリライト情報には、インターフェイス、ネクストホップ、およびレイヤ3からレイヤ2へのマッピング情報が含まれています。インターフェイスとネクストホップの情報は、ユニキャスト RIB からのルート更新情報で受信します。レイヤ3からレイヤ2へのマッピングは、隣接マネージャから受信します。

FIB

ユニキャスト FIB は、ハードウェア転送エンジンに使用される情報を作成します。ユニキャスト FIB は、ユニキャスト転送分散モジュールからルート更新情報を受信し、ハードウェア転送エンジンにプログラミングされるよう、この情報を送信します。ユニキャスト FIB は、ルート、パス、隣接関係の追加、削除、変更を管理します。

ユニキャスト FIB は、VRF ごとおよびアドレスファミリごとに維持されます。ルート更新メッセージに基づいて、ユニキャスト FIB は、VRF ごとのプレフィックスとネクストホップ隣接情報データベースを維持します。ネクストホップ隣接データ構造には、ネクストホップの IP アドレスとレイヤ2リライト情報が含まれます。同じネクストホップ隣接情報構造を複数のプレフィックスで使用できます。

またユニキャスト FIB は、インターフェイスごとのユニキャスト リバース パス転送 (RPF) チェックをイネーブルまたはディセーブルにします。Cisco Nexus 3000 シリーズ スイッチは、各入力側インターフェイスに構成される、次の 2 つの RPF モードをサポートします。

- RPF Strict チェック：ルータ転送テーブルで検証可能な送信元アドレスを持たないパケット、または送信元へのリターン パスに到着しないパケットはドロップされます。
- RPF Loose チェック：パケットはルータ転送テーブルで検証可能な送信元アドレスを持ち、送信元は物理インターフェイスを通じて到達可能です。パケットを受信する入力側インターフェイスは、FIB 内のインターフェイスに一致する必要はありません。

ユニファイ転送テーブル

Cisco Nexus 3100 プラットフォーム スイッチでは、レイヤ 2 ホスト、レイヤ 3 ホスト、最長プレフィクス照合 (LPM) テーブル、および 256,000 X 105 ビット共有テーブルの最小保証エントリ数がサポートされます。レイヤ 2 テーブル、レイヤ 3 ホスト テーブル、およびレイヤ 3 LPM テーブルに共有テーブル エントリ (64,000 エントリの粒度) を割り当てて、展開に基づいてこれらのテーブルのサイズを拡張できます。

Cisco Nexus 3000 シリーズ スイッチの構成とともに、Cisco Nexus 3100 プラットフォーム スイッチのモード 0 共有テーブル エントリで現在サポートされている構成を次のテーブルに示します。

表 3: モード 0 転送テーブル

	L2 テーブル	L3 ホスト テーブル	LPM テーブル
Cisco Nexus 3000 シリーズ スイッチ	128,000	16,000	16,000 (IPv4) 、8,000 (IPv6 64 ビット キー)
Cisco Nexus 3100 プラットフォーム スイッチ	288,000	16,000	16,000 (IPv4) 、8,000 (IPv6 64 ビット キー)

ハードウェア フォワーディング

Cisco NX-OS は、分散パケット転送をサポートしています。入力ポートは、パケットヘッダーから該当する情報を取得し、その情報をローカル スイッチング エンジンに渡します。ローカル スイッチング エンジンではレイヤ 3 ルックアップを行い、この情報を使って、パケットヘッダーをリライトします。入力モジュールは、パケットを出力ポートに転送します。出力ポートが別のモジュール上にある場合は、スイッチファブリックを使って、パケットが出力モジュールに転送されます。出力モジュールは、レイヤ 3 転送決定には関与しません。

ソフトウェア転送

Cisco NX-OS のソフトウェア転送パスは、主に、ハードウェアでサポートされない機能、またはハードウェア処理中に発生したエラーへの対処に使用されます。通常、IP オプション付きのパケットまたはフラグメンテーションの必要なパケットは CPU に渡されます。ユニキャスト RIB および隣接マネージャは、ソフトウェアでスイッチされるかまたは終了されるパケットに基づいて転送を決定します。

ソフトウェア転送は、コントロールプレーン ポリシーおよびレート リミッタによって管理されます。

レイヤ 3 ユニキャスト ルーティング機能のまとめ

ここでは、Cisco NX-OS でサポートされるレイヤ 3 ユニキャスト機能およびプロトコルを簡単に説明します。

レイヤ 3 は、IPv4 プロトコルを使用します。詳細については、「[IPv4 の構成](#)」を参照してください。

IPv4 and IPv6

レイヤ 3 は、IPv4 プロトコルまたは IPv6 プロトコルを使用します。IPv6 では、ネットワーク アドレス ビット数が 32 ビット (IPv4 の場合) から 128 ビットに増やされています。詳細については、[IPv4 の設定 \(23 ページ\)](#) または [IPv6 の設定 \(45 ページ\)](#) を参照してください。

Open Shortest Path First (OSPF)

OSPF プロトコルは、自律システム内のネットワーク到達可能性情報の交換に使用されるリンクステート ルーティング プロトコルです。各 OSPF ルータは、そのアクティブなリンクに関する情報をネイバー ルータにアドバタイズします。リンク情報には、リンク タイプ、リンク メトリック、およびリンクに接続されたネイバー ルータが含まれます。このリンク情報を含むアドバタイズメントは、リンクステートアドバタイズメントと呼ばれます。詳細については、[OSPFv2 の設定 \(79 ページ\)](#) または [OSPFv3 の設定 \(127 ページ\)](#) を参照してください。

EIGRP

EIGRP プロトコルは、ディスタンス ベクトルとリンクステートの両ルーティング プロトコルの特徴を備えたユニキャスト ルーティング プロトコルです。これは、シスコ専用ルーティング プロトコルである IGRP の改良バージョンです。EIGRP は、典型的なディスタンス ベクトル ルーティング プロトコルのように、ルートを提供するためにネイバー ルータを必要とします。また、リンクステート プロトコルのように、ネイバー ルータからアドバタイズされたルートからネットワーク トポロジを構築し、この情報を使用して、ループの発生しない、宛先までのパスを選択します。詳細については、「[EIGRP の設定 \(179 ページ\)](#)」を参照してください。

BGP

BGP は自律システム間ルーティングプロトコルです。BGP ルータは、信頼性の高い転送メカニズムとして伝送制御プロトコル (TCP) を使用し、他の BGP ルータにネットワーク到達可能性情報をアドバタイズします。ネットワーク到達可能性情報には、宛先ネットワークプレフィックス、宛先に到達するまでに通過する必要のある自律システムのリスト、およびネクストホップルータが含まれます。到達可能性情報には、ルートの優先度、ルートの始点、コミュニティなどの詳細なパス属性が含まれます。詳細については、「[基本的BGPの設定 \(247 ページ\)](#)」および「[高度な BGP の設定 \(281 ページ\)](#)」を参照してください。

RIP

RIP は、ホップ数をメトリックとして使用するディスタンス ベクトルプロトコルです。RIP は、世界中のインターネットでトラフィックのルーティングに広く使用されています。また、IGP であるため、単一の自律システム内でルーティングを行います。詳細については、「[RIP の設定 \(387 ページ\)](#)」を参照してください。

スタティック ルーティング

スタティック ルーティングを使用して、宛先までの一定のルートを入力できます。この機能は、単純なトポロジの小規模ネットワークでは便利です。また、スタティック ルーティングは、他のルーティングプロトコルとともに、デフォルト ルートおよびルート配布の管理に使用されます。詳細については、「[スタティック ルーティングの設定](#)」を参照してください。

レイヤ 3 仮想化

仮想化を使用すると、複数の管理ドメインにわたる物理リソースを共有できます。

Cisco NX-OS は、仮想ルーティングおよび転送 (VRF) を含むレイヤ 3 仮想化をサポートしています。VRF では、レイヤ 3 ルーティングプロトコルを構成するための別のアドレス ドメインが提供されます。詳細については、「[レイヤ 3 仮想化の設定](#)」を参照してください。

Route Policy Manager

Route Policy Manager は、でルート フィルタリング機能を提供します。Route Policy Manager はルート マップを使用して、さまざまなルーティングプロトコルや、特定のルーティングプロトコル内のさまざまなエンティティ間で配布されたルートをフィルタリングします。フィルタリングは、特定の一致基準に基づいて行われます。これは、アクセス コントロール リストによるパケット フィルタリングに似ています。詳細については、「[Route Policy Manager の設定 \(441 ページ\)](#)」を参照してください。

ファーストホップ冗長プロトコル

ファーストホップ冗長プロトコル（FHRP）は、ホストへの冗長接続を可能にします。アクティブなファーストホップ ルータがダウンした場合は、その機能を引き継ぐスタンバイ ルータが FHRP によって自動的に選択されます。アドレスは仮想のものであり、FHRP グループ内の各 ルータ間で共有されているため、ホストを新しい IP アドレスで更新する必要はありません。ホットスタンバイ ルータ プロトコル（HSRP）の詳細については、「[『Configuring HSRP』（501 ページ）](#)」を参照してください。仮想ルータ冗長プロトコル（VRRP）の詳細については、「[VRRP の設定（523 ページ）](#)」を参照してください。

オブジェクト トラッキングの設定

この章では、Cisco NX-OS スイッチ上でオブジェクト トラッキングを設定する方法について説明します。

この章は、次の項で構成されています。

関連項目

レイヤ 3 スイッチング機能に関連する Cisco マニュアルは、次のとおりです。

- [自律システムの数を検索する](#)



第 4 章

IPv4 の設定

この章では、Cisco NX-OS スイッチ上でのインターネット プロトコル バージョン 4 (IPv4) (アドレス指定を含む)、アドレス解決プロトコル (ARP) および Internet Control Message Protocol (ICMP) の設定方法を説明します。

この章は、次の項で構成されています。

- [IPv4 の概要 \(23 ページ\)](#)
- [IPv4の前提条件 \(29 ページ\)](#)
- [注意事項と制約事項 \(29 ページ\)](#)
- [デフォルト設定 \(30 ページ\)](#)
- [IPv4 の設定 \(30 ページ\)](#)
- [IPv4 設定の確認 \(42 ページ\)](#)
- [IPv4 の設定例 \(42 ページ\)](#)
- [その他の参考資料 \(42 ページ\)](#)

IPv4 の概要

スイッチで IP を設定して、IP アドレスをネットワーク インターフェイスに割り当てられます。IP アドレスを割り当てると、インターフェイスがイネーブルになり、そのインターフェイス上のホストと通信できるようになります。

IP アドレスは、スイッチ上でプライマリまたはセカンダリとして設定できます。インターフェイスには、1つのプライマリ IP アドレスと複数のセカンダリ アドレスを設定できます。スイッチが生成したパケットは、常にプライマリ IPv4 アドレスを使用するため、インターフェイス上のすべてのネットワーキング スイッチは、同じプライマリ IP アドレスを共有する必要があります。各 IPv4 パケットは、送信元または宛先 IP アドレスからの情報に基づいています。詳細については、[複数の IPv4 アドレス](#)のセクションを参照してください。

サブネットを使用して、IP アドレスをマスクできます。マスクは、IP アドレスがどのサブネットに属するかを決定するために使用されます。IP アドレスは、ネットワーク アドレスとホスト アドレスで構成されています。マスクで、IP アドレス中のネットワーク番号を示すビットが識別できます。マスクを使用してネットワークをサブネット化した場合、そのマスクはサブ

ネットマスクと呼ばれます。サブネットマスクは 32 ビット値で、これにより IP パケットの受信者は、IP アドレスのネットワーク ID 部分とホスト ID 部分を区別できます。

Cisco NX-OS システムの IP 機能には、IPv4 パケットの処理と IPv4 パケットの転送を行う役割があります。これには、IPv4 ユニキャストおよびマルチキャスト ルート検索、リバースパス転送（RPF）チェック、およびソフトウェアアクセス制御リスト（ACL）転送が含まれます。また、IP 機能は、ネットワーク インターフェイス IP アドレス設定、重複アドレスチェック、スタティック ルート、および IP クライアントのパケット送受信インターフェイスも管理します。

複数の IPv4 アドレス

Cisco NX-OS システムは、インターフェイスごとに複数の IP アドレスをサポートしています。さまざまな状況に備え、いくつでもセカンダリアドレスを指定できます。最も一般的な状況は次のとおりです。

- 特定のネットワーク インターフェイスのホスト IP アドレスの数が不足している場合。たとえば、サブネットにより、論理サブネットごとに 254 までのホストを使用できるが、物理サブネットの 1 つに 300 のホストアドレスが必要な場合は、ルータ上またはアクセスサーバ上でセカンダリ IP アドレスを使用して、1 つの物理サブネットに 2 つの論理サブネットを使用できます。
- 1 つのネットワークの 2 つのサブネットは、別の方法で、別のネットワークにより分離できる場合があります。別のネットワークによって物理的に分離された複数のサブネットから、セカンダリアドレスを使用して、1 つのネットワークを作成できます。このような場合、最初のネットワークは、2 番目のネットワークの上に拡張されます。つまり、上の階層となります。サブネットは、同時に複数のアクティブなインターフェイス上に表示できません。



(注) 注：ネットワーク セグメント上のいずれかのスイッチがセカンダリ IPv4 アドレスを使用している場合は、同じネットワーク インターフェイス上の他のすべてのスイッチも、同じネットワークまたはサブネットからのセカンダリアドレスを使用する必要があります。ネットワーク セグメント上で、一貫性のない方法でセカンダリアドレスを使用すると、ただちにルーティング ループが発生する可能性があります。

アドレス解決プロトコル

ネットワーク スイッチおよびレイヤ 3 スイッチは、アドレス解決プロトコル（ARP）を使用して、IP（ネットワーク層）アドレスをメディアアクセス コントロール（MAC）レイヤアドレスにマップし、IP パケットのネットワーク間の送信を可能にします。スイッチは、別のスイッチにパケットを送信する前に、独自の ARP キャッシュを調べて、宛先スイッチの MAC アドレスおよび対応する IP アドレスがあるかどうかを確認します。エントリがない場合、発信元のスイッチは、ネットワーク上のすべてのスイッチにブロードキャスト メッセージを送信します。

各スイッチは、IP アドレスをそれぞれ自身の IP アドレスと比較します。一致する IP アドレスを持つスイッチだけが、スイッチの MAC アドレスを含むパケットとともにデータを送信したスイッチに返信します。送信元スイッチは、以降の参照用に宛先スイッチの MAC アドレスを自身の ARP テーブルに追加し、データリンク ヘッダーの作成とパケットをカプセル化するトレーラの作成を行った後、データ転送を開始します。次の図は、ARP ブロードキャストと応答プロセスを示しています。

図 4: ARP 処理



宛先スイッチが別のスイッチの背後のリモートネットワークにある場合、データを送信するスイッチがデフォルト ゲートウェイの MAC アドレスに対する ARP 要求を送信する場合を除いてプロセスは同じです。アドレスが解決され、デフォルトゲートウェイがパケットを受信した後に、デフォルトゲートウェイは、接続されているネットワーク上で宛先の IP アドレスをブロードキャストします。宛先スイッチのネットワーク上のスイッチは、ARP を使用して宛先スイッチの MAC アドレスを取得し、パケットを配信します。ARP はデフォルトでイネーブルにされています。

デフォルトのシステム定義 CoPP ポリシーは、ARP ブロードキャスト パケットのレート制限を行います。デフォルトのシステム定義 CoPP ポリシーは、ARP ブロードキャスト ストームによるコントロールプレーン トラフィックへの影響を防止し、ブリッジド パケットに影響しません。

ARP キャッシング

ARP キャッシングにより、ブロードキャストが最小になり、ネットワーク リソースの浪費が抑制されます。IP アドレスの MAC アドレスへのマッピングは、インターネットワークを送信される各パケットに対しネットワーク上のホップ（スイッチ）ごとに発生します。そのため、ネットワーク パフォーマンスに影響を与えます。

ARP キャッシングでは、ネットワーク アドレスとそれに関連付けられたデータリンク アドレスが一定の期間、メモリに格納されるため、パケットが送信されるたびに同じアドレスを求めてブロードキャストする場合の、貴重なネットワーク リソースの使用が最小限となります。キャッシュ エントリは、定期的に失効するよう設定されているため、保守が必要です。これは、古い情報が無効となる場合があるためです。ネットワーク上のすべてのスイッチは、アドレスがブロードキャストされるとそれぞれのテーブルを更新します。

ARP キャッシュのスタティックおよびダイナミック エントリ

スタティック ルートの使用時には、各スイッチの各インターフェイスの IP アドレス、サブネット マスク、ゲートウェイ、および対応する MAC アドレスを手動で設定する必要があります。スタティック ルーティングを使用すると、管理を強化できますが、より多くのルート テーブル

ル保守作業が必要となります。ルートを追加または変更するたびに、テーブルの更新が必要となるためです。

ダイナミック ルーティングは、ネットワーク内のスイッチが相互にルーティング テーブルの情報を交換できるプロトコルを使用します。ダイナミック ルーティングは、キャッシュに制限時間を追加しない限り、ルート テーブルが自動更新されるため、スタティック ルーティング より効率的です。デフォルトの制限時間は 25 分ですが、キャッシュから追加および削除されるルートがネットワークに数多く存在する場合は、制限時間を変更します。

ARP を使用しないデバイス

ネットワークが2つのセグメントに分割されると、ブリッジによりセグメントが結合され、各セグメントへのトラフィックが MAC アドレスに基づいてフィルタリングされます。スイッチとは対照的に MAC アドレスだけを使用するブリッジは、独自のアドレス テーブルを作成します。スイッチの場合には、IP アドレスおよび対応する MAC アドレスを含む ARP キャッシュがあります。

パッシブ ハブは、ネットワーク内の他のスイッチを物理的に接続する中央接続スイッチです。これは、そのすべてのポートからスイッチに対してメッセージを送信し、レイヤ1で動作しますが、アドレス テーブルは維持しません。

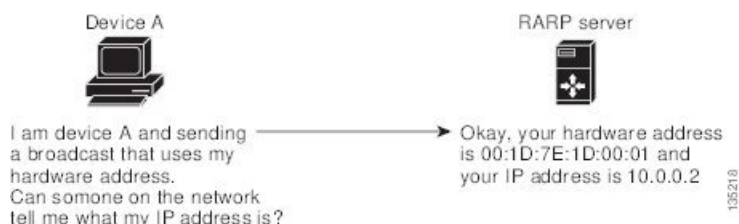
レイヤ2スイッチは、すべてのポートからメッセージを送信するハブとは異なり、メッセージの宛先であるデバイスに接続されるポートを決定し、そのポートにだけ送信します。ただし、レイヤ3スイッチは、ARP キャッシュ (テーブル) を作成するスイッチです。

Reverse ARP

RFC 903 で定義された Reverse ARP (RARP) は、ARP と同じように動作しますが、RARP 要求パケットは MAC アドレスではなく IP アドレスを要求する点が異なります。RARP は多くの場合、ディスクレスワークステーションで使用されます。これは、このタイプのデバイスには、起動時に使用する IP アドレスを格納する手段がないためです。認識できるアドレスは MAC アドレスだけで、これはハードウェアに焼き付けられているためです。

RARP を使用するには、ルータ インターフェイスとして、同じネットワーク セグメント上に RARP サーバが必要です。次の図に、RARP の仕組みを示します。

図 5: Reverse ARP



RARP には、いくつかの制限があります。これらの制限により、ほとんどの企業では、DHCP を使用してダイナミックに IP アドレスを割り当てています。DHCP は、RARP よりコスト効率が高く、必要な保守作業も少ないためです。最も重要な制限は次のとおりです。

- RARP はハードウェアアドレスを使用するため、多くの物理ネットワークを含む大規模なネットワークの場合は、各セグメント上に、冗長性のための追加サーバを備えた RARP サーバが必要です。各セグメントに 2 台のサーバを保持すると、コストがかかります。
- 各サーバは、ハードウェアアドレスと IP アドレスのスタティック マッピングのテーブルで設定する必要があります。IP アドレスの保守は困難です。
- RARP は、ホストの IP アドレスだけを提供し、サブネットマスクもデフォルトゲートウェイも提供しません。

プロキシ ARP

プロキシ ARP によって、あるネットワーク上に物理的に存在するスイッチが、同じスイッチまたはファイアウォールに接続された別の物理ネットワークの論理的な一部であることが可能になります。プロキシ ARP によって、ルータの背後のプライベートネットワーク上のスイッチをパブリック IP アドレスを使用して隠すことができ、さらに、ルータの手前のパブリックネットワークにあるように見せることができます。ルータはそのアイデンティティを隠すことにより、実際の宛先までパケットをルーティングする役割を担います。プロキシ ARP を使用すると、サブネット上のスイッチは、ルーティングもデフォルトゲートウェイも設定せずにリモートサブネットまで到達できます。

スイッチが同じデータリンク層ネットワークには存在しないが、同じ IP ネットワークに存在する場合、それらのスイッチはローカルネットワーク上に存在するものとして、相互にデータ送信を試みます。ただし、これらのスイッチを隔てるルータは、ブロードキャストメッセージを送信しません。これは、ルータがハードウェアレイヤのブロードキャストを渡さず、アドレスが解決されないためです。

スイッチでプロキシ ARP をイネーブルにし、ARP 要求を受信すると、プロキシ ARP はこれを、ローカル LAN 上にないシステムに対する要求と見なします。スイッチは、ブロードキャストがアドレス指定されたリモートの宛先であるかのように、そのスイッチの MAC アドレスをリモートの宛先の IP アドレスと関連付ける ARP 応答で応答します。ローカルスイッチは、宛先に直接接続されていると確信しますが、実際には、パケットはローカルスイッチによってローカルサブネットワークから宛先サブネットワークへ転送されます。デフォルトでは、プロキシ ARP はディセーブルになっています。

ローカル プロキシ ARP

ローカル Proxy ARP を使用すると、通常ルーティングが必要ないサブネット内の IP アドレスを求める ARP 要求に対し、スイッチが応答するようにできます。ローカルプロキシ ARP をイネーブルにすると、ARP は、サブネット内の IP アドレスを求めるすべての ARP 要求に応答し、サブネット内のホスト間ですべてのトラフィックを転送します。この機能は、接続先スイッチ上での設定により、意図的にホスト間の直接的なコミュニケーションが禁止されているサブネットについてだけ使用してください。

Gratuitous ARP

Gratuitous ARP は、送信元 IP アドレスと宛先 IP アドレスが同じである要求を送信し、重複する IP アドレスを検出します。Cisco NX-OS は Gratuitous ARP 要求または ARP キャッシュの更新の有効または無効をサポートします。

収集スロットル

着信 IP パケットを転送するときに、ネクストホップのアドレス解決プロトコル（ARP）要求が解決されない場合、パケットは ARP 解決のために中央処理装置（CPU）にパントされます。CPU はネクストホップの MAC アドレスを解決し、ハードウェアをプログラミングします。

Cisco Nexus 3000 シリーズスイッチのハードウェアには、スーパーバイザを収集トラフィックから保護する収集レートリミッタがあります。エントリの最大数を超過している場合、ARP 要求が解決されなかったパケットは、ハードウェアでドロップされるのではなく、ソフトウェアで処理され続けます。

ARP 要求が送信されると、ソフトウェアは、同じネクストホップ IP アドレスへのパケットがスーパーバイザに転送されないようにするために、ハードウェア内に /32 ドロップ隣接関係を追加します。ARP が解決されると、そのハードウェアエントリは正しい MAC アドレスで更新されます。タイムアウト期間が経過するまでに ARP エントリが解決されない場合、そのエントリはハードウェアから削除されます。



(注) Glean スロットリングは IPv4 および IPv6 でサポートされますが、IPv6 リンクローカルアドレスはサポートされません。

ICMP

ICMP を使用して、IP 処理に関連するエラーおよびその他の情報を報告するメッセージパケットを提供できます。ICMP は、ICMP 宛先到達不能メッセージ、ICMP エコー要求（2 つのホスト間でパケットを往復送信する）、およびエコー返信メッセージなどのエラーメッセージを生成します。ICMP は多くの診断機能も備えており、ホストへのエラーパケットの送信およびリダイレクトが可能です。デフォルトでは、ICMP がイネーブルにされています。

次に示すのは、ICMP メッセージタイプの一部です。

- ネットワーク エラー メッセージ
- ネットワーク輻輳メッセージ
- トラブルシューティング情報
- タイムアウト告知



- (注) ICMP リダイレクトは、ローカル プロキシ ARP 機能がイネーブルになっているインターフェイスではディセーブルになります。

ICMP 到達不能サポートによる送信元インターフェイスの設定

ICMP エラー メッセージを処理するように ICMP ソース IP フィールドのインターフェイス IP アドレスを設定できます。ICMP パケットがネットワーク スタック内で構築される場合、パケットは構成されたインターフェイス IP アドレスを使用します。イーサネット、ループバック、またはポート チャネル インターフェイスを選択して、IP アドレスを構成できます。これらのオプションを選択しない場合、スイッチは以前のリリースと同様に動作します。

仮想化のサポート

IPv4 は、仮想ルーティングおよび転送 (VRF) インスタンスをサポートしています。デフォルトでは、特に別の VRF を設定しない限り、Cisco NX-OS はユーザーをデフォルトの VRF に配置します。詳細については、「[レイヤ 3 仮想化の設定](#)」を参照してください。

ECMP を使用した IPv4 ルート

ルートのすべてのネクストホップが収集、ドロップ、またはパントの場合、すべてのネクストホップはマルチパス ハードウェア テーブルにそのままプログラムされます。

ルートの一部のネクストホップがグリーンニング、ドロップ、またはパントであり、残りのネクストホップがそうでない場合、非グリーンニング、ドロップ、またはパントのネクストホップのみがマルチパス ハードウェア テーブルにプログラムされます。

ECMP ルートの特定のネクストホップが解決されると (ARP ND が解決されると)、それに応じてマルチパス ハードウェア テーブルが更新されます。

IPv4の前提条件

IPv4 には、次の前提条件があります。

- IPv4 はレイヤ 3 インターフェイス上だけで設定可能です。

注意事項と制約事項

IPv4 設定時の注意事項および制約事項は、次のとおりです。

- セカンダリ IP アドレスは、プライマリ IP アドレスの設定後にだけ設定できます。

- Cisco Nexus 3000 シリーズ スイッチをレイヤ 2 またはレイヤ 3 の終端スイッチとして使用する場合、Cisco はすべての VLAN、で MAC アドレス テーブル エージング時間を 1800（デフォルトの ARP エージング時間の 1500 秒よりも長く）に設定することを推奨します。
- Cisco Nexus 3000 シリーズ スイッチは、VLAN 単位の CAM エージング タイマーをサポートしていません。

デフォルト設定

次の表は、IP パラメータのデフォルト設定をリスト表示しています。

表 4: デフォルト IP パラメータ

パラメータ	デフォルト
ARP タイムアウト	1500 秒
プロキシ ARP	無効

IPv4 の設定

このセクションは、次のトピックで構成されています。

IPv4 アドレス指定の設定

ネットワーク インターフェイスにプライマリ IP アドレスを割り当てることができます。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : switch# configure terminal switch(config)#	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	interface ethernet number 例 : switch(config)# interface ethernet 2/3 switch(config-if)#	インターフェイス設定モードを開始します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 3	no switchport 例 : <pre>switch(config-if)# no switchport</pre>	そのインターフェイスを、レイヤ3ルーテッドインターフェイスとして設定します。
ステップ 4	ip address ip-address/length [secondary] 例 : <pre>switch(config-if)# ip address 192.2.1.1 255.0.0.0</pre>	インターフェイスに対するプライマリ IPv4 アドレスまたはセカンダリ IPv4 アドレスを指定します。 • 4 分割ドット付き 10 進表記のアドレスでネットワーク マスクを指定します。たとえば、255.0.0.0 は、1 に等しい各ビットが、ネットワークアドレスに属した対応するアドレスビットを意味することを示します。 • ネットワークマスクは、スラッシュ (/) および数字、つまり、プレフィックス長として示される場合もあります。プレフィックス長は、アドレスの高次の連続ビットのうち、何個がプレフィックス（アドレスのネットワーク部分）を構成しているかを指定する 10 進数値です。スラッシュは 10 進数値の前に置かれ、IP アドレスとスラッシュの間にスペースは入りません。
ステップ 5	（任意） show ip interface 例 : <pre>switch(config-if)# show ip interface</pre>	IPv4 に設定されたインターフェイスを表示します。
ステップ 6	（任意） copy running-config startup-config 例 : <pre>switch(config-if)# copy running-config startup-config</pre>	実行コンフィギュレーションを、スタートアップ コンフィギュレーションにコピーします。

例

次に、IPv4 アドレスを割り当てる例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# interface ethernet 2/3
switch(config-if)# no switchport
```

```
switch(config-if)# ip address 192.2.1.1.255.0.0.0
switch(config-if)# copy running-config startup-config
switch(config-if)#
```

複数の IP アドレスの設定

セカンダリ IP アドレスは、プライマリ IP アドレスの設定後にのみ追加できます。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例： switch# configure terminal switch(config)#	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	interface ethernet number 例： switch(config)# interface ethernet 2/3 switch(config-if)#	インターフェイス設定モードを開始します。
ステップ 3	no switchport 例： switch(config-if)# no switchport	そのインターフェイスを、レイヤ 3 ルーテッド インターフェイスとして設定します。
ステップ 4	ip address ip-address/length [secondary] 例： switch(config-if)# ip address 192.168.1.1 255.0.0.0 secondary	設定したアドレスをセカンダリ IPv4 アドレスとして指定します。
ステップ 5	(任意) show ip interface 例： switch(config-if)# show ip interface	IPv4 用に設定されたインターフェイスを表示します。
ステップ 6	(任意) copy running-config startup-config 例： switch(config-if)# copy running-config startup-config	この設定変更を保存します。

スタティック ARP エントリの設定

デバイス上でスタティック ARP エントリを設定して、IP アドレスをスタティック マルチキャスト MAC アドレスを含む MAC ハードウェア アドレスにマッピングできます。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : switch# configure terminal switch(config)#	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	interface ethernet number 例 : switch(config)# interface ethernet 2/3 switch(config-if)#	インターフェイス設定モードを開始します。
ステップ 3	no switchport 例 : switch(config-if)# no switchport	そのインターフェイスを、レイヤ3ルーテッドインターフェイスとして設定します。
ステップ 4	ip arp address ip-address mac-address 例 : switch(config-if)# ip arp 192.168.1.1 0019.076c.1a78	IP アドレスを MAC アドレスにスタティック エントリとして関連付けます。
ステップ 5	(任意) copy running-config startup-config 例 : switch(config-if)# copy running-config startup-config	この設定変更を保存します。

プロキシ ARP の設定

デバイス上でプロキシ ARP を設定して、他のネットワークまたはサブネット上のホストのメディア アドレスを決定します。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : switch# configure terminal switch(config)#	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	interface ethernet number 例 :	インターフェイス設定モードを開始します。

	コマンドまたはアクション	目的
	switch(config)# interface ethernet 2/3 switch(config-if)#	
ステップ 3	no switchport 例 : switch(config-if)# no switchport	そのインターフェイスを、レイヤ 3 ルーテッド インターフェイスとして設定します。
ステップ 4	ip proxy arp 例 : switch(config-if)# ip proxy arp	インターフェイス上でプロキシ ARP を有効にします。
ステップ 5	(任意) copy running-config startup-config 例 : switch(config-if)# copy running-config startup-config	この設定変更を保存します。

例

次に、プロキシ ARP を構成する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# interface ethernet 2/3
switch(config-if)# no switchport
switch(config-if)# ip proxy-arp
switch(config-if)# copy running-config startup-config
switch(config-if)#
```

ローカル プロキシ ARP の設定

スイッチ上でローカル プロキシ ARP を設定できます。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : switch# configure terminal switch(config)#	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	interface ethernet number 例 : switch(config)# interface ethernet 2/3 switch(config-if)#	インターフェイス設定モードを開始します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 3	no switchport 例 : switch(config-if) # no switchport	そのインターフェイスを、レイヤ3ルーテッドインターフェイスとして設定します。
ステップ 4	ip local-proxy-arp 例 : switch(config-if) # ip local-proxy-arp	インターフェイス上でローカルプロキシ ARP をイネーブルにします。
ステップ 5	copy running-config startup-config 例 : switch(config-if) # copy running-config startup-config	この設定変更を保存します。

例

次に、ローカルプロキシ ARP を設定する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# interface ethernet 2/3
switch(config-if)# no switchport
switch(config-if)# ip local-proxy-arp
switch(config-if)# copy running-config startup-config
```

無償 ARP の設定

インターフェイス上で Gratuitous ARP を設定できます。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : switch# configure terminal switch(config)#	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	interface ethernet number 例 : switch(config)# interface ethernet 2/3 switch(config-if)#	インターフェイス設定モードを開始します。
ステップ 3	no switchport 例 : switch(config-if) # no switchport	そのインターフェイスを、レイヤ3ルーテッドインターフェイスとして設定します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 4	ip arp gratuitous {request update} 例 : <pre>switch(config-if)# ip arp gratuitous request</pre>	インターフェイス上で無償 ARP をイネーブルにします。無償 ARP はデフォルトで有効になっています。
ステップ 5	(任意) copy running-config startup-config 例 : <pre>switch(config-if)# copy running-config startup-config</pre>	この設定変更を保存します。

例

次に、Gratuitous ARP 要求をディセーブルにする例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# interface ethernet 2/3
switch(config-if)# no switchport
switch(config-if)# no ip arp gratuitous request
switch(config-if)# copy running-config startup-config
switch(config-if)#
```

IP ダイレクトブロードキャストの設定

IP ダイレクトブロードキャストは、宛先アドレスが何らかの IP サブネットの有効なブロードキャストアドレスであるにもかかわらず、その宛先サブネットに含まれないノードから発信される IP パケットです。

宛先サブネットに直接接続されていないスイッチは、ユニキャスト IP パケットをそのサブネット上のホストに転送するのと同じ方法で、IP ダイレクトブロードキャストを転送します。ダイレクトブロードキャストパケットが、宛先サブネットに直接接続されたスイッチに到着すると、宛先サブネット上のブロードキャストとして「展開」されます。パケットの IP ヘッダー内の宛先アドレスはそのサブネットに設定された IP ブロードキャストアドレスに書き換えられ、パケットはリンク層ブロードキャストとして送信されます。

あるインターフェイスでダイレクトブロードキャストがイネーブルになっている場合、着信した IP パケットが、そのアドレスに基づいて、そのインターフェイスが接続されているサブネットを対象とするダイレクトブロードキャストとして識別されると、そのパケットはそのサブネット上にブロードキャストとして展開されます。

IP ダイレクトブロードキャストをイネーブルにするには、インターフェイスコンフィギュレーションモードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
ip directed-broadcast	ダイレクトブロードキャストの物理ブロードキャストへの変換を有効にします。

IP 収集スロットルの設定

Cisco NX-OS ソフトウェアは、収集トラフィックからスーパーバイザを保護する収集スロットル レート リミッタをサポートします。



- (注) 到達不能な、または存在しないネクスト ホップの ARP 解決のために、スーパーバイザに送信された不要な収集パケットをフィルタリングするために、「**hardware ip glean throttle**」コマンドを使用して、IP 収集スロットル機能を構成することを推奨します。IP 収集スロットルは、ソフトウェアのパフォーマンスを向上させ、トラフィックをより効率的に管理します。



- (注) Glean スロットリングは IPv4 および IPv6 でサポートされますが、IPv6 リンクローカルアドレスはサポートされません。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <code>switch# configure terminal</code> <code>switch(config)#</code>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	[no] hardware ip glean throttle 例 : <code>switch(config) # hardware ip glean throttle</code>	IP 収集スロットルを有効または無効にします。
ステップ 3	(任意) copy running-config startup-config 例 : <code>switch(config)# copy running-config startup-config</code>	この設定変更を保存します。

例

次に、Gratuitous ARP 要求をディセーブルにする例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# hardware ip glean throttle
switch(config-if)# copy running-config startup-config
```

ハードウェア IP 収集スロットルの最大値の設定

転送情報ベース（FIB）にインストールされている隣接関係の最大ドロップ数を制限できます。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例： switch# configure terminal switch(config)#	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	hardware ip glean throttle maximum count 例： switch(config) # hardware ip glean throttle maximum 2134	FIB にインストールされるドロップ隣接関係の数を設定します。
ステップ 3	[no] hardware ip glean throttle maximum count 例： switch(config)# no hardware ip glean throttle maximum 2134	デフォルトの制限値を適用します。 デフォルト値は 1000 です。範囲は 0 ～ 16,383 エントリです。
ステップ 4	（任意） copy running-config startup-config 例： switch(config)# copy running-config startup-config	この設定変更を保存します。

例

次に、Gratuitous ARP 要求をディセーブルにする例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# hardware ip glean throttle maximum 2134
switch(config-if)# copy running-config startup-config
```


ハードウェア IP 収集スロットルのタイムアウトの設定

インストールされたドロップ隣接関係が FIB 内に残る時間のタイムアウトを設定できます。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	hardware ip glean throttle maximum timeout timeout-in-seconds 例 : <pre>switch(config)# hardware ip glean throttle maximum timeout 300</pre>	インストールされたドロップ隣接関係が FIB 内に残る時間のタイムアウトを設定します。
ステップ 3	[no] hardware ip glean throttle maximum timeout timeout-in-seconds 例 : <pre>switch(config)# no hardware ip glean throttle maximum timeout 300</pre>	デフォルトの制限値を適用します。 タイムアウト値は秒単位です。範囲は 300 秒（5 分）～1800 秒（30 分）です。 (注) タイムアウト期間を超えた後、ドロップ隣接関係は FIB から削除されます。
ステップ 4	(任意) copy running-config startup-config 例 : <pre>switch(config)# copy running-config startup-config</pre>	この設定変更を保存します。

例

次に、Gratuitous ARP 要求をディセーブルにする例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# hardware ip glean throttle maximum timeout 300
switch(config-if)# copy running-config startup-config
```

ICMP 送信元 IP フィールドのインターフェイス IP アドレスの設定

ICMP エラー メッセージを処理するように ICMP ソース IP フィールドのインターフェイス IP アドレスを設定できます。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	[no] ip source {ethernet slot/port loopback number port-channel number} {icmp-errors} 例 : <pre>switch(config)# ip source loopback 0 icmp-errors</pre>	ICMP 送信元 IP フィールドのインターフェイス IP アドレスを設定し、ICMP エラー メッセージをルーティングします。
ステップ 3	(任意) exit 例 : <pre>switch(config)# exit</pre>	特権 EXEC モードに戻ります。

例

この例では、ICMP 送信元 IP フィールドでインターフェイス IP アドレスを構成する方法を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# ip source ethernet 1/1 icmp-errors
switch(config-if)# exit
```

この例では、ICMP 送信元 IP フィールドでインターフェイス IP アドレスを構成する方法を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# no ip source ethernet 1/1 icmp-errors
switch(config-if)# exit
```

IP パケットのソフトウェア転送のログギングの設定

NX-OS ソフトウェアによって転送される IP パケットのログギング条件を設定できます。条件は次のとおりです。

- パケットの最小数 (サイズ)
- オプションの期間 (ログギング間隔)

ログギング条件により、1 秒あたりのパケット数 (pps) のしきい値が作成されます。トラフィックが条件を満たしているか超えると、NX-OS はコンソール メッセージをログに記録します。次に例を示します。

```
2019 jul 31 15:28:31 switch-1 %$ VDC-1 %$ %USER-3-SYSTEM_MSG: Packets per second exceeded
the configured threshold 40, current PPS: 1262 - netstack
```

この機能は、Cisco Nexus 3000 プラットフォーム スイッチ、Cisco Nexus 3100 プラットフォーム スイッチ、および Cisco Nexus 3200 シリーズでサポートされています。

ip pps threshold unicast-forward コマンドを使用して、転送されるパケットの条件を設定できます。この機能を無効にするには、**no ip pps threshold unicast-forward**を使用します。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	config terminal 例 : <pre>switch-1# config terminal Enter configuration commands, one per line. End with CNTL/Z. switch-1(config)#</pre>	端末の構成を開始します
ステップ 2	ip pps threshold unicast-forward pps-threshold [syslog-interval] 例 : <pre>switch-1(config)# ip pps threshold unicast-forward 50 5 switch-1(config)#</pre>	この機能を有効にして条件を設定します。 • pps-threshold は 1 ～ 30000 パケットです。 • syslog-interval は 1 ～ 60 秒です。デフォルト値は 1 秒です。
ステップ 3	(オプション) show ip pps threshold 例 : <pre>switch-1(config) show ip traffic pps PPS type : unicast-forward, PPS limit : 50, Log Interval: 5 switch-1(config)#</pre>	現在の PPS しきい値設定を表示します。

例

次の例は、特定のフローで転送されるパケット数が、設定されたパケット数および 2 秒ごとに 4000 パケットというログギング間隔を超えた場合に、コンソール メッセージを設定する方法を示しています。

```
switch-1# configure terminal
switch-1(config)# ip pps threshold unicast-forward 4000 2
switch-1(config)# copy running-config startup-config
```

IPv4 設定の確認

IPv4 の設定情報を表示するには、次のいずれかの作業を行います。

コマンド	目的
how hardware forwarding ip verify	IP パケット検証の設定を表示します。
show ip adjacency	隣接関係テーブルを表示します。
show ip arp	ARP テーブルを表示します。
show ip interface	IP に関連するインターフェイス情報を表示します。
show ip arp statistics [vrf vrf-name]	ARP 統計情報を表示します。
show ip adjacency summary	スロットル隣接関係の数のサマリーを表示します。
show ip arp summary	スロットル隣接関係の数のサマリーを表示します。
show ip interface	IP に関連するインターフェイス情報を表示します。

次に、IPv4 アドレスを設定する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# interface ethernet 1/2
switch(config)# no switchport
switch(config-if)# ip address 192.2.1.1/1
```

IPv4 の設定例

次に、IPv4 アドレスを設定する例を示します。

```
configure terminal
interface ethernet 1/2
no switchport
ip address 192.2.1.1/16
```

その他の参考資料

IP の実装に関する詳細情報については、次の各項を参照してください。

IPv4 の関連資料

関連項目	マニュアル タイトル
IP CLI コマンド	Cisco Nexus 3000 シリーズ NX-OS ユニキャスト ルーティング コマンド リファレンス

標準

標準	タイトル
この機能でサポートされる新規の標準または変更された標準はありません。また、既存の標準のサポートは変更されていません。	-



第 5 章

IPv6 の設定

この章では、Cisco NX-OS デバイス上でのインターネット プロトコル バージョン 6 (IPv6) (アドレス指定を含む)、ネイバー探索プロトコル (ND)、および Internet Control Message Protocol (ICMP) の構成方法を説明します。

この章は、次の項で構成されています。

- [IPv6 について \(45 ページ\)](#)
- [IPv6 の前提条件 \(62 ページ\)](#)
- [IPv6 の注意事項および制約事項 \(62 ページ\)](#)
- [デフォルト設定 \(63 ページ\)](#)
- [IPv6 の設定 \(63 ページ\)](#)
- [IPv6 設定の確認 \(76 ページ\)](#)
- [IPv6 の設定例 \(77 ページ\)](#)
- [その他の参考資料 \(77 ページ\)](#)

IPv6 について

IPv6 は、IPv4 の後継として設計されており、ネットワーク アドレス ビット数が 32 ビット (IPv4 の場合) から 128 ビットに増やされています。IPv6 は IPv4 に基づいていますが、アドレス空間が大幅に拡大されており、メインヘッダーと拡張ヘッダーの簡素化など、その他の機能強化が含まれています。

拡大された IPv6 アドレス空間により、ネットワークのスケーラビリティが可能となり、グローバルな到達可能性が提供されます。簡素化された IPv6 パケット ヘッダー形式により、パケットの処理効率が向上しています。柔軟性の高い IPv6 アドレス空間により、プライベート アドレスの必要性和、プライベート (グローバルに一意ではない) アドレスを限られた数のパブリック アドレスに変換するネットワーク アドレス変換 (NAT) の使用が削減されます。IPv6 を使用すると、ネットワークの境界にある境界ルータによる特別な処理を必要としない新しいアプリケーション プロトコルがイネーブルになります。

プレフィックス集約、簡易ネットワーク再番号割り当て、IPv6 サイト マルチホーミング機能などの IPv6 機能により、さらに効率的にルーティングが行われます。IPv6 は、IPv6 向け Open

Shortest Path First (OSPF) やマルチプロトコル ボーダー ゲートウェイ プロトコル (BGP) をサポートしています。

IPv6 アドレス形式

IPv6 アドレスは 128 ビットつまり 16 バイトです。このアドレスは、x:x:x:x:x:x:x のように、コロン (:) で区切られた 16 ビット 16 進数のブロック 8 つに分かれています。

次に、IPv6 アドレスの例を 2 つ示します。

```
2001:0DB8:7654:3210:FEDC:BA98:7654:3210
```

```
2001:0DB8:0:0:8:800:200C:417A
```

IPv6 アドレスの中には、連続するゼロが含まれます。IPv6 アドレスの先頭、中間、または末尾で、この連続するゼロの代わりに 2 つのコロン (::) を使用できます。次の表は、圧縮された IPv6 アドレス フォーマットの一覧です。



(注) IPv6 アドレスでは、アドレス中で最も長く連続するゼロの代わりに、2 つのコロン (::) を 1 度だけ使用できます。

連続する 16 ビット値がゼロで示されている場合は、2 つのコロンを IPv6 アドレスの一部として使用できます。インターフェイスごとに複数の IPv6 アドレスを設定できますが、設定できるリンクローカルアドレスは 1 つだけです。

IPv6 アドレス中の 16 進数の文字の大文字と小文字は区別されません。

表 5: 圧縮された IPv6 アドレス形式

IPv6 アドレス タイプ	優先形式	圧縮形式
ユニキャスト	2001:0:0:0:DB8:800:200C:417A	2001::0DB8:800:200C:417A
マルチキャスト	FF01:0:0:0:0:0:0:101	FF01::101
ループバック	0:0:0:0:0:0:0:1	::1
未指定	0:0:0:0:0:0:0:0	::

ノードは表にあるループバック アドレスを使用して、IPv6 パケットを自分宛てテーブルに送信できます。IPv6 のループバック アドレスは、IPv4 のループバック アドレスと同じです。詳細については、[概要 \(7 ページ\)](#) を参照してください。



(注) IPv6 ループバック アドレスは、物理インターフェイスに割り当ててはできません。送信元または宛先のアドレスとして IPv6 ループバック アドレスを含むパケットは、そのパケットを作成したノードの外には転送できません。IPv6 ルータは、IPv6 ループバック アドレスを送信元アドレスまたは宛先アドレスとするパケットを転送しません。

IPv6 未指定アドレスは、インターフェイスに割り当ててはできません。未指定 IPv6 アドレスは、IPv6 パケット内の宛先アドレスまたは IPv6 ルーティング ヘッダーとして使用しないでください。

IPv6 プレフィックスは、RFC 2373 で規定された形式です。この形式では、IPv6 アドレスが、コロンに囲まれた 16 ビット値を使用した 16 進数で指定されています。プレフィックス長は、アドレスの高次の連続ビットのうち、何個がプレフィックス（アドレスのネットワーク部分）を構成しているかを指定する 10 進数値です。たとえば、2001:0DB8:8086:6502::/32 は有効な IPv6 プレフィックスです。

IPv6 ユニキャスト アドレス

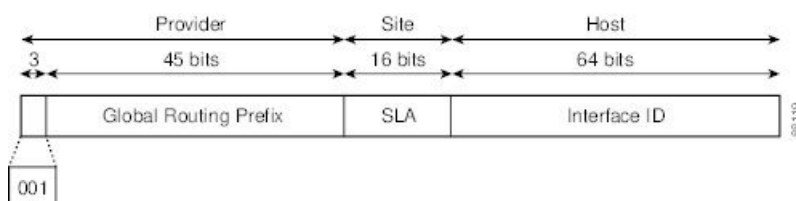
IPv6 ユニキャストアドレスは、1つのノード上の1つのインターフェイスのIDです。ユニキャストアドレスに送信されたパケットは、そのアドレスが示すインターフェイスに配信されます。

集約可能グローバル アドレス

集約可能グローバルアドレスは、集約可能なグローバルユニキャストプレフィックスによる IPv6 アドレスです。集約可能グローバルユニキャストアドレスの構造により、グローバルルーティングテーブル内のルーティングテーブル エントリ数を制限するルーティングプレフィックスの厳密な集約が可能になります。集約可能グローバルアドレスは、組織を上に向かって、最終的にインターネットサービスプロバイダー（ISP）まで集約されるリンク上で使用されます。

集約可能なグローバル IPv6 アドレスは、グローバルルーティングプレフィックス、サブネット ID、およびインターフェイス ID により定義されます。バイナリ 000 で始まるアドレスを除き、グローバルユニキャストアドレスはすべて 64 ビット インターフェイス ID を持ちます。IPv6 グローバルユニキャストアドレスの割り当てには、バイナリ値 001 (2000::/3) から始まるアドレスの範囲が使用されます。次の図は、集約可能グローバルアドレスの構造を示しています。

図 6: 集約可能グローバルアドレス形式



2000::/3 (001) ~ E000::/3 (111) のプレフィックスを持つアドレスには、Extended Universal Identifier (EUI) 64 形式の 64 ビット インターフェイス識別子が必要です。インターネット割り当て番号局 (IANA) は、2000::/16 の範囲の IPv6 アドレス空間を地域レジストリに割り当てます。

集約可能なグローバルアドレスは、48 ビット グローバルルーティングプレフィックスと、16 ビット サブネット ID または Site-Level Aggregator (SLA) で構成されます。IPv6 集約可能グローバルユニキャストアドレスの形式に関するドキュメント (RFC 2374) によると、グローバルルーティングプレフィックスには、Top-Level Aggregator (TLA) と Next-Level Aggregator (NLA) という 2 つの階層構造のフィールドが含まれています。TLS フィールドおよび NLA フィールドはポリシーベースであるため、IETF は、これらのフィールドを RFC から削除することを決定しました。この変更以前に展開された既存の IPv6 ネットワークの中には、依然として、古いアーキテクチャ上のネットワークを使用しているものもあります。

個々の組織は、16 ビット サブネット フィールドであるサブネット ID を使用して、ローカルアドレス指定階層を作成したり、サブネットを識別したりできます。サブネット ID は IPv4 でのサブネットに似ていますが、IPv6 サブネット ID を持つ組織では最大 65,535 個のサブネットをサポートできるという点が異なります。

インターフェイス ID により、リンク上のインターフェイスが識別されます。インターフェイス ID は、リンク上では一意です。多くの場合、インターフェイス ID は、インターフェイスのリンク層アドレスと同じか、リンク層アドレスに基づいています。集約可能なグローバルユニキャストやその他の IPv6 アドレス タイプで使用されるインターフェイス ID は 64 ビットであり、形式は変更済み EUI-64 フォーマットです。

インターフェイス ID は、次のいずれかに該当する修正 EUI-64 形式です。

- すべての IEEE 802 インターフェイス タイプ (イーサネット、およびファイバ分散データ インターフェイスなど) の場合は、最初の 3 オクテット (24 ビット) がそのインターフェイスの 48 ビット リンク層アドレス (MAC アドレス) の Organizationally Unique Identifier (OUI)、4 番めと 5 番めのオクテット (16 ビット) が FFFE の固定 16 進数値、そして、最後の 3 オクテット (24 ビット) が MAC アドレスの最後の 3 オクテットです。最初のオクテットの 7 番めのビットである Universal/Local (U/L) ビットの値は 0 または 1 です。ゼロはローカルに管理されている ID を表し、1 はグローバルに一意の IPv6 インターフェイス ID を表します。
- その他のすべてのインターフェイス タイプ (シリアル、ループバック、ATM、フレームリレー種別など) の場合、インターフェイス ID は IEEE 802 インターフェイス タイプのインターフェイス ID に似ていますが、ルータの MAC アドレス プールからの最初の MAC アドレスが ID として使用される点が異なります (インターフェイスが MAC アドレスを持たないため)。



- (注) PPP (ポイントツーポイントプロトコル) を使用するインターフェイスの場合は、接続の両端のインターフェイスが同じ MAC アドレスを持つため、接続の両端のインターフェイス ID が、両方の ID が一意となるまでネゴシエートされます (ランダムに選択され、必要に応じて再構築されます)。ルータの最初の MAC アドレスが、PPP を使用するインターフェイスの ID として使用されます。

ルータに IEEE 802 インターフェイス タイプがない場合は、ルータのインターフェイスでリンクローカル IPv6 アドレスが次のシーケンスで生成されます。

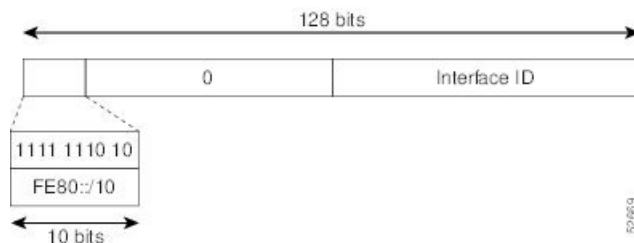
1. ルータに MAC アドレスが (ルータの MAC アドレス プールから) 照会されます。
2. 使用可能な MAC アドレスがルータにない場合は、ルータのシリアル番号を使用してリンクローカル アドレスが作成されます。
3. リンクローカルアドレスの作成にルータのシリアル番号を使用できない場合、ルータは MD5 ハッシュを使用して、ルータのホスト名からルータの MAC アドレスを決定します。

リンクローカルアドレス

リンクローカルアドレスは、リンクローカルプレフィックス FE80::/10 (1111 1110 10) と変更された EUI-64 形式のインターフェイス識別子を使用するすべてのインターフェイスを自動的に設定できる IPv6 ユニキャストアドレスです。ネイバー探索プロトコル (NDP) およびステートレス自動設定プロセスでは、リンクローカルアドレスが使用されます。ローカルリンク上のノードは、リンクローカルアドレスを使用して通信できます。ノードの通信にグローバルに一意のアドレスは不要です。次の図は、以下のリンクローカルアドレスの構造を示しています。

IPv6 ルータは、送信元または宛先がリンクローカルアドレスであるパケットを他のリンクに転送できません。

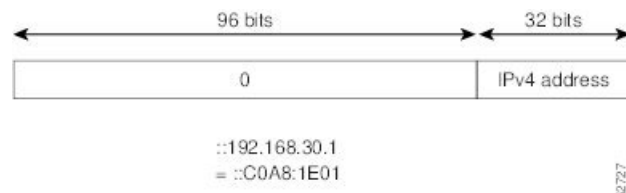
図 7: リンクローカルアドレス形式



IPv4 互換 IPv6 アドレス

IPv4 互換 IPv6 アドレスは、アドレスの上位 96 ビットがゼロであり、アドレスの下位 32 ビットが IPv4 アドレスである IPv6 ユニキャストアドレスです。IPv4 互換 IPv6 アドレスの形式は、

図 8: IPv4 互換 IPv6 アドレス形式

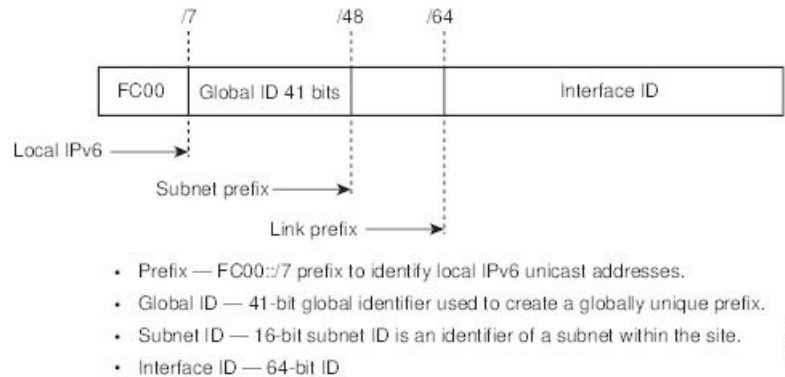


一意のローカルアドレスは、グローバルに一意であり、ローカル通信を目的とした IPv6 ユニキャストアドレスです。グローバルなインターネット上でのルーティングには対応しておらず、サイトなどの限られたエリア内だけでルーティング可能です。限られた複数のサイト間もルーティングできる場合もあります。アプリケーションは、一意のローカルアドレスをグローバル スコープのアドレスのように扱うことができます。

- ・グローバルに一意のプレフィックスを持っている（一意である可能性が大）。
- ・既知のプレフィックスがあるため、サイト境界で簡単にフィルタリングできる。
- ・アドレス競合を発生させたり、これらのプレフィックスを使用するインターフェイスのリナンバリングを必要としたりすることなく、サイトを結合またはプライベートに相互接続できる。
- ・ISP に依存せず、永続的または断続的なインターネット接続がなくてもサイト内での通信に使用できる。
- ・ルーティングやドメイン ネーム サーバ（DNS）を通して誤ってサイト外に漏れても、他のどのアドレスとも競合しない。

『Cisco Nexus 3000 シリーズ NX-OS ユニキャストルーティング構成ガイド、10.1(x)』

図 9: ユニーク ローカルアドレスの構造



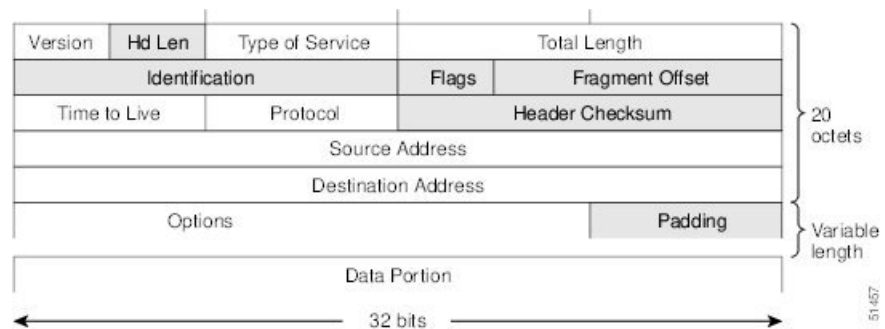
サイトローカルアドレス

RFC 3879 によりサイトローカルアドレスの使用が廃止されたため、プライベート IPv6 アドレスの構成時には、RFC 4193 で推奨されるユニーク ローカルアドレス（UCA）を使用する必要があります。

IPv4 パケット ヘッダー

基本 IPv4 パケット ヘッダーには、合計サイズが 20 オクテット（160 ビット）の 12 のフィールドがあります（以下の図を参照）。この 12 個のフィールドのあとにはオプションフィールドが、さらにそのあとに、通常はトランスポート レイヤ パケットであるデータ部分が続く場合があります。可変長のオプションフィールドは、IPv4 パケット ヘッダーの合計サイズに加算されます。IPv4 パケット ヘッダーのグレーの部分のフィールドは、IPv6 パケット ヘッダーに含まれません。

図 10: IPv4 パケット ヘッダー形式



簡易 IPv6 パケット ヘッダー

base IPv6 パケット ヘッダーには、合計サイズが 40 オクテット（320 ビット）の 8 のフィールドがあります（下の図を参照）。フラグメンテーションはパケットの送信元により処理され、データリンク層のチェックサムとトランスポート層が使用されます。ユーザ データグラム プ

ロトコル (UDP) チェックサムにより、内部パケットと基本 IPv6 パケット ヘッダーの整合性がチェックされ、オプションフィールドが 64 ビットに揃えられるため、IPv6 パケットの処理が容易になります。

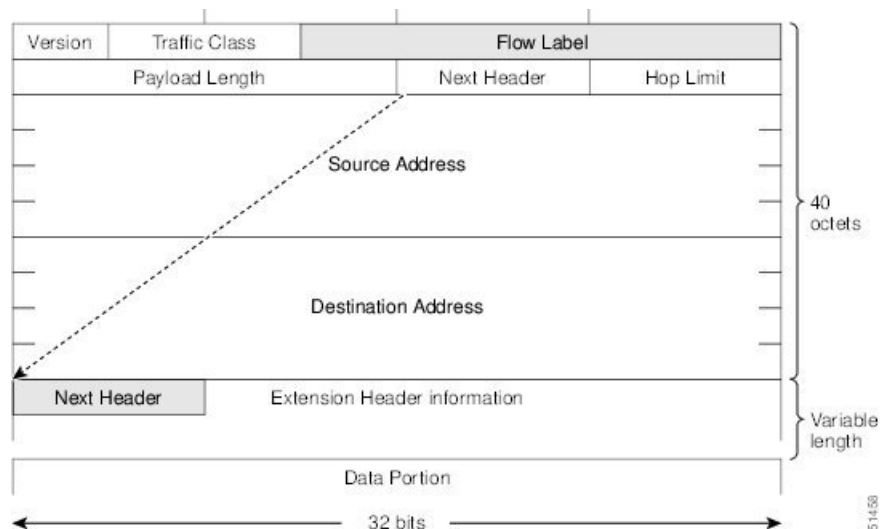
次の表に、基本 IPv6 パケット ヘッダーのフィールドをリストします。

表 6: base IPv6 パケット ヘッダー フィールド

フィールド	説明
バージョン	IPv4 パケット ヘッダーのバージョン フィールドに該当しますが、IPv4 で示される数字 4 の代わりに、IPv6 では数字 6 が示されます。
トラフィック クラス	IPv4 パケット ヘッダーのタイプ オブ サービス フィールドと同様です。トラフィック クラスフィールドは、差別化されたサービスで使用するトラフィック クラスのタグをパケットに付けます。
フロー ラベル	IPv6 パケット ヘッダーの新規フィールドです。フロー ラベルフィールドは、ネットワーク層でパケットを差別化する特定のフローのタグをパケットに付けます。
ペイロード長	IPv4 パケットヘッダーの合計長フィールドと同様です。ペイロード長フィールドは、パケットのデータ部分の合計長を示します。
次ヘッダー	IPv4 パケット ヘッダーのプロトコル フィールドと同様です。次ヘッダーフィールドの値により、基本 IPv6 ヘッダーに続く情報のタイプが決まります。基本 IPv6 ヘッダーに続く情報のタイプは、下の図に示すように、TCP パケット、UDP パケット、または拡張ヘッダーなどのトランスポート層パケットです。
ホップ リミット	IPv4 パケットヘッダーの存続可能時間フィールドと同様です。ホップリミットフィールドの値は、IPv6 パケットが無効と見なされる前に通過できるルータの最大数です。各ルータを通過するたびに、この値が 1 つずつ減少します。IPv6 ヘッダーにはチェックサムがないため、ルータは値を減らすたびにチェックサムを再計算する必要がなく、処理リソースが節約されます。
送信元アドレス	IPv4 パケット ヘッダーの送信元アドレス フィールドと同様ですが、IPv4 の 32 ビット送信元アドレスの代わりに、IPv6 では 128 ビットの送信元アドレスが含まれます。

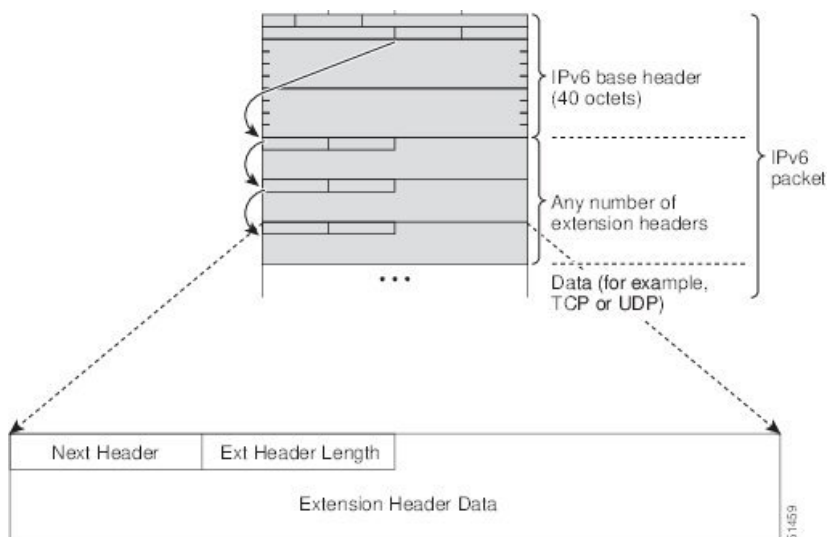
フィールド	説明
宛先アドレス	IPv4 パケット ヘッダーの宛先アドレス フィールドと同様ですが、IPv4 の 32 ビット宛先アドレスの代わりに、IPv6 では 128 ビットの宛先アドレスが含まれます。

図 11: IPv6 パケット ヘッダー形式



任意に使用できる拡張ヘッダーおよびパケットのデータ部分は、基本 IPv6 パケット ヘッダーの 8 つのフィールドのあとに続きます。存在する場合は、各拡張ヘッダーが 64 ビットに揃えられます。IPv6 パケットの拡張ヘッダーの数は固定されていません。各拡張ヘッダーは、前のヘッダーの次ヘッダー フィールドによって識別されます。通常は、最後の拡張ヘッダーに、TCP や UDP などのトランスポートレイヤプロトコルの次ヘッダー フィールドがあります。次の図は、IPv6 拡張ヘッダーの形式を示しています。

図 12: IPv6 拡張ヘッダー形式



下表に、拡張ヘッダー タイプとその次ヘッダー フィールド値をリストします。

表 7: IPv6 拡張ヘッダー タイプ

ヘッダー タイプ	次ヘッダーの値	説明
ホップバイホップ オプション	0	パケットのパス上のすべてのホップで処理されるヘッダー。存在する場合、ホップバイホップオプションヘッダーは、常に基本 IPv6 パケットヘッダーの直後に続きます。
宛先オプション	60	任意のホップバイホップオプションヘッダーのあとに続くことのあるヘッダー。このヘッダーは、最終の宛先、およびルーティングヘッダーで指定された各通過アドレスで処理されます。
ルーティング	43	送信元ルーティングに使用されるヘッダー。
フラグメント	44	送信元が、送信元と宛先の間のパスの最大伝送単位 (MTU) より大きいパケットをフラグメント化するとき使用されるヘッダー。フラグメントヘッダーは、フラグメント化された各パケットで使用されます。
認証	51	パケットのコネクションレス型整合性およびデータ発信元認証を提供するために使用されるヘッダー。
Encapsulation Security Payload	50	このヘッダーに続くすべての情報は暗号化されます。
モビリティ	135	モバイル IPv6 サービスのサポートで使用されるヘッダー。
ホスト識別プロトコル	139	Host Identity Protocol バージョン 2 (HIPv2) に使用されるヘッダー。IP マルチホーミングとモバイルコンピューティングをセキュアな方法で実現できるようにします。
シム 6	140	IP マルチホーミングに使用されるヘッダー。これにより、ホストを複数のネットワークに接続できます。
上位レイヤ ヘッダー	6 (TCP) 17 (UDP)	データ転送のためにパケット内で使用されるヘッダー。2 つの主要なトランスポート プロトコルは TCP と UDP です。



- サポート対象外：ホップバイホップ オプション (0)、カプセル化セキュリティ ペイロード (50)、認証ヘッダー (51)、および試験的ヘッダー (253 および 254)。



ジの到着によってパス MTU が削減されると、Cisco NX-OS はその低い値を保持します。この接続では、スループットを測定するためにセグメントサイズが増加することはありません。



(注) IPv6 では、最小リンク MTU は 1280 オクテットです。IPv6 リンクには、1500 オクテットの MTU 値の使用を推奨します。

CDP IPv6 アドレスのサポート

ネイバー情報機能用の Cisco Discovery Protocol (CDP) IPv6 アドレスのサポートを使用して、2 台のシスコ デバイス間で IPv6 アドレス指定情報を転送できます。IPv6 アドレス向け Cisco Discovery Protocol サポートは、ネットワーク管理製品およびトラブルシューティングツールに IPv6 情報を提供します。

IPv6 の ICMP

IPv6 の ICMP を使用して、ネットワークのヘルスの情報について説明します。IPv6 で動作する ICMPv6 は、パケットを正しく処理できない場合にエラーを報告し、ネットワークのステータスに関する情報メッセージを送信します。たとえば、パケットが大きすぎて別のネットワークに送信できないためにルータがパケットを転送できない場合、ルータは発信元ホストに ICMPv6 メッセージを送信します。さらに、IPv6 の ICMP パケットは IPv6 ネイバー探索およびパス MTU ディスカバリに使用されます。パス MTU ディスカバリ プロセスでは、特定のルートでサポートされる最大サイズを使用してパケットが送信されます。

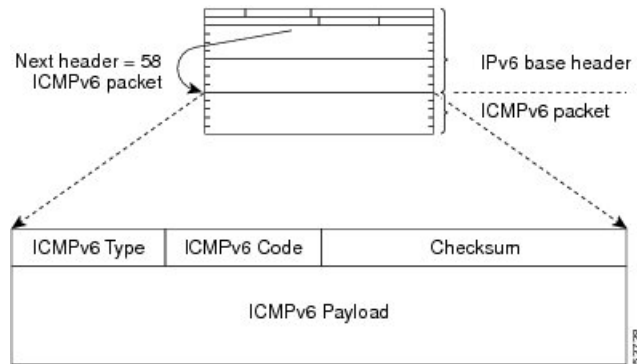
基本 IPv6 パケットヘッダーの次ヘッダーフィールドの値が 58 の場合は、IPv6 ICMP パケットであることを意味します。ICMP パケットは、すべての拡張ヘッダーの後に続き、IPv6 パケットの最後の情報です。IPv6 ICMP パケット内の [ICMPv6 タイプ (ICMPv6 Type)] フィールドと [ICMPv6 コード (ICMPv6 Code)] フィールドは、ICMP メッセージタイプなどの IPv6 ICMP パケットの詳細を識別します。[チェックサム (Checksum)] フィールドの値は、送信側で計算され、IPv6 ICMP パケットと IPv6 疑似ヘッダーのフィールドから受信者によって確認されます。



(注) IPv6 ヘッダーにはチェックサムがありません。ただし、トランスポート層上のチェックサムにより、パケットが正しく配信されていないかどうかを判定できます。計算に IP アドレスを含むすべてのチェックサム計算は、新しい 128 ビット アドレスに対応するように IPv6 用に変更する必要があります。チェックサムは、疑似ヘッダーを使用して生成されます。

ICMPv6 ペイロードフィールドには、IP パケット処理に関連するエラー情報または診断情報が含まれます。次の図は、IPv6 ICMP パケットヘッダーの形式を示しています。

図 13: IPv6 ICMP パケット ヘッダーの形式



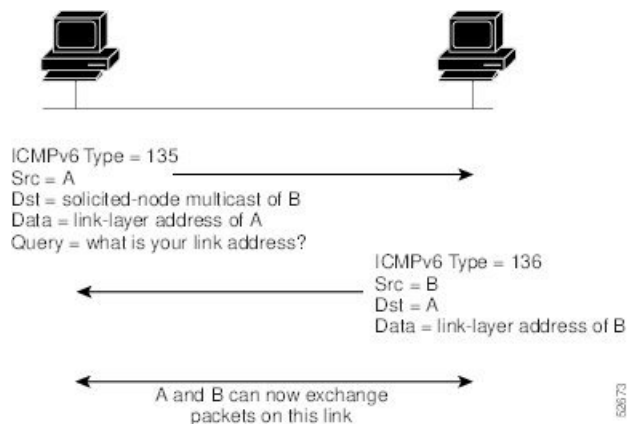
IPv6 ネイバー探索

IPv6 ネイバー探索プロトコル（NDP）を使用して、ネイバー ルータが到達可能かどうかを判断できます。IPv6 ノードは、ネイバー探索を使用して、同じネットワーク（ローカルリンク）上のノードのアドレスを決定し、パケットを転送できるネイバー ルータを見つけ、ネイバー ルータが到達可能かどうかを確認し、リンク層アドレスの変更を検出します。NDP は、ICMP メッセージを使用して、到達不能な隣接ルータにパケットが送信されたかどうかを検出します。

IPv6 ネイバー送信要求メッセージ

ノードは、同じローカル リンク上の別のノードのリンク層アドレスを決定するときに、ICMP パケット ヘッダーのタイプ フィールドの値が 135 であるネイバー送信要求メッセージをローカルリンクで送信します（下記の図を参照）。送信元アドレスは、ネイバー送信要求メッセージを送信するノードの IPv6 アドレスです。宛先アドレスは、宛先ノードの IPv6 アドレスに対応する送信要求ノードマルチキャストアドレスです。ネイバー送信要求メッセージには、送信元ノードのリンク層アドレスも含まれます。

図 14: IPv6 ネイバー探索 - ネイバー送信要求メッセージ



ネイバー送信要求メッセージを受信した後に、宛先ノードは、ICMP パケットヘッダーのタイプフィールドに値 136 を含むネイバー アドバタイズメント メッセージをローカルリンクに送信することで応答します。送信元アドレスは、ネイバー アドバタイズメント メッセージを送信するノードの IPv6 アドレス（ノードインターフェイスの IPv6 アドレス）です。宛先アドレスは、ネイバー送信要求メッセージを送信するノードの IPv6 アドレスです。データ部分には、ネイバーアドバタイズメントメッセージを送信するノードのリンク層アドレスが含まれます。

送信元ノードがネイバーアドバタイズメントを受信すると、送信元ノードと宛先ノードが通信できるようになります。

ネイバー送信要求メッセージは、ノードがネイバーのリンク層アドレスを識別した後に、ネイバーの到達可能性を確認できます。ノードがあるネイバーの到達可能性を検証する場合、そのネイバーのユニキャストアドレスとして、ネイバー送信要求メッセージ内の宛先アドレスを使用します。

ネイバー アドバタイズメント メッセージは、ローカルリンク上のノードのリンク層アドレスが変更されたときにも送信されます。変更があった場合、ネイバーアドバタイズメントの宛先アドレスは全ノードマルチキャストアドレスになります。

ネイバー到達不能検出では、ネイバーの障害またはネイバーへの転送パスの障害が識別されます。この検出は、ホストとネイバーノード（ホストまたはルータ）間のすべてのパスで使用されます。ネイバー到達不能検出は、ユニキャストパケットだけが送信されるネイバーに対して実行され、マルチキャストパケットが送信されるネイバーに対しては実行されません。

ネイバーは、（以前にネイバーに送信されたパケットが受信され、処理されたことを示す）肯定確認応答がネイバーから返された場合に、到達可能と見なされます。肯定確認応答（TCP などの上位層プロトコルからの）は、接続が順調に進んでいる（宛先に到達しつつある）ことを示します。パケットがピアに到達している場合、それらのパケットは送信元のネクストホップネイバーにも到達しています。転送の進行により、ネクストホップネイバーが到達可能であることも確認されます。

ローカルリンク上にない宛先の場合、転送の進行は、ファーストホップルータが到達可能であることを暗に意味します。上位層プロトコルからの確認応答がない場合、ノードは、ユニキャストネイバー送信要求メッセージを使用してネイバーを探し、転送パスがまだ機能していることを確認します。ネイバーから返信された請求ネイバー アドバタイズメント メッセージは、転送パスがまだ機能しているという肯定確認応答です（請求フラグが値 1 に設定されたネイバー アドバタイズメント メッセージは、ネイバー請求メッセージへの返信としてだけ送信されます）。非送信要求メッセージでは、送信元ノードから宛先ノードへの一方向パスだけが確認されます。送信要求ネイバー アドバタイズメント メッセージは、両方向のパスが機能していることを示します。



(注) 送信要求フラグが値 0 に設定されたネイバー アドバタイズメント メッセージは、転送パスがまだ機能していることを示す肯定確認応答とは見なされません。

ネイバー送信要求メッセージは、ユニキャスト IPv6 アドレスがインターフェイスに割り当てられる前にそのアドレスが一意であることを確認するために、ステートレス自動設定プロセスでも使用されます。新規のリンクローカル IPv6 アドレスに対しては、アドレスがインターフェ

イスに割り当てられる前に、最初に重複アドレス検出が実行されます（重複アドレス検出の実行中、新規アドレスは一時的な状態のままです）。ノードは未指定の送信元アドレスと一時的なリンクローカルアドレスをメッセージの本文に含むネイバー送信要求メッセージを送信します。そのアドレスが別のノードですでに使用されている場合、ノードは一時的なリンクローカルアドレスを含むネイバー アドバタイズメント メッセージを返します。別のノードが同じアドレスの一意性を同時に検証している場合は、そのノードもネイバー送信要求メッセージを返します。ネイバー送信要求メッセージの返信としてネイバー アドバタイズメント メッセージが受信されず、同じ一時アドレスの検証を試行している他のノードからのネイバー送信要求メッセージも受信されない場合、最初のネイバー送信要求メッセージを送信したノードは、一時的なリンクローカルアドレスを一意であると見なし、そのアドレスをインターフェイスに割り当てます。

IPv6 ステートレス自動設定

IPv6 ノードのすべてのインターフェイスは、インターフェイスの ID およびリンクローカルプレフィックス FE80::/10 から自動的に設定されるリンクローカルアドレスを持つ必要があります。リンクローカルアドレスを使用すると、ノードがリンク上の他のノードと通信できます。また、リンクローカルアドレスを使用して、ノードをさらに設定することもできます。

IPv6 ステートレス アドレス自動構成（SLAAC）は、管理インターフェイスでのみ実行されます。たとえば、SLAAC が管理インターフェイスで有効になっている場合、リンクローカルアドレス（LLA）が生成され、リンクローカルアドレスに対して重複アドレス検出（DAD）が実行されます。重複アドレス検出プロセスが成功すると、インターフェイスは ICMPv6 ルータ要請（RS）パケットを送信します。RS パケットを受信するアップストリームルータは、ICMPv6 ルータアドバタイズメント（RA）で応答します。RA パケットには、インターフェイスの MAC 情報と RA パケット内のアドバタイズされたプレフィックスを使用して、ダウンストリーム NX-OS スイッチがアドレスを自動生成するサブネットを伝送するプレフィックス TLV オプションがあります。Cisco NX-OS スイッチは、EUI-64 形式でアドレスを自動生成し、新しい自動生成されたアドレスで DAD を実行します。

IPv6 アドレスは、特定の時間だけインターフェイスに割り当てられます。各アドレスには、アドレスがインターフェイスに接続されている期間を示すライフタイムがあります。アップストリームルータから送信される RA パケットの TLV プレフィックスには、有効なライフタイムと優先ライフタイムに関する情報が含まれています。インターフェイスに割り当てられたアドレスは、2 つの異なるフェーズを通過します。最初は、アドレスは優先状態になります。これは、アドレスが任意の通信での使用に制限されないことを意味します。現在のインターフェイスバインディングが無効になると、アドレスは廃止状態になります。廃止状態では、アドレスの使用は推奨されません。必ずしも禁止されているわけではありません。サービスを中断せずに別のアドレスに切り替えることが困難なアプリケーションのみが、廃止されたアドレスを使用する必要があります。

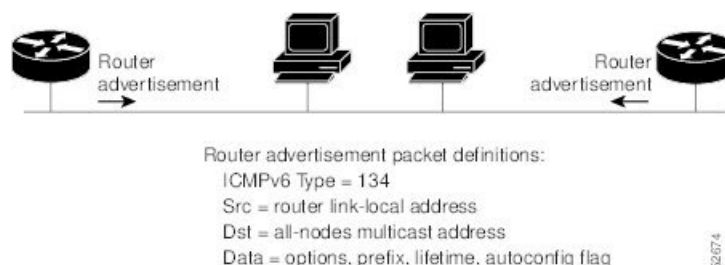
IPv6 ルータ アドバタイズメント メッセージ

ルータ アドバタイズメント（RA）メッセージは、ICMP パケットヘッダーのタイプフィールドが値 134 であり、IPv6 ルータの構成済みの各インターフェイスへ定期的送信されます。ス

ステートレス自動構成が正しく機能するには、RA メッセージでアドバタイズされたプレフィックス長が常に 64 ビットである必要があります。

RA メッセージは、全ノード マルチキャスト アドレスに送信されます（以下の図を参照）。

図 15: IPv6 ネイバー検出 : RA メッセージ



RA メッセージは、全ノード マルチキャスト アドレスに送信されます。

RA メッセージには、通常次の情報が含まれています。

- ローカル リンク上のノードがその IPv6 アドレスの自動設定に使用できる 1 つ以上のオン リンク IPv6 プレフィックス
- アドバタイズメントに含まれる各プレフィックスのライフタイム情報
- 完成可能な自動設定のタイプ（ステートレスまたはステートフル）を示すフラグのセット
- デフォルト ルータ情報（アドバタイズメントを送信しているルータをデフォルト ルータとして使用する必要があるかどうか、および、その場合は、ルータがデフォルトルータとして使用される秒単位の時間）
- ホストが発信するパケットで使用する必要のあるホップ リミットや MTU など、ホストに関する詳細情報

RA は、ルータ送信要求メッセージへの応答としても送信されます。ICMP パケット ヘッダーのタイプフィールドの値が 133 であるルータ送信要求メッセージは、システム始動時にホストによって送信されるため、ホストは次のスケジュールされた RA メッセージを待機することなくすぐに自動設定できます。通常、送信元アドレスは未指定の IPv6 アドレス（0:0:0:0:0:0:0:0）です。ホストに設定済みのユニキャストアドレスがある場合、ルータ送信要求メッセージを送信するインターフェイスのユニキャストアドレスが、メッセージ内の送信元アドレスとして使用されます。宛先アドレスは、リンク範囲の全ルータ マルチキャスト アドレス。ルータ送信要求に応答して RA が送信される場合、RA メッセージ内の宛先アドレスはルータ送信要求メッセージの送信元のユニキャスト アドレスです。

次の RA メッセージ パラメータを構成できます。

- RA メッセージの定期的な時間間隔
- （特定のリンク上のすべてのノードで使用される）デフォルトルータとしてのルータの実用性を示す「ルータ ライフタイム」値
- 特定のリンクで使用されているネットワーク プレフィックス

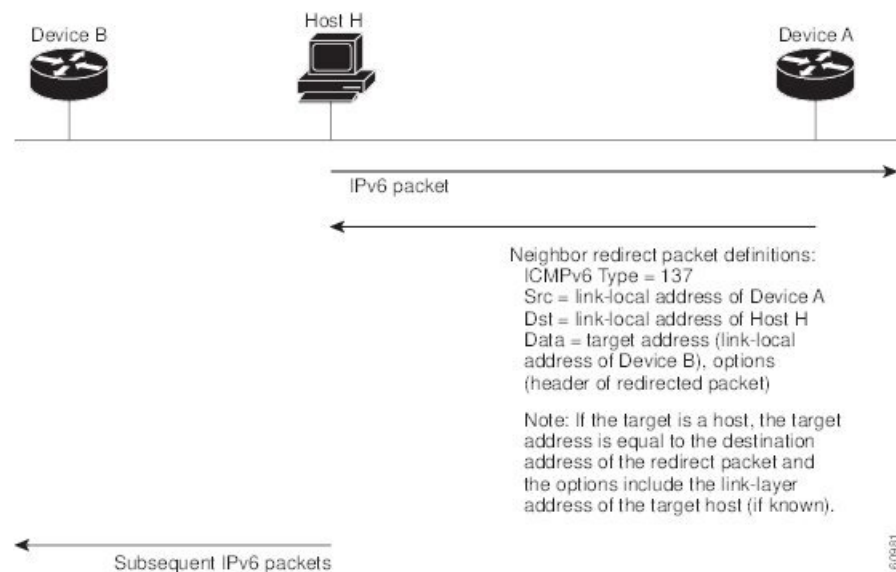
- (特定のリンクで) ネイバー送信要求メッセージが再送信される時間の間隔
- ノードによってネイバーが到達可能である (特定のリンク上のすべてのノードで使用できる) と見なされるまでの時間

設定されたパラメータはインターフェイスに固有です。RA メッセージ (デフォルト値を含む) の送信は、イーサネットとインターフェイス上では自動的にイネーブルになります。他のインターフェイスタイプの場合は、**no ipv6 nd suppress-ra** コマンドを入力して RA メッセージを送信する必要があります。個々のインターフェイスでは、**ipv6 nd suppress-ra** コマンドを入力して、RA メッセージ機能を無効にできます。

IPv6 ネイバー リダイレクト メッセージ

ルータは、ネイバーリダイレクトメッセージを送信して、宛先へのパス上のより適切なファーストホップノードをホストに通知します。ICMP パケット ヘッダーのタイプフィールドの値 137 は、IPv6 ネイバー リダイレクト メッセージを示します。

図 16: IPv6 ネイバー探索 : ネイバー リダイレクト メッセージ



- (注) リダイレクトメッセージ内のターゲットアドレス (最終的な宛先) によって隣接ルータのリンクローカルアドレスが確実に識別されるように、ルータは各隣接ルータのリンクローカルアドレスを判断する必要があります。静的ルーティングの場合は、ルータのリンクローカルアドレスを使用してネクストホップルータのアドレスを指定する必要があります。動的ルーティングの場合、隣接ルータのリンクローカルアドレスを交換するように、すべてのIPv6ルーティングプロトコルを構成する必要があります。

パケットの転送後に、次の条件が満たされる場合、ルータはパケットの送信元にリダイレクトメッセージを送信します。

- パケットの宛先アドレスがマルチキャスト アドレスではない。
- パケットがルータにアドレッシングされていなかった。
- パケットが、そのパケットを受信したインターフェイスから送信されようとしている。
- ルータが、パケットにより適したファーストホップ ノードはパケットの送信元と同じリンク上にあると判断した。
- パケットの送信元アドレスが、同じリンク上のネイバーのグローバル IPv6 アドレス、またはリンクローカルアドレスである。

仮想化のサポート

IPv6 は、仮想ルーティング/転送 (VRF) インスタンスをサポートします。

ECMP を使用した IPv6 ルート

ルートのすべてのネクストホップが収集、ドロップ、またはパントの場合、すべてのネクストホップはマルチパス ハードウェア テーブルにそのままプログラムされます。

ルートの一部のネクストホップがグリーンング、ドロップ、またはパントであり、残りのネクストホップがそうでない場合、非グリーンング、ドロップ、またはパントのネクストホップのみがマルチパス ハードウェア テーブルにプログラムされます。

ECMP ルートの特定のネクストホップが解決されると (ARP/IPV6ND が解決されると)、それに応じてマルチパス ハードウェア テーブルが更新されます。

IPv6の前提条件

IPv6 には、次の前提条件があります。

- IPv6 アドレッシング、IPv6 ヘッダー情報、ICMPv6、IPv6 Neighbor Discovery (ND) プロトコルなど、IPv6 の基本を理解している必要があります。
- デバイスをデュアルスタック デバイス (IPv4/IPv6) にする場合は、必ずメモリ/処理の注意事項に従ってください。

IPv6 の注意事項および制約事項

IPv6 設定時の注意事項および制約事項は、次のとおりです。

- スイッチは、IPv6 フレームを転送する前にレイヤ 3 パケット情報を確認しないため、IPv6 パケットは、レイヤ 2 LAN スイッチに対して透過的です。IPv6 ホストは、レイヤ 2 LAN スイッチに直接接続できます。

- インターフェイスの同じプレフィックス内に複数の IPv6 グローバル アドレスを設定できます。ただし、1つのインターフェイス上での複数の IPv6 リンクローカル アドレスはサポートされません。
- RFC 3879 によりサイトローカルアドレスの使用が廃止されたため、RFC 4193 のユニークローカルアドレス（UCA）の推奨に従って、プライベート IPv6 アドレスを設定する必要があります。

デフォルト設定

次の表に、IPv6 パラメータのデフォルト設定を示します。

表 9: デフォルト IPv6 パラメータ

パラメータ	デフォルト
ND reachable time	0ミリ秒
ネイバー要求再送信間隔	1000 ミリ秒

IPv6 の設定



(注) Cisco IOS の CLI に慣れている場合、この機能に対応する Cisco NX-OS コマンドは通常使用する Cisco IOS コマンドと異なる場合がありますので注意してください。

IPv6 アドレッシングの設定

インターフェイスの IPv6 アドレスを設定して、インターフェイスが IPv6 トラフィックを転送できるようにします。インターフェイスでグローバル IPv6 アドレスを設定すると、リンクローカルアドレスが自動的に設定され、そのインターフェイスで IPv6 が有効となります。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 2	interface ethernet number 例 : <pre>switch(config)# interface ethernet 2/3 switch(config-if)#</pre>	インターフェイス設定モードを開始します。
ステップ 3	ipv6 address {address [eui64] [route-preference preference] [secondary] [tag tag-id] or ipv6 address ipv6-address use-link-local-only} 例 : <pre>switch(config-if)# ipv6 address 2001:0DB8::1/10</pre> または <pre>switch(config-if)# ipv6 address use-link-local-only</pre>	インターフェイスに割り当てられている IPv6 アドレスを指定し、そのインターフェイスで IPv6 処理をイネーブルにします。 ipv6 address コマンドを入力すると、IPv6 アドレスの下位 64 ビットにインターフェイス ID を含むグローバル IPv6 アドレスが設定されます。指定する必要があるのはアドレスの 64 ビット ネットワーク プレフィックスだけです。最後の 64 ビットはインターフェイス ID から自動的に計算されます。 ipv6 address use-link-local-only を入力します。コマンドを入力すると、インターフェイスのリンクローカルアドレスが設定されます。このアドレスは、IPv6 がインターフェイスでイネーブルになっているときに自動的に設定されるリンクローカルアドレスの代わりに使用されます。 このコマンドは、IPv6 アドレスを設定せずに、インターフェイス上で IPv6 処理をイネーブルにします。
ステップ 4	(任意) show ipv6 interface 例 : <pre>switch(config-if)# show ipv6 interface</pre>	IPv6 用に設定されたインターフェイスを表示します。
ステップ 5	(任意) copy running-config startup-config 例 : <pre>switch(config-if)# copy running-config startup-config</pre>	この設定変更を保存します。

例

次に、IPv6 アドレスを設定する例を示します。

```

switch# configure terminal
switch(config)# interface ethernet 3/1
switch(config-if)# ipv6 address ?
A:B::C:D/LEN IPv6 prefix format: xxxx:xxxx/ml, xxxx:xxxx::/ml,
xxxx:xx/128
use-link-local-only Enable IPv6 on interface using only a single link-local
address
switch(config-if)# ipv6 address 2001:db8::/64 eui64

```

次に、IPv6 インターフェイスを表示する例を示します。

```

switch(config-if)# show ipv6 interface ethernet 3/1
Ethernet3/1, Interface status: protocol-down/link-down/admin-down, iod: 36
IPv6 address: 2001:db8:0000:0000:0218:baff:fed8:239d
IPv6 subnet: 2001:db8::/64
IPv6 link-local address: fe80::0218:baff:fed8:239d (default)
IPv6 multicast routing: disabled
IPv6 multicast groups locally joined:
    ff02::0001:ffd8:239d ff02::0002 ff02::0001 ff02::0001:ffd8:239d
IPv6 multicast (S,G) entries joined: none
IPv6 MTU: 1500 (using link MTU)
IPv6 RP inbound packet-filtering policy: none
IPv6 RP outbound packet-filtering policy: none
IPv6 inbound packet-filtering policy: none
IPv6 outbound packet-filtering policy: none
IPv6 interface statistics last reset: never
IPv6 interface RP-traffic statistics: (forwarded/originated/consumed)
    Unicast packets: 0/0/0
    Unicast bytes: 0/0/0
    Multicast packets: 0/0/0
    Multicast bytes: 0/0/0

```

システム ルーティング モードの構成

デフォルトでは、デバイスは階層方式で（モード 4 になるように構成されたファブリック モジュールとモード 3 になるように構成されたライン カード モジュールで）ルートをプログラミングし、デバイス上での最長プレフィクス照合（LPM）とホスト スケールが可能になります。

デフォルトの LPM およびホスト スケールを変更してシステム内のホストをさらにプログラミングできます。これは、ノードをレイヤ 2～レイヤ 3 の境界ノードとして位置付けるときに必要な場合があります。

構成済みのシステムルーティングモードを適用するには、**reload** コマンドを使用してスイッチをリロードする必要があります。**fast-reload** コマンドを使用して、構成済みのシステム ルーティングモードを適用することはできません。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	グローバル設定モードを開始します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 2	[no] system routing max-mode host l3 例 : switch(config)# system routing max-mode l3 host	アルゴリズム最長プレフィックス一致 (ALPM) モードを有効にします。 ALPM モードが有効になっている場合は、IPv6 ルートの LPM テーブルを分割できます。 このコマンドの no 形式を使用すると、ALPM が無効になります。
ステップ 3	copy running-config startup-config 例 : switch(config)# copy running-config startup-config	この設定変更を保存します。
ステップ 4	reload 例 : switch(config)# reload	デバイス全体をリブートします。
ステップ 5	(任意) show hardware profile status 例 : switch(config)# show hardware profile status	更新された LPM ルート数と LPM モードを表示します。
ステップ 6	show running-config 例 : switch(config)# show running-config	適用された構成を表示します。

例

次に、システム ルーティング モードを構成し、ALPM を有効にする例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# system routing max-mode l3
switch(config)# copy running-config startup-config
[#####] 100%
Copy complete, now saving to disk (please wait)...
switch(config)# reload
WARNING: This command will reboot the system
Do you want to continue? (y/n) [n] y
switch(config)# show hardware profile status
Total LPM Entries = 65023.
Total Host Entries = 16384.
Reserved LPM Entries = 1024.
Max Host4/Host6 Limit Entries (shared)= 8192/4096*
Max Mcast Limit Entries = 4096.
Max Ucast IPv6 LPM Limit Entries = 20479.
Max Ucast IPv6 LPM 65 to 127 Limit Entries = 0.
Used LPM Entries (Total) = 55.
Used IPv4 LPM Entries = 27.
Used IPv6 LPM Entries = 28.
```

```

Used IPv6 LPM_65_to_127 Entries = 0.
Used Host Entries in LPM (Total) = 2.
Used Host4 Entries in LPM = 2.
Used Host6 Entries in LPM = 0.
Used Mcast Entries = 0.
Used Mcast OIFL Entries = 2.
Used Host Entries in Host (Total) = 152.
Used Host4 Entries in Host = 102.
Used Host6 Entries in Host = 50.
Max ECMP Table Entries = 256.
Used ECMP Table Entries = 0.
MFIB prefer-source-tree = Disabled/0/0.

*Unicast LPM Table is in ALPM mode shared b/n v4 & v6...
*Unicast Host Table is in shared mode b/n v4 & v6...

```

ALPM の構成

64 ビットアルゴリズム最長プレフィックス一致（ALPM）機能を使用して、IPv4 および IPv6 ルートテーブルエントリを管理できます。ALPM モードでは、デバイスに保存できるルートエントリの数が増加します。IPv6 ALPM カービングを使用しない場合は、次のようにルートをプログラムできます。

URPFステータス	IPv4 + IPv6-64 (/0-64)
無効化	最大 131071 (IPv4) または最大 81919 (IPv6/64)
有効 (Enabled)	最大 65535 IPv4 または最大 20479 IPv6/64



(注) このモードでは、IPv6-128(/65-/127) ルートはサポートされていません。

IPv6 ALPM カービングを使用すると、次のようにルートをプログラムできます。

表 10:

ipv6_alpm_carve_value	IPv4 (非 URPF) / (URPF)	IPv6-64(/0-64) + IPv6-128(/65-127)
1028	98303/非サポート	5119/サポート対象外
2048	65535/32767	10239/2047
3072	32767/非サポート	12767/非サポート

/65-127b ルートを含むすべての IPv6 ルートは、同じテーブルを共有します。IPv4 ルートには専用メモリがあります。



- (注) ALPM モードでは、16 ウェイ ECMP で最大 40K IPv4 + 40K IPv6 のみが ECMP ルートでサポートされます。

LPM テーブルを分割した後、分割されたスペースは、/0 と /127 の間のマスクを持つすべての IPv6 ルートに使用されます。残りのスペースは、IPv4 ルートにのみ使用されます。

明示的な IPv6 カービングを使用しない場合、システムは /0 と /64 の間のマスクを持つ IPv6 ルートをサポートします。



- (注) 構成したカービング値を適用するには、**reload** コマンドを使用してスイッチをリロードする必要があります。**fast-reload** コマンドを使用して、構成済みのカービング値を適用することはできません。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例： <code>switch# configure terminal</code> <code>switch(config)#</code>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	[no] hardware profile ipv6 alpm carve-value ipv6_alpm_carve_value 例： <code>switch(config)# hardware profile ipv6 alpm 2048</code>	/128 IPv6 ルートを有効にし、すべての IPv6 エントリの LPM テーブルを分割します。
ステップ 3	copy running-config startup-config 例： <code>switch(config)# copy running-config startup-config</code>	この設定変更を保存します。
ステップ 4	reload 例： <code>switch(config)# reload</code>	デバイス全体をリブートします。
ステップ 5	(任意) show hardware profile status 例： <code>switch(config)# show hardware profile status</code>	更新された LPM ルート数と LPM モードを表示します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 6	show running-config 例 : switch(config)# show running-config	適用された構成を表示します。

例



(注) urpf が有効になっている場合、分割値 1024 と 3072 はサポートされません。

次の例は、LPM テーブル カービングの構成方法を示しています。

```
switch# configure terminal
switch(config)# hardware profile ipv6 alpm carve-value 2048
Warning: Please copy running-config to startup-config and reload the switch to apply
changes
switch(config)# copy running-config startup-config
[#####] 100%
Copy complete, now saving to disk (please wait)...
switch(config)# reload
WARNING: This command will reboot the system
Do you want to continue? (y/n) [n] y
switch(config)# show hardware profile status
Max Ucast IPv4 LPM Limit Entries = 65535.
Total Host Entries = 16384.
Reserved LPM Entries = 1024.
Max Host4/Host6 Limit Entries (shared)= 8192/4096*
Max Mcast Limit Entries = 4096.
Max Ucast IPv6 LPM Limit Entries = 10239.
Used IPv4 LPM Entries = 65533.
Used IPv6 LPM Entries = 10239.
Used Host Entries in LPM (Total) = 2.
Used Host4 Entries in LPM = 2.
Used Host6 Entries in LPM = 0.
Used Mcast Entries = 0.
Used Mcast OIFL Entries = 2.
Used Host Entries in Host (Total) = 21.
Used Host4 Entries in Host = 19.
Used Host6 Entries in Host = 2.
Max ECMP Table Entries = 256.
Used ECMP Table Entries = 0.
MFIB prefer-source-tree = Disabled/0/0.

*Unicast LPM Table is in ALPM mode with ipv6 carving...
*IPv6 LPM and LPM_65_TO_127 tables are in shared mode...
*Unicast Host Table is in shared mode b/n v4 & v6...
```

IPv6 ネイバー探索の構成

ルータで IPv6 ネイバー探索を構成できます。NDP は、IPv6 ノードとルータを有効にして、同じリンク上のネイバーのリンク層アドレスを特定し、隣接ルータを見つけ、ネイバーの動向を把握します。

始める前に

最初にインターフェイスで IPv6 を有効にする必要があります。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	interface ethernet number 例 : <pre>switch(config)# interface ethernet 2/3 switch(config-if)#</pre>	インターフェイス設定モードを開始します。
ステップ 3	ipv6 nd [hop-limit hop-limit managed-config-flag mtu mtu ns-interval interval other-config-flag prefix ra-interval interval ra-lifetime lifetime reachable-time time redirects retrans-timer time suppress-ra] 例 : <pre>switch(config-if)# ipv6 nd prefix</pre>	インターフェイスに割り当てられている IPv6 アドレスを指定し、そのインターフェイスで IPv6 処理をイネーブルにします。 • hop-limit : IPv6 ネイバー検出パケットでホップリミットをアドバタイズします。値の範囲は 0 ～ 255 です。 • managed-config-flag : ステートフルアドレス自動構成を使用してアドレス情報を取得するために、ICMPv6 ルータ アドバタイズメントメッセージ内でアドバタイズします。 • mtu : このリンク上で ICMPv6 ルータ アドバタイズメントメッセージで最大伝送単位 (MTU) をアドバタイズします。範囲は 1280 ～ 65535 バイトです。 • ns-interval : IPv6 ネイバー送信要求メッセージ間の再送信間隔を構成します。範囲は 1000 ～ 3600000 ミリ秒です。 • other-config-flag : ICMPv6 ルータ アドバタイズメントメッセージで、ホストがアドレス以外の関連情報を

	コマンドまたはアクション	目的
		取得するためにステートフル自動構成を使用することを示します。 • prefix : ルータ アドバタイズメント メッセージで IPv6 プレフィックスをアドバタイズします。 • ra-interval : ICMPv6 ルータ アドバタイズメント メッセージの送信間の間隔を構成します。範囲は 4 ～ 1800 秒です。 • ra-lifetime : ICMPv6 ルータ アドバタイズメントメッセージで、デフォルトルータのライフタイムをアドバタイズします。範囲は 0 ～ 9000 秒です。 • reachable-time time : ICMPv6 ルータ アドバタイズメント メッセージで、ノードが到達可能性確認を受信したあとにネイバーをアップしていると見なした時間をアドバタイズします。範囲は 0 ～ 9000 秒です。 • redirects : ICMPv6 リダイレクト メッセージの送信を有効にします。 (注) IPv6 リダイレクトを無効にする場合は、一部の IPv6 パケットが CPU にリークされる可能性があるため、IPv4 リダイレクトも無効にする必要があります。 • retrans-timer : time : ICMPv6 ルータ アドバタイズメント メッセージで、ネイバー送信要求メッセージ間の時間をアドバタイズします。範囲は 0 ～ 9000 秒です。 • suppress-ra : ICMPv6 ルータ アドバタイズメント メッセージの送信を無効にします。
ステップ 4	(任意) show ip nd interface 例 :	IPv6 ネイバー検出に構成されたインターフェイスを表示します。

	コマンドまたはアクション	目的
	switch(config-if)# show ip interface	
ステップ 5	(任意) copy running-config startup-config 例 : switch(config-if)# copy running-config startup-config	この設定変更を保存します。

例

次に、IPv6 ネイバー探索到達可能時間を構成する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# interface ethernet 3/1
switch(config-if)# ipv6 nd reachable-time 10
```

次に、IPv6 インターフェイスを表示する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# show ipv6 nd interface ethernet 3/1
ICMPv6 ND Interfaces for VRF "default"
Ethernet3/1, Interface status: protocol-down/link-down/admin-down
IPv6 address: 0dc3:0dc3:0000:0000:0218:baff:fed8:239d
ICMPv6 active timers:
Last Neighbor-Solicitation sent: never
Last Neighbor-Advertisement sent: never
Last Router-Advertisement sent: never
Next Router-Advertisement sent in: 0.000000
Router-Advertisement parameters:
Periodic interval: 200 to 600 seconds
Send "Managed Address Configuration" flag: false
Send "Other Stateful Configuration" flag: false
Send "Current Hop Limit" field: 64
Send "MTU" option value: 1500
Send "Router Lifetime" field: 1800 secs
Send "Reachable Time" field: 10 ms
Send "Retrans Timer" field: 0 ms
Neighbor-Solicitation parameters:
NS retransmit interval: 1000 ms
ICMPv6 error message parameters:
Send redirects: false
Send unreachable: false
```

オプションの IPv6 ネイバー探索

次のオプションの IPv6 ネイバー探索コマンドを使用できます。

表 11:

コマンド	目的
ipv6 nd hop-limit	ルータ アドバタイズメントおよびルータから発信されるすべての IPv6 パケットで使用されるホップの最大数を構成します。
ipv6 nd managed-config-flag	「managed address configuration flag」フラグは、IPv6 ルータ アドバタイズメントで設定されません。
ipv6 nd mtu	各インターフェイスにおいて送信される IPv6 パケットの最大伝送単位 (MTU) サイズを設定します。
ipv6 nd ns-interval	インターフェイスで IPv6 ネイバー再送信要求メッセージが送信される時間間隔を設定します。
ipv6 nd other-config-flag	IPv6 ルータ アドバタイズメントに「other stateful configuration」フラグを構成します。
ipv6 nd ra-interval	インターフェイスで IPv6 ルータ アドバタイズメント (RA) メッセージが送信される時間間隔を構成します。
ipv6 nd ra-lifetime	インターフェイス上の IPv6 ルータ アドバタイズメントに含まれるルータのライフタイム値を構成します。
ipv6 nd reachable-time	到達可能性確認イベントがいくつか発生した後、リモート IPv6 ノードが到達可能と見なされる時間を構成します。
ipv6 nd redirects	ICMPv6 リダイレクトメッセージの送信を有効にします。
ipv6 nd retrans-timer	ルータ アドバタイズメントのネイバー送信要求メッセージ間のアドバタイズ時間を構成します。
ipv6 nd suppress-ra	LAN インターフェイス上で IPv6 ルータ アドバタイズメントの送信を抑制します。

IPv6 パケット検証の構成

Cisco NX-OS は、IPv6 パケットの検証をチェックする侵入検知システム（IDS）をサポートしています。これらの IDS チェックは有効または無効にできます。

IDS チェックを有効にするには、グローバル構成モードで次のコマンドを使用します。

表 12:

hardware ip verify address {destination zero identical reserved source multicast }	IPv6 アドレスに対して次の IDS チェックを実行します。 • destination zero : 宛先 IP アドレスが :: である場合は IPv6 パケットをドロップします。 • identical : 送信元 IPv6 アドレスが宛先 IPv6 アドレスと同じである場合は IPv6 パケットをドロップします。 • reserved : IPv6 アドレスが ::1 である場合は、IPv6 パケットをドロップします。 • source multicast : 送信元 IPv6 アドレスが FF00::/8 の範囲内（マルチキャスト）である場合は IPv6 パケットをドロップします。
hardware ipv6 verify length {consistent maximum { max-frag max-tcp udp } }	IPv6 アドレスに対して次の IDS チェックを実行します。 • consistent : イーサネットフレームサイズが、IPv6 パケット長にイーサネットヘッダーを加えた値以上の場合には、IPv6 パケットをドロップします。 • maximum max-frag : 計算式（IPv6 ペイロード長 - IPv6 拡張ヘッダー バイト数） + （フラグメント オフセット * 8）の値が 65536 より大きい場合には、IPv6 パケットをドロップします。 • maximum max-tcp : TCP 長が IP ペイロード長より長い場合は、IP パケットをドロップします。 • maximum udp : IPv6 ペイロード長が UDP パケット長を下回る場合には、IPv6 パケットをドロップします。

hardware ipv6 verify tcp tiny-frag	IPv6 フラグメント オフセットが 1 の場合、または IPv6 フラグメント オフセットが 0 で IP ペイロード長が 16 未満の場合、TCP パケットをドロップします。
hardware ipv6 verify version	EtherType が 6 (IPv6) に設定されていない場合、IPv6 パケットをドロップします。

IPv6 パケット検証の構成を表示するには、show hardware forwarding ip verify コマンドを使用します。

IPv6 ステートレス自動構成の定義

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : Device# configure terminal	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	interface management number 例 : switch(config)# interface mgmt0	インターフェイスのタイプと番号を指定し、デバイスをインターフェイス コンフィギュレーション モードにします。
ステップ 3	ipv6 address autoconfig 例 : switch(config-if)# ipv6 address autoconfig	管理インターフェイスでステートレス自動構成を使用して、IPv6 アドレスの自動構成を有効にします。
ステップ 4	ipv6 address autoconfig default 例 : switch(config-if)# ipv6 address autoconfig default	管理インターフェイスでステートレス自動構成を使用して IPv6 アドレスの自動構成を有効にし、ルータ アドバタイズメントで受信したリンクローカルアドレスのネクストホップを持つデフォルトルートを追加します。

例

次に、show ipv6 interface コマンドを使用して、管理インターフェイスで IPv6 アドレスが構成されていることを表示および確認する例を示します。[情報 (Information)] には、SLAAC で生成されたアドレスを含む、インターフェイスに構成されているすべての IPV6 アドレスが表示されます。また、ステートレスアドレスの自動構成がインターフェイスで有効になっているかどうかとも示します。

```
Device# show ipv6 interface mgmt 0
```

```
IPv6 Interface Status for VRF "management"(2)
mgmt0, Interface status: protocol-up/link-up/admin-up, iod: 2
IPv6 address:
1955::2f6:63ff:fe8b:c9f8/64 [VALID]
IPv6 subnet: 1955::/64
IPv6 link-local address: fe80::2f6:63ff:fe8b:c9f8 (default) [VALID]
....
Stateless autoconfig configured on the interface
```

This example shows how to use the show ipv6 route vrf management command to display the IPv6 routing table for VRF management:

```
Device# show ipv6 route vrf management
```

```
IPv6 Routing Table for VRF "management"
'*' denotes best ucast next-hop
'**' denotes best mcast next-hop
'[x/y]' denotes [preference/metric]
0::/0, ubest/mbest: 1/0
*via fe80::2f6:63ff:fe8b:c9ff, mgmt0, [2/0], 00:02:00, icmpv6
1955::/64, ubest/mbest: 1/0, attached
*via 1955::2f6:63ff:fe8b:c9f8, mgmt0, [0/0], 15:59:22, direct,
1955::2f6:63ff:fe8b:c9f8/128, ubest/mbest: 1/0, attached
*via 1955::2f6:63ff:fe8b:c9f8, mgmt0, [0/0], 15:59:22, local
```

This example shows how to use the show ipv6 nd int mgmt command to display the ICMPv6 ND interfaces for VRF management:

```
Device# show ipv6 nd int mgmt 0
```

```
ICMPv6 ND Interfaces for VRF "management"
mgmt0, Interface status: protocol-up/link-up/admin-up
IPv6 address:
1955::2f6:63ff:fe8b:c9f8/64 [VALID]
IPv6 link-local address: fe80::2f6:63ff:fe8b:c9f8 [VALID]
.....
Subnets configured via SLAAC and their states:
Prefix 1955::/64[PREFERRED] Preferred lifetime left: 6d23h Valid lifetime left: 4w1d
```

IPv6 設定の確認

IPv6 設定を表示するには、次のいずれかの作業を行います。

コマンド	目的
show hardware forwarding ip verify	IPv4 および IPv6 パケット検証の構成を表示します。
show ipv6 interface	IPv6-related インターフェイスの情報を表示します。
show ipv6 adjacency	隣接関係テーブルを表示します。

コマンド	目的
show ipv6 icmp	ICMPv6 情報を表示します。
show ipv6 nd	IPv6 ネイバー探索インターフェイス情報を表示します。
show ipv6 neighbor	IPv6 ネイバー エントリを表示します。

IPv6 の設定例

次に、IPv6 を構成する例を示します。

```
configure terminal
interface ethernet 3/1
ipv6 address 2001:db8::/64 eui64
ipv6 nd reachable-time 10
```

その他の参考資料

IPv6 の実装に関する詳細情報については、次の各セクションを参照してください。

関連資料

関連項目	マニュアル タイトル
IPv6 CLI コマンド	『Cisco Nexus 3000 シリーズ NX-OS ユニキャストルーティングコマンドリファレンス、リリース 6.x』

標準

標準	タイトル
この機能でサポートされる新規の標準または変更された標準はありません。また、既存の標準のサポートは変更されていません。	-



第 6 章

OSPFv2 の設定

この章では、Cisco NX-OS スイッチで IPv4 ネットワーク用の Open Shortest Path First version 2 (OSPFv2) を設定する方法について説明します。

この章は、次の項で構成されています。

- [OSPFv2 について \(79 ページ\)](#)
- [OSPFv2 の前提条件 \(91 ページ\)](#)
- [注意事項と制約事項 \(91 ページ\)](#)
- [デフォルト設定 \(92 ページ\)](#)
- [基本的な OSPFv2 の設定 \(92 ページ\)](#)
- [高度な OSPFv2 の設定 \(103 ページ\)](#)
- [OSPFv2 設定の確認 \(123 ページ\)](#)
- [OSPFv2 統計情報の表示 \(124 ページ\)](#)
- [OSPFv2 の設定例 \(124 ページ\)](#)
- [その他の参考資料 \(125 ページ\)](#)

OSPFv2 について

OSPFv2 は、IPv4 ネットワーク用 IETF リンクステートプロトコルです（「[リンクステートプロトコル](#)」の項を参照）。OSPFv2 ルータは、hello パケットと呼ばれる特別なメッセージを各 OSPF 対応インターフェイスに送信して、ほかの OSPFv2 隣接ルータを探索します。ネイバールータが発見されると、この 2 台のルータは hello パケットの情報を比較して、両者の設定に互換性のあるかどうかを判定します。これらのネイバールータは隣接を確立しようとします。つまり、両者のリンクステートデータベースを同期させて、確実に同じ OSPFv2 ルーティング情報を持つようにします。隣接ルータは、各リンクの稼働状態に関する情報、リンクのコスト、およびその他のあらゆるネイバー情報を含むリンクステートアドバタイズメント (LSA) を共有します。これらのルータはその後、受信した LSA をすべての OSPF 対応インターフェイスにフラッドします。これにより、すべての OSPFv2 ルータのリンクステートデータベースが最終的に同じになります。すべての OSPFv2 ルータのリンクステートデータベースが同じになると、ネットワークは収束します（「[コンバージェンス](#)」を参照）。その後、各ルータは、ダイクストラの最短パス優先 (SPF) アルゴリズムを使用して、自身のルートテーブルを構築します。

OSPFv2 ネットワークは、複数のエリアに分割できます。ルータは、ほとんどの LSA を 1 つのエリア内だけに送信するため、OSPF 対応ルータの CPU とメモリの要件が緩やかになります。

OSPFv2 は IPv4 をサポートしています。

Hello パケット

OSPFv2 ルータは、すべての OSPF 対応インターフェイスに hello パケットを定期的送信します。ルータがこの hello パケットを送信する頻度は、インターフェイスごとに設定された hello 間隔により決定されます。OSPFv2 は、hello パケットを使用して、次のタスクを実行します。

- ネイバー探索
- キープアライブ
- 指定ルータの選定（「[指定ルータ](#)」セクションを参照してください）

hello パケットには、リンクの OSPFv2 コスト割り当て、hello 間隔、送信元ルータのオプション機能など、送信元の OSPFv2 インターフェイスとルータに関する情報が含まれます。これらの hello パケットを受信する OSPFv2 インターフェイスは、設定に受信インターフェイスの設定との互換性があるかどうかを判定します。互換性のあるインターフェイスはネイバーと見なされ、ネイバー テーブルに追加されます（「[ネイバー](#)」の項を参照してください）。

hello パケットには、送信元インターフェイスが通信したルータのルータ ID のリストも含まれます。受信インターフェイスが、このリストで自身の ID を見つけた場合は、2 つのインターフェイス間で双方向通信が確立されます。

OSPFv2 は、hello パケットをキープアライブメッセージとして使用して、ネイバーが通信を継続中であるかどうかを判定します。ルータが設定されたデッド間隔（通常は hello 間隔の倍数）の間、hello パケットを受信しない場合、そのネイバーはローカル ネイバー テーブルから削除されます。

ネイバー情報

ネイバーであると思なされるようにするには、リモートインターフェイスと互換性があるように、OSPFv2 インターフェイスを設定しておく必要があります。この 2 つの OSPFv2 インターフェイスで、次の基準が一致している必要があります。

- hello 間隔
- デッド間隔
- エリア ID（「[エリア](#)」の項を参照）
- 認証
- オプション機能

一致する場合は、次の情報がネイバー テーブルに入力されます。

- ネイバー ID：ネイバーのルータ ID。

- プライオリティ：ネイバーのプライオリティ。プライオリティは、指定ルータの選定（「[指定ルータ](#)」を参照）に使用されます。
- 状態：ネイバーから通信があったか、双方向通信の確立処理中であるか、リンクステート情報を共有しているか、または完全な隣接関係が確立されたかを示します。
- デッドタイム：このネイバーから最後の hello パケットを受信した後に経過した時間を示します。
- IP アドレス：ネイバーの IP アドレス。
- 指定ルータ：ネイバーが指定ルータ、またはバックアップ指定ルータとして宣言されたかどうかを示します（[指定ルータ](#)を参照）。
- ローカルインターフェイス：このネイバーの hello パケットを受信したローカルインターフェイス。

隣接関係

すべてのネイバーが隣接関係を確立するわけではありません。ネットワークタイプと確立された指定ルータに応じて、完全な隣接関係を確立して、すべてのネイバーと LSA を共有するものと、そうでないものがあります。詳細については、「[指定されたルータ](#)」セクションを参照してください。

隣接関係は、OSPF のデータベース説明パケット、リンク状態要求パケット、およびリンク状態更新パケットを使用して確立されます。データベース説明パケットには、ネイバーのリンクステートデータベースからの LSA ヘッダーだけが含まれます（「[リンク状態データベース](#)」のセクションを参照）。ローカルルータは、これらのヘッダーを自身のリンクステートデータベースと比較して、新規の LSA か、更新された LSA かを判定します。ローカルルータは、新規または更新の情報を必要とする各 LSA について、リンク状態要求パケットを送信します。これに対し、ネイバーはリンク状態更新パケットを返信します。このパケット交換は、両方のルータのリンクステート情報が同じになるまで続きます。

指定ルータ

複数のルータを含むネットワークは、OSPF 特有の状況です。すべてのルータがネットワークで LSA をフラッドした場合は、同じリンクステート情報が複数の送信元から送信されます。ネットワークのタイプによっては、OSPFv2 は指定ルータ（DR）という 1 台のルータを使用して LSA のフラッドを制御し、OSPFv2 の残りの部分に対してネットワークを代表する役割をさせる場合があります（[エリア](#)のセクションを参照）。DR がダウンした場合、OSPFv2 はバックアップ指定ルータ（BDR）を選択します。DR がダウンすると、OSPFv2 はこの BDR を使用します。

ネットワークタイプは次のとおりです。

- ポイントツーポイント：2 台のルータ間にのみ存在するネットワーク。ポイントツーポイント ネットワーク上の全ネイバーは隣接関係を確立し、DR は存在しません。

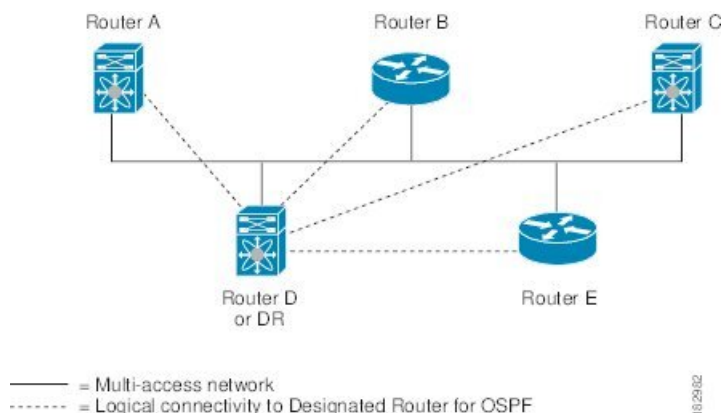
- **ブロードキャスト**：ブロードキャスト トラフィックが可能なイーサネットなどの共有メディア上で通信できる複数のルータを持つネットワーク。OSPFv2 ルータは DR および BDR を確立し、これらにより、ネットワーク上の LSA フラッドイングを制御します。OSPFv2 は、よく知られている IPv4 マルチキャストアドレス 224.0.0.5 および MAC アドレス 0100.5300.0005 を使用して、ネイバーと通信します。

DR と BDR は、hello パケット内の情報に基づいて選択されます。インターフェイスは hello パケットの送信時に、どれが DR および BDR かわかっている場合は、優先フィールドと、DR および BDR フィールドを設定します。ルータは、hello パケットの DR および BDR フィールドで宣言されたルータと優先フィールドに基づいて、選定手順を実行します。最終的に OSPFv2 は、最も大きいルータ ID を DR および BDR として選択します。

他のルータはすべて DR および BDR と隣接関係を確立し、IPv4 マルチキャストアドレス 224.0.0.6 を使用して、LSA 更新情報を DR と BDR に送信します。次の図は、すべてのルータと DR との隣接関係を示しています。

DR は、ルータ インターフェイスに基づいています。1 つのネットワークの DR であるルータは、別のインターフェイス上の他のネットワークの DR となることはできません。

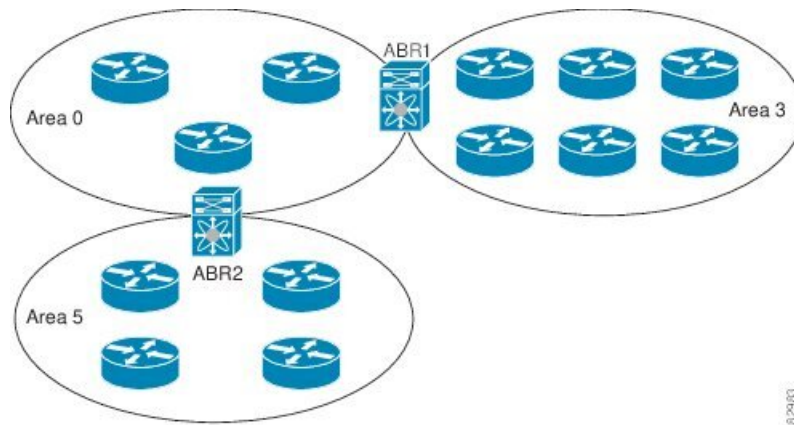
図 17: マルチアクセス ネットワークの DR



エリア

OSPFv2 ネットワークを複数のエリアに分割すると、ルータに要求される OSPFv2 の CPU とメモリに関する要件を制限できます。エリアとは、ルータの論理的な区分で、OSPFv2 ドメイン内にリンクして別のサブドメインを作成します。LSA フラッドイングはエリア内でのみ発生し、リンクステートデータベースはエリア内のリンクにのみ制限されます。定義されたエリア内のインターフェイスには、エリア ID を割り当てることができます。エリア ID は 32 ビット値で、数字またはドット付き 10 進表記 (10.2.3.1 など) で入力できます。Cisco NX-OS では、常にドット付き 10 進表記でエリアが表示されます。OSPFv2 ネットワークで、0 という予約されたエリア ID を持つバックボーンエリアも定義する必要があります。エリアが複数ある場合は、1 台以上のルータがエリア境界ルータ (ABR) となります。ABR は、バックボーンエリアと他の 1 つ以上の定義済みエリアの両方に接続します (次の図を参照)。

図 18: OSPFv2 エリア



ABR には、接続するエリアごとに個別のリンクステート データベースがあります。ABR は、接続したエリアの 1 つからバックボーンエリアにネットワーク集約（タイプ 3）LSA（「[ルート集約](#)」セクションを参照）を送信します。バックボーンエリアは、1 つのエリアに関する集約情報を別のエリアに送信します。OSPFv2 エリアの図では、エリア 0 が、エリア 5 に関する集約情報をエリア 3 に送信しています。

OSPFv2 では、自律システム境界ルータ（ASBR）という、もう 1 つのルータ タイプも定義されています。このルータは、OSPFv2 エリアを別の自律システムに接続します。自律システムとは、単一の技術的管理エンティティにより制御されるネットワークです。OSPFv2 は、そのルーティング情報を別の自律システムに再配布したり、再配布されたルートを実別の自律システムから受信したりできます。詳細については、「[詳細な機能](#)」のセクションを参照してください。

リンクステートアドバタイズメント

OSPFv2 はリンクステートアドバタイズメント（LSA）を使用して、固有のルーティングテーブルを構築します。

LSA タイプ

次の表に、Cisco NX-OS でサポートされる LSA タイプを示します。

表 13: LSA タイプ

タイプ	名前	説明
1	ルータ LSA	すべてのルータが送信する LSA。この LSA には、すべてのリンクの状態とコスト、およびリンク上のすべての OSPFv2 ネイバーの一覧が含まれます。ルータ LSA は SPF 再計算をトリガーします。ルータ LSA はローカル OSPFv2 エリアにフラッドイングされます。「 エリア 」の項を参照してください。
2	ネットワーク LSA	DR が送信する LSA。この LSA には、マルチアクセス ネットワーク内のすべてのルータの一覧が含まれます。ネットワーク LSA は SPF 再計算をトリガーします。「 指定ルータ 」のセクションを参照してください。
3	ネットワーク集約 LSA	エリア境界ルータが、ローカル エリア内の宛先ごとに外部エリアに送信する LSA。この LSA には、エリア境界ルータからローカルの宛先へのリンク コストが含まれます。「 エリア 」のセクションを参照してください。
4	ASBR 集約 LSA	エリア境界ルータが外部エリアに送信する LSA。この LSA は、リンク コストを ASBR のみにアドバタイズします。「 エリア 」の項を参照してください。

タイプ	名前	説明
5	AS 外部 LSA	ASBR が生成する LSA。この LSA には、外部自律システム宛先へのリンク コストが含まれます。AS 外部 LSA は、自律システム全体にわたってフラッドニングされます。「 エリア 」の項を参照してください。
7	NSSA 外部 LSA	ASBR が Not-So-Stubby Area (NSSA) 内で生成する LSA。この LSA には、外部自律システム宛先へのリンク コストが含まれます。NSSA 外部 LSA は、ローカル NSSA 内のみでフラッドニングされます。「 エリア 」のセクションを参照してください。
9-11	不透明 LSA	OSPF の拡張に使用される LSA。「 不透明 LSA 」のセクションを参照してください。

リンク コスト

各 OSPFv2 インターフェイスは、リンク コストを割り当てられています。このコストは任意の数字です。デフォルトでは、Cisco NX-OS が、設定された参照帯域幅をインターフェイス帯域幅で割った値をコストとして割り当てます。デフォルトでは、参照帯域幅は 40 Gbps です。リンク コストは各リンクに対して、LSA 更新情報で伝えられます。

フラッドニングと LSA グループ ペーシング

OSPFv2 ルータは LSA を受信すると、その LSA をすべての OSPF 対応インターフェイスに転送し、この情報を使用して OSPFv2 エリアをフラッドニングします。この LSA フラッドニングにより、ネットワーク内のすべてのルータが同じルーティング情報を持つことが保証されます。LSA フラッドニングは、OSPFv2 エリアの設定により異なります（「[エリア](#)」を参照）。LSA は、リンクステート リフレッシュ時間に基づいて（デフォルトでは 30 分ごとに）フラッドニングされます。各 LSA には、リンクステート リフレッシュ時間が設定されています。

ネットワークの LSA 更新情報のフラッドニング レートは、LSA グループ ペーシング機能を使用して制御できます。LSA グループ ペーシングにより、CPU またはバッファの使用率を低下させることができます。この機能により、同様のリンクステート リフレッシュ時間を持つ LSA がグループ化されるため、OSPFv2 で、複数の LSA を 1 つの OSPFv2 更新メッセージにまとめることが可能となります。

デフォルトでは、相互のリンクステート リフレッシュ時間が 4 分以内の LSA が同じグループに入れます。この値は、大規模なリンクステートデータベースでは低く、小規模のデータベースでは高くして、ネットワーク上の OSPFv2 負荷を最適化する必要があります。

リンクステート データベース

各ルータは、OSPFv2 ネットワーク用のリンクステートデータベースを保持しています。このデータベースには、収集されたすべての LSA が含まれ、ネットワークを通過するすべてのルートに関する情報が格納されます。OSPFv2 は、この情報を使用して、各宛先への最適パスを計算し、この最適パスをルーティング テーブルに入力します。

MaxAge と呼ばれる設定済みの時間間隔で受信された LSA 更新情報がまったくない場合は、リンクステート データベースから LSA が削除されます。ルータは、LSA を 30 分ごとに繰り返してフラッドイングし、正確なリンクステート情報が期限切れで削除されるのを防ぎます。Cisco NX-OS は、すべての LSA が同時にリフレッシュされるのを防ぐために、LSA グループ機能をサポートしています。詳細については、「[フラッドイングと LSA グループ ペーシング](#)」のセクションを参照してください。

不透明 LSA

不透明 LSA により、OSPF 機能の拡張が可能となります。不透明 LSA は、標準 LSA ヘッダーと、それに続くアプリケーション固有の情報で構成されます。この情報は、OSPFv2 または他のアプリケーションにより使用される場合があります。次のような 3 種類の不透明 LSA タイプが定義されています。

- LSA タイプ 9：ローカル ネットワークにフラッドイングされます。
- LSA タイプ 10：ローカル エリアにフラッドイングされます。
- LSA タイプ 11：ローカル自律システムにフラッドイングされます。

OSPFv2 およびユニキャスト RIB

OSPFv2 は、リンクステートデータベースでダイクストラの SPF アルゴリズムを実行します。このアルゴリズムにより、パス上の各リンクのリンク コストの合計に基づいて、各宛先への最適なパスが選択されます。そして、選択された各宛先への最短パスが OSPFv2 ルート テーブルに入力されます。OSPFv2 ネットワークが収束すると、このルート テーブルはユニキャスト RIB にデータを提供します。OSPFv2 はユニキャスト RIB と通信し、次の動作を行います。

- ルートの追加または削除
- 他のプロトコルからのルートの再配布への対応
- 変更されていない OSPFv2 ルートの削除およびスタブ ルータ アドバタイズメントを行うためのコンバージェンス更新情報の提供（「[OSPFv2 スタブ ルータ アドバタイズメント](#)」セクションを参照）

さらに OSPFv2 は、変更済みダイクストラ アルゴリズムを実行して、集約および外部（タイプ 3、4、5、7）LSA の変更の高速再計算を行います。

認証

OSPFv2 メッセージに認証を設定して、ネットワークでの不正な、または無効なルーティング更新を防止できます。Cisco NX-OS は、次の 2 つの認証方式をサポートしています。

- 簡易パスワード認証
- MD5 認証ダイジェスト

OSPFv2 認証は、OSPFv2 エリアに対して、またはインターフェイスごとに設定できます。

簡易パスワード認証

簡易パスワード認証では、OSPFv2 メッセージの一部として送信された単純なクリアテキストのパスワードを使用します。受信 OSPFv2 ルータが OSPFv2 メッセージを有効なルート更新情報として受け入れるには、同じクリアテキストパスワードで構成されている必要があります。パスワードがクリアテキストであるため、ネットワーク上のトラフィックをモニタできるあらゆるユーザーがパスワードを入手できます。

暗号化認証

暗号化認証では、暗号化されたパスワードを OSPFv2 認証に使用します。トランスミッタは、送信するパケットとキー文字列を使用してコードを計算し、そのコードとキー ID をパケットに挿入して、パケットを送信します。受信側は、受信したパケットとローカルに設定されたキーストリング（パケット内のキー ID に対応）を使用してコードをローカルに計算することにより、パケット内のコードを検証します。

メッセージダイジェスト 5（MD5）とハッシュベースのメッセージ認証コードセキュアハッシュアルゴリズム（HMAC-SHA）暗号化認証の両方がサポートされています。

MD5 認証

OSPFv2 メッセージを認証するには、MD5 認証を使用する必要があります。そのためには、ローカル ルータとすべてのリモート OSPFv2 ネイバーが共有するパスワードを設定します。Cisco NX-OS は各 OSPFv2 メッセージに対して、メッセージと暗号化されたパスワードに基づく MD5 一方向メッセージダイジェストを作成します。インターフェイスはこのダイジェストを OSPFv2 メッセージとともに送信します。受信する OSPFv2 ネイバーは、同じ暗号化パスワードを使用して、このダイジェストを確認します。メッセージが変更されていない場合はダイジェストの計算が同一であるため、OSPFv2 メッセージは有効と見なされます。

MD5 認証には、ネットワークでのメッセージの再送を防ぐための、各 OSPFv2 メッセージのシーケンス番号が含まれます。

高度な機能

Cisco NX-OS は、ネットワークでの OSPFv2 の可用性やスケーラビリティを向上させる数多くの高度な OSPFv2 機能をサポートしています。

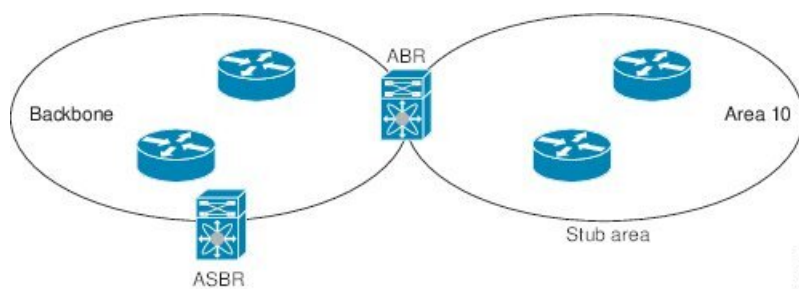
スタブエリア

エリアをスタブエリアにすると、エリアでフラッディングされる外部ルーティング情報の量を制限できます。スタブエリアとは、AS 外部（タイプ 5）LSA（[リンク ステート アドバタイズメント](#)）のセクションを参照）が許可されないエリアです。これらの LSA は通常、外部ルーティング情報を伝播するためにローカル自律システム全体でフラッディングされます。スタブエリアには、次の要件があります。

- スタブエリア内のすべてのルータはスタブルータです。「[スタブ ルーティング](#)」の項を参照してください。
- スタブエリアには ASBR ルータは存在しません。
- スタブエリアには仮想リンクを設定できません。

次の図には、外部 AS に到達するためにエリア 0.0.0.10 内のすべてのルータが ABR を通過する必要がある OSPFv2 AS の例を示します。エリア 0.0.0.10 はスタブエリアとして設定できます。

図 19: スタブエリア



スタブエリアは、外部自律システムへのバックボーンエリアを通過する必要があるすべてのトラフィックにデフォルトルートを使用します。IPv4 の場合のデフォルトルートは 0.0.0.0 です。

Not-So-Stubby Area

Not-So-Stubby Area (NSSA) は、スタブエリアに似ていますが、NSSA では、再配布を使用して NSSA 内で自律システム外部ルートをインポートできる点が異なります。NSSA ASBR はこれらのルートを再配布し、NSSA 外部（タイプ 7）LSA を生成して NSSA 全体でフラッディングします。または、NSSA を他のエリアに接続する ABR を設定することにより、この NSSA 外部 LSA を AS 外部（タイプ 5）LSA に変換することもできます。こうすると、エリア ボーダー ルータ（ABR）は、これらの AS 外部 LSA を OSPFv2 自律システム全体にフラッディングします。変換中は集約とフィルタリングがサポートされます。NSSA 外部 LSA の詳細については、[リンクステート アドバタイズメント](#)のセクションを参照してください。

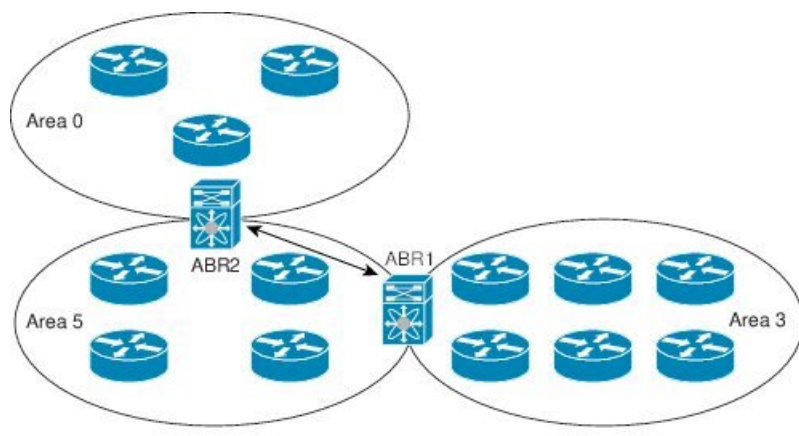
たとえば、OSPFv2 を使用する中央サイトを、異なるルーティング プロトコルを使用するリモートサイトに接続するときに NSSA を使用すると、管理作業を簡素化できます。リモートサイトへのルートはスタブエリア内に再配布できないため、NSSA を使用する前に、企業サイトの境界ルータとリモートルータの間の接続を OSPFv2 スタブエリアとして実行できません。

NSSA を使用すると、企業のルータとリモート ルータ間のエリアを NSSA として定義する（「[NSSA の設定](#)」を参照）ことで、OSPFv2 を拡張してリモート接続性をサポートできます。バックボーンエリア 0 を NSSA にできません。

仮想リンク

仮想リンクを使用すると、物理的に直接接続できない場合に、OSPFv2 エリア ABR をバックボーンエリア ABR に接続できます。次の図には、エリア 3 をエリア 5 経由でバックボーンエリアに接続する仮想リンクを示します。

図 20: 仮想リンク



また、仮想リンクを使用して、分割エリアから一時的に回復できます。分割エリアは、エリア内のリンクがダウンしたために隔離された一部のエリアで、ここからはバックボーンエリアへの代表 ABR に到達できません。

ルートの再配布

OSPFv2 は、ルート再配布を使用して、他のルーティングプロトコルからルートを学習できます。「[ルートの再配布 \(12 ページ\)](#)」の項を参照してください。リンク コストをこれらの再配布されたルートに割り当てるか、またはデフォルト リンク コストを再配布されたすべてのルートに割り当てるように、OSPFv2 を設定します。

ルート再配布では、ルート マップを使用して、再配布する外部ルートを管理します。ルートマップの構成の詳細については、[Route Policy Manager の設定 \(441 ページ\)](#) を参照してください。ルートマップを使用して、これらの外部ルートがローカル OSPFv2 自律システムでアドバタイズされる前に AS 外部 (タイプ 5) LSA および NSSA 外部 (タイプ 7) LSA のパラメータを変更できます。

ルート集約

OSPFv2 は、学習したすべてのルートを、すべての OSPF 対応ルータと共有するため、ルート集約を使用して、すべての OSPF 対応ルータにフラッドイングされる一意のルート数を削減した方がよい場合があります。ルート集約により、より具体的な複数のアドレスが、すべての具体的なアドレスを表す 1 つのアドレスに置き換えられるため、ルートテーブルが簡素化され

ます。たとえば、10.1.1.0/24、10.1.2.0/24、および10.1.3.0/24 というアドレスを1つの集約アドレス 10.1.0.0/16 に置き換えることができます。

一般的には、エリア境界ルータ（ABR）の境界ごとに集約します。集約は2つのエリアの間でも設定できますが、バックボーンの方に集約する方が適切です。こうすると、バックボーンがすべての集約アドレスを受信し、すでに集約されているそれらのアドレスを他のエリアに投入できるためです。集約には、次の2タイプがあります。

- エリア間ルート集約
- 外部ルート集約

エリア間ルート集約は ABR 上で設定し、自律システム内のエリア間のルートを集約します。集約の利点を生かすには、これらのアドレスを1つの範囲内にまとめることができるように、連続するネットワーク番号をエリア内で割り当てる必要があります。

外部ルート集約は、ルート再配布を使用して OSPFv2 に投入される外部ルートに特有のルート集約です。集約する外部の範囲が連続していることを確認する必要があります。異なる2台のルータからの重複範囲を集約すると、誤った宛先にパケットが送信される原因となる場合があります。外部ルート集約は、ルートを OSPF に再配布している ASBR で設定してください。

集約アドレスの設定時に Cisco NX-OS は、ルーティング ブラック ホールおよびルート ループを防ぐために、集約アドレスの廃棄ルートを自動的に設定します。

OSPFv2 スタブルータ アドバタイズメント

OSPFv2 スタブルータ アドバタイズメント機能を使用して、OSPFv2 インターフェイスをスタブルータとして機能するように構成できます。この機能は、ネットワークに新規ルータを機能制限付きで導入する場合や、過負荷になっているルータの負荷を制限する場合など、このルータ経由の OSPFv2 トラフィックを制限するときに使用します。また、この機能は、さまざまな管理上またはトラフィック エンジニアリング上の理由により使用する場合があります。

OSPFv2 スタブルータ アドバタイズメントは、OSPFv2 ルータをネットワーク トポロジから削除しませんが、他の OSPFv2 ルータがこのルータを使用して、ネットワークの他の部分にトラフィックをルーティングできないようにします。このルータを宛先とするトラフィック、またはこのルータに直接接続されたトラフィックだけが送信されます。

OSPFv2 スタブルータ アドバタイズメントは、すべてのスタブ リンク（ローカル ルータに直接接続された）を、ローカル OSPFv2 インターフェイスのコストとしてマークします。すべてのリモート リンクは、最大のコスト（0xFFFF）としてマークされます。

複数の OSPFv2 インスタンス

Cisco NX-OS は、同じノード上で動作する、OSPFv2 プロトコルの複数インスタンスをサポートしています。同一インターフェイスには複数のインスタンスを設定できません。デフォルトでは、すべてのインスタンスが同じシステム ルータ ID を使用します。複数のインスタンスが同じ OSPFv2 自律システムにある場合は、各インスタンスのルータ ID を手動で設定する必要があります。

SPF 最適化

Cisco NX-OS は、次の方法で SPF アルゴリズムを最適化します。

- ネットワーク（タイプ 2）LSA、ネットワーク集約（タイプ 3）LSA、および AS 外部（タイプ 5）LSA 用の部分的 SPF：これらの LSA のいずれかが変更されると、Cisco NX-OS は、全体的な SPF 計算ではなく、高速部分計算を実行します。
- SPF タイマー：さまざまなタイマーを設定して、SPF 計算を制御できます。これらのタイマーには、後続の SPF 計算の幾何バックオフが含まれます。幾何バックオフにより、複数の SPF 計算による CPU 負荷が制限されます。

BFD

この機能では、双方向フォワーディング検出（BFD）をサポートします。BFD は、転送パスの障害を高速で検出することを目的にした検出プロトコルです。BFD は 2 台の隣接デバイス間のサブセカンド障害を検出し、BFD の負荷の一部を、サポートされるモジュール上のデータプレーンに分散できるため、プロトコル hello メッセージよりも CPU を使いません。

仮想化のサポート

OSPFv2 は、仮想ルーティングおよび転送（VRF）インスタンスをサポートしています。デフォルトでは、特に別の VRF を設定しない限り、Cisco NX-OS はユーザーをデフォルトの VRF に配置します。各 OSPFv2 インスタンスは、システム制限値の範囲で複数の VRF をサポートできます。詳細については、「[レイヤ 3 仮想化の設定](#)」を参照してください。

OSPFv2 の前提条件

OSPFv2 には、次の前提条件があります。

- OSPF を設定するための、ルーティングの基礎に関する詳しい知識がある。
- スイッチにログインしている。
- リモート OSPFv2 ネイバーと通信可能な IPv4 用インターフェイスが 1 つ以上設定されている。
- LAN Base Services ライセンスがインストールされている。
- OSPFv2 ネットワーク戦略と、ネットワークのプランニングが完成している。たとえば、複数のエリアが必要かどうかを決定します。
- OSPF 機能を有効にしてある（[OSPFv2 機能のイネーブル化](#)のセクションを参照）。

注意事項と制約事項

OSPFv2 設定時の注意事項および制約事項は、次のとおりです。

- Cisco NX-OS は、ユーザがエリアを 10 進表記で入力するか、ドット付き 10 進表記で入力するかに関係なく、ドット付き 10 進表記でエリアを表示します。



(注) Cisco IOS の CLI に慣れている場合、この機能に対応する Cisco NX-OS コマンドは通常使用する Cisco IOS コマンドと異なる場合がありますので注意してください。

デフォルト設定

次の表に、OSPFv2 パラメータのデフォルト設定を示します。

表 14: OSPFv2 のデフォルトパラメータ

パラメータ	デフォルト
hello 間隔	10 秒
デッド間隔	40 秒
OSPFv2 機能	ディセーブル
スタブルータアドバタイズメントの宣言期間	600 秒
リンク コスト計算の参照帯域幅	40 Gbps
LSA 最小到着時間	1000 ミリ秒
LSA グループ ペーシング	240 秒
SPF 計算初期遅延時間	200 ミリ秒
SPF 計算最小ホールド タイム	1000 ミリ秒
SPF 計算の最大待機時間	5000 ミリ秒

基本的な OSPFv2 の設定

OSPFv2 は、OSPFv2 ネットワークを設計した後に設定します。

OSPFv2の有効化

OSPFv2 を設定するには、その前に OSPFv2 機能を有効にする必要があります。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : switch# configure terminal switch(config)#	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	feature ospf 例 : switch(config)# feature ospf 例 :	OSPFv2 機能を有効にします。
ステップ 3	(任意) show feature 例 : switch(config)# show feature	有効および無効にされた機能を表示します。
ステップ 4	(任意) copy running-config startup-config 例 : switch(config)# copy running-config startup-config	この設定変更を保存します。

例

no feature ospf コマンドを使用して、OSPFv2 機能を無効にし、関連する構成をすべて削除します。

コマンド	目的
no feature ospf 例 : switch(config)# no feature ospf	OSPFv2 機能を無効にして、関連付けられた構成をすべて削除します。

OSPFv2 インスタンスの作成

OSPFv2 を設定する最初のステップは、OSPFv2 インスタンスを作成することです。作成した OSPFv2 インスタンスには、一意のインスタンス タグを割り当てます。インスタンス タグは任意の文字列です。

OSPFv2 インスタンス パラメータの詳細については、[高度な OSPFv2 の設定](#)のセクションを参照してください。

始める前に

OSPF 機能を有効にしてあることを確認します（[OSPFv2 機能のイネーブル化](#)のセクションを参照）。

show ip ospf instance-tag コマンドを使用して、インスタンス タグが使用されていないことを確認します。

OSPFv2 がルータ ID（設定済みのループバック アドレスなど）を入手可能であるか、またはルータ ID オプションを設定する必要があります。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例： <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	router ospf instance-tag 例： <pre>switch(config)# router ospf 201 switch(config-router)</pre>	新規 OSPFv2 インスタンスを作成して、設定済みのインスタンス タグを割り当てます。
ステップ 3	（任意） router-id ip-address 例： <pre>switch(config-router)# router-id 192.0.2.1</pre>	OSPFv2 ルータ ID を設定します。この IP アドレスにより、この OSPFv2 インスタンスが識別されます。このアドレスは、システムの設定済みインターフェイス上に存在する必要があります。
ステップ 4	（任意） show ip ospf instance-tag 例： <pre>switch(config-router)# show ip ospf 201</pre>	OSPF 情報を表示します。
ステップ 5	copy running-config startup-config 例： <pre>switch(config)# copy running-config startup-config</pre>	この設定変更を保存します。

例

OSPFv2 インスタンスと、関連付けられた構成をすべて削除するには、**no router ospf** コマンドを使用します。

コマンド	目的
no router ospf instance-tag 例 : switch(config)# no router ospf 201	OSPF インスタンスと、関連付けられた設定を削除します。



(注) このコマンドは、インターフェイス モードでは OSPF 設定を削除しません。インターフェイス モードで設定された OSPFv2 コマンドはいずれも、手動で削除する必要があります。

OSPFv2 インスタンスのオプションパラメータの設定

OSPF のオプション パラメータを設定できます。

OSPFv2 インスタンス パラメータの詳細については、[高度な OSPFv2 の設定](#)のセクションを参照してください。

始める前に

OSPF 機能を有効にしてあることを確認します ([OSPFv2 機能の有効化](#)のセクションを参照)。

OSPFv2 がルータ ID (設定済みのループバック アドレスなど) を入手可能であるか、またはルータ ID オプションを設定する必要があります。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	distance number 例 : switch(config-router)# distance 25	この OSPFv2 インスタンスのアドミニストレーティブ ディスタンスを設定します。範囲は 1 ～ 255 です。デフォルトは 110 です。
ステップ 2	log-adjacency-changes [detail] 例 : switch(config-router)# log-adjacency-changes	ネイバーの状態が変化するたびに、システム メッセージを生成します。
ステップ 3	maximum-paths path-number 例 : switch(config-router)# maximum-paths 4	ルート テーブル内の宛先への同じ OSPFv2 パスの最大数を設定します。このコマンドはロード バランシングに使用されます。指定できる範囲は 1 ～ 16 です。デフォルト値は 8 です。

例

次の例は、OSPFv2 インスタンスを作成する方法を示しています。

```
switch# configure terminal
switch(config)# router ospf 201
switch(config-router)# copy running-config startup-config
```

OSPFv2でのネットワークの設定

ルータがこのネットワークへの接続に使用するインターフェイスを介して、OSPFv2 へのネットワークを関連付けることで、このネットワークを設定できます（[ネイバー](#)のセクションを参照）。すべてのネットワークをデフォルトバックボーンエリア（エリア0）に追加したり、任意の10進数またはIPアドレスを使用して新規エリアを作成したりできます。



(注) すべてのエリアは、バックボーンエリアに直接、または仮想リンク経由で接続する必要があります。



(注) インターフェイスに有効なIPアドレスを設定するまでは、OSPF はインターフェイス上でイネーブルにされません。

始める前に

OSPF 機能を有効にしてあることを確認します（[OSPFv2 機能の有効化](#)のセクションを参照）。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	グローバル設定モードを開始します
ステップ 2	interface interface-type slot/port 例 : <pre>switch(config)# interface ethernet 1/2 switch(config-if)#</pre>	インターフェイス設定モードを開始します。
ステップ 3	no switchport 例 :	グローバル コンフィギュレーションモードを開始します。

	コマンドまたはアクション	目的
	<code>switch(config-if)# no switchport</code>	
ステップ 4	ip address <i>ip-prefix/length</i> 例 : <code>switch(config-if)# ip address 192.0.2.1/16</code>	このインターフェイスに IP アドレスおよびサブネットマスクを割り当てます。
ステップ 5	ip router ospf instance-tag area area-id [secondaries none] 例 : <code>switch(config-if)# ip router ospf 201 area 0.0.0.15</code>	OSPFv2 インスタンスおよびエリアにインターフェイスを追加します。
ステップ 6	(任意) show ip ospf instance-tag interface interface-type slot/port 例 : <code>switch(config-if)# show ip ospf 201 interface ethernet 1/2</code>	OSPF 情報を表示します。
ステップ 7	(任意) copy running-config startup-config 例 : <code>switch(config)# copy running-config startup-config</code>	この設定変更を保存します。

例

インターフェイス コンフィギュレーション モードで、省略可能な次の OSPFv2 パラメータを設定できます。

コマンド	目的
ip ospf cost <i>number</i> 例 : <code>switch(config-if)# ip ospf cost 25</code>	このインターフェイスの OSPFv2 コスト メトリックを設定します。デフォルトでは、参照帯域幅とインターフェイス帯域幅に基づいて、コスト メトリックが計算されます。有効な範囲は 1 ～ 65535 です。
ip ospf dead-interval <i>seconds</i> 例 : <code>switch(config-if)# ip ospf dead-interval 50</code>	OSPFv2 デッド間隔を秒単位で設定します。有効な範囲は 1 ～ 65535 です。デフォルトでは、hello 間隔の秒数の 4 倍です。

コマンド	目的
ip ospf hello-interval seconds 例 : <pre>switch(config-if)# ip ospf hello-interval 25</pre>	OSPFv2 hello 間隔を秒単位で設定します。有効な範囲は 1 ～ 65535 です。デフォルトは 10 秒です。
ip ospf mtu-ignore 例 : <pre>switch(config-if)# ip ospf mtu-ignore</pre>	OSPFv2 で、ネイバーとのあらゆる IP MTU 不一致が無視されるように設定します。デフォルトでは、ネイバー MTU がローカルインターフェイス MTU が不一致の場合には、隣接関係が確立されません。
ip ospf passive-interface 例 : <pre>switch(config-if)# ip ospf passive-interface</pre>	インターフェイス上でルーティングが更新されないようにします。
ip ospf priority number 例 : <pre>switch(config-if)# ip ospf priority 25</pre>	エリアの DR の決定に使用される OSPFv2 プライオリティを設定します。有効な範囲は 0 ～ 255 です。デフォルトは 1 です。「 指定ルータ 」の項を参照してください。
ip ospf shutdown 例 : <pre>switch(config-if)# ip ospf shutdown</pre>	このインターフェイス上の OSPFv2 インスタンスをシャットダウンします。

次に、OSPFv2 インスタンス 201 にネットワーク エリア 0.0.0.10 を追加する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# interface ethernet 1/2
switch(config-if)# no switchport
switch(config-if)# ip address 192.0.2.1/16
switch(config-if)# ip router ospf 201 area 0.0.0.10
switch(config-if)# copy running-config startup-config
```

show ip ospf interface コマンドを使用してインターフェイス設定を確認します。**show ip ospf neighbor** コマンドを使用してこのインターフェイスのネイバーを確認します。

エリアの認証の設定

エリア内のすべてのネットワーク、またはエリア内の個々のインターフェイスの認証を設定できます。インターフェイス認証設定を使用すると、エリア認証は無効になります。

始める前に

OSPF 機能を有効にしてあることを確認します（[OSPFv2 機能のイネーブル化](#)のセクションを参照）。

インターフェイス上のすべてのネイバーが、共有認証キーを含め、同じ認証設定を共有することを確認します。

この認証設定のためのキー チェーンを作成します。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	router ospf instance-tag 例 : <pre>switch(config)# router ospf 201 switch(config-router)#</pre>	新規 OSPFv2 インスタンスを作成して、設定済みのインスタンス タグを割り当てます。
ステップ 3	area area-id authentication [message-digest] 例 : <pre>switch(config-router)# area 0.0.0.10 authentication</pre>	エリアの認証モードを設定します。
ステップ 4	interface interface-type slot/port 例 : <pre>switch(config-router)# interface ethernet 1/2 switch(config-if)#</pre>	インターフェイス設定モードを開始します。
ステップ 5	no switchport 例 : <pre>switch(config-if)# no switchport</pre>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 6	(任意) ip ospf authentication-key [0 3] key 例 : <pre>switch(config-if)# ip ospf authentication-key 0 mypass</pre>	(オプション) このインターフェイスに簡易パスワード認証を構成します。認証が、キーチェーンにもメッセージダイジェストにも設定されていない場合は、このコマンドを使用します。0 の場合は、パスワードをクリア テキストで設定します。3 の場合は、パスワードを 3DES 暗号化として設定します。
ステップ 7	(任意) ip ospf message-digest-key key-id md5 [0 3] key 例 :	このインターフェイスにメッセージダイジェスト認証を設定します。認証がメッセージダイジェストに設定されている場合は、このコマンドを使用しま

	コマンドまたはアクション	目的
	<pre>switch(config-if)# ip ospf message-digest-key 21 md5 0 mypass</pre>	す。key-id の範囲は 1 ～ 255 です。MD5 オプションが 0 の場合はパスワードがクリアテキストで構成され、3 の場合はパスキーが 3DES 暗号化として構成されます。
ステップ 8	(任意) show ip ospf instance-tag interface interface-type slot/port 例 : <pre>switch(config-if)# show ip ospf 201 interface ethernet 1/2</pre>	
ステップ 9	(任意) copy running-config startup-config 例 : <pre>switch(config)# copy running-config startup-config</pre>	この設定変更を保存します。

インターフェイスの認証の設定

エリア内の個々のインターフェイスに認証を設定できます。インターフェイス認証設定を使用すると、エリア認証は無効になります。

始める前に

OSPF 機能を有効にしてあることを確認します (OSPFv2 機能のイネーブル化のセクションを参照)。

インターフェイス上のすべてのネイバーが、共有認証キーを含め、同じ認証設定を共有することを確認します。

キーチェーンを使用する認証を使用する場合は、まず OSPF 認証構成に使用するキーチェーンを作成します。

OSPFv2 HMAC-SHA 認証を構成するには、キーに使用する HMAC-SHA アルゴリズムを指定する必要があります。暗号化アルゴリズムを選択せずにキーチェーンを使用した暗号化認証が構成されている場合、OSPFv2 は MD5 暗号化アルゴリズムを使用します。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	グローバル設定モードを開始します

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 2	interface interface-type slot/port 例 : <pre>switch(config)# interface ethernet 1/2 switch(config-if) #</pre>	インターフェイス設定モードを開始します。
ステップ 3	ip ospf authentication [message-digest] 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config) #</pre>	OSPFv2 のインターフェイス認証モードをクリアテキスト タイプとメッセージダイジェストタイプのどちらかでイネーブルにします。これにより、エリアに基づくこのインターフェイスの認証が無効となります。すべてのネイバーが、この認証タイプを共有する必要があります。
ステップ 4	ip ospf authentication keychain key-name 例 : <pre>switch(config-if) # ip ospf authentication keychain Test1</pre>	OSPFv2 のキーチェーンを使用するようにインターフェイス認証を構成します。
ステップ 5	ip ospf authentication-key [0 3 7] key 例 : <pre>switch(config-if) # ip ospf authentication-key 0 mypass</pre>	このインターフェイスに簡易パスワード認証を設定します。認証が、キーチェーンにもメッセージダイジェストにも設定されていない場合は、このコマンドを使用します。 オプションは次のとおりです。 • 0 の場合は、パスワードをクリアテキストで構成します。 • 3 : パス キーを 3DES 暗号化として設定します。 • 7 : パス キーを Cisco タイプ 7 暗号化として設定します。
ステップ 6	ip ospf message-digest-key key-id md5 [0 3 7] key 例 : <pre>switch(config-if) # ip ospf message-digest-key 21 md5 0 mypass</pre>	このインターフェイスにメッセージダイジェスト認証を設定します。認証がメッセージダイジェストに設定されている場合は、このコマンドを使用します。key-id の範囲は 1 ~ 255 です。MD5 オプションは次のとおりです。 • 0 の場合は、パスワードをクリアテキストで構成します。 • 3 : パス キーを 3DES 暗号化として設定します。

	コマンドまたはアクション	目的
		• 7: パス キーを Cisco タイプ 7 暗号化として設定します。
ステップ 7	show ip ospf instance-tag interface interface-type slot/port 例 : <pre>switch(config-if)# show ip ospf 201 interface ethernet 1/2</pre>	OSPF 情報を表示します。
ステップ 8	copy running-config startup-config 例 : <pre>switch(config)# copy running-config startup-config</pre>	この設定変更を保存します。

例

次に、インターフェイスに暗号化されていない簡単なパスワードを設定し、イーサネット インターフェイス 1/2 のパスワードを設定する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# router ospf 201
switch(config-router)# exit
switch(config)# interface ethernet 1/2
switch(config-if)# no switchport
switch(config-if)# ip router ospf 201 area 0.0.0.10
switch(config-if)# ip ospf authentication
switch(config-if)# ip ospf authentication-key 0 mypass
switch(config-if)# copy running-config startup-config
```

次に、OSPFv2 HMAC-SHA-1 および MD5 暗号化認証を設定する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# key chain chain1
switch(config-keychain)# key 1
switch(config-keychain-key)# key-string 7 070724404206
switch(config-keychain-key)# accept-lifetime 01:01:01 Jan 01 2015 infinite
switch(config-keychain-key)# send-lifetime 01:01:01 Jan 01 2015 infinite
switch(config-keychain-key)# cryptographic-algorithm HMAC-SHA-1
switch(config-keychain-key)# exit
switch(config-keychain)# key 2
switch(config-keychain-key)# key-string 7 070e234f1f5b4a
switch(config-keychain-key)# accept-lifetime 10:51:01 Jul 24 2015 infinite
switch(config-keychain-key)# send-lifetime 10:51:01 Jul 24 2015 infinite
switch(config-keychain-key)# cryptographic-algorithm MD5
switch(config-keychain-key)# exit
switch(config-keychain)# exit

switch(config)# interface ethernet 1/1
switch(config-if)# ip router ospf 1 area 0.0.0.0
switch(config-if)# ip ospf authentication message-digest
switch(config-if)# ip ospf authentication key-chain chain1

switch(config-if)# show key chain chain1
Key-Chain chain1
Key 1 -- text 7 "070724404206"
```



```
cryptographic-algorithm HMAC-SHA-1
accept lifetime UTC (01:01:01 Jan 01 2015)-(always valid) [active]
send lifetime UTC (01:01:01 Jan 01 2015)-(always valid) [active]
Key 2 -- text 7 "070e234f1f5b4a"
cryptographic-algorithm MD5
accept lifetime UTC (10:51:00 Jul 24 2015)-(always valid) [active]
send lifetime UTC (10:51:00 Jul 24 2015)-(always valid) [active]

switch(config-if)# show ip ospf interface ethernet 1/1
Ethernet1/1 is up, line protocol is up
IP address 11.11.11.1/24
Process ID 1 VRF default, area 0.0.0.3
Enabled by interface configuration
State BDR, Network type BROADCAST, cost 40
Index 6, Transmit delay 1 sec, Router Priority 1
Designated Router ID: 33.33.33.33, address: 11.11.11.3
Backup Designated Router ID: 1.1.1.1, address: 11.11.11.1
2 Neighbors, flooding to 2, adjacent with 2
Timer intervals: Hello 10, Dead 40, Wait 40, Retransmit 5
Hello timer due in 00:00:08
Message-digest authentication, using keychain key1 (ready)
Sending SA: Key id 2, Algorithm MD5
Number of opaque link LSAs: 0, checksum sum 0
```

高度な OSPFv2 の設定

OSPFv2 は、OSPFv2 ネットワークを設計した後に設定します。

境界ルータのフィルタ リストの設定

OSPFv2 ドメインを関連ネットワークを含む一連のエリアに分割できます。すべてのエリアは、エリア境界ルータ（ABR）経由でバックボーンエリアに接続している必要があります。OSPFv2 ドメインは、自律システム境界ルータ（ASBR）を介して、外部ドメインに接続可能です。「[エリア](#)」の項を参照してください。

ABR には、省略可能な次の設定パラメータがあります。

- **Area range** : エリア間のルート集約を設定します。
- **Filter list** : ABR 上で、外部エリアから受信したネットワーク集約（タイプ 3）LSA をフィルタリングします。

ASBR もフィルタ リストをサポートしています。

始める前に

OSPF 機能を有効にしてあることを確認します（[OSPFv2 機能のイネーブル化](#)のセクションを参照）。

フィルタ リストが、着信または発信ネットワーク集約（タイプ 3）LSA の IP プレフィックスのフィルタリングに使用するルート マップを作成します。[Route Policy Manager の設定](#)（[441 ページ](#)）を参照してください。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : switch# configure terminal switch(config)#	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	router ospf instance-tag 例 : switch(config)# router ospf 201 switch(config-router)#	新規 OSPFv2 インスタンスを作成して、設定済みのインスタンス タグを割り当てます。
ステップ 3	area area-id filter-list route-map map-name {in out} 例 : switch(config-router)# area 0.0.0.10 filter-list route-map FilterLSAs in	ABR 上で着信または発信ネットワーク 集約 (タイプ 3) LSA をフィルタリング します。
ステップ 4	(任意) show ip ospf policy statistics area id filter-list {in out} 例 : switch(config-router)# show ip ospf policy statistics area 0.0.0.10 filter-list in	OSPF ポリシー情報を表示します。
ステップ 5	(任意) copy running-config startup-config 例 : switch(config)# copy running-config startup-config	実行コンフィギュレーションをスタート アップコンフィギュレーションにコピー します

例

次に、エリア 0.0.0.10 でフィルタ リストを設定する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# router ospf 201
switch(config-router)# area 0.0.0.10 filter-list route-map FilterLSAs in
switch(config-router)# copy running-config startup-config
```

スタブエリアの設定

OSPFv2 ドメインの外部トラフィックが不要な個所にスタブエリアを設定できます。スタブエリアは AS 外部 (タイプ 5) LSA をブロックし、選択したネットワークへの往復の不要なルー

ティングを制限します。「[スタブエリア](#)」の項を参照してください。また、すべての集約ルートがスタブエリアを経由しないようブロックすることもできます。

始める前に

OSPF 機能を有効にしてあることを確認します（[OSPFv2 機能の有効化](#)のセクションを参照）。設定されるスタブエリア内に、仮想リンクと ASBR のいずれも含まれないことを確認します。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例： <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	router ospf instance-tag 例： <pre>switch(config)# router ospf 201 switch(config-router)#</pre>	新規 OSPFv2 インスタンスを作成して、設定済みのインスタンス タグを割り当てます。
ステップ 3	area area-id stub 例： <pre>switch(config-router)# area 0.0.0.10 stub</pre>	このエリアをスタブエリアとして作成します。
ステップ 4	(任意) area area-id default-cost cost 例： <pre>switch(config-router)# area 0.0.0.10 default-cost 25</pre>	このスタブエリアに送信されるデフォルト サマリ ルートのコストメトリックを設定します。指定できる範囲は 0 ～ 16777215 です。デフォルトは 1 です。
ステップ 5	(任意) show ip ospf instance-tag 例： <pre>switch(config-router)# show ip ospf 201</pre>	OSPF 情報を表示します。
ステップ 6	(任意) copy running-config startup-config 例： <pre>switch(config)# copy running-config startup-config</pre>	実行コンフィギュレーションをスタートアップコンフィギュレーションにコピーします

例

次に、スタブエリアを作成する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# router ospf 201
switch(config-router)# area 0.0.0.10 stub
switch(config-router)# copy running-config startup-config
```

Totally Stubby エリアの設定

Totally Stubby エリアを作成して、すべての集約ルート更新がスタブ エリアに入るのを防ぐことができます。

Totally Stubby エリアを作成するには、ルータ コンフィギュレーション モードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
area area-id stub no-summary 例 : switch(config-router)# area 20 stub no-summary	このエリアを Totally Stubby エリアとして作成します。

NSSA の設定

OSPFv2 ドメインの一部で一定限度の外部トラフィックが必要な場合は、その部分に NSSA を設定できます。[Not-So-Stubby エリア](#) のセクションを参照してください。また、この外部トラフィックを AS 外部（タイプ 5）LSA に変換して、このルーティング情報で OSPFv2 ドメインをフラッドिंगすることもできます。NSSA は、省略可能な次のパラメータで設定できます。

- **No redistribution** : 再配布されたルートは、NSSA をバイパスして OSPFv2 自律システム内の他のエリアに再配布されます。このオプションは、NSSA ASBR が ABR も兼ねているときに使用します。
- **Default information originate** : 外部自律システムへのデフォルトルートの NSSA 外部（タイプ 7）LSA を生成します。このオプションは、ASBR のルーティングテーブルにデフォルトルートが含まれる場合に NSSA ASBR 上で使用します。このオプションは、ASBR のルーティングテーブルにデフォルトルートが含まれるかどうかに関係なく、NSSA ASBR 上で使用できます。
- **Route map** : 目的のルートだけが NSSA および他のエリア全体でフラッドिंगされるように、外部ルートをフィルタリングします。
- **No summary** : すべての集約ルートが NSSA でフラッドिंगされないようにします。このオプションは NSSA ABR 上で使用します。
- **Translate** : NSSA 外のエリア向けに、NSSA 外部 LSA を AS 外部 LSA に変換します。再配布されたルートを OSPFv2 自律システム全体でフラッドिंगするには、このコマンドを NSSA ABR 上で使用します。また、これらの AS 外部 LSA の転送アドレスを無効にする

こともできます。このオプションを選択した場合は、転送アドレスが0.0.0.0に設定されます。



- (注) 変換オプションでは、NSSA を作成し、他のオプションを設定する **area area-id nssa** コマンドの後に、別の **area area-id nssa** コマンドが必要です。

始める前に

OSPF 機能を有効にしてあることを確認します (OSPFv2 機能のイネーブル化のセクションを参照)。

設定する NSSA 上に仮想リンクがないことと、この NSSA がバックボーンエリアでないことを確認します。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	router ospf instance-tag 例 : <pre>switch(config)# router ospf 201 switch(config-router)#</pre>	新規 OSPFv2 インスタンスを作成して、設定済みのインスタンス タグを割り当てます。
ステップ 3	area area-id nssa [no-redistribution] [default-information-originate] [route-map map-name]] [no-summary] 例 : <pre>switch(config-router)# area 0.0.0.10 nssa no-redistribution</pre>	このエリアを NSSA として作成します。
ステップ 4	(任意) area area-id nssa translate type7 {always never} [suppress-fa]] 例 : <pre>switch(config-router)# area 0.0.0.10 nssa translate type7 always</pre>	AS 外部 (タイプ 7) LSA を NSSA 外部 (タイプ 5) LSA に変換するように NSSA を設定します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 5	(任意) area area-id default-cost cost 例 : <pre>switch(config-router)# area 0.0.0.10 default-cost 25</pre>	この NSSA に送信されるデフォルト集約ルートのコスト メトリックを設定します。
ステップ 6	(任意) show ip ospf instance-tag 例 : <pre>switch(config-router)# show ip ospf 201</pre>	OSPF 情報を表示します。
ステップ 7	(任意) copy running-config startup-config 例 : <pre>switch(config)# copy running-config startup-config</pre>	実行コンフィギュレーションをスタートアップコンフィギュレーションにコピーします

例

次に、すべての集約ルート更新をブロックする NSSA を作成する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# router ospf 201
switch(config-router)# area 0.0.0.10 nssa no-summary
switch(config-router)# copy running-config startup-config
```

次に、デフォルト ルートを生成する NSSA を作成する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# router ospf 201
switch(config-router)# area 0.0.0.10 nssa default-info-originate
switch(config-router)# copy running-config startup-config
```

次に、外部ルートをフィルタリングし、すべての集約ルート更新をブロックする NSSA を作成する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# router ospf 201
switch(config-router)# area 0.0.0.10 nssa route-map ExternalFilter no-summary
switch(config-router)# copy running-config startup-config
```

次に、常に NSSA 外部 (タイプ 5) LSA を AS 外部 (タイプ 7) LSA に変換する NSSA を作成し NSSA を設定する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# router ospf 201
switch(config-router)# area 0.0.0.10 nssa
switch(config-router)# area 0.0.0.10 nssa translate type 7 always
switch(config-router)# copy running-config startup-config
```

仮想リンクの設定

仮想リンクは、隔離されたエリアを中継エリアを介してバックボーンエリアに接続します。仮想リンクには、省略可能な次のパラメータを設定できます。

- **Authentication** : 簡単なパスワード認証または MD5 メッセージ ダイジェスト認証、および関連付けられたキーを設定します。
- **Dead interval** : ローカル ルータがデッドであることを宣言し、隣接関係を解消する前に、ネイバーが hello パケットを待つ時間を設定します。
- **Hello interval** : 連続する hello パケット間の時間間隔を設定します。
- **Retransmit interval** : 連続する LSA 間の推定時間間隔を設定します。
- **Transmit delay** : LSA をネイバーに送信する推定時間を設定します。



(注) リンクがアクティブになる前に、関与する両方のルータで仮想リンクを設定する必要があります。

スタブ エリアには仮想リンクを追加できません。

始める前に

OSPF 機能を有効にしてあることを確認します ([OSPFv2 機能のイネーブル化](#)のセクションを参照)。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	router ospf instance-tag 例 : <pre>switch(config)# router ospf 201 switch(config-router)#</pre>	新規 OSPFv2 インスタンスを作成して、設定済みのインスタンスタグを割り当てます。
ステップ 3	area area-id virtual link router-id 例 : <pre>switch(config-router)# area 0.0.0.10 virtual-link 10.1.2.3 switch(config-router-vlink)#</pre>	リモートルータへの仮想リンクの端を作成します。仮想リンクをリモートルータ上に作成して、リンクを完成させる必要があります。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 4	(任意) show ip ospf virtual-link [brief] 例 : <pre>switch(config-router-vlink)# show ip ospf virtual-link</pre>	OSPF 仮想リンク情報を表示します。
ステップ 5	(任意) copy running-config startup-config 例 : <pre>switch(config)# copy running-config startup-config</pre>	実行コンフィギュレーションをスタートアップコンフィギュレーションにコピーします
ステップ 6	(任意) authentication [key-chain key-id message-digest null] 例 : <pre>switch(config-router-vlink)# authentication message-digest</pre>	エリアに基づくこの仮想リンクの認証がオーバーライドされます。
ステップ 7	(任意) authentication-key [0 3] key 例 : <pre>switch(config-router-vlink)# authentication-key 0 mypass</pre>	この仮想リンクに簡易パスワードを設定します。認証が、キーチェーンにもメッセージダイジェストにも設定されていない場合は、このコマンドを使用します。0 の場合は、パスワードをクリア テキストで設定します。3 の場合は、パスワードを 3DES 暗号化として設定します。
ステップ 8	(任意) dead-interval seconds 例 : <pre>switch(config-router-vlink)# dead-interval 50</pre>	OSPFv2 デッド間隔を秒単位で設定します。有効な範囲は 1 ～ 65535 です。デフォルトでは、hello 間隔の秒数の 4 倍です。
ステップ 9	(任意) hello-interval seconds 例 : <pre>switch(config-router-vlink)# hello-interval 25</pre>	OSPFv2 hello 間隔を秒単位で設定します。有効な範囲は 1 ～ 65535 です。デフォルトは 10 秒です。
ステップ 10	(任意) message-digest-key key-id md5 [0 3] key 例 : <pre>switch(config-router-vlink)# message-digest-key 21 md5 0 mypass</pre>	この仮想リンクにメッセージダイジェスト認証を設定します。認証がメッセージダイジェストに設定されている場合は、このコマンドを使用します。0 の場合は、パスワードをクリア テキストで設定します。3 の場合は、パスワードを 3DES 暗号化として設定します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 11	(任意) retransmit-interval seconds 例 : <pre>switch(config-router-vlink)# retransmit-interval 50</pre>	OSPFv2 再送信間隔を秒単位で設定します。有効な範囲は 1 ～ 65535 です。デフォルトは 5 分です。
ステップ 12	(任意) transmit-delay seconds 例 : <pre>switch(config-router-vlink)# transmit-delay 2</pre>	OSPFv2 送信遅延を秒単位で設定します。指定できる範囲は 1 ～ 450 です。デフォルトは 1 です。

例

次に、2 つの ABR 間に簡単な仮想リンクを作成する例を示します。

ABR 1 (ルータ ID 27.0.0.55) の設定は、次のとおりです。

```
switch# configure terminal
switch(config)# router ospf 201
switch(config-router)# area 0.0.0.10 virtual-link 10.1.2.3
switch(config-router-vlink)# copy running-config startup-config
```

ABR 2 (ルータ ID 10.1.2.3) の設定は、次のとおりです。

```
switch# configure terminal
switch(config)# router ospf 101
switch(config-router)# area 0.0.0.10 virtual-link 27.0.0.55
switch(config-router-vlink)# copy running-config startup-config
```

再配布の設定

他のルーティングプロトコルから学習したルートを、ASBR 経由で OSPFv2 自律システムに再配布できます。

OSPF でのルート再配布には、省略可能な次のパラメータを設定できます。

- **Default information originate** : 外部自律システムへのデフォルト ルートの AS 外部 (タイプ 5) LSA を生成します。



(注) **Default information originate** はオプションのルートマップ内の **match** 文を無視します。

- **Default metric** : すべての再配布ルートに同じコスト メトリックを設定します。



- (注) スタティック ルートを再配布する場合、デフォルトの 7.0(3)I7(6) スタティック ルートを正常に再配布するためには、Cisco NX-OS は **default-information originate** コマンドを必要とします。

始める前に

OSPF 機能がイネーブルになっていることを確認します。

再配布で使用する、必要なルート マップを作成します。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	router ospf instance-tag 例 : <pre>switch(config)# router ospf 201 switch(config-router)#</pre>	新規 OSPFv2 インスタンスを作成して、設定済みのインスタンス タグを割り当てます。
ステップ 3	redistribute {bgp id direct eigrp id isis id ospf id rip id static} route-map map-name 例 : <pre>switch(config-router)# redistribute bgp route-map FilterExternalBGP</pre>	設定したルート マップ経由で、選択したプロトコルを OSPF に再配布します。 (注) スタティック ルートを再配布する場合、デフォルトの 7.0(3)I7(6) スタティック ルートを正常に再配布するためには、Cisco NX-OS は default-information originate コマンドを必要とします。 。
ステップ 4	default-information originate [always] [route-map map-name] 例 : <pre>switch(config-router)# default-information-originate route-map DefaultRouteFilter</pre>	デフォルト ルートが RIB に存在する場合は、この OSPF ドメインにデフォルト ルートを作成します。次の省略可能なキーワードを使用します。 • always : ルートが RIB に存在しない場合でも、常にデフォルト ルート 0.0.0. を生成します。

	コマンドまたはアクション	目的
		• route-map : ルート マップが true を返す場合にデフォルト ルートを生成します。 (注) このコマンドは、ルート マップの match 文を無視します。
ステップ 5	default-metric [cost] 例 : <pre>switch(config-router)# default-metric 25</pre>	再配布されたルートのコスト メトリックを設定します。このコマンドは、直接接続されたルートには適用されません。ルート マップを使用して、直接接続されたルートのデフォルトのメトリックを設定します。
ステップ 6	(任意) copy running-config startup-config 例 : <pre>switch(config)# copy running-config startup-config</pre>	実行コンフィギュレーションをスタートアップコンフィギュレーションにコピーします

例

次に、ボーダー ゲートウェイ プロトコル (BGP) を OSPF に再配布する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# router ospf 201
switch(config-router)# redistribute bgp route-map FilterExternalBGP
switch(config-router)# copy running-config startup-config
```

再配布されるルート数の制限

ルートの再配布によって、OSPFv2 ルート テーブルに多くのルートが追加される可能性があります。外部プロトコルから受け取るルートの数の上限を設定できます。OSPFv2 には、再配布ルートの制限を設定するために次のオプションが用意されています。

- 上限固定 : 設定された最大値に OSPFv2 が達すると、メッセージをログに記録します。OSPFv2 は以降の再配布ルートを受け取りません。任意で、最大値のしきい値パーセンテージを設定して、OSPFv2 がこのしきい値を超えたときに警告を記録するようにすることもできます。
- 警告のみ : OSPFv2 が最大値に達したときのみ、警告のログを記録します。OSPFv2 は、再配布されたルートを受け入れ続けます。

- 取り消し：OSPFv2 が最大値に達したときにタイムアウト期間を開始します。このタイムアウト期間後、現在の再配布されたルート数が最大制限より少なければ、OSPFv2 はすべての再配布されたルートを要求します。再配布されたルートの現在数が最大数に達した場合、OSPFv2 はすべての再配布されたルートを取り消します。OSPFv2 が追加の再配布されたルートを受け付ける前に、この状況を解消する必要があります。
- 任意で、タイムアウト期間を設定できます。

始める前に

OSPF 機能がイネーブルになっていることを確認します。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例： <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	router ospf instance-tag 例： <pre>switch(config)# router ospf 201 switch(config-router)#</pre>	新規 OSPFv2 インスタンスを作成して、設定済みのインスタンス タグを割り当てます。
ステップ 3	redistribute {bgp id direct eigrp id isis id ospf id rip id static} route-map map-name 例： <pre>switch(config-router)# redistribute bgp route-map FilterExternalBGP</pre>	設定したルート マップ経由で、選択したプロトコルを OSPF に再配布します。
ステップ 4	redistribute maximum-prefix max [threshold] [warning-only withdraw [num-retries timeout]] 例： <pre>switch(config-router)# redistribute maximum-prefix 1000 75 warning-only</pre>	OSPFv2 が配布するプレフィックスの最大数を指定します。指定できる範囲は 0 ～ 65536 です。任意で次のオプションを指定します。 • threshold：警告メッセージをトリガーする最大プレフィックス数のパーセンテージ。 • warning-only：プレフィックスの最大数を超えた場合に警告メッセージを記録します。 • withdraw：再配布されたすべてのルートを取り消します。任意で再配

	コマンドまたはアクション	目的
		布されたルートを取得しようと試みます。 <i>num-retries</i> の範囲は 1 ～ 12 です。 <i>timeout</i> の範囲は 60 ～ 600 秒です。デフォルトは 300 秒です。 clear ip ospf redistribution コマンドは、すべてのルートが取り消された場合に使用します。
ステップ 5	(任意) show running-config ospf 例 : switch(config-router)# show running-config ospf	OSPFv2 設定を表示します。
ステップ 6	(任意) copy running-config startup-config 例 : switch(config)# copy running-config startup-config	実行コンフィギュレーションをスタートアップコンフィギュレーションにコピーします

例

次に、OSPF に再配布されるルート数を制限する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# router ospf 201
switch(config-router)# redistribute bgp route-map FilterExternalBGP
switch(config-router)# redistribute maximum-prefix 1000 75
```

ルート集約の設定

集約したアドレス範囲を設定することにより、エリア間ルートのルート集約を設定できます。また、ASBR 上のこれらのルートのサマリアドレスを設定して、外部の再配布されたルートのルート集約を設定することもできます。「[ルート集約](#)」の項を参照してください。

始める前に

OSPF 機能がイネーブルになっていることを確認します。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 :	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。

	コマンドまたはアクション	目的
	switch# configure terminal switch(config)#	
ステップ 2	router ospf instance-tag 例 : switch(config)# router ospf 201 switch(config-router)#	新規 OSPFv2 インスタンスを作成して、設定済みのインスタンス タグを割り当てます。
ステップ 3	area area-id range ip-prefix/length [no-advertise] [cost cost] 例 : switch(config-router)# area 0.0.0.10 range 10.3.0.0/16	一定の範囲のアドレスのサマリ アドレスを ABR 上に作成します。このサマリ アドレスをネットワーク集約（タイプ 3）LSA にアドバタイズしないようにすることもできます。cost の範囲は 0 ～ 16777215 です。
ステップ 4	summary-address ip-prefix/length [no-advertise tag tag] 例 : switch(config-router)# summary-address 10.5.0.0/16 tag 2	一定の範囲のアドレスのサマリ アドレスを ABR 上に作成します。ルートマップによる再配布で使えるよう、このサマリ アドレスにタグを割り当てることもできます。
ステップ 5	（任意） show ip ospf summary-address 例 : switch(config-router)# show ip ospf summary-address	OSPF サマリ アドレスに関する情報を表示します。
ステップ 6	（任意） copy running-config startup-config 例 : switch(config)# copy running-config startup-config	実行コンフィギュレーションをスタートアップコンフィギュレーションにコピーします

例

次に、ABR 上のエリア間のサマリ アドレスを作成する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# router ospf 201
switch(config-router)# area 0.0.0.10 range 10.3.0.0/16
switch(config-router)# copy running-config startup-config
```

次に、ASBR 上のサマリ アドレスを作成する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# router ospf 201
switch(config-router)# summary-address 10.5.0.0/16
switch(config-router)# copy running-config startup-config
```

スタブルートアドバタイズメントの設定

短期間だけ、このルータ経由の OSPFv2 トラフィックを制限する場合は、スタブルートアドバタイズメントを使用します。

スタブルートアドバタイズメントは、省略可能な次のパラメータで設定できます。

- **On startup** : 指定した宣言期間だけ、スタブルートアドバタイズメントを送信します。
- **Wait for BGP** : BGP がコンバージェンスするまで、スタブルートアドバタイズメントを送信します。



(注) ルータの実行コンフィギュレーションがグレースフルシャットダウンを行うよう設定されている場合は、その実行コンフィギュレーションを保存しないでください。保存すると、ルータが、リロード後に最大メトリックをアドバタイズし続けることになります。

始める前に

OSPF 機能がイネーブルになっていることを確認します。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	router ospf instance-tag 例 : <pre>switch(config)# router ospf 201 switch(config-router)#</pre>	新規 OSPFv2 インスタンスを作成して、設定済みのインスタンス タグを割り当てます。
ステップ 3	max-metric router-lsa [external-lsa [max-metric-value]] [include-stub] [on-startup {seconds wait-for bgp tag}] [summary-lsa [max-metric-value]] 例 : <pre>switch(config-router)# max-metric router-lsa</pre>	OSPFv2 スタブルートアドバタイズメントを設定します。
ステップ 4	(任意) copy running-config startup-config 例 :	実行コンフィギュレーションをスタートアップコンフィギュレーションにコピーします

	コマンドまたはアクション	目的
	switch(config)# copy running-config startup-config	

例

次に、起動時にスタブルータ アドバタイズメントを、デフォルトの 600 秒間イネーブルにする例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# router ospf 201
switch(config-router)# max-metric router-lsa on-startup
switch(config-router)# copy running-config startup-config
```

デフォルト タイマーの変更

OSPFv2 には、プロトコル メッセージの動作および最短パス優先 (SPF) の計算を制御する多数のタイマーが含まれています。OSPFv2 には、省略可能な次のタイマー パラメータが含まれます。

- LSA arrival time : ネイバーから着信する LSA 間で許容される最小間隔を設定します。この時間より短時間で到着する LSA はドロップされます。
- Pacing LSAs : LSA が集められてグループ化され、リフレッシュされて、チェックサムが計算される間隔、つまり期限切れとなる間隔を設定します。このタイマーは、LSA 更新が実行される頻度を制御し、LSA 更新メッセージで送信される LSA 更新の数を制御します（「[フラiddiingと LSA グループ ペーシング](#)」を参照）。
- Throttle LSAs : LSA 生成のレート制限を設定します。このタイマーは、トポロジが変更された後に LSA が生成される頻度を制御します。
- Throttle SPF calculation : SPF 計算の実行頻度を制御します。

インターフェイス レベルでは、次のタイマーも制御できます。

- Retransmit interval : 連続する LSA 間の推定時間間隔を設定します。
- Transmit delay : LSA をネイバーに送信する推定時間を設定します。

hello 間隔とデッドタイマーに関する情報の詳細については、「[OSPFv2 のネットワークの設定](#)」の項を参照してください。

始める前に

OSPF 機能を有効にしてあることを確認します（[OSPFv2 機能の有効化](#)のセクションを参照）。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	router ospf instance-tag 例 : <pre>switch(config)# router ospf 201 switch(config-router)#</pre>	新規 OSPFv2 インスタンスを作成して、設定済みのインスタンス タグを割り当てます。
ステップ 3	timers lsa-arrival msec 例 : <pre>switch(config-router)# timers lsa-arrival 2000</pre>	LSA 到着時間をミリ秒で設定します。範囲は 10 ～ 600000 です。デフォルトは 1000 ミリ秒です。
ステップ 4	timers lsa-group-pacing seconds 例 : <pre>switch(config-router)# timers lsa-group-pacing 1800</pre>	LSA がグループ化される間隔を秒で設定します。範囲は 1 ～ 1800 です。デフォルトは 240 秒です。
ステップ 5	timers throttle lsa start-time hold-interval max-time 例 : <pre>switch(config-router)# timers throttle lsa 3000 6000 6000</pre>	次のタイマーを使用して、LSA 生成のレート制限をミリ秒で設定します。 • start-time : 指定できる範囲は 50 ～ 5000 ミリ秒です。デフォルト値は 50 ミリ秒です。 • hold-interval : 指定できる範囲は 50 ～ 30,000 ミリ秒です。デフォルト値は 5000 ミリ秒です。 • max-time : 指定できる範囲は 50 ～ 30,000 ミリ秒です。デフォルト値は 5000 ミリ秒です。
ステップ 6	timers throttle spf delay-time hold-time max-time 例 : <pre>switch(config-router)# timers throttle spf 3000 2000 5000</pre>	SPF 最適パス計算間の SPF 最適パス スケジュール初期遅延時間、最小保持時間、および最大待機時間（ミリ秒単位）を設定します。範囲は 1 ～ 600000 ミリ秒です。デフォルト値は、200 ミリ秒の遅延時間、1000 ミリ秒の保持時間、および 5000 ミリ秒の待機時間です。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 7	interface type slot/port 例 : switch(config)# interface ethernet 1/2 switch(config-if)	インターフェイス設定モードを開始します。
ステップ 8	no switchport 例 : switch(config-if)# no switchport	そのインターフェイスを、レイヤ 3 ルーテッドインターフェイスとして設定します。
ステップ 9	ip ospf hello-interval seconds 例 : switch(config-if)# ip ospf hello-interval 30	このインターフェイスの hello 間隔を設定します。有効な範囲は 1 ～ 65535 です。デフォルトは 10 です。
ステップ 10	ip ospf dead-interval seconds 例 : switch(config-if)# ip ospf dead-interval 30	このインターフェイスのデッド間隔を設定します。有効な範囲は 1 ～ 65535 です。
ステップ 11	ip ospf retransmit-interval seconds 例 : switch(config-if)# ip ospf retransmit-interval 30	このインターフェイスから送信される各 LSA 間の推定時間間隔を設定します。有効な範囲は 1 ～ 65535 です。デフォルトは 5 分です。
ステップ 12	ip ospf transmit-delay seconds 例 : switch(config-if)# ip ospf transmit-delay 450 switch(config-if)#	LSA をネイバーに送信する推定時間間隔を秒で設定します。指定できる範囲は 1 ～ 450 です。デフォルトは 1 です。
ステップ 13	(任意) show ip ospf 例 : switch(config-if)# show ip ospf	OSPF に関する情報を表示します。
ステップ 14	(任意) copy running-config startup-config 例 : switch(config)# copy running-config startup-config	実行コンフィギュレーションをスタートアップコンフィギュレーションにコピーします

例

次に、lsa-group-pacing オプションで LSA フラッドイングを制御する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# router ospf 201
switch(config-router)# timers lsa-group-pacing 300
switch(config-router)# copy running-config startup-config
```

OSPFv2 インスタンスの再起動

OSPFv2 インスタンスを再起動できます。この処理では、インスタンスのすべてのネイバーが消去されます。

OSPFv2 インスタンスを再起動して、関連付けられたすべてのネイバーを削除するには、次のコマンドを使用します。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	restart ospf instance-tag 例 : <pre>switch(config)# restart ospf 201</pre>	OSPFv2 インスタンスを再起動して、すべてのネイバーを削除します。

仮想化による OSPFv2 の設定

複数の OSPFv2 インスタンスを作成することができます。また、複数の VRF を作成し、各 VRF で同じ OSPFv2 インスタンスまたは複数の OSPFv3 インスタンスを使用することもできます。VRF に OSPFv2 インスタンスを割り当てることができます。



- (注) インターフェイスの VRF を設定した後に、インターフェイスの他のすべてのパラメータを設定します。インターフェイスの VRF を設定すると、そのインターフェイスのすべての設定が削除されます。

始める前に

OSPF 機能を有効にしてあることを確認します ([OSPFv2 機能の有効化](#)のセクションを参照)。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 2	vrf context <i>vrf-name</i> 例 : <pre>switch(config)# vrf context RemoteOfficeVRF switch(config-vrf)#</pre>	新しい VRF を作成し、VRF 設定モードを開始します。
ステップ 3	router ospf <i>instance-tag</i> 例 : <pre>switch(config-vrf)# router ospf 201 switch(config-router)#</pre>	新規 OSPFv2 インスタンスを作成して、設定済みのインスタンスタグを割り当てます。
ステップ 4	vrf <i>vrf-name</i> 例 : <pre>switch(config-router)# vrf RemoteOfficeVRF switch(config-router-vrf)#</pre>	VRF 設定モードを開始します。
ステップ 5	(任意) maximum-paths <i>path</i> 例 : <pre>switch(config-router-vrf)# maximum-paths 4</pre>	この VRF のルートテーブル内の宛先への、同じ OSPFv2 パスの最大数を設定します。この機能は、ロードバランシングに使用されます。
ステップ 6	interface <i>interface-type slot/port</i> 例 : <pre>switch(config-router-vrf)# interface ethernet 1/2 switch(config-if)#</pre>	インターフェイス設定モードを開始します。
ステップ 7	no switchport 例 : <pre>switch(config-if)# no switchport</pre>	そのインターフェイスを、レイヤ 3 ルーテッドインターフェイスとして設定します。
ステップ 8	vrf member <i>vrf-name</i> 例 : <pre>switch(config-if)# vrf member RemoteOfficeVRF</pre>	このインターフェイスを VRF に追加します。
ステップ 9	ip address <i>ip-prefix/length</i> 例 : <pre>switch(config-if)# ip address 192.0.2.1/16</pre>	このインターフェイスの IP アドレスを設定します。このステップは、このインターフェイスを VRF に割り当てたあとに行う必要があります。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 10	ip router ospf instance-tag area area-id 例 : <pre>switch(config-if)# ip router ospf 201 area 0</pre>	このインターフェイスを OSPFv2 インスタンスおよび設定エリアに割り当てます。
ステップ 11	(任意) copy running-config startup-config 例 : <pre>switch(config)# copy running-config startup-config</pre>	実行コンフィギュレーションをスタートアップコンフィギュレーションにコピーします

例

次に、VRF を作成して、その VRF にインターフェイスを追加する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# vrf context NewVRF
switch(config)# router ospf 201
switch(config)# interface ethernet 1/2
switch(config-if)# vrf member NewVRF
switch(config-if)# ip address 192.0.2.1/16
switch(config-if)# ip router ospf 201 area 0
switch(config-if)# copy running-config startup-config
```

OSPFv2 設定の確認

OSPFv2 設定を表示するには、次のいずれかの作業を行います。

コマンド	目的
show ip ospf	OSPFv2 設定を表示します。
show ip ospf border-routers [vrf {vrf-name all default management}]	OSPFv2 境界ルータ設定を表示します。
show ip ospf database [vrf {vrf-name all default management}]	OSPFv2 リンクステート データベースの要約を表示します。
show ip ospf interface number [vrf {vrf-name all default management}]	OSPFv2 インターフェイス設定を表示します。
show ip ospf lsa-content-changed-list neighbor-id interface-type number [vrf {vrf-name all default management}]	変更された OSPFv2 LSA を表示します。
show ip ospf neighbors [neighbor-id] [detail] [interface-type number] [vrf {vrf-name all default management}] [summary]	OSPFv2 ネイバーの一覧を表示します。

コマンド	目的
show ip ospf request-list <i>neighbor-id interface-type number</i> [vrf { <i>vrf-name</i> all default management }]	OSPFv2 リンクステート要求の一覧を表示します。
show ip ospf retransmission-list <i>neighbor-id interface-type number</i> [vrf { <i>vrf-name</i> all default management }]	OSPFv2 リンクステート再送の一覧を表示します。
show ip ospf route [<i>ospf-route</i>] [summary] [vrf { <i>vrf-name</i> all default management }]	内部 OSPFv2 ルートを表示します。
show ip ospf summary-address [vrf { <i>vrf-name</i> all default management }]	OSPFv2 サマリ アドレスに関する情報を表示します。
show ip ospf virtual-links [brief] [vrf { <i>vrf-name</i> all default management }]	OSPFv2 仮想リンクに関する情報を表示します。
show ip ospf vrf { <i>vrf-name</i> all default management }	VRF ベースの OSPFv2 設定に関する情報を表示します。
show running-configuration ospf	現在実行中の OSPFv2 設定を表示します。

OSPFv2 統計情報の表示

OSPFv2 統計情報を表示するには、次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
show ip ospf policy statistics area <i>area-id filter-list</i> { in out } [vrf { <i>vrf-name</i> all default management }]	エリアの OSPFv2 ルート ポリシー統計情報を表示します。
show ip ospf policy statistics redistribute { bgp <i>id</i> direct eigrp <i>id</i> ospf <i>id</i> rip <i>id</i> static } [vrf { <i>vrf-name</i> all default management }]	OSPFv2 ルート ポリシー統計情報を表示します。
show ip ospf statistics [vrf { <i>vrf-name</i> all default management }]	OSPFv2 イベント カウンタを表示します。
show ip ospf traffic [<i>interface - type number</i>] [vrf { <i>vrf-name</i> all default management }]	OSPFv2 パケット カウンタを表示します。

OSPFv2 の設定例

次に、OSPFv2 を設定する例を示します。

```
feature ospf
router ospf 201
router-id 290.0.2.1
```

```
interface ethernet 1/2
no switchport
ip router ospf 201 area 0.0.0.10
ip ospf authentication
ip ospf authentication-key 0 mypass
```

その他の参考資料

OSPF の実装に関する詳細情報については、次のページを参照してください。

関連資料

関連項目	マニュアル タイトル
OSPFv2 CLI コマンド	『Cisco Nexus 3000 Series Command Reference』
ルート マップ	Route Policy Manager の設定 (441 ページ)

MIB

MIB	MIB のリンク
• OSPF-MIB • OSPF-IRAP-MIB	MIB を検索してダウンロードするには、次の MIB ロケータ に移動します。



第 7 章

OSPFv3 の設定

この章では、Cisco NX-OS デバイスで IPv6 ネットワーク用の Open Shortest Path First version 3 (OSPFv3) を構成する方法について説明します。

この章は、次の項で構成されています。

- [OSPFv3 について \(127 ページ\)](#)
- [OSPFv3 の前提条件 \(142 ページ\)](#)
- [OSPFv3 の注意事項および制約事項 \(142 ページ\)](#)
- [デフォルト設定 \(143 ページ\)](#)
- [基本的なOSPFv3の設定 \(143 ページ\)](#)
- [OSPFv3 の設定の確認 \(176 ページ\)](#)
- [OSPFv3のモニタリング \(177 ページ\)](#)
- [OSPFv3 の設定例 \(178 ページ\)](#)
- [関連項目 \(178 ページ\)](#)
- [その他の参考資料 \(178 ページ\)](#)

OSPFv3 について

OSPFv3 は、IETF リンクステート プロトコル ([概要 \(7 ページ\)](#) を参照) です。OSPFv3 ルータは、hello パケットと呼ばれる特別なメッセージを各 OSPF 対応インターフェイスに送信し、他の OSPFv3 隣接ルータを探索します。ネイバー ルータが発見されると、この 2 台のルータは hello パケットの情報を比較して、両者の設定に互換性のあるかどうかを判定します。これらのネイバー ルータは隣接を確立しようとします。つまり、両者のリンクステート データベースを同期させて、確実に同じ OSPFv3 ルーティング情報を持つようにします。隣接ルータは、各リンクの稼働状態に関する情報、リンクのコスト、およびその他のあらゆるネイバー情報を含むリンクステート アドバタイズメント (LSA) を共有します。これらのルータはその後、受信した LSA をすべての OSPF イネーブル インターフェイスにフラッドします。これにより、すべての OSPFv3 ルータのリンクステート データベースが最終的に同じになります。すべての OSPFv3 ルータのリンクステート データベースが同じになると、ネットワークは収束します (「[コンバージェンス](#)」を参照)。その後、各ルータは、ダイクストラの最短パス優先 (SPF) アルゴリズムを使用して、自身のルート テーブルを構築します。

OSPFv3 ネットワークは、複数のエリアに分割できます。ルータは、ほとんどの LSA を 1 つのエリア内だけに送信するため、OSPF 対応ルータの CPU とメモリの要件が緩やかになります。

OSPFv3 は IPv6 をサポートしています。IPv4 向けの OSPF の詳細については、[OSPFv2 の設定 \(79 ページ\)](#) を参照してください。

OSPFv3 と OSPFv2 の比較

OSPFv3 プロトコルの大半は OSPFv2 と同じです。OSPFv3 は RFC 2740 に記載されています。

OSPFv3 プロトコルと OSPFv2 プロトコルの重要な相違点は、次のとおりです。

- OSPFv2 を拡張した OSPFv3 では、IPv6 ルーティング プレフィックスとサイズの大きい IPv6 アドレスのサポートを提供しています。
- OSPFv3 の LSA は、アドレスとマスクではなく、プレフィックスとプレフィックス長として表現されます。
- ルータ ID とエリア ID は 32 ビット数で、IPv6 アドレスとは無関係です。
- OSPFv3 では、ネイバー探索およびその他の機能にリンクローカル IPv6 アドレスを使用します。
- OSPFv3 は、IPv6 認証トレーラ (RFC 6506) または IPSec (RFC 4552) を使用できます。ただし、Cisco NX-OS は RFC 6506 をサポートしておらず、RFC 4552 の一部のみをサポートしています。
- OSPFv3 では、LSA タイプが再定義されています。

Hello パケット

OSPFv3 ルータは、すべての OSPF イネーブル インターフェイスに hello パケットを定期的に送信します。ルータがこの hello パケットを送信する頻度は、インターフェイスごとに設定された hello 間隔により決定されます。OSPFv3 は、hello パケットを使用して、次のタスクを実行します。

- ネイバー探索
- キープアライブ
- 双方向通信
- 指定ルータの選定 (「[指定ルータ](#)」セクションを参照してください)

hello パケットには、リンクの OSPFv3 コスト割り当て、hello 間隔、送信元ルータのオプション機能など、送信元の OSPFv3 インターフェイスとルータに関する情報が含まれます。これらの hello パケットを受信する OSPFv3 インターフェイスは、設定に受信インターフェイスの設定との互換性があるかどうかを判定します。互換性のあるインターフェイスはネイバーと見なされ、ネイバー テーブルに追加されます (「[ネイバー](#)」の項を参照してください)。

hello パケットには、送信元インターフェイスが通信したルータのルータ ID のリストも含まれます。受信インターフェイスが、このリストで自身の ID を見つけた場合は、2 つのインターフェイス間で双方向通信が確立されます。

OSPFv3 は、hello パケットをキープアライブメッセージとして使用して、ネイバーが通信を継続中であるかどうかを判定します。ルータが設定されたデッド間隔（通常は hello 間隔の倍数）で hello パケットを受信しない場合、そのネイバーはローカル ネイバー テーブルから削除されます。

ネイバー情報

ネイバーであると思なされるようにするには、リモートインターフェイスと互換性があるように OSPFv3 インターフェイスを設定しておく必要があります。この 2 つの OSPFv3 インターフェイスで、次の基準が一致している必要があります。

- hello 間隔
- デッド間隔
- エリア ID（「[エリア](#)」の項を参照）
- 認証
- オプション機能

一致する場合は、次の情報がネイバー テーブルに入力されます。

- ネイバー ID：ネイバー ルータのルータ ID
- 優先度：ネイバー ルータの優先度。プライオリティは、指定ルータの選定（「[指定ルータ](#)」を参照）に使用されます。
- 状態：ネイバーから通信があったか、双方向通信の確立処理中であるか、リンクステート情報を共有しているか、または完全な隣接関係が確立されたかを示します。
- デッドタイム：このネイバーから最後の hello パケットを受信したあとに経過した時間を示します。
- リンクローカル IPv6 アドレス：ネイバーのリンクローカル IPv6 アドレス
- 指定ルータ：ネイバーが指定ルータ、またはバックアップ指定ルータとして宣言されたかどうかを示します（「[指定ルータ](#)」の項を参照）。
- ローカルインターフェイス：このネイバーの hello パケットを受信したローカルインターフェイス。

最初の hello パケットが新規ネイバーから受信されると、そのネイバーは、初期化状態のネイバーテーブルに入力されます。いったん双方向通信が確立されると、ネイバー状態は双方向となります。2 つのインターフェイスが互いのリンクステートデータベースを交換するため、次に ExStart および交換状態となります。これらがすべて完了すると、ネイバーは完全な状態へ

と移行し、これが完全な隣接関係となります。ネイバーは、デッド間隔でhello パケットをまったく送信しない場合は、ダウン状態に移行し、隣接とは見なされなくなります。

隣接関係

すべてのネイバーが隣接関係を確立するわけではありません。ネットワークタイプと確立された指定ルータに応じて、完全な隣接関係を確立して、すべてのネイバーと LSA を共有するものと、そうでないものがあります。詳細については、「[指定されたルータ](#)」セクションを参照してください。

隣接関係は、OSPFv3 のデータベース説明パケット、リンク状態要求パケット、およびリンク状態更新パケットを使用して確立されます。データベース説明パケットには、ネイバーのリンクステートデータベースからの LSA ヘッダーが含まれます（「[リンク状態データベース](#)」の項を参照）。ローカルルータは、これらのヘッダーを自身のリンクステートデータベースと比較して、新規の LSA か、更新された LSA かを判定します。ローカルルータは、新規または更新の情報を必要とする各 LSA について、リンク状態要求パケットを送信します。これに対し、ネイバーはリンク状態更新パケットを返信します。このパケット交換は、両方のルータのリンクステート情報が同じになるまで続きます。

指定ルータ

複数のルータを含むネットワークは、OSPFv3 特有の状況です。すべてのルータがネットワークで LSA をフラッドした場合は、同じリンクステート情報が複数の送信元から送信されます。ネットワークのタイプによっては、OSPFv3 は指定ルータ（DR）という 1 台のルータを使用して LSA のフラッドを制御し、OSPFv3 の残りの部分に対してネットワークを代表する役割をさせる場合があります（「[エリア](#)」の項を参照）。DR がダウンした場合、OSPFv3 はバックアップ指定ルータ（BDR）を選択します。DR がダウンすると、OSPFv3 はこの BDR を使用します。

ネットワークタイプは次のとおりです。

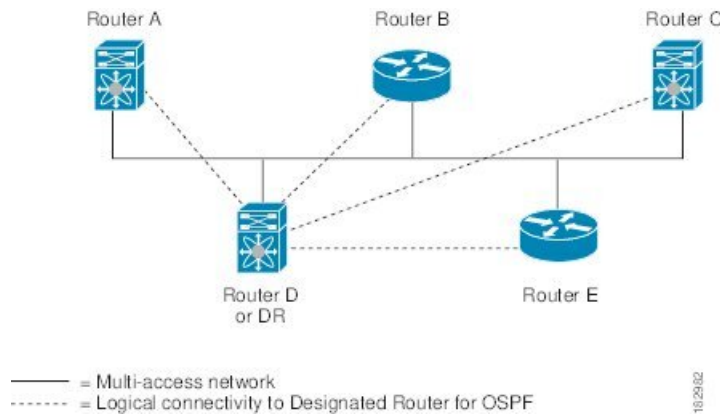
- ポイントツーポイント：2 台のルータ間にのみ存在するネットワーク。ポイントツーポイント ネットワーク上の全ネイバーは隣接関係を確立し、DR は存在しません。
- ブロードキャスト：ブロードキャストトラフィックが可能なイーサネットなどの共有メディア上で通信できる複数のルータを持つネットワーク。OSPFv3 ルータは DR および BDR を確立し、これらにより、ネットワーク上の LSA フラッドを制御します。OSPFv3 は、よく知られている IPv6 マルチキャストアドレス FF02::5 および MAC アドレス 0100.5300.0005 を使用して、ネイバーと通信します。

DR と BDR は、hello パケット内の情報に基づいて選択されます。インターフェイスは hello パケットの送信時に、どれが DR および BDR かわかっている場合は、優先フィールドと、DR および BDR フィールドを設定します。ルータは、hello パケットの DR および BDR フィールドで宣言されたルータと優先フィールドに基づいて、選定手順を実行します。最終的に OSPFv3 は、最も大きいルータ ID を DR および BDR として選択します。

他のルータはすべて DR および BDR と隣接関係を確立し、IPv6 マルチキャストアドレス FF02::6 を使用して、LSA 更新情報を DR と BDR に送信します。次の図は、すべてのルータと DR との隣接関係を示しています。

DR は、ルータ インターフェイスに基づいています。1 つのネットワークの DR であるルータは、別のインターフェイス上の他のネットワークの DR となることはできません

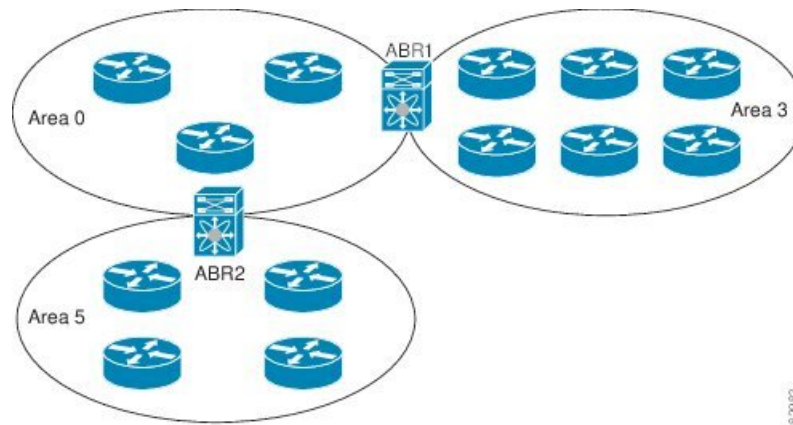
図 21: マルチアクセス ネットワークの DR



エリア

OSPFv3 ネットワークを複数のエリアに分割すると、ルータに要求される OSPFv3 の CPU とメモリに関する要件を制限できます。エリアとは、ルータの論理的な区分で、OSPFv3 ドメイン内にリンクして別のサブドメインを作成します。LSA フラッドイングはエリア内でのみ発生し、リンクステートデータベースはエリア内のリンクにのみ制限されます。定義されたエリア内のインターフェイスには、エリア ID を割り当てることができます。エリア ID は、10.2.3.1 などの数字またはドット付き 10 進表記で表すことができる 32 ビット値です。Cisco NX-OS では、常にドット付き 10 進表記でエリアが表示されます。OSPFv3 ネットワークで、0 という予約されたエリア ID を持つバックボーンエリアも定義する必要があります。エリアが複数ある場合は、1 台以上のルータがエリア境界ルータ (ABR) となります。ABR は、バックボーンエリアと他の 1 つ以上の定義済みエリアの両方に接続します (次の図を参照)。

図 22: OSPFv3 エリア



ABR には、接続するエリアごとに個別のリンクステートデータベースがあります。ABR は、接続したエリアの 1 つからバックボーン エリアにエリア間プレフィックス（タイプ 3）LSA（「[ルート集約](#)」セクションを参照）を送信します。バックボーンエリアは、1 つのエリアに関する集約情報を別のエリアに送信します。**OSPFv3 エリア**の図では、エリア 0 が、エリア 5 に関する集約情報をエリア 3 に送信しています。

OSPFv3 では、自律システム境界ルータ（ASBR）という、もう 1 つのルータ タイプも定義されています。このルータは、OSPFv3 エリアを別の自律システム（AS）に接続します。自律システムとは、単一の技術的管理エンティティにより制御されるネットワークです。OSPFv3 は、そのルーティング情報を別の自律システムに再配布したり、再配布されたルートを別の自律システムから受信したりできます。詳細については、「[詳細な機能](#)」のセクションを参照してください。

リンクステートアドバタイズメント

OSPFv3 はリンクステートアドバタイズメント（LSA）を使用して、固有のルーティングテーブルを構築します。

LSA タイプ

次のテーブルに、Cisco NX-OS でサポートされる LSA タイプを示します。

表 15: LSA タイプ

名前	名前	説明
1	ルータ LSA	すべてのルータが送信する LSA。この LSA には、すべてのリンクの状態とコストが含まれますが、プレフィックス情報は含まれません。ルータ LSA は SPF 再計算をトリガーします。ルータ LSA は 指定ルータ (130ページ) ローカル OSPFv3 エリアにフラッドイングされます。
2	ネットワーク LSA	DR が送信する LSA。この LSA には、マルチアクセス ネットワーク内のすべてのルータの一覧が含まれますが、プレフィックス情報は含まれません。ネットワーク LSA は SPF 再計算をトリガーします。「指定ルータ」のセクションを参照してください。
3	エリア間プレフィックス LSA	ABR が、ローカルエリア内の宛先ごとに外部エリアに送信する LSA。この LSA には、境界ルータからローカルの宛先へのリンク コストが含まれます。「 エリア 」のセクションを参照してください。
4	エリア間ルータ LSA	エリア境界ルータが外部エリアに送信する LSA。この LSA は、リンク コストを ASBR のみにアドバタイズします。「 エリア 」の項を参照してください。

名前	名前	説明
5	AS 外部 LSA	ASBR が生成する LSA。この LSA には、外部自律システム宛先へのリンク コストが含まれます。AS 外部 LSA は、自律システム全体にわたってフラッドイングされます。「 エリア 」の項を参照してください。
7	タイプ 7 LSA	ASBR が NSSA 内で生成する LSA。この LSA には、外部自律システム宛先へのリンク コストが含まれます。タイプ 7 LSA は、ローカル NSSA 内のみでフラッドイングされます。「 エリア 」の項を参照してください。
8	リンク LSA	リンクローカル フラッドイング スコープを使用して、すべてのルータによって送信される LSA（「 フラッドイングと LSA グループ ペーシング 」のセクションを参照してください。この LSA には、このリンクのリンクローカル アドレスと IPv6 アドレスが含まれます。
9	エリア内プレフィックス LSA	すべてのルータが送信する LSA。この LSA には、プレフィックスまたはリンク状態へのあらゆる変更が含まれます。エリア内プレフィックス LSA はローカル OSPFv3 エリアにフラッドイングされます。この LSA は SPF 再計算をトリガーしません。

名前	名前	説明
11	猶予 LSA	再起動されるルータが、リンクローカルフラッドイングスコープを使用して送信する LSA。この LSA は、OSPFv3 のグレースフル リスタートに使用されます。「 ハイ アベイラビリティおよびグレースフル リスタート 」を参照してください。

リンク コスト

各 OSPFv3 インターフェイスは、リンク コストを割り当てられています。このコストは任意の数字です。デフォルトでは、Cisco NX-OS が、設定された参照帯域幅をインターフェイス帯域幅で割った値をコストとして割り当てます。デフォルトでは、参照帯域幅は 40 Gbps です。リンク コストは各リンクに対して、LSA 更新情報で伝えられます。

フラッドイングと LSA グループ ペーシング

OSPFv3 は、LSA のタイプに応じて、ネットワークのさまざまなセクションに LSA の更新をフラッドイングします。OSPFv3 は、次のフラッドイング スコープを使用します

- **リンク ローカル** : LSA は、ローカル リンク上でのみフラッドイングされます。リンク LSA および猶予 LSA に使用されます。
- **エリアローカル** : LSA は、単一の OSPF エリア全体にのみフラッドイングされます。ルータ LSA、ネットワーク LSA、エリア間プレフィックス LSAs、エリア間ルータ LSA、およびエリア内プレフィックス LSA に使用されます。
- **AS スコープ** : LSA は、ルーティング ドメイン全体にフラッドイングされます。AS スコープは AS 外部 LSA に使用されます。

LSA フラッドイングにより、ネットワーク内のすべてのルータが同じルーティング情報を持つことが保証されます。LSA フラッドイングは、OSPFv3 エリアの設定により異なります（「[エリア](#)」の項を参照）。LSA は、リンクステート リフレッシュ時間に基づいて（デフォルトでは 30 分ごとに）フラッドイングされます。各 LSA には、リンクステート リフレッシュ時間が設定されています。

ネットワークの LSA 更新情報のフラッドイング レートは、LSA グループ ペーシング機能を使用して制御できます。LSA グループ ペーシングにより、CPU またはバッファの使用率を低下させることができます。この機能により、同様のリンクステート リフレッシュ時間を持つ LSA がグループ化されるため、OSPFv3 で、複数の LSA を 1 つの OSPFv3 更新メッセージにまとめることが可能となります。

デフォルトでは、相互のリンクステートリフレッシュ時間が 10 秒以内の LSA が、同じグループに入れられます。この値は、大規模なリンクステートデータベースでは低く、小規模のデータベースでは高くして、ネットワーク上の OSPFv3 負荷を最適化する必要があります。

リンクステート データベース

各ルータは、OSPFv3 ネットワーク用のリンクステートデータベースを保持しています。このデータベースには、収集されたすべての LSA が含まれ、ネットワークを通過するすべてのルートに関する情報が格納されます。OSPFv3 は、この情報を使用して、各宛先への最適なパスを計算し、この最適なパスをルーティングテーブルに入力します。

MaxAge と呼ばれる設定済みの時間間隔で受信された LSA 更新情報がまったくない場合は、リンクステートデータベースから LSA が削除されます。ルータは、LSA を 30 分ごとに繰り返してフラッディングし、正確なリンクステート情報が期限切れで削除されるのを防ぎます。Cisco NX-OS は、すべての LSA が同時にリフレッシュされるのを防ぐために、LSA グループ機能をサポートしています。詳細については、「[フラッディングと LSA グループ ペーシング](#)」のセクションを参照してください。

マルチエリア隣接関係 (Multi-Area Adjacency)

OSPFv3 マルチエリア隣接関係により、複数のエリアにあるプライマリ インターフェイス上にリンクを設定できます。このリンクは、それらのエリア内の優先されるエリア内リンクになります。マルチエリア隣接関係では、OSPFv3 エリアにポイントツーポイントの番号なしリンクを確立し、そのエリアにトポロジパスを提供します。プライマリ隣接関係はリンクを使用して、ネイバーステートが full の場合に、ルータ LSA で対応するエリアの番号なしポイントツーポイント リンクをアドバタイズします。

マルチエリア インターフェイスは、OSPF の既存のプライマリ インターフェイス上の論理構成体として存在しますが、プライマリ インターフェイス上のネイバーステートは、マルチエリア インターフェイスと無関係です。マルチエリア インターフェイスはネイバー ルータ上の対応するマルチエリア インターフェイスとの隣接関係を確立します。詳細については、「[マルチエリア隣接関係の設定](#)」の項を参照してください。

OSPFv3 と IPv6 ユニキャスト RIB

OSPFv3 は、リンクステートデータベースでダイクストラの SPF アルゴリズムを実行します。このアルゴリズムにより、パス上の各リンクのリンクコストの合計に基づいて、各宛先への最適なパスが選択されます。選択された各宛先への最短パスが OSPFv3 ルートテーブルに入力されます。OSPFv3 ネットワークが収束すると、このルートテーブルは IPv6 ユニキャスト RIB にデータを提供します。OSPFv3 は IPv6 ユニキャスト RIB と通信し、次の動作を行います。

- ルートの追加または削除
- 他のプロトコルからのルートの再配布への対応

- 変更されていない OSPFv3 ルートの削除およびスタブ ルータ アドバタイズメントを行うためのコンバージェンス更新情報を提供します（「[複数の OSPFv3 インスタンス \(Multiple OSPFv3 Instances\)](#)」を参照）。

さらに OSPFv3 は、変更済みダイクストラ アルゴリズムを実行して、エリア間プレフィックス、エリア間ルータ、AS 外部、タイプ 7、およびエリア内プレフィックス（タイプ 3、4、5、7、8）の各 LSA の変更の高速再計算を行います。

アドレス ファミリのサポート

Cisco NX-OS は、ユニキャスト IPv6 やマルチキャスト IPv6 などの複数のアドレス ファミリをサポートしています。アドレス ファミリに特有の OSPFv3 機能は、次のとおりです。

- デフォルト ルート
- ルート集約
- ルートの再配布
- 境界ルータのフィルタ リスト
- SPF 最適化

これらの機能の設定時に IPv6 ユニキャスト アドレス ファミリ コンフィギュレーション モードを開始するには、**address-family ipv6 unicast** コマンドを使用します。

認証

OSPFv3 メッセージに認証を設定して、ネットワークでの不正な、または無効なルーティング 更新を防止できます。

RFC 4552 は、IPv6 認証ヘッダー (AH) またはカプセル化セキュリティ ペイロード (ESP) 拡張ヘッダーを使用して、OSPFv3 への認証を提供します。Cisco NX-OS は、IPv6 AH ヘッダーを使用して OSPFv3 パケットを認証することにより、RFC 4552 を部分的にサポートします。

Cisco NX-OS は、IP セキュリティ (IPSec) 認証方式と、メッセージ ダイジェスト 5 (MD5) またはセキュア ハッシュ アルゴリズム 1 (SHA1) アルゴリズムをサポートして、OSPFv3 パケットを認証します。OSPFv3 IPSec 認証は、静的キーのみをサポートします。

OSPFv3 プロセス、エリア、またはインターフェイスに対して IP セキュリティ (IPSec) 認証を構成できます。

高度な機能

Cisco NX-OS は、ネットワークでの OSPFv3 の可用性やスケーラビリティを向上させる高度な OSPFv3 機能をサポートしています。

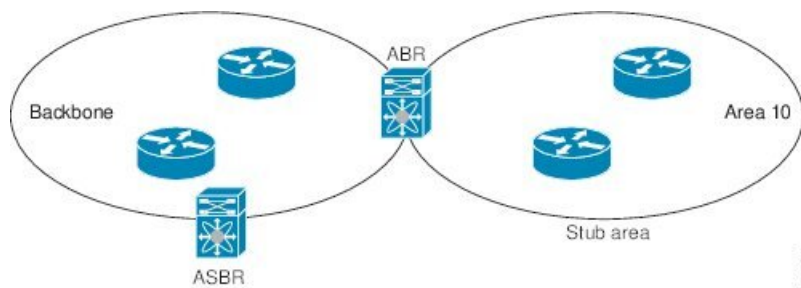
スタブエリア

エリアを**スタブエリア**にすると、エリアでフラッディングされる外部ルーティング情報の量を制限できます。スタブエリアとは、AS 外部（タイプ 5）LSA（「[リンク ステート アドバタイズメント](#)」のセクションを参照）が許可されないエリアです。これらの LSA は通常、外部ルーティング情報を伝播するためにローカル自律システム全体でフラッディングされます。スタブエリアには、次の要件があります。

- スタブエリア内のすべてのルータはスタブルータです。「[スタブ ルーティング](#)」の項を参照してください。
- スタブエリアには ASBR ルータは存在しません。
- スタブエリアには仮想リンクを設定できません。

次の図に示す OSPFv3 自律システムでは、エリア 0.0.0.10 内のルータはすべて、外部自律システムに到達するために ABR を通過しなければなりません。エリア 0.0.0.10 は、スタブエリアとして設定できます。

図 23:スタブエリア



スタブエリアは、外部自律システムへのバックボーンエリアを通過する必要のあるすべてのトラフィックにデフォルトルートを使用します。デフォルトルートは、プレフィックス長が IPv6 向けに 0 に設定されたエリア間プレフィックス LSA です。

Not-So-Stubby Area

Not-So-Stubby Area (NSSA) は、スタブエリアに似ていますが、NSSA では、再配布を使用して NSSA 内で自律システム外部ルートをインポートできる点が異なります。NSSA ASBR はこれらのルートを再配布し、タイプ 7 LSA を生成して NSSA 全体にフラッディングします。または、このタイプ 7 LSA を AS 外部（タイプ 5）LSA に変換するよう、NSSA を他のエリアに接続する ABR を設定することができます。こうすると、ABR は、これらの AS 外部 LSA を OSPFv3 自律システム全体にフラッディングします。変換中は集約とフィルタリングがサポートされます。type-7 LSA の詳細については、「[リンクステートアドバタイズ](#)」のセクションを参照してください。

たとえば、OSPFv3 を使用する中央サイトを、異なるルーティングプロトコルを使用するリモートサイトに接続するときに NSSA を使用すると、管理作業を簡素化できます。NSSA を使用する前は、企業サイトの境界ルータとリモートルータの間の接続を OSPFv3 スタブエリアとして実行できませんでした。これは、リモートサイトへのルートはスタブエリア内に再配

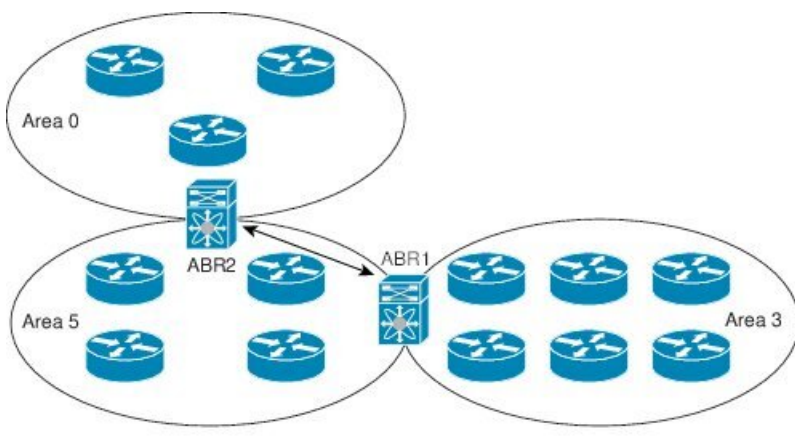
布できないためです。NSSA を使用すると、企業のルータとリモートルータ間のエリアを NSSA として定義する（「[NSSA の設定](#)」を参照）ことで、OSPFv3 を拡張してリモート接続性をサポートできます。

バックボーン エリア 0 を NSSA にできません。

仮想リンク

仮想リンクを使用すると、物理的に直接接続できない場合に、OSPFv3 エリア ABR をバックボーン エリア ABR に接続できます。次の図には、エリア 3 をエリア 5 経由でバックボーン エリアに接続する仮想リンクを示します。

図 24: 仮想リンク



また、仮想リンクを使用して、分割エリアから一時的に回復できます。分割エリアは、エリア内のリンクがダウンしたために隔離された一部のエリアで、ここからはバックボーンエリアへの代表 ABR に到達できません。

ルートの再配布

OSPFv3 は、ルート再配布を使用して、他のルーティングプロトコルからルートを学習できます。「[ルートの再配布 \(12 ページ\)](#)」の項を参照してください。リンク コストをこれらの再配布されたルートに割り当てるか、またはデフォルト リンク コストを再配布されたすべてのに割り当てるよう、OSPFv3 を設定します。

ルート再配布では、ルートマップを使用して、再配布する外部ルートを管理します。再配布を指定したルートマップを設定して、どのルートが OSPFv2 に渡されるかを制御する必要があります。ルート マップを使用すると、宛先、送信元プロトコル、ルート タイプ、ルート タグなどの属性に基づいて、ルートをフィルタリングできます。ルートマップを使用して、これらの外部ルートがローカル OSPFv3 AS でアドバタイズされる前に AS 外部（タイプ 5）LSA および NSSA 外部（タイプ 7）LSA のパラメータを変更できます。詳細については、「[Route Policy Manager の設定 \(441 ページ\)](#)」を参照してください。

ルート集約

OSPFv3 は学習したすべてのルートをあらゆる OSPF 対応ルータと共有するので、ルート集約を使用して、それぞれの OSPF 対応ルータにフラディングされる固有のルートの数を削減した方がよい場合もあります。ルート集約により、より具体的な複数のアドレスが、すべての具体的なアドレスを表す 1 つのアドレスに置き換えられるため、ルートテーブルが簡素化されます。たとえば、2010:11:22:0:1000::1 と 2010:11:22:0:2000:679:1 を 1 つの集約アドレス 2010:11:22::/32 に置き換えることができます。

一般的には、エリア境界ルータ（ABR）の境界ごとに集約します。集約は 2 つのエリアの間でも設定できますが、バックボーンの方に集約する方が適切です。こうすると、バックボーンがすべての集約アドレスを受信し、すでに集約されているそれらのアドレスを他のエリアに投入できるためです。集約には、次の 2 タイプがあります。

- エリア間ルート集約
- 外部ルート集約

エリア間ルート集約は ABR 上で設定し、自律システム内のエリア間のルートを集約します。集約の利点を生かすには、これらのアドレスを 1 つの範囲内にまとめることができるように、連続するネットワーク番号をエリア内で割り当てます。

外部ルート集約は、ルート再配布を使用して OSPFv3 に投入される外部ルートに特有のルート集約です。集約する外部の範囲が連続していることを確認する必要があります。異なる 2 台のルータからの重複範囲を集約すると、誤った宛先にパケットが送信される原因となる場合があります。外部ルート集約は、ルートを OSPF に再配布している ASBR で設定してください。

集約アドレスの設定時に Cisco NX-OS は、ルーティング ブラック ホールおよびルート ループを防ぐために、集約アドレスの廃棄ルートを自動的に設定します。

高可用性およびグレースフル リスタート

Cisco NX-OS はハイ アベイラビリティをサポートしています。Cisco NX-OS システムでコールドリブートが発生した場合、ネットワークはシステムへのトラフィック転送を中止し、ネットワーク トポロジからシステムを削除します。このシナリオでは、OSPFv3 でステートレス リスタートが発生し、ローカルシステム上のすべての隣接関係が削除されます。Cisco NX-OS はスタートアップ構成を適用し、OSPFv3 がネイバーを再発見して隣接関係を再度確立します。

プロセスで問題が発生すると、OSPFv3 は自動的に再起動します。再起動後、プラットフォームがネットワーク トポロジから除外されないように、OSPFv3 はグレースフル リスタートを開始します。手動で OSPF を再起動すると、ステートフル スイッチオーバーと同様のグレースフル リスタートが実行されます。どちらの場合も、実行コンフィギュレーションが適用されます。

グレースフル リスタート、つまり、Nonstop Forwarding（NSF）では、処理の再起動中も OSPFv3 がデータ転送パス上に存在し続けます。OSPFv3 はリスタートの実行が必要になると、最初にリンクローカル 猶予（タイプ 11）LSA を送信します。この再起動中の OSPFv3 プラットフォームは NSF 対応と呼ばれます。

猶予 LSA には猶予期間が含まれます。猶予期間とは、ネイバー OSPFv3 インターフェイスは再起動中の OSPFv3 インターフェイスからの LSA を待つよう指定された時間です（通常、OSPFv3 は隣接関係を切断し、ダウン状態または再起動中の OSPFv3 インターフェイスからのすべての LSA を廃棄します）。参加するネイバーは、NSF ヘルパーと呼ばれ、再起動中の OSPFv3 インターフェイスから発信されたすべての LSA を、インターフェイスがまだ隣接しているかのように保持します。

再起動中の OSPFv3 インターフェイスが稼働を再開すると、ネイバーを再探索して隣接関係を確立し、LSA 更新情報の送信を再開します。この時点で、NSF ヘルパーは、グレースフル リスタートが完了したと認識します。



- (注) 再起動中の OSPFv3 インターフェイスが猶予期間の終了前に復旧しない場合、またはネットワークでトポロジの変更が発生した場合、OSPFv3 ネイバーは再起動中の OSPFv3 との隣接関係を切断し、通常の OSPFv3 再起動として扱います。



- (注) OSPFv3 のインサースビス ソフトウェア アップグレード (ISSU) をサポートするには、グレースフル リスタートを有効にする必要があります。グレースフル リスタートを無効にすると、この構成では ISSU をサポートできないことを伝える警告が Cisco NX-OS から出されます。

複数の OSPFv3 インスタンス

Cisco NX-OS は、OSPFv3 プロトコルの複数インスタンスをサポートしています。デフォルトでは、すべてのインスタンスが同じシステム ルータ ID を使用します。複数のインスタンスが同じ OSPFv3 自律システムにある場合は、各インスタンスのルータ ID を手動で設定する必要があります。

OSPFv3 ヘッダーには、特定の OSPFv3 インスタンスの OSPFv3 パケットを識別するためのインスタンス ID フィールドが含まれます。この OSPFv3 インスタンスを割り当てることができません。インターフェイスは、パケットヘッダーの OSPFv3 インスタンス ID が一致しない OSPFv3 パケットをすべてドロップします。

Cisco NX-OS では、インターフェイス上に 1 つの OSPFv3 インスタンスのみが許可されます。

SPF 最適化

Cisco NX-OS は、次の方法で SPF アルゴリズムを最適化します。

- ネットワーク（タイプ 2）LSA、エリア間プレフィックス（タイプ 3）LSA、および AS 外部（タイプ 5）LSA 用部分 SPF：これらの LSA のいずれかが変更されると、Cisco NX-OS は、全体的な SPF 計算ではなく、高速部分計算を実行します。
- SPF タイマー：さまざまなタイマーを設定して、SPF 計算を制御できます。これらのタイマーには、後続の SPF 計算の幾何バックオフが含まれます。幾何バックオフにより、複数の SPF 計算による CPU 負荷が制限されます。

BFD

この機能では、双方向フォワーディング検出（BFD）をサポートします。BFD は、転送パスの障害を高速で検出することを目的にした検出プロトコルです。BFD は 2 台の隣接デバイス間のサブセカンド障害を検出し、BFD の負荷の一部を、サポートされるモジュール上のデータプレーンに分散できるため、プロトコル hello メッセージよりも CPU を使いません。

仮想化のサポート

OSPFv3 は、仮想ルーティングおよび転送（VRF）インスタンスをサポートしています。

OSPFv3 の前提条件

OSPFv3 の前提条件は次のとおりです。

- OSPFv3 を設定するための、ルーティングの基礎に関する詳しい知識がある。
- スイッチにログオンしている。
- リモート OSPFv3 ネイバーと通信可能な 1 つ以上の IPv6 用インターフェイスが設定されている。
- Enterprise Services ライセンスがインストールされている。
- OSPFv3 ネットワーク戦略と、ネットワークのプランニングが完成している。たとえば、複数のエリアが必要かどうかを決定します。
- OSPF 機能を有効していること（「[OSPFv3 の有効化](#)」の項を参照）。
- Advanced Services ライセンスがインストールされている。
- IPv6 アドレス指定および基本設定に関する詳しい知識がある。IPv6 ルーティングおよびアドレス指定の詳細については、[IPv6 の設定（45 ページ）](#)を参照してください。

OSPFv3 の注意事項および制約事項

OSPFv3 設定時の注意事項および制約事項は、次のとおりです。

- VDC の OSPFv3 のインスタンスは最大で 4 つです。
- Cisco NX-OS は、ユーザがエリアを 10 進表記で入力するか、ドット付き 10 進表記で入力するかに関係なく、ドット付き 10 進表記でエリアを表示します。
- 仮想ポートチャネル（vPC）環境で OSPFv3 を構成する場合は、コアスイッチ上のルータコンフィギュレーションモードで次のタイマーコマンドを使用します。そうすることで、vPC ピアリンクがシャットダウンされた場合に、高速な OSPF コンバージェンスを確保できます。


```
switch (config-router)# timers throttle spf 1 50 50
switch (config-router)# timers lsa-arrival 10
```

デフォルト設定

次の表に、OSPFv3 パラメータのデフォルト設定を示します。

表 16: **OSPFv3** のデフォルト パラメータ

パラメータ	デフォルト
hello 間隔	10 秒
デッド間隔	40 秒
グレースフル リスタートの猶予期間	60 秒
グレースフル リスタートの通知期間	15 秒
OSPFv3 機能	ディセーブル
スタブルータアドバタイズメントの宣言期間	600 秒
リンク コスト計算の参照帯域幅	40 Gbps
LSA 最小到着時間	1000 ミリ秒
LSA グループ ペーシング	10 秒
SPF 計算初期遅延時間	200 ミリ秒
SPF 計算最小ホールド タイム	1000 ミリ秒
SPF 計算の最大待機時間	5000 ミリ秒

基本的なOSPFv3の設定

OSPFv3 は、OSPFv3 ネットワークを設計したあとに設定します。

OSPFv3の有効化

OSPFv3 を構成する前に、OSPFv3 を有効にする必要があります。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : switch# configure terminal switch(config)#	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	feature ospfv3 例 : switch(config)# feature ospfv3	OSPFv3 を有効にします。
ステップ 3	(任意) show feature 例 : switch(config)# show feature	有効および無効にされた機能を表示します。
ステップ 4	(任意) copy running-config startup-config 例 : switch(config)# copy running-config startup-config	この設定変更を保存します。

例

OSPFv3 機能を無効にして、関連付けられている構成をすべて削除するには、構成モードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
no feature ospfv3 例 : switch(config)# no feature ospfv	OSPFv3 機能を無効にして、関連付けられた設定をすべて削除します。

OSPFv3 インスタンスの作成

OSPFv3 設定の最初のステップは、インスタンスまたは OSPFv3 インスタンスの作成です。作成した OSPFv3 インスタンスには、一意のインスタンス タグを割り当てます。インスタンス タグは任意の文字列です。各 OSPFv3 インスタンスには、省略可能な次のパラメータも設定できます。

- **Router ID** : この OSPFv3 インスタンスのルータ ID を設定します。このパラメータを使用しない場合は、ルータ ID 選択アルゴリズムが使用されます。詳細については、「[ルータ ID](#)」のセクションを参照してください。

- **Administrative distance** : ルーティング情報の送信元の信頼性をランク付けします。詳細については、「[アドミニストレーティブディスタンス](#)」のセクションを参照してください。
- **Log adjacency changes** : OSPFv3 ネイバーの状態が変化するたびにシステム メッセージを作成します。
- **Maximum paths** : OSPFv3 が、特定の宛先についてルート テーブルにインストールする同等パスの最大数を設定します。このパラメータは、複数パス間のロードバランシングに使用します。
- **Reference bandwidth** : ネットワークの算出 OSPFv3 コスト メトリックを制御します。算出コストは、参照帯域幅をインターフェイス帯域幅で割った値です。算出コストは、ネットワークが OSPFv3 インスタンスに追加されるときにリンクコストを割り当てると、無効にすることができます。詳細については、「[OSPFv3 でのネットワークの設定](#)」のセクションを参照してください。

OSPFv3 インスタンス パラメータの詳細については、「[高度な OSPFv3 の設定](#)」のセクションを参照してください。

始める前に

OSPFv3 機能が有効にされている必要があります（「[OSPFv2 の有効化](#)」のセクションを参照）。

使用する予定の OSPFv3 インスタンス タグが、このルータ上では使用されていないことを確認します。

`show ospfv3 instance-tag` コマンドを使用して、インスタンス タグが使用されていないことを確認します。

OSPFv3 がルータ ID（設定済みのループバック アドレスなど）を入手可能であるか、またはルータ ID オプションを設定する必要があります。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <code>switch# configure terminal</code> <code>switch(config)#</code>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	router ospfv3 instance-tag 例 : <code>switch(config)# router ospfv3 201</code> <code>switch(config-router)#</code>	新規 OSPFv3 インスタンスを作成して、設定済みのインスタンス タグを割り当てます。
ステップ 3	（任意） router-id ip-address 例 :	OSPFv3 ルータ ID を設定します。このドット付き 10 進表記の ID で、この OSPFv3 インスタンスが識別されます。

	コマンドまたはアクション	目的
	<code>switch(config-router)# router-id 192.0.2.1</code>	この ID は、システムの設定済みインターフェイス上に存在する必要があります。
ステップ 4	(任意) show ipv6 ospfv3 instance-tag 例 : <code>switch(config-router)# show ipv6 ospfv3 201</code>	OSPFv3 情報を表示します。
ステップ 5	(任意) copy running-config startup-config 例 : <code>switch(config)# copy running-config startup-config</code>	この設定変更を保存します。

例

OSPFv3 インスタンスと、関連付けられている構成をすべて削除するには、コンフィギュレーション モードで以下のコマンドを使用します。

コマンド	目的
no router ospfv3 instance-tag 例 : <code>switch(config)# no router ospfv3 201</code>	OSPFv3 インスタンスおよび関連付けられた構成をすべて削除します。



- (注) このコマンドは、インターフェイス モードでは OSPF 設定を削除しません。インターフェイス モードで設定された OSPFv3 コマンドはいずれも、手動で削除する必要があります。

ルータ コンフィギュレーション モードで、次の OSPFv3 用オプションパラメータを設定できます。

コマンド	目的
log-adjacency-changes [detail] 例 : <code>switch(config-router)# log-adjacency-changes</code>	ネイバーの状態が変化するたびに、システム メッセージを生成します。

コマンド	目的
passive-interface default 例 : <pre>switch(config-router)# passive-interface default</pre>	すべてのインターフェイス上でルーティングが更新されないようにします。このコマンドは、VRF またはインターフェイス コマンド モードの設定によって上書きされます。

アドレス ファミリ コンフィギュレーション モードで、次の OSPFv3 用オプション パラメータを構成できます。

コマンド	目的
distance number 例 : <pre>switch(config-router-af)# distance 25</pre>	この OSPFv3 インスタンスのアドミニストレーティブ ディスタンスを設定します。範囲は 1 ～ 255 です。デフォルトは 110 です。
maximum-paths paths 例 : <pre>switch(config-router-af)# maximum-paths 4</pre>	すべてのインターフェイス上でルーティングが更新されないようにします。このコマンドは、VRF またはインターフェイス コマンド モードの設定によって上書きされます。

次の例は、OSPFv3 インスタンスを作成する方法を示しています。

```
switch# configure terminal
switch(config)# router ospfv3 201
switch(config-router)# copy running-config startup-config
```

OSPFv3でのネットワークの設定

ルータがこのネットワークへの接続に使用するインターフェイスを介して、OSPFv3 へのネットワークを関連付けることで、このネットワークを設定できます（「[ネイバー](#)」セクションを参照）。すべてのネットワークをデフォルトバックボーンエリア（エリア 0）に追加したり、任意の 10 進数または IP アドレスを使用して新規エリアを作成したりできます。



- (注) すべてのエリアは、バックボーンエリアに直接、または仮想リンク経由で接続する必要があります。



- (注) インターフェイスの有効な IPv6 アドレスを設定するまでは、インターフェイス上で OSPFv3 がイネーブルになりません。

始める前に

OSPFv3 機能が有効にされている必要があります（「[OSPFv2 の有効化](#)」のセクションを参照）。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例： <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	グローバル構成モードを開始します。
ステップ 2	interface interface-type slot/port 例： <pre>switch(config)# interface ethernet 1/2 switch(config-if)#</pre>	インターフェイス設定モードを開始します。
ステップ 3	ipv6 address ipv6-prefix/length 例： <pre>switch(config-if)# ipv6 address 2001:0DB8::1/48</pre>	このインターフェイスに IPv6 アドレスを割り当てます。
ステップ 4	ipv6 router ospfv3 instance-tag area area-id [secondaries none] 例： <pre>switch(config-if)# ipv6 router ospfv3 201 area 0</pre>	OSPFv3 インスタンスおよびエリアにインターフェイスを追加します。
ステップ 5	（任意） show ipv6 ospfv3 instance-tag interface interface-type slot/port 例： <pre>switch(config-if)# show ipv6 ospfv3 201 interface ethernet 1/2</pre>	OSPFv3 情報を表示します。
ステップ 6	（任意） copy running-config startup-config 例： <pre>switch(config)# copy running-config startup-config</pre>	この設定変更を保存します。

例

インターフェイス コンフィギュレーション モードで、省略可能な次の OSPFv3 パラメータを設定できます。

コマンド	目的
ospfv3 cost number 例 : <pre>switch(config-if)# ospfv3 cost 25</pre>	このインターフェイスの OSPFv3 コスト メトリックを設定します。デフォルトでは、参照帯域幅とインターフェイス帯域幅に基づいて、コスト メトリックが計算されます。有効な範囲は 1 ～ 65535 です。
ospfv3 dead-interval seconds 例 : <pre>switch(config-if)# ospfv3 dead-interval 50</pre>	OSPFv3 デッド間隔を秒単位で設定します。有効な範囲は 1 ～ 65535 です。デフォルトでは、hello 間隔の秒数の 4 倍です。
ospfv3 hello-interval seconds 例 : <pre>switch(config-if)# ospfv3 hello-interval 25</pre>	OSPFv3 hello 間隔を秒単位で設定します。有効な範囲は 1 ～ 65535 です。デフォルトは 10 秒です。
ospfv3 instance instance 例 : <pre>switch(config-if)# ospfv3 instance 25</pre>	OSPFv3 インスタンス ID を設定します。有効な範囲は 0 ～ 255 です。デフォルトは 0 です。インスタンス ID のスコープはリンクローカルです。
ospfv3 mtu-ignore 例 : <pre>switch(config-if)# ospfv3 mtu-ignore</pre>	OSPFv3 で、ネイバーとのあらゆる IP 最大伝送単位 (MTU) 不一致が無視されるよう設定します。デフォルトでは、ネイバー MTU がローカル インターフェイス MTU が不一致の場合には、隣接関係が確立されません。
ospfv3 network { broadcast point-point } 例 : <pre>switch(config-if)# ospfv3 network broadcast</pre>	OSPFv3 ネットワーク タイプを設定します。
[default no] ospfv3 passive-interface 例 : <pre>switch(config-if)# ospfv3 passive-interface</pre>	インターフェイス上でルーティングが更新されないようにします。このコマンドによって、ルータまたは VRF コマンドモードの設定が上書きされます。 default オプションは、このインターフェイスモードコマンドを削除して、ルータまたは VRF の設定に戻します (設定がある場合)。
ospfv3 priority number 例 : <pre>switch(config-if)# ospfv3 priority 25</pre>	エリアの DR の決定に使用される OSPFv3 優先度を設定します。有効な範囲は 0 ～ 255 です。デフォルトは 1 です。「 指定ルータ 」の項を参照してください。

コマンド	目的
ospfv3 shutdown 例 : <pre>switch(config-if)# ospfv3 shutdown</pre>	このインターフェイス上の OSPFv3 インスタンスをシャットダウンします。

次に、OSPFv3 インスタンス 201 にネットワーク エリア 0.0.0.10 を追加する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# interface ethernet 1/2
switch(config-if)# ipv6 address 2001:0DB8::1/48
switch(config-if)# ipv6 ospfv3 201 area 0.0.0.10
switch(config-if)# copy running-config startup-config
```

OSPFv3IPSec 認証の設定

プロセス、エリア、またはインターフェイスに対して OSPFv3 IP セキュリティ (IPSec) 認証を設定できます。

認証設定は、プロセスからエリア、インターフェイスレベルに継承されます。認証が3つのレベルすべてで設定されている場合、インターフェイス設定がプロセスおよびエリア設定よりも優先されます。

始める前に

OSPF 機能がイネーブルにされていることを確認します（「[OSPFv2 のイネーブル化](#)」の項を参照）。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	グローバル設定モードを開始します。
ステップ 2	[no] feature imp 例 : <pre>switch(config)# feature imp</pre>	OSPFv3 認証に必要なインターネットメッセージングプログラム (IMP) を有効にします。
ステップ 3	router ospfv3 instance-tag 例 : <pre>switch(config)# router ospfv3 100 switch(config-router)#</pre>	新規 OSPFv3 インスタンスを作成して、設定済みのインスタンス タグを割り当てます。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 4	exit 例 : <pre>switch(config-router)# exit switch(config)#</pre>	OSPFv3 ルータ設定モードを終了します。
ステップ 5	authentication ipsec spi spi auth [0 3 7] key 例 : <pre>switch(config)# authentication ipsec spi 475 md5 111111111111111111112222222222222222</pre>	プロセス（または VRF）レベルで OSPFv3 IPSec 認証を設定します。 spi 引数は、セキュリティパラメータインデックス（SPI）を指定します。指定できる範囲は 256 ～ 4294967295 です。 auth 引数は、認証のタイプを指定します。サポートされる値は md5 または sha1 です。 0 の場合は、パスワードをクリアテキストで設定します。3 の場合は、パスキーを 3DES 暗号化として設定します。7 パスキーを Cisco タイプ 7 暗号化として設定します。 cleartext オプション（0）を使用する場合、key 引数は md5 では 32 文字、sha1 では 40 文字にする必要があります。
ステップ 6	オプション	説明
	コマンド	目的
	area area authentication ipsec spi spi auth [0 3 7] key 例 : <pre>switch(config)# area 0 authenticationipsec spi 475 md5 111111111111111111112222222222222222</pre>	エリアレベルで OSPFv3 IPSec 認証を設定します。 spi 引数は、セキュリティパラメータインデックス（SPI）を指定します。指定できる範囲は 256 ～

コマンドまたはアクション		目的
オプション	説明	
	4294967295 です。 auth 引数 は、認証の タイプを指 定します。 サポートさ れる値は md5 または sha1 です。 0 の場合 は、パス ワードをク リアテキス トで設定し ます。3 の 場合は、パ スキーを 3DES 暗号 化として設 定します。 7 パスキー を Cisco タ イプ7 暗号 化として設 定します。 cleartext オ プション (0) を使 用する場 合、key 引 数は md5 で は 32 文 字、sha1 で は 40 文字 にする必要 がありま す。 (注)	

コマンドまたはアクション		目的
オプション	説明	
	エリア レベルで OSPFv3 IPsec 認証を無効にするには、 <code>area area authentication disable</code> コマンドを使用します。	
interface <i>interface-type slot/port</i> ospfv3 authentication ipsec spi spi auth [0 3 7] key 例 : <pre>switch(config)# interface ethernet 1/1 switch(config-if)# ospfv3 authentication ipsec spi 475 md5 11111111111111112222222222222222</pre>	指定したインターフェイスの OSPFv3 IPsec 認証を設定します。 spi 引数は、セキュリティパラメータインデックス (SPI) を指定します。指定できる範囲は 256 ～ 4294967295 です。 auth 引数は、認証のタイプを指定します。サポートされる値は md5 または sha1 です。 0 の場合は、パス	

コマンドまたはアクション		目的
オプション	説明	
	ワードをクリアテキストで設定します。3 の場合は、パスキーを 3DES 暗号化として設定します。7 パスキーを Cisco タイプ 7 暗号化として設定します。 <code>cleartext</code> オプション (0) を使用する場合は、<code>key</code> 引数は <code>md5</code> では 32 文字、<code>sha1</code> では 40 文字にする必要があります。 (注) 指定したインターフェイスの OSPFv3 IPSec 認証をディセーブルにするには、<code>ospfv3 authentication disable</code> コマンドを使用します。	

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 7	(任意) show ospfv3 process 例 : <code>switch(config)# show ospfv3 100</code>	プロセス レベルの OSPFv3 認証設定を表示します。
ステップ 8	(任意) show ospfv3 interface interface-type slot/port 例 : <code>switch(config)# show ospfv3 interface ethernet 1/1</code>	インターフェイス レベルでの OSPFv3 認証設定を表示します。
ステップ 9	(任意) copy running-config startup-config 例 : <code>switch(config)# copy running-config startup-config</code>	この設定変更を保存します。

高度なOSPFv3の設定

OSPFv3 は、OSPFv3 ネットワークを設計したあとに設定します。

境界ルータのフィルタ リストの設定

OSPFv3 ドメインを、関連性のある各ネットワークを含む一連のエリアに分離できます。すべてのエリアは、エリア境界ルータ（ABR）経由でバックボーンエリアに接続している必要があります。OSPFv3 ドメインは、自律システム境界ルータ（ASBR）を介して、外部ドメインにも接続可能です。「[エリア](#)」の項を参照してください。

ABR には、省略可能な次の設定パラメータがあります。

- **Area range** : エリア間のルート集約を設定します。詳細については、「[ルート集約の設定](#)」の項を参照してください。
- **Filter list** : ABR 上で、外部エリアから受信したエリア間プレフィックス（タイプ 3）LSA をフィルタリングします。

ASBR もフィルタ リストをサポートしています。

始める前に

フィルタ リストが、着信または発信エリア間プレフィックス（タイプ 3）LSA の IP プレフィックスのフィルタリングに使用するルート マップを作成します。[Route Policy Manager の設定 \(441 ページ\)](#) を参照してください。

OSPFv3 機能が有効にされている必要があります（「[OSPFv2 の有効化](#)」のセクションを参照）。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : switch# configure terminal switch(config)#	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	router ospfv3 instance-tag 例 : switch(config)# router ospfv3 201 switch(config-router)#	新規 OSPFv3 インスタンスを作成して、設定済みのインスタンス タグを割り当てます。
ステップ 3	address-family ipv6 unicast 例 : switch(config-router)# address-family ipv6 unicast switch(config-router-af)#	IPv6 ユニキャスト アドレス ファミリ モードを開始します。
ステップ 4	area area-id filter-list route-map map-name { in out } 例 : switch(config-router-af)# area 0.0.0.10 filter-list route-map FilterLSAs in	ABR 上で着信または発信エリア間プレフィックス (タイプ 3) LSA をフィルタリングします。
ステップ 5	(任意) show ipv6 ospfv3 policy statistics area id filter-list { in out } 例 : switch(config-if)# show ipv6 ospfv3 policy statistics area 0.0.0.10 filter-list in	OSPFv3 ポリシー情報を表示します。
ステップ 6	(任意) copy running-config startup-config 例 : switch(config-router)# copy running-config startup-config	この設定変更を保存します。

例

次に、無効にされているグレースフル リスタートを有効にする方法を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# router ospfv3 201
switch(config-router)# address-family ipv6 unicast
switch(config-router-af)# area 0.0.0.10 filter-list route-map FilterLSAs in
switch(config-router-af)# copy running-config startup-config
```

OSPFv3 のスタブエリアの構成

OSPFv3 ドメインの外部トラフィックが不要な個所にスタブエリアを設定できます。スタブエリアはAS外部（タイプ5）LSAをブロックし、不要な、選択したネットワークへの往復のルーティングを制限します。「[スタブエリア](#)」の項を参照してください。また、すべての集約ルートがスタブエリアを経由しないようブロックすることもできます。

始める前に

OSPF 機能がイネーブルにされている必要があります（「[OSPFv2 のイネーブル化](#)」の項を参照）。

設定されるスタブエリア内に、仮想リンクと ASBR のいずれも含まれないことを確認します。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例： <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	router ospfv3 instance-tag 例： <pre>switch(config)# router ospfv3 201 switch(config-router)#</pre>	新規 OSPFv3 インスタンスを作成して、設定済みのインスタンス タグを割り当てます。
ステップ 3	area area-id stub 例： <pre>switch(config-router)# area 0.0.0.10 stub</pre>	このエリアをスタブエリアとして作成します。
ステップ 4	（任意） address-family ipv6 unicast 例： <pre>switch(config-router)# address-family ipv6 unicast switch(config-router-af)#</pre>	IPv6 ユニキャスト アドレス ファミリ モードを開始します。
ステップ 5	（任意） area area-id default-cost cost 例： <pre>switch(config-router-af)# area 0.0.0.10 default-cost 25</pre>	このスタブエリアに送信されるデフォルト サマリ ルートのコスト メトリックを設定します。指定できる範囲は 0 ～ 16777215 です。
ステップ 6	（任意） copy running-config startup-config 例：	この設定変更を保存します。

	コマンドまたはアクション	目的
	switch(config-router)# copy running-config startup-config	

例

次に、すべてのサマリルート更新をブロックするスタブエリアを作成する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# router ospfv3 201
switch(config-router)# area 0.0.0.10 stub no-summary
switch(config-router)# copy running-config startup-config
```

Totally Stubby エリアの設定

Totally Stubby エリアを作成して、すべての集約ルート更新がスタブエリアに入るのを防ぐことができます。

Totally Stubby エリアを作成するには、ルータ コンフィギュレーション モードで次のコマンドを使用します。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	area area-id stub no-summary 例 : switch(config-router)# area 20 stub no-summary	このエリアを Totally Stubby エリアとして作成します。

NSSA の設定

OSPFv3 ドメインの一部で一定限度の外部トラフィックが必要な場合は、その部分に NSSA を設定できます。「[Not-So-Stubby エリア](#)」のセクションを参照してください。また、この外部トラフィックを AS 外部（タイプ 5）LSA に変換して、このルーティング情報で OSPFv3 ドメインをフラッドイングすることもできます。NSSA は、省略可能な次のパラメータで設定できます。

- **No redistribution** : NSSA をバイパスして OSPFv3 AS 内の他のエリアに到達するルートを再配布します。このオプションは、NSSA ASBR が ABR も兼ねているときに使用します。
- **Default information originate** : 外部自律システムへのデフォルトルートのタイプ 7 LSA を生成します。このオプションは、ASBR のルーティング テーブルにデフォルト ルートが含まれる場合に NSSA ASBR 上で使用します。このオプションは、ASBR のルーティング テーブルにデフォルト ルートが含まれるかどうかに関係なく、NSSA ASBR 上で使用できます。

- **Route map** : 目的のルートのみが NSSA および他のエリア全体でフラッドイングされるよう、外部ルートをフィルタリングします。
- **No summary** : すべての集約ルートが NSSA でフラッドイングされないようにします。このオプションは NSSA ABR 上で使用します。
- **Translate** : NSSA 外のエリア向けに、タイプ 7 LSA を AS 外部 LSA (タイプ 5) に変換します。再配布されたルートを OSPFv3 自律システム全体でフラッドイングするには、このコマンドを NSSA ABR 上で使用します。また、これらの AS 外部 LSA の転送アドレスを無効にすることもできます。



(注) 変換オプションでは、NSSA を作成し、他のオプションを設定する **area area-id nssa** コマンドの後に、別の **area area-id nssa** コマンドが必要です。

始める前に

OSPF 機能が有効にされている必要があります (「[OSPFv2 の有効化](#)」の項を参照)。

設定する NSSA 上に仮想リンクがないことと、この NSSA がバックボーンエリアでないことを確認します。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	router ospfv3 instance-tag 例 : <pre>switch(config)# router ospfv3 201 switch(config-router)#</pre>	新規 OSPFv3 インスタンスを作成して、設定済みのインスタンス タグを割り当てます。
ステップ 3	area area-id nssa [no-redistribution] [default-information-originate] [route-map map-name] [no-summary] 例 : <pre>switch(config-router)# area 0.0.0.10 nssa no-redistribution</pre>	このエリアを NSSA として作成します。
ステップ 4	(任意) area area-id nssa translate type7 { always never } [suppress-fa] 例 :	AS 外部 (タイプ 7) LSA を NSSA 外部 (タイプ 5) LSA に変換するように NSSA を設定します。

	コマンドまたはアクション	目的
	switch(config-router)# area 0.0.0.10 nssa translate type7 always	
ステップ 5	(任意) address-family ipv6 unicast 例 : switch(config-router)# address-family ipv6 unicast switch(config-router-af)#	IPv6 ユニキャスト アドレス ファミリ モードを開始します。
ステップ 6	(任意) area area-id default-cost cost 例 : switch(config-router-af)# area 0.0.0.10 default-cost 25	この NSSA に送信されるデフォルト集 約ルートのコスト メトリックを設定し ます。指定できる範囲は 0 ～ 16777215 です。
ステップ 7	copy running-config startup-config 例 : switch(config-router)# copy running-config startup-config	この設定変更を保存します。

例

次に、すべての集約ルート更新をブロックする NSSA を作成する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# router ospfv3 201
switch(config-router)# area 0.0.0.10 nssa no-summary
switch(config-router)# copy running-config startup-config
```

次に、デフォルト ルートを生成する NSSA を作成する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# router ospfv3 201
switch(config-router)# area 0.0.0.10 nssa default-info-originate
switch(config-router)# copy running-config startup-config
```

次に、外部ルートをフィルタリングし、すべての集約ルート更新をブロックする NSSA を作成する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# router ospfv3 201
switch(config-router)# area 0.0.0.10 nssa route-map ExternalFilter no-summary
switch(config-router)# copy running-config startup-config
```

次に、常に NSSA 外部 (タイプ 5) LSA を AS 外部 (タイプ 7) LSA に変換する NSSA を作成し NSSA を設定する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# router ospfv3 201
switch(config-router)# area 0.0.0.10 nssa
switch(config-router)# area 0.0.0.10 nssa translate type 7 always
switch(config-router)# copy running-config startup-config
```

次に、すべての集約ルート更新をブロックする NSSA を作成する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# router ospfv3 201
switch(config-router)# area 0.0.0.10 nssa no-summary
switch(config-router)# copy running-config startup-config
```

マルチエリアの隣接関係の設定

既存の OSPFv3 インターフェイスには複数のエリアを追加できます。追加の論理インターフェイスはマルチエリア隣接関係をサポートしています。

始める前に

OSPFv3 機能が有効にされている必要があります（「[OSPFv2 の有効化](#)」のセクションを参照）。

インターフェイスにプライマリ エリアが設定されていることを確認します（「[OSPFv3 のネットワークの設定](#)」の項を参照）。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : switch# configure terminal switch(config)#	グローバル設定モードを開始します
ステップ 2	interface interface-type slot/port 例 : switch(config)# interface ethernet 1/2 switch(config-if)#	インターフェイス設定モードを開始します。
ステップ 3	ipv6 router ospfv3 instance-tag multi-area area-id 例 : switch(config-if)# ipv6 router ospfv3 201 multi-area 3	別のエリアにインターフェイスを追加します。 (注) instance tag 引数はオプションです。インスタンスを指定しない場合、マルチエリア構成は、そのインターフェイスのプライマリ エリアに構成されている同じインスタンスに適用されます。
ステップ 4	(任意) show ipv6 ospfv3 instance-tag interface interface-type slot/port 例 : switch(config-if)# show ipv6 ospfv3 201 interface ethernet 1/2	OSPFv3 情報を表示します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 5	(任意) copy running-config startup-config 例 : <pre>switch(config)# copy running-config startup-config</pre>	この設定変更を保存します。

例

次に、OSPFv3 インターフェイスに別のエリアを追加する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# interface ethernet 1/2
switch(config-if)# ipv6 address 2001:0DB8::1/48
switch(config-if)# ipv6 ospfv3 201 area 0.0.0.10
switch(config-if)# ipv6 ospfv3 201 multi-area 20
switch(config-if)# copy running-config startup-config
```

仮想リンクの設定

仮想リンクは、隔離されたエリアを中継エリアを介してバックボーンエリアに接続します。[\[仮想リンク\]](#)セクションを展開します。仮想リンクには、省略可能な次のパラメータを設定できます。

- **Authentication** : 簡単なパスワード認証または MD5 メッセージダイジェスト認証、および関連付けられたキーを設定します。
- **Dead interval** : ローカル ルータがデッドであることを宣言し、隣接関係を解消する前に、ネイバーが hello パケットを待つ時間を設定します。
- **Hello interval** : 連続する hello パケット間の時間間隔を設定します。
- **Retransmit interval** : 連続する LSA 間の推定時間間隔を設定します。
- **Transmit delay** : LSA をネイバーに送信する推定時間を設定します。



(注) リンクがアクティブになる前に、関与する両方のルータで仮想リンクを設定する必要があります。

始める前に

OSPF 機能が有効にされている必要があります (「[OSPFv2 の有効化](#)」の項を参照)。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : switch# configure terminal switch(config)#	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	router ospfv3 instance-tag 例 : switch(config)# router ospfv3 201 switch(config-router)#	新規 OSPFv3 インスタンスを作成して、設定済みのインスタンス タグを割り当てます。
ステップ 3	area area-id virtual-link router-id 例 : switch(config-router)# area 0.0.0.10 virtual-link 2001:0DB8::1 switch(config-router-vlink)#	リモート ルータへの仮想リンクの端を作成します。仮想リンクをリモート ルータ上に作成して、リンクを完成させる必要があります。
ステップ 4	(任意) show ipv6 ospfv3 virtual-link [brief] 例 : switch(config-if)# show ipv6 ospfv3 virtual-link	OSPFv3 仮想リンク情報を表示します。
ステップ 5	(任意) copy running-config startup-config 例 : switch(config-router)# copy running-config startup-config	この設定変更を保存します。

例

仮想リンク コンフィギュレーション モードで、省略可能な次のコマンドを設定できます。

コマンド	目的
dead-interval seconds 例 : switch(config-router-vlink)# dead-interval 50	OSPFv3 デッド間隔を秒単位で設定します。有効な範囲は 1 ～ 65535 です。デフォルトでは、hello 間隔の秒数の 4 倍です。

コマンド	目的
hello-interval seconds 例 : <pre>switch(config-router-vlink)# hello-interval 25</pre>	OSPFv3 hello 間隔を秒単位で設定します。有効な範囲は 1 ～ 65535 です。デフォルトは 10 秒です。
retransmit-interval seconds 例 : <pre>switch(config-router-vlink)# retransmit-interval 50</pre>	OSPFv3 再送信間隔を秒単位で設定します。有効な範囲は 1 ～ 65535 です。デフォルトは 5 分です。
transmit-delay seconds 例 : <pre>switch(config-router-vlink)# transmit-delay 2</pre>	OSPFv3 送信遅延を秒単位で設定します。指定できる範囲は 1 ～ 450 です。デフォルトは 1 です。

次に、2 つの ABR 間に簡単な仮想リンクを作成する例を示します。

ABR 1 (ルータ ID 2001:0DB8::1) の設定は、次のとおりです。

```
switch# configure terminal
switch(config)# router ospfv3 201
switch(config-router)# area 0.0.0.10 virtual-link 2001:0DB8::10
switch(config-router)# copy running-config startup-config
```

ABR 2 (ルータ ID 2001:0DB8::10) の設定は、次のとおりです。

```
switch# configure terminal
switch(config)# router ospf 101
switch(config-router)# area 0.0.0.10 virtual-link 2001:0DB8::1
switch(config-router)# copy running-config startup-config
```

再配布の設定

他のルーティングプロトコルから学習したルートをも、ASBR 経由で OSPFv3 自律システムに再配布できます。

OSPF でのルート再配布には、省略可能な次のパラメータを設定できます。

- **Default information originate** : 外部自律システムへのデフォルト ルートの AS 外部 (タイプ 5) LSA を生成します。



(注) **Default information originate** はオプションのルート マップ内の **match** 文を無視します。

- **Default metric** : すべての再配布ルートに同じコスト メトリックを設定します。



- (注) スタティック ルートを再配布する場合、デフォルトの 7.0(3)I7(6) スタティック ルートを正常に再配布するためには、Cisco NX-OS は **default-information originate** コマンドを必要とします。

始める前に

再配布で使用する、必要なルート マップを作成します。

OSPF 機能が有効にされている必要があります（「[OSPFv2 の有効化](#)」の項を参照）。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例： <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	router ospfv3 instance-tag 例： <pre>switch(config)# router ospfv3 201 switch(config-router)#</pre>	新規 OSPFv3 インスタンスを作成して、設定済みのインスタンス タグを割り当てます。
ステップ 3	address-family ipv6 unicast 例： <pre>switch(config-router)# address-family ipv6 unicast switch(config-router-af)#</pre>	IPv6 ユニキャスト アドレス ファミリ モードを開始します。
ステップ 4	redistribute { bgp id direct isis id rip id static } route-map map-name 例： <pre>switch(config-router-af)# redistribute bgp route-map FilterExternalBGP</pre>	設定したルート マップ経由で、選択したプロトコルを OSPFv3 に再配布します。 (注) スタティック ルートを再配布する場合、デフォルトの 7.0(3)I7(6) スタティック ルートを正常に再配布するためには、Cisco NX-OS は default-information originate コマンドを必要とします。
ステップ 5	default-information originate [always] [route-map map-name] 例：	デフォルトのルートが RIB に存在する場合、この OSPFv3 ドメインにデフォルトのルートを作成します。次の省略可能なキーワードを使用します。

	コマンドまたはアクション	目的
	<pre>switch(config-router-af)# default-information-originate route-map DefaultRouteFilter</pre>	• always : ルートが RIB に存在しない場合でも、常にデフォルト ルート 0.0.0. を生成します。 • route-map : ルートマップが true を返す場合にデフォルト ルートを生成します。 (注) このコマンドは、ルート マップの match 文を無視します
ステップ 6	default-metric cost 例 : <pre>switch(config-router-af)# default-metric 25</pre>	再配布されたルートのコスト メトリックを設定します。指定できる範囲は 1 ～ 16777214 です。このコマンドは、直接接続されたルートには適用されません。ルート マップを使用して、直接接続されたルートのデフォルトのメトリックを設定します。
ステップ 7	copy running-config startup-config 例 : <pre>switch(config-router)# copy running-config startup-config</pre>	この設定変更を保存します。

例

次に、ボーダー ゲートウェイ プロトコル (BGP) を OSPFv3 に再配布する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# router ospfv3 201
switch(config-router)# address-family ipv6 unicast
switch(config-router-af)# redistribute bgp route-map FilterExternalBGP
switch(config-router-af)# copy running-config startup-config
```

再配布されるルート数の制限

ルート再配布によって、OSPFv3 ルートテーブルに多数のルートを追加できます。外部プロトコルから受け取るルートの上限を設定できます。OSPFv3 には、再配布されるルート制限を設定するための次のオプションがあります。

- 上限固定 : 設定された最大値に OSPFv3 が達すると、メッセージをログに記録します。OSPFv3 はそれ以上の再配布されたルートを受け付けません。任意で、最大値のしきい値パーセンテージを設定して、OSPFv3 がこのしきい値を超えたときに警告を記録するようにすることもできます。

- 警告のみ：OSPFv3 が最大値に達したときのみ、警告のログを記録します。OSPFv3 は、再配布されたルートを受け入れ続けます。
- 取り消し：OSPFv3 が最大値に達したときに設定したタイムアウト期間を開始します。このタイムアウト期間後、現在の再配布されたルート数が最大制限より少なければ、OSPFv3 はすべての再配布されたルートを要求します。再配布されたルートの現在数が最大数に達した場合、OSPFv3 はすべての再配布されたルートを取り消します。OSPFv3 が追加の再配布されたルートを受け付ける前に、この状況を解消する必要があります。任意で、タイムアウト期間を設定できます。

始める前に

OSPF 機能が有効にされている必要があります（「[OSPFv2 の有効化](#)」の項を参照）。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例： <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	router ospfv3 instance-tag 例： <pre>switch(config)# router ospfv3 201 switch(config-router)#</pre>	新規 OSPFv3 インスタンスを作成して、設定済みのインスタンス タグを割り当てます。
ステップ 3	address-family ipv6 unicast 例： <pre>switch(config-router)# address-family ipv6 unicast switch(config-router-af)#</pre>	IPv6 ユニキャスト アドレス ファミリ モードを開始します。
ステップ 4	redistribute { bgp id direct isis id rip id static } route-map map-name 例： <pre>switch(config-router-af)# redistribute bgp route-map FilterExternalBGP</pre>	設定したルート マップ経由で、選択したプロトコルを OSPFv3 に再配布します。
ステップ 5	redistribute maximum-prefix max [threshold] [warning-only withdraw [num-retries timeout]] 例： <pre>switch(config-router)# redistribute maximum-prefix 1000 75 warning-only</pre>	OSPFv2 が配布するプレフィックスの最大数を指定します。指定できる範囲は 0 ～ 65536 です。任意で次のオプションを指定します。 • threshold：警告メッセージをトリガする最大プレフィックスの割合。

	コマンドまたはアクション	目的
		• warning-only : プレフィックスの最大数を超えた場合に警告メッセージを記録します。 • withdraw : 再配布されたすべてのルートを取り消し、任意で再配布されたルートを取得しようと試みます。 <i>num-retries</i> の範囲は 1 ～ 12 です。 <i>timeout</i> の範囲は 60 ～ 600 秒です。デフォルトは 300 秒です。
ステップ 6	(任意) show running-config ospfv3 例 : <pre>switch(config-router)# show running-config ospf</pre>	OSPFv3 設定を表示します。
ステップ 7	(任意) copy running-config startup-config 例 : <pre>switch(config-router)# copy running-config startup-config</pre>	この設定変更を保存します。

例

次に、OSPF に再配布されるルートの数を制限する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# router ospfv3 201
switch(config-router)# address-family ipv6 unicast
switch(config-router-af)# redistribute bgp route-map FilterExternalBGP
switch(config-router-af)# redistribute maximum-prefix 1000 75
```

ルート集約の設定

集約したアドレス範囲を設定することにより、エリア間ルートのルート集約を設定できます。また、ASBR 上のこれらのルートのサマリアドレスを設定して、外部の再配布されたルートのルート集約を設定することもできます。詳細については、「[ルート集約](#)」を参照してください。

始める前に

OSPF 機能が有効にされている必要があります（「[OSPFv2 の有効化](#)」の項を参照）。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	router ospfv3 instance-tag 例 : <pre>switch(config)# router ospfv3 201 switch(config-router)#</pre>	新規 OSPFv3 インスタンスを作成して、設定済みのインスタンス タグを割り当てます。
ステップ 3	address-family ipv6 unicast 例 : <pre>switch(config-router)# address-family ipv6 unicast switch(config-router-af)#</pre>	IPv6 ユニキャスト アドレス ファミリ モードを開始します。
ステップ 4	area area-id range ipv6-prefix/length [no-advertise] [cost cost] 例 : <pre>switch(config-router-af)# area 0.0.0.10 range 2001:0DB8::/48 advertise</pre>	一定の範囲のアドレスのサマリ アドレスを ABR 上に作成します。このサマリ アドレスをエリア間プレフィックス（タイプ 3）LSA にアドバタイズすることもできます。 <i>cost</i> の範囲は 0 ～ 16777215 です。
ステップ 5	summary-address ipv6-prefix/length [no-advertise] [tag tag] 例 : <pre>switch(config-router-af)# summary-address 2001:0DB8::/48 tag 2</pre>	一定の範囲のアドレスのサマリ アドレスを ABR 上に作成します。ルートマップによる再配布で使えるよう、このサマリ アドレスにタグを割り当てることもできます。
ステップ 6	（任意） show ipv6 ospfv3 summary-address 例 : <pre>switch(config-router)# show ipv6 ospfv3 summary-address</pre>	OSPFv3 サマリ アドレスに関する情報を表示します
ステップ 7	（任意） copy running-config startup-config 例 : <pre>switch(config-router)# copy running-config startup-config</pre>	この設定変更を保存します。

例

次に、ABR 上のエリア間のサマリ アドレスを作成する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# router ospfv3 201
switch(config-router)# address-family ipv6 unicast
switch(config-router)# area 0.0.0.10 range 2001:0DB8::/48
switch(config-router)# copy running-config startup-config
```

次に、ASBR 上のサマリ アドレスを作成する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# router ospf 201
switch(config-router)# address-family ipv6 unicast
switch(config-router)# summary-address 2001:0DB8::/48
switch(config-router)# copy running-config startup-config
```

デフォルト タイマーの変更

OSPFv3 には、プロトコル メッセージの動作および最短パス優先（SPF）の計算を制御する多数のタイマーが含まれています。OSPFv3 には、省略可能な次のタイマー パラメータが含まれます。

- **LSA arrival time** : ネイバーから着信する LSA 間で許容される最小間隔を設定します。この時間より短時間で到着する LSA はドロップされます。
- **Pacing LSAs** : LSA が集められてグループ化され、リフレッシュされて、チェックサムが計算される間隔、つまり期限切れとなる間隔を設定します。このタイマーは、LSA 更新が実行される頻度を制御し、LSA 更新メッセージで送信される LSA 更新の数を制御します（「[フラッドイングと LSA グループ ペーシング](#)」を参照）。
- **Throttle LSAs** : LSA 生成のレート制限を設定します。このタイマーは、トポロジが変更された後に LSA が生成される頻度を制御します。
- **Throttle SPF calculation** : SPF 計算の実行頻度を制御します。

インターフェイス レベルでは、次のタイマーも制御できます。

- **Retransmit interval** : 連続する LSA 間の推定時間間隔を設定します。
- **Transmit delay** : LSA をネイバーに送信する推定時間を設定します。

hello 間隔とデッド タイマーに関する情報の詳細については、「[OSPFv3 のネットワークの設定](#)」の項を参照してください。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 :	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。

	コマンドまたはアクション	目的
	switch# configure terminal switch(config)#	
ステップ 2	router ospfv3 instance-tag 例 : switch(config)# router ospfv3 201 switch(config-router)#	新規 OSPFv3 インスタンスを作成して、設定済みのインスタンスタグを割り当てます。
ステップ 3	timers lsa-arrival 例 : switch(config-router)# timers lsa-arrival 2000	LSA 到着時間をミリ秒で設定します。範囲は 10 ～ 600000 です。デフォルトは 1000 ミリ秒です。
ステップ 4	timers lsa-group-pacing seconds 例 : switch(config-router)# timers lsa-group-pacing 200	LSA がグループ化される間隔を秒で設定します。範囲は 1 ～ 1800 です。デフォルトは 10 秒です。
ステップ 5	timers throttle lsa start-time hold-interval max-time 例 : switch(config-router)# timers throttle lsa network 350 5000 6000	LSA 生成のレート制限をミリ秒で設定します。次のタイマーを設定できます。 start-time : 指定できる範囲は 50 ～ 5000 ミリ秒です。デフォルト値は 50 ミリ秒です。 hold-interval : 指定できる範囲は 50 ～ 30,000 ミリ秒です。デフォルト値は 5000 ミリ秒です。 max-time : 指定できる範囲は 50 ～ 30,000 ミリ秒です。デフォルト値は 5000 ミリ秒です。
ステップ 6	address-family ipv6 unicast 例 : switch(config-router)# address-family ipv6 unicast switch(config-router-af)#	IPv6 ユニキャスト アドレス ファミリ モードを開始します。
ステップ 7	timers throttle spf delay-time hold-time max-time 例 : switch(config-router)# timers throttle spf 3000 2000 5000	SPF 最適パス計算間の SPF 最適パス スケジュール初期遅延時間、最小保持時間、および最大待機時間（ミリ秒単位）を設定します。範囲は 1 ～ 600000 ミリ秒です。デフォルト値は、200 ミリ秒の遅延時間、1000 ミリ秒の保持時間、および 5000 ミリ秒の待機時間です。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 8	interface interface type slot/port 例 : switch(config)# interface ethernet 1/2 switch(config-if)#	インターフェイス設定モードを開始します。
ステップ 9	ospfv3 retransmit-interval seconds 例 : switch(config-if)# ospfv3 retransmit-interval 30	このインターフェイスから送信される各 LSA 間の推定時間間隔を設定します。有効な範囲は 1 ～ 65535 です。デフォルトは 5 分です。
ステップ 10	ospfv3 transmit-delay seconds 例 : switch(config-if)# ospfv3 transmit-delay 600 switch(config-if)#	LSA をネイバーに送信する推定時間間隔を秒で設定します。指定できる範囲は 1 ～ 450 です。デフォルトは 1 です。
ステップ 11	(任意) copy running-config startup-config 例 : switch(config-if)# copy running-config startup-config	この設定変更を保存します。

例

次に、lsa-group-pacing オプションで LSA フラッディングを制御する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# router ospf 201
switch(config-router)# timers lsa-group-pacing 300
switch(config-router)# copy running-config startup-config
```

グレースフル リスタートの設定

デフォルトでは、グレースフル リスタートは有効です。OSPFv3 インスタンスのグレースフル リスタートには、省略可能な次のパラメータを設定できます。

- **Grace period** : グレースフル リスタートの開始後に、ネイバーが隣接関係を解消するまでに待つ時間を設定します。
- **Helper mode disabled** : ローカル OSPFv3 インスタンスのヘルパー モードをディセーブルにします。OSPFv3 は、ネイバーのグレースフル リスタートには関与しません。
- **Planned graceful restart only** : 予定された再起動の場合にのみグレースフル リスタートがサポートされるよう、OSPFv3 を設定します。

始める前に

OSPFv3 機能が有効にされている必要があります（「[OSPFv2 の有効化](#)」の項を参照）。

すべてのネイバーで、一致した省略可能なパラメーター式とともにグレースフルリスタートが設定されていることを確認します。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例： switch# configure terminal switch(config)#	グローバル設定モードを開始します。
ステップ 2	router ospfv3 instance-tag 例： switch(config)# router ospfv3 201 switch(config-router)#	新規 OSPFv3 インスタンスを作成して、設定済みのインスタンス タグを割り当てます。
ステップ 3	graceful-restart 例： switch(config-router)# graceful-restart	グレースフル リスタートをイネーブルにします。グレースフルリスタートは、デフォルトで有効にされています。
ステップ 4	graceful-restart grace-period seconds 例： switch(config-router)# graceful-restart grace-period 120	猶予期間を秒で設定します。指定できる範囲は 5 ～ 1800 です。デフォルトは 60 秒です。
ステップ 5	graceful-restart helper-disable 例： switch(config-router)# graceful-restart helper-disable	ヘルパーモードを無効にします。デフォルトでは、イネーブルです。
ステップ 6	graceful-restart planned-only 例： switch(config-router)# graceful-restart planned-only	予定された再起動時にのみグレースフルリスタートを設定します。
ステップ 7	(任意) show ipv6 ospfv3 instance-tag 例： switch(config-if)# show ipv6 ospfv3 201	OSPFv3 情報を表示します。
ステップ 8	(任意) copy running-config startup-config 例：	この設定変更を保存します。

	コマンドまたはアクション	目的
	switch(config)# copy running-config startup-config	

例

次に、無効にされているグレースフル リスタートを有効にし、猶予期間を 120 秒に設定する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# router ospfv3 201
switch(config-router)# graceful-restart
switch(config-router)# graceful-restart grace-period 120
switch(config-router)# copy running-config startup-config
```

OSPFv3 インスタンスの再起動

OSPFv3 インスタンスを再起動できます。この処理では、インスタンスのすべてのネイバーが消去されます。

OSPFv3 インスタンスを再起動して、関連付けられたすべてのネイバーを削除するには、次のコマンドを使用します。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	restart ospfv3 instance-tag 例 : switch(config)# restart ospfv3 201	OSPFv3 インスタンスを再起動して、すべてのネイバーを削除します。

仮想化による OSPFv3 の設定

各 VDC で複数 OSPFv3 インスタンスを構成できます。また、各 VDC で複数の VRF を作成し、各 VRF で同じ OSPFv2 インスタンスまたは複数の OSPFv3 インスタンスを使用することもできます。VRF には OSPFv3 インターフェイスを割り当てます。



- (注) インターフェイスの VRF を設定した後に、インターフェイスの他のすべてのパラメータを設定します。インターフェイスの VRF を設定すると、そのインターフェイスのすべての設定が削除されます。

始める前に

VDC を作成します。

OSPF 機能が有効にされている必要があります（「[OSPFv2 の有効化](#)」の項を参照）。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	vrf context vrf-name 例 : <pre>switch(config)# vrf context RemoteOfficeVRF switch(config-vrf)#</pre>	新しい VRF を作成し、VRF 設定モードを開始します。
ステップ 3	router ospfv3 instance-tag 例 : <pre>switch(config)# router ospfv3 201 switch(config-router)#</pre>	新規 OSPFv3 インスタンスを作成して、設定済みのインスタンスタグを割り当てます。
ステップ 4	vrf vrf-name 例 : <pre>switch(config-router)# vrf RemoteOfficeVRF switch(config-router-vrf)#</pre>	VRF 設定モードを開始します。
ステップ 5	(任意) maximum-paths paths 例 : <pre>switch(config-router-vrf)# maximum-paths 4</pre>	この VRF のルート テーブル内の宛先への、同じ OSPFv3 パスの最大数を設定します。このコマンドはロードバランシングに使用します。
ステップ 6	interface interface type slot/port 例 : <pre>switch(config)# interface ethernet 1/2 switch(config-if)#</pre>	インターフェイス設定モードを開始します。
ステップ 7	vrf member vrf-name 例 : <pre>switch(config-if)# vrf member RemoteOfficeVR</pre>	このインターフェイスを VRF に追加します。
ステップ 8	ipv6 address ipv6-prefix/length 例 : <pre>switch(config-if)# ipv6 address 2001:0DB8::1/48</pre>	このインターフェイスの IP アドレスを設定します。このステップは、このインターフェイスを VRF に割り当てたあとに行う必要があります。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 9	ipv6 ospfv3 instance-tag area area-id 例 : switch(config-if)# ipv6 ospfv3 201 area 0	設定した OSPFv3 インスタンスおよび エリアに、このインターフェイスを割 り当てます。
ステップ 10	(任意) copy running-config startup-config 例 : switch(config)# copy running-config startup-config	この設定変更を保存します。

例

次に、VRF を作成して、その VRF にインターフェイスを追加する例を示します。

```
switch# configure terminal

switch(config)# vrf context NewVRF

switch(config-vrf)# exit

switch(config)# router ospfv3 201

switch(config-router)# exit

switch(config)# interface ethernet 1/2

switch(config-if)# vrf member NewVRF

switch(config-if)# ipv6 address 2001:0DB8::1/48

switch(config-if)# ipv6 ospfv3 201 area 0

switch(config-if)# copy running-config startup-config
```

OSPFv3 の設定の確認

OSPFv3 の設定を表示するには、次のいずれかのタスクを実行します。

表 17:

コマンド	目的
show ipv6 ospfv3	OSPFv3 設定を表示します。
show ipv6 ospfv3 border-routers	ABR および ASBR への内部 OSPF ルーティン グ テーブル エントリを表示します

コマンド	目的
show ipv6 ospfv3 database	特定のルータの OSPFv3 データベースに関する情報のリストを表示します。
show ipv6 ospfv3 interface <i>type number</i> [vrf { <i>vrf-name</i> all default management }]	OSPFv3 インターフェイス設定を表示します。
show ipv6 ospfv3 neighbors	ネイバー情報を表示します。 clear ospfv3 neighbors コマンドを使用すると、すべてのネイバーとの隣接関係を削除できます。
show ipv6 ospfv3 request-list	ルータから要求されている LSA の一覧を表示します。
show ipv6 ospfv3 retransmission-list	再送を待っている LSA の一覧を表示します。
show ipv6 ospfv3 summary-address	OSPFv3 インスタンスで設定されている、すべての集約アドレス再配布情報の一覧を表示します。
show ospfv3 process	プロセス レベルの OSPFv3 認証設定を表示します。
show ospfv3 interface <i>interface-type slot/port</i>	インターフェイス レベルでの OSPFv3 認証設定を表示します。
show running-configuration ospfv3	現在実行中の OSPFv3 コンフィギュレーションを表示します。

OSPFv3のモニタリング

OSPFv3 統計情報を表示するには、次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
show ipv6 ospfv3 memory	OSPFv3 メモリ使用状況の統計情報を表示します。
show ipv6 ospfv3 policy statistics area <i>area-id</i> filter-list { in out } [vrf { <i>vrf-name</i> all default management }]	エリアの OSPFv3 ルート ポリシー統計情報を表示します。
show ipv6 ospfv3 policy statistics redistribute { bgp id direct isis id rip id static } vrf { <i>vrf-name</i> all default management }]	OSPFv3 ルート ポリシー統計を表示します。
show ipv6 ospfv3 statistics [vrf { <i>vrf-name</i> all default management }]	OSPFv3 イベント カウンタを表示します

コマンド	目的
<code>show ipv6 ospfv3 traffic [interface-type number] [vrf {vrf-name all default management}]</code>	OSPFv3 パケット カウンタを表示します。

OSPFv3 の設定例

次に、OSPFv3 を設定する例を示します。

```
feature ospfv3
router ospfv3 201
router-id 290.0.2.1

interface ethernet 1/2
ipv6 address 2001:0DB8::1/48

ipv6 ospfv3 201 area 0.0.0.10
```

関連項目

次の項目には、OSPF に関する詳細情報が含まれています。

- [OSPFv2 の設定 \(79 ページ\)](#)
- [Route Policy Manager の設定 \(441 ページ\)](#)

その他の参考資料

OSPF の実装に関する詳細情報については、次のページを参照してください。

関連資料

関連項目	マニュアル タイトル
OSPFv3 CLI コマンド	『Cisco Nexus 3000 シリーズ NX-OS ユニキャストルーティングコマンドリファレンス、リリース 6.x』

MIB

MIB	MIB のリンク
• OSPF-MIB • OSPF-TRAP-MIB	MIB を検索してダウンロードするには、次の MIB ロケータ に移動します。



第 8 章

EIGRP の設定

この章では、Cisco NX-OS スイッチで Enhanced Interior Gateway Routing Protocol (EIGRP) を設定する方法について説明します。

この章は、次の項で構成されています。

- [EIGRP に関する情報 \(179 ページ\)](#)
- [EIGRP の前提条件 \(186 ページ\)](#)
- [注意事項と制約事項 \(186 ページ\)](#)
- [デフォルト設定 \(187 ページ\)](#)
- [基本的な EIGRP の設定 \(188 ページ\)](#)
- [高度な EIGRP の設定 \(193 ページ\)](#)
- [EIGRP の仮想化の設定 \(205 ページ\)](#)
- [EIGRP の設定の確認 \(207 ページ\)](#)
- [EIGRP 統計情報の表示 \(208 ページ\)](#)
- [関連項目 \(208 ページ\)](#)
- [その他の参考資料 \(208 ページ\)](#)

EIGRP に関する情報

EIGRP は、リンクステート プロトコルの機能にディスタンス ベクトル プロトコルの利点を組み合わせたプロトコルです。EIGRP は、定期的に Hello メッセージを送信してネイバーを探索します。EIGRP は、新規ネイバーを検出すると、すべてのローカル EIGRP ルートおよびルート メトリックに対する 1 回限りの更新を送信します。受信側の EIGRP ルータは、受信したメトリックと、その新規ネイバーにローカルで割り当てられたリンクのコストに基づいて、ルート ディスタンスを計算します。この最初の全面的なルート テーブルの更新後は、ルート変更の影響を受けるネイバーにのみ、差分更新が EIGRP により送信されます。この処理により、コンバージェンスにかかる時間が短縮され、EIGRP が使用する帯域幅が最小限になります。

EIGRP コンポーネント

EIGRP には、次の基本コンポーネントがあります。

- Reliable Transport Protocol
- ネイバー探索およびネイバー回復
- 拡散更新アルゴリズム

信頼性の高いトランスポート プロトコル

信頼性の高いトランスポート プロトコルは、すべてのネイバーに EIGRP パケットの順序付けされた配信を保証します。(「[ネイバー探索およびネイバー回復](#)」の項を参照してください。)
信頼性の高いトランスポート プロトコルは、マルチキャスト パケットとユニキャスト パケットの混合伝送をサポートしています。この転送は信頼性が高く、未確認パケットが保留されているときにも、マルチキャストパケットの迅速な送信が可能です。この方式により、さまざまな速度のリンクでも短いコンバージェンス時間が維持されるようになります。マルチキャストおよびユニキャストパケットの送信を制御するデフォルトタイマーの変更の詳細については、「[高度な EIGRP の構成](#)」を参照してください。

Reliable Transport Protocol には、次のメッセージ タイプが含まれます。

- **Hello** : ネイバー探索およびネイバー回復に使用されます。EIGRP はデフォルトでは、定期的なマルチキャスト Hello メッセージをローカル ネットワーク上に、設定された hello 間隔で送信します。デフォルトの hello 間隔は 5 秒です。
- **Acknowledgement** : 更新、照会、返信を確実に受信したことを確認します。
- **Updates** : ルーティング情報が変更されると、その影響を受けるネイバーに送信されます。更新には、ルート宛の宛先、アドレス マスク、および遅延や帯域幅などのルート メトリックが含まれます。更新情報は EIGRP トポロジ テーブルに格納されます。
- **Queries and Replies** : 必要に応じて、EIGRP が使用する DUAL の一部として送信されます。

ネイバー探索およびネイバー回復

EIGRP は、Reliable Transport Protocol からの Hello メッセージを使用して、直接接続されたネットワーク上のネイバー EIGRP ルータを探索します。EIGRP により、ネイバー テーブルにネイバーが追加されます。ネイバー テーブルの情報には、ネイバー アドレス、検出されたインターフェイス、およびネイバー到達不能を宣言する前に EIGRP が待機する時間を示すホールドタイムが含まれています。デフォルトのホールドタイムは、hello 間隔の 3 倍または 15 秒です。

EIGRP は、ローカル EIGRP ルーティング情報を共有するために、一連の更新メッセージを新規ネイバーに送信します。このルート情報は EIGRP トポロジ テーブルに格納されます。このように EIGRP ルート情報全体を最初に送信した後は、ルーティングが変更されたときのみ、EIGRP により更新メッセージが送信されます。これらの更新メッセージは新情報または更新情報のみを含んでおり、変更の影響を受けるネイバーにのみ送信されます。「[EIGRP ルート アップデート](#)」の項を参照してください。

EIGRP はまた、Hello メッセージをネイバーへのキープアライブのためにも使用します。Hello メッセージを受信している限り、Cisco NX-OS は、ネイバーがダウンせずに機能していると判定します。

拡散更新アルゴリズム

拡散更新アルゴリズム (DUAL) により、トポロジテーブルの宛先ネットワークに基づいてルーティング情報が計算されます。トポロジテーブルには、次の情報が含まれます。

- IPv4 アドレス/マスク：この宛先のネットワーク アドレスおよびネットワーク マスク。
- サクセサ：現在のフィジブルディスタンスよりも宛先まで短いディスタンスをアドバタイズする、すべてのフィジブル サクセサまたはネイバーの IP アドレスおよびローカルインターフェイス接続。
- フィージビリティディスタンス (FD)：計算された、宛先までの最短ディスタンス。フィジブルディスタンスは、ネイバーがアドバタイズした距離に、そのネイバーへのリンクコストを加えた合計です。

DUAL は、ディスタンス メトリックを使用して、ループが発生しない効率的なパスを選択します。DUAL はルートを選択し、フィジブル サクセサに基づいてユニキャストルーティング情報ベース (RIB) に挿入します。トポロジが変更されると、DUAL は、トポロジテーブルでフィジブル サクセサを探します。フィジブル サクセサが見つかった場合、DUAL は、最短のフィジブルディスタンスを持つフィジブル サクセサを選択して、それをユニキャスト RIB に挿入します。これにより、再計算が不要となります。

フィジブル サクセサが存在しないが、宛先をアドバタイズするネイバーが存在する場合は、DUAL がパッシブ状態からアクティブ状態へと移行し、新しいサクセサまたは宛先へのネクスト ホップ ルータを決定する再計算をトリガーします。ルートの再計算に必要な時間は、コンバージェンス時間に影響します。EIGRP は照会メッセージをすべてのネイバーに送信し、フィジブルサクセサを探します。フィジブルサクセサを持つネイバーは、その情報を含む返信メッセージを送信します。フィジブルサクセサを持たないネイバーは、DUAL の再計算をトリガーします。

EIGRP ルート更新

トポロジが変更されると、EIGRP は、変更されたルーティング情報のみを含む更新メッセージに影響を受けるネイバーに送信します。更新メッセージには、新規の、または更新されたネットワーク宛先へのディスタンス情報が含まれます。

EIGRP でのディスタンス情報は、帯域幅、遅延、負荷使用状況、リンクの信頼性などの使用可能なルートメトリックの組み合わせとして表現されます。各メトリックには重みが関連付けられており、これにより、メトリックがディスタンスの計算に含まれるかどうかが決まります。このメトリックの重みは設定することができます。特性を微調整して最適なパスを完成することもできますが、設定可能なメトリックの大部分でデフォルト設定を使用することを推奨します。

内部ルート メトリック

内部ルートとは、同じ EIGRP 自律システム内のネイバー間のルートです。これらのルートには、次のメトリックがあります。

- ネクスト ホップ：ネクスト ホップ ルータの IP アドレス。
- 遅延：宛先ネットワークへのルートを形成するインターフェイス上で設定された遅延の合計。10 マイクロ秒単位で設定されます。
- 帯域幅：宛先へのルートの一部であるインターフェイスで設定された最小帯域幅から計算されます。



(注) デフォルト帯域幅の値の使用を推奨します。この帯域幅パラメータは EIGRP でも使用されません。

- MTU：宛先へのルート上の最大伝送単位の最小値。
- ホップカウント：宛先までにルートが通過するホップまたはルータの数。このメトリックは、DUAL 計算で直接には使用されません。
- 信頼性：宛先までのリンクの信頼性を示します。
- 負荷：宛先までのリンク上のトラフィック量を示します。

デフォルトで EIGRP は、帯域幅と遅延のメトリックを使用して、宛先までのディスタンスを計算します。計算に他のメトリックが含まれるように、メトリックの重みを変更できます。

外部ルート メトリック

外部ルートとは、異なる EIGRP 自律システムにあるネイバー間のルートです。これらのルートには、次のメトリックがあります。

- ネクスト ホップ：ネクスト ホップ ルータの IP アドレス。
- ルータ ID：このルートを EIGRP に再配布したルータのルータ ID。
- AS 番号：宛先の自律システムの番号。
- プロトコル ID：宛先へのルートを学習したルーティング プロトコルを表すコード。
- タグ：ルート マップで使用可能な任意のタグ。
- メトリック：外部ルーティング プロトコルの、このルートのルート メトリック。

EIGRP とユニキャスト RIB

EIGRP は、すべての学習したルートを EIGRP トポロジテーブルとユニキャスト RIB に追加します。トポロジが変更されると、EIGRP は、これらのルートを使用してフィジブル サクセサ

を探します。EIGRP は、他のルーティングプロトコルから EIGRP に再配布されたあらゆるルートの変更についてのユニキャスト RIB からの通知も待ち受けます。

高度な EIGRP

EIGRP の高度な機能を使用して、EIGRP の設定を最適化できます。

アドレス ファミリ

EIGRP は、IPv4 アドレス ファミリをサポートします。

アドレス ファミリ コンフィギュレーション モードには、次の EIGRP 機能が含まれます。

- 認証
- AS 番号
- デフォルト ルート
- メトリック
- ディスタンス
- グレースフル リスタート
- ロギング
- ロード バランシング
- 再分配
- ルータ ID
- スタブ ルータ
- タイマー

複数のコンフィギュレーションモードで同じ機能を設定できません。たとえばルータ コンフィギュレーションモードでデフォルトメトリックを設定すると、アドレスファミリモードでデフォルトメトリックを設定できません。

認証

EIGRP メッセージに認証を設定することで、ネットワークでの不正なルーティング更新や無効なルーティング更新を防止できます。EIGRP 認証は MD5 認証ダイジェストをサポートしています。

認証キーのキーチェーン管理を使用して、仮想ルーティング/転送 (VRF) インスタンスごと、またはインターフェイスごとに EIGRP 認証を設定できます。キーチェーン管理を使用すると、MD5 認証ダイジェストが使用する認証キーへの変更を管理できます。

MD5 認証を行うには、ローカルルータとすべてのリモート EIGRP ネイバーで同一のパスワードを設定します。EIGRP メッセージが作成されると、Cisco NX-OS は、そのメッセージ自体と

暗号化されたパスワードに基づいて MD5 一方向メッセージダイジェストを作成し、このダイジェストを EIGRP メッセージとともに送信します。受信する EIGRP ネイバーは、同じ暗号化パスワードを使用して、このダイジェストを確認します。メッセージが変更されていない場合は計算が同一であるため、EIGRP メッセージは有効と見なされます。

MD5 認証には各 EIGRP メッセージのシーケンス番号も含まれており、これにより、ネットワークでのメッセージの再送が防止されます。

スタブ ルータ

EIGRP スタブ ルーティング機能を使用すると、ネットワークの安定性の向上、リソース使用量の削減、スタブ ルータ設定の簡易化を実現できます。スタブ ルータは、リモート ルータ経由で EIGRP ネットワークに接続します。「[スタブ ルーティング](#)」の項を参照してください。

EIGRP スタブ ルーティングを使用すると、EIGRP を使用するように配布とリモート ルータを設定し、リモート ルータのみをスタブ として設定する必要があります。EIGRP スタブ ルーティングで、分散ルータでの集約が自動的にイネーブルになるわけではありません。ほとんどの場合、分散ルータでの集約の設定が必要です。

EIGRP スタブ ルーティングを使用しない場合は、分散ルータからリモート ルータに送信されたルートがフィルタリングまたは集約された後でも、問題が発生することがあります。たとえば、ルートが企業ネットワーク内のどこかで失われた場合に、EIGRP が分散ルータに照会を送信することがあります。分散ルータは、ルートが集約されている場合でも、リモート ルータに照会を送信することがあります。分散ルータとリモート ルータの間の WAN リンク上の通信に問題が発生した場合は、EIGRP がアクティブ状態のままとなり、ネットワークの他の場所が不安定となる場合があります。EIGRP スタブ ルーティングを使用すると、リモート ルータに照会が送信されなくなります。

ルート集約

指定したインターフェイスにサマリー集約アドレスを設定できます。ルート集約を使用すると、固有性の強い一連のアドレスをすべての固有アドレスを代表する 1 つのアドレスに置き換えることによって、ルート テーブルを簡素化できます。たとえば、10.1.1.0/24、10.1.2.0/24、および 10.1.3.0/24 というアドレスを 1 つの集約アドレス 10.1.0.0/16 に置き換えることができます。

より具体的なアドレスがルーティング テーブルにある場合、EIGRP は、より具体的なルートの最小メトリックに等しいメトリックを持つインターフェイスからの集約アドレスをアドバタイズします。



(注) EIGRP は、自動ルート集約をサポートしていません。

ルートの再配布

EIGRP を使用して、ダイレクトルート、スタティックルート、他の EIGRP 自律システムから学習したルート、または他のプロトコルからのルートを再配布できます。再配布を含むルート

マップを設定して、どのルートが EIGRP に渡されるかを制御します。ルート マップを使用すると、宛先、送信元プロトコル、ルート タイプ、ルート タグなどの属性に基づいて、ルートをフィルタリングできます。[Route Policy Manager の設定 \(441 ページ\)](#) を参照してください。

インポートされた EIGRP へのすべてのルートに使用されるデフォルト メトリックも設定できます。

ロード バランシング

ロード バランシングを使用すると、ルータは、宛先アドレスから等距離内にあるすべてのルータのネットワーク ポートにトラフィックを分散できます。ロード バランシングにより、ネットワーク セグメントの使用率が向上し、それによってネットワーク 帯域幅の効率も向上します。

Cisco NX-OS は、等コスト マルチパス (ECMP) 機能をサポートします。EIGRP ルート テーブルおよびユニキャスト RIB の等コスト パスは最大 16 です。これらのパスの一部または全部に対してトラフィックのロード バランスを行うよう、EIGRP を設定できます。



(注) Cisco NX-OS の EIGRP は、等コストでないロード バランシングはサポートしていません。

Split Horizon

スプリット ホライズンを使用すると、ルートを学習したインターフェイスから EIGRP がルートをアドバタイズしないようにできます。

スプリット ホライズンは、EIGRP 更新パケットおよび EIGRP 照会パケットの送信を制御する方式です。インターフェイスでスプリット ホライズンをイネーブルにすると、Cisco NX-OS は、このインターフェイスから学習された宛先への更新パケットも照会パケットも送信しません。この方法でアップデート パケットとクエリー パケットを制御すると、ルーティング ループが発生する可能性が低くなります。

ポイズン リバースによるスプリット ホライズンにより、EIGRP は、EIGRP がルートを学習したインターフェイス経由で、そのルートを到達不能としてアドバタイズするよう設定されます。

EIGRP は、次のシナリオでスプリット ホライズン、またはポイズン リバースによるスプリット ホライズンを使用します。

- スタートアップ モードで、2 台のルータ間で初めてトポロジ テーブルを交換する。
- トポロジ テーブルの変更をアドバタイズする。
- 照会メッセージを送信する。

デフォルトでは、スプリット ホライズン機能がすべてのインターフェイスでイネーブルになっています。

仮想化のサポート

Cisco NX-OSは、同一システム上で動作する複数の EIGRP プロトコルインスタンスをサポートします。EIGRP は、仮想ルーティングおよび転送（VRF）インスタンスをサポートしています。デフォルトでは、特に別の VRF を設定しない限り、Cisco NX-OS はユーザーをデフォルトの VRF に配置します。「[レイヤ 3 仮想化の構成](#)」を参照してください

デフォルトでは、すべてのインスタンスが同じシステム ルータ ID を使用します。インスタンスごとに一意のルータ ID を設定することもできます。

EIGRP の前提条件

EIGRP を使用するには、次の前提条件を満たしている必要があります。

- EIGRP 機能をイネーブルにする必要があります（[EIGRP 機能のイネーブル化](#)を参照）。

注意事項と制約事項

EIGRP 設定時の注意事項および制約事項は次のとおりです。

- 他のプロトコル、接続されたルータ、またはスタティックルートからの再配布には、メトリック設定（デフォルト メトリック設定オプションまたはルート マップによる）が必要です（[Route Policy Manager の設定（441 ページ）](#)を参照）。
- グレースフル スタートについては、NSF 認識ルータが動作中であり、ネットワークで完全に収束している場合にのみ、このルータが NSF 対応ルータのグレースフル リスタート動作を支援できます。
- グレースフル リスタートについては、グレースフル リスタートに関係する隣接スイッチが NSF 認識、または NSF 対応である必要があります。
- Cisco NX-OS の EIGRP は Cisco IOS ソフトウェアの EIGRP と互換性があります。
- 妥当な理由がない限り、メトリックの重みを変更しないでください。メトリックの重みを変更した場合は、同じ自律システム内のすべての EIGRP ルータに、それを適用する必要があります。
- 大規模ネットワークの場合は、スタブの使用を検討してください。
- EIGRP ベクトル メトリックは維持されないため、異なる EIGRP 自律システム間での再配布は避けてください。
- **no ip next-hop-self** コマンドは、ネクスト ホップの到達可能性を保証しません。
- **ip passive-interface eigrp** コマンドを使用すると、ネイバーが形成されなくなります。
- Cisco NX-OS は IGRP も、IGRP および EIGRP クラウドの接続もサポートしていません。
- 自動集約は、デフォルトではイネーブルにされていません。

- Cisco NX-OS は IP のみをサポートします。
- ルートを EIGRP に再配布し、ルート マップまたはプレフィックス リストを使用してプレフィックスをフィルタリングするときに、触れてない場合でもフィルタによって許可されているすべてのプレフィックスは、EIGRP トポロジテーブル内で更新されます。この更新は、このプレフィックスセットのクエリ ドメイン内のすべての EIGRP ルータに通知されます。



(注) Cisco IOS の CLI に慣れている場合、この機能に対応する Cisco NX-OS コマンドは通常使用する Cisco IOS コマンドと異なる場合がありますので注意してください。

デフォルト設定

次のテーブルは、各 EIGRP パラメータに対するデフォルト設定を示します。

表 18: テーブル 6-1 デフォルト EIGRP パラメータ

パラメータ	デフォルト
アドミニストレーティブ ディスタンス	• 内部ルート : 90 • 外部ルート : 170
帯域幅の割合	50%
再配布されたルートのデフォルトのメトリック	• bandwidth : 100000 kbps • delay : 100 (10 マイクロ秒単位) • reliability : 255 • loading : 1 • MTU : 1500
EIGRP 機能	ディセーブル
hello 間隔	5 秒
Hold time	15 秒
等コスト パス	8
メトリック 重み	1 0 1 0 0
アドバタイズされたネクスト ホップ アドレス	ローカル インターフェイスの IP アドレス

パラメータ	デフォルト
NSF コンバージェンス時間	120
NSF ルート保留時間	240
NSF 信号送信時間	20
再分配	ディセーブル
スプリット ホライズン	有効 (Enabled)

基本的な EIGRP の設定

このセクションは、次のトピックで構成されています。

EIGRP 機能の有効化

EIGRP を設定するには、その前に EIGRP 機能をイネーブルにする必要があります。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : switch# configure terminal switch(config)#	グローバル構成モードを開始します。
ステップ 2	feature eigrp 例 : switch(config)# feature eigrp	EIGRP 機能を有効にします。
ステップ 3	(任意) show feature 例 : switch(config)# show feature	有効にされた機能に関する情報を表示し。
ステップ 4	(任意) copy running-config startup-config 例 : switch(config)# copy running-config startup-config	この設定変更を保存します。

例

no feature eigrp コマンドを使用して、BFD 機能を無効にし、関連する構成をすべて削除します。

コマンド	目的
no feature eigrp 例 : <pre>switch(config)# no feature eigrp</pre>	EIGRP 機能をディセーブルにして、関連付けられたコンフィギュレーションをすべて削除します。

EIGRP インスタンスの作成

EIGRP インスタンスを作成して、そのインスタンスにインターフェイスを関連付けることができます。この EIGRP プロセスに一意的自律システム番号を割り当てます（「[自律システム](#)」の項を参照）。ルート再配布をイネーブルにしていない限り、他の自律システムからルートがアドバタイズされることも、受信されることもありません。

始める前に

EIGRP 機能を有効にしていることを確認します（[EIGRP 機能の有効化](#)のセクションを参照）。

EIGRP がルータ ID（設定済みのループバックアドレスなど）を入手可能であるか、またはルータ ID オプションを設定する必要があります。

AS 番号であると認められていないインスタンス タグを設定する場合は、AS 番号を明示的に設定する必要があります。そうしないと、この EIGRP インスタンスはシャットダウン状態のままになります。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	router eigrp instance-tag 例 : <pre>switch(config)# router eigrp Test1 switch(config-router)#</pre>	インスタンス タグを設定して、新しい EIGRP プロセスを作成します。インスタンス タグには最大 20 文字の英数字を使用できます。大文字と小文字を区別します。 AS 番号であると認められていない <i>instance-tag</i> を構成する場合は、

	コマンドまたはアクション	目的
		autonomous-system コマンドを使用して AS 番号を明示的に構成する必要があります。そうしないと、この EIGRP インスタンスはシャットダウン状態のままになります。
ステップ 3	(任意) autonomous-system as-number 例 : switch(config-router)# autonomous-system 33	この EIGRP インスタンスに一意の AS 番号を設定します。有効な範囲は 1 ～ 65535 です。
ステップ 4	(任意) log-adjacency-changes 例 : switch(config-router)# log-adjacency-changes	隣接関係の状態が変化するたびに、システムメッセージを生成します。このコマンドは、デフォルトでイネーブルになっています。
ステップ 5	(任意) log-neighbor-warnings [seconds] 例 : switch(config-router)# log-neighbor-warnings	ネイバーの警告が発生するたびに、システムメッセージを生成します。警告メッセージの時間間隔を、1 ～ 65535 の秒数で設定できます。デフォルトは 10 秒です。このコマンドは、デフォルトでイネーブルになっています。
ステップ 6	interface interface-type slot/port 例 : switch(config-router)# interface ethernet 1/2 switch(config-if)#	インターフェイス設定モードを開始します。? を使用すると、スロットおよびポートの範囲を確認できます。
ステップ 7	no switchport 例 : switch(config-if)# no switchport	そのインターフェイスを、レイヤ 3 ルーテッドインターフェイスとして設定します。
ステップ 8	ip router eigrp instance-tag 例 : switch(config-if)# ip router eigrp Test1	このインターフェイスを、設定された EIGRP プロセスに関連付けます。インスタンス タグには最大 20 文字の英数字を使用できます。大文字と小文字を区別します。
ステップ 9	show ip eigrp interfaces 例 : switch(config-if)# show ip eigrp interfaces	EIGRP インターフェイスに関する情報を表示します。
ステップ 10	(任意) copy running-config startup-config	この設定変更を保存します。

	コマンドまたはアクション	目的
	例 : <pre>switch(config)# copy running-config startup-config</pre>	

例

EIGRP プロセスと、関連付けられた設定を削除するには、**no router eigrp** コマンドを使用します。

コマンド	目的
no router eigrp instance-tag 例 : <pre>switch(config)# no router eigrp Test1</pre>	EIGRP プロセスと、関連付けられたすべての設定を削除します。



- (注) EIGRP プロセスを削除する場合は、インターフェイス モードで設定された EIGRP コマンドも削除する必要があります。

次に、EIGRP プロセスを作成し、EIGRP のインターフェイスを設定する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# router eigrp Test1
switch(config)# interface ethernet 1/2
switch(config-if)# no switchport
switch(config-if)# ip router eigrp Test1
switch(config-if)# no shutdown
switch(config-if)# copy running-config startup-config
```

その他の EIGRP パラメータの詳細については、[高度な EIGRP の設定](#)のセクションを参照してください。

EIGRP インスタンスの再起動

EIGRP インスタンスを再起動できます。再起動すると、インスタンスのすべてのネイバーが消去されます。

EIGRP インスタンスを再起動して、関連付けられたすべてのネイバーを削除するには、次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
flush-routes 例 : <pre>switch(config)# flush-routes</pre>	この EIGRP インスタンスを再起動するときに、ユニキャスト RIB のすべての EIGRP ルートをフラッシュします。
restart eigrp instance-tag 例 : <pre>switch(config)# restart eigrp Test1</pre>	EIGRP インスタンスを再起動して、すべてのネイバーを削除します。インスタンス タグには最大 20 文字の英数字を使用できます。大文字と小文字を区別します。

EIGRP インスタンスのシャットダウン

EIGRP インスタンスを正常にシャットダウンできます。これにより、すべてのルートと隣接関係は移動しますが、EIGRP 設定は保持されます。

EIGRP インスタンスをディセーブルにするには、ルータ コンフィギュレーション モードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
shutdown 例 : <pre>switch(config-router)# shutdown</pre>	この EIGRP インスタンスをディセーブルにします。EIGRP ルータ設定は残ります。

EIGRP のパッシブ インターフェイスの設定

EIGRP のパッシブ インターフェイスを設定できます。パッシブ インターフェイスは、EIGRP 隣接関係に参加しませんが、このインターフェイスのネットワーク アドレスは EIGRP トポロジ テーブルに残ります。

EIGRP のパッシブ インターフェイスを設定するには、インターフェイス コンフィギュレーション モードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
ip passive-interface eigrp instance-tag	EIGRP hello を抑制します。これにより、EIGRP インターフェイス上でネイバーがルーティングアップデートを形成および送信することを防ぎます。インスタンス タグには最大 20 文字の英数字を使用できます。大文字と小文字を区別します。

インターフェイスでの EIGRP のシャットダウン

インターフェイスで EIGRP を正常にシャットダウンできます。これにより、すべての隣接関係が削除され、このインターフェイスで EIGRP トラフィックが停止しますが、EIGRP 設定は保持されます。

インターフェイスで EIGRP を無効にするには、インターフェイス設定モードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
ip eigrp instance-tag shutdown 例 : <pre>switch(config-router)# ip eigrp Test1 shutdown</pre>	このインターフェイスで EIGRP を無効にします。EIGRP インターフェイス設定は残ります。インスタンスタグには最大 20 文字の英数字を使用できます。大文字と小文字を区別します。

高度な EIGRP の設定

このセクションは、次のトピックで構成されています。

EIGRP での認証の設定

EIGRP のネイバー間に認証を設定できます。「[認証 \(Authentication\)](#)」セクションを参照してください。

EIGRP プロセスまたは個々のインターフェイスに対応する EIGRP 認証を設定できます。インターフェイスの EIGRP 認証設定は、EIGRP プロセスレベルの認証設定よりも優先します。

始める前に

EIGRP 機能を有効にしていることを確認します ([EIGRP 機能の有効化](#)のセクションを参照)。

EIGRP プロセスのすべてのネイバーが、共有認証キーを含め、同じ認証設定を共有することを確認します。

この認証構成のためのキー チェーンを作成します。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 2	router eigrp instance-tag 例 : <pre>switch(config)# router eigrp Test1 switch(config-router)#</pre>	インスタンスタグを設定して、新しい EIGRP プロセスを作成します。インスタンス タグには最大 20 文字の英数字を使用できます。大文字と小文字を区別します。 AS 番号であると認められていない instance-tag を構成する場合は、 autonomous-system コマンドを使用して AS 番号を明示的に構成する必要があります。そうしないと、この EIGRP インスタンスはシャットダウン状態のままになります。
ステップ 3	address-family ipv4 unicast 例 : <pre>switch(config-router)# address-family ipv4 unicast switch(config-router-af)#</pre>	アドレス ファミリ コンフィギュレーションモードを開始します。IPv4 の場合、このコマンドはオプションです。
ステップ 4	authentication keychain keychain 例 : <pre>switch(config-router-af)# authentication keychain routeKeys</pre>	この VRF の EIGRP プロセスにキーチェーンを関連付けます。キーチェーン名は、大文字と小文字が区別される 20 文字以下の任意の英数字文字列にできます。
ステップ 5	authentication mode md5 例 : <pre>switch(config-router-af)# authentication mode md5</pre>	この VRF の MD5 メッセージダイジェスト認証モードを設定します。
ステップ 6	interface interface-type slot/port 例 : <pre>switch(config-router-af) interface ethernet 1/2 switch(config-if)#</pre>	インターフェイス設定モードを開始します。 ? を使用すると、サポートされているインターフェイスを調べることができます。
ステップ 7	no switchport 例 : <pre>switch(config-if)# no switchport</pre>	そのインターフェイスを、レイヤ 3 ルーテッドインターフェイスとして設定します。
ステップ 8	ip router eigrp instance-tag 例 : <pre>switch(config-if)# ip router eigrp Test1</pre>	このインターフェイスを、設定された EIGRP プロセスに関連付けます。インスタンス タグには最大 20 文字の英数字を使用できます。大文字と小文字を区別します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 9	ip authentication keychain eigrp instance-tag keychain 例 : <pre>switch(config-if)# ip authentication keychain eigrp Test1 routeKeys</pre>	このインターフェイスの EIGRP プロセスにキーチェーンを関連付けます。この設定は、ルータの VRF モードで設定された認証設定よりも優先します。 インスタンス タグには最大 20 文字の英数字を使用できます。大文字と小文字を区別します。
ステップ 10	ip authentication mode eigrp instance-tag md5 例 : <pre>switch(config-if)# ip authentication mode eigrp Test1 md5</pre>	このインターフェイスの MD5 メッセージダイジェスト認証モードを設定します。この設定は、ルータの VRF モードで設定された認証設定よりも優先します。 インスタンス タグには最大 20 文字の英数字を使用できます。大文字と小文字を区別します。
ステップ 11	copy running-config startup-config 例 : <pre>switch(config)# copy running-config startup-config</pre>	この設定変更を保存します。

例

次に、EIGRP の MD5 メッセージダイジェスト認証をイーサネット インターフェイス 1/2 上で設定する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# router eigrp Test1
switch(config-router)# exit
switch(config)# interface ethernet 1/2
switch(config-if)# no switchport
switch(config-if)# ip router eigrp Test1
switch(config-if)# ip authentication keychain eigrp Test1 routeKeys
switch(config-if)# ip authentication mode eigrp Test1 md5
switch(config-if)# copy running-config startup-config
```

EIGRP スタブルーティングの設定

ルータで EIGRP スタブルーティングを設定するには、アドレス ファミリ コンフィギュレーション モードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
stub [direct receive-only redistributed [direct] leak-map map-name] 例 : <pre>switch(config-router-af)# eigrp stub redistributed</pre>	リモートルータを EIGRP スタブルータとして設定します。マップ名には最大 20 文字の英数字を使用できます。大文字と小文字は区別されます。

次に、直接接続され、再配布されるルートをアドバタイズするスタブルータを設定する例を示します。

```
switch# configure terminal
```

```
switch(config)# router eigrp Test1
```

```
switch(config-router)# address-family ipv4 unicast
```

```
switch(config-router-af)# stub direct redistributed
```

```
switch(config-router-af)# copy running-config startup-config
```

ルータがスタブルータとして設定されていることを確認するには、**show ip eigrp neighbor detail** コマンドを使用します。出力の最後の行は、リモートルータまたはスポークルータのスタブステータスを示します。次に、**ip eigrp neighbor detail** コマンドの出力例を示します。

```
Router# show ip eigrp neighbor detail
IP-EIGRP neighbors for process 201
H Address Interface Hold Uptime SRTT RTO Q Seq Type
(sec) (ms) Cnt Num
0 10.1.1.2 Se3/1 11 00:00:59 1 4500 0 7
Version 12.1/1.2, Retrans: 2, Retries: 0
Stub Peer Advertising ( CONNECTED SUMMARY) Routes
```

EIGRP のサマリー アドレスの設定

指定したインターフェイスにサマリー集約アドレスを設定できます。ルーティングテーブルに他にも個別のルートがある場合、EIGRP は、他の個別ルートすべての中で最小のメトリックと等しいメトリックで、サマリーアドレスをインターフェイスからアドバタイズします。「[ルート集約](#)」の項を参照してください。

サマリー集約アドレスを設定するには、インターフェイス コンフィギュレーション モードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
ip summary-address eigrp instance-tag ip-prefix/length [distance leak-map map-name] 例 : <pre>switch(config-if)# ip summary-address eigrp Test1 192.0.2.0/8</pre>	サマリー集約アドレスを、IP アドレスとネットワーク マスク、または IP プレフィックス/長さとして設定します。インスタンス タグおよびマップ名には最大 20 文字の英数字を使用できます。大文字と小文字は区別されます。 また、この集約アドレスのアドミニストレーティブディスタンスを設定することもできます。集約アドレスのデフォルトアドミニストレーティブディスタンスは 5 です。

次に、EIGRPによりネットワーク 192.0.2.0 がイーサネット 1/2 のみに集約されるようにする例を示します。

```
switch(config)# interface ethernet 1/2
switch(config-if)# no switchport
switch(config-if)# ip summary-address eigrp Test1 192.0.2.0 255.255.255.0
```

EIGRP へのルートの再配布

他のルーティング プロトコルから EIGRP にルートを再配布できます。

始める前に

EIGRP 機能を有効にしていることを確認します ([EIGRP 機能の有効化](#)のセクションを参照)。

他のプロトコルから再配布されるルートには、メトリック (デフォルト メトリック 設定 オプションまたはルート マップによる) を設定する必要があります。

ルートマップを作成して、EIGRP に再配布されるルートのタイプを管理する必要があります。[Route Policy Manager の設定 \(441 ページ\)](#) を参照してください。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	router eigrp instance-tag 例 : <pre>switch(config)# router eigrp Test1 switch(config-router)#</pre>	インスタンス タグを設定して、新しい EIGRP プロセスを作成します。インスタンス タグには最大 20 文字の英数字を使用できます。大文字と小文字を区別します。 AS 番号であると認められていない <i>instance-tag</i> を設定する場合は、 autonomous-system コマンドを使用して AS 番号を明示的に設定する必要があります。そうしないと、この EIGRP インスタンスはシャットダウン状態のままになります。
ステップ 3	address-family ipv4 unicast 例 : <pre>switch(config-router)# address-family ipv4 unicast switch(config-router-af)#</pre>	アドレス ファミリ コンフィギュレーション モードを開始します。IPv4 の場合、このコマンドはオプションです。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 4	redistribute { bgp as {eigrp ospf ospfv3 rip} instance-tag direct static } route-map name 例 : <pre>switch(config-router-af)# redistribute bgp 100 route-map BGPFilter</pre>	1つのルーティングドメインからEIGRPにルートを注入します。インスタンスタグおよびマップ名には最大20文字の英数字を使用できます。大文字と小文字は区別されます。
ステップ 5	default-metric bandwidth delay reliability loading mtu 例 : <pre>switch(config-router-af)# default-metric 500000 30 200 1 1500</pre>	ルート再配布で学習したルートに割り当てられるメトリックを設定します。デフォルト値は次のとおりです。 • bandwidth : 100000 kbps • delay : 100 (10 マイクロ秒単位) • reliability : 255 • loading : 1 • MTU : 1492
ステップ 6	show ip eigrp route-map statistics redistribute 例 : <pre>switch(config-router-af)# show ip eigrp route-map statistics redistribute bgp</pre>	EIGRP ルート マップ統計に関する情報を表示します。
ステップ 7	(任意) copy running-config startup-config 例 : <pre>switch(config)# copy running-config startup-config</pre>	この設定変更を保存します。

例

次に、BGP を IPv4 向けの EIGRP に再配布する例を示します。

```
switch# configure terminal

switch(config)# router eigrp Test1

switch(config-router)# redistribute bgp 100 route-map BGPFilter

switch(config-router)# default-metric 500000 30 200 1 1500

switch(config-router)# copy running-config startup-config
```


再配布されるルート数の制限

ルートの再配布では、多くのルートを EIGRP ルート テーブルに追加できます。外部プロトコルから受け取るルートの数の上限を設定できます。EIGRP では、再配布されるルートの上限を設定するために次のオプションが用意されています。

- 上限固定：EIGRP が設定された最大値に達すると、メッセージをログに記録します。EIGRP は、それ以上の再配布されたルートを受け入れません。しきい値を超えたときに EIGRP が警告をログに記録する、最大値のしきい値に対する割合を設定することもできます。
- 警告のみ：EIGRP が最大値に達したときのみ、警告のログを記録します。EIGRP は、再配布されたルートを受け入れ続けます。
- 取り消し：EIGRP が最大値に達すると、タイムアウト期間が開始します。タイムアウト期間の経過後、再配布されたルートの現在数が最大数よりも少ない場合、EIGRP はすべての再配布されたルートを要求します。再配布されたルートの現在数が最大数に達した場合、EIGRP はすべての再配布されたルートを取り消します。EIGRP が再配布されたルートをさらに受け入れられるように、この条件をクリアする必要があります。

任意で、タイムアウト期間を設定できます。



(注) このタスクを設定できるのは、IPv4 VRF アドレス ファミリ コンフィギュレーションモードだけです。

始める前に

EIGRP 機能を有効にしていることを確認します (EIGRP 機能の有効化のセクションを参照)。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	router eigrp instance-tag 例 : <pre>switch(config)# router eigrp Test1 switch(config-router)#</pre>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 3	redistribute { bgp id direct eigrp id ospf id rip id static } route-map map-name 例 :	設定したルート マップ経由で、選択したプロトコルを EIGRP に再配布します。

	コマンドまたはアクション	目的
	switch(config-router)# redistribute bgp route-map FilterExternalBGP	
ステップ 4	redistribute maximum-prefix <i>max</i> [<i>threshold</i>] [warning-only withdraw [<i>num-retries</i> <i>timeout</i>]] 例 : switch(config-router)# redistribute maximum-prefix 1000 75 warning-only	EIGRP が再配布するプレフィックスの最大数を指定します。指定できる範囲は 0 ～ 65536 です。任意で次のオプションを指定します。 • threshold : 警告メッセージをトリガする最大プレフィックスの割合。 • warning-only : プレフィックスの最大数を超えた場合に警告メッセージを記録します。 • withdraw : 再配布されたすべてのルートを取り消します。任意で再配布されたルートを取得しようと試みます。<i>num-retries</i> の範囲は 1 ～ 12 です。<i>timeout</i> は 60 ～ 600 秒です。デフォルトは 300 秒です。clear ip eigrp redistribution コマンドは、すべてのルートを取り消す場合に使用します。
ステップ 5	(任意) show running-config eigrp 例 : switch(config-router)# show running-config eigrp	EIGRP の設定を表示します。
ステップ 6	(任意) copy running-config startup-config 例 : switch(config-router)# copy running-config startup-config	この設定変更を保存します。

例

次に、EIGRP に再配布されるルート数を制限する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# router eigrp Test1
switch(config-router)# redistribute bgp route-map FilterExternalBGP
switch(config-router)# redistribute maximum-prefix 1000 75
```

EIGRP でのロードバランスの設定

EIGRP でのロードバランスを設定できます。最大パス オプションを使用して、ECMP ルートの数を設定できます。

始める前に

EIGRP 機能を有効にしていることを確認します ([EIGRP 機能の有効化](#)のセクションを参照)。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	コンフィギュレーション モードに入ります。
ステップ 2	router eigrp instance-tag 例 : <pre>switch(config)# router eigrp Test1 switch(config-router)#</pre>	インスタンス タグを設定して、新しい EIGRP プロセスを作成します。インスタンス タグには最大 20 文字の英数字を使用できます。大文字と小文字を区別します。 AS 番号であると認められていない <i>instance-tag</i> を設定する場合は、 autonomous-system コマンドを使用して AS 番号を明示的に設定する必要があります。そうしないと、この EIGRP インスタンスはシャットダウン状態のままになります。
ステップ 3	address-family ipv4 unicast 例 : <pre>switch(config-router)# address-family ipv4 unicast switch(config-router-af)#</pre>	アドレス ファミリ コンフィギュレーション モードを開始します。IPv4 の場合、このコマンドはオプションです。
ステップ 4	maximum-paths num-paths 例 : <pre>switch(config-router-af)# maximum-paths 5</pre>	EIGRP がルート テーブルに受け入れる等コストパスの数を設定します。指定できる範囲は 1 ~ 16 です。デフォルト値は 8 です。
ステップ 5	(任意) copy running-config startup-config 例 : <pre>switch(config)# copy running-config startup-config</pre>	この設定変更を保存します。

例

次に、6 つまでの等コストパスによる、EIGRP の等コストロードバランスを IPv4 上で設定する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# router eigrp Test1
switch(config-router)# maximum-paths 6
switch(config-router)# copy running-config startup-config
```

hello パケット間のインターバルとホールドタイムの調整

Hello メッセージの間隔とホールドタイムは調整できます。

デフォルトでは、5 秒ごとに Hello メッセージが送信されます。ホールドタイムは Hello メッセージでアドバタイズされ、ネイバーに、送信者が有効であると見なすべき時間を示します。デフォルトの保留時間は、hello 間隔の 3 倍（15 秒）です。

hello パケットの間隔を変更するには、インターフェイス コンフィギュレーション モードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
ip hello-interval eigrp instance-tag seconds 例 : <pre>switch(config-if)# ip hello-interval eigrp Test1 30</pre>	EIGRP ルーティング処理の hello 間隔を設定します。インスタンス タグには最大 20 文字の英数字を使用できます。大文字と小文字を区別します。範囲は 1 ～ 65535 秒です。デフォルトは 5 分です。

非常に輻輳した大規模なネットワークでは、デフォルトの保留時間では、全ルータがネイバーから hello パケットを受信するまでに十分な時間がない場合もあります。この場合は、ホールドタイムを増やすことを推奨します。

ホールドタイムを変更するには、インターフェイス コンフィギュレーション モードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
ip hold-time eigrp instance-tag seconds 例 : <pre>switch(config-if)# ip hold-time eigrp Test1 30</pre>	EIGRP ルーティング処理のホールドタイムを設定します。インスタンス タグには最大 20 文字の英数字を使用できます。大文字と小文字を区別します。有効な範囲は 1 ～ 65535 です。

タイマー設定を確認するには、**show ip eigrp interface detail** コマンドを使用します。

スプリット ホライズンの無効化

スプリット ホライズンを使用すると、ルータによって情報元インターフェイスからルート情報がアドバタイズされないようにできます。通常はスプリット ホライズンにより、特にリンクに障害がある場合に、複数のルーティング スイッチ間での通信が最適化されます。

デフォルトでは、スプリット ホライズンはすべてのインターフェイスで有効になっています。

スプリット ホライズンを無効にするには、インターフェイス コンフィギュレーション モードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
no ip split-horizon eigrp instance-tag 例 : switch(config-if)# no ip split-horizon eigrp Test1	スプリット ホライズンを無効にします。

EIGRP の調整

オプション パラメータを設定し、ネットワークに合わせて EIGRP を調整できます。

アドレス ファミリ コンフィギュレーション モードでは、次のオプション パラメータを設定できます。

コマンド	目的
default-information originate [always route-map map-name] 例 : switch(config-router-af)# default-information originate always	プレフィックス 0.0.0.0/0 を持つデフォルト ルートを発信するか、受け入れます。ルート マップが提供されると、ルート マップが true 状態となっている場合にのみデフォルト ルートが発信されます。マップ名には最大 20 文字の英数字を使用できます。大文字と小文字は区別されます。
distance internal external 例 : switch(config-router-af)# distance 25 100	この EIGRP プロセスのアドミニストレーティブ ディスタンスを設定します。範囲は 1 ～ 255 です。内部の値で、同じ自律システム内で学習したルートのディスタンスが設定されます（デフォルト値は 90 です）。外部の値で、外部自律システムから学習したルートのディスタンスが設定されます（デフォルト値は 170 です）。
metric maximum-hops hop-count 例 : switch(config-router-af)# metric maximum-hops 70	アドバタイズされるルートに許容される最大ホップ数を設定します。ホップ数がこの最大値を超えるルートは、到達不能としてアドバタイズされます。範囲は 1 ～ 255 です。デフォルトは 100 です。

コマンド	目的
metric weights tos k1 k2 k3 k4 k5 例 : <pre>switch(config-router-af)# metric weights 0 1 3 2 1 0</pre>	EIGRP メトリックまたは K 値を調整します。EIGRP は次の式を使用して、ネットワークへの合計メトリックを決定します。 $\text{metric} = [k1 \times \text{bandwidth} + (k2 \times \text{bandwidth}) / (256 - \text{load}) + k3 \times \text{delay}] \times [k5 / (\text{reliability} + k4)]$ デフォルト値と指定できる範囲は、次のとおりです。 • TOS : 0。指定できる範囲は 0 ～ 8 です。 • k1 : 1。有効な範囲は 0 ～ 255 です。 • k2 : 0。有効な範囲は 0 ～ 255 です。 • k3 : 1。有効な範囲は 0 ～ 255 です。 • k4 : 0。有効な範囲は 0 ～ 255 です。 • k5 : 0。有効な範囲は 0 ～ 255 です。
timers active-time { time-limit disabled } 例 : <pre>switch(config-router-af)# timers active-time 200.</pre>	(照会の送信後に) ルートがアクティブ (SIA) 状態のままとなっていることを宣言するまでに、ルータが待機する時間を分単位で設定します。有効な範囲は 1 ～ 65535 です。デフォルトは 3 です。

インターフェイス コンフィギュレーション モードで、省略可能な次のパラメータを設定できます。

コマンド	目的
ip band width eigrp instance-tag bandwidth 例 : <pre>switch(config-if)# ip bandwidth eigrp Test1 30000</pre>	インターフェイス上の EIGRP の帯域幅メトリックを設定します。インスタンス タグには最大 20 文字の英数字を使用できます。大文字と小文字を区別します。帯域幅の範囲は、1 ～ 2,560,000,000 kbps です。
ip band width-percent eigrp instance-tag percent 例 : <pre>switch(config-if)# ip bandwidth-percent eigrp Test1 30</pre>	EIGRP がインターフェイス上で使用する可能性のある帯域幅の割合を設定します。インスタンス タグには最大 20 文字の英数字を使用できます。大文字と小文字を区別します。 割合の範囲は 0 ～ 100 です。デフォルトは 50 です。
no ip delay eigrp instance-tag delay 例 : <pre>switch(config-if)# ip delay eigrp Test1 100</pre>	インターフェイス上の EIGRP の遅延メトリックを設定します。インスタンス タグには最大 20 文字の英数字を使用できます。大文字と小文字を区別します。遅延の範囲は、1 ～ 16777215 (10 マイクロ秒単位) です。

コマンド	目的
ip distribute-list eigrp instance-tag { prefix-list name route-map name} { in out } 例 : <pre>switch(config-if)# ip distribute-list eigrp Test1 route-map EigrpTest in</pre>	このインターフェイス上の EIGRP のルータ フィルタリング ポリシーを設定します。インスタンス タグ、プレフィックス リスト名、およびルート マップ名には最大 20 文字の英数字を使用できます。大文字と小文字は区別されます。
no ip next-hop-self eigrp instance-tag 例 : <pre>switch(config-if)# ip next-hop-self eigrp Test1</pre>	このインターフェイスのアドレスではなく、受信したネクストホップアドレスを使用するよう、EIGRPを設定します。デフォルトでは、このインターフェイスの IP アドレスをネクストホップアドレスに使用します。インスタンス タグには最大 20 文字の英数字を使用できます。大文字と小文字を区別します。
ip offset-list eigrp instance-tag { prefix-list name route-map name} { in out } offset 例 : <pre>switch(config-if)# ip offset-list eigrp Test1 prefix-list EigrpList in</pre>	EIGRP が学習したルートに、着信および発信メトリックへのオフセットを追加します。インスタンス タグ、プレフィックス リスト名、およびルート マップ名には最大 20 文字の英数字を使用できます。大文字と小文字は区別されます。
ip passive-interface eigrp instance-tag 例 : <pre>switch(config-if)# ip passive-interface eigrp Test1</pre>	EIGRP hello を抑制します。これにより、EIGRP インターフェイス上でネイバーがルーティングアップデートを形成および送信することを防ぎます。インスタンス タグには英数字を

EIGRP の仮想化の設定

EIGRP 機能を有効にしていることを確認します（[EIGRP 機能の有効化](#)のセクションを参照）。

始める前に

複数の VRF を作成して、各 VRF で同じまたは複数の EIGRP プロセスを使用することもできます。VRF にはインターフェイスを割り当てます。



(注) インターフェイスの VRF を設定した後に、インターフェイスの他のすべてのパラメータを設定します。インターフェイスの VRF を設定すると、そのインターフェイスの他の設定がすべて削除されます。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	vrf context vrf-name 例 : <pre>switch(config)# vrf context RemoteOfficeVRF switch(config-vrf)#</pre>	新しい VRF を作成し、VRF 設定モードを開始します。VRN 名には最大 20 文字の英数字を使用できます。大文字と小文字は区別されます。
ステップ 3	router eigrp instance-tag 例 : <pre>switch(config)# router eigrp Test1 switch(config-router)#</pre>	インスタンス タグを設定して、新しい EIGRP プロセスを作成します。インスタンス タグには最大 20 文字の英数字を使用できます。大文字と小文字を区別します。 AS 番号であると認められていない <i>instance-tag</i> を設定する場合は、autonomous-system コマンドを使用して AS 番号を明示的に設定する必要があります。そうしないと、この EIGRP インスタンスはシャットダウン状態のままになります。
ステップ 4	interface ethernet slot/port 例 : <pre>switch(config)# interface ethernet 1/2 switch(config-if)#</pre>	インターフェイス設定モードを開始します。 ? を使用すると、スロットおよびポートの範囲を検索できます。
ステップ 5	no switchport 例 : <pre>switch(config-if)# no switchport</pre>	そのインターフェイスを、レイヤ 3 ルーテッド インターフェイスとして設定します。
ステップ 6	vrf member vrf-name 例 : <pre>switch(config-if)# vrf member RemoteOfficeVRF</pre>	このインターフェイスを VRF に追加します。VRF 名には最大 20 文字の英数字を使用できます。大文字と小文字は区別されます。
ステップ 7	ip router eigrp instance-tag 例 : <pre>switch(config-if)# ip router eigrp Test1</pre>	このインターフェイスを EIGRP プロセスに追加します。インスタンス タグには最大 20 文字の英数字を使用できます。大文字と小文字を区別します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 8	copy running-config startup-config 例 : <pre>switch(config-if)# copy running-config startup-config</pre>	この設定変更を保存します。

例

次に、VRF を作成して、その VRF にインターフェイスを追加する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# vrf context NewVRF
switch(config-vrf)# router eigrp Test1
switch(config-router)# i nterface ethernet 1/2
switch(config-if)# no switchport
switch(config-if)# ip router eigrp Test1
switch(config-if)# vrf member NewVRF
switch(config-if)# copy running-config startup-config
```

EIGRP の設定の確認

EIGRP の設定情報を表示するには、次のいずれかの作業を行います。

コマンド	目的
show ip eigrp [<i>instance-tag</i>]	設定した EIGRP プロセスの要約を表示します。
show ip eigrp [<i>instance-tag</i>] interfaces [<i>type number</i>] [brief] [detail]	設定されているすべての EIGRP インターフェイスに関する情報を表示します。
show ip eigrp instance-tag neighbors [<i>type number</i>]	すべての EIGRP ネイバーに関する情報を表示します。EIGRP ネイバーの設定を確認するには、このコマンドを使用します。
show ip eigrp [<i>instance-tag</i>] route [<i>ip-prefix/length</i>] [active] [all-links] [detail-links] [pending] [summary] [zero-successors] [<i>vrf vrf-name</i>]	すべての EIGRP ルートに関する情報を表示します。
show ip eigrp [<i>instance-tag</i>] topology [<i>ip-prefix/length</i>] [active] [all-links] [detail-links] [pending] [summary] [zero-successors] [<i>vrf vrf-name</i>]	EIGRP トポロジ テーブルに関する情報を表示します。
show running-configuration eigrp	現在実行中の EIGRP コンフィギュレーションを表示します。

EIGRP 統計情報の表示

EIGRP 統計情報を表示するには、次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
show ip eigrp [instance-tag] accounting [vrf vrf-name]	EIGRP の課金統計情報を表示します。
show ip eigrp [instance-tag] route-map statistics redistribute	EIGRP の再配布統計情報を表示します。
show ip eigrp [instance-tag] traffic [vrf vrf-name]	EIGRP のトラフィック統計情報を表示します。

関連項目

ルートマップの詳細については、[Route Policy Manager の設定（441 ページ）](#)を参照してください。

その他の参考資料

EIGRP の実装に関する詳細情報については、次のページを参照してください。

関連資料

関連項目	マニュアルタイトル
EIGRP CLI コマンド	『 Cisco Nexus 3000 Series Command Reference 』
http://www.cisco.com/warp/public/103/1.html	EIGRP テクニカルノートの概要

関連項目	マニュアル タイトル
http://www.cisco.com/en/US/tech/tk365/technologies_q_and_a_item09186a008012dac4.shtml	EIGRP よく寄せられる質問 (FAQ)

MIB

MIB	MIB のリンク
CISCO-EIGRP-MIB	MIB を検索してダウンロードするには、次の MIB をクリックして移動します。



第 9 章

IS-IS の設定

この章では、Cisco NX-OS デバイスの Integrated Intermediate System-to-Intermediate System (IS-IS) を設定する方法について説明します。

この章は、次の項で構成されています。

- [IS-IS について \(211 ページ\)](#)
- [IS-IS の前提条件 \(217 ページ\)](#)
- [IS-IS に関する注意事項および制限事項 \(217 ページ\)](#)
- [デフォルト設定 \(217 ページ\)](#)
- [IS-IS の設定 \(218 ページ\)](#)
- [IS-IS 設定の確認 \(243 ページ\)](#)
- [IS-IS の監視 \(244 ページ\)](#)
- [IS-IS の設定例 \(245 ページ\)](#)
- [関連項目 \(245 ページ\)](#)

IS-IS について

IS-IS は、ISO（国際標準化機構）/IEC（国際電気標準化会議）10589 に基づく IGP です。Cisco NX-OS は、インターネットプロトコルバージョン 4 (IPv4) および IPv6 をサポートします。IS-IS はネットワークトポロジの変化を検出し、ネットワーク上の他のノードへのループフリールートを計算できる、ダイナミック リンクステートルーティングプロトコルです。各ルータは、ネットワークの状態を記述するリンクステートデータベースを維持し、設定された各リンクにパケットを送信してネイバーを検出します。IS-IS はネットワークを介して各ネイバーにリンクステート情報をフラッディングします。ルータもすべての既存ネイバーを通じて、リンクステートデータベースのアドバタイズメントおよびアップデートを送信します。

IS-IS の概要

IS-IS は、設定されている各インターフェイスに hello パケットを送信し、IS-IS ネイバー ルータを検出します。hello パケットには認証、エリア、サポート対象プロトコルなど、受信側インターフェイスが発信側インターフェイスとの互換性を判別するために使用する情報が含まれます。また、一致する最大転送ユニット (MTU) 設定を持つインターフェイスだけを使用して

IS-IS が隣接関係を確立できるように、**hello** パケットがパディングされます。互換インターフェイスは隣接関係を形成し、リンクステートアップデートメッセージ (LSP) を使用して、リンクステートデータベースのルーティング情報をアップデートします。ルータはデフォルトで、10 分間隔で定期的に LSP リフレッシュを送信し、LSP は 20 分間 (LSP ライフタイム) リンクステートデータベースに残ります。LSP ライフタイムが終了するまでにルータが LSP リフレッシュを受信しなかった場合、ルータはデータベースから LSP を削除します。

LSP 間隔は、LSP ライフタイムより短くする必要があります。そうしないと、リフレッシュ前に LSP がタイムアウトします。

IS-IS は、隣接ルータに定期的に **hello** パケットを送信します。**hello** パケットに対して一時モードを設定すると、IS-IS が隣接関係を確立する前に使用された余分なパディングがこれらの **hello** パケットに含まれなくなります。隣接ルータの MTU 値が変更された場合、IS-IS はこの変更を検出し、パディングされた **hello** パケットを一定期間送信できます。IS-IS はこの機能を使用して、隣接ルータ上の一致しない MTU 値を検出します。詳細については、「[Hello パディングの一時モードの設定](#)」の項を参照してください。

IS-IS エリア

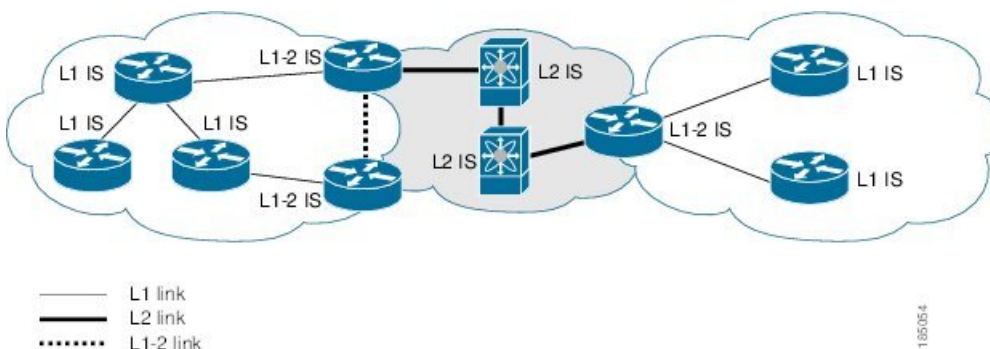
IS-IS ネットワークは、ネットワーク内のすべてのルータを含むシングルエリアとして設計することもできますし、バックボーンまたはレベル 2 エリアに接続する複数のエリアとして設計することもできます。非バックボーンエリアのルータはレベル 1 ルータで、ローカルエリア内で隣接関係を確立します (エリア内ルーティング)。レベル 2 エリアのルータは、他のレベル 2 ルータと隣接関係を確立し、レベル 1 エリア間のルーティングを実行します (エリア間ルーティング)。1 つのルータにレベル 1 エリアとレベル 2 エリアの両方を設定できます。これらのレベル 1/レベル 2 ルータは、エリア ボーダー ルータとして動作し、ローカルエリアからレベル 2 バックボーンエリアに情報をルーティングします (次の図を参照)。

レベル 1 エリア内のルータは、そのエリア内の他のすべてのルータに対する到達方法を認識します。レベル 2 ルータは、他のエリア境界ルータおよび他のレベル 2 ルータへの到達方法を認識します。レベル 1/レベル 2 ルータは 2 つのエリアの境界にまたがり、レベル 2 バックボーンエリアとの間で双方向にトラフィックをルーティングします。レベル 1/レベル 2 ルータはレベル 1 ルータの **Attached** (ATT) ビット信号を使用して、レベル 2 エリアに接続するため、このレベル 1/レベル 2 ルータへのデフォルト ルートを設定します。

エリア内に 2 台以上のレベル 1/レベル 2 ルータがある場合など、場合によっては、レベル 1 ルータがレベル 2 エリアへのデフォルト ルートとして使用するレベル 1/レベル 2 ルータを制御することもできます。**Attached** ビットを設定するレベル 1/レベル 2 ルータを設定できます。詳細については、「[IS-IS 設定の確認](#)」の項を参照してください。

Cisco NX-OS の IS-IS インスタンスは、レベル 1 またはレベル 2 エリアを 1 つだけサポートするか、またはそれぞれのエリアを 1 つずつサポートします。デフォルトでは、すべての IS-IS インスタンスが自動的にレベル 1 およびレベル 2 ルーティングをサポートします。

図 25: エリアに分割された IS-IS ネットワーク



ASBR（自律システム境界ルータ）は、IS-IS AS（自律システム）全体に外部宛先をアドバタイズします。外部ルートは、他のプロトコルから IS-IS に再配布されたルートです。

NET およびシステム ID

IS-IS インスタンスごとにネットワーク エンティティ タイトル（NET）が関連付けられています。NET は、その IS-IS インスタンスをエリア内で一意に特定する IS-IS システム ID とエリア ID からなります。たとえば、NET が 47.0004.004d.0001.0001.0c11.1111.00 の場合、システム ID は 0001.0c11.1111.00、エリア ID は 47.0004.004d.0001 です。

DIS

IS-IS はブロードキャストネットワーク内で代表中継システム（DIS）を使用することにより、各ルータがブロードキャストネットワーク上の他のルータと不要なリンクを形成しないようにします。IS-IS ルータは DIS に LSP を送信し、DIS がブロードキャストネットワークのあらゆるリンクステート情報を管理します。エリア内で DIS を選択するために IS-IS に使用させる IS-IS プライオリティをユーザ側で設定できます。



(注) ポイントツーポイント ネットワークでは DIS は不要です。

IS-IS 認証

隣接関係および LSP 交換を制御するために、認証を設定できます。ネイバーになろうとするルータは、設定されている認証レベルの同じパスワードを交換する必要があります。パスワードが無効なルータは、IS-IS によってブロックされます。IS-IS 認証はグローバルに設定することも、レベル 1、レベル 2、またはレベル 1/レベル 2 両方のルーティングに対応する個々のインターフェイスに設定することもできます。

IS-IS がサポートする認証方式は、次のとおりです。

- クリア テキスト：交換するすべてのパケットで、クリアテキストの 128 ビット パスワードが伝送されます。

- MD5 ダイジェスト：交換するすべてのパケットで、128 ビット キーに基づくメッセージ ダイジェストが伝送されます。

受動的攻撃から保護するために、IS-IS はネットワークを介してクリアテキストとして MD5 秘密キーを送信します。また、リプレイアタックから保護するために、IS-IS は各パケットにシーケンス番号を組み込みます。

hello および LSP 認証用のキーチェーンも使用できます。キーチェーン管理の詳細については、「[Cisco Nexus 3000 シリーズ NX-OS セキュリティ設定ガイド](#)」を参照してください。

メッシュ グループ

メッシュグループは一連のインターフェイスであり、グループ内では、インターフェイスを介して到達可能なすべてのルータが他の各ルータとの間に 1 つ以上のリンクを持ちます。多数のリンクで障害が発生しても、ネットワークから 1 つまたは複数のルータが切り離されることはありません。

通常のフラッドイングでは、新しい LSP を受信したインターフェイスは、その LSP をルータ上の他のすべてのインターフェイスにフラッドイングします。メッシュグループを使用する場合、メッシュグループに含まれているインターフェイスは新しい LSP を受信しても、メッシュグループ内の他のインターフェイスには、新しい LSP をフラッドイングしません。



(注) 特定のメッシュ ネットワーク トポロジで、ネットワークのスケラビリティを向上させるために、LSP を制限しなければならない場合があります。LSP フラッドイングを制限すると、ネットワークの信頼性も下がります（障害発生時）。したがって、メッシュグループはどうしても必要な場合に限り、慎重にネットワークを設計したうえで使用することを推奨します。

ルータ間のパラレルリンクに、ブロックモードでメッシュグループを設定することもできます。このモードでは、各ルータがそれぞれリンクステート情報を最初に交換すると、それ以後はメッシュグループのそのインターフェイスですべての LSP がブロックされます。

過負荷ビット

IS-IS は過負荷ビットを使用して他のルータに指示を与え、それらのルータがトラフィックの転送にローカルルータを使用せずに、引き続きローカルルータ宛てのトラフィックをルーティングするようにします。

過負荷ビットを使用する状況は、次のとおりです。

- ルータがクリティカル条件下にある。
- ネットワークに対して通常手順でルータの追加および除去を行う。
- その他（管理上またはトラフィック エンジニアリング上）の理由。BGP コンバージェンスの待機中など。

ルート集約

サマリー集約アドレスを設定できます。ルート集約を使用すると、固有性の強い一連のアドレスをすべての固有アドレスを代表する1つのアドレスに置き換えることによって、ルートテーブルを簡素化できます。たとえば、10.1.1.0/24、10.1.2.0/24、および10.1.3.0/24というアドレスを1つの集約アドレス 10.1.0.0/16 に置き換えることができます。

IS-IS はルーティング テーブルに含まれている固有性の強いルートが多いほど、固有性の強いルートの最小メトリックと同じメトリックを指定して、サマリーアドレスをアドバタイズします。



(注) Cisco NX-OS は、自動ルート集約をサポートしていません。

ルートの再配布

IS-ISを使用すると、スタティックルート、他のIS-IS自律システムが学習したルート、または他のプロトコルからのルートを再配布できます。再配布を指定したルートマップを設定して、どのルートがIS-ISに渡されるかを制御する必要があります。ルートマップを使用すると、宛先、送信元プロトコル、ルートタイプ、ルートタグなどの属性に基づいて、ルートをフィルタリングできます。詳細については、[Route Policy Manager の設定 \(441 ページ\)](#) を参照してください。

IS-IS ルーティング ドメインにルートを再配布しても、デフォルトでは Cisco NX-OS がそのつど、IS-IS ルーティング ドメインにデフォルトルートを再配布することはありません。IS-IS にデフォルト ルートを生成し、ルート ポリシーでそのルートを制御できます。

IS-IS にインポートされたすべてのルートに使用する、デフォルトのメトリックも設定できます。

プレフィックスの抑制のリンク

デフォルトでは、IS-ISはシステムLSPの接続インターフェイスのアドレスをアドバタイズします。不要なインターフェイスアドレスのアドバタイズメントを抑制することで、LSPのサイズを削減し、IS-ISが維持するルート数を削減して、コンバージェンス時間を短縮できます。

LSPのルート数を減らすために、次の2つのプレフィックス抑制方式が提供されています。

- グローバルレベルでは、他の接続されたプレフィックスを除く、パッシブインターフェイスに属するプレフィックスだけをアドバタイズするように選択できます。[パッシブインターフェイスプレフィックスのみのアドバタイズ \(234 ページ\)](#) を参照してください。
- インターフェイスレベルで、接続されたプレフィックスのアドバタイズメントを無効にできます。「[インターフェイスでのプレフィックスの抑制 \(235 ページ\)](#)」を参照してください。

ロード バランシング

ロードバランシングを使用すると、ルータは、宛先アドレスから等距離内にあるすべてのルータのネットワークポートにトラフィックを分散できます。ロードバランシングは、ネットワークセグメントの使用率を向上させ、有効ネットワーク帯域幅を増加させます。

Cisco NX-OS は、等コスト マルチパス (ECMP) 機能をサポートします。IS-IS ルート テーブルおよびユニキャスト RIB の等コスト パスは最大 64 です。これらのパスの一部または全部でトラフィックのロード バランシングが行われるように、IS-IS を設定できます。

BFD

この機能では、IPv4 および IPv6 用の双方向フォワーディング検出 (BFD) をサポートします。BFD は、転送パスの障害を高速で検出することを目的にした検出プロトコルです。BFD は 2 台の隣接デバイス間のサブセカンド障害を検出し、BFD の負荷の一部を、サポートされるモジュール上のデータプレーンに分散できるため、プロトコル hello メッセージよりも CPU を使いません。詳細については、『[Cisco Nexus 3000 Series NX-OS Interfaces Configuration Guide](#)』を参照してください。

仮想化のサポート

Cisco NX-OS は、IS-IS の複数のプロセス インスタンスをサポートします。各 IS-IS インスタンスは、システム制限まで複数の仮想ルーティングおよび転送 (VRF) インスタンスをサポートできます。サポートされる IS-IS インスタンスの数については、『[Cisco Nexus 3000 Series NX-OS Verified Scalability Guide](#)』を参照してください。

高可用性およびグレースフル リスタート

Cisco NX-OS は、マルチレベルのハイ アベイラビリティ アーキテクチャを提供します。IS-IS は、ステートフル リスタートをサポートしています。これは、ノンストップルーティング (NSR) とも呼ばれます。IS-IS で問題が発生した場合は、以前の実行時状態からの再起動を試みます。この場合、ネイバーはいずれのネイバーイベントも登録しません。最初の再起動が正常ではなく、別の問題が発生した場合、RFC 3847 のとおり、IS-IS はグレースフル リスタートを試みます。グレースフル リスタート、つまり、Nonstop Forwarding (NSF) では、処理の再起動中も IS-IS がデータ転送パス上に存在し続けます。再起動中の IS-IS インターフェイスが稼働を再開すると、ネイバーを再探索して隣接関係を確立し、更新情報の送信を再開します。この時点で、NSF ヘルパーは、グレースフル リスタートが完了したと認識します。

ステートフル リスタートは次のシナリオで使用されます。

- プロセスでの問題発生後の最初の回復試行
- **system switchover** コマンドを使用したユーザー開始スイッチオーバー

グレースフル リスタートは次のシナリオで使用されます。

- プロセスでの問題発生後の 2 回目の回復試行 (4 分以内)

- **restart isis** コマンドを使用したプロセスの手動再起動
- アクティブ スーパーバイザの削除
- **reload module active-sup** コマンドを使用したアクティブ スーパーバイザ リロード。



(注) グレースフルリスタートがデフォルトとなっており、ディセーブルにしないことを強く推奨します。

複数の IS-IS インスタンス

Cisco NX-OS は、同じノード上で動作する、IS-IS プロトコルの複数インスタンスをサポートしています。同一インターフェイスには複数のインスタンスを設定できません。すべてのインスタンスで同じシステム ルータ ID を使用します。サポートされる IS-IS インスタンスの数については、『[Cisco Nexus 3000 Series NX-OS Verified Scalability Guide](#)』を参照してください。

IS-IS の前提条件

IS-IS の前提条件は次のとおりです。

- IS-IS をイネーブルにする必要があります（「[IS-IS 機能のイネーブル化](#)」の項を参照）。

IS-IS に関する注意事項および制限事項

IS-IS 設定時の注意事項および制約事項は、次のとおりです。

- 明示的な設定がレベル 1/レベル 2 Cisco Nexus スイッチに追加されていない場合、IS-IS レベル 1 ルートは接続しているレベル 2 専用スイッチに入力されません。
- デフォルトの参照帯域幅が Cisco NX-OS と Cisco IOS では異なるため、アドバタイズされたトンネル IS-IS メトリックは、これら 2 つのオペレーティングシステムによって異なります。

デフォルト設定

次の表に、IS-IS パラメータのデフォルト設定値を示します。

表 19: デフォルトの IS-IS パラメータ

パラメータ	デフォルト
アドミニストレーティブ ディスタンス	115
エリア レベル	Level-1-2
DIS プライオリティ	64
グレースフル リスタート	イネーブル
hello 乗数	3
hello パディング	イネーブル
hello タイム	10 秒
IS-IS 機能	ディセーブル
LSP 間隔	33
LSP MTU	1492
最大 LSP ライフタイム	1200 秒
最大パス	8
メトリック	40
参照帯域幅	40 Gbps

IS-IS の設定

IS-IS を設定する手順は、次のとおりです。

手順

-
- ステップ 1** IS-IS 機能を有効にします（「[IS-IS 機能の有効化](#)」セクションを参照してください）。
- ステップ 2** IS-IS インスタンスを作成します（「[IS-IS インスタンスの作成](#)」セクションを参照してください）。
- ステップ 3** IS-IS インスタンスにインターフェイスを追加します（「[インターフェイスでの IS-IS の設定](#)」セクションを参照してください）。
- ステップ 4** 認証、メッシュ グループ、ダイナミック ホスト交換などのオプション機能を設定します。

(注)

Cisco IOS の CLI に慣れている場合、この機能に対応する Cisco NX-OS コマンドは通常使用する Cisco IOS コマンドと異なる場合がありますので注意してください。

IS-IS コンフィギュレーション モード

この項では、各コンフィギュレーションモードの開始方法について説明します。現行のモードで ? コマンドを入力することで、そのモードで使用可能なコマンドを表示できます。

ルータ コンフィギュレーション モード

次に、ルータ コンフィギュレーション モードを開始する例を示します。

```
switch#: configure terminal
switch(config)# router isis isp
switch(config-router)#
```

ルータ アドレス ファミリ コンフィギュレーション モード

次の例は、ネイバーアドレス ファミリ コンフィギュレーション モードの開始方法を示しています。

```
switch(config)# router isis isp
switch(config-router)# address-family ipv4 unicast
switch(config-router-af)#
```

IS-IS 機能の有効化

IS-IS を設定する前に、IS-IS 機能を有効にする必要があります。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : switch# configure terminal switch(config)#	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	feature isis 例 : switch(config)# feature isis	IS-IS 機能を有効にします。
ステップ 3	(任意) show feature 例 : switch(config)# show feature	有効および無効にされた機能を表示します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 4	(任意) copy running-config startup-config 例 : <pre>switch(config)# copy running-config startup-config</pre>	この設定変更を保存します。

例

IS-IS 機能を無効にして、関連付けられている構成をすべて削除するには、構成モードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
no feature isis 例 : <pre>switch(config)# no feature isis</pre>	IS-IS 機能を無効にして、関連するすべての構成を削除します。

IS-IS インスタンスの作成

IS-IS インスタンスを作成し、そのインスタンスのエリア レベルを設定できます。

始める前に

IS-IS を有効にする必要があります（「[IS-IS 機能の有効化](#)」の項を参照）。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	router isis instance-tag 例 : <pre>switch(config)# router isis Enterprise switch(config-router)#</pre>	<i>instance tag</i> を設定して、新しい IS-IS インスタンスを作成します。
ステップ 3	net network-entity-title 例 : <pre>switch(config-router)# net 47.0004.004d.0001.0001.0c11.1111.00</pre>	この IS-IS インスタンスに対応する NET を設定します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 4	(任意) is-type { level-1 level-2 level-1-2 } 例 : <pre>switch(config-router)# is-type level-2</pre>	この IS-IS インスタンスのエリアレベルを設定します。デフォルトは level-1-2 です。
ステップ 5	(任意) show isis [vrf vrf-name] process 例 : <pre>switch(config)# show isis process</pre>	すべての IS-IS インスタンスについて、IS-IS 要約情報を表示します。
ステップ 6	(任意) copy running-config startup-config 例 : <pre>switch(config)# copy running-config startup-config</pre>	この設定変更を保存します。

例

IS-IS インスタンスおよび関連する構成を削除するには、構成モードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
no router isis instance-tag 例 : <pre>switch(config)# no router isis Enterprise</pre>	IS-IS インスタンスおよびすべての関連付けられている構成を削除します。



- (注) IS-IS インスタンスに関するすべての設定を完全に削除するには、インターフェイスモードで設定した IS-IS コマンドも削除する必要があります。

IS-IS の省略可能な次のパラメータを構成できます。

コマンド	目的
distance value 例 : <pre>switch(config-router)# distance 30</pre>	IS-IS のアドミニストレーティブディスタンスを設定します。範囲は 1 ~ 255 です。デフォルトは 115 です。
log-adjacency-changes 例: <pre>switch(config-router)# log-adjacency-changes</pre>	IS-IS ネイバーのステートが変化するたびに、システムメッセージを送信します。

コマンド	目的
lsp-mtu size 例: <pre>switch(config-router)# lsp-mtu 600</pre>	この IS-IS インスタンスにおける LSP の MTU を設定します。指定できる範囲は 128 ～ 4352 バイトです。デフォルトは 1492 です。
maximum-paths number 例 : <pre>switch(config-router)# maximum-paths 6</pre>	IS-IS がルートテーブルで維持する等コストパスの最大数を設定します。範囲は 1 ～ 64 です。デフォルト値は 8 です。
reference-bandwidth bandwidth-value { Mbps Gbps } 例: <pre>switch(config-router)# reference-bandwidth 100 Gbps</pre>	IS-IS コストメトリックの計算に使用する、デフォルトの基準帯域幅を設定します。指定できる範囲は 1 ～ 4000 Gbps です。デフォルトは 40 Gbps です。

レベル 2 エリアで IS-IS インスタンスを作成する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# router isis Enterprise
switch(config-router)# net 47.0004.004d.0001.0001.0c11.1111.00
switch(config-router)# is-type level 2
switch(config-router)# copy running-config startup-config
```

ネイバーの統計情報をクリアし、隣接関係を削除するには、ルータ構成モードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
clear isis [instance-tag] adjacency [* system-id interface] 例 : <pre>switch(config-if)# clear isis adjacency *</pre>	ネイバーの統計情報を消去し、この IS-IS インスタンスの隣接関係を削除します。

IS-IS インスタンスの再起動

IS-IS インスタンスを再起動できます。この処理では、インスタンスのすべてのネイバーが消去されます。

IS-IS インスタンスを再起動し、関連付けられたすべてのネイバーを削除するには、次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
restart isis instance-tag 例 : <pre>switch(config)# restart isis Enterprise</pre>	IS-IS インスタンスを再起動し、すべてのネイバーを削除します。

IS-IS のシャットダウン

IS-IS インスタンスをシャットダウンできます。シャットダウンすると、その IS-IS インスタンスがディセーブルになり、設定が保持されます。

IS-IS インスタンスをシャットダウンするには、ルータ コンフィギュレーション モードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
shutdown 例 : <pre>switch(config-router)# shutdown</pre>	IS-IS インスタンスをディセーブルにします。

インターフェイスでの IS-IS の設定

IS-IS をイネーブルにする必要があります（「[IS-IS 機能のイネーブル化](#)」の項を参照）。

始める前に

IS-IS インスタンスにインターフェイスを追加できます。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	グローバル設定モードを開始します
ステップ 2	interface interface-type slot/port 例 : <pre>switch(config)# interface ethernet 1/2 switch(config-if)#</pre>	インターフェイス設定モードを開始します。
ステップ 3	(任意) medium { broadcast p2p } 例 :	インターフェイスにブロードキャストモードまたはポイントツーポイントモードを設定します。

	コマンドまたはアクション	目的
	<code>switch(config-if)# medium p2p</code>	ドを設定します。IS-IS はこのモードを継承します。
ステップ 4	{ip ipv6} router isis instance-tag 例 : <code>switch(config-if)# ip router isis Enterprise</code>	この IPv4 または IPv6 インターフェイスを IS-IS インスタンスに関連付けます。
ステップ 5	(任意) show isis [vrf vrf-name] [instance-tag] interface [interface-type slot/port] 例 : <code>switch(config)# show isis Enterprise ethernet 1/2</code>	インターフェイスの IS-IS 情報を表示します。
ステップ 6	(任意) copy running-config startup-config 例 : <code>switch(config)# copy running-config startup-config</code>	この設定変更を保存します。

例

インターフェイス モードで、IS-IS の省略可能な次のパラメータを構成できます。

コマンド	目的
isis circuit-type { level-1 level-2 level-1-2 } 例 : <code>switch(config-if)# isis circuit-type level-2</code>	このインターフェイスが参加する隣接関係のタイプを設定します。このコマンドを使用するのは、レベル 1 とレベル 2 の両方のエリアにルータが関係する場合だけです。
isis metric value { level-1 level-2 } 例: <code>switch(config-if)# isis metric 30</code>	このインターフェイスの IS-IS メトリックを設定します。指定できる範囲は 1 ～ 16777214 です。デフォルトは 10 です。
isis passive { level-1 level-2 level-1-2 } 例: <code>switch(config-if)# isis passive level-2</code>	インターフェイスが隣接関係を形成しないようにしながら、なおかつ、インターフェイスに関連付けられたプレフィックスをアドバタイズするようにします。

次に、IS-IS インスタンスにイーサネット 1/2 インターフェイスを追加する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# interface ethernet 1/2
switch(config-if)# ip router isis Enterprise
switch(config-if)# copy running-config startup-config
```

インターフェイスでの IS-IS のシャットダウン

インターフェイス上で IS-IS を正常にシャットダウンできます。これにより、すべての隣接関係が削除され、このインターフェイスで IS-IS トラフィックが停止しますが、IS-IS 設定は保持されます。

インターフェイス上で IS-IS を無効にするには、インターフェイス設定モードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
isis shutdown 例 : <pre>switch(config-router)# isis shutdown</pre>	このインターフェイスで IS-IS を無効にします。IS-IS インターフェイスの設定は保持されます。

エリアでの IS-IS 認証の設定

エリアで LSP を認証するように IS-IS を設定できます。

始める前に

IS-IS を有効にする必要があります。「[IS-IS 機能の有効化](#)」を参照してください。

キーチェーンを IS-IS 設定から参照する場合は、グローバル設定モードでキーチェーンを設定する必要があります。キーチェーン管理の詳細については、「[Cisco Nexus 9000 シリーズ NX-OS セキュリティ設定ガイド](#)」を参照してください。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	router isis instance-tag 例 : <pre>switch(config)# router isis Enterprise switch(config-router)#</pre>	<i>instance tag</i> を設定して、新しい IS-IS インスタンスを作成します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 3	authentication-type { cleartext md5 } { level-1 level-2 } 例 : <pre>switch(config-router)# authentication-type cleartext level-2</pre>	クリアテキストまたは MD5 認証ダイジェストとして、レベル1またはレベル2エリアに使用する認証方式を設定します。
ステップ 4	authentication key-chain key { level-1 level-2 } 例 : <pre>authentication key-chain key { level-1 level-2 }</pre>	IS-IS エリア レベル認証に使用する認証キーを構成します。
ステップ 5	(任意) authentication-check { level-1 level-2 } 例 : <pre>switch(config-router)# authentication-check level-2</pre>	受信パケットの認証パラメータ チェックを有効にします。
ステップ 6	(任意) copy running-config startup-config 例 : <pre>switch(config-router)# copy running-config startup-config</pre>	この設定変更を保存します。

例

IS-IS インスタンスにクリアテキスト認証を設定する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# router isis Enterprise
switch(config-router)# authentication-type cleartext level-2
switch(config-router)# authentication key-chain ISISKey level-2
switch(config-router)# copy running-config startup-config
```

インターフェイスでの IS-IS 認証の設定

インターフェイスで Hello パケットを認証するように IS-IS を設定できます。

始める前に

IS-IS を有効にする必要があります（「[IS-IS 機能の有効化](#)」の項を参照）。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : switch# configure terminal switch(config)#	グローバル設定モードを開始します。
ステップ 2	interface interface-type slot/port 例 : switch(config)# interface ethernet 1/2 switch(config-if)#	インターフェイス設定モードを開始します。
ステップ 3	isis authentication-type { cleartext md5 } { level-1 level-2 } 例 : switch(config-if)# isis authentication-type cleartext level-2	クリアテキストまたは MD5 認証ダイジェストとして、このインターフェイスにおける IS-IS 認証タイプを設定します。
ステップ 4	isis authentication key-chain key { level-1 level-2 } 例 : switch(config-if)# isis authentication-key ISISKey level-2	このインターフェイス上で IS-IS に使用する認証キーを設定します。
ステップ 5	(任意) isis authentication-check { level-1 level-2 } 例 : switch(config-if)# isis authentication-check	受信パケットの認証パラメータチェックを有効にします。
ステップ 6	(任意) copy running-config startup-config 例 : switch(config-router)# copy running-config startup-config	この設定変更を保存します。

例

IS-IS インスタンスにクリアテキスト認証を設定する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# interface ethernet 1/2
switch(config-if)# isis authentication-type cleartext level-2
switch(config-if)# isis authentication key-chain ISISKey
switch(config-if)# copy running-config startup-config
```

メッシュ グループの設定

メッシュ グループにインターフェイスを追加することによって、そのメッシュ グループ内のインターフェイスに対する LSP フラディングの量を制限できます。任意で、メッシュ グループ内のインターフェイスに対して、すべての LSP フラディングをブロックすることもできます。

メッシュ グループにインターフェイスを追加するには、インターフェイス設定モードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
isis mesh-group { blocked mesh-id } 例 : <pre>switch(config-if)# isis mesh-group 1</pre>	メッシュ グループにこのインターフェイスを追加します。範囲は 1 ～ 4294967295 です。

指定中継システムの設定

インターフェイス プライオリティを設定することによって、ルータがマルチアクセス ネットワークの代表中継システム (DIS) になるように設定できます。

DIS を設定するには、インターフェイス設定モードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
isis priority number { level-1 level-2 } 例 : <pre>switch(config-if)# isis priority 100 level-1</pre>	DIS 選択のためのプライオリティを設定します。指定できる範囲は 0 ～ 127 です。デフォルトは 64 です。

ダイナミック ホスト交換の設定

ダイナミック ホスト交換を使用してシステム ID とルータのホスト名をマッピングするように、IS-IS を設定できます。

ダイナミック ホスト交換を設定するには、ルータ設定モードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
hostname dynamic 例 : <pre>switch(config-router)# hostname dynamic</pre>	ダイナミック ホスト交換をイネーブルにします。

過負荷ビットの設定

最短パス優先（SPF）の計算で中間ホップとしてこのルータを使用しないことを他のルータに通知するように、ルータを設定できます。任意で、起動時に BGP がコンバージェンスするまで、一時的に過負荷ビットを設定することもできます。

過負荷ビットを設定する以外に、レベル 1 またはレベル 2 トラフィックに関して、LSP からの特定タイプの IP プレフィックスアドバタイズメントを抑制することが必要な場合もあります。

過負荷ビットを設定するには、ルータ コンフィギュレーション モードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
set-overload-bit { always on-startup { seconds wait-for bgp as-number } } [suppress [interlevel external]] 例： <pre>switch(config-router)# set-overload-bit on-startup 30</pre>	IS-IS に過負荷ビットを設定します。 <i>seconds</i> の範囲は 5 ～ 86400 です。

接続ビットの設定

Attached ビットを設定すると、レベル 1 ルータがレベル 2 エリアへのデフォルトルートとして使用するレベル 1/レベル 2 ルータを制御できます。Attached ビットの設定をディセーブルにすると、レベル 1 ルータはこのレベル 1/レベル 2 ルータを使用してレベル 2 エリアに接続しなくなります。

レベル 1/レベル 2 ルータの Attached ビットを設定するには、ルータ コンフィギュレーション モードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
[no] attached-bit 例： <pre>switch(config-router)# no attached-bit</pre>	Attached ビットを設定するようにレベル 1/レベル 2 ルータを設定します。この機能は、デフォルトでイネーブルにされています。

hello パディングの一時モードの設定

hello パディングの一時モードを設定すると、IS-IS が隣接関係を確立するときに hello パケットをパディングし、IS-IS が隣接関係を確立したあとでそのパディングを削除できます。

hello パディングのモードを構成するには、ルータ構成モードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
[no] isis hello-padding 例 : <pre>switch(config-if)# no isis hello-padding</pre>	完全な最大伝送単位 (MTU) に hello パケットをパディングします。デフォルトではイネーブルになっています。パディングの一時モードを設定するには、このコマンドの no 形式を使用します。

サマリー アドレスの設定

ルーティングテーブルでサマリーアドレスによって表されるサマリアドレスを作成できます。1つのサマリーアドレスに、特定のレベルのアドレスグループを複数含めることができます。Cisco NX-OS は固有性の強いすべてのルートのうち、最小メトリックをアドバタイズします。

始める前に

IS-IS を有効にする必要があります（「[IS-IS 機能の有効化](#)」の項を参照）。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	router isis instance-tag 例 : <pre>switch(config)# router isis Enterprise switch(config-router)#</pre>	<i>instance tag</i> を設定して、新しい IS-IS インスタンスを作成します。
ステップ 3	address-family {ipv4 ipv6} unicast 例 : <pre>switch(config-router)# address-family ipv4 unicast switch(config-router-af)#</pre>	アドレス ファミリ設定モードを開始します。
ステップ 4	summary-address ip-prefix/mask-len { level-1 level-2 level-1-2 } 例 : <pre>switch(config-router-af)# summary-address 192.0.2.0/24 level-2</pre>	IPv4 アドレスまたは IPv6 アドレスに対応する、IS-IS エリア用のサマリーアドレスを設定します。
ステップ 5	（任意） show isis [vrf vrf-name] { ip ipv6 } summary-address ip-prefix [longer-prefixes]	IS-IS IPv4 または IPv6 サマリー アドレス情報を表示します。

	コマンドまたはアクション	目的
	例 : <pre>switch(config-if)# show isis ip summary-address</pre>	
ステップ 6	(任意) copy running-config startup-config 例 : <pre>switch(config-if)# copy running-config startup-config</pre>	この設定変更を保存します。

例

次に、IS-IS の IPv4 ユニキャスト サマリー アドレスを設定する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# router isis Enterprise
switch(config-router)# address-family ipv4 unicast
switch(config-router-af)# summary-address 192.0.2.0/24 level-2
switch(config-router-af)# copy running-config startup-config
```

再配布の設定

別のルーティング プロトコルからのルーティング情報を受け入れて、IS-IS ネットワークを通じてその情報を再配布するように、IS-IS を設定できます。任意で、再配布ルートのためのデフォルト ルートを割り当てることができます。

始める前に

IS-IS を有効にする必要があります（「[IS-IS 機能の有効化](#)」の項を参照）。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	router isis instance-tag 例 : <pre>switch(config)# router isis Enterprise switch(config-router)#</pre>	<i>instance tag</i> を設定して、新しい IS-IS インスタンスを作成します。
ステップ 3	address-family {ipv4 ipv6} unicast 例 :	アドレス ファミリ設定モードを開始します。

	コマンドまたはアクション	目的
	<pre>switch(config-router)# address-family ipv4 unicast switch(config-router-af)#</pre>	
ステップ 4	redistribute { bgp as direct { eigrp isis ospf ospfv3 rip } instance-tag static } route-map map-name 例 : <pre>switch(config-router-af)# redistribute eigrp 201 route-map ISISmap</pre>	他のプロトコルからのルートを IS-IS に再配布します。ルート マップの設定の詳細については、 ルート マップの設定 のセクションを参照してください。
ステップ 5	(任意) default-information originate [always] [route-map map-name] 例 : <pre>switch(config-router-af)# default-information originate always</pre>	IS-IS へのデフォルトルートを生成します。
ステップ 6	(任意) distribute { level-1 level-2 } into { level-1 level-2 } { route-map route-map all } 例 : <pre>switch(config-router-af)# distribute level-1 into level-2 all</pre>	一方の IS-IS レベルから他方の IS-IS レベルへ、ルートを再配布します。
ステップ 7	(任意) show isis [vrf vrf-name] { ip ipv6 } route ip-prefix [detail longer-prefixes [summary detail]] 例 : <pre>switch(config-if)# show isis ip summary-address</pre>	IS-IS ルートを表示します。
ステップ 8	(任意) copy running-config startup-config 例 : <pre>switch(config-if)# copy running-config startup-config</pre>	この設定変更を保存します。

例

次に、EIGRP を IS-IS に再配布する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# router isis Enterprise
switch(config-router)# address-family ipv4 unicast
switch(config-router-af)# redistribute eigrp 201 route-map ISISmap
switch(config-router-af)# copy running-config startup-config
```

再配布されるルート数の制限

ルートの再配布によって、IS-IS ルートテーブルに多くのルートが追加される可能性があります。外部プロトコルから受け取るルートの上限を設定できます。IS-IS には、再配布ルートの制限を設定するために次のオプションが用意されています。

- 上限固定：IS-IS が設定された最大値に達すると、メッセージをログに記録します。IS-IS は以降の再配布ルートを受け取りません。任意で、最大値のしきい値パーセンテージを設定して、IS-IS がこのしきい値を超えたときに警告を記録するようにすることもできます。
- 警告のみ：IS-IS が最大値に達したときのみ、警告のログを記録します。IS-IS は引き続き再配布ルートを受け取ります。
- 取り消し：IS-IS が最大値に達したときにタイムアウト期間を開始します。タイムアウト期間の経過後、現在の再配布ルートの数が増大制限より少ない場合、IS-IS はすべての再配布ルート并要求します。現在の再配布ルートの数が増大制限に達している場合、IS-IS はすべての再配布ルートを取り消します。IS-IS が以降の再配布ルートを受け取るには、この状態を解消する必要があります。任意で、タイムアウト期間を設定できます。

始める前に

IS-IS をイネーブルにする必要があります（「[IS-IS 機能のイネーブル化](#)」の項を参照）。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例： <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	router isis instance-tag 例： <pre>switch(config)# router isis Enterprise switch(config-router)#</pre>	instance tag を設定して、新しい IS-IS インスタンスを作成します。
ステップ 3	redistribute { bgp id direct eigrp id isis id ospf id rip id static } route-map map-name 例： <pre>switch(config-router)# redistribute bgp route-map FilterExternalBGP</pre>	設定したルート マップ経由で、選択したプロトコルを IS-IS に再配布します。
ステップ 4	redistribute maximum-prefix max [threshold] [warning-only withdraw [num-retries timeout]] 例：	IS-IS が配布するプレフィックスの最大数を指定します。有効な範囲は 1 ～ 65535 です。次の項目を任意で指定できます。

	コマンドまたはアクション	目的
	<pre>switch(config-router)# redistribute maximum-prefix 1000 75 warning-only</pre>	• threshold : 警告メッセージをトリガする最大プレフィックス数のパーセンテージ。 • warning-only : プレフィックスの最大数を超えた場合に警告メッセージを記録します。 • withdraw : 再配布されたすべてのルートを取り消します。オプション選択で、再配布されたルートの取得を試みることができます。 <i>num-retries</i> の範囲は 1 ～ 12 です。 <i>timeout</i> は 60 ～ 600 秒です。デフォルトは 300 秒です。clear isis redistribution コマンドは、すべてのルートが取り消された場合に使用します。
ステップ 5	(任意) show running-config isis 例 : <pre>switch(config-router)# show running-config isis</pre>	IS-IS の設定を表示します。
ステップ 6	(任意) copy running-config startup-config 例 : <pre>switch(config-router)# copy running-config startup-config</pre>	この設定変更を保存します。

例

次に、IS-IS に再配布されるルートの数制限する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# router eigrp isis Enterprise
switch(config-router)# redistribute bgp route-map FilterExternalBGP
switch(config-router)# redistribute maximum-prefix 1000 75
```

パッシブインターフェイスプレフィックスのみのアドバタイズ

パッシブインターフェイスに属するプレフィックスだけがシステムリンクステートパケット (LSP) でアドバタイズされるように指定できます。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : switch# configure terminal switch(config)#	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	router isis instance-tag 例 : switch(config)# router isis 200 switch(config-router)#	instance tag を設定して、新しい IS-IS インスタンスを作成します。
ステップ 3	address-family {ipv4 ipv6} unicast 例 : switch(config-router)# address-family ipv4 unicast switch(config-router-af)#	アドレス ファミリ設定モードを開始します。
ステップ 4	[no] advertise passive-only {level-1 level-2} 例 : switch(config-router-af)# advertise passive-only level-1 switch(config-router-af)#	パッシブインターフェイスに属するプレフィックスのみのアドバタイズメントをイネーブルにします。

例

次に、パッシブインターフェイスに属するプレフィックスのアドバタイズのみをイネーブルにする例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# interface ethernet 1/2
switch(config-if)# address-family ipv4 unicast
switch(config-router-af)# advertise passive-only level-1
```

インターフェイスでのプレフィックスの抑制

IS-IS インターフェイスがシステム リンクステート パケット (LSP) 内の接続されたプレフィックスをアドバタイズせずに隣接の形成に参加できるようにします。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例： switch# configure terminal switch(config)#	グローバル設定モードを開始します
ステップ 2	interface interface-type slot/port 例： switch(config)# interface ethernet 1/2 switch(config-if)#	インターフェイス設定モードを開始します。
ステップ 3	[no] isis suppress 例： switch(config-if)# isis suppress switch(config-if)#	インターフェイスで接続されているプレフィックスのアドバタイズメントを無効にします。

例

次に、システムリンクステートパケット（LSP）でインターフェイスの接続されたプレフィックスのアドバタイズを抑制する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# interface ethernet 1/2
switch(config-if)# isis suppress
```

厳密な隣接モードのディセーブル化

IPv4 と IPv6 の両方のアドレス ファミリがイネーブルの場合、厳格な隣接モードはデフォルトでイネーブルです。このモードでは、デバイスが両方のアドレス ファミリにイネーブルでない任意のルータとの隣接関係を形成しません。厳格な隣接モードは、no adjacency-check コマンドを使用してディセーブルにできます。

始める前に

IS-IS を有効にする必要があります（「[IS-IS 機能の有効化（219 ページ）](#)」の項を参照）。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例：	グローバル コンフィギュレーションモードを開始します。

	コマンドまたはアクション	目的
	switch# configure terminal switch(config)#	
ステップ 2	router isis instance-tag 例 : switch(config)# router isis Enterprise switch(config-router)#	instance tag を設定して、新しい IS-IS インスタンスを作成します。
ステップ 3	address-family ipv4 unicast 例 : switch(config-router)# address-family ipv4 switch(config-router-af)#	アドレス ファミリ設定モードを開始します。
ステップ 4	no adjacency-check 例 : switch(config-router-af)# no adjacency-check	IPv4 アドレス ファミリに関する厳格な隣接モードをディセーブルにします。
ステップ 5	exit 例 : switch(config-router-af)# exit switch(config-router)#	アドレス ファミリ コンフィギュレーション モードを終了します。
ステップ 6	address-family ipv6 unicast 例 : switch(config-router)# address-family ipv6 unicast switch(config-router-af)#	アドレス ファミリ設定モードを開始します。
ステップ 7	(任意) no adjacency-check 例 : switch(config-router-af)# no adjacency-check	IPv6 アドレス ファミリに関する厳格な隣接モードをディセーブルにします。
ステップ 8	show running-config isis 例 : switch(config-router-af)# show running-config isis	IS-IS の設定を表示します。
ステップ 9	(任意) copy running-config startup-config 例 : switch(config-router-af)# copy running-config startup-config	この設定変更を保存します。

グレースフル リスタートの設定

IS-IS のグレースフル リスタートを設定できます。

始める前に

IS-IS を有効にする必要があります（「[IS-IS 機能の有効化（219 ページ）](#)」の項を参照）。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例： <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	router isis instance-tag 例： <pre>switch(config)# router isis Enterprise switch(config-router)#</pre>	名前を設定して、新しい IS-IS プロセスを作成します。
ステップ 3	graceful-restart 例： <pre>switch(config-router)# graceful-restart</pre>	グレースフルリスタート T3 タイマーを設定します。有効な範囲は 30 ～ 65535 秒です。デフォルトは 60 です。
ステップ 4	graceful-restart t3 manual time 例： <pre>switch(config-router)# graceful-restart t3 manual 300</pre>	グレースフルリスタート T3 タイマーを設定します。有効な範囲は 30 ～ 65535 秒です。デフォルトは 60 です。
ステップ 5	（任意） show running-config isis 例： <pre>switch(config-router)# show running-config isis</pre>	IS-IS の設定を表示します。
ステップ 6	（任意） copy running-config startup-config 例： <pre>switch(config-router)# copy running-config startup-config</pre>	この設定変更を保存します。

例

次に、グレースフル リスタートを有効にする例を示します。


```
switch# configure terminal
switch(config)# router isis Enterprise
switch(config-router)# graceful-restart
switch(config-router)# copy running-config startup-config
```

仮想化の設定

複数の IS-IS インスタンスと複数の VRF を設定できます。また、各 VRF で同じまたは複数の IS-IS インスタンスを使用することもできます。VRF に IS-IS インターフェイスを割り当てます。

設定した VRF に NET を設定する必要があります。



- (注) インターフェイスの VRF を設定した後に、インターフェイスの他のすべてのパラメータを設定します。インターフェイスの VRF を設定すると、そのインターフェイスのすべての設定が削除されます。

始める前に

IS-IS を有効にする必要があります（「[IS-IS 機能の有効化](#)」の項を参照）。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : switch# configure terminal switch(config)#	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	vrf context vrf-name 例 : switch(config)# vrf context RemoteOfficeVRF switch(config-vrf)#	新しい VRF を作成し、VRF 設定モードを開始します。
ステップ 3	exit 例 : switch(config-vrf)# exit switch(config)#	VRF 設定モードを終了します。
ステップ 4	router isis instance-tag 例 : switch(config)# router isis Enterprise switch(config-router)#	instance tag を設定して、新しい IS-IS インスタンスを作成します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 5	vrf vrf-name 例 : switch(config-router)# vrf RemoteOfficeVRF switch(config-router-vrf)#	VRF 設定モードを開始します。
ステップ 6	net network-entity-title 例 : switch(config-router-vrf)# net 47.0004.004d.0001.0001.0c11.1111.00	この IS-IS インスタンスに対応する NET を設定します。
ステップ 7	exit 例 : switch(config-router-vrf)# exit switch(config-router)#	ルータ VRF 設定モードを終了します。
ステップ 8	interface ethernet slot/port 例 : switch(config)# interface ethernet 1/2 switch(config-if)#	インターフェイス設定モードを開始します。
ステップ 9	vrf member vrf-name 例 : switch(config-if)# vrf member RemoteOfficeVRF	このインターフェイスを VRF に追加します。
ステップ 10	{ ip ipv6 } address ip-prefix/length 例 : switch(config-if)# ip address 192.0.2.1/16	このインターフェイスの IP アドレスを設定します。このステップは、このインターフェイスを VRF に割り当てたあとに行う必要があります。
ステップ 11	{ ip ipv6 } router isis instance-tag 例 : switch(config-if)# ip router isis Enterprise	この IPv4 または IPv6 インターフェイスを IS-IS インスタンスに関連付けます。
ステップ 12	(任意) show isis [vrf vrf-name] [instance-tag] interface [interface-type slot/port] 例 : switch(config-if)# show isis Enterprise ethernet 1/2	VRF のインターフェイスに関する IS-IS 情報を表示します。
ステップ 13	(任意) copy running-config startup-config	この設定変更を保存します。

	コマンドまたはアクション	目的
	例 : <pre>switch(config-if)# copy running-config startup-config</pre>	

例

次に、VRF を作成して、その VRF にインターフェイスを追加する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# vrf context NewVRF
switch(config-vrf)# exit
switch(config)# router isis Enterprise
switch(config-router)# vrf NewVRF
switch(config-router-vrf)# net 47.0004.004d.0001.0001.0c11.1111.00
switch(config-router-vrf)# interface ethernet 1/2
switch(config-if)# vrf member NewVRF
switch(config-if)# ip address 192.0.2.1/16
switch(config-if)# ip router isis Enterprise
switch(config-if)# copy running-config startup-config
```

IS-IS の調整

ネットワーク要件に合わせて IS-IS を調整できます。

IS-IS を調整するには、ルータ構成モードで次のオプション コマンドを使用します。

コマンド	目的
lsp-gen-interval [level-1 level-2] lsp-max-wait [lsp-initial-wait lsp-second-wait] 例 : <pre>switch(config-router)# lsp-gen-interval level-1 500 500 500</pre>	LSP 発生に関する IS-IS スロットルを設定します。オプションパラメータは次のとおりです。 • lsp-max-wait : トリガーから LSP 発生までの最大待ち時間。指定できる範囲は 500 ～ 65535 ミリ秒です。 • lsp-initial-wait : トリガーから LSP 発生までの初期待ち時間。指定できる範囲は 50 ～ 65535 ミリ秒です。 • lsp-second-wait : バックオフ時の LSP スロットルに使用する第 2 待ち時間。指定できる範囲は 50 ～ 65535 ミリ秒です。
max-lsp-lifetime ライフタイム 例: <pre>switch(config-router)# max-lsp-lifetime 500</pre>	LSP の最大ライフタイムを秒数で設定します。有効な範囲は 1 ～ 65535 です。デフォルトは 1200 です。

コマンド	目的
metric-style transition 例: <pre>switch(config-router)# metric-style transition</pre>	IS-IS がナロー メトリック スタイルのタイプ、長さ、値 (TLV) オブジェクトとワイドメトリック スタイルの TLV オブジェクトの両方を生成して受け取ることができるようにします。デフォルトではディセーブルになっています。
spf-interval [level-1 level-2] spf-max-wait [spf-initial-wait spf-second-wait] 例 : <pre>switch(config-router)# spf-interval level-2 500 500 500</pre>	LSA 到着までのインターバルを設定します。オプションパラメータは次のとおりです。 • lsp-max-wait : トリガーから SPF 計算までの最大待ち時間。指定できる範囲は 500 ～ 65535 ミリ秒です。 • lsp-initial-wait : トリガーから SPF 計算までの初期待ち時間。指定できる範囲は 50 ～ 65535 ミリ秒です。 • lsp-second-wait : バックオフ時の SPF 計算に使用する第 2 待ち時間。指定できる範囲は 50 ～ 65535 ミリ秒です。

ルータ アドレス構成モードで次のオプション コマンドを使用します。

コマンド	目的
adjacency-check 例 : <pre>switch(config-router-af)# adjacency-check</pre>	隣接関係チェックを実行し、IS-IS インスタンスが同じアドレスファミリをサポートするリモート IS-IS エンティティに限って隣接関係を形成していることを確認します。このコマンドは、デフォルトでイネーブルになっています。

IS-IS を調整するには、インターフェイス コンフィギュレーションモードで次のオプション コマンドを使用します。

コマンド	目的
isis csnp-interval seconds [level-1 level-2] 例 : <pre>switch(config-if)# isis csnp-interval 20</pre>	IS-IS に Complete Sequence Number PDU (CNSP) インターバルを秒数で設定します。有効な範囲は 1 ～ 65535 です。デフォルトは 10 です。
isis hello-interval seconds [level-1 level-2] 例 : <pre>switch(config-if)# isis hello-interval 20</pre>	IS-IS に hello 間隔を秒数で設定します。有効な範囲は 1 ～ 65535 です。デフォルトは 10 です。

コマンド	目的
isis hello-multiplier num [level-1 level-2] 例 : <pre>switch(config-if)# isis hello-multiplier 20</pre>	ルータが隣接関係を破棄するまでに、ネイバーが見逃さなければならない IS-IS hello パケットの数を指定します。指定できる範囲は 3 ～ 1000 です。デフォルトは 3 です。 。
isis lsp-interval milliseconds 例: <pre>switch(config-if)# isis lsp-interval 20</pre>	フラッディング時にこのインターフェイスで LSP が送信される間隔をミリ秒数で設定します。指定できる範囲は 10 ～ 65535 です。デフォルトは 33 です。

IS-IS 設定の確認

IS-IS の設定を表示するには、次のいずれかの作業を行います。

コマンド	目的
show isis [instance-tag] adjacency [interface] [detail summary] [vrf vrf-name]	IS-IS の隣接関係を表示します。 clear isis adjacency コマンドを使用して、これらの統計情報をクリアします。 (注) ホスト名が 14 文字未満の場合、 show isis adjacency コマンドはホスト名を表示します。それ以外の場合は、システム ID が表示されます。
show isis [instance-tag] database [level-1 level-2] [detail summary] [LSP ID] [{ ip ipv6 } prefix ip-prefix] [router-id router-id] [adjacency node-id] [zero-sequence] [vrf vrf-name]	IS-IS LSP データベースを表示します。
show isis [instance-tag] hostname [vrf vrf-name]	ダイナミック ホスト交換情報を表示します。
show isis [instance-tag] interface [brief interface] [level-1 level-2] [vrf vrf-name]	IS-IS インターフェイス情報を表示します。
show isis [instance-tag] mesh-group [mesh-id] [vrf vrf-name]	メッシュ グループ情報を表示します。
show isis [instance-tag] protocol [vrf vrf-name]	IS-IS プロトコルに関する情報を表示します。
show isis [instance-tag] { ip ipv6 } redistribute route [ip-address summary] [ip-prefix] [longer-prefixes [summary]] [vrf vrf-name]	IS-IS のルート再配布情報を表示します。

コマンド	目的
show isis [<i>instance-tag</i>] { ip ipv6 } route [ip-address summary] [<i>ip-prefix</i>] [longer-prefixes [summary]] [detail] [vrf <i>vrf-name</i>]	IS-IS ルート テーブルを表示します。
show isis [<i>instance-tag</i>] rrm [<i>interface</i>] [vrf <i>vrf-name</i>]	IS-IS インターフェイスの再送信情報を表示します。
show isis [<i>instance-tag</i>] srm [<i>interface</i>] [vrf <i>vrf-name</i>]	IS-IS インターフェイスのフラッドイング情報を表示します。
show isis [<i>instance-tag</i>] ssn [<i>interface</i>] [vrf <i>vrf-name</i>]	IS-IS インターフェイスの PSNP 情報を表示します。
show isis [<i>instance-tag</i>] { ip ipv6 } summary-address [<i>ip-address</i>] [<i>ip-prefix</i>] [vrf <i>vrf-name</i>]	IS-IS のサマリーアドレス情報を表示します。
show running-configuration isis	現在の実行中の IS-IS 設定を表示します。
show tech-support isis [detail]	IS-IS のテクニカル サポートの詳細情報を表示します。

IS-IS の監視

IS-IS の統計情報を表示するには、次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
show isis [<i>instance-tag</i>] adjacency [<i>interface</i>] [system-ID] [detail] [summary] [vrf <i>vrf-name</i>]	IS-IS 隣接関係の統計情報を表示します。
show isis [<i>instance-tag</i>] database [level-1 level-2] [detail summary] [<i>lsip</i>] {[adjacency id] { ip ipv6 } [prefix <i>prefix</i>] [router-id id] [zero-sequence]} [vrf <i>vrf-name</i>]	IS-IS データベースの統計情報を表示します。
show isis [<i>instance-tag</i>] statistics [<i>interface</i>] [vrf <i>vrf-name</i>]	IS-IS インターフェイスの統計情報を表示します。
show isis { ip ipv6 } route-map statistics redistribute { bgp id eigrp id isis id ospf id rip id static } [vrf <i>vrf-name</i>]	IS-IS 再配布の統計情報を表示します。
show isis route-map statistics distribute { level-1 level-2 } into { level-1 level-2 } [vrf <i>vrf-name</i>]	レベル間で配布されたルートに関する、IS-IS 配布統計情報を表示します。
show isis [<i>instance-tag</i>] spf-log [detail] [vrf <i>vrf-name</i>]	IS-IS SPF 計算の統計情報を表示します。

コマンド	目的
show isis [<i>instance-tag</i>] traffic [<i>interface</i>] [vrf <i>vrf-name</i>]	IS-IS トラフィックの統計情報を表示します。

IS-IS 設定の統計情報を消去するには、次のいずれかのタスクを実行します。

コマンド	目的
clear isis [<i>instance-tag</i>] adjacency [* [<i>interface</i>] [<i>system-id id</i>]] [vrf <i>vrf-name</i>]	IS-IS 隣接関係の統計情報を消去します。
clear isis { ip ipv6 } route-map statistics redistribute { bgp <i>id</i> direct eigrp <i>id</i> isis <i>id</i> ospf <i>id</i> rip <i>id</i> static } [vrf <i>vrf-name</i>]	IS-IS 再配布の統計情報を消去します。
clear isis route-map statistics distribute { level-1 level-2 } into { level-1 level-2 } [vrf <i>vrf-name</i>]	レベル間で配布されたルートに関する、IS-IS 配布統計情報を消去します。
clear isis [<i>instance-tag</i>] statistics [* interface] [vrf <i>vrf-name</i>]	IS-IS インターフェ이스の統計情報を消去します。
clear isis [<i>instance-tag</i>] traffic [* <i>interface</i>] [vrf <i>vrf-name</i>]	IS-IS トラフィックの統計情報を消去します。

IS-IS の設定例

IS-IS を設定する例を示します。

```
router isis Enterprise
is-type level-1
net 49.0001.0000.0000.0003.00
graceful-restart
address-family ipv4 unicast
default-information originate

interface ethernet 2/1
ip address 192.0.2.1/24
isis circuit-type level-1
ip router isis Enterprise
```

関連項目

ルートマップの詳細については、[Route Policy Manager の設定（441 ページ）](#) を参照してください。



第 10 章

基本的 BGP の設定

この章では、Cisco NX-OS スイッチでボーダー ゲートウェイ プロトコル (BGP) を設定する方法について説明します。

この章は、次の項で構成されています。

- [ベーシック BGP の概要 \(247 ページ\)](#)
- [BGP の前提条件 \(254 ページ\)](#)
- [BGP に関する注意事項と制約事項 \(255 ページ\)](#)
- [CLI コンフィギュレーション モード \(255 ページ\)](#)
- [BGP のデフォルト設定 \(258 ページ\)](#)
- [基本的 BGP の設定 \(258 ページ\)](#)
- [ベーシック BGP の設定の確認 \(273 ページ\)](#)
- [BGP 統計情報の表示 \(275 ページ\)](#)
- [ベーシック BGP の設定例 \(278 ページ\)](#)
- [関連項目 \(278 ページ\)](#)
- [次の作業 \(278 ページ\)](#)
- [その他の参考資料 \(278 ページ\)](#)

ベーシック BGP の概要

Cisco NX-OS は BGP バージョン 4 をサポートします。BGP v4 に組み込まれているマルチプロトコル拡張機能を使用すると、IP ルートおよび複数のレイヤ 3 プロトコル アドレス ファミリに関するルーティング情報を BGP に伝送させることができます。BGP では、他の BGP 対応スイッチとの間で TCP セッションを確立するための、信頼できるトランスポート プロトコルとして TCP を使用します。

BGP ではパセクトルルーティングアルゴリズムを使用して、BGP 対応ネットワーク スイッチまたは BGP スピーカ間でルーティング情報を交換します。各 BGP スピーカはこの情報を使用して、特定の宛先までのパスを判別し、なおかつルーティンググループを伴うパスを検出して回避します。ルーティング情報には、宛先の実際のルートプレフィックス、宛先に対する自律システムのパス、およびその他のパス属性が含まれます。

BGPはデフォルトで、宛先ホストまたはネットワークへのベストパスとして、1つだけパスを選択します。各パスは、BGP ベストパス分析で使用する well-known mandatory、well-known discretionary、optional transitive の各属性を伝送します。BGP ポリシーを設定し、これらの属性の一部を変更することによって、BGP パス選択を制御できます。詳細については、[ルート ポリシーおよび BGP セッションのリセット \(282 ページ\)](#) を参照してください。

BGP は、ロード バランシングまたは等コスト マルチパス (ECMP) もサポートします。詳細については、「[ロード シェアリングとマルチパス](#)」の項を参照してください。

BGP 自律システム

自律システム (AS) とは、単一の管理エンティティにより制御されるネットワークです。自律システムは1つまたは複数の IGP および整合性のある一連のルーティング ポリシーを使用して、ルーティング ドメインを形成します。BGP は 16 ビットおよび 32 ビットの自律システム番号をサポートします。詳細については、「[自律システム](#)」を参照してください。

個々の BGP 自律システムは外部 BGP (eBGP) ピアリングセッションを通じて、ルーティング情報をダイナミックに交換します。同じ自律システム内の BGP スピーカは、内部 BGP (iBGP) を通じて、ルーティング情報を交換できます。

4 バイトの AS 番号のサポート

BGP では、2 バイトまたは 4 バイトの AS 番号をサポートしています。Cisco NX-OS は、プレーンテキスト表記で 4 バイト (つまり 32 ビットの整数) の AS 番号を表示します。4 バイトの AS 番号は、プレーンテキスト表記 (たとえば 1 ~ 4294967295) または AS ドット表記 (たとえば 1.0) で設定できます。詳細については、「[自律システム](#)」を参照してください。

アドミニストレーティブ ディスタンス

アドミニストレーティブ ディスタンスは、ルーティング情報源の信頼性を示す評価基準です。デフォルトでは、BGP は表に示されたアドミニストレーティブ ディスタンスを使用します。

表 20: デフォルトの BGP アドミニストレーティブ ディスタンス

ディスタンス	デフォルト値	機能
外部	20	eBGP から学習したルートに適用されます。
内部	200	iBGP から学習したルートに適用されます。
ローカル	200	ルータを起点とするルートに適用されます。



- (注) アドミニストレーティブ ディスタンスが BGP パス選択アルゴリズムに影響を与えることはありませんが、BGP で学習されたルートが IP ルーティングテーブルに組み込まれるかどうかを左右します。

詳細については、「[アドミニストレーティブ ディスタンス](#)」のセクションを参照してください。

BGP ピア

BGP スピーカーは他の BGP スピーカーを自動的に検出しません。ユーザ側で BGP スピーカ間の関係を設定する必要があります。BGP ピアは、別の BGP スピーカへのアクティブな TCP 接続を持つ BGP スピーカです。

BGP セッション

BGP は TCP ポート 179 を使用して、ピアとの TCP セッションを作成します。ピア間で TCP 接続が確立されると、各 BGP ピアは最初に相手と、それぞれのすべてのルートを交換し、BGP ルーティングテーブルを完成させます。初期交換以後、BGP ピアはネットワーク トポロジが変化したとき、またはルーティングポリシーが変更されたときに、差分アップデートだけを送信します。更新と更新の間の非アクティブ期間には、ピアは「キープアライブ」と呼ばれる特別なメッセージを交換します。ホールドタイムは、次の BGP アップデートまたはキープアライブ メッセージを受信するまでに経過することが許容される、最大時間限度です。

Cisco NX-OS では、次のピア設定オプションをサポートしています。

- 個別の IPv4 : BGP は、リモート アドレスと AS 番号が一致する BGP スピーカとのセッションを確立します。
- 単一 AS 番号の IPv4 プレフィックス ピア : BGP は、プレフィックスおよび AS 番号が一致する BGP スピーカとのセッションを確立します。
- ダイナミック AS 番号プレフィックス ピア : BGP は、プレフィックスと、設定済み AS 番号のリストに載っている AS 番号と一致する BGP スピーカとのセッションを確立します。

プレフィックス ピアのダイナミック AS 番号

Cisco NX-OS では、BGP セッションを確立する AS 番号の範囲またはリストを受け入れます。たとえば IPv4 プレフィックス 192.0.2.0/8 および AS 番号 33、66、99 を使用するように BGP を設定する場合、BGP は 192.0.2.1 および AS 番号 66 を使用してセッションを確立しますが、192.0.2.2 および AS 番号 50 からのセッションは拒否します。

Cisco NX-OS リリース 9.3(6) 以降、ダイナミック AS 番号のサポートは、プレフィックス ピアに加えてインターフェイス ピアにも拡張されています。[IPv4 および IPv6 アドレス ファミリ向け IPv6 リンク ローカル経由の BGP インターフェイス ピアリングの設定 \(305 ページ\)](#) を参照してください。

Cisco NX-OS では、セッションが確立されるまで内部 BGP (iBGP) または外部 BGP (eBGP) セッションとして、プレフィックス ピアをダイナミック AS 番号と関連付けません。iBGP および eBGP の詳細については、を参照してください。



(注) ダイナミック AS 番号プレフィックス ピア設定は、BGP テンプレートから継承した個々の AS 番号の設定よりも優先します。詳細については、の章を参照してください。

BGP ルータ ID

ピア間で BGP セッションを確立するには、BGP セッションの確立時に、OPEN メッセージで BGP ピアに送信されるルータ ID を BGP に設定する必要があります。BGP ルータ ID は 32 ビット値であり、IPv4 アドレスで表すことがよくあります。ルータ ID はユーザ側で設定できます。デフォルトでは、Cisco NX-OS によって、ルータのループバック インターフェイスの IPv4 アドレスにルータ ID が設定されます。ルータ上でループバック インターフェイスが設定されていない場合は、BGP ルータ ID を表すためにルータ上の物理インターフェイスに設定されている最上位の IPv4 アドレスがソフトウェアによって選択されます。BGP ルータ ID は、ネットワーク内の BGP ピアごとに一意である必要があります。

BGP にルータ ID が設定されていない場合、BGP ピアとのピアリングセッションを確立できません。

BGP パスの選択

BGP は複数の送信元から、同じルートのアドバタイズメントを受信する可能性があります。BGP はベストパスとして、パスを 1 つだけ選択します。BGP は、そのパスを IP ルーティングテーブルに格納し、ピアにパスを伝達します。

所定のネットワークでパスが追加または削除されるたびに、ベストパスアルゴリズムが実行されます。ベストパスアルゴリズムは、ユーザが BGP 設定を変更した場合にも実行されます。BGP は所定のネットワークで使用できる一連の有効パスの中から、最適なパスを選択します。

Cisco NX-OS は次の手順で、BGP ベストパスアルゴリズムを実行します。

1. **ステップ 1** : 2 つのパスを比較し、どちらが適切かを判別します (ステップ 1 : 「[パスのペアの比較](#)」のセクションを参照してください) 。
2. **ステップ 2** : すべてのパスについて繰り返し、全体として最適なパスを選択するためにパスを比較する順序を決定します (ステップ 2 : 「[比較順序の決定](#)」のセクションを参照してください) 。
3. **ステップ 3** : 新しいベストパスを使用するに値するだけの差が新旧のベストパスにあるかどうかを判別します (ステップ 3 : 「[ベストパス変更の抑制の決定](#)」のセクションを参照してください) 。



- (注) 重要なのは、パート 2 で決定される比較順序です。3 つのパス A、B、C があり、Cisco NX-OS が A と B を比較して A を選択し、Cisco NX-OS が B と C を比較して B を選択したとします。しかし、Cisco NX-OS が A と C を比較したときには、A を選択しないかもしれません。これは一部の BGP メトリックが同じネイバー自律システムからのパスだけに適用され、すべてのパスにわたっては適用されないからです。

パス選択には、BGP AS パス属性が使用されます。AS パス属性には、アドバタイズされたパスでたどる自律システム番号 (AS 番号) のリストが含まれます。BGP 自律システムを自律システムの集合または連合に細分化する場合は、AS パスにローカル定義の自律システムを指定した連合セグメントが含まれます。

ステップ 1 : パス ペアの比較

BGP ベストパス アルゴリズムの最初のステップでは、より適切なパスを判別するために 2 つのパスを比較します。次に、Cisco NX-OS が 2 つのパスを比較して、より適切なパスを判別する基本的なステップについて説明します。

1. Cisco NX-OS は、比較する有効なパスを選択します (たとえば、到達不能なネクストホップがあるパスは無効です)。
2. Cisco NX-OS は、重み値が最大のパスを選択します。
3. Cisco NX-OS は、ローカル プリファレンスが最大のパスを選択します。
4. パスの一方がローカル起点の場合、Cisco NX-OS はそのパスを選択します。
5. Cisco NX-OS は、AS パスが短い方のパスを選択します。



- (注) AS パス長を計算するときに、Cisco NX-OS は連合セグメントを無視し、AS セットを 1 として数えます。詳細については、「[AS 連合](#)」の項を参照してください。

6. Cisco NX-OS は、オリジンが低い方のパスを選択します。IGP は EGP よりも低いと見なされます。
7. Cisco NX-OS は、multi exit discriminator (MED) が小さい方のパスを選択します。

このステップが実行されるされないを左右する、一連のオプションを選択できます。Cisco NX-OS が両方のパスの MED を比較するのは、通常、同じ自律システムのピアからそれらのパスを受け取った場合です。それ以外の場合、Cisco NX-OS は MED の比較を省略します。

パスのピア自律システムに関係なく、ベストパス アルゴリズムの MED 比較が必ず実行されるように、Cisco NX-OS を設定することもできます。詳細については、「[最適パス アルゴリズムの調整](#)」を参照してください。この設定を行わなかった場合、MED 比較が実行されるかどうかは、次のように比較する 2 つのパスの AS パス属性によって決まります。

1. パスに AS パスがない、または AS_SET から始まる AS パスがある場合、パスは内部であり、Cisco NX-OS は他の内部パスに対して MED を比較します。
2. AS パスが AS_SEQUENCE から始まる場合、ピア自律システムがシーケンスで最初の AS 番号になり、Cisco NX-OS は同じピア自律システムを持つ他のパスに対して MED を比較します。
3. AS パスに連合セグメントだけが含まれている場合、または連合セグメントで始まり、AS_SET が続いている場合、パスは内部であり、Cisco NX-OS は他の内部パスに対して MED を比較します。
4. AS パスが連合セグメントで始まり、AS_SEQUENCE が続いている場合、ピア自律システムが AS_SEQUENCE で最初の AS 番号になり、Cisco NX-OS は同じピア自律システムを持つ他のパスに対して MED を比較します。



(注) Cisco NX-OS がパスで指定された MED 属性を受信しなかった場合、Cisco NX-OS は欠落 MED が使用可能な最大値になるようにユーザーがベストパスアルゴリズムを設定していない限り、MED を 0 と見なします。詳細については、「最適パス アルゴリズムの調整」を参照してください。

5. 非決定性の MED 比較機能がイネーブルの場合、ベストパス アルゴリズムでは Cisco IOS スタイルの MED 比較が使用されます。詳細については、「[最適パス アルゴリズムの調整](#)」を参照してください。

8. 一方のパスが内部ピアから、他方のパスが外部ピアからの場合、Cisco NX-OS は外部ピアからのパスを選択します。
9. ネクストホップ アドレスへの IGP メトリックが異なるパスの場合、Cisco NX-OS は IGP メトリックが小さい方のパスを選択します。
10. Cisco NX-OS は、最後に実行したベストパス アルゴリズムによって選択されたパスを使用します。

ステップ 1 ~ 9 のすべてのパス パラメータが同じ場合、ルータ ID を比較するようにベストパスアルゴリズムを設定できます。詳細については、「最適パスアルゴリズムの調整」を参照してください。パスに発信元属性が含まれている場合、Cisco NX-OS はその属性をルータ ID として使用して比較します。発信もと属性が含まれていない場合、Cisco NX-OS はパスを送信したピアのルータ ID を使用します。パス間でルータ ID が異なる場合、Cisco NX-OS はルータ ID が小さい方のパスを選択します。



(注) 属性の送信元をルータ ID として使用する場合は、2 つのパスに同じルータ ID を設定することができます。また、同じピア ルータとの 2 つの BGP セッションが可能です。したがって、同じルータ ID で 2 つのパスを受信できます。

11. Cisco NX-OS は、クラスタ長が短いほうのパスを選択します。クラスタ リスト属性の指定されたパスを受け取らなかった場合、クラスタ長は 0 です。
12. Cisco NX-OS は、IP アドレスが小さい方のピアから受信したパスを選択します。ローカル発生 of パス（再配布のパスなど）は、ピア IP アドレスが 0 になります。



(注) ステップ 9 以降が同じパスは、マルチパスを設定している場合、マルチパスに使用できます。詳細については、「[ロードシェアリングとマルチパス](#)」の項を参照してください。

ステップ 2 : 比較順序の決定

BGP ベストパス アルゴリズム実装の 2 番めのステップでは、Cisco NX-OS がパスを比較する順序を決定します。

1. Cisco NX-OS は、パスをグループに分けます。各グループ内で、Cisco NX-OS はすべてのパスにわたって MED を比較します。Cisco NX-OS は、[ステップ 1 : パス ペアの比較](#)と同じルールを使用して、2 つのパス間で MED を比較できるかどうかを判断します。この比較では通常、ネイバー自律システムごとに 1 つずつグループが選択されます。**bgp bestpath med always** コマンドを設定すると、Cisco NX-OS はすべてのパスが含まれた 1 グループだけを選択します。
2. Cisco NX-OS は、常に最適な方を維持しながら、グループのすべてのパスを反復することによって、各グループのベストパスを決定します。Cisco NX-OS は、各パスをそれまでの一時的なベストパスと比較します。それまでのベストパスよりも適切な場合は、そのパスが新しく一時的なベストパスになり、Cisco NX-OS はグループの次のパスと比較します。
3. Cisco NX-OS は、ステップ 2 の各グループで選択されたベストパスからなる、パスセットを形成します。Cisco NX-OS は、このパスセットでもステップ 2 と同様にそれぞれの比較を繰り返すことによって、全体としてのベストパスを選択します。

ステップ 3 : ベストパス変更の抑制の決定

実装の次のパートでは、Cisco NX-OS が新しいベストパスを使用するのか抑制するのかを決定します。新しいベストパスが古いパスとまったく同じ場合、ルータは引き続き既存のベストパスを使用できます（ルータ ID が同じ場合）。Cisco NX-OS では引き続き既存のベストパスを使用することによって、ネットワークにおけるルート変更を回避できます。

抑制機能をオフにするには、ルータ ID を比較するようにベストパス アルゴリズムを設定します。詳細については、「[最適パスアルゴリズムの調整](#)」を参照してください。この機能を設定すると、新しいベストパスが常にに既存のベストパスよりも優先されます。

次の条件が発生した場合に、ベストパス変更を抑制できません。

- 既存のベストパスが無効になった。

- 既存または新しいベストパスを内部（または連合）ピアから受信したか、またはローカルに発生した（再配布などによって）。
- 同じピアからパスを受信した（パスのルータ ID が同じ）。
- パス間で重み値、ローカル プリファレンス、オリジン、またはネクストホップアドレスに対する IGP メトリックが異なっている。
- パス間で MED が異なっている。

BGP およびユニキャスト RIB

BGP はユニキャスト RIB（ルーティング情報ベース）と通信して、ユニキャスト ルーティングテーブルに IPv4 ルートを格納します。ベストパスの選択後、ベストパスの変更をルーティングテーブルに反映させる必要があると BGP が判別した場合、BGP はユニキャスト RIB にルートアップデートを送信します。

BGP はユニキャスト RIB における BGP ルートの変更に関して、ルート通知を受け取ります。さらに、再配布をサポートする他のプロトコルルートに関するルート通知を受け取ります。

BGP はネクストホップの変更に関する通知も、ユニキャスト RIB から受け取ります。BGP はこれらの通知を使用して、ネクストホップアドレスへの到達可能性および IGP メトリックを追跡します。

ユニキャスト RIB でネクストホップ到達可能性または IGP メトリックが変更されるたびに、BGP は影響を受けるルートについて、ベストパス再計算を開始させます。

BGP の仮想化

BGP は、仮想ルーティングおよび転送（VRF）インスタンスをサポートします。デフォルトでは、特に別の VRF を設定しない限り、Cisco NX-OS はユーザーをデフォルトの VRF に配置します。詳細については、「[レイヤ 3 仮想化の設定（413 ページ）](#)」を参照してください。

BGP の前提条件

BGP を使用するには、次の前提条件を満たしている必要があります。

- BGP 機能を有効にする必要があります（[BGP 機能のイネーブル化](#)のセクションを参照）。
- システムに有効なルータ ID を設定しておく必要があります。
- Regional Internet Registry（RIR）によって割り当てられたか、またはローカル管理の AS 番号を取得しておく必要があります。
- 再帰ネクストホップ解決に対応できる IGP を 1 つ以上設定する必要があります。
- BGP セッションを確立するネイバー環境で、アドレス ファミリを設定する必要があります。

BGP に関する注意事項と制約事項

BGP 設定時の注意事項および制約事項は、次のとおりです。

- ダイナミック AS 番号プレフィックス ピア設定は、BGP テンプレートから継承した個々の AS 番号の設定よりも優先します。
- AS 連合でプレフィックス ピアにダイナミック AS 番号を設定した場合、BGP はローカル連合の AS 番号のみでセッションを確立します。
- ダイナミック AS 番号プレフィックス ピアで作成された BGP セッションは、設定済みの eBGP マルチホップ存続可能時間 (TTL) 値や直接接続ピアに対するディセーブル済みのチェックを無視します。
- ルータ ID の自動変更およびセッション フラップを避けるために、BGP 用のルータ ID を設定する必要があります。
- ピアごとに最大プレフィックス設定オプションを使用し、受信するルート数および使用するシステム リソース数を制限する必要があります。
- `update-source` を設定し、BGP/eBGP マルチホップセッションでセッションを確立する必要があります。
- 再配布を設定する場合、BGP ポリシーを指定する必要があります。
- VRF 内で BGP ルータ ID を定義する必要があります。
- キープアライブおよびホールド タイマーの値を小さくすると、BGP セッション フラップが発生する可能性があります。
- VRF を構成する場合は、望ましい VRF を入力します（「[レイヤ 3 仮想化の設定](#)」を参照）。
- TCP レイヤで使用するデフォルトの最大セグメントサイズ (MSS) は、BGP が Linux カーネルまたは Netstack のどちらを使用しているかによって異なります。Cisco NX-OS リリース 7.x 以降、BGP はネイティブ Linux カーネル ネットワーキング スタックとインターフェイスベースの MSS を使用します。Cisco NX-OS 6.x リリースでは、BGP はデフォルトの MSS 値が 536 の Cisco Netstack を使用します。MTU が送信元スイッチの発信インターフェイス MTU よりも小さい中間ルータまたはスイッチがある場合にフラグメント化を防ぐには、`ip tcp path-mtu-discovery` コマンドを入力します。MTU 値は、データ パス上で同じである必要があります。

CLI コンフィギュレーション モード

以下の項では、BGP に対応する各 CLI コンフィギュレーション モードの開始方法について説明します。現行のモードで `?` コマンドを入力すると、そのモードで使用可能なコマンドを表示できます。

グローバル コンフィギュレーション モード

グローバルコンフィギュレーションモードは、BGPプロセスを作成したり、AS連合、ルートダンプニングなどの拡張機能を設定したりする場合に使用します。詳細については、[高度な BGP の設定 \(281 ページ\)](#) を参照してください。

次に、ルータ コンフィギュレーション モードを開始する例を示します。

```
switch# configuration
switch(config)# router bgp 64496
switch(config-router)#
```

BGP は仮想ルーティングおよび転送 (VRF) をサポートします。ネットワークで VRF を使用する場合は、適切な VRF 内で BGP を設定できます。設定の詳細については、「[仮想化の設定](#)」の項を参照してください。

次に、VRF コンフィギュレーション モードを開始する例を示します。

```
switch(config)# router bgp 64497
switch(config-router)# vrf vrf_A
switch(config-router-vrf)#
```

アドレス ファミリ設定モード

任意で、BGP がサポートするアドレス ファミリを設定できます。アドレス ファミリ用の機能を設定する場合は、ルータ設定モードで **address-family** コマンドを使用します。ネイバーに対応する特定のアドレス ファミリを設定する場合は、ネイバー設定モードで **address-family** コマンドを使用します。

ルート再配布、アドレス集約、ロードバランシングなどの拡張機能を使用する場合は、アドレス ファミリを設定する必要があります。

次に、ルータ設定モードからアドレス ファミリ設定モードを開始する例を示します。

```
switch(config)# router bgp 64496
switch(config-router)# address-family ipv4 unicast
switch(config-router-af)#
```

次に、VRF を使用している場合に、VRF アドレス ファミリ設定モードを開始する例を示します。

```
switch(config)# router bgp 64497
switch(config-router)# vrf vrf_A
switch(config-router-vrf)# address-family ipv4 unicast
switch(config-router-vrf-af)#
```

ネイバー コンフィギュレーション モード

Cisco NX-OS には、BGP ピアを設定するためのネイバー コンフィギュレーション モードがあります。ネイバー コンフィギュレーション モードを使用して、ピアのあらゆるパラメータを設定できます。

次に、ネイバー コンフィギュレーション モードを開始する例を示します。

```
switch(config)# router bgp 64496
switch(config-router)# neighbor 192.0.2.1
switch(config-router-neighbor)#
```

次に、VRF ネイバー コンフィギュレーション モードを開始する例を示します。

```
switch(config)# router bgp 64497
switch(config-router)# vrf vrf_A
switch(config-router-vrf)# neighbor 192.0.2.1
switch(config-router-vrf-neighbor)#
```

ネイバー アドレス ファミリ コンフィギュレーション モード

アドレス ファミリ固有のネイバー設定を入力し、ネイバーのアドレス ファミリをイネーブルにするには、ネイバー コンフィギュレーション サブモード内のアドレス ファミリ コンフィギュレーション サブモードを使用できます。このモードは、所定のネイバーに認められるプレフィックス数の制限、eBGP のプライベート AS 番号の削除といった拡張機能に使用します。

Cisco NX-OS リリース 6.0(2)U4(1) で RFC 5549 が導入されているため、IPv6 アドレスを持つネイバーに IPv4 アドレス ファミリを構成できます。

この例は、IPv4 アドレスでネイバーのための IPv4 ネイバー アドレス ファミリ設定モードを入力する方法を示します。

```
switch(config)# router bgp 64496
switch(config-router)# neighbor 192.0.2.1
switch(config-router-neighbor)# address-family ipv4 unicast
switch(config-router-neighbor-af)#
```

この例は、IPv6 アドレスでネイバーのための IPv4 ネイバー アドレス ファミリ設定モードを入力する方法を示します。

```
switch(config)# router bgp 64496
switch(config-router)# neighbor 2001:db8::/64 eui64
switch(config-router-neighbor)# address-family ipv4 unicast
switch(config-router-neighbor-af)#
```

この例は、IPv4 アドレスでネイバーのための VRF IPv4 ネイバー アドレス ファミリ構成モードを入力する方法を示します。

```
switch(config)# router bgp 64497
switch(config-router)# vrf vrf_A
switch(config-router-vrf)# neighbor 209.165.201.1
switch(config-router-vrf-neighbor)# address-family ipv4 unicast
switch(config-router-vrf-neighbor-af)#
```

この例は、IPv6 アドレスでネイバーのための VRF IPv4 ネイバー アドレス ファミリ設定モードを入力する方法を示します。

```
switch(config)# router bgp 64497
switch(config-router)# vrf vrf_A
switch(config-router-vrf)# neighbor 2001:db8::/64 eui64
switch(config-router-vrf-neighbor)# address-family ipv4 unicast
switch(config-router-vrf-neighbor-af)#
```

BGP のデフォルト設定

次の表に、BGP パラメータのデフォルト設定値を示します。

表 21: デフォルトの BGP パラメータ

パラメータ	デフォルト
BGP 機能	ディセーブル
キープアライブ インターバル	60 秒
ホールド タイマー	180 秒

基本的 BGP の設定

ベーシック BGP を設定するには、BGP をイネーブルにして、BGP ピアを設定する必要があります。ベーシック BGP ネットワークの設定は、いくつかの必須作業と多数の任意の作業からなります。BGP ルーティング プロセスおよび BGP ピアの設定は必須です。



(注) Cisco IOS の CLI に慣れている場合、この機能に対応する Cisco NX-OS コマンドは通常使用する Cisco IOS コマンドと異なる場合がありますので注意してください。

BGP 機能のイネーブル化

始める前に

BGP を設定する前に、BGP 機能をイネーブルにする必要があります。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	コンフィギュレーション モードに入ります。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 2	feature bgp 例 : <code>switch(config)# feature bgp</code>	BGP 機能をイネーブルにします。
ステップ 3	(任意) show feature 例 : <code>switch(config)# show feature</code>	有効および無効にされた機能を表示します。
ステップ 4	(任意) copy running-config startup-config 例 : <code>switch(config)# copy running-config startup-config</code>	この設定変更を保存します。

例

no feature bgp コマンドを使用して、BGP 機能をディセーブルにし、関連するコンフィギュレーションをすべて削除します。

コマンド	目的
no feature bgp 例 : <code>switch(config)# no feature bgp</code>	BGP 機能をディセーブルにして、関連するすべての設定を削除します。

BGP インスタンスの作成

BGP インスタンスを作成し、BGP インスタンスにルータ ID を割り当てることができます。
「[BGP ルータ ID](#)」のセクションを参照してください。Cisco NX-OS は、2 バイトまたは 4 バイトのプレーンテキスト表記または AS ドット表記による自律システム (AS) 番号をサポートします。詳細については、[4 バイト AS 番号のサポート](#)のセクションを参照してください。

始める前に

BGP 機能を有効にしていることを確認します ([BGP 機能の有効化](#)のセクションを参照してください)。

BGP はルータ ID (設定済みループバック アドレスなど) を取得できなければなりません。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	コンフィギュレーション モードに入ります。
ステップ 2	router bgp autonomous-system-number 例 : <pre>switch(config)# router bgp 64496 switch(config-router)#</pre>	BGP を有効にして、ローカル BGP スピーカに AS 番号を割り当てます。AS 番号は 16 ビット整数または 32 ビット整数にできます。上位 16 ビット 10 進数と下位 16 ビット 10 進数による xx.xx という形式です。
ステップ 3	(任意) router-id ip-address 例 : <pre>switch(config-router)# router-id 192.0.2.255</pre>	BGP ルータ ID を設定します。この IP アドレスによって、この BGP スピーカを特定します。このコマンドによって、BGP ネイバー セッションの自動通知およびセッションリセットが開始されます。
ステップ 4	(任意) address-family ipv4 unicast 例 : <pre>switch(config-router)# address-family ipv4 unicast switch(config-router-af)#</pre>	指定されたアドレス ファミリに対応するグローバル アドレス ファミリ コンフィギュレーション モードを開始します。このコマンドによって、すべての BGP ネイバー セッションの自動通知およびセッションリセットが開始されます。
ステップ 5	(任意) network ip-prefix [route-map map-name] 例 : <pre>switch(config-router-af)# network 192.0.2.0</pre>	ネットワークを、この自律システムに対してローカルに設定し、BGP ルーティング テーブルに追加します。 エクステリア プロトコルの場合、network コマンドでアドバタイズするネットワークを制御します。インテリア プロトコルでは、network コマンドを使用して、アップデートの送信先を決定します。
ステップ 6	(任意) show bgp all 例 : <pre>switch(config-router-af)# show bgp all</pre>	すべての BGP アドレス ファミリに関する情報を表示します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 7	(任意) copy running-config startup-config 例 : <pre>switch(config)# copy running-config startup-config</pre>	この設定変更を保存します。

例

BGP プロセスおよび関連するすべての設定を削除するには、**no router bgp** コマンドを使用します。

コマンド	目的
no router bgp autonomous-system-number 例 : <pre>switch(config)# no router bgp 201</pre>	BGP プロセスおよび関連する設定を削除します。

次に、IPv4 ユニキャスト アドレス ファミリを指定して BGP をイネーブルに設定し、アドバタイズするネットワークを 1 つ追加する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# router bgp 64496
switch(config-router)# address-family ipv4 unicast
switch(config-router-af)# network 192.0.2.0
switch(config-router-af)# copy running-config startup-config
```

BGP インスタンスの再起動

BGP インスタンスを再起動し、そのインスタンスのすべてのピアセッションをクリアできます。

BGP インスタンスを再起動し、関連付けられたすべてのピアを削除するには、次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
restart bgp instance-tag 例 : <pre>switch(config)# restart bgp 201</pre>	BGP インスタンスを再起動し、すべてのピアリングセッションをリセットまたは再確立します。

BGP のシャットダウン

BGP プロトコルをシャットダウンして BGP を正常にディセーブルし、設定を保持できます。

BGP をシャットダウンするには、ルータ コンフィギュレーション モードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
shutdown 例 : switch(config-router)# shutdown	BGP を正常にシャットダウンします。

BGP ピア設定

BGP プロセス内で BGP ピアを設定できます。BGP ピアごとに、関連付けられたキープアライブ タイマーとホールド タイマーがあります。これらのタイマーは、グローバルに設定することも、BGP ピアごとに設定することもできます。ピア設定はグローバル設定を上書きします。



(注) ピアごとに、ネイバー コンフィギュレーション モードでアドレス ファミリを設定する必要があります。

始める前に

BGP 機能を有効にしていることを確認します ([BGP 機能のイネーブル化](#)のセクションを参照してください)。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : switch# configure terminal switch(config)#	コンフィギュレーション モードに入ります。
ステップ 2	router bgp autonomous-system-number 例 : switch(config)# router bgp 64496 switch(config-router)#	BGP を有効にして、ローカル BGP スピーカに AS 番号を割り当てます。AS 番号は 16 ビット整数または 32 ビット整数にできます。上位 16 ビット 10 進数と下位 16 ビット 10 進数による xx.xx という形式です。
ステップ 3	neighbor ip-address { ipv4 ipv6 } remote-as as-number 例 :	リモート BGP ピアの指定アドレス タイプと AS 番号を構成します。The <i>ip-address</i> 形式は x.x.x.x です。IPv6 <i>address-format</i> の形式は A:B::C:D です。

	コマンドまたはアクション	目的
	<pre>switch(config-router)# neighbor 209.165.201.1 remote-as 64497 switch(config-router-neighbor)#</pre>	
ステップ 4	(任意) description text 例 : <pre>switch(config-router-neighbor)# description Peer Router B switch(config-router-neighbor)#</pre>	ネイバーの説明を追加します。最大 80 文字の英数字ストリングを使用できます。
ステップ 5	(任意) timers keepalive-time hold-time 例 : <pre>switch(config-router-neighbor)# timers 30 90</pre>	ネイバーのキープアライブおよびホールドタイムを表す BGP タイマー値を追加します。指定できる範囲は 0 ~ 3600 秒です。デフォルトは、キープアライブタイムで 60 秒、ホールドタイムで 180 秒です。 (注) ホールドタイマーが 10 秒以下の BGP セッションは、BGP セッションが 60 秒以上稼働するまで有効になりません。セッションが 60 秒間稼働すると、ホールドタイマーは構成どおりに動作します。
ステップ 6	(任意) shutdown 例 : <pre>switch(config-router-neighbor)# shutdown</pre>	この BGP ネイバーを管理目的でシャットダウンします。このコマンドによって、BGP ネイバー セッションの自動通知およびセッションリセットが開始されます。
ステップ 7	address-family _ [] ipv4 ipv6 _ [] unicast multicast % 例 : <pre>switch(config-router-neighbor)# address-family ipv4 unicast switch(config-router-neighbor-af)#</pre>	ユニキャスト指定のアドレスファミリーに対応したネイバー アドレスファミリー構成モードを開始します。
ステップ 8	(任意) show bgp { ipv4 ipv6 } { unicast multicast } neighbors 例 : <pre>switch(config-router-neighbor-af)# show bgp ipv4 unicast neighbors</pre>	BGP ピアに関する情報を表示します。
ステップ 9	(任意) copy running-config startup-config 例 :	この設定変更を保存します。

デフォルトスタティック ルートをすべての BGP VRF に配布

	コマンドまたはアクション	目的
	<code>switch(config)# copy running-config startup-config</code>	

例

次に、BGP ピアを設定する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# router bgp 64496
switch(config-router)# neighbor 192.0.2.1 remote-as 64497
switch(config-router-neighbor)# description Peer Router B
switch(config-router-neighbor)# address-family ipv4 unicast
switch(config-router-neighbor-af)# copy running-config startup-config
```

デフォルトスタティック ルートをすべての BGP VRF に配布

新しい CLI `default-information originate` が追加され、デフォルトのスタティック ルートをデフォルト以外の VRF からすべての BGP (VRF) 仮想ルータ コンテキストに配布し、そのルートをすべての BGP VRF のローカル BGP ルート テーブルにインストールします。

始める前に

BGP 機能が有効になっていることを確認します

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <code>switch# configure terminal</code> <code>switch(config)#</code>	コンフィギュレーション モードに入ります。
ステップ 2	router bgp <i>autonomous-system-number</i> 例 : <code>switch(config)# router bgp 64496</code> <code>switch(config-router)#</code>	BGP を有効にして、ローカル BGP スピーカに AS 番号を割り当てます。AS 番号は 16 ビット整数または 32 ビット整数にできます。上位 16 ビット 10 進数と下位 16 ビット 10 進数による <code>xx.xx</code> という形式です。
ステップ 3	vrf <i>vrf-name</i>	VRF 名を構成します。
ステップ 4	address-family { <i>ipv4</i> <i>ipv6</i> } { <i>unicast</i> <i>multicast</i> } 例 :	指定されたアドレス ファミリに対応するグローバル アドレス ファミリ コンフィギュレーション モードを開始します。このコマンドによって、すべての

	コマンドまたはアクション	目的
	switch(config-router-neighbor)# address-family ipv4 unicast switch(config-router-neighbor-af)#	BGP ネイバー セッションの自動通知およびセッション リセットが開始されます。
ステップ 5	redistribute static route-map test	スタティック ルート マップを再配布します。
ステップ 6	default-information originate	デフォルトのスタティック ルートをデフォルト以外の VRF からすべての BGP (VRF) 仮想ルータ コンテキストに配布し、そのルートをすべての BGP VRF のローカル BGP ルート テーブルにインストールします。
ステップ 7	exit	設定を終了します。
ステップ 8	(任意) copy running-config startup-config 例 : switch(config)# copy running-config startup-config	この設定変更を保存します。

例

デフォルトのスタティック ルートをデフォルト以外の VRF からすべての BGP (VRF) 仮想ルータ コンテキストに配布し、そのルートをすべての BGP VRF のローカル BGP ルート テーブルにインストールする方法の例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# router bgp 100
switch(config-router)# vrf green
switch(config-router-neighbor)# address-family ipv4 unicast
switch(config-router-vrf-af)# redistribute static route-map test
switch(config-router-vrf-af)# default-information originate
switch(config-router-vrf-af)# exit
switch(config)# copy running-config startup-config
```

次に、デフォルト以外の VRF グリーンから、別のデフォルト以外の VRF 共有にデフォルトのルート リークを構成する方法の例を示します。

```
router bgp 100
address-family ipv4 unicast
redistribute static route-map test
vrf Green
address-family ipv4 unicast
redistribute static route-map test
default-information originate
vrf Shared
address-family ipv4 unicast
redistribute static route-map test
```

更新アナウンス遅延タイマーの構成

`advertisement-interval` コマンドを使用すると、BGP ルーティング アップデートを送信する最小ルート アドバタイズメント インターバル (MRAI) を設定できます。ルート アップデートがトリガされるとすぐに通知するのではなく、BGP はアドバタイズメント間隔が満了するまで待ってから、アップデートを送信します。この間隔中に他の変更が発生した場合、BGP はそれらすべての変更を効率的にアナウンスできます。

この遅延タイマーは、新しいルートアナウンスメントに対してのみ設定され、ルート取り消しアナウンスメントには設定されません。ルートの取り消しはすぐにアナウンスする必要があります。

始める前に

BGP 機能が有効になっていることを確認します

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	<code>configure terminal</code> 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	コンフィギュレーション モードに入ります。
ステップ 2	<code>router bgp autonomous-system-number</code> 例 : <pre>switch(config)# router bgp 64496 switch(config-router)#</pre>	BGP を有効にして、ローカル BGP スピーカに AS 番号を割り当てます。AS 番号は 16 ビット整数または 32 ビット整数にできます。上位 16 ビット 10 進数と下位 16 ビット 10 進数による <code>xx.xx</code> という形式です。
ステップ 3	<code>neighbor prefix remote-as route-map map-name</code> 例 : <pre>switch(config-router)# neighbor 192.0.2.0/8 remote-as routemap BGPpeers switch(config-router-neighbor)#</pre>	IPv4 プレフィックス、およびリモート BGP ピアの受け付けられた AS 番号のリストのルートマップを構成します。IPv4 の <i>prefix</i> 形式は、 <code>x.x.x.x/長さ</code> の範囲は 1 ～ 32 です。 <i>map-name</i> には最大 63 文字の英数字を使用できます。大文字と小文字は区別されます。
ステップ 4	<code>address-family { ipv4 ipv6 } { unicast multicast }</code> 例 : <pre>switch(config-router-neighbor)# address-family ipv4 unicast switch(config-router-neighbor-af)#</pre>	指定されたアドレス ファミリに対応するグローバル アドレス ファミリ コンフィギュレーション モードを開始します。このコマンドによって、すべての BGP ネイバー セッションの自動通知お

	コマンドまたはアクション	目的
		よびセッション リセットが開始されます。
ステップ 5	advertisement-interval seconds 例 : <pre>switch(config-router-neighbor-af)# advertisement-interval 300</pre>	新しいルート アップデートの通知を遅らせる間隔を構成します。 (注) この間隔は、ただちに行う必要があるルート取り消しの通知には適用されません。 間隔は、1 ～ 600 秒の範囲にすることができます。

例

次に、アップデート アナウンスメント遅延タイマーを構成する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# router bgp 64496
switch(config-router)# neighbor 192.0.2.0/8 remote-as route-map BGPPeers
switch(config-router-neighbor)# address-family ipv4 unicast
switch(config-router-neighbor-af)# advertisement-interval 300
```

BGP 再接続間隔の構成

BGP セッションが再接続できるまでの間隔を構成できます。

始める前に

BGP 機能が有効になっていることを確認します

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	コンフィギュレーション モードに入ります。
ステップ 2	router bgp autonomous-system-number 例 : <pre>switch(config)# router bgp 64496 switch(config-router)#</pre>	BGP を有効にして、ローカル BGP スピーカに AS 番号を割り当てます。AS 番号は 16 ビット整数または 32 ビット整数にできます。上位 16 ビット 10 進数と下位 16 ビット 10 進数による xx.xx という形式です。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 3	reconnect-interval interval 例 : <pre>switch(config-router)# reconnect-interval 20 switch(config-router)#</pre>	ドロップされた BGP 接続を自動的に再接続できるようになるまでの間隔を構成します。間隔の範囲は 1 ～ 60 秒です。 間隔のデフォルト値は 30 秒です。
ステップ 4	(任意) copy running-config startup-config 例 : <pre>switch(config)# copy running-config startup-config</pre>	この設定変更を保存します。

例

次に、BGP 再接続感覚を構成する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# router bgp 64496
switch(config-router)# reconnect-interval 20
switch(config-router)# copy running-config startup-config
```

プレフィックス ピアのダイナミック AS 番号の設定

BGP プロセス内で複数の BGP ピアを設定できます。BGP セッションの確立をルート マップの単一の AS 番号または複数の AS 番号に制限できます。

プレフィックス ピアのダイナミック AS 番号を介して設定された BGP セッションは、**ebgp-multihop** コマンドおよび **disable-connected-check** コマンドを無視します

ルートマップの AS 番号のリストは変更できますが、ルートマップ名を変更するには **no neighbor** コマンドを使用する必要があります。設定されたルート マップの AS 番号に変更を加えた場合、新しいセッションのみに影響します。

始める前に

BGP 機能が有効になっていることを確認します

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	コンフィギュレーション モードに入ります。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 2	router bgp autonomous-system-number 例 : <pre>switch(config)# router bgp 64496 switch(config-router)#</pre>	BGP を有効にして、ローカル BGP スピーカに AS 番号を割り当てます。AS 番号は 16 ビット整数または 32 ビット整数にできます。上位 16 ビット 10 進数と下位 16 ビット 10 進数による xx.xx という形式です。
ステップ 3	neighbor prefix remote-as route-map map-name 例 : <pre>switch(config-router)# neighbor 192.0.2.0/8 remote-as routemap BGPPeers switch(config-router-neighbor)#</pre>	IPv4 プレフィックス、およびリモート BGP ピアの受け付けられた AS 番号のリストのルート マップを構成します。 <i>map-name</i> には最大 63 文字の英数字を使用できます。大文字と小文字は区別されます。
ステップ 4	show bgp { ipv4 ipv6 } { unicast multicast } neighbors 例 : <pre>switch(config-router-neighbor-af)# show bgp ipv4 unicast neighbors</pre>	BGP ピアに関する情報を表示します。
ステップ 5	(任意) copy running-config startup-config 例 : <pre>switch(config)# copy running-config startup-config</pre>	この設定変更を保存します。

例

次に、プレフィックス ピアのダイナミック AS 番号を設定する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# route-map BGPPeers
switch(config-route-map)# match as-number 64496, 64501-64510
switch(config-route-map)# match as-number as-path-list List1, List2
switch(config-route-map)# exit
switch(config)# router bgp 64496
switch(config-router)# neighbor 192.0.2.0/8 remote-as route-map BGPPeers
switch(config-router-neighbor)# description Peer Router B
switch(config-router-neighbor)# address-family ipv4 unicast
switch(config-router-neighbor-af)# copy running-config startup-config
```

BGP 情報の消去

BGP 情報を消去するには、次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
clear bgp all { <i>neighbor</i> * <i>as-number</i> peer-template <i>name</i> <i>prefix</i> } [vrf <i>vrf-name</i>]	すべてのアドレス ファミリから 1 つ以上のネイバーをクリアします。* を指定すると、すべてのアドレス ファミリのすべてのネイバーが消去されます。引数は次のとおりです。 • <i>neighbor</i> : ネイバーの IPv4 アドレス。 • <i>as-number</i> : 自律システム番号。AS 番号は 16 ビット整数または 32 ビット整数にできます。上位 16 ビット 10 進数と下位 16 ビット 10 進数による <i>xx.xx</i> という形式です。 • <i>name</i> : ピア テンプレート名。名称は 64 文字以内の英数字のストリング（大文字と小文字を区別）で指定します。 • <i>prefix</i> : IPv4 プレフィックス。そのプレフィックス内のすべてのネイバーがクリアされます。 • <i>vrf-name</i> : VRF 名。その VRF 内のすべてのネイバーがクリアされます。名称は 64 文字以内の英数字のストリング（大文字と小文字を区別）で指定します。
clear bgp all dampening [vrf <i>vrf-name</i>]	すべてのアドレス ファミリのルートフラップ ダンプニング ネットワークをクリアします。 <i>vrf-name</i> には最大 64 文字の英数字文字列を指定します。大文字と小文字は区別されます。
clear bgp all flap-statistics [vrf <i>vrf-name</i>]	すべてのアドレス ファミリのルートフラップ統計情報をクリアします。 <i>vrf-name</i> には最大 64 文字の英数字文字列を指定します。大文字と小文字は区別されます。
clear bgp unicast dampening [vrf <i>vrf-name</i>]	選択したアドレス ファミリのルートフラップ ダンプニング ネットワークをクリアします。 <i>vrf-name</i> には最大 64 文字の英数字文字列を指定します。大文字と小文字は区別されます。
clear bgp unicast flap-statistics [vrf <i>vrf-name</i>]	選択したアドレス ファミリのルートフラップ統計情報をクリアします。 <i>vrf-name</i> には最大 64 文字の英数字文字列を指定します。大文字と小文字は区別されます。

コマンド	目的
clear bgp { ipv4 } unicast { neighbor * as-number peer-template name prefix } [vrf vrf-name]	すべてのアドレス ファミリから 1 つ以上のネイバーをクリアします。* を指定すると、すべてのアドレス ファミリのすべてのネイバーが消去されます。引数は次のとおりです。 • neighbor : ネイバーの IPv4 アドレス。 • as-number : 自律システム番号。AS 番号は 16 ビット整数または 32 ビット整数にできます。上位 16 ビット 10 進数と下位 16 ビット 10 進数による xx.xx という形式です。 • name : ピア テンプレート名。名称は 64 文字以内の英数字のストリング（大文字と小文字を区別）で指定します。 • prefix : IPv4 プレフィックス。そのプレフィックス内のすべてのネイバーがクリアされます。 • vrf-name : VRF 名。その VRF 内のすべてのネイバーがクリアされます。名称は 64 文字以内の英数字のストリング（大文字と小文字を区別）で指定します。
clear bgp { ip {unicast } } { neighbor * as-number peer-template name prefix } [vrf vrf-name]	すべてのアドレス ファミリから 1 つ以上のネイバーをクリアします。* を指定すると、すべてのアドレス ファミリのすべてのネイバーが消去されます。引数は次のとおりです。 • neighbor : ネイバーの IPv4 アドレス。 • as-number : 自律システム番号。AS 番号は 16 ビット整数または 32 ビット整数にできます。上位 16 ビット 10 進数と下位 16 ビット 10 進数による xx.xx という形式です。 • name : ピア テンプレート名。名称は 64 文字以内の英数字のストリング（大文字と小文字を区別）で指定します。 • prefix : IPv4 プレフィックス。そのプレフィックス内のすべてのネイバーがクリアされます。 • vrf-name : VRF 名。その VRF 内のすべてのネイバーがクリアされます。名称は 64 文字以内の英数字のストリング（大文字と小文字を区別）で指定します。

コマンド	目的
clear ip bgp dampening [<i>ip-neighbor</i> <i>ip-prefix</i>] [<i>vrf vrf-name</i>]	1 つ以上のネットワークのルートフラップダンプニングをクリアします。引数は次のとおりです。 • <i>ip-neighbor</i> : ネイバーの IPv4 アドレス。 • <i>ip-prefix</i> : IPv4。そのプレフィックス内のすべてのネイバーがクリアされます。 • <i>vrf-name</i> : VRF 名。その VRF 内のすべてのネイバーがクリアされます。名称は 64 文字以内の英数字のストリング（大文字と小文字を区別）で指定します。
clear ip bgp flap-statistics [<i>ip-neighbor</i> <i>ip-prefix</i>] [<i>vrf vrf-name</i>]	1 つ以上のネットワークのルートフラップ統計情報をクリアします。引数は次のとおりです。 • <i>ip-neighbor</i> : ネイバーの IPv4 アドレス。 • <i>ip-prefix</i> : IPv4。そのプレフィックス内のすべてのネイバーがクリアされます。 • <i>vrf-name</i> : VRF 名。その VRF 内のすべてのネイバーがクリアされます。名称は 64 文字以内の英数字のストリング（大文字と小文字を区別）で指定します。
clear ip mbgp { ip { unicast } { <i>neighbor</i> * <i>as-number</i> peer-template <i>name</i> <i>prefix</i> } } [<i>vrf vrf-name</i>]	すべてのアドレスファミリから 1 つ以上のネイバーをクリアします。* を指定すると、すべてのアドレスファミリのすべてのネイバーが消去されます。引数は次のとおりです。 • <i>neighbor</i> : ネイバーの IPv4 アドレス。 • <i>as-number</i> : 自律システム番号。AS 番号は 16 ビット整数または 32 ビット整数にできます。上位 16 ビット 10 進数と下位 16 ビット 10 進数による xx.xx という形式です。 • <i>name</i> : ピア テンプレート名。名称は 64 文字以内の英数字のストリング（大文字と小文字を区別）で指定します。 • <i>prefix</i> : IPv4 プレフィックス。そのプレフィックス内のすべてのネイバーがクリアされます。 • <i>vrf-name</i> : VRF 名。その VRF 内のすべてのネイバーがクリアされます。名称は 64 文字以内の英数字のストリング（大文字と小文字を区別）で指定します。

コマンド	目的
clear ip mbgp dampening [<i>ip-neighbor</i> <i>ip-prefix</i>] [<i>vrf vrf-name</i>]	1つ以上のネットワークのルートフラップダンプニングをクリアします。引数は次のとおりです。 • <i>ip-neighbor</i> : ネイバーの IPv4 アドレス。 • <i>ip-prefix</i> : IPv4。そのプレフィックス内のすべてのネイバーがクリアされます。 • <i>vrf-name</i> : VRF 名。その VRF 内のすべてのネイバーがクリアされます。名称は 64 文字以内の英数字のストリング（大文字と小文字を区別）で指定します。
clear ip mbgp flap statistics [<i>ip-neighbor</i> <i>ip-prefix</i>] [<i>vrf vrf-name</i>]	1つ以上のネットワークのルートフラップ統計情報をクリアします。引数は次のとおりです。 • <i>ip-neighbor</i> : ネイバーの IPv4 アドレス。 • <i>ip-prefix</i> : IPv4。そのプレフィックス内のすべてのネイバーがクリアされます。 • <i>vrf-name</i> : VRF 名。その VRF 内のすべてのネイバーがクリアされます。名称は 64 文字以内の英数字のストリング（大文字と小文字を区別）で指定します。

ベーシック BGP の設定の確認

BGP の設定情報を表示するには、次のいずれかの作業を行います。

コマンド	目的
show bgp all [summary] [vrf vrf-name]	すべてのアドレスファミリについて、BGP 情報を表示します。
show bgp convergence [vrf vrf-name]	すべてのアドレスファミリについて、BGP 情報を表示します。
show bgp { ipv4 { unicast } [ip-address] community { regexp expression [community] [no-advertise] [no-export] [no-export-subconfed] } [vrf vrf-name] }	BGP コミュニティと一致する BGP ルートを表示します。
show bgp [vrf vrf-name] { ip } { unicast } [ip-address] community-list list-name [vrf vrf-name]	BGP コミュニティリストと一致する BGP ルートを表示します。

コマンド	目的
show bgp ip {unicast} [ip-address] extcommunity {regex expression generic [non-transitive transitive] aa4:nn [exact-match]} [vrf vrf-name]	BGP 拡張コミュニティと一致する BGP ルートを表示します。
show bgp ip {unicast} [ip-address] extcommunity-list list-name [exact-match] [vrf vrf-name]	BGP 拡張コミュニティ リストと一致する BGP ルートを表示します。
show bgp ip {unicast} [ip-address] {dampening dampened-paths [regex expression]} [vrf vrf-name]	BGP ルート ダンプニングの情報を表示します。 ルート フラップ ダンプニング情報を消去するには、 clear bgp dampening コマンドを使用します。
show bgp ip {unicast} [ip-address] history-paths [regex expression] [vrf vrf-name]	BGP ルート ヒストリ パスを表示します。
show bgp ip {unicast} [ip-address] filter-list list-name [vrf vrf-name]	BGP フィルタ リストの情報を表示します。
show bgp ip {unicast} [ip-address] neighbors [ip-address] [vrf vrf-name]	BGP ピアの情報を表示します。これらのネイバーを消去するには、 clear bgp neighbors コマンドを使用します。
show bgp ip {unicast} [ip-address] { nexthop nexthop-database} [vrf vrf-name]]	BGP ルートネクストホップの情報を表示します。
show bgp paths	BGP パス情報を表示します。
show bgp ip {unicast} [ip-address] policy name [vrf vrf-name]	BGP ポリシー情報を表示します。ポリシー情報を消去するには、 clear bgp policy コマンドを使用します。
show bgp ip {unicast} [ip-address] prefix-list list-name [vrf vrf-name]	プレフィックス リストと一致する BGP ルートを表示します。
show bgp ip {unicast} [ip-address] received-paths [vrf vrf-name]	ソフト再構成用に保管されている BGP パスを表示します。
show bgp ip {unicast} [ip-address] regex expression [vrf vrf-name]	AS_path 正規表現と一致する BGP ルートを表示します。
show bgp ip {unicast} [ip-address] route-map map-name [vrf vrf-name]	ルート マップと一致する BGP ルートを表示します。
show bgp peer-policy name [vrf vrf-name]	BGP ピア ポリシー情報を表示します。
show bgp peer-session name [vrf vrf-name]	BGP ピア セッション情報を表示します。

コマンド	目的
show bgp peer-template name [vrf vrf-name]	BGP ピア テンプレート情報を表示します。ピア テンプレートのすべてのネイバーを消去するには、 clear bgp peer-template コマンドを使用します。
show bgp process	BGP プロセス情報を表示します。
show ip bgp options	BGP のステータスと構成情報を表示します。このコマンドには複数のオプションがあります。詳細については、Cisco Nexus 3000 シリーズ コマンド リファレンスを参照してください。
show ip mbgp options	BGP のステータスと構成情報を表示します。このコマンドには複数のオプションがあります。詳細については、Cisco Nexus 3000 シリーズ コマンド リファレンスを参照してください。
show running-configuration bgp	現在実行中の BGP コンフィギュレーションを表示します。

BGP 統計情報の表示

BGP の統計情報を表示するには、次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
show bgp ip {unicast} [ip-address] flap-statistics [vrf vrf-name]	BGP ルートフラップの統計情報を表示します。これらの統計情報をクリアするには、 clear bgp flap-statistics コマンドを使用します。
show bgp sessions [vrf vrf-name]	すべてのピアの BGP セッションを表示します。これらの統計情報をクリアするには、 clear bgp sessions コマンドを使用します。
show bgp sessions [vrf vrf-name]	すべてのピアの BGP セッションを表示します。これらの統計情報をクリアするには、 clear bgp sessions コマンドを使用します。
show bgp statistics	BGP 統計情報を表示します。 次に例を示します。

BGP サマリ統計情報の表示

BGP 統計カウンタが、BGP サマリ統計を含む、BGP 通信のさまざまな側面について表示されます。 **show ip bgp summary** コマンドを使用して、BGP 統計情報を表示します。

```
switch# show ip bgp summary
BGP summary information for VRF default, address family IPv4 Unicast
BGP router identifier 1.1.1.1, local AS number 1
BGP table version is 3, IPv4 Unicast config peers 1, capable peers 1
0 network entries and 0 paths using 0 bytes of memory
BGP attribute entries [0/0], BGP AS path entries [0/0]
BGP community entries [0/0], BGP clusterlist entries [0/0]

Neighbor      V    AS MsgRcvd MsgSent   TblVer  InQ  OutQ Up/Down  State/PfxRcd
10.0.0.2      4     1   1375   1375       3    0    0 22:49:28 0
switch#
```

NXOS では、統計情報が 2 つのセクションに分かれて表示されます。

- グローバル BGP 統計情報
- スイッチのネイバーについて報告されるピア BGP 統計情報。

次に、グローバル BGP 統計情報を示します。

- ルーティング インスタンスと VRF 内のルーティングのタイプを含む VRF の BGP サマリ情報。この例では、デフォルトの VRF および IPv4 ユニキャストトラフィックの概要情報が表示されます。
- BGP ルータの IP アドレスおよびローカル自律システムの ID。この例では、ルータのアドレスは 192.0.2.1 です。
- BGP テーブルのバージョン、および BGP ピアと対応ピアのタイプと数。
- ネットワーク エントリとパスの数および消費されたメモリの量。
- 属性および自律システム パスのエントリの数とタイプ。
- BGP コミュニティとクラスタ リスト エントリの数。

ピア BGP 統計情報を次に示します。

表 22: **show bgp summary** フィールドと説明

フィールド	説明
Neighbor	ユニキャストルーティングテーブルに構成されるネイバーの IP アドレス。
V	使用するマルチプロトコル BGP のバージョン。
AS	ネイバーが属する自律システム。
MsgRcvd	ネイバーで受信されたメッセージ数。

フィールド	説明
MsgSent	ネイバーに送信されたメッセージ数。
TblVer	テーブルのバージョン番号。テーブルが変更されるたびに増分されます。
InQ	BGP 入力キュー内にあり、BGP による処理を待機している、ピアから受信したメッセージの数。 (注) NX-OS は、iOS とは異なるこのカウンタを使用します。InQ および OutQ カウンタに関する考慮事項 (277 ページ) を参照してください。
OutQ	BGP 出力キュー内で TCP へのハンドオフを待機しているピア宛てのメッセージの数。 (注) NX-OS は、iOS とは異なるこのカウンタを使用します。InQ および OutQ カウンタに関する考慮事項 (277 ページ) を参照してください。
アップ/ダウン(Up/Down)	ネイバーがアップまたはダウン状態になった時間。このフィールドは、State/PfxRcd フィールドと連動します。このフィールドが空の場合、ネイバーへの接続はアップ状態です。
State/PfxRcd	ネイバーの状態と、受信されたルートの数。このフィールドが空の場合、ネイバーはアップ状態です。[アップ/ダウン (Up/Down)] フィールドを調べて、ネイバーのアップタイムを確認します。

InQ および OutQ カウンタに関する考慮事項

NX-OS は、iOS-XE とは若干異なる方法で BGP InQ および OutQ パケット カウンタを使用します。NX-OS は、TCP 入力カウンタと TCP 出力カウンタがいっぱいになった場合にのみ、これらのカウンタを増やします。そのため、BGP InQ および OutQ のカウンタがゼロ値になることが多く、たとえ問題によって正常なパケット通信が妨げられていた場合でも同様になります。たとえば、BGP OutQ では、BGP がピアに正常にパケットを送信できない場合でも、ゼロを表示することがあります。BGP InQ カウンタと BGP OutQ カウンタを確認する場合は、ピア間の TCP 接続の送信キューと受信キューも確認することを推奨します。

例：

```
show sockets connection tcp | inc 179
```

State	Recv-Q	Send-Q	Local Address:Port	Peer Address:Port
..				
ESTAB	1756	1756	10.0.0.2:35320	10.0.0.1:179
...				

ベーシック BGP の設定例

次に、ベーシック BGP 設定の例を示します。

```
feature bgp
router bgp 64496
neighbor 192.0.2.1 remote-as 64496
address-family ipv4 unicast
next-hop-self
```

関連項目

BGP の関連項目は、次のとおりです。

- [Route Policy Manager の設定](#) (441 ページ)

次の作業

次の機能の詳細については、[高度な BGP の設定](#) (281 ページ) を参照してください。

- ピア テンプレート
- ルートの再配布
- ルート マップ

その他の参考資料

BGP の実装に関連する詳細情報については、次の項を参照してください。

関連資料

関連項目	マニュアル タイトル
BGP CLI コマンド	『Cisco Nexus 3000 Series Command Reference』

MIB

MIB	MIB のリンク
BGP4-MIB CISCO-BGP4-MIB	MIB を検索してダウンロードするには、次の MIB ロケータ に移動します。



第 11 章

高度な BGP の設定

この章では、Cisco NX-OS スイッチでボーダー ゲートウェイ プロトコル (BGP) の拡張機能を設定する方法について説明します。

この章は、次の項で構成されています。

- [拡張 BGP の概要 \(281 ページ\)](#)
- [拡張 BGP の前提条件 \(292 ページ\)](#)
- [拡張 BGP に関する注意事項と制限事項 \(292 ページ\)](#)
- [BGP のデフォルト設定 \(295 ページ\)](#)
- [高度な BGP の設定 \(295 ページ\)](#)
- [独自の自律システムを含む自律システム パスの設定 \(318 ページ\)](#)
- [BGP 属性フィルタリングの設定とエラー処理 \(339 ページ\)](#)
- [BGP グレースフル シャットダウン \(342 ページ\)](#)
- [グレースフル リスタートの設定 \(356 ページ\)](#)
- [拡張 BGP の設定の確認 \(358 ページ\)](#)
- [BGP 統計情報の表示 \(360 ページ\)](#)
- [BGP 向け BFD の構成例 \(361 ページ\)](#)
- [関連項目 \(361 ページ\)](#)
- [その他の参考資料 \(361 ページ\)](#)

拡張 BGP の概要

BGP は、組織または自律システム間のループフリー ルーティングを実現する、インタードメインルーティングプロトコルです。Cisco NX-OS は BGP バージョン 4 をサポートします。BGP v4 に組み込まれているマルチプロトコル拡張機能を使用すると、IP ルートおよび複数のレイヤ 3 プロトコル アドレス ファミリに関するルーティング情報を BGP に伝送させることができます。BGP では、他の BGP 対応スイッチ (BGP ピア) との間で TCP セッションを確立するために、信頼できるトランスポート プロトコルとして TCP を使用します。外部組織に接続するときには、ルータが外部 BGP (eBGP) ピアリングセッションを作成します。同じ組織内の BGP ピアは、内部 BGP (iBGP) ピアリングセッションを通じて、ルーティング情報を交換します。

ピア テンプレート

BGP ピア テンプレートを使用すると、類似した BGP ピア間で再利用できる共通のコンフィギュレーションブロックを作成できます。各ブロックでは、ピアに継承させる一連の属性を定義できます。継承した属性の一部を上書きすることもできるので、非常に柔軟性のある方法で、繰り返しの多い BGP の設定を簡素化できます。

Cisco NX-OS は、3 種類のピア テンプレートを実装します。

- **peer-session** テンプレートでは、トランスポートの詳細、ピアのリモート自律システム番号、セッションタイマーなど、BGP セッション属性を定義します。peer-session テンプレートは、別の peer-session テンプレートから属性を継承することもできます（ローカル定義の属性によって、継承した peer-session 属性は上書きされます）。
- **peer-policy** テンプレートでは、着信ポリシー、発信ポリシー、フィルタ リスト、プレフィックス リストを含め、アドレス ファミリに依存する、ピアのポリシー要素を定義します。peer-policy テンプレートは、一連の peer-policy テンプレートからの継承が可能です。Cisco NX-OS は、継承設定のプリファレンス値で指定された順序で、これらの peer-policy テンプレート进行评估します。最小値が大きい値よりも優先されます。
- **peer** テンプレートは、peer-session および peer-policy テンプレートからの継承が可能であり、ピアの定義を簡素化できます。peer テンプレートの使用は必須ではありませんが、peer テンプレートによって再利用可能なコンフィギュレーションブロックが得られるので、BGP の設定を簡素化できます。

認証

BGP ネイバー セッションに認証を設定できます。この認証方式によって、ネイバーに送られる各 TCP セグメントに MD5 認証ダイジェストが追加され、不正なメッセージや TCP セキュリティ アタックから BGP が保護されます。



(注) MD5 パスワードは、BGP ピア間で一致させる必要があります。

ルート ポリシーおよび BGP セッションのリセット

BGP ピアにルート ポリシーを関連付けることができます。ルート ポリシーではルート マップを使用して、BGP が認識するルートを制御または変更します。着信または発信ルート アップデートに関するルート ポリシーを設定できます。ルート ポリシーはプレフィックス、AS_path 属性など、さまざまな条件で一致が必要であり、ルートを選択して受け付けるかまたは拒否します。ルート ポリシーでパス属性を変更することもできます。

BGP ピアに適用するルート ポリシーを変更する場合は、そのピアの BGP セッションをリセットする必要があります。Cisco NX-OS は、BGP ピアリングセッションのリセット方法として、次の 3 種類をサポートします。

- **ハードリセット**：ハードリセットでは、指定されたピアリングセッションが TCP 接続を含めて切断され、指定のピアからのルートが削除されます。このオプションを使用すると、BGP ネットワーク上のパケットフローが中断します。ハードリセットは、デフォルトでディセーブルです。
- **ソフト再構成着信**：ソフト再構成着信によって、セッションをリセットすることなく、指定されたピアのルーティングアップデートが開始されます。このオプションを使用できるのは、着信ルートポリシーを変更する場合です。ソフト再構成着信の場合、ピアから受け取ったすべてのルートのコピーを保存したあとで、着信ルートポリシーを介してルートが処理されます。着信ルートポリシーを変更する場合、Cisco NX-OS は変更された着信ルートポリシーを介して保存ルートを渡し、既存のピアリングセッションを切断することなく、ルートテーブルをアップデートします。ソフト再構成着信の場合、まだフィルタリングされていない BGP ルートの保存に、大量のメモリリソースを使用する可能性があります。ソフト再構成着信は、デフォルトでディセーブルです。
- **ルートリフレッシュ**：ルートリフレッシュでは、着信ルートポリシーの変更時に、サポートするピアにルートリフレッシュ要求を送信することによって、着信ルーティングテーブルがダイナミックにアップデートされます。リモート BGP ピアは新しいルートコピーで応答し、ローカル BGP スピーカが変更されたルートポリシーでそれを処理します。Cisco NX-OS はピアに、プレフィックスの発信ルートリフレッシュを自動的に送信します。
- BGP ピアは、BGP ピアセッションの確立時に、BGP 機能ネゴシエーションの一部として、ルートリフレッシュ機能をアドバタイズします。ルートリフレッシュは優先オプションであり、デフォルトでイネーブルです。



(注) BGP はさらに、ルート再配布、ルート集約、ルートダンプニングなどの機能にルートマップを使用します。ルートマップの詳細については、[Route Policy Manager の設定 \(441 ページ\)](#) を参照してください。

eBGP

eBGP を使用すると、異なる AS からの BGP ピアを接続し、ルーティングアップデートを交換できます。外部ネットワークへの接続によって、自分のネットワークから他のネットワークへ、またインターネットを介して、トラフィックを転送できます。

eBGP ピアリングセッションの確立には、ループバックインターフェイスを使用します。ループバックインターフェイスは、インターフェイスフラップが発生する可能性が小さいからです。インターフェイスフラップが発生するのは、障害またはメンテナンスが原因で、インターフェイスが管理上アップまたはダウンになったときです。マルチホップ、高速外部フォールオーバー、AS パス属性のサイズ制限については、「[eBGP の構成](#)」のセクションを参照してください。

eBGP ネクストホップ変更なし

外部 BGP (eBGP) セッションでは、デフォルトで、デバイスがルートの送信時に BGP ルートのネクストホップ属性を（自身のアドレスに）変更します。eBGP ネクストホップ非変更機能が設定されている場合、BGP はネクストホップ属性を変更せずに eBGP マルチホップピアにルートを送信します。ネクストホップ属性は変更されません。BGP ネクストホップ非変更機能により、ネットワークの設計および移行を柔軟に実効できます。これは、マルチホップとして設定された eBGP ピア間だけで使用できます。

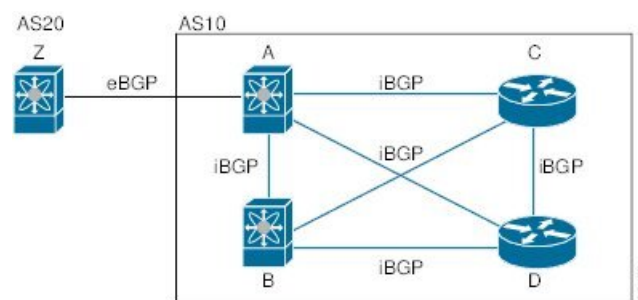
たとえば、デバイス A、B、C 間の eBGP 接続を持つネットワークを考えてみます。デバイス A がデバイス B に 100 のプレフィックスをアナウンスするとします。デバイス B にはデバイス C へのアウトバウンドルートマップが構成され、`match ip prefix list` と `set ip next-hop` がルートマップで設定されています。デバイス B は、プレフィックスリストに一致するルートに対してだけ、変更されていないネクストホップアドレスを伝播します。他のプレフィックスについては、自身をネクストホップアドレスとします。

iBGP

内部 BGP (iBGP) を使用すると、同じ自律システム内の BGP ピアを接続できます。iBGP はマルチホーム BGP ネットワーク（同じ外部自律システムに対して複数の接続があるネットワーク）に使用できます。

次の図に、より大きな BGP ネットワークの中の iBGP ネットワークを示します。

図 26: iBGP ネットワーク



iBGP ネットワークはフルメッシュです。各 iBGP ピアは、ネットワーク ループを防止するために、他のすべての iBGP ピアに対して直接接続されています。



(注) iBGP ネットワークでは別個のインテリア ゲートウェイ プロトコルを設定する必要があります。

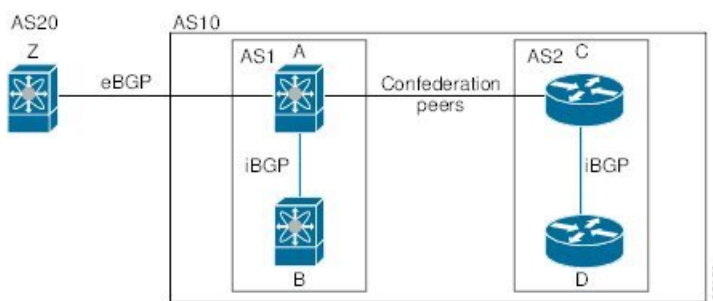
AS 連合

フルメッシュの iBGP ネットワークは、iBGP ピア数が増えるにしたがって複雑になります。自律システムを複数のサブ自律システムに分割し、それを 1 つの連合としてまとめることによっ

て、iBGP メッシュを緩和できます。連合は、同じ自律システム番号を使用して外部ネットワークと通信する、iBGP ピアからなるグループです。各サブ AS はその中ではフルメッシュであり、同じ連合内の他のサブ AS に対する少数の接続があります。

図には、BGP ネットワークが2つのサブ自律システムと1つのコンフェデレーションに分けられて表示されています。

図 27: AS 連合



この例では、AS10 が 2 つの AS (AS1 および AS2) に分割されています。各サブ AS はフルメッシュですが、サブ AS 間のリンクは 1 つだけです。AS コンフェデレーションを使用することによって、図「AS 連合」のフルメッシュ自律システムに比べて、リンク数を少なくできます。

ルート リフレクタ

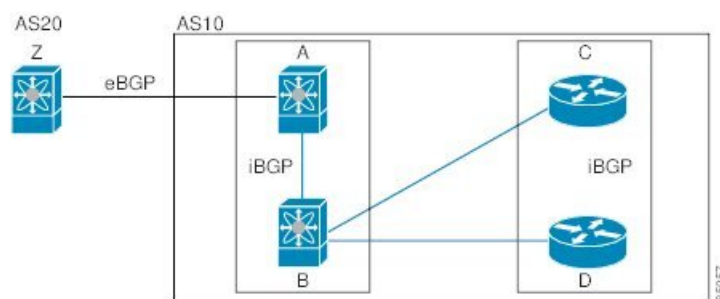
ルート リフレクタ構成を使用することによって、iBGP メッシュを緩和することもできます。ルート リフレクタは学習したルートをネイバーに渡すことで、すべての iBGP ピアをフルメッシュにしなくてもすむようにします。

図 iBGP ネットワークに、メッシュの iBGP スピーカーを 4 つ使用する (ルータ A、B、C、D)、単純な iBGP 構成を示します。ルート リフレクタを使用しなかった場合、外部ネイバーからルートを受け取ったルータ A は、3 つの iBGP ネイバーのすべてにルートをアドバタイズします。

ある iBGP ピアをルート リフレクタとして設定すると、そのピアが iBGP で学習したルートを一連の iBGP ネイバーに渡す役割を担います。

次の図では、ルータ B がルート リフレクタです。ルート リフレクタは、ルータ A からアドバタイズされたルートを受信すると、ルータ C と D へのルートをアドバタイズ (リフレクト) します。ルータ A は、ルータ C と D の両方にアドバタイズする必要がなくなります。

図 28: ルート リフレクタ



ルート リフレクタおよびそのクライアント ピアは、クラスタを形成します。ルート リフレクタのクライアント ピアとして動作するように、すべての iBGP ピアを設定する必要はありません。ただし、完全な BGP アップデートがすべてのピアに届くように、非クライアント ピアはフルメッシュとして設定する必要があります。

機能ネゴシエーション

BGP スピーカは機能ネゴシエーション機能を使用することによって、ピアがサポートする BGP 拡張機能について学習できます。機能ネゴシエーションによって、リンクの両側の BGP ピアがサポートする機能セットだけを BGP に使用させることができます。

BGP ピアが機能ネゴシエーションをサポートしない場合で、なおかつアドレスファミリが IPv4 として設定されている場合、Cisco NX-OS は機能ネゴシエーションを行わずに、ピアとの新規セッションを試みます。

ルート ダンプニング

ルート ダンプニングは、インターネットワーク上でのフラッピング ルートの伝搬を最小限に抑える BGP 機能です。ルート フラップが発生するのは、使用可能ステートと使用不能ステートが短時間で次々切り替わる場合です。

AS1、AS2、および AS3 という 3 つの BGP 自律システムからなるネットワークの場合について考えてみます。AS1 のルートがフラップした（使用不能になった）とします。ルート ダンプニングを使用しない場合、AS1 は AS2 に回収メッセージを送信します。AS2 は AS3 にその回収メッセージを伝達します。フラッピング ルートが再び発生すると、AS1 から AS2 にアドバタイズメント メッセージを送信し、AS2 は AS3 にそのアドバタイズメントを送信します。ルートの使用不能と使用可能が繰り返されると、AS1 は多数の回収メッセージおよびアドバタイズメント メッセージを送信することになり、それが他の自律システムに伝播します。

ルート ダンプニングによって、フラッピングを最小限に抑えることができます。ルート フラップが発生したとします。（ルート ダンプニングがイネーブルの）AS2 がルートにペナルティとして 1000 を割り当てます。AS2 は引き続き、ネイバーにルートの状態をアドバタイズします。ルート フラップが発生するたびに、AS2 がペナルティ値を追加します。ルート フラップが頻繁に発生して、ペナルティが設定可能な抑制限度を超えると、AS2 はフラップ回数に関係なく、ルートのアドバタイズを中止します。その結果、ルートが減衰（ダンプニング）します。

ルートに与えられたペナルティは、再使用限度に達するまで減衰します。その時点で、AS2 は再びルートをアドバタイズします。再使用限度が 50% になると、AS2 はそのルートのダンプニング情報を削除します。



- (注) ルートダンプニングがイネーブルの場合は、ピアのリセットによってルートが回収されても、リセット中の BGP にはペナルティは適用されません。

ロードシェアリングおよびマルチパス

BGP はルーティングテーブルに、同じ宛先プレフィックスに到達する複数の等コスト eBGP または iBGP パスを組み込むことができます。その場合、宛先プレフィックスへのトラフィックは、組み込まれたすべてのパス間で共有されます。

BGP ベストパス アルゴリズムでは、次の属性が同じ場合に、等コストパスと見なされます。

- 重量
- ローカルプリファレンス
- AS_path
- オリジンコード
- Multi-Exit Discriminator (MED)
- BGP ネクストホップまでの IGP コスト

BGP はこれら複数のパスの中から、ベストパスとして 1 つだけ選択し、そのパスを BGP ピアにアドバタイズします。



- (注) 異なる AS 連合から受け取ったパスは、外部 AS_path 値およびその他の属性が同じ場合に、等コストパスと見なされます。



- (注) iBGP マルチパスに関してルートリフレクタを設定すると、ルートリフレクタが、選択されたベストパスをピアにアドバタイズします。そのパスのネクストホップは変更されません。

ルート集約

集約アドレスを設定できます。ルート集約を使用すると、固有性の強い一連のアドレスをすべての固有アドレスを代表する 1 つのアドレスに置き換えることによって、ルートテーブルを簡素化できます。たとえば、10.1.1.0/24、10.1.2.0/24、および 10.1.3.0/24 という固有性の強い 3 つのアドレスを 1 つの集約アドレス 10.1.0.0/16 に置き換えることができます。

アドバタイズされるルートが少なくなるように、BGP ルート テーブル内には集約プレフィックスが存在します。



(注) Cisco NX-OS は、自動ルート集約をサポートしていません。

ルート集約はフォワーディンググループにつながる可能性があります。この問題を回避するために、集約アドレスのアドバタイズメントを生成するときに、BGP はローカルルーティングテーブルに、その集約アドレスに対応するサマリー廃棄ルートを自動的に組み込みます。BGP はサマリー廃棄のアドミニストレーティブ ディスタンスを 220 に設定し、ルート タイプを廃棄に設定します。BGP はネクストホップ解決に廃棄ルートを使用しません。

BGP 条件付きアドバタイズメント

BGP 条件付きアドバタイズメントを使用すると、プレフィックスが BGP テーブルに存在するかどうかに基づいてルートをアドバタイズまたは撤回するように BGP を設定できます。この機能は、たとえば、BGP でいずれかのプロバイダーにプレフィックスをアドバタイズするようなマルチホーム ネットワーク（他のプロバイダーからの情報が存在しない場合のみ）で便利です。

AS1、AS2、および AS3 という 3 つの BGP 自律システムからなるネットワークの例について考えてみます。この例で、AS1 と AS3 はインターネットと AS2 に接続しています。条件付きアドバタイズメントを使用しない場合、AS2 はすべてのルートを AS1 と AS3 の両方にプロパゲートします。条件付きアドバタイズメントを使用すれば、AS1 からのルートが存在しない場合のみ（たとえば AS1 へのリンクがダウンした場合）、特定のルートを AS3 にアドバタイズするように AS2 を設定できます。

BGP 条件付きアドバタイズメントでは、設定されたルート マップに一致する各ルートに、存在テストまたは非存在テストが追加されます。「[BGP 条件付きアドバタイズメントの設定](#)」を参照してください。

BGP ネクスト ホップ アドレス トラッキング

BGP は、インストールされているルートのネクスト ホップ アドレスをモニタして、ネクスト ホップの到達可能性の確認、および BGP ベストパスの選択、インストール、検証を行います。BGP ネクストホップアドレスのトラッキングを行うと、ネクストホップの到達可能性に影響を及ぼす可能性のあるルート変更が RIB で行われたときに確認プロセスをトリガーすることで、このようなネクストホップ到達可能性テストの速度が向上します。

ネクストホップ情報が変更されると、BGP は RIB から通知を受信します（イベント駆動型の通知）。BGP は、次のいずれかのイベントが発生したときに通知を受けます。

- ネクスト ホップが到達不能になった。
- ネクスト ホップが到達可能になった。
- ネクスト ホップへの完全な繰り返し IGP メトリックが変更される。

- ファースト ホップの IP アドレスまたはファースト ホップのインターフェイスが変更される。
- ネクスト ホップが接続された。
- ネクスト ホップが接続解除された。
- ネクスト ホップがローカル アドレスになった。
- ネクスト ホップが非ローカル アドレスになった。



(注) 到達可能性および再帰メトリック イベントは、最適パスの再計算をトリガーします。

RIB からのイベント通知は、クリティカルおよび非クリティカルとして分類されます。クリティカルおよび非クリティカルイベントの通知は、別々のバッチで送信されます。ただし、非クリティカルイベントが保留中であり、クリティカルイベントを読み込む要求がある場合は、非クリティカルイベントがクリティカルイベントとともに送信されます。

- クリティカルイベントは、ネクスト ホップの到達可能性（到達可能と到達不能）、接続性（接続と非接続）、および局在性（ローカルと非ローカル）に関係があります。これらのイベントの通知は遅延しません。
- 非クリティカルイベントには、IGP メトリックの変更のみが含まれます。

詳細については、「BGP ネクスト ホップ アドレス トラッキングの設定」を参照してください。

Site of Origin

発信元サイトは、マルチホーム VPN サイトがある場合にルーティング ループを防止します。同じサイトから学習したルートには、同じサイトへのすべての PE-CE リンクの PE で構成されている、同じ `site-of-origin` 値を使用してタグ付けされます。特定の `Site-of-Origin` 値を持つルートが、PE-CE リンクに構成されている同じ `Site-of-Origin` 値を持つ CE に再アドバタイズされることはありません。このプロセスにより、CE ルータは同じサイトから発信されたルートを再学習できなくなります。BGP と EIGRP は、ループを防ぐために `Site of Origin` を使用します。

サイトの自律システム番号 (ASN) をプロバイダの ASN でオーバーライドできます。この機能は、ルートの発信元サイトを識別し、VPN 内のルータ間でのルーティング ループを防ぐために、発信元サイトと併用することがよくあります。

ルートの再配布

スタティック ルートまたは他のプロトコルからのルートを再配布するように、BGP を設定できます。再配布を指定してルート ポリシーを設定し、BGP に渡されるルートを制御します。ルート ポリシーを使用すると、宛先、送信元プロトコル、ルート タイプ、ルート タグなどの

属性に基づいて、ルートをフィルタリングできます。詳細については、[Route Policy Manager の設定（441 ページ）](#)を参照してください。

ラベル付きユニキャストルートとラベルなしユニキャストルート

リリース7.0(3)I7(6)では、SAFI-1（ラベルなしユニキャスト）およびSAFI-4（ラベル付きユニキャストルーティング）が単一セッションのIPv4 BGPでサポートされるようになりました。詳細については、『Cisco Nexus 9000 Series NX-OS Label Switching Configuration Guide, Release 7.x』を参照してください。

BFD

この機能では、双方向フォワーディング検出（BFD）をサポートします。BFDは、転送パスの障害を高速で検出することを目的にした検出プロトコルです。BFDは2台の隣接デバイス間のサブセカンド障害を検出し、BFDの負荷の一部を、サポートされるモジュール上のデータプレーンに分散できるため、プロトコル hello メッセージよりもCPUを使いません。

BGPのBFDはeBGPシングルホップピアおよびiBGPシングルホップピアでサポートされます。BFDを使用しているiBGPシングルホップピアの場合、ネイバーコンフィギュレーションモードでupdate-sourceオプションを構成する必要があります。その他のiBGPピアまたはマルチホップeBGPピアではBFDはサポートされていません。

Cisco NX-OS リリース 9.3(3)以降では、BGPのBFDはBGP IPv4とIPv6のプレフィックスピアでもサポートされます。このサポートにより、BGPはマルチホップBFDを使用できるようになり、BGPコンバージェンス時間が改善されます。プレフィックスピアでは、シングルホップBGPとマルチホップBGPの両方がサポートされます。

BFDは以下のタイプのインターフェイスでサポートされます。

- レイヤ3物理およびサブインターフェイス
- レイヤ3ポートチャネルおよびサブインターフェイス
- スイッチ仮想インターフェイス（SVI）

BGPのBFDは、ポートチャネル上の認証またはリンクごとのBFDセッションはサポートしません。

詳細については、「[双方向フォワーディング検出の構成](#)」を参照してください。

BGP の調整

BGP タイマーによって、さらにベストパスアルゴリズムの調整によって、BGPのデフォルト動作を変更できます。

BGP タイマー

BGP では、ネイバーセッションおよびグローバルプロトコルイベントにさまざまなタイプのタイマーを使用します。確立されたセッションごとに、最低限2つのタイマーがあります。定期的にキープアライブメッセージを送信するためのタイマー、さらに想定時間内にピアのキープアライブが届かなかった場合に、セッションをタイムアウトさせるためのタイマーです。また、個々の機能を処理するための、その他のタイマーがあります。これらのタイマーは通常、秒単位で設定します。タイマーには、異なる BGP ピアで同じタイマーが異なるタイミングでスタートするように、ランダム アジャストメントが組み込まれています。

ベストパス アルゴリズムの調整

オプションの構成パラメータによって、ベストパスアルゴリズムのデフォルト動作を変更できます。たとえば、アルゴリズムでの Multi-Exit Discriminator 属性およびルータ ID の扱い方を変更できます。

マルチプロトコル BGP

Cisco NX-OS の BGP は、複数のアドレス ファミリをサポートします。マルチプロトコル BGP (MP-BGP) は、アドレス ファミリに応じて異なるルート セットを伝送します。BGP ではたとえば、IPv4 ユニキャストルーティング用のルートと IPv4 マルチキャストルーティング用のルート セットを伝送できます。IP マルチキャスト ネットワークではリバース パス フォワーディング (RPF) のチェックに MP-BGP を使用できます。



(注) マルチキャスト BGP ではマルチキャスト状態情報をプロパゲートしないため、プロトコル独立マルチキャスト (PIM) などのマルチキャスト プロトコルが必要です。

マルチプロトコル BGP 設定をサポートするには、ルータ アドレスファミリおよびネイバー アドレス ファミリの各コンフィギュレーション モードを使用します。MP-BGP では、設定されたアドレス ファミリごとに別々の RIB が維持されます (ユニキャスト RIB と、BGP のマルチキャスト RIB など)。

マルチプロトコル BGP ネットワークは下位互換性がありますが、マルチプロトコル拡張機能をサポートしない BGP ピアは、アドレスファミリ ID 情報など、マルチプロトコル拡張機能が伝送するルーティング情報を転送できません。

BGP モニタリング プロトコル

BGP モニタリングプロトコル (BMP) は、BGP アップデートとピア統計情報をモニタします。BGP は Cisco Nexus 3000 シリーズ スイッチすべてでサポートされます。

このプロトコルを使用して、BGP スピーカーは外部 BMP サーバに接続し、BGP イベントに関する情報を送信します。1つの BGP スピーカーに最大 2 つの BMP サーバを設定でき、各 BGP ピアは BMP サーバのすべてまたはサブセットによるモニタリング用に設定できます。BGP スピーカーは、BMP サーバからの情報を受け入れません。

RFC 5549

Cisco NX-OS リリース 6.0(2)U4(1)以降、BGP は RFC 5549 をサポートしており、IPv4 プレフィックスを IPv6 ネクスト ホップで伝送できます。BGP はすべてのホップで実行され、すべてのルータが IPv4 および IPv6 トラフィックを転送できるため、各ルータ間で IPv6 トンネルをサポートする必要はありません。BGP は、IPv6 ルートを介した IPv4 を Unicast Route Information Base (URIB) にインストールします。

拡張 BGP の前提条件

BGP を使用するには、次の前提条件を満たしている必要があります。

- BGP 機能を有効にする必要があります ([BGP 機能のイネーブル化](#)のセクションを参照)。
- システムに有効なルータ ID を設定しておく必要があります。
- Regional Internet Registry (RIR) によって割り当てられたか、またはローカル管理の AS 番号を取得しておく必要があります。
- ネイバー関係を作成しようとするピアに到達可能でなければなりません (Interior Gateway Protocol (IGP)、スタティック ルート、直接接続など)。
- BGP セッションを確立するネイバー環境で、アドレス ファミリを明示的に設定する必要があります。

拡張 BGP に関する注意事項と制限事項

BGP 設定時の注意事項および制約事項は、次のとおりです。

- プレフィックス ピアリングは、パッシブ TCP モードでのみ動作します。ピア アドレスがプレフィックス内にある場合、リモート ピアからの着信接続を受け入れます。
- ダイナミック AS 番号プレフィックス ピア構成は、BGP テンプレートから継承した個々の AS 番号の構成よりも優先します。
- AS 連合でプレフィックス ピアにダイナミック AS 番号を設定した場合、BGP はローカル連合の AS 番号のみでセッションを確立します。
- ダイナミック AS 番号プレフィックス ピアで作成された BGP セッションは、設定済みの eBGP マルチホップ存続可能時間 (TTL) 値や直接接続ピアに対するディセーブル済みのチェックを無視します。
- ルータ ID の自動変更およびセッション フラップを避けるために、BGP 用のルータ ID を設定します。
- ピアごとに最大プレフィックス構成オプションを使用し、受信するルート数および使用するシステム リソース数を制限してください。

- `update-source` を設定し、eBGP マルチホップセッションでセッションを確立します。
- 再配布を設定する場合は、BGP ルート マップを指定します。
- VRF 内で BGP ルータ ID を設定します。
- キープアライブおよびホールドタイマーの値を小さくすると、ネットワークでセッションフラップが発生する可能性があります。
- VLAN には、次の注意事項および制約事項が **remove-private-as** コマンドに適用されます。
 - デバイスのローカル AS 番号がプライベート AS 番号である場合、同じデバイス上の他のネイバーに対しては **remove-private-as** 構成コマンドを使用できません。回避策として、パブリック ローカル AS 番号を持つ各ネイバーで **local-as** コマンドを使用できます。
 - デバイスの実際の AS 番号がプライベート AS 番号で、パブリックな **local-as** 番号を持つネイバーに対して **remove-private-as all** コマンドが構成されている場合は、**local-as number [no-prepend [replace-as]]** コマンドを使用して、実際のプライベート AS 番号が AS パスに付加されていないことを確認します。
 - デバイスの実際の AS 番号がパブリック AS 番号であり、ネイバーに対して **remove-private-as all** コマンドが構成されている場合は、同じネイバーに対してプライベート **local-as** 番号を構成できません。回避策として、既存の構成を削除して続行する必要があります。
 - **remove-private-as** コマンドでは、AS パスにパブリックとプライベートの両方の AS 番号が含まれている場合でも、AS パスからプライベート AS 番号が削除されます。
 - **remove-private-as** コマンドでは、AS パスにプライベート AS 番号のみが含まれている場合でも、AS パスからプライベート AS 番号が削除されます。このコマンドは eBGP ピアのみに適用され、その場合、eBGP ピアではローカル デバイスの AS 番号が AS パスに付加されるため、長さ 0 の AS パスにはなることはありません。
 - **remove-private-as** コマンドでは、AS パスでコンフェデレーションセグメントの前にプライベート AS 番号が出現する場合でも、プライベート AS 番号が削除されます。
 - AS パスからプライベート AS 番号を削除すると、送信されるプレフィックスのパス長が減少します。AS パス長は BGP 最良パス選択の重要な要素であるため、パス長を保持するために必要な場合があります。**replace-as** キーワードは、削除されたすべての AS 番号をローカルルータの AS 番号で置き換えることでパス長が維持されるようにします。
- Cisco NX-OS リリース 7.0(3)I7(3) および 7.0(3)I7(4) を実行している Cisco Nexus 3000 シリーズ スイッチでは、MD5 認証を持つフラグメント化された BGP アップデート パケットが受信時に正しくリアセンブルされない場合があります。この状況により、BGP セッションが安定した状態で起動しなくなる可能性があります。この状態が発生すると、次のようなエラー メッセージが表示されます。

```
%KERN-3-SYSTEM_MSG: [322896.818155] TCP: MD5 Hash failed for (10.1.1.1, 179) -> (10.2.2.2, 29862) - kernel
```

```
%KERN-3-SYSTEM_MSG: [322897.020543] TCP: MD5 Hash failed for (10.1.1.1,
179)->(10.2.2.2, 29862) - kernel
```

この状況を防ぐには、次のいずれかを実行します。

- BGP MD5 認証を無効にします。
 - パスの MTU と一致するように発信インターフェイスの MTU 値を設定し、BGP パケットのフラグメンテーションを回避します。
- Cisco NX-OS リリース 9.3(3) 以降では、BGP の BFD は BGP IPv4 と IPv6 のプレフィックス ピアでサポートされます。
 - Cisco NX-OS リリース 9.3(3) 以降、BGP プレフィックス ピアはグレースフル リスタートをサポートします。BGP プレフィックス ピアのタイムアウト値（秒単位）を設定するには、ルータ構成モードで **timers prefix-peer-timeout** コマンドを使用します。デフォルト値は 90 秒です。
 - IPv4 および IPv6 アドレス ファミリの IPv6 リンクローカルを介した BGP インターフェイス ピアリングには、次の注意事項と制限事項が適用されます。
 - この機能は、複数のインターフェイス間で同じリンクローカルアドレスを設定することをサポートしていません。
 - この機能は、論理インターフェイス（ループバック）ではサポートされていません。イーサネット インターフェイス、ポートチャネル インターフェイス、サブインターフェイス、およびブレイクアウト インターフェイスのみがサポートされます。
 - Cisco NX-OS リリース 9.3(6) 以降では、VLAN インターフェイスがサポートされます。
 - この機能は、リンクローカルアドレスを持つ IPv6 対応インターフェイスでのみサポートされます。
 - この機能は、設定されたプレフィックス ピアとインターフェイスのリモート ピアが同じ場合はサポートされません。
 - 次のコマンドはネイバーインターフェイス コンフィギュレーションモードではサポートされていません。
 - **disable-connected-check**
 - **maximum-peers**
 - **update-source**
 - **ebgp-multihop**
 - BFD マルチホップおよび次のコマンドは、IPv4 および IPv6 アドレス ファミリの IPv6 リンクローカルを介した BGP インターフェイス ピアリングではサポートされません。
 - **bfd-multihop**
 - **bfd multihop interval**
 - **bfd multihop authentication**

- BGPでは、ルートアドバタイズメントのコンバージェンス時間が短縮されます。ルートアドバタイズメント (RA) リンクレベルプロトコルの検出を高速化するには、IPv4 および IPv6 アドレスファミリの IPv6 リンクローカル経由 BGP インターフェイスピアリングを使用する各 IPv6 対応インターフェイスで次のコマンドを入力します。

```
interface Ethernet port/slot
ipv6 nd ra-interval 4 min 3
ipv6 nd ra-lifetime 10
```

BGP のデフォルト設定

次の表に、BGP パラメータのデフォルト設定値を示します。

表 23: デフォルトの BGP パラメータ

パラメータ	デフォルト
BGP 機能	無効
キープアライブ インターバル	60 秒
ホールド タイマー	180 秒

高度な BGP の設定



(注) Cisco IOS の CLI に慣れている場合、この機能に対応する Cisco NX-OS コマンドは通常使用する Cisco IOS コマンドと異なる場合がありますので注意してください。

インターフェイスでの IP 転送の有効化

RFC 5549 を使用するには、少なくとも 1 つの IPv4 アドレスを設定する必要があります。IPv4 アドレスを構成しない場合は、RFC 5549 を使用するように IP 転送機能を有効にする必要があります。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	interface type slot/port 例 : <pre>switch(config)# interface ethernet 1/2 switch(config-if)#</pre>	インターフェイス設定モードを開始します。
ステップ 3	ip forward 例 : <pre>switch(config-if)# ip forward switch(config-if)#</pre>	インターフェイスに IP アドレスが設定されていない場合でも、そのインターフェイスで IPv4 トラフィックを許可します。

例

次の例は、インターフェイスで IP 転送機能にを有効にする方法を示しています。

```
switch# configure terminal
switch(config)# interface ethernet 1/2
switch(config-if)# ip forward
```

BGP セッション テンプレートの設定

BGP セッション テンプレートを使用すると、類似した設定が必要な複数の BGP ピアで、BGP の設定を簡素化できます。BGP テンプレートによって、共通のコンフィギュレーション ブロックを再利用できます。先に BGP テンプレートを設定し、その後で BGP ピアにテンプレートを適用します。

BGP セッション テンプレートでは、継承、パスワード、タイマー、セキュリティなどのセッション属性を設定できます。

peer-session テンプレートは、別の peer-session テンプレートからの継承が可能です。第 3 のテンプレートから継承するように第 2 テンプレートを設定できます。さらに最初のテンプレートもこの第 3 のテンプレートから継承させることができます。この間接継承を続けることができる peer-session テンプレートの数は、最大 7 つです。

ネイバーに設定した属性は、ネイバーが BGP テンプレートから継承した属性よりも優先されます。

始める前に

BGP 機能を有効にしていることを確認します（[BGP 機能のイネーブル化](#)のセクションを参照してください）。

テンプレートを編集するときには、ピアまたはテンプレートのレベルで **no** 形式のコマンドを使用すると、テンプレートの設定を明示的に上書きできます。属性をデフォルトの状態にリセットするには、**default** 形式のコマンドを使用する必要があります。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例： switch# configure terminal switch(config)#	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	router bgp autonomous-system-number 例： switch(config)# router bgp 65536 switch(config-router)#	BGP を有効にして、ローカル BGP スピーカに自律システム番号を割り当てます。
ステップ 3	template peer-session template-name 例： switch(config-router)# template peer-session BaseSession switch(config-router-stmp)#	peer-session テンプレート コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 4	(任意) password number password 例： switch(config-router-stmp)# password 0 test	ネイバーにクリアテキストのパスワード「test」を追加します。パスワードは 3DES（タイプ 3 暗号形式）で保存および表示されます。
ステップ 5	(任意) timers keepalive hold 例： switch(config-router-stmp)# timers 30 90	peer-session テンプレートに BGP キープアライブおよびホールドタイマー値を追加します。 デフォルトのキープアライブインターバルは 60 です。デフォルトのホールドタイムは 180 です。
ステップ 6	exit 例： switch(config-router-stmp)# exit switch(config-router)#	peer-session テンプレート コンフィギュレーション モードを終了します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 7	neighbor ip-address remote-as as-number 例 : <pre>switch(config-router)# neighbor 192.168.1.2 remote-as 65536 switch(config-router-neighbor)#</pre>	BGP ルーティング用のネイバー コンフィギュレーションモードを開始し、ネイバー IP アドレスを設定します。
ステップ 8	inherit peer-session template-name 例 : <pre>switch(config-router-neighbor)# inherit peer-session BaseSession switch(config-router-neighbor)</pre>	ピアに peer-session テンプレートを適用します。
ステップ 9	(任意) description text 例 : <pre>switch(config-router-neighbor)# description Peer Router A switch(config-router-neighbor)</pre>	ネイバーの説明を追加します。
ステップ 10	(任意) show bgp peer-session template-name 例 : <pre>switch(config-router-neighbor)# show bgp peer-session BaseSession</pre>	peer-policy テンプレートを表示します。
ステップ 11	(任意) copy running-config startup-config 例 : <pre>switch(config-router-neighbor)# copy running-config startup-config</pre>	この設定変更を保存します。

例

show bgp neighbor コマンドを実行して、適用されたテンプレートを確認します。テンプレートで利用できるすべてのコマンドの詳細については、[Cisco Nexus 3000 シリーズ コマンド リファレンス](#)を参照してください。

BGP peer-session テンプレートを設定して、BGP ピアに適用する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# router bgp 65536
switch(config-router)# template peer-session BaseSession
switch(config-router-stmp)# timers 30 90
switch(config-router-stmp)# exit
switch(config-router)# neighbor 192.168.1.2 remote-as 65536
switch(config-router-neighbor)# inherit peer-session BaseSession
switch(config-router-neighbor)# description Peer Router A
switch(config-router-neighbor)# address-family ipv4 unicast
switch(config-router-neighbor)# copy running-config startup-config
```

BGP peer-policy テンプレートの設定

peer-policy テンプレートを設定すると、特定のアドレス ファミリに対応する属性を定義できます。各 peer-policy テンプレートにプリファレンスを割り当て、指定した順序でテンプレートが継承されるようにします。ネイバー アドレス ファミリでは最大 5 つの peer-policy テンプレートを使用できます。

Cisco NX-OS は、プリファレンス値を使用して、アドレス ファミリの複数のピア ポリシーを評価します。プリファレンス値が最小のものが最初に評価されます。ネイバーに設定した属性は、ネイバーが BGP テンプレートから継承した属性よりも優先されます。

peer-policy テンプレートでは、AS-path フィルタ リスト、プレフィックス リスト、ルート リフレクション、ソフト再構成など、アドレス ファミリ固有の属性を設定できます。

始める前に

BGP 機能を有効にしていることを確認します ([BGP 機能の有効化](#)のセクションを参照)。



- (注) テンプレートを編集するときには、ピアまたはテンプレートのレベルで **no** 形式のコマンドを使用すると、テンプレートの設定を明示的に上書きできます。属性をデフォルトの状態にリセットするには、**default** 形式のコマンドを使用する必要があります。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	router bgp autonomous-system-number 例 : <pre>switch(config)# router bgp 65536 switch(config-router)#</pre>	BGP を有効にして、ローカル BGP スピーカに自律システム番号を割り当てます。
ステップ 3	template peer-policy template-name 例 : <pre>switch(config-router)# template peer-policy BasePolicy switch(config-router-ptmp)#</pre>	peer-policy テンプレートを作成します。
ステップ 4	(任意) advertise-active-only 例 : <pre>switch(config-router-ptmp)# advertise-active-only</pre>	アクティブルートのみをピアにアドバタイズします。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 5	(任意) maximum-prefix number 例 : <pre>switch(config-router-ptmp) # maximum-prefix 20</pre>	このピアに認めるプレフィックスの最大数を設定します。
ステップ 6	exit 例 : <pre>switch(config-router-ptmp) # exit switch(config-router) #</pre>	peer-policy テンプレート コンフィギュレーション モードを終了します。
ステップ 7	neighbor ip-address remote-as as-number 例 : <pre>switch(config-router) # neighbor 192.168.1.2 remote-as 65536 switch(config-router-neighbor) #</pre>	BGP ルーティング用のネイバー設定モードを開始し、ネイバー IP アドレスを設定します。
ステップ 8	address-family { ipv4 ipv6 } { multicast unicast } 例 : <pre>switch(config-router-neighbor) # address-family ipv4 unicast switch(config-router-neighbor-af) #</pre>	指定されたアドレスファミリーに対応するグローバル アドレス ファミリ コンフィギュレーションモードを開始します。
ステップ 9	inherit peer-policy template-name preference 例 : <pre>switch(config-router-neighbor-af) # inherit peer-policy BasePolicy 1</pre>	ピア アドレス ファミリ設定に peer-policy テンプレートを適用し、このピアポリシーのプリファレンス値を割り当てます。
ステップ 10	(任意) show bgp peer-policy template-name 例 : <pre>switch(config-router-neighbor-af) # show bgp peer-policy BasePolicy</pre>	peer-policy テンプレートを表示します。
ステップ 11	(任意) copy running-config startup-config 例 : <pre>switch(config-router-neighbor-af) # copy running-config startup-config</pre>	この設定変更を保存します。

例

show bgp neighbor コマンドを実行して、適用されたテンプレートを確認します。テンプレートで利用できるすべてのコマンドの詳細については、[Cisco Nexus 3000 シリーズ コマンド リファレンス](#)を参照してください。

BGP peer-session テンプレートを設定して、BGP ピアに適用する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# router bgp 65536
switch(config-router)# template peer-session BasePolicy
switch(config-router-ptmp)# maximum-prefix 20
switch(config-router-ptmp)# exit
switch(config-router)# neighbor 192.168.1.1 remote-as 65536
switch(config-router-neighbor)# address-family ipv4 unicast
switch(config-router-neighbor-af)# inherit peer-policy BasePolicy
switch(config-router-neighbor-af)# copy running-config startup-config
```

BGP peer テンプレートの設定

BGP peer テンプレートを設定すると、1 つの再利用可能なコンフィギュレーションブロックで、セッション属性とポリシー属性を結合することができます。peer テンプレートも、peer-session または peer-policy テンプレートを継承できます。ネイバーに設定した属性は、ネイバーが BGP テンプレートから継承した属性よりも優先されます。ネイバーに設定できる peer テンプレートは1つだけですが、peer テンプレートは peer-session および peer-policy テンプレートを継承できます。

peer テンプレートは、eBGP マルチホップ TTL、最大プレフィックス数、ネクストホップセルフ、タイマーなど、セッション属性およびアドレス ファミリ属性をサポートします。

始める前に

BGP 機能を有効にしていることを確認します ([BGP 機能のイネーブル化](#)のセクションを参照してください)。



- (注) テンプレートを編集するときには、ピアまたはテンプレートのレベルで **no** 形式のコマンドを使用すると、テンプレートの設定を明示的に上書きできます。属性をデフォルトの状態にリセットするには、**default** 形式のコマンドを使用する必要があります。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : switch# configure terminal switch(config)#	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 2	router bgp autonomous-system-number 例 : switch(config)# router bgp 65536	BGP モードを開始し、ローカル BGP スピーカに自律システム番号を割り当てます。
ステップ 3	template peer template-name 例 : switch(config-router)# template peer BasePeer switch(config-router-neighbor)#	peer テンプレート コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 4	(任意) inherit peer-session template-name 例 : switch(config-router-neighbor)# inherit peer-session BaseSession	peer テンプレートで peer-session テンプレートを継承します。
ステップ 5	(任意) address-family { ipv4 ipv6 } { multicast unicast } 例 : switch(config-router-neighbor)# address-family ipv4 unicast switch(config-router-neighbor-af)#	指定のアドレスファミリに対しグローバルアドレスファミリ コンフィギュレーション モードを設定します。
ステップ 6	(任意) inherit peer template-name 例 : switch(config-router-neighbor-af)# inherit peer BasePolicy	ネイバー アドレス ファミリ設定に peer-policy テンプレートを適用します。
ステップ 7	exit 例 : switch(config-router-neighbor-af)# exit switch(config-router-neighbor)#	BGP ネイバー アドレス ファミリ コンフィギュレーションモードを終了します。
ステップ 8	(任意) timers keepalive hold 例 : switch(config-router-neighbor)# timers 45 100	ピアに BGP タイマー値を追加します。 これらの値によって、peer-session テンプレート、BaseSession のタイマー値が上書きされます。
ステップ 9	exit 例 : switch(config-router-neighbor)# exit switch(config-router)#	BGP peer テンプレート コンフィギュレーション モードを終了します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 10	neighbor ip-address remote-as as-number 例 : switch(config-router)# neighbor 192.168.1.2 remote-as 65536 switch(config-router-neighbor)#	BGP ルーティング用のネイバー設定 モードを開始し、ネイバー IP アドレス を設定します。
ステップ 11	inherit peer template-name 例 : switch(config-router-neighbor)# inherit peer BasePeer	peer テンプレートを継承します。
ステップ 12	(任意) timers keepalive hold 例 : switch(config-router-neighbor)# timers 60 120	このネイバーに BGP タイマー値を追加 します。 これらの値によって、peer テンプレ ートおよびpeer-session テンプレートのタ イマー値が上書きされます。
ステップ 13	(任意) show bgp peer-template template-name 例 : switch(config-router-neighbor-af)# show bgp peer-template BasePeer	peer テンプレートを表示します。
ステップ 14	(任意) copy running-config startup-config 例 : switch(config-router-neighbor-af)# copy running-config startup-config	この設定変更を保存します。

例

show bgp neighbor コマンドを実行して、適用されたテンプレートを確認します。テンプレートで利用できるすべてのコマンドの詳細については、[Cisco Nexus 3000 シリーズ コマンド リファレンス](#)を参照してください。

BGP peer テンプレートを設定して、BGP ピアに適用する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# router bgp 65536
switch(config-router)# template peer BasePeer
switch(config-router-neighbor)# inherit peer-session BaseSession
switch(config-router-neighbor)# address-family ipv4 unicast
switch(config-router-neighbor-af)# inherit peer-policy BasePolicy 1
switch(config-router-neighbor-af)# exit
switch(config-router-neighbor)# exit
switch(config-router)# neighbor 192.168.1.2 remote-as 65536
switch(config-router-neighbor)# inherit peer BasePeer
switch(config-router-neighbor)# copy running-config startup-config
```

プレフィックス ピアリングの設定

BGP では、IPv4 と IPv6 の両方のプレフィックスを使用してピアセットを定義できます。この機能を使用すると、各ネイバーを設定に追加する必要がありません。

プレフィックス ピアリングを定義する場合は、プレフィックスとともにリモート AS 番号を指定する必要があります。プレフィックス ピアリングが設定されている許容最大ピア数を超えない場合、BGP はプレフィックスおよび自律システムから接続するピアを受け付けます。

プレフィックス ピアリングに含まれている BGP ピアが切断されると、Cisco NX-OS は定義されているプレフィックス ピア タイムアウト値まで、ピア構造を維持します。この場合、そのプレフィックス ピアリングのすべてのスロットを他のピアが使い果たした結果、ブロックされるという危険性を伴わずに、確立されたピアのリセットまたは再接続が可能になります。

BGP プレフィックス ピアリングのタイムアウト値を構成するには、ルータ コンフィギュレーション モードで以下のコマンドを使用します。

コマンド	目的
timers prefix-peer-timeout value 例： <pre>switch(config-router)# timers prefix-peer-timeout 120</pre>	プレフィックス ピアのタイムアウト値を構成します。有効な範囲は 0 ～ 1200 秒です。デフォルト値は 30 です。 (注) プレフィックス ピアの場合は、プレフィックス ピア タイムアウトを、設定されたグレースフルリスタート タイマーよりも大きく設定します。プレフィックス ピア タイムアウトがグレースフルリスタートタイマーよりも大きければ、ピアのルートは再起動中に保持されます。プレフィックス ピア タイムアウトがグレースフルリスタートタイマーよりも小さいと、ピアのルートはプレフィックス ピアタイムアウトによって消去されます。これは、再起動が完了する前に発生する可能性があります。
timers prefix-peer-wait interval 例： <pre>switch(config-router)# timers prefix-peer-wait 50</pre>	VRF ごとまたはデフォルト VRF で BGP プレフィックス ピアリング待機タイマーを構成します。timers prefix-peer-wait コマンドを使用して、ピアプレフィックスの待機時間を無効にし、BGP プレフィックスがルーティング情報ベース (RIB) に挿入されるまで遅延がないようにできます。 間隔の範囲は 0 ～ 1200 秒です。デフォルト値は 90 秒です。 (注) このタイマーは、BGP ダイナミック ネイバーにのみ適用されます。これは、BGP が再起動したとき、またはダイナミック BGP ネイバーで初めて起動するときのみ設定されます。

ピアの最大数を構成するには、ネイバー構成モードで以下のコマンドを使用します。

コマンド	目的
maximum-peers value 例 : <pre>switch(config-router-neighbor)# maximum-peers 120</pre>	このプレフィックス ピアリングの最大ピア数を構成します。範囲は 1 ～ 1000 です。

最大 10 のピアを受け付けるプレフィックス ピアリングの設定例を示します。

```
switch(config)# router bgp 65536
switch(config-router)# timers prefix-peer-timeout 120
switch(config-router)# neighbor 10.100.200.0/24 remote-as 65536
switch(config-router-neighbor)# maximum-peers 10
switch(config-router-neighbor)# address-family ipv4 unicast
switch(config-router-neighbor-af)#
```

次に、ピア プレフィックス待機時間を無効にする例を示します。

```
switch(config)# router bgp 100
switch(config-router)# timers prefix-peer-wait 50
switch(config-router)#
```

show ip bgp neighbors コマンドを使用すると、所定のプレフィックス ピアリングの構成の詳細とともに、現在受け付けられているインスタンスのリスト、アクティブピア数、最大同時ピア数、および受け付けたピアの合計数を表示できます。

IPv4 および IPv6 アドレス ファミリ向け IPv6 リンク ローカル経由の BGP インターフェイス ピアリングの設定

アンナバード インターフェイスを使用した自動 BGP ネイバー探索のために、IPv4 および IPv6 アドレス ファミリの IPv6 リンクローカルを経由して、BGP インターフェイス ピアリングを設定できます。これにより、インターフェイス名を（インターフェイススコープのアドレスではなく）BGP ピアとして使用する BGP セッションを設定できます。この機能は、ICMPv6 ネイバー探索（ND）のルート アドバタイズメント（RA）を使用して自動ネイバー探索を行い、RFC 5549 を使用して IPv6 ネクスト ホップで IPv4 ルートを送信します。

始める前に

BGP を有効にする必要があります。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal</pre>	コンフィギュレーション モードに入ります。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 2	router bgp autonomous-system-number 例 : <pre>switch(config)# router bgp 65535 switch(config-router)#</pre>	BGP を有効にして、ローカル BGP スピーカに自律システム番号を割り当てます。AS 番号は 16 ビット整数または 32 ビット整数にできます。上位 16 ビット 10 進数と下位 16 ビット 10 進数による xx.xx という形式です。
ステップ 3	neighbor interface-name remote-as {as-number route-map map-name} 例 : <pre>switch(config-router)# neighbor Ethernet1/1 remote-as route-map Testmap switch(config-router-neighbor)#</pre>	BGP ルーティングのためにルータをネイバー設定モードにして、インターフェイスを BGP ピア用に設定します。 (注) 指定できるのは、イーサネットインターフェイス、ポートチャネルインターフェイス、サブインターフェイス、およびブレイクアウト インターフェイスだけです。 Cisco NX-OS リリース 9.3(6) 以降では、ルート マップを指定でき、AS リストを含められるルート マップを指定できます。ダイナミック AS 番号の使用の詳細については、 プレフィックス ピアのダイナミック AS 番号 (249 ページ) を参照してください。
ステップ 4	inherit peer template-name 例 : <pre>switch(config-router-neighbor)# inherit peer PEER</pre>	peer テンプレートを継承します。
ステップ 5	address-family {ipv4 ipv6} unicast 例 : <pre>switch(config-router-neighbor)# address-family ipv4 unicast switch(config-router-neighbor-af)#</pre>	指定のアドレス ファミリに対しグローバル アドレス ファミリ設定モードを開始します。
ステップ 6	(任意) show bgp {ipv4 ipv6} unicast neighbors interface 例 : <pre>switch(config-router-neighbor-af)# show bgp ipv4 unicast neighbors e1/25</pre> 例 : <pre>switch(config-router-neighbor-af)# show bgp ipv6 unicast neighbors 3FFE:700:20:1::11</pre>	BGP ピアに関する情報を表示します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 7	(任意) show ip bgp neighbors <i>interface-name</i> 例 : <pre>switch(config-router-neighbor-af)# show ip bgp neighbors Ethernet1/1</pre>	BGP ピアとして使用されるインターフェイスを表示します。
ステップ 8	(任意) show ipv6 routers [interface <i>interface]</i> 例 : <pre>switch(config-router-neighbor-af)# show ipv6 routers interface Ethernet1/1</pre>	IPv6 ICMP ルータ アドバタイズメントによって学習されリモート IPv6 ルータのリンク ローカル アドレスを表示します。
ステップ 9	(任意) copy running-config startup-config 例 : <pre>switch(config-router-neighbor-af)# copy running-config startup-config</pre>	この設定変更を保存します。

例

この例は、ルート マップを使用して、IPv4 および IPv6 アドレス ファミリの IPv6 リンクローカル経由で、BGP インターフェイス ピアリングを設定する例を示します。

リーフ 1 の iBGP インターフェイス ピアリング設定：

```
switch# configure terminal
switch(config)# route-map Testmap permit 10
switch(config-route-map)# match as-number 100-200, 300, 400
switch(config-route-map)# exit
switch(config)# router bgp 65000
switch(config-router)# neighbor Ethernet1/1 remote-as route-map Testmap
switch(config-router-neighbor)# inherit peer PEER
switch(config-router-neighbor)# address-family ipv4 unicast
switch(config-router-neighbor)# address-family ipv6 unicast
switch(config-router-neighbor-af)# copy running-config startup-config
```

次に、IPv4 および IPv6 アドレス ファミリの IPv6 リンクローカル経由での、BGP インターフェイス ピアリングのサンプル出力例を示します。

```
switch(config-router-neighbor)# show bgp ipv4 unicast neighbors e1/15.1
BGP neighbor is fe80::2, remote AS 100, ibgp link, Peer index 4
Peer is an instance of interface peering Ethernet1/15.1
BGP version 4, remote router ID 5.5.5.5
Neighbor previous state = OpenConfirm
BGP state = Established, up for 2d16h
Neighbor vrf: default
Peer is directly attached, interface Ethernet1/15.1
Last read 00:00:54, hold time = 180, keepalive interval is 60 seconds
Last written 00:00:08, keepalive timer expiry due 00:00:51
Received 3869 messages, 0 notifications, 0 bytes in queue
Sent 3871 messages, 0 notifications, 0(0) bytes in queue
```

```
Enhanced error processing: On
0 discarded attributes
Connections established 2, dropped 1
Last reset by peer 2d16h, due to session closed
Last error length received: 0
Reset error value received 0
Reset error received major: 104 minor: 0
Notification data received:
Last reset by us never, due to No error
Last error length sent: 0
Reset error value sent: 0
Reset error sent major: 0 minor: 0
--More--
```

インターフェイス コンフィギュレーション :

次のいずれかのコマンドを使用して、対応するインターフェイスで IPv6 を有効にする必要があります。

- **ipv6 address** *ipv6-address*
- **ipv6 address use-link-local-only**
- **ipv6 link-local** *link-local-address*

```
switch# configure terminal
switch(config)# interface Ethernet1/1
switch(config-if)# ipv6 address use-link-local-only
```



- (注) インターフェイスで IPv4 アドレスが設定されていない場合は、**ip forward** コマンドをインターフェイスで設定して IPv4 転送を有効にする必要があります。



- (注) IPv6 ND タイマーを調整して、ネイバー探索を高速化し、BGP のルートコンバージェンスを高速化できます。

```
switch(config-if)# ipv6 nd ra-interval 4 min 3
switch(config-if)# ipv6 nd ra-lifetime 10
```



- (注) Cisco NX-OS リリース 9.3(6) 以降で、パラレルリンクを使用するカスタマーの導入では、インターフェイス モードで次のコマンドを追加する必要があります。

```
switch(config-if)# ipv6 link-local use-bia
```

このコマンドは、異なるインターフェイス間での IPv6 LLA を一意にします。

BGP 認証の設定

MD5 ダイジェストを使用してピアからのルート更新を認証するように、BGP を設定できます。

MD5 認証を使用するように BGP を設定するには、ネイバー コンフィギュレーション モードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
password [0 3 7] string 例 : <pre>switch(config-router-neighbor)# password BGPPassword</pre>	MGP ネイバー セッションの MD5 パスワードを設定します。

BGP セッションのリセット

BGP のルート ポリシーを変更した場合は、関連付けられた BGP ピアセッションをリセットする必要があります。BGP ピアがルート リフレッシュをサポートしない場合は、着信ポリシー変更に関するソフト再構成を設定できます。Cisco NX-OS は自動的に、セッションのソフトリセットを試みます。

ソフト再構成着信を設定するには、ネイバー アドレス ファミリ設定モードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
soft-reconfiguration inbound always 例 : <pre>switch(config-router-neighbor-af)# soft-reconfiguration inbound always</pre>	着信 BGP ルート アップデートを格納するために、ソフト再構成をイネーブルにします。このコマンドによって、BGP ネイバー セッションの自動ソフト クリアまたはリフレッシュが開始されます。

BGP ネイバー セッションをリセットするには、任意のモードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
clear bgp ip { unicast multicast } ip-address soft { in out } 例 : <pre>switch# clear bgp ip unicast 192.0.2.1 soft in</pre>	TCPセッションを切断しないで、BGPセッションをリセットします。

ネクストホップアドレスの変更

次の方法で、ルートアドバタイズメントで使用するネクストホップアドレスを変更できます。

- ネクストホップ計算をディセーブルにして、ローカル BGP スピーカ アドレスをネクストホップ アドレスとして使用します。
- ネクストホップアドレスをサードパーティ アドレスとして設定します。この機能は、元のネクストホップアドレスがルートの送り先のピアと同じサブネット上にある場合に使用します。この機能を使用すると、フォワーディング時に余分なホップを節約できます。

ネクストホップアドレスを変更するには、コマンドアドレスファミリ コンフィギュレーション モードで次のパラメータを使用します。

コマンド	目的
next-hop-self 例 : <pre>switch(config-router-neighbor-af) # next-hop-self</pre>	ルートアップデートのネクストホップアドレスとして、ローカル BGP スピーカ アドレスを使用します。このコマンドによって、BGP ネイバー セッションの自動ソフト クリアまたはリフレッシュが開始されます。
next-hop-third-party 例 : <pre>switch(config-router-neighbor-af) # next-hop-third-party</pre>	ネクストホップアドレスをサードパーティ アドレスとして設定します。このコマンドは、 next-hop-self を構成されていないシングルホップ EBGp ピアに使用します。

BGP ネクストホップアドレストラッキング

BGP は、インストールされているルートのネクストホップアドレスをモニタして、ネクストホップの到達可能性の確認、および BGP ベストパスの選択、インストール、検証を行います。BGP ネクストホップアドレスのトラッキングを行うと、ネクストホップの到達可能性に影響を及ぼす可能性のあるルート変更が RIB で行われたときに確認プロセスをトリガーすることで、このようなネクストホップ到達可能性テストの速度が向上します。

ネクストホップ情報が変更されると、BGP は RIB から通知を受信します（イベント駆動型の通知）。BGP は、次のいずれかのイベントが発生したときに通知を受け取ります。

- ネクストホップが到達不能になった。
- ネクストホップが到達可能になった。
- ネクストホップへの完全な繰り返し IGP メトリックが変更される。
- ファーストホップの IP アドレスまたはファーストホップのインターフェイスが変更される。
- ネクストホップが接続された。
- ネクストホップが接続解除された。
- ネクストホップがローカルアドレスになった。
- ネクストホップが非ローカルアドレスになった。



(注) 到達可能性および再帰メトリック イベントは、最適パスの再計算をトリガーします。

RIB からのイベント通知は、クリティカルおよび非クリティカルとして分類されます。クリティカルおよび非クリティカルイベントの通知は、別々のバッチで送信されます。ただし、非

クリティカルイベントが保留中であり、クリティカルイベントを読み込む要求がある場合は、非クリティカルイベントがクリティカルイベントとともに送信されます。

- クリティカルイベントは、ネクストホップの到達可能性（到達可能と到達不能）、接続性（接続と非接続）、および局在性（ローカルと非ローカル）に関係があります。これらのイベントの通知は遅延しません。
- 非クリティカルイベントには、IGP メトリックの変更のみが含まれます。

詳細については、「BGP ネクストホップアドレストラッキングの設定」を参照してください。

ネクストホップフィルタリングの設定

BGP ネクストホップフィルタリングを使用すると、RIB でネクストホップアドレスがチェックされるときにそのネクストホップアドレスの基盤となるルートがルートマップを経由します。ルートマップでそのルートが拒否されると、ネクストホップアドレスは到達不能として扱われます。

BGP は、ルートポリシーによって拒否されたすべてのネクストホップを無効であるとマークし、無効なネクストホップアドレスを使用するルートについてベストパスを計算しません。

BGP ネクストホップフィルタリングを設定するには、アドレスファミリ構成レーションモードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
nexthop route-map <i>name</i> 例： <pre>switch(config-router-af)# nexthop route-map nextHopLimits</pre>	BGP ネクストホップルートが一致するルートマップを指定します。63 文字以内の英数字のストリング（大文字と小文字を区別）で指定します。

ネクストホップセルフによるリフレクトルートの制御

NX-OS では、**next-hop-self** [all] 引数を使用して特定のピアに送信する際の iBGP ルートを制御できます。これらの引数を使用すると、ルートのリフレクトが実施されている場合でも、ルートのネクストホップを選択的に変更できます。

コマンド	目的
next-hop-self [all] 例 : <pre>switch(config-router-af)# next-hop-self all</pre>	ルートアップデートのネクストホップアドレスとして、ローカルBGPスピーカアドレスを使用します。 all キーワードはオプションです。 all を指定すると、すべてのルートが next-hop-self を使用するピアに送信されます。 all を指定しなかった場合、リフレクトしたルートのネクストホップは変更されません。

セッションがダウンした場合のネクストホップグループの縮小

セッションがダウンしたときに迅速な方法で ECMP グループを縮小するように BGP を設定できます。

この機能は、次の BGP パス障害イベントに適用されます。

- 1 つまたは複数のレイヤ 3 リンクの障害
- BGP ネイバーの BFD 障害検出
- BGP ネイバーの管理上のシャットダウン (shutdown コマンドを使用)

レイヤ 3 リンク障害の迅速な処理はデフォルトで有効になっており、有効にするための構成コマンドは必要ありません。

最後の 2 つのイベントの迅速な処理を構成するには、ルータ構成モードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
neighbor-down fib-accelerate 例 : <pre>switch(config-router)# neighbor-down fib-accelerate</pre>	BGPセッションがダウンするたびに、すべてのネクストホップグループ (ECMP グループと単一のネクストホップルート) から対応する次のネクストホップを取り消します。 (注) このコマンドは、IPv4 と IPv6 の両方のアドレスファミリルートに適用され、すべての非直接ルートが BGP によってインストールされる BGP 専用環境でのみサポートされます。

機能ネゴシエーションのディセーブル化

機能ネゴシエーションをディセーブルにすると、機能ネゴシエーションをサポートしない古い BGP ピアとの相互運用が可能です。

機能ネゴシエーションをディセーブルにするには、ネイバー コンフィギュレーション モードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
dont-capability-negotiate 例 : <pre>switch(config-router-neighbor)# dont-capability-negotiate</pre>	機能ネゴシエーションをディセーブルにします。このコマンドの設定後、BGP セッションを手動でリセットする必要があります。

eBGP の設定

このセクションは、次のトピックで構成されています。

eBGP ネクストホップ変更なしの構成

ネクスト ホップ アドレスを変更せずに eBGP マルチホップ ピアにルートを送信するように eBGP を設定できます。デフォルトでは、デバイスはルートの送信時に BGP ルートのネクストホップアドレスを自身のアドレスに変更します。

	コマンド	目的
ステップ 1	disable-connected-check 例 : <pre>switch(config-router-neighbor)# disable-connected-check</pre>	シングルホップ eBGP ピアが直接接続されているかどうかのチェックを無効にします。このコマンドの使用後、BGP セッションを手動でリセットする必要があります。
ステップ 2	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal</pre>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 3	route-map route-map name 例 : <pre>switch(config)# route-map route</pre>	ルート マップ コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 4	set ip next-hop unchanged 例 : <pre>switch(config-route-map)# set ip next-hop unchanged</pre>	ネクスト ホップ アドレスを変更せずに指定された eBGP ピアに BGP アップデートを送信するようにデバイスを構成します。
ステップ 5	exit 例 : <pre>switch(config-route-map)# exit</pre>	ルート マップ コンフィギュレーション モードを終了します。

次に、eBGP ネクストホップを変更せずに設定し、ネクストホップアドレスを変更せずにルートを送信する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# route-map route
switch(config-route-map)# set ip next-hop unchanged
switch(config-route-map)# exit
switch(config)#
```

eBGP シングルホップ チェックの無効化

シングルホップ eBGP ピアがローカルルータに直接接続されているかどうかのチェック機能を無効にするように、eBGP を設定できます。このオプションは、直接接続されたスイッチ間のシングルホップ ループバック eBGP セッションの設定に使用します。

シングルホップ eBGP ピアが直接接続されているかどうかのチェックを無効にするには、ネイバー設定モードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
disable-connected-check 例 : <pre>switch(config-router-neighbor) # disable-connected-check</pre>	シングルホップ eBGP ピアが直接接続されているかどうかのチェックを無効にします。このコマンドの使用後、BGP セッションを手動でリセットする必要があります。

eBGP マルチホップの設定

eBGP マルチホップをサポートする eBGP 存続可能時間 (TTL) 値を設定できます。eBGP ピアは状況によって、別の eBGP ピアに直接接続されず、リモート eBGP ピアに到達するために複数のホップを必要とします。ネイバーセッションに eBGP TTL 値を設定すると、このようなマルチホップセッションが可能になります。

eBGP マルチホップを設定するには、ネイバー コンフィギュレーションモードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
ebgp-multihop ttl-value 例 : <pre>switch(config-router-neighbor) # ebgp-multihop 5</pre>	eBGP マルチホップの eBGP TTL を設定します。有効な範囲は 2 ~ 255 です。このコマンドの使用後、BGP セッションを手動でリセットする必要があります。

同じ自律システムで eBGP ルートの構成

リモート自律システム (AS) から学習した eBGP ルートを、同じ AS 内の別の eBGP ピアにアドバタイズするように構成できます。



- (注) 同じ AS 番号内のピア間でルート更新が送信される場合、**allowas-in** コマンドを入力しない限り、これらの更新は破棄されます。

AS ピア チェックを無効にするには、ネイバー コンフィギュレーション モードで次のコマンドを使用します。

	コマンド	目的
ステップ 1	router bgp autonomous-system-number 例 : switch(config)# router bgp 64496	BGP を有効にして、ローカル BGP スピーカに AS 番号を割り当てます。AS 番号は 16 ビット整数または 32 ビット整数にできます。上位 16 ビット 10 進数と下位 16 ビット 10 進数による xx.xx という形式です。
ステップ 2	neighbor ipv4 remote-as as-number 例 : switch (config-router)# neighbor 209.165.201.1 remote-as 64497	リモート BGP ピアの指定アドレス タイプと AS 番号を構成します。ip-address の形式は x.x.x.x です。IPv6 address-format の形式は A:B::C:D です。
ステップ 3	address family ipv4 unicast 例 : switch(config-router)# address family ip4 unicast	ユニキャスト指定のアドレスファミリーに対応したネイバーアドレスファミリー構成モードを開始します。
ステップ 4	disable-peer-as-check 例 : switch(config-router-neighbor-af)# disable-peer-as-check	同じ AS 内のピア間でルートが更新されるように、AS チェックを無効にします。
ステップ 5	show bgp neighbor 例 : switch(config-router-neighbor-af)# show bgp ipv4 unicast neighbors	BGP ピアに関する情報を表示します。

次に、BGP ピア情報を表示する例を示します。

```
switch(config)# show bgp neighbor 1.222.222.2
bgp neighbor is 1.222.222.2, remote as 2222, ebgp link, peer index 1
bgp version 4, remote router id 1.100.1.2 ####output truncated####
for address family:ipv4 unicast
bgp table version 54, neighbor version 54
3 accepted paths consume 108 bytes of memory
10 sent paths
peer asn check is disabled

#####output omitted#####
```

高速外部フェールオーバーのディセーブル化

通常、BGP ルータと直接接続 eBGP ピア間の接続が失われると、ピアとの eBGP セッションをリセットすることによって、BGP が高速外部フェールオーバーを開始します。この高速外部フェールオーバーをディセーブルにすると、リンク フラップが原因の不安定さを制限できます。

高速外部フェールオーバーを無効にするには、ルータ構成モードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
no fast-external-fallover 例 : <pre>switch(config-router)# no fast-external-fallover</pre>	eBGP ピアの高速外部フェールオーバーをディセーブルにします。このコマンドは、デフォルトでイネーブルになっています。

AS パス属性の制限

AS パス属性で自律システム番号が高いルートを廃棄するように eBGP を設定できます。

AS パス属性で AS 番号の多いルートを廃棄するには、ルータ コンフィギュレーション モードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
maxas-limit number 例 : <pre>switch(config-router)# maxas-limit 50</pre>	AS パス セグメントの番号が指定された上限を超えている eBGP ルートを廃棄します。範囲は 1 ～ 2000 です。

ローカル AS サポートの設定

ローカル AS 機能では、ルータが実際の AS に加えて、2 番目の自律システム (AS) のメンバーであるように見せることができます。ローカル AS を使用すると、ピアリングの調整を変更せずに 2 つの ISP をマージできます。マージされた ISP 内のルータは、新しい自律システムのメンバになりますが、使用者に対しては古い自律システム番号を使用し続けます。

ローカル AS は正しい eBGP ピアにしか使用できません。別のコンフェデレーションのサブ自律システムのメンバである 2 ピアに対しては、この機能は使用できません。

eBGP ローカル AS のサポートを設定するには、ネイバー コンフィギュレーション モードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
local-as number [no-prepend [replace-as [dual-as]]] 例： <pre>switch(config-router-neighbor)# local-as 1.1</pre>	AS_PATH 属性にローカル AS の <i>number</i> を付加するよう eBGP を設定します。 local-as number としては 16 ビット整数または 32 ビット整数が可能です。32 ビットの場合、上位 16 ビット 10 進数と下位 16 ビット 10 進数による xx.xx という形式にします。 no-prepend キーワードは、local-as number とピアリングしているパートナーを除き、local-asnumber がダウンストリーム BGP ネイバーの前に付加されないようにします。 replace-as キーワードは、ピアリングセッションの local-as number だけが AS_PATH 属性の前に付加されるようにします。ローカル BGP ルーティングプロセスからの自律システム番号は、プリペンドされません。 dual-as キーワードは、eBGP ネイバーを構成し、実際の自律システム番号（ローカルの BGP ルーティングプロセスからのもの）またはローカル AS として構成された自律システム番号を使用して、ピアリングセッションを確立するようにします。

AS 連合の設定

AS 連合を設定するには、連合識別情報を指定する必要があります。AS 連合内の自律システムグループは、自律システム番号として連合 ID を持つ、1 つの自律システムとして認識されます。

BGP 連合 ID を設定するには、ルータ コンフィギュレーションモードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
confederation identifier as-number 例： <pre>switch(config-router)# confederation identifier 64512</pre>	AS 連合を表す連合 ID を設定します。 各連合には別のサブ自律システム番号があり、通常は専用番号です（64512 ～ 65534）。 このコマンドによって、BGP ネイバー セッションの自動通知およびセッション リセットが開始されます。

AS 連合に所属する自律システムを設定するには、ルータ コンフィギュレーションモードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
bgp confederation peers as-number [as-number2...] 例： <pre>switch(config-router)# bgp confederation peers 5 33 44</pre>	連合に所属する自律システムのリストを指定します。 このコマンドによって、BGP ネイバーセッションの自動通知およびセッションリセットが開始されます。

独自の自律システムを含む自律システムパスの設定

独自の自律システムを含む自律システム（AS）パスを受け入れる機能を BGP でイネーブルにします。

始める前に

BGP 機能を有効にしていることを確認します（[BGP 機能のイネーブル化](#)のセクションを参照してください）。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	router bgp as-number	BGP モードを開始し、ローカル BGP スピーカに自律システム番号を割り当てます。 <i>as-number</i> の値の範囲は 1 ～ 65535 です。
ステップ 3	neighbor ip-address remote-as as-number	BGP ルーティング用のネイバー コンフィギュレーション モードを開始し、ネイバー IP アドレスを設定します。
ステップ 4	address-family { ipv4 ipv6 } { multicast unicast }	指定のアドレスファミリーに対応するルータアドレスファミリー コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 5	[no default] allowas-in [allowas-in-cnt]	BGP の <i>allowas-in</i> 機能をイネーブルにし、自律システム番号の発生回数を設定します。 allowas-in-cnt の場合、1 ～ 1,000 の整数を入力します。デフォルトでは、自律システム番号の発生回数は 3 に設定されます。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 6	end	ルータ アドレス ファミリ コンフィギュレーション モードを終了します。
ステップ 7	(任意) show running-config bgp	BGP の設定を表示します。
ステップ 8	copy running-config startup-config	リブートおよびリスタート時に実行コンフィギュレーションをスタートアップコンフィギュレーションにコピーして、変更を継続的に保存します。

例

次に、BGP の **allowas-in** 機能を設定し、ユニキャスト IPv4 アドレス ファミリ用に設定する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# router bgp 77
switch(config-router)# neighbor 6.20.1.1 remote-as 66
switch(config-router-neighbor)# address-family ipv4 unicast
switch(config-router-neighbor-af)# allowas-in 5
switch(config-router-neighbor-af)# end
```

ルート リフレクタの設定

ルート リフレクタとして動作するローカル BGP スピーカに対するルート リフレクタ クライアントとして、iBGP ピアを設定できます。ルート リフレクタとそのクライアントがともにクラスタを形成します。クライアントからなるクラスタには通常、ルート リフレクタが1つ存在します。このような状況では、ルート リフレクタのルータ ID でクラスタを識別します。ネットワークの冗長性を高め、シングル ポイント障害を回避するために、複数のルート リフレクタからなるクラスタを設定できます。クラスタ内のすべてのルート リフレクタは、同じ4バイトクラスタ ID で設定する必要があります。これは、ルート リフレクタが同じクラスタ内のルート リフレクタからのアップデートを認識できるようにするためです。

始める前に

BGP 機能を有効にしていることを確認します (BGP 機能の有効化のセクションを参照)。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : switch# configure terminal switch(config)#	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 2	router bgp as-number 例 : <pre>switch(config)# router bgp 65536 switch(config-router)#</pre>	BGP モードを開始し、ローカル BGP スピーカに自律システム番号を割り当てます。
ステップ 3	cluster-id cluster-id 例 : <pre>switch(config-router)# cluster-id 192.0.2.1</pre>	クラスタに対応するルータリフレクタの 1 つとして、ローカルルータを設定します。クラスタを識別するクラスタ ID を指定します。このコマンドによって、BGP ネイバーセッションの自動ソフトクリアまたはリフレッシュが開始されます。
ステップ 4	address-family {ipv4 ipv6} { unicast multicast} 例 : <pre>switch(config-router)# address-family ipv4 unicast switch(config-router-af)#</pre>	指定のアドレスファミリに対応するグローバルアドレスファミリ コンフィギュレーションモードを開始します。
ステップ 5	(任意) client-to-client reflection 例 : <pre>switch(config-router-af)# client-to-client reflection</pre>	クライアント間のルータリフレクションを設定します。この機能は、デフォルトでイネーブルになっています。このコマンドによって、BGP ネイバーセッションの自動ソフトクリアまたはリフレッシュが開始されます。
ステップ 6	exit 例 : <pre>switch(config-router-neighbor)# exit switch(config-router)#</pre>	ルータアドレスコンフィギュレーションモードを終了します。
ステップ 7	neighbor ip-address remote-as as-number 例 : <pre>switch(config-router)# neighbor 192.0.2.10 remote-as 65536 switch(config-router-neighbor)#</pre>	リモート BGP ピアの IP アドレスおよび AS 番号を設定します。
ステップ 8	address-family _ [] ipv4 ipv6 [] unicast multicast % 例 : <pre>switch(config-router-neighbor)# address-family ipv4 unicast switch(config-router-neighbor-af)#</pre>	指定のアドレスファミリに対応しネイバーアドレスファミリ コンフィギュレーションモードを開始します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 9	route-reflector-client 例 : <pre>switch(config-router-neighbor-af)# route-reflector-client</pre>	BGP ルート リフレクタとしてスイッチを設定し、そのクライアントとしてネイバーを設定します。このコマンドによって、BGP ネイバーセッションの自動通知およびセッションリセットが開始されます。
ステップ 10	(任意) show bgp ip { unicast multicast } neighbors 例 : <pre>switch(config-router-neighbor-af)# show bgp ip unicast neighbors</pre>	BGP ピアを表示します。
ステップ 11	(任意) copy running-config startup-config 例 : <pre>switch(config-router-neighbor-af)# copy running-config startup-config</pre>	この設定変更を保存します。

例

次に、ルート リフレクタとしてルータを設定し、クライアントとしてネイバーを 1 つ追加する例を示します。

```
switch(config)# router bgp 65536
switch(config-router)# neighbor 192.0.2.10 remote-as 65536
switch(config-router-neighbor)# address-family ip unicast
switch(config-router-neighbor-af)# route-reflector-client
switch(config-router-neighbor-af)# copy running-config startup-config
```

ルート ダンプニングの設定

iBGP ネットワーク上での eBGP ルート フラップの伝播を最小限に抑えるために、ルート ダンプニングを構成できます。

ルート ダンプニングを設定するには、アドレス ファミリまたは VRF アドレス ファミリ コンフィギュレーション モードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
dampening [{ half-life reuse-limit suppress-limit max-suppress-time route-map map-name }] 例 : <pre>switch(config-router-af)# dampening route-map bgpDamp</pre>	機能ネゴシエーションをディセーブルにします。パラメータ値は次のとおりです。 • half-life : 指定できる範囲は 1 ～ 45 です。 • reuse-limit : 指定できる範囲は 1 ～ 20000 です。 • suppress-limit : 指定できる範囲は 1 ～ 20000 です。 • max-suppress-time : 指定できる範囲は 1 ～ 255 です。

ルート削除遅延の構成

BGP ネイバーがネクストホップ リストからルートを削除できるよりも速くハードウェアからルータが削除されると、そのルートのために受信されるトラフィックは失われます。ルート削除間隔を構成することで、ハードウェアからのルートの削除を遅らせることができます。

ネクスト ホップのサブセットがルートから削除されている場合や、ルートのバックアップパスが存在する場合は、この構成が適用されません。完全に削除されるルートにのみ適用されます。

コマンド	目的
route delete dampen interval [seconds] 例 : <pre>switch(config)# route delete dampen interval 20 switch(config)#</pre>	ハードウェアからのルートの削除を遅らせます。間隔は、1 秒から 30 秒の範囲で指定できます。デフォルト値は 0 秒です。

ロード シェアリングおよび ECMP の設定

等コスト マルチパス ロード バランシング用に BGP がルート テーブルに追加するパスの最大数を設定できます。

パスの最大数を設定するには、ルータ アドレス ファミリ コンフィギュレーション モードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
maximum-paths [ibgp] maxpaths 例 : <pre>switch(config-router-af)# maximum-paths 12</pre>	ロード シェアリング用の等コスト パスの最大数を設定します。指定できる範囲は 1 ～ 16 です。デフォルトは 1 です。

最大プレフィックス数の設定

BGP が BGP ピアから受け取ることのできるプレフィックスの最大数を設定できます。任意で、プレフィックス数がこの値を超えた場合に、BGP に警告メッセージを生成させる、またはピアとの BGP セッションを切断させることを設定できます。

BGP ピアに認めるプレフィックスの最大数を設定するには、ネイバー アドレス ファミリ コンフィギュレーション モードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
maximum-prefix maximum [threshold] [restart time warming-only] 例 : <pre>switch(config-router-neighbor-af) # maximum-prefix 12</pre>	ピアからのプレフィックスの最大数を設定します。パラメータの範囲は次のとおりです。 • maximum : 指定できる範囲は 1 ～ 300000 です。 • threshold : 指定できる範囲は 1 ～ 100 % です。デフォルトは 75% です。 • time : 指定できる範囲は 1 ～ 65535 分です。 このコマンドによって、プレフィックス限度を超えた場合に、BGP ネイバー セッションの自動通知およびセッション リセットが開始されます。

ダイナミック機能の設定

BGP ピアのダイナミック機能を設定できます。

ダイナミック機能を設定するには、ネイバー コンフィギュレーション モードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
dynamic-capability 例 : <pre>switch(config-router-neighbor) # dynamic-capability</pre>	ダイナミック機能をイネーブルにします。このコマンドによって、BGP ネイバー セッションの自動通知およびセッション リセットが開始されます。 このコマンドは、デフォルトでイネーブルになっています。

集約アドレスの設定

BGP ルート テーブルの集約アドレス エントリを設定できます。

集約アドレスを設定するには、ルータ アドレス ファミリ コンフィギュレーション モードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
aggregate-address ip-prefix/length [as-set] [summary-only] [advertise-map map-name] [attribute-map map-name] [suppress-map map-name] 例 : <pre>switch(config-router-af)# aggregate-address 192.0.2.0/8 as-set</pre>	集約アドレスを作成します。このルートに関してアドバタイズされるパスは、集約されているすべてのパスに含まれるすべての要素からなる、自律システム セットです。 • as-set キーワードは、関係するパスから自律システム セットパス情報およびコミュニティ情報を生成します。 • summary-only キーワードは、アップデートから具体的なルートをすべてフィルタリングします。 • advertise-map キーワードおよび引数では、選択されたルートから属性情報を選択するためのルートマップを指定します。 • attribute-map キーワードおよび引数では、集約から属性情報を選択するためのルート マップを指定します。 • suppress-map キーワードおよび引数では、固有性の強いルートを条件付きでフィルタ処理します。

BGP ルートの抑制

新しく学習された BGP ルートが転送情報ベース（FIB）により確認され、ハードウェアでプログラミングされた後にのみ、これらのルートをアドバタイズするように Cisco NX-OS を設定できます。ルートがプログラミングされた後は、これらのルートに対する以降の変更にはこのハードウェア プログラミングのチェックは必要ありません。BGP ルート抑制はデフォルトでは有効ではありません。



- (注) スイッチ上で、ハードウェアテーブルの枯渇が原因でハードウェアでローカルにプログラミングされていないルートに対して **fib-suppression** を有効にすると、BGP は、ハードウェアでローカルにプログラミングされていない場合でも、これらの失敗したルートをアドバタイズします。

BGP ルートを抑制するには、ルータ構成モードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
suppress-fib-pending 例 : <pre>switch(config-router)# suppress-fib-pending</pre>	新しく学習された BGP ルート（IPv4 または IPv6）がハードウェアでプログラミングされるまで、ダウンストリームの BGP ネイバーにアドバタイズされることを抑制します。

BGP 条件付きアドバタイズメントの設定

BGP がプロパゲートするルートを制限するように BGP 条件付きアドバタイズメントを設定できます。次の 2 つのルート マップを定義します。

- アドバタイズ マップ：BGP が条件付きアドバタイズメントを考慮する前にルートが一致する必要のある条件を指定します。このルートマップには、適切な **match** 文を含めることができます。
- 存在マップまたは非存在マップ：BGP がアドバタイズ マップに一致するルートをプロパゲートする前に BGP テーブルに存在する必要があるプレフィックスを定義します。非存在マップは、BGP がアドバタイズ マップに一致するルートをプロパゲートする前に BGP テーブルに存在してはならないプレフィックスを定義します。BGP は、これらのルート マップでプレフィックス リストの **match** 文内にある **permit** 文のみを処理します。

ルートが条件を渡さない場合、そのルートが BGP テーブルにあれば BGP によってルートが取り消されます。

始める前に

BGP 機能を有効にしていることを確認します ([BGP 機能のイネーブル化](#)のセクションを参照してください)。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例： <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	router bgp as-number 例： <pre>switch(config)# router bgp 65536 switch(config-router)#</pre>	BGP モードを開始し、ローカル BGP スピーカに自律システム番号を割り当てます。
ステップ 3	neighbor ip-address remote-as as-number 例： <pre>switch(config-router)# neighbor 192.168.1.2 remote-as 65537 switch(config-router-neighbor)#</pre>	BGP ルーティング用のネイバー設定モードを開始し、ネイバー IP アドレスを設定します。
ステップ 4	address-family { ipv4 ipv6 } { unicast multicast } 例：	アドレス ファミリ設定モードを開始します。

	コマンドまたはアクション	目的
	<pre>switch(config-router-neighbor) # address-family ipv4 multicast switch(config-router-neighbor-af) #</pre>	
ステップ 5	advertise-map adv-map { exist-map exist-rmap non-exist-map nonexistent-rmap } 例 : <pre>switch(config-router-neighbor-af) # advertise-map advertise exist-map exist</pre>	2 つの設定済みルート マップに従い、ルートを条件付きでアドバタイズするように BGP を設定します。 • adv-map : BGP がルートを次のルート マップに渡す前に、そのルートが渡す必要のある match 文を含むルート マップを指定します。 adv-map は、大文字と小文字が区別される 63 文字以下の英数字文字列です。 • exist-rmap : プレフィックス リストの match ステートメントを使用してルート マップを指定します。BGP テーブル内のプレフィックスは、BGP がルートをアドバタイズする前に、プレフィックス リスト内のプレフィックスと一致する必要があります。exist-rmap は、大文字と小文字が区別される 63 文字以下の英数字文字列です。 • nonexist-rmap : プレフィックス リストの match ステートメントを使用してルート マップを指定します。BGP テーブル内のプレフィックスは、BGP がルートをアドバタイズする前に、プレフィックス リスト内のプレフィックスと一致してはいけません。nonexist-rmap は、大文字と小文字が区別される 63 文字以下の英数字文字列です。
ステップ 6	(任意) show ip bgp neighbor 例 : <pre>switch(config-router-neighbor-af) # show ip bgp neighbor</pre>	BGP に関する情報、および設定した条件付きアドバタイズメントのルート マップに関する情報を表示します。
ステップ 7	(任意) copy running-config startup-config 例 :	この設定変更を保存します。

	コマンドまたはアクション	目的
	<code>switch(config-router-neighbor-af)# copy running-config startup-config</code>	

例

次に、BGP 条件付きアドバタイズメントを設定する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# router bgp 65536
switch(config-router)# neighbor 192.0.2.2 remote-as 65537
switch(config-router-neighbor)# address-family ipv4 unicast
switch(config-router-neighbor-af)# advertise-map advertise exist-map exist
switch(config-router-neighbor-af)# exit
switch(config-router-neighbor)# exit
switch(config-router)# exit
switch(config)# route-map advertise
switch(config-route-map)# match as-path pathList
switch(config-route-map)# exit
switch(config)# route-map exit
switch(config-route-map)# match ip address prefix-list plist
switch(config-route-map)# exit
switch(config)# ip prefix-list plist permit 209.165.201.0/27
```

ルートの再配布の設定

別のルーティング プロトコルからのルーティング情報を受け入れて、BGP ネットワークを通じてその情報を再配布するように、BGP を設定できます。任意で、再配布ルートのためのデフォルト ルートを割り当てることができます。

始める前に

BGP 機能を有効にしていることを確認します ([BGP 機能のイネーブル化](#)のセクションを参照してください)。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <code>switch# configure terminal</code> <code>switch(config)#</code>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	router bgp as-number 例 : <code>switch(config)# router bgp 65536</code> <code>switch(config-router)#</code>	BGP モードを開始し、ローカル BGP スピーカに自律システム番号を割り当てます。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 3	address-family { ipv4 ipv6 } { unicast multicast } 例 : <pre>switch(config-router)# address-family ipv4 unicast switch(config-router-af) #</pre>	アドレス ファミリ設定モードを開始します。
ステップ 4	redistribute { direct { eigrp ospf ospfv3 rip } instance-tag static } route-map map-name 例 : <pre>switch(config-router-af) # redistribute eigrp 201 route-map Eigrpmap</pre>	他のプロトコルからのルートを BGP に再配布します。ルート マップの設定の詳細については、 ルート マップの設定 のセクションを参照してください。
ステップ 5	(任意) default-metric value 例 : <pre>switch(config-router-af) # default-metric 33</pre>	BGP へのデフォルト ルートを生成します。
ステップ 6	(任意) copy running-config startup-config 例 : <pre>switch(config-router-af) # copy running-config startup-config</pre>	この設定変更を保存します。

例

次に、EIGRP を BGP に再配布する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# router bgp 65536
switch(config-router)# address-family ipv4 unicast
switch(config-router-af)# redistribute eigrp 201 route-map Eigrpmap
switch(config-router-af)# copy running-config startup-config
```

再分配による BGP 減衰の無効化

BGP に再配布されたルートの IGP メトリックが変更された場合、BGP の内部ダンピングが発生し、BGP ピアへの即時ルート アップデートが行われなくなります。これは、再配布されたルートについて報告された IGP メトリック変更を BGP が処理する方法に影響します。BGP は、10 分間の遅延でバッチ プロセスを通してこれらの変更を抑制します。このコマンドを使用すると、その遅延を調整したり、遅延をなくしたりして、その変化への対応を迅速化することができます。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : switch# configure terminal switch(config)#	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	router bgp as-number 例 : switch(config)# router bgp 65536 switch(config-router)#	BGP モードを開始し、ローカル BGP スピーカに自律システム番号を割り当てます。
ステップ 3	address-family { ipv4 ipv6 } { unicast multicast } 例 : switch(config-router)# address-family ipv4 unicast switch(config-router-af)#	アドレス ファミリ設定モードを開始します。
ステップ 4	dampen-igp-metric seconds 例 : switch(config-router-af)# dampen-igp-metric 100	再配布されたルートの IGP メトリック 関連変更のダンプニングを構成します。

例

次に、再配布ルートに BGP ダンプニングを構成する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# router bgp 100
switch(config-router)# address-family ipv4 unicast
switch(config-router-af)# dampen-igp-metric 100
switch(config-router-af)#
```

マルチプロトコル BGP の設定

複数のアドレスファミリ（IPv4 のユニキャストおよびマルチキャストルートを含む）をサポートするように MP-BGP を構成できます。

始める前に

BGP 機能を有効にしていることを確認します（[BGP 機能のイネーブル化](#)のセクションを参照してください）。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : switch# configure terminal switch(config)#	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	router bgp as-number 例 : switch(config)# router bgp 65536 switch(config-router)#	BGP モードを開始し、ローカル BGP スピーカに自律システム番号を割り当てます
ステップ 3	neighbor ip-address remote-as as-number 例 : switch(config-router)# neighbor 192.168.1.2 remote-as 65537 switch(config-router-neighbor)#	BGP ルーティング用のネイバー設定モードを開始し、ネイバー IP アドレスを設定します。
ステップ 4	address-family { ipv4 ipv6 } { unicast multicast } 例 : switch(config-router-neighbor)# address-family ipv4 multicast switch(config-router-neighbor-af)#	アドレス ファミリ コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 5	(任意) copy running-config startup-config 例 : switch(config-router-neighbor-af)# copy running-config startup-config	この設定変更を保存します。

例

次に、ネイバーのマルチキャスト RPF に対して IPv4 ルートのアドバタイズおよび受信をイネーブルにする例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# interface ethernet 1/2
switch(config-if)# ipv6 address 2001:0DB8::1
switch(config-if)# router bgp 65536
switch(config-router)# neighbor 192.168.1.2 remote-as 35537
switch(config-router-neighbor)# address-family ipv4 multicast
switch(config-router-neighbor-af)# exit
switch(config-router-neighbor)# address-family ipv6 multicast
switch(config-router-neighbor-af)# copy running-config startup-config
```

元の BGP 拡張コミュニティ サイトの構成

BGP 拡張コミュニティの Site of Origin を構成するには、次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
router bgp as-number 例 : <pre>switch(config)# router bgp 1 switch(config-router)#</pre>	BGP ルーティングプロセスを設定し、ルータ コンフィギュレーション モードを開始します。
vrf vrf-name 例 : <pre>switch(config-router)# vrf 450 switch(config-router-vrf)#</pre>	ルータ VRF 設定モードを開始し、この BGP インスタンスと VRF を関連付けます。
neighbor ip-address remote-as as-number 例: <pre>switch(config-router-vrf)# neighbor 1::1 remote-as 2 switch(config-router-vrf-neighbor)#</pre>	リモート BGP ピアの IP アドレスおよび AS 番号を設定します。
address-family { ipv4 ipv6 } { multicast unicast } 例 : <pre>switch(config-router-vrf-neighbor)# address-family ipv6 unicast switch(config-router-vrf-neighbor-af)#</pre>	指定されたアドレス ファミリに対応するグローバルアドレスファミリ コンフィギュレーション モードを開始します。
soo value 例 : <pre>switch(config-router-vrf-neighbor-af)# soo 22:14</pre>	元の BGP 拡張コミュニティ 値のサイトを構成します。 この値は、次のいずれかの形式です。 - asn:number - IP address:number 番号の範囲は、2 バイトの ASN の場合は 0 ～ 65535、4 バイトの ASN の場合は 0 ～ 4294967295 です。

BGP の調整

一連のオプション パラメータを使用することによって、BGP 特性を調整できます。

BGP を調整するには、ルータ コンフィギュレーション モードで次のオプション コマンドを使用します。

コマンド	目的
bestpath [always-compare-med compare-routerid igp-metric ignore med { missing-as-worst non-deterministic } as-path multipath-relax] 例 : <pre>switch(config-router)# bestpath always-compare-med switch(config-router)# bestpath as-path multipath-relax</pre>	ベストパスアルゴリズムを変更します。オプションパラメータは次のとおりです。 • always-compare-med : 異なる自律システム (AS) からのパスの MED を比較します。 • compare-routerid : 同一の eBGP パスのルータ ID を比較します。 • igp-metric ignore : ベストパス選択時に内部ゲートウェイプロトコル (IGP) メトリックを無視します。このオプションは、Cisco NX-OS リリース 9.2(2) 以降で使用可能です。 • med missing-as-worst : 消失した MED を最高の MED と見なします。 • med non-deterministic : 同じ自律システムからのパス間で、必ずしも最適な MED パスを選択しません。 • as-path multipath-relax : AS パスの長さが同じで、他のマルチパスの条件を満たしている場合、別の AS 番号から受け取ったパスをマルチパスとして扱えるようにします。
enforce-first-as 例 : <pre>switch(config-router)# enforce-first-as</pre>	ネイバー自律システムを eBGP の AS_path 属性で指定する最初の AS 番号にします。
log-neighbor-changes 例 : <pre>switch(config-router)# log-neighbor-changes</pre>	ネイバーでステートが変化したときに、システムメッセージを生成します。 (注) 特定のネイバーのネイバーステータス変化に関するメッセージを抑制するには、ネイバーコンフィギュレーションモードで log-neighbor-changes コマンドを使用できます。
router-id id 例 : <pre>switch(config-router)# router-id 209.165.20.1</pre>	この BGP スピーカのルータ ID を手動で設定します。

コマンド	目的
timers [bestpath-delay delay bgp keepalive holdtime prefix-peer-timeout timeout] 例 : <pre>switch(config-router)# timers bgp 90 270</pre>	BGP タイマー値を設定します。オプション パラメータは次のとおりです。 • delay : 再起動後の初期最適パス タイムアウト値。有効な範囲は 0 ～ 3600 秒です。デフォルト値は 300 です。 • keepalive : BGP セッション キープアライブ タイム。有効な範囲は 0 ～ 3600 秒です。デフォルト値は 60 です。 • holdtime : BGP セッションのホールド時間。指定できる範囲は 0 ～ 3600 秒です。デフォルト値は 180 です。 • timeout : プレフィックス ピア タイムアウト値。有効な範囲は 0 ～ 1200 秒です。デフォルト値は 30 です。 このコマンドの設定後、BGP セッションを手動でリセットする必要があります。

BGP を調整するには、ルータ アドレス ファミリ設定モードで次のオプション コマンドを使用します。

コマンド	目的
distance ebgp-distance ibgp distance local-distance 例 : <pre>switch(config-router-af)# distance 20 100 200</pre>	BGP のアドミニストレーティブディスタンスを設定します。範囲は 1 ～ 255 です。デフォルトの設定は次のとおりです。 • eBGP 距離 : 20。 • iBGP 距離 : 200。 • ローカル ディスタンス : 220。ローカル ディスタンスは、集約廃棄ルートが RIB に組み込まれている場合に、集約廃棄ルートに使用するアドミニストレーティブ ディスタンスです。
bestpath all-paths-ecmp 例 : <pre>switch(config-router-af)# bestpath all-paths-ecmp</pre>	ベストパス計算中にすべてのパスを ECMP として扱います

BGP を調整するには、ネイバー コンフィギュレーション モードで次のオプション コマンドを使用します。

コマンド	目的
description string 例 : <pre>switch(config-router-neighbor) # description main site</pre>	この BGP ピアを説明するストリングを設定します。ストリングには最大 80 の英数字を使用できます。
low-memory exempt 例 : <pre>switch(config-router-neighbor) # low-memory exempt</pre>	メモリ不足状態によるシャットダウンからこの BGP ネイバーを除外します。
transport connection-mode passive 例 : <pre>switch(config-router-neighbor) # transport connection-mode passive</pre>	受動接続の確立だけが可能です。この BGP スピーカは BGP ピアへの TCP 接続を開始しません。このコマンドの設定後、BGP セッションを手動でリセットする必要があります。
remove-private-as 例 : <pre>switch(config-router-neighbor) # remove-private-as</pre>	eBGP ピアへの発信ルート アップデートからプライベート AS 番号を削除します。このコマンドによって、BGP ネイバーセッションの自動ソフトクリアまたはリフレッシュが開始されます。 (注) このコマンドの詳細については、「 詳細な BGP の注意事項と制限事項 」を参照してください。
update-source interface-type number 例 : <pre>switch(config-router-neighbor) # update-source ethernet 1/2</pre>	ピアとの BGP セッション用に設定されたインターフェイスの送信元 IP アドレスを使用するように、BGP スピーカを設定します。このコマンドによって、BGP ネイバーセッションの自動通知およびセッションリセットが開始されます。
log-neighbor-changes [disable] 例 : <pre>switch(config-router-neighbor) # log-neighbor-changes disable</pre>	この特定のネイバーの状態が変化すると、システムメッセージを生成します。 無効オプションを使用すると、この特定のネイバーのネイバーステータス変化に関するメッセージが抑制されます。

BGP を調整するには、ネイバーアドレスファミリ コンフィギュレーションモードで次のオプション コマンドを使用します。

コマンド	目的
suppress-inactive 例 : <pre>switch(config-router-neighbor-af) # suppress-inactive</pre>	ベスト（アクティブ）ルートだけを BGP ピアにアドバタイズします。このコマンドによって、BGP ネイバーセッションの自動ソフトクリアまたはリフレッシュが開始されます。
default-originate [route-map map-name] 例 : <pre>switch(config-router-neighbor-af) # default-originate</pre>	BGP ピアへのデフォルト ルートを作成します。
filter-list list-name { in out } 例 : <pre>switch(config-router-neighbor-af) # filter-list BGPFilter in</pre>	着信または発信ルートアップデートに関して、この BGP ピアに AS_path フィルタ リストを適用します。このコマンドによって、BGP ネイバーセッションの自動ソフトクリアまたはリフレッシュが開始されます。
prefix-list list-name { in out } 例 : <pre>switch(config-router-neighbor-af) # prefix-list PrefixFilter in</pre>	着信または発信ルートアップデートに関して、この BGP ピアにプレフィックスリストを適用します。このコマンドによって、BGP ネイバーセッションの自動ソフトクリアまたはリフレッシュが開始されます。
send-community 例 : <pre>switch(config-router-neighbor-af) # send-community</pre>	この BGP ピアにコミュニティ属性を送信します。このコマンドによって、BGP ネイバーセッションの自動ソフトクリアまたはリフレッシュが開始されます。
send-extcommunity 例 : <pre>switch(config-router-neighbor-af) # send-extcommunity</pre>	この BGP ピアに拡張コミュニティ属性を送信します。このコマンドによって、BGP ネイバーセッションの自動ソフトクリアまたはリフレッシュが開始されます。
[no default] as-override 例 : <pre>switch(config-router-neighbor-af) # as-override</pre>	no - (オプション) コマンドを無効にします。 default : (オプション) デフォルト モードにコマンドを移動します。 as-override : eBGP ピアに更新を送信する際に、パス属性内のピアの AS 番号をすべてローカル AS 番号に置き換えます。

仮想化の設定

始める前に

BGP 機能を有効にしていることを確認します（[BGP 機能の有効化](#)のセクションを参照してください）。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例： switch# configure terminal switch(config)#	コンフィギュレーション モードに入ります。
ステップ 2	vrf context vrf-name 例： switch(config)# vrf context RemoteOfficeVRF switch(config-vrf)#	新しい VRF を作成し、VRF 設定モードを開始します。
ステップ 3	exit 例： switch(config-vrf)# exit switch(config)#	VRF設定モードを終了します。
ステップ 4	router bgp as-number 例： switch(config)# router bgp 65536 switch(config-router)#	自律システム番号を設定して、新しい BGP プロセスを作成します。
ステップ 5	vrf vrf-name 例： switch(config-router)# vrf RemoteOfficeVRF switch(config-router-vrf)#	ルータ VRF設定モードを開始し、この BGP インスタンスと VRF を関連付けます。
ステップ 6	neighbor ip-address remote-as as-number 例： switch(config-router-vrf)# neighbor 209.165.201.1 remote-as 65536 switch(config-router--vrf-neighbor)#	リモート BGP ピアの IP アドレスおよび AS 番号を設定します。
ステップ 7	(任意) bestpath as-path multipath-relax 例： switch(config-router-vrf)# bestpath as-path multipath-relax	自律パスの長さが同じで、他のマルチパスの条件を満たしている場合、別の自律システムから受け取ったパスをマルチパスとして扱えるようにします。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 8	(任意) copy running-config startup-config 例 : <pre>switch(config-router-neighbor)# copy running-config startup-config</pre>	この設定変更を保存します。

例

次に、VRF を作成し、VRF でルータ ID を設定する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# vrf context NewVRF
switch(config-vrf)# exit
switch(config)# router bgp 65536
switch(config-router)# vrf NewVRF
switch(config-router-vrf)# neighbor 209.165.201.1 remote-as 65536
switch(config-router-vrf-neighbor)# copy running-config startup-config
```

BMP の設定

、デバイスで BMP を構成できます。

始める前に

BGPを有効にする必要があります。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	router bgp as-number 例 : <pre>switch(config)# router bgp 200 switch(config-router)#</pre>	BGP モードを開始し、ローカル BGP スピーカに自律システム番号を割り当てます。
ステップ 3	bmp server server-number 例 : <pre>switch(config-router)# bmp server 1 switch(config-router)#</pre>	BGP が情報を送信する BMP サーバを設定します。サーバ番号がキーとして使用されます。 (注)

	コマンドまたはアクション	目的
		最大 2 つの BMP サーバを構成できます。
ステップ 4	address ip-address port-number port-number 例 : <pre>switch(config-router)# address 10.1.1.1 port-number 2000</pre>	ホストの IPv4 または IPv6 アドレスと、BMP スピーカーが BMP サーバに接続するポート番号を設定します。
ステップ 5	description string 例 : <pre>switch(config-router)# description BMPserver1</pre>	BMP サーバの説明を設定します。最大 256 文字の英数字を入力できます。
ステップ 6	initial-refresh { skip delay time } 例 : <pre>switch(config-router)# initial-refresh delay 100</pre>	BGP がコンバージェスされ、後で BMP サーバ接続が確立されたときにルートリフレッシュを送信するオプションを設定します。 skip オプションは、BMP サーバ接続が後でアップした場合にルートリフレッシュを送信しないことを指定します。 delay オプションは、ルート更新を送信するまでの時間を秒単位で指定します。有効範囲は 30 ～ 720 秒で、デフォルトは 30 秒です。
ステップ 7	initial-delay time 例 : <pre>switch(config-router)# initial-delay 120</pre>	BMP サーバへの接続が試行されるまでの遅延を設定します。有効範囲は 30 ～ 720 秒で、デフォルトは 45 秒です。
ステップ 8	stats-reporting-period time 例 : <pre>switch(config-router)# stats-reporting-period 50</pre>	BMP サーバが BGP ネイバーから統計レポートを受信する時間間隔を設定します。有効範囲は 30 ～ 720 秒で、デフォルトはディスエーブルです。
ステップ 9	shutdown 例 : <pre>switch(config-router)# shutdown</pre>	BMP サーバへの接続を無効にします。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 10	neighbor ip-address remote-as as-number 例 : <pre>switch(config-router)# neighbor 192.168.1.2 remote-as 65535 switch(config-router-neighbor)#</pre>	BGP ルーティング用のネイバー コンフィギュレーションモードを開始し、ネイバー IP アドレスを設定します。
ステップ 11	bmp-activate-server server-number 例 : <pre>switch(config-router-neighbor)# bmp-activate-server 1</pre>	ネイバーの情報の送信先となる BMP サーバを設定します。
ステップ 12	(任意) show bgp bmp server [server-number][detail] 例 : <pre>switch(config-router-neighbor)# show bgp bmp server</pre>	BMP サーバ情報を表示します。
ステップ 13	(任意) copy running-config startup-config 例 : <pre>switch(config-router-neighbor)# copy running-config startup-config</pre>	この設定変更を保存します。

BGP 属性フィルタリングの設定とエラー処理

Cisco NX-OS リリース 9.3(3) 以降では、BGP属性フィルタリングとエラー処理を設定して、セキュリティレベルを向上させることができます。次の機能を利用でき、次の順序で実装されます。

- **パス属性 treat-as-withdraw:** アップデートに指定した属性タイプが含まれている場合に、指定したネイバーから受け取った BGP アップデートを treat-as-withdraw とすることを許可します。アップデートに含まれるプレフィックスは、ルーティングテーブルから削除されます。
- **パス属性 discard:** BGP アップデートの特定のパス属性を特定のネイバーから削除できます。
- **拡張属性エラー処理:** 形式が誤っているアップデートに起因するピアセッションのフラッピングを防止します。

属性タイプ 1、2、3、4、8、14、15、16 は、パス属性 treat-as-withdraw とパス属性 discard に対して設定できません。属性タイプ 9 (Originator)、タイプ 10 (Cluster-id) は、eBGP ネイバーでのみ設定できます。

BGP 更新メッセージからのパス属性の取り消しとしての処理

特定のパス属性を含むBGP更新を「扱うように」処理するには、ルータネイバーコンフィギュレーションモードで次のコマンドを使用します。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	[no] path-attribute treat-as-withdraw [value range start end] in 例 : <pre>switch#(config-router)# neighbor 10.20.30.40 switch(config-router-neighbor)# path-attribute treat-as-withdraw 100 in</pre> 例 : <pre>switch#(config-router)# neighbor 10.20.30.40 switch(config-router-neighbor)# path-attribute treat-as-withdraw range 21 255 in</pre>	指定されたパス属性またはパス属性の範囲を含む着信BGP更新メッセージをすべて取り消すものとして扱い、ルーティングテーブルが最新であることを確認するために着信ルートリフレッシュをトリガーします。treat-as-withdraw である BGP 更新のプレフィックスは、BGP ルーティング テーブルから削除されます。 このコマンドは、BGP テンプレート ピアおよび BGP テンプレート ピア セッションでもサポートされます。

BGP 更新メッセージからのパス属性の破棄

特定のパス属性を含む BGP アップデートを廃棄するには、ルータ ネイバー コンフィギュレーション モードで次のコマンドを使用します。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	[no] path-attribute discard [value range start end] in 例 : <pre>switch#(config-router)# neighbor 10.20.30.40 switch(config-router-neighbor)# path-attribute discard 100 in</pre> 例 : <pre>switch#(config-router)# neighbor 10.20.30.40 switch(config-router-neighbor)# path-attribute discard range 100 255 in</pre>	指定されたネイバーの BGP アップデート メッセージ内の指定されたパス属性をドロップし、ルーティング テーブルが最新であることを確認するために着信ルートリフレッシュをトリガーします。特定の属性または不要な属性の範囲全体を設定できます。 このコマンドは、BGP テンプレート ピアおよび BGP テンプレート ピア セッションでもサポートされます。 (注) discard と treat-as-withdraw の両方に同じパス属性が設定されている場合、

	コマンドまたはアクション	目的
		treat-as-withdraw の優先順位が高くなります。

拡張属性エラー処理のイネーブル化またはディセーブル化

BGP 拡張属性エラー処理はデフォルトで有効になっていますが、無効にすることもできます。この機能は、RFC 7606 に準拠しており、不正な更新によるピア セッションのフラッピングを防止します。デフォルトの動作は、eBGP ピアと iBGP ピアの両方に適用されます。

拡張エラー処理を無効または再度有効にするには、ルータ設定モードで次のコマンドを使用します。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	[no] enhanced-error 例 : switch(config)# router bgp 1000 switch(config-router)# enhanced-error	BGP 拡張属性エラー処理をいネーブルまたはディセーブルにします。

取り消されたパス属性または破棄されたパス属性の表示

廃棄または不明なパス属性に関する情報を表示するには、次のいずれかのタスクを実行します。

コマンド	目的
show bgp {ipv4 ipv6} unicast path-attribute discard]	属性が破棄されたすべてのプレフィックスを表示します。
show bgp {ipv4 ipv6} unicast path-attribute unknown]	不明な属性を持つすべてのプレフィックスを表示します。
show bgp {ipv4 ipv6} unicast ip-address	プレフィックスに関連付けられている不明な属性および破棄された属性を表示します。

次の例は、属性が廃棄されたプレフィックスを示しています。

```
switch# show bgp ipv4 unicast path-attribute discard
Network                Next Hop
1.1.1.1/32              20.1.1.1
1.1.1.2/32              20.1.1.1
1.1.1.3/32              20.1.1.1
```

次の例は、不明な属性を持つプレフィックスを示しています。

```
switch# show bgp ipv4 unicast path-attribute unknown
Network                Next Hop
2.2.2.2/32              20.1.1.1
2.2.2.3/32              20.1.1.1
```

次の例は、プレフィックスに関連付けられている不明な属性および破棄された属性を表示します。

```
switch# show bgp ipv4 unicast 2.2.2.2
BGP routing table entry for 2.2.2.2/32, version 6241
Paths: (1 available, best #1, table default)
    Not advertised to any peer
    Refresh Epoch 1
    1000
    20.1.1.1 from 20.1.1.1 (20.1.1.1)
    Origin IGP, localpref 100, valid, external, best
    unknown transitive attribute: flag 0xE0 type 0x62 length 0x64
      value 0000 0000 0100 0000 0200 0000 0300 0000
            0400 0000 0500 0000 0600 0000 0700 0000
            0800 0000 0900 0000 0A00 0000 0B00 0000
            0C00 0000 0D00 0000 0E00 0000 0F00 0000
            1000 0000 1100 0000 1200 0000 1300 0000
            1400 0000 1500 0000 1600 0000 1700 0000
            1800 0000
    rx pathid: 0, tx pathid: 0x0
    Updated on Jul 20 2019 07:50:43 PST
```

BGP グレースフル シャットダウン

BGP グレースフル シャットダウンに関する情報

リリース 9.3(1) 以降、BGP はグレースフル シャットダウン機能をサポートしています。この BGP 機能は、BGP **shutdown** コマンドと連携して次のことを行います。

- ルータまたはリンクがオフラインになったときのネットワーク コンバージェンス時間を大幅に短縮します。
- ルータまたはリンクがオフラインになったときに、転送中のドロップされたパケットを削減または排除します。

名前にかかわらず、BGP グレースフル シャットダウンは実際にはシャットダウンを引き起こしません。代わりに、ルータまたはリンクが間もなくダウンすることを、接続されているルータに通知します。

グレースフル シャットダウン機能は、GRACEFUL_SHUTDOWN ウェルノウン コミュニティ (0xFFFF0000 または 65535:0) を使用します。これは、IANA および IETF によって RFC 8326 によって識別されます。この既知のコミュニティは任意のルートにアタッチでき、ルートの他の属性と同様に処理されます。

この機能は、ルータまたはリンクがダウンすることを通知するため、メンテナンス時間帯または計画停止の準備に役立ちます。トラフィックへの影響を制限するには、BGP をシャットダウンする前にこの機能を使用します。

グレースフル シャットダウンの認識とアクティブ化

BGP ルータは、すべてのルートの優先事項を、GRACEFUL SHUTDOWN 対応というコンセプトを通し、GRACEFUL_SHUTDOWN コミュニティによって制御できます。グレースフルシャットダウン対応は、デフォルトでイネーブルになっています。これにより、受信側ピアは、GRACEFUL_SHUTDOWN コミュニティを伝える着信ルートを優先しなくなります。一般的な使用例ではありませんが、**graceful-shutdown aware** コマンドを使用して、グレースフルシャットダウン対応を無効にしてから再度有効にすることもできます。

グレースフル シャットダウン対応は、BGP グローバル コンテキストでのみ適用されます。コンテキストの詳細については、[グレースフルシャットダウンのコンテキスト \(343 ページ\)](#) を参照してください。対応のためのオプションは、**activate** という別のオプションと一緒に動作します。このオプションをルートマップに割り当てると、グレースフルシャットダウンのルートをより詳細に制御できます。

グレースフル シャットダウン対応オプションとアクティブ化オプションの協同作用

グレースフル シャットダウンがアクティブな場合、**activate** キーワードを指定した場合にのみ、GRACEFUL_SHUTDOWN コミュニティがルート更新に追加されます。この時点で、コミュニティを含む新しいルート更新が生成され、送信されます。**graceful-shutdown aware** コマンドが設定されると、コミュニティを受信するすべてのルータは、アップデート内のルートの優先を解除します（そのルート優先度を下げます）。**graceful-shutdown aware** コマンドを使用しなかった場合、BGP は GRACEFUL_SHUTDOWN コミュニティの設定されたルートの優先度を下げません。

この機能がアクティブになり、ルータがグレースフルシャットダウンの対応状態になった場合でも、BGP は引き続き、GRACEFUL_SHUTDOWN コミュニティが有効だとしてルートを考慮します。ただし、これらのルートには、最適パスの計算で最低の優先度が与えられます。代替パスが使用可能な場合は、新しい最適パスが選択され、まもなくダウンするルータまたはリンクに対応するためのコンバージェンスが行われます。

グレースフル シャットダウンのコンテキスト

BGP のグレースフルシャットダウン機能には、機能の影響と使用可能な機能を決定する2つのコンテキストがあります。

コンテキスト	影響	コマンド
グローバル	スイッチ全体と、スイッチによって処理されるすべてのルート。たとえば、GRACEFUL_SHUTDOWN コミュニティを持つすべてのルートを再アドバタイズします。	graceful-shutdown activate [route-map ルート マップ] graceful-shutdown aware
Peer	BGP ピアまたはネイバー間のリンク。たとえば、ピア間のリンクを 1 つだけ GRACEFUL_SHUTDOWN コミュニティでアドバタイズします。	graceful-shutdown activate [route-map ルート マップ]

ルート マップによるグレースフル シャットダウン

グレースフル シャットダウンは、ルート ポリシー マネージャ (RPM) 機能と連携して、スイッチの BGP ルータが GRACEFUL_SHUTDOWN コミュニティを使用してルートを送受信する方法を制御します。ルート マップは、インバウンドおよびアウトバウンド方向でコミュニティとのルート更新を処理できます。通常、ルートマップは必要ありません。ただし、必要に応じて、グレースフルシャットダウンルートの制御をカスタマイズするために使用できます。

通常のインバウンドルート マップ

通常のインバウンドルート マップは、BGP ルータに着信するルートに影響します。ルータはデフォルトでグレースフルシャットダウンを認識するため、通常のインバウンドルート マップはグレースフル シャットダウン機能では一般的に使用されません。

Cisco NX-OS リリース 9.3 (1) 以降を実行している Cisco Nexus スイッチでは、グレースフルシャットダウン機能のインバウンドルート マップは必要ありません。Cisco NX-OS リリース 9.3

(1) 以降には、BGP ルータがグレースフルシャットダウン対応である場合に GRACEFUL_SHUTDOWN コミュニティを持つすべてのルートを自動的に非優先にする、暗黙のインバウンドルート マップがあります。

通常のインバウンドルート マップは、既知の GRACEFUL_SHUTDOWN コミュニティと一致するように設定できます。これらの着信ルートマップは一般的ではありませんが、使用される場合があります。

- スイッチが 9.3 (1) よりも前の Cisco NX-OS リリースを実行している場合、NX-OS 9.3 (1) には暗黙的なインバウンドルート マップがありません。これらのスイッチでグレースフルシャットダウン機能を使用するには、グレースフルシャットダウンインバウンドルート マップを作成する必要があります。ルートマップは、既知の GRACEFUL_SHUTDOWN コミュニティを持つインバウンドルートと一致し、それらを許可し、それらを非優先にする必要があります。着信ルート マップが必要な場合は、9.3 (1) より前のバージョンの

NX-OS を実行し、グレースフル シャットダウン ルートを受信している BGP ピアで作成します。

- グレースフル シャットダウン 認識をディセーブルにし、一部の BGP ネイバーからの `GRACEFUL_SHUTDOWN` コミュニティを持つ着信ルートでルータを動作させる場合は、それぞれのピアでインバウンド ルート マップを設定できます。

通常のアウトバウンド ルート マップ

通常のアウトバウンド ルート マップは、BGP ルータが送信するルートの転送を制御します。通常のアウトバウンド ルート マップは、グレースフル シャットダウン 機能に影響を与える可能性があります。たとえば、`GRACEFUL_SHUTDOWN` コミュニティで一致するようにアウトバウンド ルート マップを設定し、属性を設定できます。これは、グレースフル シャットダウン アウトバウンド ルート マップよりも優先されます。

グレースフル シャットダウン アウトバウンド ルート マップ

アウトバウンド グレースフル シャットダウン ルート マップは、グレースフル シャットダウン 機能のアウトバウンド ルート マップの特定のタイプです。これらはオプションですが、ルート マップに関連付けられているコミュニティ リストがすでにある場合に役立ちます。通常のグレースフル シャットダウン アウトバウンド ルート マップには、特定の属性を設定または変更するための `set` 句のみが含まれています。

アウトバウンド ルート マップは、次の方法で使用できます。

- 既存のアウトバウンド ルート マップをすでに持っている顧客の場合は、より大きいシーケンス番号を持つ新しいエントリを追加し、`GRACEFUL_SHUTDOWN` ウェルノウン コミュニティで照合し、必要な属性を追加できます。
- **`graceful-shutdown activate route-map name`** オプションを使用してグレースフル シャットダウン アウトバウンド ルート マップを使用することもできます。これが一般的な使用例です。

このルート マップには `match` 句が必要ないため、ルート マップはネイバーに送信されるすべてのルートで一致します。

ルート マップの優先順位

同じルータ上に複数のルート マップが存在する場合は、次の優先順位が適用されて、コミュニティとのルートの処理方法が決定されます。次の例を考慮してください。60 のローカル設定を設定する標準の発信ルート マップ名 `Red` があるとします。また、`Blue` という名前のピア グレースフル シャットダウン ルート マップがあり、`local-pref` が 30 に設定されているとします。ルート更新が処理されると、`Red` は `Blue` を上書きするため、ローカル プリファレンスは 60 に設定されます。

- 通常の発信ルート マップは、ピア グレースフル シャットダウン マップよりも優先されます。

- ピア グレースフル シャットダウン マップは、グローバル グレースフル シャットダウン マップよりも優先されます。

注意事項と制約事項

BGP グローバル シャットダウンの制限事項と注意事項は、次のとおりです。

- グレースフルシャットダウン機能は、影響を受けるルータの代替ルートがネットワークに存在する場合にのみ、トラフィック損失を回避するのに役立ちます。ルータに代替ルートがない場合は、GRACEFUL_SHUTDOWN コミュニティを伝送するルートが使用可能な唯一のルートであるため、最適パスの計算に使用されます。この状況では、機能の目的が失われます。
- GRACEFUL_SHUTDOWN コミュニティを送信するには、BGP 送信コミュニティの設定が必要です。
- ルート マップの場合:
 - グローバルルートマップとネイバールートマップが設定されている場合、ネイバー単位のルートマップが優先されます。
 - 発信ルートマップは、グレースフル シャットダウン用に設定されたグローバル ルートマップよりも優先されます。
 - 発信ルートマップは、グレースフル シャットダウン用に設定されたピアルートマップよりも優先されます。
 - レガシー（既存の）インバウンドルートマップにグレースフル シャットダウン機能を追加するには、次の手順を実行します。
 1. graceful shutdown match 句をルートマップの先頭に追加します。これには、句に低いシーケンス番号（たとえば、シーケンス番号 0）を設定します。
 2. graceful shutdown 句の後に continue ステートメントを追加します。continue ステートメントを省略すると、graceful shutdown 句と一致するルートマップ処理が停止します。シーケンス番号が大きい他の句（たとえば、1 以上）は処理されません。

グレースフル シャットダウン タスクの概要

グレースフル シャットダウン機能を使用するには、通常、すべての Cisco Nexus スイッチでグレースフル シャットダウン対応をイネーブルにし、機能をイネーブルのままにします。BGP ルータをオフラインにする必要がある場合は、graceful-shutdown activate を設定します。

次の詳細に、グレースフル シャットダウン機能を使用するためのベスト プラクティスを示します。

ルータまたはリンクをダウンさせるには、次の手順を実行します。

1. グレースフル シャットダウン機能を設定します。

2. ネイバーでベストパスを確認します。
3. 最適パスが再計算されたら、BGP を無効にする **shutdown** コマンドを発行します。
4. ルータまたはリンクをシャットダウンする必要がある作業を実行します。

ルータまたはリンクをオンラインに戻すには、次の手順を実行します。

1. シャットダウンが必要な作業が完了したら、BGP を再度イネーブルにします (**no shutdown**)。
2. グレースフル シャットダウン機能を無効にします (config モードの **no graceful-shutdown activate**)。

リンクのグレースフル シャットダウンの設定

この作業では、2 つの BGP ルータ間の特定のリンクでグレースフル シャットダウンを設定できます。

始める前に

BGP をまだ有効にしていない場合は、ここで有効にします (**feature bgp**)。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	config terminal 例 : switch-1# configure terminal switch-1(config)#	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	router bgp autonomous-system-number 例 : switch-1(config)# router bgp 110 switch-1(config-router)#	ルータ コンフィギュレーション モードを開始して、BGP ルーティング プロセスを作成または設定します。
ステップ 3	neighbor { ipv4-address ipv6-address } remote-as as-number 例 : switch-1(config-router)# neighbor 10.0.0.3 remote-as 200 switch-1(config-router-neighbor)#	ネイバーが属する自律システム (AS) を設定します。
ステップ 4	graceful-shutdown activate [route-map map-name] 例 :	ネイバーへのリンクでグレースフル シャットダウンを設定します。また、既知の GRACEFUL_SHUTDOWN コミュニティを使用してルートをアドバタイズ

	コマンドまたはアクション	目的
	<pre>switch-1(config-router-neighbor)# graceful-shutdown activate route-map gshutPeer switch-1(config-router-neighbor)#</pre>	し、アウトバウンドルート更新にルートマップを適用します。 ルートは、デフォルトでグレースフルシャットダウンコミュニティでアドバタイズされます。この例では、ルートは gshutPeer という名前のルートマップを使用して、グレースフルシャットダウンコミュニティを持つネイバーにアドバタイズされます。 gshut コミュニティを受信したデバイスは、ルートのコミュニティを確認し、オプションでコミュニティを使用してルーティングポリシーを適用します。

GRACEFUL_SHUTDOWN コミュニティに基づく BGP ルートのフィルタリングとローカルプリファレンスの設定

まだ 9.3(1) を実行していないスイッチには、GRACEFUL_SHUTDOWN コミュニティ名と一致するインバウンドルートマップがありません。したがって、正しいルートを識別して先送りする方法はありません。

9.3(1) よりも前のリリースの NX-OS を実行しているスイッチでは、グレースフルシャットダウン (65535:0) のコミュニティ値と一致するインバウンドルートマップを設定し、ルートを非優先にする必要があります。

スイッチが 9.3(1) 以降を実行している場合、着信ルートマップを設定する必要はありません。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch-1# configure terminal switch-1(config)#</pre>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	ip community list standard community-list-name seq sequence-number { permit deny } value 例 : <pre>switch-1(config)# ip community-list standard GSHUT seq 10 permit 65535:0 switch-1(config)#</pre>	コミュニティリストを設定し、よく知られたグレースフルシャットダウンコミュニティ値を持つルートを許可または拒否します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 3	route map map-tag {deny permit} sequence-number 例 : <pre>switch-1(config)# route-map RM_GSHUT permit 10 switch-1(config-route-map)#</pre>	ルート マップをシーケンス 10 として設定し、GRACEFUL_SHUTDOWN コミュニティを持つルートを許可します。
ステップ 4	match community community-list-name 例 : <pre>switch-1(config-route-map)# match community GSHUT switch-1(config-route-map)#</pre>	IP コミュニティ リスト GSHUT に一致するルートがルート ポリシー マネージャ (RPM) により処理されるように設定します。
ステップ 5	set local-preference local-pref-value 例 : <pre>switch-1(config-route-map)# set local-preference 10 switch-1(config-route-map)#</pre>	IP コミュニティ リスト GSHUT に一致するルートに、指定されたローカルプリファレンスが与えられるように設定します。
ステップ 6	exit 例 : <pre>switch-1(config-route-map)# exit switch-1(config)#</pre>	ルートマップ設定モードを終了し、グローバル設定モードに戻ります。
ステップ 7	router bgp community-list-name 例 : <pre>switch-1(config)# router bgp 100 switch-1(config-router)#</pre>	ルータ設定モードを開始し、BGP インスタンスを作成します。
ステップ 8	neighbor { ipv4-address ipv6-address } 例 : <pre>switch-1(config-router)# neighbor 10.0.0.3 switch-1(config-router-neighbor)#</pre>	指定したネイバーのルート BGP ネイバー モードを開始します。
ステップ 9	address-family { address-family sub family } 例 : <pre>nxosv2(config-router-neighbor)# address-family ipv4 unicast nxosv2(config-router-neighbor-af)#</pre>	ネイバーをアドレスファミリ (AF) 設定モードにします。
ステップ 10	send community 例 : <pre>nxosv2(config-router-neighbor-af)# send-community nxosv2(config-router-neighbor-af)#</pre>	ネイバーとの BGP コミュニティ交換を可能にします。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 11	route map map-tag in 例 : <pre>nxosv2(config-router-neighbor-af) # route-map RM_GSHUT in nxosv2(config-router-neighbor-af) #</pre>	ネイバーからの着信ルートにルートマップを適用します。この例では、RM_GSHUT という名前のルートマップは、ネイバーからの GRACEFUL_SHUTDOWN コミュニティを持つルートを許可します。

すべての BGP ネイバーのグレースフル シャットダウンの設定

グレースフル シャットダウン イニシエータのすべてのネイバーに GRACEFUL_SHUTDOWN ウェルノウン コミュニティを手動で適用できます。

すべての BGP ネイバーに対して、グローバル レベルでグレースフル シャットダウンを設定できます。

始める前に

BGP をまだ有効にしていない場合は、ここで有効にします（**feature bgp**）。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch-1# configure terminal switch-1(config)#</pre>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	router bgp autonomous-system-number 例 : <pre>switch-1(config)# router bgp 110 switch-1(config-router)#</pre>	ルータ コンフィギュレーション モードを開始して、BGP ルーティング プロセスを作成または設定します。
ステップ 3	graceful-shutdown activate [route-map map-name] 例 : <pre>switch-1(config-router-neighbor) # graceful-shutdown activate route-map gshutPeer switch-1(config-router-neighbor) #</pre>	すべてのネイバーへのリンクのグレースフルシャットダウンルートマップを設定します。また、既知の GRACEFUL_SHUTDOWN コミュニティを持つすべてのルートをアドバタイズし、ルートマップをアウトバウンドルート アップデートに適用します。 ルートはデフォルトで GRACEFUL_SHUTDOWN コミュニティでアドバタイズされます。この例では、ルートが gshutPeer という名前のルート

	コマンドまたはアクション	目的
		マップを持つコミュニティを持つすべてのネイバーにアドバタイズされます。ルートマップには set 句のみを含める必要があります。 GRACEFUL_SHUTDOWN コミュニティを受信したデバイスは、ルートのコミュニティを確認し、オプションでコミュニティを使用してルーティング ポリシーを適用します。

GRACEFUL_SHUTDOWN コミュニティを使用したすべてのルートのプリファレンスの制御

Cisco NX-OS では、GRACEFUL_SHUTDOWN コミュニティを持つ着信ルートの優先順位を下げるができます。 **graceful shutdown aware** が有効になっている場合、最適パス計算時に、BGP はコミュニティを伝送するルートを最も低い優先順位と見なします。デフォルトでは、プリファレンスの引き下げが有効になっていますが、このオプションを選択的に無効にすることもできます。

このオプションをイネーブルまたはディセーブルにするたびに、BGP のベストパス計算がトリガーされます。このオプションを使用すると、グレースフルシャットダウンのウェルノウンコミュニティにおける BGP のベストパス計算の動作を柔軟に制御できます。

始める前に

BGP を有効にしていない場合は、ここで有効にします (**feature bgp**)。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch-1(config)# config terminal switch-1(config)#</pre>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	router bgp autonoums-system 例 : <pre>switch-1(config)# router bgp 100 switch-1(config-router)#</pre>	ルータ コンフィギュレーション モードを開始し、BGP ルーティング プロセスを設定します。
ステップ 3	(任意) no graceful-shutdown aware 例 :	この BGP ルータでは、GRACEFUL_SHUTDOWN コミュニティ

	コマンドまたはアクション	目的
	<pre>switch-1(config-router)# no graceful-shutdown aware switch-1(config-router)#</pre>	を持つすべてのルートに低い優先順位を指定しないという意味です。グレースフルシャットダウン認識機能がディセーブルになっている場合、デフォルトアクションはルートを非優先にします。そのため、コマンドには no 形式というオプションが存在しており、これを使用すると、グレースフルシャットダウンルートは非優先になりません。

GRACEFUL_SHUTDOWN コミュニティのピアへの送信の防止

発信ルート更新にルート属性として追加された GRACEFUL_SHUTDOWN コミュニティが不要になった場合は、コミュニティを削除して、指定されたネイバーに送信しなくなります。1つの使用例は、ルータが自律システム境界にあり、グレースフルシャットダウン機能が自律システム境界の外部に伝播しないようにする場合です。

GRACEFUL_SHUTDOWN がピアに送信されないようにするには、**send community** オプションを無効にするか、コミュニティを発信ルートマップから削除します。

次の方法の中から 1 つを選択してください。

- 実行コンフィギュレーションで **send-community** を無効にします。

例：

```
nxosv2(config-router-neighbor-af)# no send-community standard
nxosv2(config-router-neighbor-af)#
```

このオプションを使用すると、スイッチは GRACEFUL_SHUTDOWN コミュニティを受信しますが、発信ルートマップを介してダウンストリームネイバーに送信されません。すべての標準コミュニティも送信されません。

- 次の手順に従って、発信ルートマップを介して GRACEFUL_SHUTDOWN コミュニティを削除します。
 1. GRACEFUL_SHUTDOWN コミュニティと一致する IP コミュニティリストを作成します。
 2. GRACEFUL_SHUTDOWN コミュニティと照合する発信ルートマップを作成します。
 3. **set community-list delete** 句を使用して GRACEFUL_SHUTDOWN コミュニティを削除します。

このオプションを使用すると、コミュニティリストは GRACEFUL_SHUTDOWN コミュニティと一致し、許可されます。その後、発信ルートマップはコミュニティと照合され、発信ルートマップから削除されます。他のすべてのコミュニティは、問題なく発信ルートマップを通過します。

グレースフル シャットダウン情報の表示

グレースフル シャットダウン機能に関する情報は、次の **show** コマンドで確認できます。

コマンド	アクション
show ip bgp community-list graceful-shutdown	GRACEFUL_SHUTDOWN コミュニティを持つ BGP ルーティングテーブル内のすべてのエントリを表示します。
show running-config bgp	実行中の BGP のデフォルト設定を示します。
show running-config bgp all	グレースフル シャットダウン機能に関する情報など、実行中の BGP 設定のすべての情報を表示します。
show bgp address-family neighbors neighbor-address	機能がピアに設定されている場合、次のように表示されます。 - 指定されたネイバーの graceful-shutdown-activate 機能の状態 - 指定されたネイバーに設定されたグレースフルシャットダウンルートマップの名前
show bgp process	コンテキストに応じて異なる情報を表示します。 graceful-shutdown-activate オプションがピア コンテキストで設定されている場合、graceful-shutdown-active を介して機能の有効または無効状態を示します。 graceful-shutdown-activate オプションがグローバル コンテキストで設定され、graceful-shutdown ルートマップがある場合は、次のように機能の有効状態が表示されます。 - graceful-shutdown-active - graceful-shutdown-aware - graceful-shutdown route-map

コマンド	アクション
show ip bgp address	指定されたアドレスについて、次を含む BGP ルーティング テーブル情報を表示します。 - 最適パスとして指定されたアドレスの状態 - 指定されたアドレスが GRACEFUL_SHUTDOWN コミュニティの一部であるかどうか

グレースフル シャットダウンの設定例

次に、グレースフル シャットダウン機能を使用するための設定例を示します。

BGP リンクのグレースフル シャットダウンの設定

次に、ローカル プリファレンスとコミュニティを設定しながらグレースフル シャットダウンを設定する例を示します。

- 指定されたネイバーへのリンクのグレースフル シャットダウン アクティブ化の設定
- ルートへの GRACEFUL_SHUTDOWN コミュニティの追加
- コミュニティとのアウトバウンドルートに対して set 句のみを使用して gshutPeer という名前のルートマップを設定します。

```
router bgp 100
  neighbor 20.0.0.3 remote-as 200
    graceful-shutdown activate route-map gshutPeer
  address-family ipv4 unicast
    send-community

route-map gshutPeer permit 10
  set local-preference 0
  set community 200:30
```

All-Neighbor BGP リンクのグレースフル シャットダウンの設定

次に例を示します。

- ローカル ルータとそのすべてのネイバーを接続するすべてのリンクに対してグレースフル シャットダウン アクティブ化を設定します。
- GRACEFUL_SHUTDOWN コミュニティをルートに追加しています。
- すべての発信ルートに対して set 句のみを使用して gshutAall という名前のルートマップを設定します。

```
router bgp 200
  graceful-shutdown activate route-map gshutAll
```

```

route-map gshutAll permit 10
  set as-path prepend 10 100 110
  set community 100:80

route-map Red permit 10
  set local-pref 20

router bgp 100
  graceful-shutdown activate route-map gshutAll
  router-id 2.2.2.2
  address-family ipv4 unicast
  network 2.2.2.2/32
  neighbor 1.1.1.1 remote-as 100
  update-source loopback0
  address-family ipv4 unicast
  send-community
  neighbor 20.0.0.3 remote-as 200
  address-family ipv4 unicast
  send-community
  route-map Red out

```

この例では、ネイバー 1.1.1.1 に対して gshutAll ルート マップが有効になりますが、ネイバー 20.0.0.3 で設定された発信ルートマップ Red が優先されるため、ネイバー 20.0.0.3 に対しては有効になりません。

ピアテンプレートでのグレースフル シャットダウンの設定

この例では、ピアセッションテンプレートでグレースフルシャットダウン機能を設定します。これはネイバーによって継承されます。

```

router bgp 200
  template peer-session p1
    graceful-shutdown activate route-map gshut_out
  neighbor 1.1.1.1 remote-as 100
  inherit peer-session p1
  address-family ipv4 unicast
  send-community

```

GRACEFUL_SHUTDOWN コミュニティの使用およびインバウンドルートマップに基づく BGP ルートのフィルタリングとローカル プリファレンスの設定

次に、コミュニティ リストを使用して、GRACEFUL_SHUTDOWN コミュニティを持つ着信ルートをフィルタリングする例を示します。この設定は、Cisco NX-OS 9.3(1) を最小バージョンとして実行していないレガシー スイッチに役立ちます。

次に例を示します。

- GRACEFUL_SHUTDOWN コミュニティを持つルートを許可する IP コミュニティ リスト。
- RM_GSHUT という名前のルート マップは、GSHUT という名前の標準コミュニティ リストに基づいてルートを許可します。
- また、ルートマップは、処理するルートの優先順位を 0 に設定します。これにより、ルータがオフラインになったときに、それらのルートに最適パス計算の優先順位が低くなります。ネイバー (20.0.0.2) からの着信 IPv4 ルートにルート マップが適用されます。

```
ip community-list standard GSHUT permit 65535:0
```

```
route-map RM_GSHUT permit 10
  match community GSHUT
  set local-preference 0

router bgp 200
  neighbor 20.0.0.2 remote-as 100
  address-family ipv4 unicast
    send-community
  route-map RM_GSHUT in
```

グレースフル リスタートの設定

グレースフル リスタートを設定し、BGP に対してグレースフル リスタート ヘルパー機能をイネーブルにできます。

始める前に

BGP をイネーブルにする必要があります（「BGP のイネーブル化」の項を参照）。

VRF を作成します。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例： switch# configure terminal switch(config)#	コンフィギュレーション モードに入ります。
ステップ 2	router bgp as-number 例： switch(config)# router bgp 65535 switch(config-router)#	自律システム番号を設定して、新しい BGP プロセスを作成します。
ステップ 3	(任意) timers prefix-peer-timeout timeout 例： switch(config-router)# timers prefix-peer-timeout 20	BGP プレフィックス ピアのタイムアウト値を設定します（秒単位）。デフォルト値は 90 秒です。 (注) このコマンドは、Cisco NX-OS リリース 9.3(3) 以降でサポートされます。
ステップ 4	graceful-restart 例： switch(config-router)# graceful-restart	グレースフル リスタートおよびグレースフル リスタート ヘルパー機能をイネーブルにします。このコマンドは、デフォルトでイネーブルになっています。

	コマンドまたはアクション	目的
		このコマンドによって、BGP ネイバーセッションの自動通知およびセッションリセットが開始されます。
ステップ 5	graceful-restart {restart-time time stalepath-time time} 例 : <pre>switch(config-router)# graceful-restart restart-time 300</pre>	グレースフル リスタート タイマーを設定します。 オプション パラメータは次のとおりです。 • restart-time : BGP ピアに送信されたリスタートの最大時間。有効な範囲は 1 ～ 3600 秒です。デフォルトは 120 です。 • stalepath-time : BGP が再起動中の BGP ピアからの古いルートを維持する最大時間有効な範囲は 1 ～ 3600 秒です。デフォルトは 300 です。 NX-OS ソフトウェア リリース 9.3(3) より前では、BGP セッションがグレースフル リスタート機能をアドバタイズするには、BGP セッションの手動リセットが必要でした。NX-OS ソフトウェア リリース 9.3(3)以降では、このコマンドが有効になっている場合、BGP セッションは、BGP セッションを再起動する必要なく、グレースフル リスタート機能を動的にアドバタイズします。
ステップ 6	graceful-restart-helper 例 : <pre>switch(config-router)# graceful-restart restart-time 300</pre>	BGP GR が無効になっている場合、SSO や BGP プロセスの再起動などの特定の GR 対応イベントが N9K でローカルに発生している間、N9K 自体は必ずしも自身の転送状態を保持しません。ただし、GR ヘルパーとして、GR 機能をアドバタイズして再起動しているピアをサポートします。つまり、N9K は、ピアリングがダウンしたことを検出すると（ホールドタイマーの期限切れまたは通知メッセージの受信以外）、ピアを指すルートを失効させ、ピアの EOR（または失効パス タイムアウト）を待機します。ピアが再起動して N9K とのピアリングを再確立すると、ピアは自身のすべ

	コマンドまたはアクション	目的
		てのルートを再アドバタイズし、N9K は BGP およびルーティングテーブルでそれらのルートを更新します。ピアから EOR を受信するか、または古いパス タイムアウト（どちらか先に発生した方）を受信すると、N9K はそのピアから残りの古いルートをフラッシュします。ヘルパー モードがない場合、N9K は再起動中のリモート ピアから学習したルートを即座にクリアし、トラフィック損失につながる可能性があります。
ステップ 7	(任意) show running-config bgp 例： switch(config-router)# show running-config bgp	BGP の設定を表示します。
ステップ 8	(任意) copy running-config startup-config 例： switch(config-router)# copy running-config startup-config	この設定変更を保存します。

例

次に、グレースフル リスタートを有効にする例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# router bgp 65536
switch(config-router)# graceful-restart
switch(config-router)# graceful-restart restart-time 300
switch(config-router)# copy running-config startup-config
```

拡張 BGP の設定の確認

BGP の設定情報を表示するには、次のいずれかの作業を行います。

コマンド	目的
show bgp all [summary] [vrf vrf-name]	すべてのアドレスファミリについて、BGP 情報を表示します。
show bgp convergence [vrf vrf-name]	すべてのアドレスファミリについて、BGP 情報を表示します。

コマンド	目的
show bgp ip {unicast} [ip-address] community {regex expression [community] [no-advertise] [no-export] [no-export-subconfed]} [vrf vrf-name]	BGP コミュニティと一致する BGP ルートを表示します。
show bgp [vrf vrf-name] ip {unicast} [ip-address] community-list list-name [vrf vrf-name]	BGP コミュニティ リストと一致する BGP ルートを表示します。
show bgp ip {unicast} [ip-address] extcommunity {regex expression generic [non-transitive transitive] aa4:nn [exact-match]} [vrf vrf-name]	BGP 拡張コミュニティと一致する BGP ルートを表示します。
show bgp ip {unicast} [ip-address] extcommunity-list list-name [exact-match] [vrf vrf-name]	BGP 拡張コミュニティリストと一致する BGP ルートを表示します。
show bgp ip {unicast} [ip-address] {dampening dampened-paths [regex expression]} [vrf vrf-name]	BGP ルート ダンプニングの情報を表示します。 ルートフラップ ダンプニング情報を消去するには、 clear bgp dampening コマンドを使用します。
show bgp ip {unicast} [ip-address] history-paths [regex expression] [vrf vrf-name]	BGP ルート ヒストリ パスを表示します。
show bgp ip {unicast} [ip-address] filter-list list-name [vrf vrf-name]	BGP フィルタ リストの情報を表示します。
show bgp ip {unicast} [ip-address] neighbors [ip-address] [vrf vrf-name]	BGP ピアの情報を表示します。これらのネイバーを消去するには、 clear bgp neighbors コマンドを使用します。
show bgp ip {unicast} [ip-address] {nexthop nexthop-database} [vrf vrf-name]	BGP ルートネクストホップの情報を表示します。
show bgp paths	BGP パス情報を表示します。
show bgp ip {unicast} [ip-address] policy name [vrf vrf-name]	BGP ポリシー情報を表示します。ポリシー情報を消去するには、 clear bgp policy コマンドを使用します。
show bgp ip {unicast} [ip-address] prefix-list list-name [vrf vrf-name]	プレフィックス リストと一致する BGP ルートを表示します。
show bgp ip {unicast} [ip-address] received-paths [vrf vrf-name]	ソフト再構成用に保管されている BGP パスを表示します。

コマンド	目的
show bgp ip {unicast} [ip-address] regexp expression [vrf vrf-name]	AS_path 正規表現と一致する BGP ルートを表示します。
show bgp ip {unicast} [ip-address] route-map map-name [vrf vrf-name]	ルート マップと一致する BGP ルートを表示します。
show bgp peer-policy name [vrf vrf-name]	BGP ピア ポリシー情報を表示します。
show bgp peer-session name [vrf vrf-name]	BGP ピア セッション情報を表示します。
show bgp peer-template name [vrf vrf-name]	BGP ピア テンプレート情報を表示します。ピア テンプレートのすべてのネイバーを消去するには、 clear bgp peer-template コマンドを使用します。
show bgp process	BGP プロセス情報を表示します。
show ip bgp options	BGP のステータスと構成情報を表示します。このコマンドには複数のオプションがあります。詳細については、 Cisco Nexus 3000 シリーズ コマンド リファレンス を参照してください。
show ip mbgp options	BGP のステータスと構成情報を表示します。このコマンドには複数のオプションがあります。詳細については、 Cisco Nexus 3000 シリーズ コマンド リファレンス を参照してください。
show running-configuration bgp	現在実行中の BGP コンフィギュレーションを表示します。

BGP 統計情報の表示

BGP の統計情報を表示するには、次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
show bgp ip {unicast} [ip-address] flap-statistics [vrf vrf-name]	BGP ルート フラップの統計情報を表示します。これらの統計情報をクリアするには、 clear bgp flap-statistics コマンドを使用します。
show bgp sessions [vrf vrf-name]	すべてのピアの BGP セッションを表示します。これらの統計情報をクリアするには、 clear bgp sessions コマンドを使用します。

コマンド	目的
show bgp sessions [vrf vrf-name]	すべてのピアの BGP セッションを表示します。これらの統計情報をクリアするには、 clear bgp sessions コマンドを使用します。
show bgp statistics	BGP 統計情報を表示します。

BGP 向け BFD の構成例

この例は、個々の BGP ネイバーの BFD をイネーブルにする方法を示します。

```
router bgp 400
  router-id 2.2.2.2
  neighbor 172.16.2.3
    bfd
    remote-as 400
    update-source Vlan1002
    address-family ipv4 unicast
```

この例は、BGP プレフィックス ピアの BFD をイネーブルにする方法を示します。

```
router bgp 400
  router-id 1.1.1.1
  neighbor 172.16.2.0/24
    bfd
    remote-as 400
    update-source Vlan1002
    address-family ipv4 unicast
```

関連項目

BGP の詳細については、次の項目を参照してください。

- [高度な BGP の設定](#)（281 ページ）
- [Route Policy Manager の設定](#)（441 ページ）

その他の参考資料

BGP の実装に関連する詳細情報については、次の項を参照してください。

関連資料

関連項目	マニュアル タイトル
BGP CLI コマンド	『Cisco Nexus 3000 Series Command Reference』

MIB

MIB	MIB のリンク
BGP4-MIB CISCO-BGP4-MIB	MIB を検索してダウンロードするには、次の MIB ロケータ に移動します。



第 12 章

BGP 追加パスの設定

この章では、以前のパスを新しいパスで暗黙的に置き換えずに、同じプレフィックスの同じピアリングセッションを介したマルチパスのアドバタイズメントを可能にする BGP 追加パスの設定方法について説明します。この動作により、パス ダイバーシティが向上し、Multi-Exit Discriminator (MED) の変動が減少します。

この章は、次の項で構成されています。

- [BGP 追加パスについて \(363 ページ\)](#)
- [注意事項と制約事項 \(366 ページ\)](#)
- [BGP 追加パスの設定 \(366 ページ\)](#)
- [BGP 追加パスの設定例 \(372 ページ\)](#)
- [BGP 追加パスの設定の確認 \(373 ページ\)](#)

BGP 追加パスについて

このセクションは、次のトピックで構成されています。

概要

BGP ルータおよびルートリフレクタ (RR) は、セッションにおけるベストパスにのみ伝播します。プレフィックスアドバタイズメントで、以前アナウンスされたプレフィックスを置き換えます (この動作は暗黙の取り消しとして知られています)。暗黙の取り消しはスケーリングには適していますが、パス ダイバーシティに影響があります。

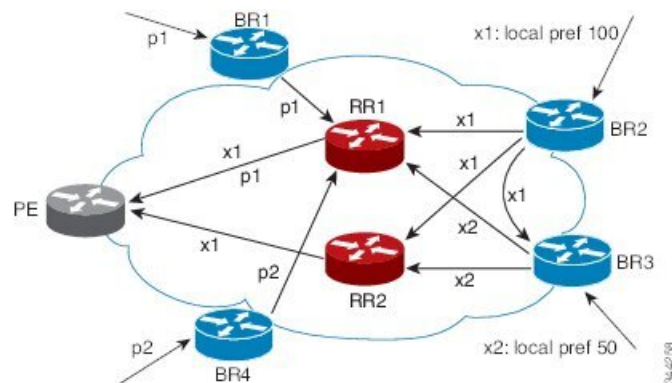
パスの隠蔽は BGP マルチパスの効率的な使用や、スムーズな定期メンテナンスを妨げ、multi-exit discriminator (MED) の変動や最適でないホットポテトルーティングが発生する可能性があります。ネクスト ホップが失敗した場合、ネットワークは BGP コントロールプレーンのコンバージェンスによりトラフィックが復旧するのを待たなければならないので、パスの隠蔽は迅速かつローカルな復旧の妨げになります。BGP 追加パス機能では、パス ダイバーシティを提供します。est External または Best Internal 機能は、限られた場合にパス ダイバーシティを提供します。

BGP 追加パス機能は、同じプレフィックスのマルチパスに対して、新しいパスで以前のパスを暗黙的に置き換えることなく、アダプタイズする手段を提供します。パスを隠蔽しないでパスダイバーシティが実現されます。

パスの隠蔽の例

ここでは、パスの隠蔽が発生する過程の詳細を説明します。次の図では、BR1 および BR4 から RR1 にアダプタイズされるプレフィックス p を持つパス p1 および p2 があります。RR1 は 2 つのうちベストパスを選択し、PE に p1 のみアダプタイズします。

図 29: RR で追加パスを非表示にする

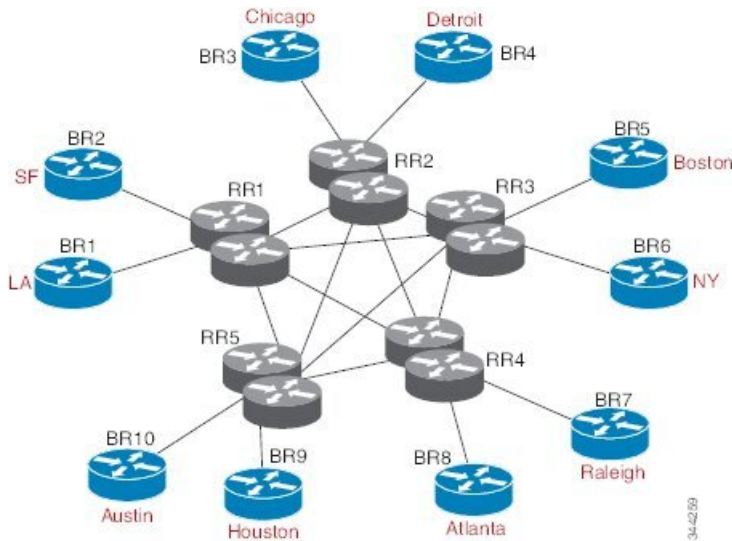


また追加のパスを隠している RR の図では、BR2 から（パス x2 がある）BR3 にローカルプリファレンス 100 でアダプタイズされる、プレフィックス x を持つパス x1 が表示されています。BR3 にはパス x2 もありますが、ルーティングポリシーにより、x2 ではなく RR の x1（表示されていません）をアダプタイズし、x2 のアダプタイズは抑制されます。ユーザーは BR3 で最良外部のアダプタイズメントを有効にして RR に x2 をアダプタイズできますが、この場合も RR はベストパスのみをアダプタイズします。

最適ではないのホットポテトルーティングの例

内部転送コストを最小化するために、中継する ISP は（IGP コストに基づいて）最も近い出口ポイントにパケットを転送しようとします。この動作は、ホットポテトルーティングと呼ばれます。次の図の分散 RR クラスターモデルでは、ロサンゼルスから発信されたトラフィックがメキシコに進む必要があることを想定しています。すべてのリンクで、IGP コストは同じです。メキシコへの出口ポイントは 2 つあり、1 つがオースティンに向かい、もう 1 つがアトランタに向かう場合、ロサンゼルスからは、アトランタよりオースティンに向かう方が IGP コストが低いため、オースティンに向けてトラフィックを送信します。RR3 がある（および RR1、RR2、RR4 および RR5 がいない）場所に中央 RR が存在する集中型 RR モデルでは、RR3 から見てメキシコへの最も近い出口ポイントはアトランタとなります。ロサンゼルスからアトランタの BR に向けてトラフィックを送信し、それによって最適ではないホットポテトルーティングが生じることは望ましくありません。

図 30: 分散 RR クラス



BGP 追加パスの利点

BGP ルータおよびルートリフレクタ (RR) は、セッションにおけるベストパスにのみ伝播します。プレフィックスアダプタイズメントで、以前アナウンスされたプレフィックスを置き換えます (この動作は暗黙の取り消しとして知られています)。

この動作は、スケーリングには適していますが、パスダイバーシティを妨げる可能性があります (これによって脆弱になるまたは完全に無くなるおそれがあります)。同様にこの動作は、BGP マルチパスの効率的な使用や、スムーズな定期メンテナンスを妨げ、MED の変動や最適でないホットポテトルーティングが発生する可能性があります。ネクストホップが失敗した場合も、ネットワークは BGP コントロールプレーンのコンバージェンスによりトラフィックが復旧するのを待たなければならないので、迅速かつローカルの復旧の妨げになります。

BGP 追加パス機能は、暗黙的に以前のパスに代わる新しいパスなしで、同じプレフィックスのマルチパスをアダプタイズする BGP の拡張機能です。これにより、パスダイバーシティが向上し、MED の変動が減少します。

BGP 追加パスの機能

BGP 追加パス機能は、NLRI で各パスにパス ID を追加することによって実現します。パス ID は VPN のルート識別子 (RD) のようなものです。ただし、パス ID はすべてのアドレスファミリに適用できます。パス ID はピアリングセッション内で一意で、各ネットワークに生成されます。ルートアナウンスが暗黙的に以前のパスを取り消すことを防ぐために、パス ID が使用されます。追加パス機能は、ベストパスに加えその他のパスのアダプタイズメントが可能です。追加パスは、暗黙的に以前のパスから新しいパスに代わることなく、同じプレフィックスのマルチパスをアダプタイズする機能を備えています。

BGP 追加パス機能を使用する場合は、次の 3 つの一般的な手順を実行する必要があります。

1. デバイスが追加パスを送信、受信、または送受信するかどうかを指定します。これらはアドレス ファミリ レベルまたはネイバー レベルで行われます。セッションの確立中に、2 つの BGP ネイバーが追加パス機能（送信または受信のどちらか一方、あるいは両方を実行できるか）についてネゴシエートします。
2. 選択基準を指定して、アドバタイズメントする候補パスのセットを選択します。
3. 示された候補パスから追加パスのセットをネイバーに対してアドバタイズします。

追加パスを送受信するには、追加パス機能をネゴシエートする必要があります。ネゴシエートしない場合、選択基準によりベストパス以上のパスが指定され、ネイバーが指定されたパスをアドバタイズするように設定されていても、ネゴシエートできないために選択パスは利用されず、ベストパスのみ送信されます。

追加パスの送受信を BGP に設定すると、デバイスのピアに対して追加パス機能のネゴシエーションが開始されます。この機能についてネゴシエートしたネイバーは、（他のアップデートグループ ポリシーが許可する場合）アップデート グループに追加され、この機能についてネゴシエートされていないピアとは別のアップデートグループに分類されます。したがって、追加パス機能によってネイバーのアップデート グループ メンバーシップが再計算されます。

追加パスの選択

受信機能がイネーブルの場合、追加パスとしてすべての BGP パスをアドバタイズする **set path-selection all advertise** コマンドを設定しない限り、最適パスのみピアにアドバタイズされます。

選択したパスの一部をアドバタイズ

パスのセットを選択する際に、別のパスのセットをアドバタイズしたい場合は注意してください。アドバタイズするパスのセットが、選択されたパスのサブセットではない場合、意図したパスがアドバタイズされません。

注意事項と制約事項

BGP の追加パスの設定には次のガイドラインと制約事項があります。

- BGP 追加パスはダイナミックな機能としてはサポートされていません。これは OPEN に含まれますが、CAPABILITY メッセージには含まれません。設定は次のセッション確立時に有効となります。確立されたセッションが中断されることはありません。

BGP 追加パスの設定

このセクションは、次のトピックで構成されています。

アドレス ファミリごとの追加パスの設定

デバイスがアドレスファミリ内のすべてのネイバーとの間で追加パスを送受信をできるかどうか指定するには、次の手順を実行します。

始める前に

BGP 機能が有効になっていることを確認します

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	コンフィギュレーション モードに入ります。
ステップ 2	router bgp as-number 例 : <pre>switch(config)# router bgp 65000 switch(config-router)#</pre>	BGP を有効にして、ローカル BGP スピーカに自律システム番号を割り当てます。
ステップ 3	address-family ipv4 unicast 例 : <pre>switch(config-router)# address family ipv4 unicast</pre>	アドレス ファミリ設定モードを開始します。
ステップ 4	(任意) additional-paths receive 例 : <pre>switch(config-router-af)# additional-paths receive</pre>	使用可能なピアから受信するプレフィックスの BGP 追加パスをイネーブルにします。 (注) この機能は、ネイバーで additional-paths receive disable コマンドによって明示的に無効にされない限り、指定されたアドレス ファミリのすべてのネイバーに適用され、そしてアドレス ファミリの設定が上書きされます。
ステップ 5	(任意) additional-paths send 例 : <pre>switch(config-router-af)# additional-paths send</pre>	使用可能なピアに送信するプレフィックスの BGP 追加パスをイネーブルにします。 (注) この機能は、ネイバーで additional-paths send disable コマンドによって明示的に無効にされない限り、指定されたアド

	コマンドまたはアクション	目的
		レス ファミリのすべてのネイバーに適用され、そしてアドレス ファミリの設定が上書きされます。
ステップ 6	(任意) additional-paths selection route-map 例 : <pre>switch(config-router-stmp) # exit switch(config-router) #</pre>	プレフィックスの追加パス選択機能を設定します。
ステップ 7	(任意) end 例 : <pre>switch(config-router-af) # end</pre>	特権 EXEC モードに戻ります。

ネイバーごとの追加パスの設定

特定のネイバーが追加のパスを送受信できるかどうかを設定するには、次の手順を実行します。

始める前に

BGP 機能を有効にしていることを確認します (BGP 機能のイネーブル化のセクションを参照してください)。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config) #</pre>	コンフィギュレーション モードに入ります。
ステップ 2	router bgp as-number 例 : <pre>switch(config) # router bgp 65000 switch(config-router) #</pre>	BGP を有効にして、ローカル BGP スピーカに自律システム番号を割り当てます。
ステップ 3	neighbor { ipv4-address ipv4-prefix/length } [remote-as { as-num } [. as-num]]	BGP ネイバー (ルータ、VRF) を設定し、ネイバー コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 4	address-family ipv4 unicast 例 :	アドレス ファミリ設定モードを開始します。

	コマンドまたはアクション	目的
	switch(config-router)# address family ipv4 unicast	
ステップ 5	(任意) capability additional-paths receive [disable] 例 : <pre>switch(config-router-af)# capability additional-paths receive</pre>	指定されたネイバーの追加パス受信機能を設定します。 (注) このコマンドは、アドレス ファミリのレベルで設定されたすべての送受信機能を上書きします。
ステップ 6	(任意) capability additional-paths send [disable] 例 : <pre>switch(config-router-af)# capability additional-paths send</pre>	指定されたネイバーの追加パス送信機能を設定します。 (注) このコマンドは、アドレス ファミリのレベルで設定されたすべての送受信機能を上書きします。
ステップ 7	(任意) end 例 : <pre>switch(config-router-af)# end</pre>	特権 EXEC モードに戻ります。

ピア ポリシー テンプレートを使用した追加パスの設定

この設定作業では、追加パスを送受信する機能および選択基準をアドレスファミリに設定してから、テンプレートを設定します。

始める前に

BGP 機能を有効にしていることを確認します (BGP 機能の有効化のセクションを参照してください)。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	コンフィギュレーションモードに入ります。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 2	router bgp <i>as-number</i> 例 : switch(config)# router bgp 65000 switch(config-router)#	BGP を有効にして、ローカル BGP スピーカに自律システム番号を割り当てます。
ステップ 3	template peer-policy <i>template-name</i> 例 : switch(config-router)# template peer-policy rr-client-ptl #	ポリシー テンプレート コンフィギュレーションモードを開始し、ピア ポリシー テンプレートを作成します。
ステップ 4	(任意) capability additional-paths receive [disable] 例 : switch(config-router-af)# capability additional-paths receive	指定されたネイバーの追加パス受信機能を設定します。 (注) このコマンドは、アドレスファミリのレベルで設定されたすべての送受信機能を上書きします。
ステップ 5	(任意) capability additional-paths send [disable] 例 : switch(config-router-af)# capability additional-paths send	指定されたネイバーの追加パス送信機能を設定します。 (注) このコマンドは、アドレスファミリのレベルで設定されたすべての送受信機能を上書きします。
ステップ 6	exit 例 : switch(config-router-ptmp)# exit	ポリシー テンプレート コンフィギュレーションモードを終了し、ルータ コンフィギュレーションモードに戻ります。
ステップ 7	neighbor { <i>ipv4-address</i> <i>ipv4-prefix/length</i> } [remote-as { <i>as-num</i> } [. <i>as-num</i>]]	BGP ネイバー (ルータ、VRF) を設定し、ネイバー コンフィギュレーションモードを開始します。
ステップ 8	(任意) address-family <i>ipv4 unicast</i> 例 : switch(config-router)# address family ipv4 unicast	アドレスファミリ設定モードを開始します。
ステップ 9	inherit peer-policy <i>template-name</i> <i>sequence-number</i> 例 : switch(config-router-neighbor-af)# inherit peer-policy rr-client-ptl 10	ネイバーが設定を継承できるように、ピア ポリシー テンプレートをこのネイバーに送信します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 10	(任意) end 例 : <pre>switch(config-router-af)# end</pre>	特権 EXEC モードに戻ります。

追加パスのフィルタリングおよび設定操作

必要に応じて、アドバタイズされる候補である追加パスのプレフィックスを照合することで、アドバタイズされるパスをフィルタ処理するためにルートマップを使用できます（これらのプレフィックスは、**additional-paths selection** コマンドを使用して設定します）。

また、必要に応じて、ルートマップを通過したこれらのパスに対して実行するアクションを設定することもできます。このタスクでは **set metric** コマンドを使用していますが、このタスクには記載されていない他の **set** コマンドも使用できます。

ネイバーがネイバーから同じルートを受信している場合は、**all** でマークされたパス（一意のネクスト ホップを持つすべてのパス）のメトリックを設定します。ネイバー 2001:DB8::1037 が別のネイバーから同じルートを受信しているとしします。ローカルデバイスから受信されたルートはメトリックが 565 で、メトリックが 700 の別のデバイスからのルートが存在する可能性があります。メトリックが 565 のルートは、メトリックが 700 のルートよりも優先されます。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	コンフィギュレーション モードに入ります。
ステップ 2	route-map map-name [deny permit] [sequence-number] 例 : <pre>switch(config)# route-map add_path4 permit 10</pre>	あるルーティング プロトコルから別のルーティング プロトコルにルートを再配布するルート マップと条件を定義します。
ステップ 3	set path-selection all advertise 例 : <pre>switch(config-route-map)# set path-selection all advertise</pre>	受信機能がイネーブルの場合、ピアに追加パスとしてすべての BGP パスをアドバタイズします。
ステップ 4	set metric metric-value 例 :	一致基準を満たす追加パスのメトリックを設定します。

	コマンドまたはアクション	目的
	switch(config-route-map)# set metric 500	他の設定コマンドを使用して、ルートマップを通過したパスに対してアクションを実行することもできます。
ステップ 5	(任意) end 例 : switch(config-router-af)# end	特権 EXEC モードに戻ります。

BGP 追加パスの設定例

このセクションは、次のトピックで構成されています。

BGP 追加パスの送受信機能

R1

この例では、R1 のアドレスは 2001:db8::1045 です。ネイバー R2 のアドレスは 2001:db8::1037 です。R2 から R1 に additional-paths を含む更新が送信されます（すべてのパスがアドバタイズされます）。R2 が追加パスの送信のみ可能で追加パスを受信しないため、更新はアドバタイズされる標準の BGP ベストパスのみ R1 から R2 に送信されます。

```
route-map add_path4 permit 10
set metric 500
set path-selection all advertise
!!
router bgp 1
address-family ipv6 unicast
additional-paths send
additional-paths receive
additional-paths selection route-map add_path4
neighbor 2001:db8::1037
address-family ipv6 unicast
capability additional-paths send
capability additional-paths receive
```

R2

```
route-map add_path4 permit 10
set metric 500
set path-selection all advertise
!!
router bgp 2
address-family ipv6 unicast
additional-paths selection route-map add_path4
neighbor 2001:db8::1045
address-family ipv6 unicast
capability additional-paths send
```

ピア ポリシー テンプレートを使用する BGP 追加パス

次の例は、IP アドレス 2001:db8::1037 のネイバーが、rr-client-pt1 という名前のテンプレートによって有効になった追加パスの送受信機能を持っていることを示しています。

```
router bgp 65000
address-family ipv6 unicast
additional-paths send
additional-paths receive
additional-paths selection route-map add_path4
neighbor 2001:db8::1037
address-family ipv6 unicast
inherit peer-policy rr-client-pt1 10
template peer-policy rr-client-pt1
capability additional-paths send
capability additional-paths receive
```

BGP 追加パスの設定の確認

BGP 追加パスの設定に関する情報を表示するには、次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
show ip bgp [<i>ip-address</i>]	BGP テーブル内のエントリを表示します。
show ip bgp neighbors [<i>ip-address</i> [<i>advertise-routes</i>]]	設定されたネイバーおよび各ネイバーに固有の他の情報を表示します。



第 13 章

ECMP リカバリ

この章では、Cisco NX-OS スイッチで等コスト マルチパス (ECMP) プロトコルの自動リカバリを構成する方法について説明します。

この章は、次の項で構成されています。

- [ECMP リカバリに関する情報 \(375 ページ\)](#)
- [ECMP リカバリの注意事項と制限事項 \(375 ページ\)](#)
- [デフォルト設定 \(376 ページ\)](#)
- [ECMP リカバリの構成 \(376 ページ\)](#)
- [ECMP リカバリ構成の確認 \(377 ページ\)](#)
- [ECMP リカバリの構成例 \(377 ページ\)](#)

ECMP リカバリに関する情報

RIBはFIBにECMPルートを追加します。ハードウェアECMPテーブルがいっぱいになると、後続のすべてのECMPルートに対して単一の隣接関係が作成されます。Cisco NX-OS リリース 6.0(2)U2(2)までは、ECMPテーブルの一部のエントリが解放されても、これらの部分的にインストールされたルートがすべてのパスを有効にするために再アクセスされることはありませんでした。

Cisco NX-OS リリース 6.0(2)U3(1)ではECMPリカバリ機能が導入されています。これにより、ECMPテーブルのリソースが使用可能になると、FIBは部分的にインストールされているECMPルートを自動的にリカバリして再インストールすることができます。構成されたパーセンテージのECMPテーブルが解放された場合にのみECMPリカバリが実行されるように、ECMPテーブルリソースにしきい値を構成できます。

ECMP リカバリの注意事項と制限事項

ECMP リカバリには、以下の構成の注意事項と制限事項があります。

- IPv4 および IPv6 ルートで使用する ECMP または VOBJ オブジェクトのみが回復され、完全にインストールされます。ポリシーベースルーティングや VXLAN などのハードウェア ECMP オブジェクトを使用するその他の機能は、この機能ではサポートされません。

デフォルト設定

ECMP リカバリは、デフォルトでは無効になっています。

ECMP リカバリの構成

ECMP リカバリを構成するには、グローバル構成モードで以下のコマンドを使用します。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例： switch# configure terminal switch(config)#	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	hardware profile ecmp auto-recovery threshold percentage 例： switch(config)# hardware profile ecmp auto-recovery threshold 15	ECMP リカバリのしきい値を構成します。しきい値範囲は 1 ～ 100 % です。
ステップ 3	(任意) copy running-config startup-config 例： switch(config)# copy running-config startup-config	この設定変更を保存します。
ステップ 4	(任意) reload 例： switch(config)# reload WARNING: This command will reboot the system Do you want to continue? (y/n) [n] y	Cisco Nexus 3000 シリーズ スイッチ ソフトウェアをリロードします。

ECMP リカバリ構成の確認

ECMP リカバリ構成を確認するには、グローバル構成モードで以下のコマンドを使用します。

コマンド	目的
show running-config grep hardware profile ecmp	ECMP 実行構成を表示します。

ECMP リカバリの構成例

次の例は、ECMP リカバリを構成する方法を示しています。

```
switch# configure terminal
switch(config)# hardware profile ecmp auto-recovery threshold 15
switch(config)# copy running-config startup-config
switch(config)# reload
```

次の例は、ECMP リカバリを確認する方法を示しています。

```
switch# configure terminal
switch(config)# show running-config | grep "hardware profile ecmp"
hardware profile ecmp auto-recovery threshold 15
```




第 14 章

ホスト ルートの ECMP の構成

この章では、Cisco NX-OS スイッチでホスト ルートの等コストマルチパス（ECMP）プロトコルを構成する方法について説明します。

この章は、次の項で構成されています。

- ホスト ルートの ECMP に関する情報（379 ページ）
- ホスト ルートの ECMP の注意事項（379 ページ）
- ホスト ルートの ECMP の前提条件（380 ページ）
- デフォルト設定（380 ページ）
- ホスト ルートの ECMP の構成（380 ページ）
- 重み付け ECMP over BGP の構成（382 ページ）
- ダイナミック ECMP グループのサイズ変更の構成（384 ページ）
- ホスト ルートの ECMP 構成の確認（385 ページ）
- ホスト ルートに ECMP を構成する例（385 ページ）
- その他の参考資料（385 ページ）

ホスト ルートの ECMP に関する情報

ホスト ルートの ECMP サポートを有効にすると、すべてのユニキャスト ホスト ルートは最長プレフィックス一致アルゴリズム（LPM）テーブルにプログラムされます。ホスト ルートの ECMP は、スイッチ ハードウェアで提供されます。**hardware profile unicast enable-host-ecmp** コマンドを使用して CLI でこの機能を構成します。



(注) IPv4 (/32) ルートと IPv6 (/128) ルート用に ECMP が構成されている場合、ホスト エントリはホスト テーブルではなく LPM ルーティング テーブルに格納されます。

ホスト ルートの ECMP の注意事項

ホスト ルートの ECMP には、以下の構成の注意事項と制限事項があります。

- [no] hardware profile unicast enable-host-ecmp コマンドを使用してホスト ルートの ECMP を有効または無効にした後、次を実行していることを確認します。
- copy running-config startup-config command コマンドを使用して、スイッチで構成を保存します。
- : reload コマンドを使用してスイッチをリロードして、構成を適用できるようにします。

ホスト ルートの ECMP の前提条件

ホスト ルートの ECMP には、次の前提条件があります。

- このコマンドを使用する前に、**system urpf disable** コマンドを使用してスイッチ上のユニキャストリバースパスフォワーディング（URPF）をグローバルに無効にした後、構成を保存してスイッチをリロードすることを推奨します。URPFをグローバルに無効にすると、LPM 表のサイズが拡張されます。

デフォルト設定

ホスト ルートの ECMP はデフォルトで無効になっています。

ホスト ルートの ECMP の構成

このセクションは、次のトピックで構成されています。

ホスト ルートの ECMP 機能の有効化

ホスト ルート機能の ECMP を有効にすることができます。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例： switch# configure terminal switch(config)#	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	(任意) system urpf disable 例： switch(config)# system urpf disable	スイッチで URPF をグローバルに無効にします。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 3	hardware profile unicast enable-host-ecmp 例 : switch(config)# hardware profile unicast enable-host-ecmp	スイッチ上でホスト ルートの ECMP をグローバルに有効にします。
ステップ 4	copy running-config startup-config 例 : switch(config)# copy running-config startup-config	この設定変更を保存します。
ステップ 5	reload 例 : switch(config)# reload WARNING: This command will reboot the system Do you want to continue? (y/n) [n] y	Cisco Nexus 3000 シリーズ スイッチ ソフトウェアをリロードします。

ホスト ルート機能の ECMP の無効化

ホスト ルート機能の ECMP を無効にすることができます。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : switch# configure terminal switch(config)#	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	no hardware profile unicast enable-host-ecmp 例 : switch(config)# no hardware profile unicast enable-host-ecmp	スイッチでホスト ルートの ECMP をグローバルに無効化し、すべての関連構成を削除します。
ステップ 3	copy running-config startup-config 例 : switch(config)# copy running-config startup-config	この設定変更を保存します。
ステップ 4	reload 例 : switch(config)# reload WARNING: This command will reboot the	Cisco Nexus 3000 シリーズ スイッチ ソフトウェアをリロードします。

	コマンドまたはアクション	目的
	<pre>system Do you want to continue? (y/n) [n] y</pre>	

重み付け ECMP over BGP の構成

ECMP は、異なるネクストホップを持ち、同じ宛先への複数のルートを許可し、ルーティングされたトラフィックをそれらの複数のネクスト ホップにロード バランシングするメカニズムです。負荷エントロピーは、リンク使用効率を最大化する最良の方法です。

多くの場合、ネットワーク内のアプリケーションの分散は不均衡になりがちです。新しいクラスタは、古いクラスタとは異なるオーバーサブスクリプション率でロールインします。新しいクラスタには、古いクラスタよりも強力なサーバーがあり、CPU ごとにより多くの負荷を処理できます。ネットワークは完全ではないため、ルーティング動作をある程度制御する必要があります。トラフィックの負荷を分散し、ルーティング動作の制御を管理するために、BGP 経由の加重 ECMP を構成できます。

この展開では、次の使用例が考慮されています。

- リソースの不均等な分散
- SDN または非同種ファブリック

重み付け ECMP over BGP の構成

ECMP は、異なるネクストホップを持ち、同じ宛先への複数のルートを許可し、ルーティングされたトラフィックをそれらの複数のネクスト ホップにロード バランシングするメカニズムです。負荷エントロピーは、リンク使用効率を最大化する最良の方法です。

多くの場合、ネットワーク内のアプリケーションの分散は不均衡になりがちです。新しいクラスタは、古いクラスタとは異なるオーバーサブスクリプション率でロールインします。新しいクラスタには、古いクラスタよりも強力なサーバーがあり、CPU ごとにより多くの負荷を処理できます。ネットワークは完全ではないため、ルーティング動作をある程度制御する必要があります。トラフィックの負荷を分散し、ルーティング動作の制御を管理するために、BGP 経由の加重 ECMP を構成できます。

この展開では、次の使用例が考慮されています。

- リソースの不均等な分散
- SDN または非同種ファブリック

SDN/非同種ファブリック

SDN/非同種ファブリックの場合、次の例を検討してください。

- VIP1（任意のサービス）のインスタンスが 2 つあります。

- サーバーの NIC IP アドレスは、VIP のネクスト ホップ (NH) としてアドバタイズされます。
- VIP1 は、データセンター全体に均等に展開されます。
- クラスタ 1 は 3:1 オーバーサブスクライブされ、クラスタ 2 は 12:1 オーバーサブスクライブされています。

その結果、従来の ECMP ではトラフィックを最適に配信できません。

使用例に対する解決策

ユースケースでリソースの不均等な分散と最適ではないトラフィック分散が発生している場合の解決策は、BGP 上で重み付き ECMP を構成することです。各インスタンスの重みは、（ホストまたはコントローラから）VIP ルートを挿入して通知できます。その後、インフラストラクチャ全体の重みを集計し、アプリケーション展開の分布に比例するようにトラフィックを配信できます。

重み付け ECMP over BGP の構成に関する注意事項と制限事項

BGP 上で重み付け ECMP を構成する場合は、次の注意事項を参照してください。

- Cisco Nexus 3100 プラットフォーム スイッチは、非復元モードでのみ重み付け ECMP をサポートします。
- BGP は、draft-ietf-idr-link-bandwidth-06.txt で定義されているリンク帯域幅 EXTCOMM を使用して、重み付け ECMP 機能を実装します。
- 重み付け ECMP 機能は、IPv4 アドレスファミリのみでサポートされます。
- iBGP ピアと eBGP ピアの両方からリンク帯域幅 EXTCOMM を受け入れることができます。
- BGP 更新でリンク帯域幅 EXTCOMM を送信しないでください。BGP コントローラ/ピアは、すべてのルータにリンク帯域幅を送信します。
- 重み付けプログラミングの場合、リンク帯域幅 EXTCOMM には、RIB にダウンロードする前に整数を使用して kbits/秒に変換される 4 バイトの浮動小数点整数としてバイト/秒でエンコードされたリンク帯域幅があります。
- ハードウェア ECMP 幅は 64 サイズに固定されています。

リンク帯域幅 EXTCOMM フィールドの表示

リンク帯域幅の EXTCOMM フィールドの表示については、次の例を参照してください。

```
Link Bandwidth EXTCOMM fields:
Link Bandwidth attribute - "40 04 00 64 47 80 00 00"
Where "40 04" specifies a Link Bandwidth EXTCOMM
Where "00 64" specifies a AS #.
```

```
Where "47 80 00 00" specifies the Link Bandwidth value as floating point integer.
The Link Bandwidth floating point value bits are encoded as follows:
#define IEEE_NUMBER_WIDTH 32 /* bits in number */
#define IEEE_EXP_WIDTH 8 /* bits in exponent */
#define IEEE_MANTISSA_WIDTH (IEEE_NUMBER_WIDTH - 1 - IEEE_EXP_WIDTH)
#define IEEE_SIGN_MASK 0x80000000
#define IEEE_EXPONENT_MASK 0x7F800000
#define IEEE_MANTISSA_MASK 0x007FFFFF
Link Bandwidth value programmed to RIB is calculated as follows:
uint32_t ieee_bw_32 = ntohl(GETLONG(&extcomm->value[4])); = 0x47800000
int64_t dmzlink_bw_64 = ptr_ieee_to_int64(&ieee_bw_32); = 65536
uint32_t value = 520 = (uint32_t)((dmzlink_bw_64 / 1000) * 8) = 520
```

ダイナミック ECMP グループのサイズ変更の構成

ダイナミック ECMP グループのサイズ変更機能を構成すると、Cisco Nexus 3000 シリーズ スイッチおよび Cisco Nexus 3100 プラットフォーム スイッチでより多くの ECMP グループを構成できます。最大 1022 個の ECMP グループを構成できます。ECMP グループのサイズはハードウェアで固定されていません。



- (注)
- Cisco Nexus 3000 シリーズ スイッチでは、ダイナミック ECMP グループのサイズ変更機能がデフォルトで有効になっています。Cisco Nexus 3100 プラットフォーム スイッチでは、ダイナミック ECMP グループのサイズ変更機能を非復元モードで使用できます。

Cisco Nexus 3100 プラットフォーム スイッチでより多くの数の ECMP グループを構成するために、次の新しい CLI コマンドが導入されました。

```
(config)# no hardware profile ecmp resilient
Warning: The command will take effect after next reload.
(config)#
```

ダイナミック ECMP グループのサイズ変更の確認

次のコマンドを使用して、ECMP グループの構成を確認します。

```
# show hardware profile status
slot 1
=====

Total LPM Entries = 7679.
Total Host Entries = 16384.
Reserved LPM Entries = 1024.
Max Host4/Host6 Limit Entries (shared)= 8192/4096*
Max Mcast Limit Entries = 4096.
Max Ucast IPv6 LPM Limit Entries = 2048.
Max Ucast IPv6 LPM_65_to_127 Limit Entries = 128.
Used LPM Entries (Total) = 4.
Used IPv4 LPM Entries = 1.
Used IPv6 LPM Entries = 2.
Used IPv6 LPM_65_to_127 Entries = 1.
Used Host Entries in LPM (Total) = 0.
Used Host4 Entries in LPM = 0.
Used Host6 Entries in LPM = 0.
```

```

Used Mcast Entries = 0.
Used Mcast OIFL Entries = 0.
Used Host Entries in Host (Total) = 0.
Used Host4 Entries in Host = 0.
Used Host6 Entries in Host = 0.
Max ECMP Table Entries = 1022.
Used ECMP Table Entries = 0.
Max ECMP Next Hop Table Entries = 16384.
Used ECMP Next Hop Table Entries = 0.
MFIB prefer-source-tree = Disabled/0/0.

*Unicast Host Table is in shared mode b/n v4 & v6...
#

```

ホスト ルートの ECMP 構成の確認

ホスト ルートの ECMP の構成情報を表示するには、次のいずれかの作業を行います。

コマンド	目的
show hardware profile status	ハードウェアテーブルのユニキャストおよびマルチキャストルーティング エントリを表示します。
show running-config	実行中のシステム構成を表示します。

ホスト ルートに ECMP を構成する例

次に、URPF を無効にし、ホスト ルートに ECMP を構成する例を示します。

```

switch# configure terminal
switch(config)# system urpf disable
switch(config)# hardware profile unicast enable-host-ecmp
switch(config)# copy running-config startup-config
switch(config)# reload

```

次に、ホスト ルートの ECMP を無効にする例を示します。

```

switch# configure terminal
switch(config)# no hardware profile unicast enable-host-ecmp
switch(config)# copy running-config startup-config
switch(config)# reload

```

その他の参考資料

ホスト ルートの ECMP の実装に関する詳細情報については、次の各項を参照してください。

関連資料

関連資料

関連項目	マニュアル タイトル
ホスト ルート CLI コマンドの ECMP	『Cisco Nexus 3000 Series Command Reference』



第 15 章

RIP の設定

この章では、Cisco NX-OS スイッチでの Routing Information Protocol (RIP) の設定方法について説明します。

この章は、次の項で構成されています。

- [RIP 情報 \(387 ページ\)](#)
- [RIP の前提条件 \(390 ページ\)](#)
- [注意事項と制約事項 \(390 ページ\)](#)
- [デフォルト設定 \(390 ページ\)](#)
- [RIP の設定 \(391 ページ\)](#)
- [RIP の設定の確認 \(403 ページ\)](#)
- [RIP 統計情報の表示 \(403 ページ\)](#)
- [RIP の設定例 \(404 ページ\)](#)
- [関連項目 \(404 ページ\)](#)
- [その他の参考資料 \(404 ページ\)](#)

RIP 情報

このセクションは、次のトピックで構成されています。

RIP の概要

RIP はユーザデータグラムプロトコル (UDP) データパケットを使用して、小規模なインターネットワークでルーティング情報を交換します。RIPv2 は IPv4 をサポートしています。RIPv2 は RIPv2 プロトコルがサポートするオプションの認証機能を使用します (「[RIPv2 の認証](#)」の項を参照)。

RIP では次の 2 種類のメッセージを使用します。

- 要求: 他の RIP 対応ルータからのルート アップデートを要求するためにマルチキャストアドレス 224.0.0.9 に送信されます。

- 応答：デフォルトでは 30 秒間隔で送信されます（「[RIP 設定の検証](#)」の項を参照）。ルータも、要求メッセージの受信後に応答メッセージを送信します。応答メッセージには、RIP ルートテーブル全体が含まれます。RIP ルーティングテーブルが 1 つの応答パケットに収まらない場合、RIP は 1 つの要求に対して複数の応答パケットを送信します。

RIP はルーティング メトリックとして、ホップ カウントを使用します。ホップ カウントは、パケットが宛先に到達するまでに、通過できるルータの数です。直接接続されたネットワークのメトリックは 1 です。到達不能なネットワークのメトリックは 16 です。RIP はこのようにメトリックの範囲が小さいので、大規模なネットワークに適したルーティングプロトコルではありません。

RIPv2 認証

RIP メッセージに認証を設定して、ネットワークでの不正な、または無効なルーティング更新を防止できます。Cisco NX-OS は簡易パスワードまたは MD5 認証ダイジェストをサポートしています。

認証キーのキーチェーン管理を使用することによって、インターフェイスごとに RIP 認証を設定できます。キーチェーン管理によって、MD5 認証ダイジェストまたは単純テキストパスワード認証で使用される認証キーの変更を制御できます。

MD5 認証ダイジェストを使用するには、ローカル ルータとすべてのリモート RIP ネイバーが共有するパスワードを設定します。Cisco NX-OS は、そのメッセージ自体と暗号化されたパスワードに基づいて MD5 一方向メッセージダイジェストを作成し、このダイジェストを RIP メッセージ（要求または応答）とともに送信します。受信側の RIP ネイバーは、同じ暗号パスワードを使用して、ダイジェストを検証します。メッセージが変更されていない場合は、計算が一致し、RIP メッセージは有効と見なされます。

MD5 認証ダイジェストの場合はさらに、ネットワークでメッセージが再送されないように、各 RIP メッセージにシーケンス番号が組み込まれます。

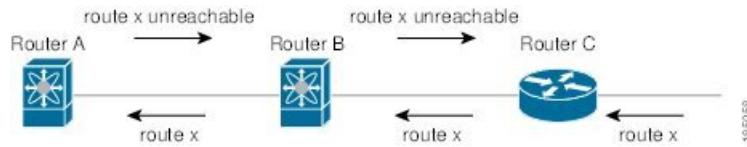
Split Horizon

スプリット ホライズンを使用すると、ルートを学習したインターフェイスから RIP がルートをアドバタイズしないようにできます。

スプリット ホライズンは、RIP アップデートおよびクエリー パケットの送信を制御する方法です。インターフェイスでスプリット ホライズンをイネーブルにすると、Cisco NX-OS は、このインターフェイスから学習された宛先への更新パケットを送信しません。この方法でアップデート パケットを制御すると、ルーティング ループの発生する可能性が小さくなります。

ポイズンリバー스를指定してスプリットホライズンを使用すると、ルートを学習したインターフェイス経由では到達不能であると RIP が学習したルートをアドバタイズするように、インターフェイスを設定できます。次の図に、ポイズンリバー스를有効にしてスプリットホライズンを指定した、RIP ネットワークの例を示します。

図 31: スプリット ホライズン ポイズン リバースを指定した RIP



ルータ C はルート X について学習し、そのルートをルータ B にアドバタイズします。ルータ B はルート X をルータ A にアドバタイズしますが、ルート X の到達不能アップデートをルータ C に送り返します。

デフォルトでは、スプリットホライズンはすべてのインターフェイスでイネーブルになっています。

ルートのフィルタリング

RIP 対応インターフェイス上でルート ポリシーを設定すると、RIP アップデートをフィルタリングできます。Cisco NX-OS は、ルート ポリシーで許可されたルートだけを使用して、ルート テーブルをアップデートします。

ルート集約

指定したインターフェイスに複数のサマリー集約アドレスを設定できます。ルート集約を使用すると、固有性の強い一連のアドレスをすべての固有アドレスを代表する 1 つのアドレスに置き換えることによって、ルート テーブルを簡素化できます。たとえば、10.1.1.0/24、10.1.2.0/24、および 10.1.3.0/24 というアドレスを 1 つの集約アドレス 10.1.0.0/16 に置き換えることができます。

RIP はルーティング テーブルに含まれている固有性の強いルートが多いほど、固有性の強いルートの最大メトリックと同じメトリックのインターフェイスからのサマリーアドレスをアドバタイズします。



(注) Cisco NX-OS は、自動ルート集約をサポートしていません。

ルートの再配布

RIP を使用すると、スタティックルートや他のプロトコルからのルートを再配布できます。再配布を設定するには、ルート ポリシーを使用して、RIP に渡すルートを制御します。ルート ポリシーを使用すると、宛先、送信元プロトコル、ルート タイプ、ルート タグなどの属性に基づいて、ルートをフィルタリングできます。詳細については、[Route Policy Manager の設定 \(441 ページ\)](#) を参照してください。

RIP ルーティング ドメインにルートを再配布しても、デフォルトでは Cisco NX-OS がそのつど、RIP ルーティング ドメインにデフォルト ルートを再配布することはありません。RIP に **default route** を生成し、ルート ポリシーでそのルートを制御できます。

RIP にインポートされたすべてのルートに使用する、デフォルトのメトリックも設定できます。

ロード バランシング

ロード バランシングを使用すると、ルータは、宛先アドレスから等距離内にあるすべてのルータのネットワーク ポートにトラフィックを分散できます。ロード バランシングは、ネットワーク セグメントの使用率を向上させ、有効ネットワーク 帯域幅を増加させます。

Cisco NX-OS は、等コスト マルチパス (ECMP) 機能をサポートします。RIP ルート テーブル およびユニキャスト RIB の等コスト パスは最大 16 です。これらのパスの一部または全部でトラフィックのロード バランシングが行われるように、RIP を設定できます。

仮想化のサポート

Cisco NX-OSは、同一システム上で動作する複数の RIP プロトコル インスタンスをサポートします。RIP は、仮想ルーティングおよび転送 (VRF) インスタンスをサポートします。

デフォルトでは、特に別の VRF を設定しない限り、Cisco NX-OS はユーザーをデフォルトの VRF に配置します。「[レイヤ 3 仮想化の構成](#)」を参照してください

RIP の前提条件

RIP を使用するには、次の前提条件を満たしている必要があります。

- RIP 機能がイネーブルになっていることを確認します ([RIP 機能の有効化](#)のセクションを参照)。

注意事項と制約事項

RIP には、次の注意事項および制限事項があります。

- Cisco NX-OS では、RIPv1 はサポートされていません。Cisco NX-OS は、RIPv1 パケットを受信すると、メッセージを記録してパケットをドロップします。
- Cisco NX-OS は、RIPv1 ルータとの隣接関係を確立しません。

デフォルト設定

次の表に、RIP パラメータのデフォルト設定値を示します。

表 24: デフォルトの RIP パラメータ

パラメータ	デフォルト
ロード バランシングを行う最大パス数	16
RIP 機能	ディセーブル
スプリット ホライズン	有効 (Enabled)

RIP の設定



(注) Cisco IOS の CLI に慣れている場合、この機能に対応する Cisco NX-OS コマンドは通常使用する Cisco IOS コマンドと異なる場合がありますので注意してください。

RIP 機能のイネーブル化

RIP を設定する前に、RIP 機能をイネーブルにする必要があります。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : switch# configure terminal switch(config)#	コンフィギュレーション モードに入ります。
ステップ 2	feature rip 例 : switch(config)# feature rip	RIP 機能を有効にします。
ステップ 3	(任意) show feature 例 : switch(config)# show feature	有効および無効にされた機能を表示します。
ステップ 4	(任意) copy running-config startup-config 例 :	この設定変更を保存します。

	コマンドまたはアクション	目的
	<code>switch(config)# copy running-config startup-config</code>	

例

no feature rip コマンドを使用して、RIP 機能をディセーブルにし、関連するコンフィギュレーションをすべて削除します。

コマンド	目的
no feature rip 例 : <code>switch(config)# no feature rip</code>	RIP 機能をディセーブルにして、関連するすべての設定を削除します。

RIP インスタンスの作成

RIP インスタンスを作成し、そのインスタンスのアドレス ファミリを設定できます。

始める前に

RIP 機能がイネーブルになっていることを確認します ([RIP 機能の有効化](#)を参照)。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <code>switch# configure terminal</code> <code>switch(config)#</code>	コンフィギュレーション モードに入ります。
ステップ 2	router rip instance-tag 例 : <code>switch(config)# router RIP Enterprise</code> <code>switch(config-router)#</code>	<i>instance-tag</i> 値 を設定して、新しい RIP インスタンスを作成します。
ステップ 3	address-family ipv4 unicast 例 : <code>switch(config-router)# address-family</code> <code>ipv4 unicast</code> <code>switch(config-router-af)#</code>	この RIP インスタンスのアドレス ファミリを設定し、アドレス ファミリ コンフィギュレーション モードを開始します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 4	(任意) show ip rip [instance instance-tag] [vrf vrf-name] 例 : <pre>switch(config-router-af)# show ip rip</pre>	すべての RIP インスタンスの RIP 要約情報を表示します。
ステップ 5	(任意) copy running-config startup-config 例 : <pre>switch(config)# copy running-config startup-config</pre>	この設定変更を保存します。

例

RIP インスタンスおよび関連するすべての設定を削除する場合は、**no router rip** コマンドを使用します。

コマンド	目的
no router rip instance-tag 例 : <pre>switch(config)# no router rip Enterprise</pre>	RIP インスタンスおよび関連するすべての設定を削除します。



(注) インターフェイス モードで構成した RIP コマンドを削除することも必要です。

アドレス ファミリ コンフィギュレーション モードでは、RIP に次のオプション パラメータを設定できます。

コマンド	目的
distance value 例 : <pre>switch(config-router-af)# distance 30</pre>	RIP のアドミニストレーティブ ディスタンスを設定します。範囲は 1 ～ 255 です。デフォルトは 120 です。「 アドミニストレーティブ ディスタンス 」のセクションを参照してください。
maximum-paths number 例 : <pre>switch(config-router-af)# maximum-paths 6</pre>	RIP がルート テーブルで維持する等コスト パスの最大数を設定します。指定できる範囲は 1 ～ 16 です。デフォルトは 16 です。

次に、IPv4 に対応する RIP インスタンスを作成し、ロード バランシングのための等コスト パス数を設定する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# router rip Enterprise
switch(config-router)# address-family ipv4 unicast
switch(config-router-af)# max-paths 10
switch(config-router-af)# copy running-config startup-config
```

RIP インスタンスの再起動

RIP インスタンスの再起動が可能です。再起動すると、インスタンスのすべてのネイバーが消去されます。

RIP インスタンスを再起動し、関連付けられたすべてのネイバーを削除するには、次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
restart rip instance-tag 例 : <pre>switch(config)# restart rip Enterprise</pre>	RIP インスタンスを再起動し、すべてのネイバーを削除します。

インターフェイスでの RIP の設定

RIP インスタンスにインターフェイスを追加できます。

始める前に

RIP 機能がイネーブルになっていることを確認します ([RIP 機能のイネーブル化](#)を参照してください)。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	コンフィギュレーション モードに入ります。
ステップ 2	interface interface-type slot/port 例 : <pre>switch(config)# interface ethernet 1/2 switch(config-if)#</pre>	インターフェイス設定モードを開始します。
ステップ 3	no switchport 例 : <pre>switch(config-if)# no switchport</pre>	そのインターフェイスを、レイヤ3ルーテッドインターフェイスとして設定します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 4	ip router rip <i>instance-tag</i> 例 : switch(config-if)# ip router rip Enterprise	このインターフェイスを RIP インスタンスに関連付けます。
ステップ 5	(任意) show ip rip [<i>instance instance-tag</i>] interface [<i>interface-type slot/port</i>] [<i>vrf vrf-name</i>] [<i>detail</i>] 例 : switch(config-if)# show ip rip Enterprise tethernet 1/2	インターフェイスの RIP 情報を表示します。
ステップ 6	(任意) copy running-config startup-config 例 : switch(config)# copy running-config startup-config	この設定変更を保存します。

例

次に、RIP インスタンスにインターフェイス ethernet 1/2 を追加する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# interface ethernet 1/2
switch(config-if)# no switchport
switch(config-if)# ip router rip Enterprise
switch(config)# copy running-config startup-config
```

RIP 認証の設定

インターフェイスに RIP パケットの認証を設定できます。

始める前に

RIP 機能がイネーブルになっていることを確認します (RIP 機能の有効化を参照)。

認証をイネーブルにする前に、必要に応じてキーチェーンを設定します。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : switch# configure terminal switch(config)#	コンフィギュレーション モードに入ります。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 2	interface interface-type slot/port 例 : switch(config)# interface ethernet 1/2 switch(config-if)#	インターフェイス設定モードを開始します。
ステップ 3	no switchport 例 : switch(config-if)# no switchport	そのインターフェイスを、レイヤ3ルーテッドインターフェイスとして設定します。
ステップ 4	ip rip authentication mode { text md5 } 例 : switch(config-if)# ip rip authentication mode md5	クリアテキストまたは MD5 認証ダイジェストとして、このインターフェイスにおける RIP 認証タイプを設定します。
ステップ 5	ip rip authentication key-chain key 例 : switch(config-if)# ip rip authentication keychain RIPKey	このインターフェイス上で RIP に使用する認証キーを設定します。
ステップ 6	(任意) copy running-config startup-config 例 : switch(config)# copy running-config startup-config	この設定変更を保存します。

例

次に、キーチェーンを作成し、RIP インターフェイス上で MD5 認証を設定する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# key chain RIPKey
switch(config)# key-string myrip
switch(config)# accept-lifetime 00:00:00 Jan 01 2000 infinite
switch(config)# send-lifetime 00:00:00 Jan 01 2000 infinite
switch(config)# interface ethernet 1/2
switch(config-if)# no switchport
switch(config-if)# ip rip authentication mode md5
switch(config-if)# ip rip authentication keychain RIPKey
switch(config-if)# copy running-config startup-config
```

パッシブインターフェイスの設定

インターフェイスを受動モードに設定することによって、ルートを受信するが、ルートアップデータの送信は行わないように RIP インターフェイスを設定できます。

受動モードでRIPインターフェイスを設定するには、インターフェイス設定モードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
ip rip passive-interface 例 : switch(config-if)# ip rip passive-interface	インターフェイスを受動モードに設定します。

ポイズン リバースを指定したスプリット ホライズンの設定

インターフェイスの設定でポイズンリバースをイネーブルにすると、RIPが学習したルートについて、ルートを学習したインターフェイス経由では到達不能であることをアドバタイズできます。

インターフェイス上で、ポイズンリバースを指定してスプリットホライズンを設定するには、インターフェイス コンフィギュレーション モードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
ip rip poison-reverse 例 : switch(config-if)# ip rip poison-reverse	ポイズン リバースを指定してスプリット ホライズンをイネーブルにします。ポイズンリバースを指定したスプリット ホライズンは、デフォルトでディセーブルです。

ルート集約の設定

ルーティングテーブルでサマリーアドレスによって表されるサマリアドレスを作成できます。Cisco NX-OS は、固有性の強いすべてのルートの中でメトリックが最小のサマリー アドレスメトリックをアドバタイズします。

インターフェイス上でサマリーアドレスを設定するには、インターフェイスコンフィギュレーション モードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
ip rip summary-address ip-prefix/mask-len 例 : switch(config-if)# ip router rip summary-address 192.0.2.0/24	IPv4 アドレスに対応する、RIP用のサマリーアドレスを設定します。

ルートの再配布の設定

別のルーティングプロトコルからのルーティング情報を受け入れて、RIP ネットワークを通じてその情報を再配布するように、RIP を設定できます。再配布されたルートを任意で、デフォルトルートとして割り当てることができます。

始める前に

RIP 機能がイネーブルになっていることを確認します ([RIP 機能の有効化](#)を参照)。

再配布を設定する前に、ルートマップを設定します。ルートマップの設定の詳細については、「[ルートマップの設定](#)」セクションを参照してください。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : switch# configure terminal switch(config)#	コンフィギュレーション モードに入ります。
ステップ 2	router rip instance-tag 例 : switch(config)# router RIP Enterprise switch(config-router)#	<i>instance-tag</i> 値 を設定して、新しい RIP インスタンスを作成します。
ステップ 3	address-family ipv4 unicast 例 : switch(config-router)# address-family ipv4 unicast switch(config-router-af)#	この RIP インスタンスのアドレス ファミリを設定し、アドレス ファミリ コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 4	bgp {direct as eigrp {ospf ospfv3 rip static route-map} instance-tag } redistributemap-name 例 : switch(config-router-af)# redistribute eigrp 201 route-map RIPmap	他のプロトコルからのルートを RIP に再配布します。ルート マップの設定の詳細については、 ルートマップの設定 のセクションを参照してください。
ステップ 5	(任意) default-information originate [always] [route-map map-name] 例 : switch(config-router-af)# default-information originate always	RIP にデフォルト ルートを生成し、必要に応じてルート マップにより制御します。
ステップ 6	(任意) default-metric value 例 :	再配布されたすべてのルートにデフォルト メトリックを設定します。有効な範

	コマンドまたはアクション	目的
	switch(config-router-af)# default-metric 10	囲は 1 ～ 15 です。デフォルトは 1 です。
ステップ 7	(任意) show ip rip route [<i>ip-prefix</i> [longer-prefixes shorter-prefixes] [vrf vrf-name] [<i>summary</i>] 例 : switch(config-router-af)# show ip rip route	RIP のルートを表示します。
ステップ 8	(任意) copy running-config startup-config 例 : switch(config)# copy running-config startup-config	この設定変更を保存します。

例

次に、EIGRP を RIP に再配布する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# router rip Enterprise
switch(config-router)# address-family ipv4 unicast
switch(config-router-af)# redistribute eigrp 201 route-map RIPmap
switch(config-router-af)# copy running-config startup-config
```

仮想化の設定

複数の VRF を作成できます。また、各 VRF で同じ RIP インスタンスを使用することも、複数の RIP インスタンスを使用することも可能です。VRF に RIP インターフェイスを割り当てます。



- (注) インターフェイスの VRF を設定した後に、インターフェイスの他のすべてのパラメータを設定します。インターフェイスの VRF を設定すると、そのインターフェイスのすべての設定が削除されます。

始める前に

RIP 機能がイネーブルになっていることを確認します ([RIP 機能の有効化](#)を参照)。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : switch# configure terminal switch(config)#	コンフィギュレーションモードに入ります。
ステップ 2	vrf vrf-name 例 : switch(config)# vrf RemoteOfficeVRF switch(config-vrf)#	新しい VRF を作成します。
ステップ 3	exit 例 : switch(config-vrf)# exit switch(config)#	VRF 設定モードを終了します。
ステップ 4	router rip instance-tag 例 : switch(config)# router RIP Enterprise switch(config-router)#	<i>instance-tag</i> 値を設定して、新しい RIP インスタンスを作成します。
ステップ 5	vrf context vrf-name 例 : switch(config)# vrf context RemoteOfficeVRF switch(config-vrf)#	新しい VRF を作成し、VRF 設定モードを開始します。
ステップ 6	(任意) address-family ipv4 unicast 例 : switch(config-router)# address-family ipv4 unicast switch(config-router-af)#	この RIP インスタンスの VRF アドレスファミリを設定します。
ステップ 7	(任意) bgp {direct as eigrp {ospf ospfv3 rip static route-map} instance-tag } redistributemap-name 例 : switch(config-router-af)# redistribute eigrp 201 route-map RIPmap	他のプロトコルからのルートを RIP に再配布します。ルートマップの設定の詳細については、 ルートマップの設定 のセクションを参照してください。
ステップ 8	interface ethernet slot/port 例 : switch(config-router-vrf-af)# interface ethernet 1/2 switch(config-if)#	インターフェイス設定モードを開始します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 9	no switchport 例 : switch(config-if)# no switchport	そのインターフェイスを、レイヤ 3 ルーテッドインターフェイスとして設定します。
ステップ 10	vrf member vrf-name 例 : switch(config-if)# vrf member RemoteOfficeVRF	このインターフェイスを VRF に追加します。
ステップ 11	ip address ip-prefix/length 例 : switch(config-if)# ip address 192.0.2.1/16	このインターフェイスの IP アドレスを設定します。このステップは、このインターフェイスを VRF に割り当てたあとに行う必要があります。
ステップ 12	ip router rip instance-tag 例 : switch(config-if)# ip router rip Enterprise	このインターフェイスを RIP インスタンスに関連付けます。
ステップ 13	(任意) show ip rip route [ip-prefix [longer-prefixes shorter-prefixes] [vrf vrf-name] [summary] 例 : switch(config-router-af)# show ip rip route	RIP のルートを表示します。
ステップ 14	(任意) copy running-config startup-config 例 : switch(config)# copy running-config startup-config	この設定変更を保存します。

例

次に、VRF を作成して、その VRF にインターフェイスを追加する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# vrf context RemoteOfficeVRF
switch(config-vrf)# exit
switch(config)# router rip Enterprise
switch(config-router)# vrf RemoteOfficeVRF
switch(config-router-vrf)# address-family ipv4 unicast
switch(config-router-vrf-af)# redistribute eigrp 201 route-map RIPmap
switch(config-router-vrf-af)# interface ethernet 1/2
switch(config-if)# no switchport
switch(config-if)# vrf member RemoteOfficeVRF
switch(config-if)# ip address 192.0.2.1/16
```

```
switch(config-if)# ip router rip Enterprise
switch(config-if)# copy running-config startup-config
```

RIP の調整

ネットワーク要件に適合するように RIP を調整できます。RIP では複数のタイマーを使用して、ルーティングアップデート間隔、ルートが無効になるまでの時間の長さ、およびその他のパラメータを決定します。これらのタイマーを調整すると、インターネットワークのニーズに適合するように、ルーティングプロトコルのパフォーマンスを調整できます。



(注) ネットワーク上のすべての RIP 対応ルータで、RIP タイマーに同じ値を設定する必要があります。

RIP を調整するには、アドレス ファミリ コンフィギュレーション モードで次のオプション コマンドを使用します。

コマンド	目的
timers basic update timeout holddown garbage-collection 例 : <pre>switch(config-router-af)# timers basic 40 120 120 100</pre>	RIP タイマーを秒数で設定します。パラメータは次のとおりです。 • update : 指定できる範囲は 5 ～任意の正の整数。デフォルトは 30 です。 • timeout : ルートの無効を宣言するまでに、Cisco NX-OS が待機する時間。タイムアウトインターバルが終了するまでに、このルートのアップデート情報を Cisco NX-OS が受信しなかった場合、Cisco NX-OS はルートの無効を宣言します。指定できる範囲は 1 ～任意の正の整数です。デフォルトは 180 です。 • holddown : 無効ルートに関するよりよいルート情報を Cisco NX-OS が無視する時間。指定できる範囲は 0 ～任意の正の整数です。デフォルトは 180 です。 • garbage-collection : Cisco NX-OS がルートを無効として表示してから、Cisco NX-OS がそのルートをルーティング テーブルから削除するまでの時間。指定できる範囲は 1 ～任意の正の整数です。デフォルトは 120 です。

RIP を調整するには、インターフェイス コンフィギュレーション モードで次のオプション コマンドを使用します。

コマンド	目的
ip rip metric-offset <i>value</i> 例 : <pre>switch(config-if)# ip rip metric-offset 10</pre>	このインターフェイスで受信する各ルータのメトリックに値を追加します。有効な範囲は 1 ～ 15 です。デフォルトは 1 です。
ip rip route-filter {prefix-list <i>list-name</i> route-map <i>map-name</i> [in out]} 例 : <pre>switch(config-if)# ip rip route-filter route-map InputMap in</pre>	着信または発信 RIP アップデートをフィルタリングするための、ルート マップを指定します。

RIP の設定の確認

RIP の設定情報を表示するには、次のいずれかの作業を行います。

コマンド	目的
show ip rip instance [<i>instance-tag</i>] [vrf <i>vrf-name</i>]	RIP インスタンスの状態を表示します。
show ip rip [instance <i>instance-tag</i>] interface <i>slot/port</i> detail [vrf <i>vrf-name</i>]	インターフェイスの RIP ステータスを表示します。
show ip rip [instance <i>instance-tag</i>] neighbor [<i>interface-type number</i>] [vrf <i>vrf-name</i>]	RIP ネイバー テーブルを表示します。
show ip rip [instance <i>instance-tag</i>] route [<i>ip-prefix/length</i>] [longer-prefixes shorter--prefixes] [<i>summary</i>] [vrf <i>vrf-name</i>]	RIP ルート テーブルを表示します。
show running-configuration rip	現在実行中の RIP コンフィギュレーションを表示します。

RIP 統計情報の表示

RIP 統計情報設定表示するには、次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
show ip rip [instance <i>instance-tag</i>] policy statistics redistribute { bgp as direct { eigrp ospf ospfv3 rip } [<i>instance-tag</i>] static } [vrf <i>vrf-name</i>]	RIP ポリシー ステータスを表示します。
show ip rip [instance <i>instance-tag</i>] statistics interface-type <i>number</i>] [vrf <i>vrf-name</i>]	RIP の統計情報を表示します。

clear ip rip policy コマンドを使用して、ポリシー統計情報をクリアします。

clear ip rip statistics コマンドを使用して、RIP 統計情報をクリアします。

RIP の設定例

VRF で Enterprise RIP インスタンスを作成し、その RIP インスタンスにイーサネットインターフェイス 1/2 を追加する例を示します。さらに、**ethernet interface 1/2** の認証を設定し、この RIP ドメインに EIGRP を再配布します。

```
vrf context NewVRF
!
feature rip
router rip Enterprise
vrf NewVRF
address-family ip unicast
redistribute eigrp 201 route-map RIPmap
max-paths 10
!
interface ethernet 1/2
no switchport
vrf NewVRF
ip address 192.0.2.1/16
ip router rip Enterprise
ip rip authentication mode md5
ip rip authentication keychain RIPKey
```

関連項目

ルートマップの詳細については、[Route Policy Manager の設定（441 ページ）](#) を参照してください。

その他の参考資料

RIP の実装に関連する詳細情報については、次の項を参照してください。

関連資料

関連項目	マニュアル タイトル
RIP CLI コマンド	『Cisco Nexus 3000 Series Command Reference』

標準

標準	タイトル
この機能でサポートされる新規の標準または変更された標準はありません。また、既存の標準のサポートは変更されていません。	—



第 16 章

スタティック ルーティングの設定

この章では、ルータでスタティック ルートとデフォルト ルートを構成する方法について説明します。

この章は、次の項で構成されています。

- [スタティック ルーティングについての情報 \(407 ページ\)](#)
- [スタティック ルーティングの前提条件 \(409 ページ\)](#)
- [スタティック ルーティングの注意事項および制約事項 \(410 ページ\)](#)
- [静的ルーティングのデフォルト設定 \(410 ページ\)](#)
- [スタティック ルーティングの設定 \(410 ページ\)](#)
- [その他の参考資料 \(412 ページ\)](#)

スタティック ルーティングについての情報

ルータは、ユーザーが手動で設定したルート テーブル エントリのルート情報を使用するか、またはダイナミック ルーティング アルゴリズムで計算されたルート情報を使用して、パケットを転送します。

スタティック ルートは、2つのルータ間の明示パスを定義するものであり、自動的にアップデイトされません。ネットワークに変更があった場合は、ユーザーが手動でスタティック ルートを再設定する必要があります。スタティック ルートは、ダイナミック ルートに比べて使用する帯域幅が少なくなります。ルーティング アップデイトの計算や分析に CPU サイクルを使用しません。

必要に応じて、スタティック ルートでダイナミック ルートを補うことができます。スタティック ルートをダイナミック ルーティング アルゴリズムに再配布することはできますが、ダイナミック ルーティング アルゴリズムで計算されたルーティング情報をスタティック ルーティング テーブルに再配布することはできません。

スタティック ルートは、ネットワーク トラフィックが予測可能で、ネットワーク設計が単純な環境で使用します。スタティック ルートはネットワークの変化に対応できないので、大規模でたえず変化しているネットワークでは、スタティック ルートを使用すべきではありません。大部分のネットワークは、ルータ間の通信にダイナミック ルートを使用しますが、特殊な状況でスタティック ルートを 1 つか 2 つ設定する場合があります。スタティック ルートは、最終

手段としてのゲートウェイ（ルーティング不能なすべてのパケットの送信先となるデフォルト ルータ）を指定する場合にも便利です。

アドミニストレーティブ ディスタンス

アドミニストレーティブ ディスタンスは、2つの異なるルーティングプロトコルから同じ宛先に、2つ以上のルートが存在する場合に、最適なパスを選択するために、ルータが使用するメトリックです。複数のプロトコルがユニキャスト ルーティング テーブルに同じルートを追加した場合に、アドミニストレーティブ ディスタンスを手がかりに、他のルーティング プロトコル（またはスタティック ルート）ではなく、特定のルーティング プロトコル（またはスタティック ルート）が選択されます。各ルーティング プロトコルは、アドミニストレーティブ ディスタンス値を使用して、信頼性の高い順にプライオリティが与えられます。

スタティック ルートのデフォルトのアドミニストレーティブ ディスタンスは1です。ルータは値の小さいルートが最短であると見なすので、スタティック ルートがダイナミック ルートより優先されます。ダイナミック ルートでスタティック ルートを上書きする場合は、スタティック ルートにアドミニストレーティブ ディスタンスを指定します。たとえば、アドミニストレーティブ ディスタンスが120のダイナミック ルートが2つある場合に、ダイナミック ルートでスタティック ルートを上書きするには、スタティック ルートに120より大きいアドミニストレーティブ ディスタンスを指定します。

直接接続のスタティック ルート

直接接続のスタティック ルートで指定しなければならないのは、出力インターフェイス（あらゆるパケットを宛先ネットワークに送り出すインターフェイス）だけです。ルータは宛先が出力インターフェイスに直接接続されているものと見なし、パケットの宛先をネクスト ホップ アドレスとして使用します。ネクストホップは、ポイントツーポイントインターフェイスの場合に限り、インターフェイスにできます。ブロードキャストインターフェイスの場合は、ネクストホップをIPv4 アドレスにする必要があります。

完全指定のスタティック ルート

完全指定のスタティック ルートでは、出力インターフェイス（あらゆるパケットを宛先ネットワークに送り出すインターフェイス）またはネクスト ホップ アドレスのどちらかを指定する必要があります。完全指定のスタティック ルートを使用できるのは、出力インターフェイスがマルチアクセス インターフェイスで、ネクストホップ アドレスを特定する必要がある場合です。ネクストホップアドレスは、指定された出力インターフェイスに直接接続する必要があります。

フローティング スタティック ルート

フローティング スタティック ルートは、ダイナミック ルートをバックアップするためにルータが使用するスタティック ルートです。フローティング スタティック ルートには、バックアップするダイナミック ルートより大きいアドミニストレーティブ ディスタンスを設定する必要

があります。この場合、ルータはフローティング スタティック ルートよりダイナミック ルートを優先させます。フローティング スタティック ルートは、ダイナミック ルートが失われた場合の代用として使用できます。



- (注) デフォルトでは、ルータはダイナミック ルートよりスタティック ルートを優先させます。スタティック ルートの方がダイナミック ルートより、アドミニストレーティブ ディスタンスが小さいからです。

スタティック ルートのリモート ネクスト ホップ

リモート（非直接接続）ネクスト ホップを指定したスタティック ルートの場合、ルータに直接接続されていない隣接ルータのネクストホップアドレスを指定できます。データ転送時に、スタティック ルートにリモート ネクストホップがあると、そのネクスト ホップがユニキャスト ルーティング テーブルで繰り返し使用され、リモート ネクストホップに到達可能な、対応する直接接続のネクストホップ（複数可）が特定されます。

BFD

この機能では、双方向フォワーディング検出（BFD）をサポートします。BFDは、転送パスの障害を高速で検出することを目的にした検出プロトコルです。BFDは2台の隣接デバイス間のサブセカンド障害を検出し、BFD の負荷の一部を、サポートされるモジュール上のデータ プレーンに分散できるため、プロトコル hello メッセージよりも CPU を使いません。

BGP の BFD は eBGP シングルホップ ピアおよび iBGP シングルホップ ピアでサポートされます。BFD を使用している iBGP シングル ホップ ピアの場合、ネイバー コンフィギュレーション モードで `update-source` オプションを構成する必要があります。BFD は、その他の iBGP ピアまたはマルチホップ eBGP ピアでサポートされません。

仮想化のサポート

スタティック ルートは仮想ルーティングおよび転送（VRF）インスタンスをサポートします。デフォルトでは、特に別の VRF を設定しない限り、Cisco NX-OS はユーザーをデフォルトの VRF に配置します。詳細については、「[レイヤ 3 仮想化の設定](#)」を参照してください。

スタティック ルーティングの前提条件

スタティック ルーティングの前提条件は、次のとおりです。

- スタティック ルートのネクストホップ アドレスは到達可能である必要があります。そうでないと、そのスタティック ルートはユニキャスト ルーティング テーブルに追加されません。

スタティック ルーティングの注意事項および制約事項

スタティック ルーティング設定時の注意事項および制約事項は、次のとおりです。

- スタティック ルートのネクストホップ アドレスとしてインターフェイスを指定できるのは、GRE トンネルなどのポイントツーポイント インターフェイスの場合に限られます。

静的ルーティングのデフォルト設定

表にスタティック ルーティング パラメータのデフォルト設定を示します。

表 25: デフォルトのスタティック ルーティング パラメータ

パラメータ	デフォルト
アドミニストレーティブ ディスタンス	1
RIP 機能	無効

スタティック ルーティングの設定



(注) Cisco IOS の CLI に慣れている場合、この機能に対応する Cisco NX-OS コマンドは通常使用する Cisco IOS コマンドと異なる場合がありますので注意してください。

スタティック ルーティングの設定

ルータ上でスタティック ルートを設定できます。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	コンフィギュレーション モードに入ります。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 2	ip route { <i>ip-prefix</i> <i>ip-addr ip-mask</i> } { [<i>next-hop</i> <i>nh-prefix</i>] } [<i>interface next-hop</i> <i>nh-prefix</i>] } [tag <i>tag-value</i> [<i>pref</i>] 例 : <pre>switch(config)# ip route 192.0.2.0/8 ethernet 1/2 192.0.2.4</pre>	スタティック ルートおよびこのスタティック ルート用のインターフェイスを設定します。任意でネクスト ホップアドレスを設定できます。 <i>pref</i> 値で管理上の距離を設定します。範囲は1～255です。デフォルトは1です。
ステップ 3	(任意) show ip static-route 例 : <pre>switch(config)# show ip static-route</pre>	スタティック ルート情報を表示します。
ステップ 4	(任意) copy running-config startup-config 例 : <pre>switch(config)# copy running-config startup-config</pre>	この設定変更を保存します。

例

スタティック ルートの設定例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# ip route 192.0.2.0/8 192.0.2.10
switch(config)# copy running-config startup-config
```

no ip static-route コマンドを使用すれば、スタティック ルートを削除できます。

仮想化の設定

VRF でスタティック ルートを設定できます。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	コンフィギュレーション モードに入ります。
ステップ 2	vrf context <i>vrf-name</i> 例 : <pre>switch(config)# vrf context StaticVrf</pre>	VRF を作成し、VRF コンフィギュレーション モードを開始します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 3	ip route { <i>ip-prefix</i> <i>ip-addr ip-mask</i> } { [<i>next-hop</i> <i>nh-prefix</i>] } [<i>interface next-hop</i> <i>nh-prefix</i>] } [tag <i>tag-value</i> [<i>pref</i>] 例 : <pre>switch(config)# ip route 192.0.2.0/8 ethernet 1/2 192.0.2.4</pre>	スタティック ルートおよびこのスタティック ルート用のインターフェイスを設定します。任意でネクスト ホップアドレスを設定できます。 <i>pref</i> 値で管理上の距離を設定します。範囲は1～255です。デフォルトは1です。
ステップ 4	(任意) show ip static-route vrf vrf-name 例 : <pre>switch(config)# show ip static-route</pre>	スタティックルート情報を表示します。
ステップ 5	(任意) copy running-config startup-config 例 : <pre>switch(config)# copy running-config startup-config</pre>	この設定変更を保存します。

例

スタティック ルートの設定例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# vrf context StaticVrf
switch(config-vrf)# ip route 192.0.2.0/8 192.0.2.10
switch(config-vrf)# copy running-config startup-config
```

その他の参考資料

スタティック ルーティングの実装に関連する詳細情報については、次の項を参照してください。

関連資料

関連項目	マニュアル タイトル
スタティックルーティング CLI	『Cisco Nexus 3000 Series Command Reference』



第 17 章

レイヤ 3 仮想化の設定

この章では、レイヤ 3 仮想化の設定手順について説明します。

この章は、次の項で構成されています。

- [レイヤ 3 仮想化 \(413 ページ\)](#)
- [VRF の注意事項と制約事項 \(417 ページ\)](#)
- [VRF-Lite の注意事項と制限事項 \(417 ページ\)](#)
- [VRF ルート リークの注意事項と制約事項 \(418 ページ\)](#)
- [デフォルト設定 \(418 ページ\)](#)
- [VRF の設定 \(419 ページ\)](#)
- [VRF の設定の確認 \(425 ページ\)](#)
- [VRF の設定例 \(425 ページ\)](#)
- [その他の参考資料 \(427 ページ\)](#)

レイヤ 3 仮想化

このセクションは、次のトピックで構成されています。

レイヤ 3 仮想化の概要

Cisco NX-OS は、仮想ルーティングおよび転送 (VRF) インスタンスをサポートしています。各 VRF には、IPv4 に対応するユニキャストルートテーブルを備えた、独立したアドレス空間が 1 つずつあり、他の VRF と無関係にルーティングを決定できます。

ルータごとに、デフォルト VRF および管理 VRF があります。すべてのレイヤ 3 インターフェイスおよびルーティング プロトコルは、ユーザが別の VRF に割り当てない限り、デフォルト VRF に存在します。mgmt0 インターフェイスは、管理 VRF 内に存在します。スイッチは、VRF-Lite 機能を使用して、カスタマー エッジ (CE) スイッチで複数の VRF をサポートします。VRF-Lite によって、サービス プロバイダーは 1 つのインターフェイスを使用して、重複する IP アドレスを持つ複数のバーチャルプライベート ネットワーク (VPN) をサポートできます。



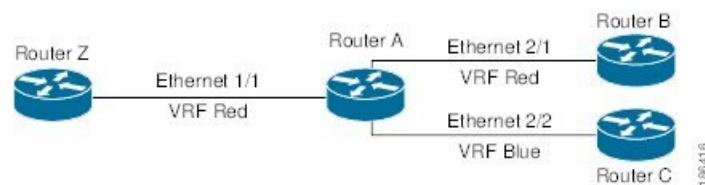
(注) スイッチでは、VPN のサポートのためにマルチプロトコル ラベル スイッチング (MPLS) が使用されません。

VRF およびルーティング

すべてのユニキャストおよびマルチキャストルーティングプロトコルはVRFをサポートします。VRFでルーティングプロトコルを設定する場合は、同じルーティングプロトコルインスタンスの別のVRFのルーティングパラメータに依存しないルーティングパラメータをそのVRFに設定します。

VRFにインターフェイスおよびルーティングプロトコルを割り当てることによって、仮想レイヤ3ネットワークを作成できます。インターフェイスが存在するVRFは1つだけです。次の図は、1つの物理ネットワークが2つのVRFからなる2つの仮想ネットワークに分割されている例を示しています。ルータZ、A、およびBは、VRF Redにあり、1つのアドレスドメインを形成しています。これらのルータは、ルータCが含まれないルートアップデータを共有します。ルータCは別のVRFで設定されているからです。

図 32: ネットワーク内の VRF



デフォルトで、着信インターフェイスのVRFを使用して、ルート検索に使用するルーティングテーブルを選択します。ルートポリシーを設定すると、この動作を変更し、Cisco NX-OSが着信パケットに使用するVRFを設定できます。

VRFはVRF間のルートリーク（インポートまたはエクスポート）をサポートします。いくつかの制限が、VRF-Liteのルートリークに適用されます。詳細については、[VRF ルートリーキングの注意事項および制約事項](#)のセクションを参照してください。

VRF-Lite

VRF-Liteの機能によって、サービスプロバイダーは、VPN間で重複したIPアドレスを使用できる複数のVPNをサポートできます。VRF-Liteは入力インターフェイスを使用して異なるVPNのルートを区別し、各VRFに1つまたは複数のレイヤ3インターフェイスを対応付けて仮想パケット転送テーブルを形成します。VRFのインターフェイスは、イーサネットポートなどの物理インターフェイス、またはVLAN SVIなどの論理インターフェイスにすることができますが、レイヤ3インターフェイスは、一度に複数のVRFに属することはできません。



(注) VRF-Lite の実装では、マルチプロトコル ラベル スイッチング (MPLS) および MPLS コントロール プレーン はサポートされません。



(注) VRF-Lite インターフェイスは、レイヤ 3 インターフェイスである必要があります。

VRF 認識サービス

Cisco NX-OS アーキテクチャの基本的な特徴として、すべての IP ベースの機能が VRF を認識することがあげられます。

次の VRF 認識サービスは、特定の VRF を選択することにより、リモート サーバへの接続や、選択した VRF に基づいた情報のフィルタリングを可能にします。

- AAA
- Call Home
- HSRP
- HTTP
- ライセンス
- NTP
- RADIUS
- Ping と トレース ルート
- SSH
- SNMP
- Syslog
- TACACS+
- TFTP
- VRRP

各サービスで VRF サポートを設定する詳細については、各サービスの適切なコンフィギュレーション ガイドを参照してください。

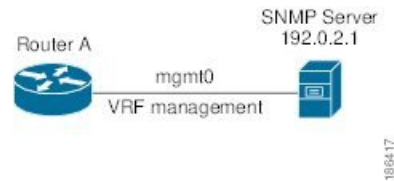
Reachability

到達可能性は、サービスを提供するサーバに到達するために必要なルーティング情報がどの VRF にあるかを示します。たとえば、管理 VRF で到達可能な SNMP サーバを設定できます。

ルータにサーバアドレスを設定する場合は、サーバに到達するために Cisco NX-OS が使用する VRF も設定します。

次の図は、管理 VRF を介して到達可能な SNMP サーバを示しています。SNMP サーバ ホスト 192.0.2.1 には管理 VRF を使用するように、ルータ A を設定します。

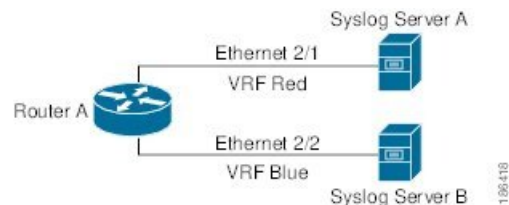
図 33: サービス VRF の到達可能性



フィルタリング

フィルタリングにより、VRF に基づいて VRF 認識サービスに渡される情報のタイプを制限できます。たとえば、Syslog サーバが特定の VRF をサポートするように設定できます。次の図は、それぞれが 1 つの VRF をサポートしている 2 つの syslog サーバを示しています。syslog サーバ A は VRF Red で設定されているので、Cisco NX-OS は VRF Red で生成されたシステムメッセージだけを syslog サーバ A に送信します。

図 34: サービス VRF のフィルタリング

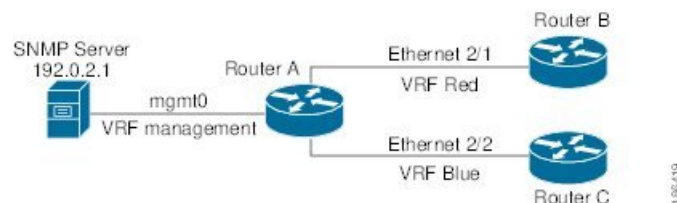


到達可能性とフィルタリングの組み合わせ

VRF 認識サービスの到達可能性とフィルタリングを組み合わせることができます。サービスに接続するために Cisco NX-OS が使用する VRF とともに、そのサービスがサポートする VRF も設定できます。デフォルト VRF でサービスを設定する場合は、任意で、すべての VRF をサポートするようにサービスを設定できます。

次の図は、管理 VRF を介して到達可能な SNMP サーバを示しています。たとえば、SNMP サーバが VRF Red からの SNMP 通知だけをサポートするように設定できます。

図 35: サービス VRF の到達可能性とフィルタリング



VRF の注意事項と制約事項

VRF には VRF Lite のシナリオにおいて次の設定の注意事項と制約事項があります:

- インターフェイスを既存の VRF のメンバにすると、Cisco NX-OS はあらゆるレイヤ 3 設定を削除します。VRF にインターフェイスを追加したあとで、すべてのレイヤ 3 パラメータを設定する必要があります。
- 管理 VRF に `mgmt0` インターフェイスを追加し、そのあとで `mgmt0` の IP アドレスおよびその他のパラメータを設定します。
- VRF が存在しないうちに VRF のインターフェイスを設定した場合は、VRF を作成するまで、そのインターフェイスは運用上のダウンになります。
- Cisco NX-OS はデフォルトで、デフォルトと管理 VRF を作成します。`mgmt0` は管理 VRF のメンバにする必要があります。
- **write erase boot** コマンドを実行しても、管理 VRF の設定は削除されません。まず **write erase command** コマンド、それから **write erase boot** コマンドを使用する必要があります。

VRF-Lite の注意事項と制限事項

VRF-lite には、次の注意事項と制限事項があります。

- VRF-lite を備えたスイッチは、各 VRF に対してそれぞれ、グローバル ルーティング テーブルとは異なる IP ルーティング テーブルを持ちます。
- VRF-lite が異なる VRF テーブルを使用するため、同じ IP アドレスを再利用できます。別々の VPN では IP アドレスの重複が許可されます。
- VRF-Lite では、一部の MPLS-VRF 機能（ラベル交換、LDP の隣接関係、またはラベル付きパケット）がサポートされていません。
- 複数の仮想レイヤ 3 インターフェイスを VRF-lite スイッチに接続できます。
- スイッチでは、物理ポートか VLAN SVI、またはその両方の組み合わせを使用して、VRF を設定できます。SVI は、アクセス ポートまたはトランク ポートで接続できます。
- レイヤ 3 TCAM リソースは、すべての VRF 間で共有されます。各 VRF が十分な CAM 領域を持つようにするには、`maximum routes` コマンドを使用します。
- すべての VRF でサポートされるルートの総数は、TCAM の容量によって制限されます。
- VRF-lite は、BGP、Routing Information Protocol (RIP)、スタティック ルーティングをサポートします。
- VRF-lite は、Enhanced Interior Gateway Routing Protocol (EIGRP) をサポートしません。
- VRF-Lite は、パケット スイッチング レートに影響しません。

- マルチキャストを同時に同一のレイヤ 3 インターフェイス上に設定することはできません。

VRF ルート リークの注意事項と制約事項

VRF ルート リークには次の注意事項と制約事項があります。

- ルート リークはデフォルト以外の 2 つの VRF 間でサポートされます。また、デフォルト VRF と任意の他の VRF 間でもサポートされます。
- デフォルト VRF へのルート リークは、グローバル VRF であるため使用できません。
- VRF 間のルート リークは SR MPLS ではサポートされません。
- 指定した IP アドレスにマッチするルート マップのフィルタを使用して、特定のルートに対してルート リークを制限できます。
- デフォルトでは、リークできる IP プレフィックスの最大数は 1000 ルートに設定されています。この数値は 0 から 1000 までの任意の値に設定できます。
- VRF ルート リークには Enterprise ライセンスが必要で、BGP をイネーブルにする必要があります。
- 新しい CLI `default-information originate` が追加され、デフォルトのスタティック ルートをすべての BGP (VRF) 仮想ルータ コンテキストに配布し、そのルートをすべての BGP VRF のローカル BGP ルート テーブルにインストールします。構成に関する詳細は、「[視覚化の構成](#)」を参照してください。

デフォルト設定

次の表に、VRF パラメータのデフォルト設定値を示します。

表 26: デフォルトの VRF パラメータ

パラメータ	デフォルト
設定されている VRF	デフォルト、管理
ルーティング コンテキスト	デフォルト VRF

VRF の設定



(注) Cisco IOS の CLI に慣れている場合、この機能に対応する Cisco NX-OS コマンドは通常使用する Cisco IOS コマンドと異なる場合がありますので注意してください。

VRF の作成

スイッチに VRF を作成できます。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	コンフィギュレーション モードに入ります。
ステップ 2	vrf context name 例 : <pre>switch(config)# vrf definition Enterprise switch(config-vrf)#</pre>	新しい VRF を作成し、VRF 設定モードを開始します。 <i>name</i> には最大 32 文字の英数字を使用できます。大文字と小文字は区別されます。
ステップ 3	ip route { ip-prefix ip-addr ip-mask } { [next-hop nh-prefix] [interface next-hop nh-prefix] } [tag tag-value [pref] 例 : <pre>switch(config-vrf)# ip route 192.0.2.0/8 ethernet 1/2 192.0.2.4</pre>	スタティック ルートおよびこのスタティック ルート用のインターフェイスを設定します。任意でネクスト ホップ アドレスを設定できます。 <i>preference</i> 値で管理上の距離を設定します。範囲は 1 ~ 255 です。デフォルトは 1 です。
ステップ 4	(任意) show vrf [vrf-name] 例 : <pre>switch(config-vrf)# show vrf Enterprise</pre>	VRF 情報を表示します。
ステップ 5	(任意) copy running-config startup-config 例 : <pre>switch(config)# copy running-config startup-config</pre>	この設定変更を保存します。

例

VRF および関連する設定を削除するには、**no vrf context** コマンドを使用します。

コマンド	目的
no vrf context name 例 : switch(config)# no vrf context Enterprise	VRF および関連するすべての設定を削除します。

グローバル設定モードで使えるコマンドはすべて、VRF 設定モードでも使用できます。

次に、VRF を作成し、VRF にスタティック ルートを追加する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# vrf context Enterprise
switch(config-vrf)# ip route 192.0.2.0/8 ethernet 1/2
switch(config-vrf)# exit
switch(config)# copy running-config startup-config
```

インターフェイスへの VRF メンバーシップの割当て

インターフェイスを VRF のメンバにできます。

始める前に

VRF 用のインターフェイスを設定したあとで、インターフェイスに IP アドレスを割り当てます。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : switch# configure terminal switch(config)#	コンフィギュレーション モードに入ります。
ステップ 2	interface interface-type slot/port 例 : switch(config)# interface ethernet 1/2 switch(config-if)#	インターフェイス設定モードを開始します。
ステップ 3	vrf member vrf-name 例 : switch(config-if)# vrf member RemoteOfficeVRF	このインターフェイスを VRF に追加します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 4	ip address ip-prefix/length 例 : <pre>switch(config-if)# ip address 192.0.2.1/16</pre>	このインターフェイスの IP アドレスを設定します。このステップは、このインターフェイスを VRF に割り当てたあとに行う必要があります。
ステップ 5	show vrf vrf-name interface interface-type number 例 : <pre>switch(config-vrf)# show vrf Enterprise interface ethernet 1/2</pre>	VRF 情報を表示します。
ステップ 6	(任意) copy running-config startup-config 例 : <pre>switch(config)# copy running-config startup-config</pre>	この設定変更を保存します。

例

次に、VRF にインターフェイスを追加する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# interface ethernet 1/2
switch(config-if)# vrf member RemoteOfficeVRF
switch(config-if)# ip address 192.0.2.1/16
switch(config-if)# copy running-config startup-config
```

ルーティング プロトコル用の VRF パラメータの設定

1 つまたは複数の VRF にルーティング プロトコルを関連付けることができます。ルーティング プロトコルに関する VRF の設定については、該当する章を参照してください。ここでは、詳細な設定手順の例として、OSPFv2 プロトコルを使用します。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	コンフィギュレーション モードに入ります。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 2	router ospf instance-tag 例 : switch(config-vrf)# router ospf 201 switch(config-router)#	新規 OSPFv2 インスタンスを作成して、設定済みのインスタンス タグを割り当てます。
ステップ 3	vrf vrf-name 例 : switch(config-router)# vrf RemoteOfficeVRF switch(config-router-vrf)#	VRF 設定モードを開始します。
ステップ 4	(任意) maximum-paths paths 例 : switch(config-router-vrf)# maximum-paths 4	この VRF のルート テーブル内の宛先への、同じ OSPFv2 パスの最大数を設定します。ロード バランシングに使用されます。
ステップ 5	interface interface-typeslot/port 例 : switch(config)# interface ethernet 1/2 switch(config-if)#	インターフェイス設定モードを開始します。
ステップ 6	vrf member vrf-name 例 : switch(config-if)# vrf member RemoteOfficeVRF	このインターフェイスを VRF に追加します。
ステップ 7	ip address ip-prefix/length 例 : switch(config-if)# ip address 192.0.2.1/16	このインターフェイスの IP アドレスを設定します。このステップは、このインターフェイスを VRF に割り当てたあとに行う必要があります。
ステップ 8	ip router ospf instance-tag area area-id 例 : switch(config-if)# ip router ospf 201 area 0	このインターフェイスを OSPFv2 インスタンスおよび設定エリアに割り当てます。
ステップ 9	(任意) copy running-config startup-config 例 : switch(config)# copy running-config startup-config	この設定変更を保存します。

例

次に、VRF を作成して、その VRF にインターフェイスを追加する例を示します。


```

switch# configure terminal
switch(config)# vrf context RemoteOfficeVRF
switch(config-vrf)# exit
switch(config)# router ospf 201
switch(config-router)# vrf RemoteOfficeVRF
switch(config-router-vrf)# maximum-paths 4
switch(config-router-vrf)# interface ethernet 1/2
switch(config-if)# vrf member RemoteOfficeVRF
switch(config-if)# ip address 192.0.2.1/16
switch(config-if)# ip router ospf 201 area 0
switch(config-if)# exit
switch(config)# copy running-config startup-config

```

VRF 認識サービスの設定

VRF 認識サービスの到達可能性とフィルタリングを設定できます。VRF 用サービスの設定手順を扱っている、該当する章またはコンフィギュレーションガイドへのリンクについては、[VRF 認識サービス](#)のセクションを参照してください。ここでは、サービスの詳細な設定手順の例として、SNMP および IP ドメイン リストを使用します。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : switch# configure terminal switch(config)#	コンフィギュレーション モードに入ります。
ステップ 2	snmp-server host ip-address [filter_vrf vrf-name] [use-vrf vrf-name] 例 : switch(config)# snmp-server host 192.0.2.1 use-vrf Red switch(config-vrf)#	グローバル SNMP サーバを設定し、サービスに到達するために Cisco NX-OS が使用する VRF を設定します。選択した VRF からこのサーバへの情報をフィルタリングするには、 filter-vrf キーワードを使用します。
ステップ 3	vrf context vrf-name 例 : switch(config)# vrf context Blue switch(config-vrf)#	新しい VRF を作成します。
ステップ 4	ip domain-list domain-name [all-vrfs] [use-vrf vrf-name] 例 : switch(config-vrf)# ip domain-list List all-vrfs use-vrf Blue switch(config-vrf)#	VRF でドメイン リストを設定し、必要に応じて、リスト内のドメイン名に到達するために Cisco NX-OS が使用する VRF を設定します。
ステップ 5	(任意) copy running-config startup-config	この設定変更を保存します。

	コマンドまたはアクション	目的
	例 : <pre>switch(config)# copy running-config startup-config</pre>	

例

次の例は、VRF Red 上の到達可能な SNMP ホスト 192.0.2.1 に、すべての VRF の SNMP 情報を送信する方法を示しています。

```
switch# configure terminal
switch(config)# snmp-server host 192.0.2.1 for-all-vrfs use-vrf Red
switch(config)# copy running-config startup-config
```

次に、VRF Red で到達可能な SNMP ホスト 192.0.2.12 に対して、VRF Blue の SNMP 情報をフィルタリングする例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# vrf definition Blue
switch(config-vrf)# snmp-server host 192.0.2.12 use-vrf Red
switch(config)# copy running-config startup-config
```

VRF スコープの設定

すべての EXEC コマンド (**show** コマンドなど) には、対応する VRF スコープを設定できます。VRF スコープを設定すると、EXEC コマンド出力の範囲が設定された VRF に自動的に限定されます。この範囲は、一部の EXEC コマンドで利用できる VRF キーワードによって上書きできます。

VRF スコープを設定するには、EXEC モードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
routing-context vrf vrf-name 例 : <pre>switch# routing-context vrf red switch%red#</pre>	すべての EXEC コマンドに対応するルーティング コンテキストを設定します。デフォルトのルーティング コンテキストはデフォルト VRF です。

デフォルトの VRF スコープに戻すには、EXEC モードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
routing-context vrf default 例 : <pre>switch%red# routing-context vrf default switch#</pre>	デフォルトのルーティング コンテキストを設定します。

VRF の設定の確認

VRF の設定情報を表示するには、次のいずれかの作業を行います。

コマンド	目的
show vrf [vrf-name]	すべてまたは 1 つの VRF の情報を表示します。
show vrf [vrf-name] detail	すべてまたは 1 つの VRF の詳細情報を表示します。
show vrf [vrf-name] [interface interface-type slot/port]	インターフェイスの VRF ステータスを表示します。

VRF の設定例

次に、VRF Red を設定して、その VRF に SNMP サーバを追加し、VRF Red に OSPF インスタンスを追加する例を示します。

```
vrf context Red
  snmp-server host 192.0.2.12 use-vrf Red
  router ospf 201
  interface ethernet 1/2

vrf member Red
  ip address 192.0.2.1/16
  ip router ospf 201 area 0
```

次に、VRF Red および Blue を設定し、各 VRF に OSPF インスタンスを追加して、各 OSPF インスタンスの SNMP コンテキストを作成する例を示します。

```
vrf context Red
vrf context Blue
  feature ospf
  router ospf Lab

vrf Red
  router ospf Production
  vrf Blue

interface ethernet 1/2
  vrf member Red
  ip address 192.0.2.1/16
  ip router ospf Lab area 0
  no shutdown

interface ethernet 10/2
  vrf member Blue
  ip address 192.0.2.1/16
  ip router ospf Production area 0
  no shutdown

snmp-server user admin network-admin auth md5 nbv-12345
snmp-server community public ro
```

```
snmp-server context lab instance Lab vrf Red
snmp-server context production instance Production vrf Blue
Use the SNMP context lab to access the OSPF-MIB values for the OSPF instance Lab in
VRF Red in the previous example.
```

次に、デフォルト以外の2つのVRF間、およびデフォルトVRFからデフォルト以外のVRFにルートリークを設定する例を示します。

```
feature bgp
vrf context Green
ip route 33.33.33.33/32 35.35.1.254
address-family ipv4 unicast
route-target import 3:3
route-target export 2:2
export map test
import map test
import vrf default map test
interface Ethernet1/7

vrf member Green
ip address 35.35.1.2/24
vrf context Shared
ip route 44.44.44.44/32 45.45.1.254
address-family ipv4 unicast
route-target import 1:1
route-target import 2:2
route-target export 3:3
export map test
import map test
import vrf default map test
interface Ethernet1/11
vrf member Shared
ip address 45.45.1.2/24

router bgp 100
address-family ipv4 unicast
redistribute static route-map test

vrf Green
address-family ipv4 unicast
redistribute static route-map test
vrf Shared
address-family ipv4 unicast
redistribute static route-map test
ip prefix-list test seq 5 permit 0.0.0.0/0 le 32
route-map test permit 10
match ip address prefix-list test
ip route 100.100.100.100/32 55.55.55.1

nexus# show ip route vrf all
IP Route Table for VRF "default"
'*' denotes best ucast next-hop
'**' denotes best mcast next-hop
'[x/y]' denotes [preference/metric]

'%<string>' in via output denotes VRF <string>
55.55.55.0/24, ubest/mbest: 1/0, attached
*via 55.55.55.5, Lo0, [0/0], 00:07:59, direct
55.55.55.5/32, ubest/mbest: 1/0, attached
*via 55.55.55.5, Lo0, [0/0], 00:07:59, local
100.100.100.100/32, ubest/mbest: 1/0
*via 55.55.55.1, [1/0], 00:07:42, static
```

```

IP Route Table for VRF "management"
  '*' denotes best ucast next-hop
  '**' denotes best mcast next-hop
  '[x/y]' denotes [preference/metric]
  '%<string>' in via output denotes VRF <string>
0.0.0.0/0, ubest/mbest: 1/0
*via 10.29.176.1, [1/0], 12:53:54, static
10.29.176.0/24, ubest/mbest: 1/0, attached
*via 10.29.176.233, mgmt0, [0/0], 13:11:57, direct
10.29.176.233/32, ubest/mbest: 1/0, attached
*via 10.29.176.233, mgmt0, [0/0], 13:11:57, local

IP Route Table for VRF "Green"
  '*' denotes best ucast next-hop
  '**' denotes best mcast next-hop
  '[x/y]' denotes [preference/metric]
  '%<string>' in via output denotes VRF <string>
33.33.33.33/32, ubest/mbest: 1/0
*via 35.35.1.254, [1/0], 00:23:44, static
35.35.1.0/24, ubest/mbest: 1/0, attached
*via 35.35.1.2, Eth1/7, [0/0], 00:26:46, direct
35.35.1.2/32, ubest/mbest: 1/0, attached
*via 35.35.1.2, Eth1/7, [0/0], 00:26:46, local
44.44.44.44/32, ubest/mbest: 1/0
*via 45.45.1.254%Shared, [20/0], 00:12:08, bgp-100, external, tag 100
100.100.100.100/32, ubest/mbest: 1/0
*via 55.55.55.1%default, [20/0], 00:07:41, bgp-100, external, tag 100

IP Route Table for VRF "Shared"
  '*' denotes best ucast next-hop
  '**' denotes best mcast next-hop
  '[x/y]' denotes [preference/metric]
  '%<string>' in via output denotes VRF <string>
33.33.33.33/32, ubest/mbest: 1/0
*via 35.35.1.254%Green, [20/0], 00:12:34, bgp-100, external, tag 100
44.44.44.44/32, ubest/mbest: 1/0
*via 45.45.1.254, [1/0], 00:23:16, static
45.45.1.0/24, ubest/mbest: 1/0, attached
*via 45.45.1.2, Eth1/11, [0/0], 00:25:53, direct
45.45.1.2/32, ubest/mbest: 1/0, attached
*via 45.45.1.2, Eth1/11, [0/0], 00:25:53, local
100.100.100.100/32, ubest/mbest: 1/0
*via 55.55.55.1%default, [20/0], 00:07:41, bgp-100, external, tag 100
nexus(config)#

```

その他の参考資料

仮想化の実装に関連する詳細情報については、次の項を参照してください。

関連資料

関連項目	マニュアルタイトル
VRF CLI	『Cisco Nexus 3000 Series Command Reference』

標準

標準	タイトル
この機能でサポートされる新規の標準または変更された標準はありません。また、既存の標準のサポートは変更されていません。	—



第 18 章

ユニキャスト RIB および FIB の設定

この章では、Cisco Nexus スイッチのユニキャストルーティング情報ベース（RIB）および転送情報ベース（FIB）のルートを設定し、管理する方法について説明します。

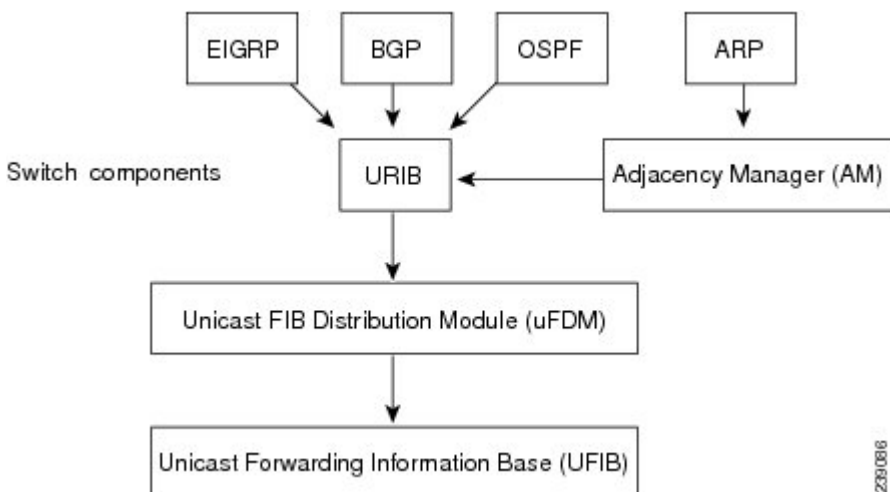
この章は、次の項で構成されています。

- [ユニキャスト RIB および FIB についての情報（429 ページ）](#)
- [ユニキャスト RIB および FIB の管理（431 ページ）](#)
- [ユニキャスト RIB および FIB の確認（439 ページ）](#)
- [その他の参考資料（439 ページ）](#)

ユニキャスト RIB および FIB についての情報

ユニキャスト RIB（IPv4 RIB）および FIB は、下の図に示すように、Cisco NX-OS の転送アーキテクチャの一部です。

図 36: Cisco NX-OS 転送アーキテクチャ



ユニキャスト RIB は、直接接続のルート、スタティックルート、ダイナミックユニキャストルーティングプロトコルで検出されたルートを含むルーティングテーブルを維持しています。

また、アドレス解決プロトコル（ARP）などの送信元から、隣接情報を収集します。ユニキャスト RIB は、ルートに最適なネクストホップを決定し、さらにユニキャスト FIB 分散モジュール（FDM）のサービスを使用して、ユニキャスト転送情報ベース（FIB）にデータを入力します。

各ダイナミック ルーティング プロトコルは、タイムアウトしたあらゆるルートについて、ユニキャスト RIB を更新する必要があります。その後、ユニキャスト RIB はそのルートを削除し、そのルートに最適なネクストホップを再計算します（代わりに使用できるパスがある場合）。

レイヤ 3 整合性チェッカー

まれな事例として、各モジュールのユニキャスト RIB と FIB の間に不整合が発生することがあります。Cisco NX-OS は、レイヤ 3 整合性チェッカーをサポートします。この機能は、各インターフェイス モジュールのユニキャスト IPv4 RIB と FIB の間の不整合を検出します。不整合には次のようなものがあります。

- 欠落したプレフィックス
- 余分なプレフィックス
- ネクストホップアドレスの誤り
- ARP またはネイバー探索（ND）キャッシュ内の不正なレイヤ 2 リライト文字列

レイヤ 3 整合性チェッカーは、FIB のエントリと隣接マネージャ（AM）から取得した最新の隣接情報を比較し、不整合があれば記録します。次に整合性チェッカーは、ユニキャスト RIB のプレフィックスをモジュールの FIB と比較し、不整合があればログに記録します。「[レイヤ 3 整合性チェッカーのトリガー](#)」の項を参照してください。

不整合は手動で解消できます。「[FIB 内の転送情報の消去](#)」の項を参照してください。

FIB テーブル

次に、スイッチが通常の転送モードで設定されている場合の Cisco Nexus 3548 スwitch のユニキャスト ルーティング テーブルの容量を示します。

- ユニキャスト ルーティング ホスト テーブル = 64,000 ハッシュ テーブル エントリ
- ユニキャスト ルーティング LPM テーブル = 16,000 TCAM エントリ
- ECMP メンバー テーブル サイズ : 16,000 エントリ

次に、スイッチがワープモードで設定されている場合の Cisco Nexus 3548 スwitch のユニキャスト ルーティング テーブルの容量を示します。

- L3 ユニキャスト ホスト テーブル = 8000 TCAM エントリ
- L3 ユニキャスト LPM テーブル = 4000 TCAM エントリ



(注) ECMP はワープ モードではサポートされません。



(注) ワープ モードでは、2 つの等コスト パスが RIB で受信されると、パスの 1 つがハードウェアにインストールされます。ルーティングプロトコル構成で、最大パスを 1 に構成することをお勧めします。

仮想化のサポート

ユニキャスト RIB および FIB は、仮想ルーティングおよび転送 (VRF) インスタンスをサポートします。詳細については、「[レイヤ 3 仮想化の設定](#)」を参照してください。

ユニキャスト RIB および FIB の管理



(注) Cisco IOS の CLI に慣れている場合、この機能に対応する Cisco NX-OS コマンドは通常使用する Cisco IOS コマンドと異なる場合がありますので注意してください。

モジュールの FIB 情報の表示

スイッチの FIB 情報を表示できます。

手順の詳細

スイッチの FIB 情報を表示するには、任意のモードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
show ip fib adjacency 例 : <pre>switch# show ip fib adjacency</pre>	FIB の隣接情報を表示します。
show forwarding ipv4 adjacency 例 : <pre>switch# show forwarding ipv4 adjacency</pre>	IPv4 の隣接情報を表示します。
show ip fib interfaces 例 : <pre>switch# show ip fib interfaces</pre>	IPv4 の FIB インターフェイス情報を表示します。

コマンド	目的
show ip fib route 例 : switch# show ip fib route	IPv4 のルート テーブルを表示します。
show forwarding ipv4 route 例 : switch# show forwarding ipv4 route	IPv4 のルート テーブルを表示します。

次に、スイッチの FIB の内容を表示する例を示します。

```
switch# show ip fib route
```

```
IPv4 routes for table default/base
```

```

-----+-----+-----
Prefix | Next-hop | Interface
-----+-----+-----
0.0.0.0/32 Drop Null0
255.255.255.255/32 Receive sup-eth1

```

ユニキャスト FIB でのロードシェアリングの設定

OSPF（Open Shortest Path First）などのダイナミック ルーティング プロトコルは、等コスト マルチパス（ECMP）によるロードシェアリングをサポートしています。ルーティング プロトコルは、そのプロトコルに設定されたメトリックに基づいて最適なルートを決め、そのプロトコルに設定された最大数までのパスをユニキャスト RIB に組み込みます。ユニキャスト RIB は、RIB に含まれるすべてのルーティング プロトコル パスのアドミニストレーティブ ディスタンスを比較し、ルーティング プロトコルによって組み込まれたすべてのパス セットから最適なパス セットを選択します。ユニキャスト RIB は、この最適なパス セットを FIB に組み込み、フォワーディング プレーンで使用できるようにします。

フォワーディング プレーンは、ロードシェアリングのアルゴリズムを使用して、FIB に組み込まれたパスのいずれかを選択し、それを特定のデータ パケットに使用します。

ロードシェアリングの次の設定項目をグローバルに設定できます。

- **ロードシェアリング モード**：宛先のアドレスとポート、または送信元と宛先のアドレスとポートに基づいて、最適なパスを選択します。
- **汎用 ID**：ハッシュ アルゴリズムのランダム シードを設定します。汎用 ID を設定する必要はありません。ユーザが設定しなかった場合は、Cisco NX-OS が汎用 ID を選択します。

ロードシェアリングでは、特定のフローに含まれるすべてのパケットに対して同じパスが使用されます。フローは、ユーザが設定したロードシェアリング方式によって定義されます。たとえば、送信元/宛先のロードシェアリングを設定すると、送信元 IP アドレスと宛先 IP アドレスのペアが同じであるすべてのパケットが同じパスをたどります。

ユニキャスト FIB のロードシェアリングアルゴリズムを設定するには、グローバル コンフィギュレーション モードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
ip load-sharing address { destination port destination source-destination [port source-destination] } [universal-id seed] 例 : <pre>switch(config)# ip load-sharing address source-destination</pre>	データ トラフィックに対するユニキャスト FIB のロードシェアリングアルゴリズムを設定します。 <i>universal-id</i> の範囲は 1 ～ 4294967295 です。

ハッシュ オフセットの構成

多層 ECMP セッションで ECMP 極性を回避するには、各層で異なる ECMP ハッシュ オフセットを構成する必要があります。リリース 6.0(2)U5(1) 以降、ECMP ハッシュ連結の新しい CLI が導入され、16 の ECMP パスでトラフィックを均等に分散できます。更新された CLI サポートは、Cisco Nexus 3000 シリーズ スイッチではなく、Cisco Nexus 3100 プラットフォーム スイッチに存在します。ハッシュ オフセットは、非連結モードでは <0-15> の範囲、連結モードでは <0-63> の範囲で構成できます。

連結モードで、ハッシュオフセットが 0 に設定されていて、連結が設定されている場合、show running-config コマンドは hardware ecmp hash-offset 0 connotation を表示します。ハッシュオフセットは値ごとにプログラムされます。ダウングレード時に、連結が構成されている場合、CAP チェックは構成を削除するように求めます。

非連結モードでは、ハッシュオフセットが 0 に構成されて連結がリセットされた場合、show running-config コマンドは hardware ecmp hash-offset 0 を表示しません。ハッシュオフセット値が 0 ～ 15 の範囲にある場合、ハッシュオフセットは値に従ってプログラムされます。ハッシュオフセットでは、値が 16 ～ 63 の範囲の場合、CLI エラーが表示されます（非連結モードでは、0 ～ 15 の範囲のハッシュオフセットがサポートされます）。

show running-config のハッシュオフセットは、構成された値に従って表示されます。

ECMP ハッシュオフセットを構成するには、グローバル構成モードで以下のコマンドを使用します。

コマンド	目的
# hardware ecmp hash-offset ?	ECMP ハッシュ オフセットを構成します。範囲は 0 ～ 63 です。範囲 <0-15> のハッシュ オフセットは、非連結モード用です。範囲 <0-63> のハッシュ オフセットは、連結モード用です。
#hardware ecmp hash-offset number 例 : <pre>switch(config)# hardware ecmp hash-offset 5</pre>	非連結モードで ECMP ハッシュオフセットを構成します。範囲は 0 ～ 15 です。デフォルト値は 0 です。

コマンド	目的
#hardware ecmp hash-offset <0-63> concatenation 例: <pre>switch(config)# hardware ecmp hash-offset 63 concatenation</pre>	連結モードで ECMP ハッシュオフセットを構成します。 (注) 連結サポートは、Cisco Nexus 3000 シリーズスイッチではなく、Cisco Nexus 3100 プラットフォームスイッチにあります。この CLI は Cisco Nexus 3000 シリーズスイッチでエラーを生成します。

ip load-sharing address コマンドを使用して構成されたさまざまなユニバーサル ID とともに、**hardware ecmp hash-offset** コマンドを使用して構成された ECMP ハッシュオフセットを使用して、ロードシェアリングアルゴリズムでさまざまなハッシュ結果を生成できます。

ハッシュ多項式の構成

Cisco NX-OS リリース 6.0(2)U5(1) 以降、CRC 構成に新しい CLI が追加されました。

コマンド	目的
<pre>switch# config t</pre>	コンフィギュレーションモードを開始します。
<pre>switch(config)# hardware ecmp ? hash-offset Configure hash offsethash-polynomial Configure hash polynomial</pre>	ハードウェア ECMP の構成オプションとしてハッシュオフセットとハッシュ多数項を表示します。
<pre>switch config)# hardware ecmp hash-polynomial ? CRC16 Hash polynomial CRC16CRC32HI Hash polynomial CRC32 HI</pre>	ハッシュ多項式の構成オプションとして CRC16 および CRC32HI を表示します。
<pre>switch config)#show running-config</pre>	実行設定を表示します。

ユニキャスト FIB のロードシェアリングアルゴリズムを表示するには、任意のモードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
show ip load-sharing 例 : <pre>switch(config)# show ip load-sharing</pre>	データトラフィックに対するユニキャスト FIB のロードシェアリングアルゴリズムを表示します。

ユニキャスト RIB および FIB が特定の送信元アドレス/宛先アドレスに使用するルートを表示するには、任意のモードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
show routing hash source-addr dest-addr [ip-proto ip-protocol] [source-l4-port dest-l4-port] [vrf vrf-name] 例: <pre>switch# show routing hash 1.1.1.6.5.5 5.3 ip-proto 0x11 10 234</pre>	ユニキャスト RIB および FIB が特定の送信元/宛先アドレスペアに使用するルートを表示します。送信元アドレスと宛先アドレスの形式は x.x.x.x です。送信元ポートと宛先ポートの範囲は 1 ～ 65535 です。VRF 名には最大 64 文字の英数字文字列を指定します。大文字と小文字は区別されます。ip-proto オプションは、IP ヘッダーのプロトコルフィールドに対応します。

次に、送信元/宛先ペアのために選択されたルートを表示する例を示します。

```
switch# show routing hash 1.1.1.6.5.5.3 ip-proto 0x11 10 234
Load-share parameters used for software forwarding:
load-share mode: address source-destination port source-destination
Universal-id seed: 0xe05e2e85
Invoking pc_ic_ecmp_resolution
Hash for VRF "default"
Hashing to path *Eth1/29%
For route:
5.5.5.0/24 ubest/mbest: 3/0
*via 2.2.2.1, Eth1/18, [1/0], 00:14:14, static
*via 3.3.3.1, Eth1/29, [1/0], 00:14:14, static
*via 4.4.4.1, Eth1/34, [1/0], 00:14:14, static
```

ルーティング情報と隣接情報の表示

ユーザーは、ルーティング情報と隣接情報を表示できます。

ルーティング情報と隣接情報を表示するには、任意のモードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
show ip route [route-type interface int-type number next-hop] 例: <pre>switch# show ip route</pre>	ユニキャスト ルート テーブルを表示します。 <i>route-type</i> 引数には、1つのルートプレフィックス、直接、静的、またはダイナミック ルーティング プロトコルを指定します。 ? キーワードを使用して、サポートされるインターフェイスを表示します。
show ip adjacency [prefix interface number [summary] non-best] [detail] [vrf vrf-id] 例: <pre>switch# show ip adjacency</pre>	隣接関係テーブルを表示します。引数の範囲は次のとおりです。 <i>prefix</i> : 任意の IPv4 プレフィックス アドレス。 <i>interface-type number</i> : ? コマンドを使用して、サポートされるインターフェイスを表示します。 <i>vrf-id</i> : 最大 32 文字の英数字文字列。大文字と小文字は区別されます。

コマンド	目的
show ip routing [<i>route-type</i> interface <i>int-type number</i> next-hop recursive-next-hop summary updated { since until } <i>time</i>] 例 : switch# show routing summary	ユニキャスト ルート テーブルを表示します。 <i>route-type</i> 引数には、1 つのルート プレフィックス、直接、静的、またはダイナミック ルーティング プロトコルを指定します。 ? キーワードを使用して、サポートされるインターフェイスを表示します。

次に、ユニキャスト ルート テーブルを表示する例を示します。

```
switch# show ip route
IP Route Table for VRF "default"
'*' denotes best ucast next-hop
'**' denotes best mcast next-hop
'[x/y]' denotes [preference/metric]

192.168.0.2/24, ubest/mbest: 1/0, attached
*via 192.168.0.32, Eth1/5, [0/0], 22:34:09, direct
192.168.0.32/32, ubest/mbest: 1/0, attached
*via 192.168.0.32, Eth1/5, [0/0], 22:34:09, local
```

次に、隣接情報を表示する例を示します。

```
switch# show ip adjacency

IP Adjacency Table for VRF default
Total number of entries: 2
Address Age MAC Address Pref Source Interface Best
10.1.1.1 02:20:54 00e0.b06a.71eb 50 arp mgmt0 Yes
10.1.1.253 00:06:27 0014.5e0b.81d1 50 arp mgmt0 Yes
```

レイヤ 3 整合性チェッカーのトリガー

レイヤ 3 整合性チェッカーを手動でトリガーできます。

レイヤ 3 整合性チェッカーを手動でトリガーするには、グローバル コンフィギュレーション モードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
test [ipv4] [unicast] forwarding inconsistency [<i>vrf vrf-name</i>] [module { <i>slot</i> all }] 例 : switch(config)# test forwarding inconsistency	レイヤ 3 整合性チェックを開始します。 <i>vrf-name</i> には最大 32 文字の英数字文字列を指定します。大文字と-小文字は区別されます。 <i>slot</i> の範囲は 1 ～ 10 です。

レイヤ 3 整合性チェッカーを停止するには、グローバル コンフィギュレーション モードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
test forwarding [ipv4] [unicast] inconsistency [vrf vrf-name] [module { slot all }] stop 例 : <pre>switch(config)# test forwarding inconsistency stop</pre>	レイヤ 3 整合性チェックを停止します。 <i>vrf-name</i> には最大 64 文字の英数字文字列を指定します。大文字と-小文字は区別されます。 <i>slot</i> の範囲は 1 ～ 10 です。

レイヤ 3 の不整合を表示するには、任意のモードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
show forwarding [ipv4] inconsistency [vrf vrf-name] [module { slot all }] 例 : <pre>switch(config)# show forwarding inconsistency</pre>	レイヤ 3 整合性チェックの結果を表示します。 <i>vrf-name</i> には最大 32 文字の英数字文字列を指定します。大文字と-小文字は区別されます。 <i>slot</i> の範囲は 1 ～ 10 です。

FIB 内の転送情報の消去

FIB 内の 1 つまたは複数のエントリを消去できます。



(注) **clear forwarding** コマンドを実行すると、スイッチ上の転送は中断されます。

FIB 内のエントリ（レイヤ 3 の不整合を含む）を消去するには、任意のモードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
clear forwarding { ipv4 } route { * prefix } [vrf vrf-name] [module { slot all }] 例 : <pre>switch(config)# clear forwarding ipv4 route *</pre>	FIB から 1 つまたは複数のエントリを消去します。ルートのオプションは次のとおりです。 • <i>*</i> : すべてのルート。 • <i>prefix</i> : 任意の IP プレフィックス。 <i>vrf-name</i> には最大 32 文字の英数字文字列を指定します。大文字と-小文字は区別されます。 slot の範囲は 1 ～ 10 です。



(注) FIB エントリをクリアした後は、RIB エントリをクリアしてください。

ルートのメモリ要件の見積もり

一連のルートおよびネクストホップアドレスが使用するメモリを見積もることができます。
ルートのメモリ要件を見積もるには、任意のモードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
show routing memory estimate routes <i>num-routes</i> next-hops <i>num-nexthops</i> 例 : <pre>switch# show routing memory estimate routes 1000 next-hops 1</pre>	ルートのメモリ要件を表示します。 <i>num-routes</i> の範囲は 1000 ～ 1000000 です。 <i>num-nexthops</i> の範囲は 1 ～ 16 です。

ユニキャスト RIB 内のルートの消去

ユニキャスト RIB から 1 つまたは複数のルートを消去できます。



注意 * キーワードを使用すると、ルーティングが著しく妨害されます。

ユニキャスト RIB 内の 1 つまたは複数のエントリを消去するには、任意のモードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
clear iproute { * { route prefix/length } [next-hop interface] } [vrf vrf-name] 例 : <pre>switch(config)# clear ip route 10.2.2.2</pre>	ユニキャスト RIB とすべてのモジュール FIB から 1 つまたは複数のルートを消去します。ルートのオプションは次のとおりです。 • * : すべてのルート。 • route : 個々の IP ルート。 • prefix/length : 任意の IP プレフィックス。 • next-hop : ネクストホップアドレス。 • interface : ネクストホップアドレスに到達するためのインターフェイス vrf-name には最大 32 文字の英数字文字列を指定します。大文字と小文字は区別されます。

コマンド	目的
clear routing unicast [ip ipv4] { * { <i>route</i> <i>prefix/length</i> } [<i>next-hop interface</i>] } [vrf <i>vrf-name</i>] 例： <pre>switch(config)# clear routing ip 10.2.2.2</pre>	ユニキャスト RIB から 1 つまたは複数のルートを消去します。ルートのオプションは次のとおりです。 • * : すべてのルート。 • route : 個々の IP ルート。 • prefix/length : 任意の IP プレフィックス。 • next-hop : ネストホップアドレス。 • interface : ネストホップアドレスに到達するためのインターフェイス vrf-name には最大 32 文字の英数字文字列を指定します。大文字と小文字は区別されます。

ユニキャスト RIB および FIB の確認

ユニキャスト RIB および FIB の設定情報を表示するには、次のいずれかの作業を行います。

コマンド	目的
show forwarding adjacency	モジュールの隣接関係テーブルを表示します。
show forwarding distribution { clients fib-state }	FIB の分散情報を表示します。
show forwarding interfaces module slot	モジュールの FIB 情報を表示します。
show forwarding ipv4route	FIB 内のルートを表示します。
show ip adjacency	隣接関係テーブルを表示します。
show ip route	ユニキャスト RIB から受け取った IPv4 ルートを表示します。
show routing	ユニキャスト RIB から受け取ったルートを表示します。

その他の参考資料

ユニキャスト RIB および FIB の管理に関連する詳細情報については、次の項を参照してください。

関連資料

関連項目	マニュアル タイトル
ユニキャスト RIB および FIB の CLI コマンド	『Cisco Nexus 3000 Series Command Reference』



第 19 章

Route Policy Manager の設定

この章では、Cisco NX-OS スイッチで Route Policy Manager を設定する方法について説明します。

この章は、次の項で構成されています。

- [Route Policy Manager の概要 \(441 ページ\)](#)
- [Route Policy Manager の注意事項と制約事項 \(446 ページ\)](#)
- [Route Policy Manager のデフォルト設定 \(447 ページ\)](#)
- [Route Policy Manager の設定 \(447 ページ\)](#)
- [Route Policy Manager の設定の確認 \(464 ページ\)](#)
- [Route Policy Manager の設定例 \(464 ページ\)](#)
- [関連項目 \(465 ページ\)](#)
- [その他の参考資料 \(465 ページ\)](#)

Route Policy Manager の概要

Route Policy Manager は、ルート マップおよび IP プレフィックス リストをサポートしています。この機能は、ルート再配布に使用されます。プレフィックスリストには、1つまたは複数の IPv4 ネットワーク プレフィックスおよび関連付けられたプレフィックス長の値を指定します。プレフィックスリストは、ボーダーゲートウェイプロトコル (BGP) テンプレート、ルートフィルタリング、またはルーティング ドメイン間で交換されるルートの再配布などの機能で、単独で使用できます。

ルート マップは、ルートおよび IP パケットの両方に適用できます。ルート フィルタリングおよび再配布は、ルート マップを使用してルートを渡します。

プレフィックス リスト

プレフィックスリストを使用すると、アドレスまたはアドレス範囲を許可または拒否することができます。プレフィックスリストによるフィルタリングでは、ルートまたはパケットのプレフィックスと、プレフィックスリストに指定されているプレフィックスの照合が行われます。

特定のプレフィックスがプレフィックスリストのどのエン트리とも一致しなかった場合、実質的に拒否されたものと見なされます。

プレフィックスリストに複数のエントリを設定し、エントリと一致したプレフィックスを許可または拒否できます。各エントリにはシーケンス番号が関連付けられています。この番号はユーザが設定できます。シーケンス番号が設定されていない場合は、Cisco NX-OS によって自動的にシーケンス番号が設定されます。Cisco NX-OS はシーケンス番号が最も小さいエントリから順番にプレフィックスリストを評価します。Cisco NX-OS は、所定のプレフィックスと最初に一致したエントリを処理します。一致すると、Cisco NX-OS は `permit` 文または `deny` 文を処理し、プレフィックス リストの残りのエントリは評価しません。



(注) プレフィックス リストが空の場合は、すべてのルートが許可されます。

プレフィックス リストのマスク

Cisco NX-OS リリース 6.0(2)U3(1) では、プレフィックス リストにマスクが導入されています。マスクでは、数値 1 と数値 0 を使用して、対応する IP アドレス ビットをどのように扱うかを指定します。

- マスク ビット 0 は、対応するビット値を無視することを示します。
- マスク ビット 1 は、対応するビット値が正確に一致しているかどうかを確認することを示します。

プレフィックス リストを使用してルート マップの IP アドレスを照合できます。この IP アドレスは再配布時にルーティング プロトコルで使用されます。IP アドレスは、マスク ビット 1 に対応するビットがプレフィックスリストで指定されたサブネットと同じであるプレフィックス リストと照合されます。

マスクを慎重に設定することにより、許可または拒否のテストに 1 つまたは複数の IP アドレスを選択できます。

プレフィックスリストのマスクを使用すると、マスクに非連続ビットを指定し、偶数または奇数の IP アドレスの範囲を定義できます。

MAC リスト

MAC リストを使用すると、MAC アドレスまたはアドレス範囲を許可または拒否できます。MAC リストは MAC アドレスとオプションの MAC マスクのリストです。MAC マスクはワイルドカードマスクで、ルートマップが MAC リストのエントリと一致すると論理的に MAC アドレスと AND 結合されます。MAC リストによるフィルタリングでは、パケットの MAC アドレスと MAC リスト内の MAC リストが照合されます。特定の MAC アドレスが MAC リストのどのエントリとも一致しなかった場合、実質的に拒否されたものと見なされます。

MAC リストに複数のエントリを設定し、エントリと一致した MAC アドレスを許可または拒否できます。各エントリにはシーケンス番号が関連付けられています。この番号はユーザが設

定できます。シーケンス番号が設定されていない場合は、Cisco NX-OS によって自動的にシーケンス番号が設定されます。Cisco NX-OS はシーケンス番号が最も小さいエントリから順番に MAC リストを評価します。Cisco NX-OS は指定された MAC アドレスと最初に一致するエントリを処理します。一致すると、Cisco NX-OS は `permit` 文または `deny` 文を処理し、MAC リストの残りのエントリは評価しません。

ルートマップ

ルートマップは、ルートの再配布に使用できます。ルートマップエントリは、一致基準および設定基準のリストからなります。一致基準では、着信ルートまたはパケットの一致条件を指定します。設定基準では、一致基準を満たした場合のアクションを指定します。

同じルートマップに複数のエントリを設定できます。これらのエントリには、同じルートマップ名を指定し、シーケンス番号で区別します。

一意のルートマップ名の下に1つまたは複数のルートマップエントリをシーケンス番号に従って並べ、ルートマップを作成します。ルートマップエントリのパラメータは、次のとおりです。

- シーケンス番号
- アクセス権：許可または拒否
- 一致基準
- 設定変更

Cisco NX-OS リリース 7.0(3)I3(1) 以前を実行しているが、Cisco NX-OS リリース 6.x ではない Cisco Nexus 3000 シリーズ スイッチでは、同じルートマップシーケンス番号での IPv4 および IPv6 の照合はサポートされていません。

ルートマップではデフォルトで、最小のシーケンス番号から順にルートまたは IP パケットが処理されます。`continue` 文を使用すると、次に処理するルートマップエントリを決定できるので、別の順序で処理するようにルートマップを設定できます。

一致基準

さまざまな基準を使用して、ルートマップでルートや IP パケットを照合できます。BGP コミュニティリストのように、特定のルーティングプロトコルだけに適用できる基準もありますが、IP 送信元または宛先アドレスなど、その他の基準はあらゆるルートまたは IP パケットに使用できます。

ルートマップに従ってルートまたはパケットを処理する場合、Cisco NX-OS は設定されている個々の `match` 文とルートまたはパケットを比較します。ルートまたはパケットが設定されている基準と一致した場合、Cisco NX-OS はルートマップ内で一致するエントリに対する許可または拒否設定、および設定されている設定基準に基づいて、このルートやパケットを処理します。

一致のカテゴリおよびパラメータは、次のとおりです。

- BGP パラメータ：AS 番号、AS パス、コミュニティ属性、または拡張コミュニティ属性に基づく一致
- プレフィックス リスト：アドレスまたはアドレス範囲に基づく一致
- マルチキャスト パラメータ：ランデブー ポイント、グループ、または送信元に基づく一致
- その他のパラメータ：IP ネクストホップ アドレスまたはパケット長に基づく一致

設定変更

ルートまたはパケットがルート マップのエントリと一致したら、設定済みの 1 つ以上の set 文に基づいて、そのルートまたはパケットを変更できます。

設定変更は次のとおりです。

- BGP パラメータ：AS パス、タグ、コミュニティ、拡張コミュニティ、ダンプニング、ローカル プリファレンス、オリジン、または重み値属性の変更
- メトリック：ルート メトリック、ルート タグ、またはルート タイプの変更
- その他のパラメータ：フォワーディング アドレスまたは IP ネクストホップ アドレスの変更

アクセス リスト

IP アクセス リストでは、次のような IP パケット フィールドとパケットを照合できます。

- 送信元または宛先 IPv4 アドレス
- プロトコル
- Precedence
- ToS

BGP の AS 番号

BGP ピアとの照合に使用する AS 番号のリストを設定できます。BGP ピアがリスト内の AS 番号と一致し、さらに他の BGP ピア設定と一致する場合、BGP はセッションを作成します。BGP ピアがリスト内の AS 番号と一致しない場合は、BGP はピアを無視します。AS 番号は AS 番号の範囲のリストとして設定できます。また、AS パス リストを使用して AS 番号を正規表現と比較することもできます。

BGP の AS パス リスト

AS パス リストを設定すると、着信または発信 BGP ルートのアップデートをフィルタリングできます。ルート アップデートに AS パス リストのエントリと一致する AS パス属性が含まれている場合、ルータは設定されている許可または拒否条件に基づいてルートを処理します。ルート マップの中で AS パス リストを設定できます。

同じ AS パス リスト名を使用することによって、AS パス リストで複数の AS パス エントリを設定できます。ルータは最初に一致したエントリを処理します。

BGP のコミュニティ リスト

ルートマップのコミュニティ リストを使用すると、BGP コミュニティに基づいて BGP ルート アップデートをフィルタリングできます。コミュニティ属性はコミュニティ リストに基づいて照合できます。また、コミュニティ属性はルートマップを使用して設定できます。

コミュニティ リストには、1 つまたは複数のコミュニティ属性を指定します。同じコミュニティ リスト エントリに複数のコミュニティ属性を設定した場合、BGP ルートが一致と見なされるには、指定されたすべてのコミュニティ属性と一致しなければなりません。

同じコミュニティ リスト名を使用することによって、コミュニティ リストのそれぞれ個別のエントリとして、複数のコミュニティ属性を設定することもできます。この場合、ルータは最初に BGP ルートと一致したコミュニティ属性を、そのエントリの許可または拒否設定に基づいて処理します。

コミュニティ リストのコミュニティ属性は、次の形式のいずれか 1 つで設定できます。

- 名前付きコミュニティ属性 (**internet**、**no-export** など)。
- **aa:nn** 形式 (前の 2 バイトは 2 バイトの自律システム番号、後の 2 バイトはユーザーが定義するネットワーク番号を表します)。
- 正規表現。

正規表現に関する詳細については、「[Cisco Nexus 3000 シリーズ コマンド リファレンス](#)」を参照してください。

BGP の拡張コミュニティ リスト

拡張コミュニティ リストでは 4 バイトの AS 番号がサポートされています。拡張コミュニティ リストのコミュニティ属性は、次のいずれかの形式で設定できます。

- **aa4:nn** 形式 (最初の 4 バイトは 4 バイトの AS 番号、最後の 2 バイトはユーザが定義するネットワーク番号を表します)。
- 正規表現。

正規表現に関する詳細については、「[Cisco Nexus 3000 シリーズ コマンド リファレンス](#)」を参照してください。

Cisco NX-OS は汎用の特定拡張コミュニティ リストをサポートしています。このリストを使用すると、4 バイトの AS 番号に対して通常のコミュニティ リストと同様の機能を使用できます。汎用の特定拡張コミュニティ リストには次のプロパティを設定できます。

- **Transitive** : BGP はコミュニティ属性を自律システム間に伝達します。
- **Nontransitive** : BGP はコミュニティ属性を削除してからルートを他の自律システムに伝達します。

ルートの再配布およびルート マップ

ルート マップを使用すると、ルーティング ドメイン間でのルートの再配布を制御できます。ルートマップではルートの属性を照合し、一致基準を満たすルートだけを再配布します。設定変更を使用することによって、再配布時に、ルートマップでルート属性を変更することもできます。

ルータは再配布されたルートを各ルートマップエントリと照合します。**match** 文が複数ある場合は、ルートがすべての一致基準を満たしている必要があります。ルートがルート マップ エントリで定義されている一致基準を満たす場合は、エントリで定義されているアクションが実行されます。ルートが基準と一致しなかった場合、ルータは後続のルート マップ エントリとルートを比較します。ルートの処理は、ルートがルートマップのいずれかのエントリと一致するか、どのエントリとも一致せずすべてのエントリによる処理が完了するまで続きます。ルータがルートマップの全エントリとルートを比較しても一致しなかった場合、ルータはそのルートを受け付けるか（着信ルート マップ）またはルートを転送します（発信ルート マップ）。

Route Policy Manager の注意事項と制約事項

Route Policy Manager 設定時の注意事項および制約事項は、次のとおりです。

- CLI は **route-tag** では **set** または **match** が有効になっていますが、サポートされておらず、その特定のルートマップシーケンスに対して意図しない動作が発生します。
- プレフィックスリスト内の名前は、大文字と小文字が区別されません。一意の名前を使用することを推奨します。大文字と小文字を変更しただけの名前は使用しないでください。たとえば、CTCPPrimaryNetworks と CtcPrimaryNetworks は 2 つの異なるエントリではありません。
- ルートマップが存在しない場合、すべてのルートが拒否されます。
- プレフィックス リストが存在しない場合は、すべてのルートが許可されます。
- ルート マップ エントリに **match** 文がない場合、ルート マップ エントリのアクセス権（許可または拒否）によって、すべてのルートまたはパケットの処理結果が決まります。
- ルート マップ エントリの **match** 文の中で参照されたポリシー（プレフィックス リストなど）から **no-match** または **deny-match** が戻った場合、は **match** 文を Cisco NX-OS 失敗として、次のルート マップ エントリを処理します。
- ルートマップを変更しても、ルートマップコンフィギュレーションサブモードを終了するまでは、Cisco NX-OS によりすべての変更が保留されます。その後、Cisco NX-OS がすべての変更をプロトコル クライアントに送信すると、変更が有効になります。
- 同じルートマップシーケンスに IPv4 と IPv6 の両方の **match** ステートメントを含めないことを推奨します。両方が必要な場合は、同じルートマップの異なるシーケンスで指定する必要があります。

- ルートマップは定義する前に使用できるので、設定変更を終えるときには、すべてのルートマップが存在していることを確認してください。
- 再配布およびフィルタリングを行う場合、ルートマップの使用状況を確認できます。各ルーティングプロトコルには、これらの統計情報を表示する機能があります。
- BGP をIGP に再配布するとき、iBGP も再配布されます。この動作を無効にするには、ルートマップに追加 **deny** 文を挿入します。
- Route Policy Manager は MAC リストをサポートしていません。
- **ip access-list name** コマンドの ACL 名の最大文字数は 64 です。ただし、RPM コマンドに関連付けられている ACL 名 (**ip prefix-list** や **match ip address** など) は、最大 63 文字しか使用できません。
- BGP は特定の **match** コマンドのみをサポートします。詳細については、[ルートマップの設定 \(458 ページ\)](#) セクションの **match** コマンドの表を参照してください。
- 「prefix-list」という名前の ACL を作成する場合、**match ip address** コマンドを使用して作成されたルートマップに関連付けることはできません。RPM コマンドの **match ip address prefix-list** は、前のコマンド (「prefix-list」ACL 名) をあいまいにします。
- **match ip address** コマンドを使用する場合、設定できる ACL は 1 つだけです。

Route Policy Manager のデフォルト設定

下の表に、Route Policy Manager のデフォルト設定を示します。

表 27: デフォルトの **Route Policy Manager** パラメータ

パラメータ	デフォルト
Route Policy Manager	有効 (Enabled)

Route Policy Manager の設定



(注) Cisco IOS の CLI に慣れている場合、この機能に対応する Cisco NX-OS コマンドは通常使用する Cisco IOS コマンドと異なる場合がありますので注意してください。

IP プレフィックス リストの設定

IP プレフィックス リストでは、プレフィックスおよびプレフィックス長のリストに対して IP パケットまたはルートを照合します。IPv4 の IP プレフィックス リストを作成できます。

指定したプレフィックス長と完全に一致するプレフィックス リスト エントリのみを対象とするよう設定できます。また、指定したプレフィックス長の範囲に該当するすべてのプレフィックスを対象とすることもできます。

ge キーワードと **lt** キーワードを使用すると、プレフィックス長の範囲を指定できます。着信パケットまたはルートがプレフィックスリストと一致すると判定されるのは、プレフィックスが一致し、プレフィックス長が **ge** キーワードの値（設定されている場合）以上かつ **lt** キーワードの値（設定されている場合）以下の場合です。キーワード **eq** を使用する場合、設定する値はプレフィックスのマスク長より大きくする必要があります。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	コンフィギュレーション モードに入ります。
ステップ 2	（任意） ip prefix-list name description string 例 : <pre>switch(config)# ip prefix-list AllowPrefix description allows engineering server</pre>	プレフィックス リストについての情報 スtring を追加します。
ステップ 3	ip prefix-list name [seq number] [{ permit deny } prefix { [eq prefix-length] [ge prefix-length] [le prefix-length] } 例 : <pre>switch(config)# ip prefix-list AllowPrefix seq 10 permit 192.0.2.0 eq 24</pre>	IPv4 プレフィックス リストを作成するか、または既存のプレフィックス リストにプレフィックスを追加します。プレフィックス長の照合は次のように行われます。 • eq : <i>prefix length</i> の値と完全に一致するものが対象。この値は、マスク長より大きくする必要があります。 • ge : 設定された <i>prefix length</i> 以上のプレフィックス長が対象。 • le : 設定された <i>prefix length</i> 以下のプレフィックス長が対象。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 4	(任意) show ip prefix-list name 例 : <pre>switch(config)# show ip prefix-list AllowPrefix</pre>	プレフィックス リストについての情報を表示します。
ステップ 5	(任意) copy running-config startup-config 例 : <pre>switch# copy running-config startup-config</pre>	この設定変更を保存します。

例

次に、2つのエントリからなる IPv4 プレフィックス リストを作成し、BGP ネイバーにプレフィックス リストを適用する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# ip prefix-list allowprefix seq 10 permit 192.0.2.0/23 eq 24
switch(config)# ip prefix-list allowprefix seq 20 permit 209.165.201.0/27 eq 28
switch(config)# router bgp 65536:20
switch(config-router)# neighbor 192.0.2.1/16 remote-as 65535:20
switch(config-router-neighbor)# address-family ipv4 unicast
switch(config-router-neighbor-af)# prefix-list allowprefix in
```

次に、奇数 IP アドレスの一致マスクを使用して IPv4 プレフィックス リストを作成する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# ip prefix-list odd permit 0.0.0.1/32 mask 0.0.0.1
```

MAC リストの設定

MAC リストを設定すると、特定の範囲の MAC アドレスを許可または拒否できます。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	コンフィギュレーション モードに入ります。
ステップ 2	mac-list name [seq number] { permit deny } mac-address {mac-mask} 例 :	MAC リストを作成するか、既存の MAC リストに MAC アドレスを追加します。 <i>seq</i> の範囲は 1 ~ 4294967294 です。

	コマンドまたはアクション	目的
	<code>switch(config)# mac-list AllowMac seq 1 permit 0022.5579.a4c1 ffff.ffff.0000</code>	<i>mac-mask</i> は照合する MAC アドレスの部分を表します。MAC アドレス形式である必要があります。
ステップ 3	(任意) show mac-list name 例 : <code>switch(config)# show mac-list AllowMac</code>	MAC リストに関する情報を表示します。
ステップ 4	(任意) show ip prefix-list name 例 : <code>switch(config)# show ip prefix-list AllowPrefix</code>	プレフィックス リストについての情報を表示します。

AS パス リストの設定

発信と着信の両方の BGP ルートに AS パス リスト フィルタを指定できます。各フィルタは、正規表現を使用するアクセス リストです。正規表現が ASCII スtring として表されたルートの AS パス属性と一致した場合は、許可または拒否条件が適用されます。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <code>switch# configure terminal</code> <code>switch(config)#</code>	コンフィギュレーション モードに入ります。
ステップ 2	ip as-path access-list name { deny permit } expression 例 : <code>switch(config)# ip as-path access-list Allow40 permit 40</code>	
ステップ 3	(任意) show ip as-path-access-list name 例 : <code>switch(config)# show ip as-path-access-list Allow40</code>	as-path アクセス リストの情報を表示します。
ステップ 4	(任意) show ip prefix-list name 例 : <code>switch(config)# show ip prefix-list AllowPrefix</code>	プレフィックス リストについての情報を表示します。

例

次に、2つのエントリからなる AS パス リストを作成し、BGP ネイバーに AS パス リストを適用する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# ip as-path access-list AllowAS permit 64510
switch(config)# ip as-path access-list AllowAS permit 64496
switch(config)# copy running-config startup-config
switch(config)# router bgp 65536:20
switch(config-router)# neighbor 192.0.2.1/16 remote-as 65535:20
switch(config-router-neighbor)# address-family ipv4 unicast
switch(config-router-neighbor-af)# filter-list AllowAS in
```

BGP AS-path 属性の置き換え

次の手順では、着信および発信ルートマップの BGP as-path 属性を変更することにより、BGP ルーティング ポリシーを操作できます。

BGP as-path 属性を置き換えるときは、次のガイドラインを考慮してください。

- この機能は、アドレス ファミリ識別子 (AFI) ごとに eBGP ネイバーにのみ適用されます。iBGP ネイバーで機能を設定しようとしても、構成は無視されます。
- この機能を備えたルート マップは、BGP ネイバーのインバウンド側とアウトバウンド側の両方に適用できます。
- この機能は、AS_SET、AS_SEQUENCE、CONFED_SET、および CONFED_SEQUENCE の任意の組み合わせをサポートします。
- 2 バイト AS のみをサポートする BGP スピーカーと対話する場合、4 バイト AS 番号は予約済みの 2 バイト AS 番号 23456 に置き換えられます。
- コンフェデレーション識別子が設定されている場合は、コンフェデレーションの外部にあるピアと対話するときに、CLI でローカル ASN としてコンフェデレーション識別子を使用することを検討してください。同じコンフェデレーションに属するピアと対話する場合は、**router bgp asn** コマンドでプロセス ASN を使用することを検討してください。
- BGP **local-as** 機能が設定されている場合、設定された local-as は CLI でローカル ASN と見なされます。
- アウトバウンドルート マップの場合、ローカル ASN は常に CLI からの結果の as_path に付加されます。
- **set as-path** または **set as-path replace** コマンドでは、最大 32 個の AS 番号を設定できます。
- 1 つのルート マップ シーケンスの下では、**set as-path**、**set as-path prepend**、および **set as-path replace** のオプションのうち 1 つだけを設定できます。
- **remove-private-as** が設定されている場合、アウトバウンド側で新しいルート マップ コマンドを適用する前に適用されます。

- **as-override** が設定されている場合、アウトバウンド側で新しいルート マップ コマンドを適用した後に適用されます。
- AS_PATH ループ チェックは、新しいルート マップ コマンドが着信側と発信側の両方に適用される前に、元の AS_PATH で実行されます。これらのチェックは、インバウンド側で **allow-as in** とアウトバウンド側で **disable-peer-as-check** を使用することで緩和できます。

完全な AS パスの置き換え

この手順を使用して、着信または発信 BGP アップデートの AS パスをカスタム AS パスに変更します。AS パスを完全に削除することもできます。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例： switch# configure terminal switch(config)#	グローバル設定モードを開始します。
ステップ 2	route-map map-name [permit deny] [seq] 例： switch(config)# route-map Testmap permit 10 switch(config-route-map)#	ルート マップを作成するか、または既存のルート マップに対応するルート マップ設定モードを開始します。ルート マップのエントリを順序付けるには、 seq を使用します。
ステップ 3	[no] set as-path { none {as-number remote-as local-as}+ } 例： switch(config-route-map)# set as-path 11 local-as remote-as 13	AS_PATH をカスタム ASN のリストに置き換えるか、AS_PATH をクリアします。コマンド オプションは次のとおりです。 • as-number: 指定された AS 番号。 • remote-as: BGP ピアの AS 番号。 • local-as: ローカル AS 番号。 none キーワードは、AS パスを完全に削除します。

例

次の例では、これらの値が想定されています。

- 元の AS_PATH は **10 20 30 40 50 60** です。
- local-as は **100** です。

- remote-as は 200 です。

この例は、カスタム AS パスを指定する方法を示しています。このコマンドは、AS パスを **11 100 200 13 200 10.10 65535** に変更します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# route-map Testmap permit 10
switch(config-route-map)# set as-path 11 local-as remote-as 13 remote-as 10.10 65535
```

この例は、AS パスをクリアする方法を示しています。このコマンドにより、AS パスが空になります。

```
switch# configure terminal
switch(config)# route-map Testmap permit 10
switch(config-route-map)# set as-path none
```

AS パスでの選択した AS 番号の置き換え

この手順を使用して、AS パス内の特定の AS 番号を置き換え、着信または発信 BGP 更新でそれらをカスタム AS 番号に置き換えます。**private-as** をマッチ キーワードとして指定することもできます。この場合、private-as の任意のインスタンスが一致し、置換または削除できます。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	グローバル設定モードを開始します。
ステップ 2	route-map map-name [permit deny] [seq] 例 : <pre>switch(config)# route-map Testmap permit 10 switch(config-route-map)#</pre>	ルート マップを作成するか、または既存のルート マップに対応するルート マップ設定モードを開始します。ルート マップのエントリを順序付けるには、 seq を使用します。
ステップ 3	[no] set as-path replace {asn_list private-as} [with {as-number remote-as none}] 例 : <pre>switch(config-route-map)# set as-path replace 1, 2, private-as with remote-as</pre>	with キーワードが指定されていない場合は、コンマで区切られた asn_list で示されている ASN のインスタンスを local-as に置き換えます。 private-as キーワードが指定されている場合は、 private-as を置き換えます。 with キーワードが指定されている場合は、一致した ASN の with キーワードの後の値、または private-as キーワードが

	コマンドまたはアクション	目的
		指定されている場合は private-as を置き換えます。 with キーワードに続くコマンドオプションは次のとおりです。 • as-number: 一致した値は、指定された AS 番号に置き換えられます。 • remote-as: 一致した値は、BGP ピアの AS 番号に置き換えられます。 • none: 一致した値は AS-path から削除されます。

例

次の例では、これらの値が想定されます。

- 元の AS_PATH は **1 5 2 10.10 65534 20** です。
- local-as は **100** です。
- remote-as は **200** です。

この例は、2つの特定の ASN と、private-as を local-as に置き換える方法を示しています。このコマンドは、AS パスを **100 5 100 10.10 100 20** に変更します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# route-map Testmap permit 10
switch(config-route-map)# set as-path replace 1, 2, private-as
```

この例は、2つの特定の ASN と、private-as をネイバーの ASN (remote-as) に置き換える方法を示しています。このコマンドは、AS パスを **200 5 200 10.10 200 20** に変更します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# route-map Testmap permit 10
switch(config-route-map)# set as-path replace 1, 2, private-as with remote-as
```

この例は、2つの特定の ASN と private-as を削除する方法を示しています。このコマンドは、AS パスを **5 10.10 20** に変更します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# route-map Testmap permit 10
switch(config-route-map)# set as-path replace 1, 2, private-as with none
```


コミュニティ リストの設定

コミュニティ リストを使用すると、コミュニティ属性に基づいて BGP ルートをフィルタリングできます。コミュニティ番号は *aa:nn* 形式の 4 バイト値です。最初の 2 バイトは自律システム番号を表し、最後の 2 バイトはユーザ定義のネットワーク番号です。

同じコミュニティ リスト文で複数の値を設定した場合、コミュニティ リスト フィルタを満足させるには、すべてのコミュニティ値が一致しなければなりません。複数の値をそれぞれ個別のコミュニティ リスト文で設定した場合は、最初に条件が一致したリストが処理されます。

コミュニティ リストを *match* 文で使用すると、コミュニティ属性に基づいて BGP ルートをフィルタリングできます。

手順

	コマンドまたはアクション		目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>		コンフィギュレーション モードに入ります。
ステップ 2	オプション	説明	
	コマンド	目的	
	ip community-list standard list-name { deny permit } [community-list] [internet] [local-AS] [no-advertise] [no-export] 例 : <pre>switch(config)# ip community-list standard BGPCommunity permit no-advertise 65536:20</pre>	標準 BGP コミュニティ リストを作成します。 <i>list</i> -名には最大 63 文字の英数字を使用できます。大文字と小文字は区別されます。 <i>community-list</i> には、1 つ以上のコミュニティを <i>aa:nn</i> 形式で指定できます。	
	ip community-list expanded list-name { deny permit } expression 例 : <pre>switch(config)# ip community-list expanded</pre>	正規表現を使用して拡張 BGP AS コミュニティ リストを作成します。	

	コマンドまたはアクション		目的
	オプション	説明	
	BGPComplex deny 50000:[0-9][0-9]_		
ステップ 3	(任意) show ip community-list <i>name</i> 例 : <pre>switch(config)# show ip community-list BGPCommunity</pre>		コミュニティ リストの情報を表示します。
ステップ 4	(任意) copy running-config startup-config 例 : <pre>switch# copy running-config startup-config</pre>		この設定変更を保存します。

例

次に、2 つのエントリからなるコミュニティ リストの作成例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# ip community-list standard BGPCommunity permit no-advertise 65536:20
switch(config)# ip community-list standard BGPCommunity permit local-AS no-export
switch(config)# copy running-config startup-config
```

拡張コミュニティ リストの設定

拡張コミュニティ リストを使用すると、コミュニティ属性に基づいて BGP ルートをフィルタリングできます。コミュニティ番号は **aa4:nn** 形式の 6 バイト値です。最初の 4 バイトは自律システム番号を表し、最後の 2 バイトはユーザ定義のネットワーク番号です。

同じ拡張コミュニティ リスト文で複数の値を設定した場合、拡張コミュニティ リストフィルタの条件を満たすには、すべての拡張コミュニティ値が一致しなければなりません。複数の値をそれぞれ個別の拡張コミュニティ リスト文で設定した場合は、最初に条件が一致したリストが処理されます。

拡張コミュニティ リストを **match** 文で使用すると、拡張コミュニティ属性に基づいて BGP ルートをフィルタリングできます。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 :	コンフィギュレーション モードに入ります。

	コマンドまたはアクション		目的
	switch# configure terminal switch(config)#		
ステップ 2	オプション	説明	
	コマンド	目的	
	ip community-list standard list-name { deny permit } 4bytegeneric { transitive non-transitive } community1 [community2] 例 : <pre>switch(config)# ip extcommunity-list standard BGPExtCommunity permit 4bytegeneric transitive 65536:20</pre>	標準 BGP コミュニティ リストを作成します。 <i>community-list</i> には、1 つ以上の拡張コミュニティを <i>aa:nn</i> 形式で指定できます。	
	ip extcommunity-list expanded list-name { deny permit } expression 例 : <pre>switch(config)# ip community-list expanded BGPComplex deny 50000:[0-9][0-9]_</pre>	正規表現を使用して拡張 BGP AS コミュニティ リストを作成します。	
ステップ 3	(任意) show ip community-list name 例 : <pre>switch(config)# show ip community-list BGPExtCommunity</pre>		コミュニティ リストの情報を表示します。
ステップ 4	(任意) copy running-config startup-config 例 : <pre>switch# copy running-config startup-config</pre>		この設定変更を保存します。

例

次に、汎用の特定拡張コミュニティ リストを作成する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# ip extcommunity-list standard test1 permit 4bytegeneric transitive
65536:40 65536:60
switch(config)# copy running-config startup-config
```

ルート マップの設定

ルート マップを使用して、ルートの再配布やルート フィルタリングを行うことができます。ルート マップには、複数の一致基準と複数の設定基準を含めることができます。

BGP にルート マップを設定すると、BGP ネイバーセッションの自動ソフトクリアまたはリフレッシュのトリガーになります。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例： switch# configure terminal switch(config)#	コンフィギュレーション モードに入ります。
ステップ 2	route-map map-name [permit deny] [seq] 例： switch(config)# route-map Testmap permit 10 switch(config-route-map)#	ルート マップを作成するか、または既存のルート マップに対応するルート マップ設定モードを開始します。 <i>seq</i> を使用して、ルート マップ エントリを順序付けます。
ステップ 3	(任意) continue seq 例： switch(config-route-map)# continue 10	ルート マップで次を処理するシーケンス文を決定します。使用するのは、フィルタリングおよび再配布の場合だけです。
ステップ 4	(任意) exit 例： switch(config-route-map)# exit	ルート マップ コンフィギュレーション モードを終了します。
ステップ 5	(任意) copy running-config startup-config 例： switch# copy running-config startup-config	この設定変更を保存します。

例

ルートマップコンフィギュレーションモードで、ルートマップに対して次のオプションの **match** パラメータを設定できます。



(注) **default-information originate** コマンドでは、オプションのルートマップの **match** 文は無視されます。

コマンド	目的
match as-path <i>name</i> [<i>name...</i>] 例 : <pre>switch(config-route-map)# match as-path Allow40</pre>	1 つまたは複数の AS パス リストと照合。AS パス リストは、 ip as-path access-list コマンドで作成します。
match as-number { <i>number</i> [, <i>number...</i>] as-path-list <i>name</i> [<i>name...</i>] } 例 : <pre>switch(config-route-map)# match as-number 33,50-60</pre>	1 つまたは複数の AS 番号または AS パス リストと照合。AS パス リストは、 ip as-path access-list コマンドで作成します。指定できる範囲は 1 ～ 65535 です。AS パス リスト名には最大 63 文字の英数字を使用できます。大文字と小文字は区別されます。
match community <i>name</i> [<i>name...</i>] [exact-match] 例 : <pre>switch(config-route-map)# match community BGPCommunity</pre>	1 つまたは複数のコミュニティリストと照合。コミュニティ リストは、 ip community-list コマンドで作成します。
match extcommunity <i>name</i> [<i>name...</i>] [exact-match] 例 : <pre>switch(config-route-map)# match extcommunity BGPextCommunity</pre>	1 つまたは複数の拡張コミュニティ リストと照合。コミュニティ リストは、 ip extcommunity-list コマンドで作成します。
match interface <i>interface-type</i> <i>number</i> [<i>interface-type</i> <i>number...</i>] 例 : <pre>switch(config-route-map)# match interface e 1/2</pre>	設定済みのインターフェイスのいずれかからのネクスト ホップと照合。? を使用すると、サポートされているインターフェイスタイプのリストを検索できます。
match ip address prefix-list <i>name</i> [<i>name...</i>] 例 : <pre>switch(config-route-map)# match ip address prefix-list AllowPrefix</pre>	1 つまたは複数の IPv4 プレフィックス リストと照合。プレフィックス リストは ip prefix-list コマンドを使用して作成します。

コマンド	目的
match ip next-hop prefix-list name [name ...] 例 : <pre>switch(config-route-map)# match ip next-hop prefix-list AllowPrefix</pre>	1 つまたは複数の IP プレフィックス リストに対して、ルートの IPv4 ネクストホップアドレスを照合。プレフィックス リストは ip prefix-list コマンドを使用して作成します。
match ip route-source prefix-list name [name ...] 例 : <pre>switch(config-route-map)# match ip route-source prefix-list AllowPrefix</pre>	1 つまたは複数の IP プレフィックス リストに対して、ルートの IPv4 ルート送信元アドレスを照合。プレフィックス リストは ip prefix-list コマンドを使用して作成します。
match mac-list name [name...] 例 : <pre>switch(config-route-map)# match mac-list AllowMAC</pre>	1 つまたは複数の MAC リストと照合。MAC リストは mac-list コマンドを使用して作成します。
match metric value [+-deviation] [value..] 例 : <pre>switch(config-route-map)# match mac-list AllowMAC</pre>	ルート メトリック 値を 1 つまたは複数のメトリック 値または値の範囲と照合。メトリック 範囲は +- deviation 引数を使用して設定します。ルートマップは次の範囲に該当するすべてのルートメトリックと照合されます。 <i>value - deviation to value + deviation.</i>
match route-type route-type 例 : <pre>switch(config-route-map)# match route-type level 1 level 2</pre>	ルート タイプと照合。 route-type は、次のうちの 1 つまたは複数にできます。 • external • internal • level-1 • level-2 • ローカル (local) • nssa-external • type-1 • type-2
match tag tagid [tagid.. .] 例 : <pre>switch(config-route-map)# match tag 2</pre>	フィルタリングまたは再配布に関する 1 つまたは複数のタグとルートを照合。

コマンド	目的
match vlan <i>vlan-id</i> [<i>vlan-range</i>] 例 : <pre>switch(config-route-map)# match vlan 3, 5-10</pre>	VLAN と照合。

ルートマップ設定モードで、オプションとして、ルートマップに次の **set** パラメータを設定できます。

コマンド	目的
set as-path { tag prepend { last-as <i>number</i> <i>as-1</i> [<i>as-2..</i> 。] } } 例 : <pre>switch(config-route-map)# set as-path prepend 10 100 110</pre>	BGP ルートの AS パス属性を変更します。最後の AS 番号として設定された <i>number</i> または特定の AS パス値としてのストリング (<i>as-1 as-2...as-n</i>) を前に付加できます。
set comm-list <i>name delete</i> 例 : <pre>switch(config-route-map)# set comm-list BGPCommunity delete</pre>	着信または発信 BGP ルートアップデートのコミュニティ属性から、コミュニティを削除します。コミュニティリストは ip community-list コマンドを使用して作成します。
set community { none additive local-AS no-advertise no-export <i>community-1</i> [<i>community-2. ..</i>] } 例 : <pre>switch(config-route-map)# set community local-AS</pre>	BGP ルートアップデートのコミュニティ属性を設定します。 (注) ルートマップ属性の同じシーケンスで、set community コマンドと set comm-list delete コマンドを両方使用すると、設定処理より先に削除処理が実行されます。 (注) send-community コマンドを BGP ネイバーアドレスファミリ コンフィギュレーションモードで使用して、BGP コミュニティ属性を BGP ピアにプロパゲートします。

コマンド	目的
set dampening halflife reuse suppress duration 例 : <pre>switch(config-route-map)# set dampening 30 1500 10000 120</pre>	BGP ルート ダンプニング パラメータを設定します。 • halflife : 指定できる範囲は 1 ～ 45 分です。デフォルトは 15 です。 • reuse : 指定できる範囲は 1 ～ 20000 秒です。デフォルトは 750 です。 • suppress : 指定できる範囲は 1 ～ 20000 です。デフォルトは 2000 です。 • duration : 指定できる範囲は 1 ～ 255 分です。デフォルトは 60 です。
set extcomm-list name delete 例 : <pre>switch(config-route-map)# set extcomm-list BGPextCommunity delete</pre>	着信または発信 BGP ルート アップデートの拡張コミュニティ属性から、コミュニティを削除します。拡張コミュニティ リストは ip extcommunity-list コマンドを使用して作成します。
set extcommunity generic { transitive nontransitive } { none additive } community-1 [community-2...] 例 : <pre>switch(config-route-map)# set extcommunity generic transitive 1.0:30</pre>	BGP ルート アップデートの拡張コミュニティ属性を設定します。 (注) ルートマップ属性の同じシーケンスで、 set extcommunity コマンドと set extcomm-list delete コマンドを両方使用すると、設定処理より先に削除処理が実行されます。 (注) send-community コマンドを BGP ネイバー アドレス ファミリ コンフィギュレーション モードで使用して、BGP コミュニティ属性を BGP ピアにプロパゲートします。
set forwarding-address 例 : <pre>switch(config-route-map)# set forwarding-address</pre>	OSPF のフォワーディング アドレスを設定します。
set level { backbone level-1 level-1-2 level-2 } 例 : <pre>switch(config-route-map)# set level backbone</pre>	IS-IS 用にルートをインポートするエリアを設定します。IS-IS のオプションは level-1、level-1-2、または level-2 です。デフォルトは level-1 です。

コマンド	目的
set local-preference value 例 : <pre>switch(config-route-map)# set local-preference 4000</pre>	BGP ローカル プリファレンス値を設定します。範囲は 0 ～ 4294967295 です。
set metric [+ -] bandwidth-metric 例 : <pre>switch(config-route-map)# set metric +100</pre>	既存のメトリック値を増減します。メトリックは Kb/s 単位です。範囲は 0 ～ 4294967295 です。
set metric bandwidth [delay reliability load mtu] 例 : <pre>switch(config-route-map)# set metric 33 44 100 200 1500</pre>	ルート メトリック値を設定します。 メトリックは次のとおりです。 • metric0 : 帯域幅 (Kb/s) 。範囲は 0 ～ 4294967295 です。 • metric1 : 遅延 (10 マイクロ秒単位) 。 • metric2 : 信頼性。指定できる範囲は 0 ～ 255 (100% の信頼性) です。 • metric3 : ロード中。指定できる範囲は 1 ～ 200 (100% のロード) です。 • metric4 : パスの MTU。値の範囲は 1 ～ 4294967295 です。
set metric-type { external internal type-1 type-2 } 例 : <pre>switch(config-route-map)# set metric-type internal</pre>	宛先ルーティング プロトコルのメトリック タイプを設定します。オプションは次のとおりです。 external : IS-IS 外部メトリック internal : BGP の MED として IGP メトリックを使用 type-1 : OSPF 外部タイプ 1 メトリック type-2 : OSPF 外部タイプ 2 メトリック
set origin { egp as-number igp incomplete } 例 : <pre>switch(config-route-map)# set origin incomplete</pre>	BGP オリジン属性を設定します。EGP <i>as-number</i> の範囲は 0 ～ 65535 です。
set tag name 例 : <pre>switch(config-route-map)# set tag 33</pre>	宛先ルーティング プロトコルのタグ値を設定します。 name パラメータは符号なし整数です。

コマンド	目的
set weight count 例 : <pre>switch(config-route-map)# set weight 33</pre>	BGP ルートの重み値を設定します。範囲は 0 ～ 65535 です。

set metric-type internal コマンドは、発信ポリシーと eBGP ネイバーにのみ作用します。同じ BGP ピア発信ポリシーに **metric** コマンドと **metric-type internal** コマンドを両方設定した場合、Cisco NX-OS は **metric-type internal** コマンドを無視します。

Route Policy Manager の設定の確認

Route Policy Manager の設定情報を表示するには、次の作業のいずれかを行います。

コマンド	目的
show ip community-list [name]	コミュニティ リストの情報を表示します。
show ip ext community-list [name]	拡張コミュニティ リストの情報を表示します。
show [ip] prefix-list [name]	IPv4 プレフィックスリストの情報を表示します。
show route-map [name]	ルート マップの情報を表示します。

Route Policy Manager の設定例

次の例では、アドレス ファミリを使用して Route Policy Manager を設定し、ネイバー 209.0.2.1 からのユニキャストルートやマルチキャストルートが AllowPrefix プレフィックスリストと一致した場合に、それらのルートが承認されるようにします。

```
router bgp 64496

neighbor 172.16.0.1 remote-as 64497
  address-family ipv4 unicast
    route-map filterBGP in

route-map filterBGP
  match ip address prefix-list AllowPrefix

ip prefix-list AllowPrefix 10 permit 192.0.2.0/24
ip prefix-list AllowPrefix 20 permit 172.16.201.0/27
```

関連項目

Route Policy Manager の詳細については、次の項目を参照してください。

- [基本的 BGP の設定](#) (247 ページ)

その他の参考資料

IP の実装に関する詳細情報については、次の各項を参照してください。

関連資料

関連項目	マニュアル タイトル
Route Policy Manager CLI コマンド	『Cisco Nexus 3000 Series Command Reference』

標準

標準	タイトル
この機能でサポートされる新規の標準または変更された標準はありません。また、既存の標準のサポートは変更されていません。	—



第 20 章

ポリシーベース ルーティングの設定

この章では、Cisco NX-OS デバイスでポリシー ベース ルーティングを設定する方法について説明します。

この章は、次の項で構成されています。

- [ポリシーベース ルーティングの概要 \(467 ページ\)](#)
- [ポリシーベース ルーティングの前提条件 \(469 ページ\)](#)
- [ポリシーベース ルーティングの注意事項と制約事項 \(469 ページ\)](#)
- [デフォルト設定 \(470 ページ\)](#)
- [ポリシーベース ルーティングの設定 \(470 ページ\)](#)
- [ポリシーベース ルーティングの設定の確認 \(474 ページ\)](#)
- [ポリシーベース ルーティング統計情報の表示 \(474 ページ\)](#)
- [ポリシーベース ルーティング統計情報の消去 \(474 ページ\)](#)
- [ポリシーベース ルーティングの設定例 \(475 ページ\)](#)
- [関連項目 \(475 ページ\)](#)
- [その他の参考資料 \(475 ページ\)](#)
- [ポリシーベース ルーティングの機能の履歴 \(476 ページ\)](#)

ポリシーベース ルーティングの概要

ポリシーベース ルーティングを使用すると、IPv4 トラフィック フローに定義済みのポリシーを設定し、ルーティングプロトコルから派生したルートへの依存度を弱めることができます。ポリシーベース ルーティングが有効のインターフェイスで受信したすべてのパケットは、拡張パケット フィルタまたはルート マップを経由して渡されます。ルート マップでは、パケットの転送先を決定するポリシーを記述します。

ルート マップは `match` 文および `set` 文からなり、許可または拒否を指定できます。文の解釈は次のとおりです。

- パケットがいずれかの `route map` 文と一致した場合、すべての `set` 文が適用されます。アクションには、ネクスト ホップの選択が含まれます。

- 文が **permit** とマークされており、パケットがいずれの **route-map** 文とも一致しない場合、そのパケットは通常の転送チャンネルを介して返送され、接続先ベースのルーティングが実行されます。

詳細については、[ルートマップ](#)を参照してください。

ポリシーベース ルーティングには、次の機能が含まれます。

- 送信元ベース ルーティング：異なるユーザセットを起点とするトラフィックをポリシー ルータ上のそれぞれ異なる接続を使用してルーティングします。
- ロードシェアリング：トラフィックの特性に基づいて、複数のパスにトラフィックを分散します。

ポリシールートマップ

ルートマップは、さまざまなルーティング プロトコルや、特定のルーティング プロトコル内のさまざまなエンティティ間で配布されたルートのフィルタリングで使用されます。ルートマップのエントリごとに、**match** 文と **set** 文の組み合わせが 1 つずつ含まれています。**match** 文では、該当するパケットが特定のポリシーを満たす基準（つまり、満たすべき条件）を定義します。**set** 文節で、**match** 基準を満たしたパケットをどのようにルーティングするかを説明します。

ルートマップ文を許可または拒否として指定できます。文に拒否が指定されている場合、一致基準を満たすパケットは標準のフォワーディングチャンネルを通じて送り返されます（宛先ベースルーティングが実行されます）。文に許可が指定されていて、なおかつパケットが一致基準を満たしている場合は、すべての **set** 文節が適用されます。文に許可が指定されていて、なおかつパケットが一致基準を満たしていない場合は、それらのパケットも標準のルーティングチャンネルを通じて転送されます。



(注) ポリシールーティングは、パケットの送信元となるインターフェイスではなく、パケットを受信するインターフェイス上で指定します。

ポリシーベース ルーティングの **set** 基準

ルートマップの **set** 基準は、ルートマップに指定された順番で評価されます。ポリシーベース ルーティング用のルートマップに固有の **set** 基準は、次のとおりです。

1. 指定 IP アドレスのリスト：IP アドレスでは、パケットの転送先である宛先へのパス上の隣接ネクストホップルータを指定できます。その時点でアップの接続インターフェイスに関連付けられた最初の IP アドレスがパケットのルーティングに使用されます。



(注) 任意で、最大 16 の IP アドレスにロード バランシングを行うように、ネクストホップアドレスの **set** 基準を設定できます。この場合、Cisco NX-OS は各 IP フローのすべてのトラフィックを特定の IP ネクスト ホップ アドレスに送信します。

2. デフォルトのネクストホップ IP アドレスのリスト：ルーティング テーブルにパケットの宛先アドレスの明示ルートがない場合にのみ、この **set** ステートメントで指定されたインターフェイスまたはネクストホップアドレスにルーティングします。



(注) 任意で、最大 16 の IP アドレスにロード バランシングを行うように、デフォルトのネクストホップアドレスの **set** 基準を構成できます。この場合、Cisco NX-OS は各 IP フローのすべてのトラフィックを特定の IP ネクスト ホップ アドレスに送信します。

3. NULL インターフェイス：**set null** インターフェイスを使用すると、**match** ステートメントに一致するトラフィックがドロップされます。

パケットが定義された一致基準のいずれにも一致しない場合、そのパケットは標準の宛先ベース ルーティング プロセスを使用してルーティングされます。

ポリシーベース ルーティングの前提条件

ポリシーベース ルーティングの前提条件は、次のとおりです。

- 有効なライセンスをインストールします。
- ポリシーベース ルーティングをイネーブルにする必要があります（[ポリシーベース ルーティング機能のイネーブル化](#)の項を参照）。
- インターフェイスに IP アドレスを割り当て、インターフェイスをアップにしてから、ポリシーベース ルーティング用のルート マップをインターフェイス上で適用します。
- IPv4 および IPv6 TCAM リージョンのデフォルト サイズは 0 であるため、インターフェイスに PBR ポリシーを適用する前に、PBR TCAM を切り分けてスイッチをリロードする必要があります（『[Cisco Nexus 3000 シリーズ NX-OS セキュリティ構成ガイド](#)』を参照）。

ポリシーベース ルーティングの注意事項と制約事項

ポリシーベース ルーティングに関する注意事項および制約事項は、次のとおりです。

- ポリシーベース ルーティングのルート マップでは、1 つのルート マップ文に **match** または **set** 文を 1 つだけ指定できます。

- `match` コマンドで、ポリシーベース ルーティング用ルート マップの複数の ACL を参照できません。
- ポリシーベース ルーティングのルート マップで使用する ACL には、`deny` 文を含めることができません。
- インターフェイスが同じ仮想ルーティング/転送 (VRF) インスタンスに所属している場合は、ポリシーベース ルーティング対応のさまざまなインターフェイス間で、同じルート マップを共有できます。
- Cisco Nexus 3000 シリーズ スイッチの場合、他のリージョンから切り分けることによって、IPv4 PBR TCAM の最大サイズを 1024 にすることができます。Cisco Nexus 3100 プラットフォーム スイッチの場合、他のリージョンから切り分けると、この最大サイズは 2816 になります。
- Cisco Nexus 3000 シリーズ スイッチの場合、他のリージョンから切り分けることによって、IPv6 PBR TCAM の最大サイズを 512 にすることができます。Cisco Nexus 3100 プラットフォーム スイッチの場合、この最大サイズは他のリージョンから切り分けて 512 になります。

デフォルト設定

下の表に、ポリシーベース ルーティング パラメータのデフォルト設定を示します。

表 28: デフォルトのポリシーベース ルーティング パラメータ

パラメータ	デフォルト
ポリシーベース ルーティング	無効化

ポリシーベース ルーティングの設定



(注) Cisco IOS の CLI に慣れている場合、この機能に対応する Cisco NX-OS コマンドは通常使用する Cisco IOS コマンドと異なる場合がありますので注意してください。

ポリシーベース ルーティング機能のイネーブル化

ルート ポリシーを設定する前に、ポリシーベース ルーティング機能をイネーブルにしておく必要があります。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <code>switch# configure terminal</code> <code>switch(config)#</code>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	feature pbr 例 : <code>switch(config)# feature pbr</code>	ポリシーベース ルーティング機能をイネーブルにします。
ステップ 3	(任意) show feature 例 : <code>switch(config)# show feature</code>	有効および無効にされた機能を表示します。
ステップ 4	(任意) copy running-config startup-config 例 : <code>switch(config)# copy running-config startup-config</code>	この設定変更を保存します。

例

no feature pbr コマンドを使用して、ポリシーベースのルーティング機能をディセーブルにし、関連するコンフィギュレーションをすべて削除します。

コマンド	目的
no feature pbr 例 : <code>switch(config)# no feature pbr</code>	ポリシーベース ルーティングをディセーブルにして、関連するすべての設定を削除します。

ルート ポリシーの設定

ポリシーベースルーティングでルートマップを使用すると、着信インターフェイスにルーティング ポリシーを割り当てることができます。[ルート マップの設定](#)のセクションを参照してください。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例： switch# configure terminal switch(config)#	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	interface type slot/port 例： switch(config)# interface ethernet 1/2 switch(config-if)#	インターフェイス設定モードを開始します。
ステップ 3	{ ip ipv6 } policy route-map map-name 例： switch(config-if)# ip policy route-map Testmap switch(config-if)# ipv6 policy route-map TestIPv6map	IPv4 または IPv6 ポリシーベース ルーティング用のルート マップをインターフェイスに割り当てます。
ステップ 4	(任意) exit 例： switch(config-route-map)# exit	ルートマップ設定モードを終了します。
ステップ 5	(任意) exit 例： switch(config)# exit	グローバル コンフィギュレーション モードを終了します。
ステップ 6	(任意) copy running-config startup-config 例： switch(config)# copy running-config startup-config	この設定変更を保存します。

例

次に、インターフェイスにルート マップを追加する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# interface ethernet 1/2
switch(config-if)# ip policy route-map Testmap
switch(config)# exit
switch(config)# copy running-config startup-config
```

ルートマップ設定モードで、オプションとして、ルートマップに次の **match** パラメータを設定できます。

コマンド	目的
match ip address access-list-name name [name...] 例 : <pre>switch(config-route-map)# match ip address access-list-name ACL1</pre>	1 つまたは複数の IP アクセス コントロール リスト (ACL) に対して IPv4 アドレスを照合します。このコマンドはポリシーベース ルーティング用であり、ルート フィルタリングまたは再配布では無視されます。
match ipv6 address access-list-name name [name...] 例 : <pre>switch(config-route-map)# match ipv6 address access-list-name ACLv6</pre>	1 つまたは複数の IPv6 ACL に対して IPv6 アドレスを照合します。このコマンドはポリシーベース ルーティング用であり、ルート フィルタリングまたは再配布では無視されます。

ルート マップ設定モードで、オプションとして、ルート マップに次の **set** パラメータを設定できます。

コマンド	目的
set ip next-hop address1 [address2.. 。] { load-share } 例 : <pre>switch(config-route-map)# set ip next-hop 192.0.2.1</pre>	ポリシーベース ルーティング用の IPv4 ネクストホップアドレスを設定します。このコマンドでは、複数のアドレスが設定されている場合に、最初の有効なネクストホップアドレスが使用されます。 任意の load-share キーワードを使用して、最大 16 のネクストホップアドレスにトラフィックのロードバランシングを行います。
set ip default next-hop address1 [address2...] { load-share } 例 : <pre>switch(config-route-map)# set ip default next-hop 192.0.2.2</pre>	宛先への明示的ルートがない場合に使用する、ポリシーベース ルーティング用の IPv4 ネクストホップアドレスを設定します。このコマンドでは、複数のアドレスが設定されている場合に、最初の有効なネクストホップアドレスが使用されます。 任意の load-share キーワードを使用して、最大 16 のネクストホップアドレスにトラフィックのロードバランシングを行います。
set ipv6 next-hop address1 [address2..。] { load-share } 例 : <pre>switch(config-route-map)# set ipv6 next-hop 2001:0DB8::1</pre>	ポリシーベース ルーティング用の IPv6 ネクストホップアドレスを設定します。このコマンドでは、複数のアドレスが設定されている場合に、最初の有効なネクストホップアドレスが使用されます。 任意の load-share キーワードを使用して、最大 16 のネクストホップアドレスにトラフィックのロードバランシングを行います。

コマンド	目的
set ipv6 default next-hop address1 [address2...] 例 : <pre>switch(config-route-map)# set ipv6 default next-hop 2001:0DB8::2</pre>	宛先への明示的ルートがない場合に使用する、ポリシーベース ルーティング用の IPv6 ネクスト ホップ アドレスを設定します。このコマンドでは、複数のアドレスが設定されている場合に、最初の有効なネクスト ホップ アドレスが使用されます。

Cisco NX-OS はネクスト ホップ および インターフェイスを検出すると、ただちにパケットをルーティングします。

ポリシーベース ルーティングの設定の確認

ポリシーベース ルーティングの設定情報を表示するには、次のいずれかのタスクを実行します。

コマンド	目的
show ip policy [name]	IPv4 ポリシーに関する情報を表示します。
show route-map [name] pbr-statistics	ポリシー統計情報を表示します。

route-map map-name pbr-statistics を使用してポリシー統計情報を有効にします。 **clear route-map map-name pbr-statistics** を使用してこれらのポリシー統計情報をクリアします。

ポリシーベース ルーティング統計情報の表示

ポリシーベース ルーティングの統計情報を表示するには、**show route-map rmap-name pbr-statistics** コマンドを使用します。統計情報は、ルートマップシーケンスごとに維持されます。これは、特定のルート マップ シーケンスの一致条件に基づいてポリシー ルーティングされるパケット数を示します。デフォルトのルーティングテーブルを使用してルーティングした他のパケット（set コマンドでは到達不能なネクスト ホップが原因の場合がある）もすべて表示されます。統計情報を表示する前に、PBR 統計情報の収集をオンにする必要があります。

次に、PBR 統計情報を表示する例を示します。

```
switch(config)# show route-map pbr-sample pbr-statistics
```

ポリシーベース ルーティング統計情報の消去

ルートマップの PBR 統計のために保持されているカウンタをクリアするには、**clear route-map rmap-name pbr-statistics** コマンドを使用します。

次の例では、すべての PBR 統計情報をクリアする方法を示します。

```
switch(config)# clear route-map pbr-sample pbr-statistics
```

ポリシーベース ルーティングの設定例

インターフェイス上で単純なルート ポリシーを設定する例を示します。

```
feature pbr
ip access-list pbr-sample
permit tcp host 10.1.1.1 host 192.168.2.1 eq 80
!
route-map pbr-sample
match ip address pbr-sample
set ip next-hop 192.168.1.1
!
route-map pbr-sample pbr-statistics
```

```
interface ethernet 1/2
ip policy route-map pbr-sample
```

次の出力で、この設定を確認します。

```
n3000# show route-map pbr-sample

route-map pbr-sample, permit, sequence 10
Match clauses:
ip address (access-lists): pbr-sample
Set clauses:
ip next-hop 192.168.1.1

n3000# show route-map pbr-sample pbr-statistics

route-map pbr-sample, permit, sequence 10
Policy routing matches: 84 packets
```

関連項目

ポリシーベース ルーティングの詳細については、次の項目を参照してください。

- [Route Policy Manager の設定 \(441 ページ\)](#)

その他の参考資料

IP の実装に関する詳細情報については、次の各項を参照してください。

関連資料

関連項目	マニュアル タイトル
ポリシーベース ルーティング CLI コマンド	Cisco Nexus 3000 シリーズ NX-OS ユニキャスト ルーティング コマンド リファレンス

標準

標準	タイトル
この機能でサポートされる新規の標準または変更された標準はありません。また、既存の標準のサポートは変更されていません。	—

ポリシーベース ルーティングの機能の履歴.

次の表に、この機能のリリースの履歴を示します。

表 29: ポリシーベース ルーティングの機能の履歴.

機能名	リリース	機能情報
ポリシーベース ルーティング	6.0(2)U2(1)	この機能が導入されました。



第 21 章

双方向フォワーディング検出の設定

この章では、双方向フォワーディング検出（BFD）を設定する方法について説明します。

この章は、次の項で構成されています。

- [BFD に関する情報（477 ページ）](#)
- [BFD の前提条件（479 ページ）](#)
- [注意事項と制約事項（479 ページ）](#)
- [デフォルト設定（481 ページ）](#)
- [BFD の設定（482 ページ）](#)
- [IPv6 の BFD を構成する（493 ページ）](#)
- [BFD 設定の確認（500 ページ）](#)
- [BFD のモニタリング（500 ページ）](#)

BFD に関する情報

BFD は、メディア タイプ、カプセル化、トポロジ、およびルーティング プロトコルの転送パス障害を高速で検出するように設計された検出プロトコルです。BFD を使用することで、さまざまなプロトコルの Hello メカニズムにより、変動速度ではなく一定速度で転送パス障害を検出できます。BFD はプロファイリングおよびプランニングを簡単にし、再コンバージェンス時間の一貫性を保ち、予測可能にします。

BFD では、2 台の隣接デバイス間のサブセカンド障害を検出します。

非同期モード

Cisco NX-OS は、BFD 非同期モードをサポートします。BFD 非同期モードでは、2 個の隣接するデバイス間で BFD 制御パケットが送信され、デバイス間の BFD ネイバーセッションがアクティベートされ、維持されます。両方のデバイス（または BFD ネイバー）で BFD を設定できます。適切なプロトコルで一度 BFD がイネーブルになると、Cisco NX-OS は BFD セッションを作成し、BFD セッションパラメータをネゴシエートし、BFD 制御パケットをネゴシエートされた間隔で各 BFD ネイバーに送信し始めます。BFD セッションパラメータは、次のとおりです。

- 目的の最小送信間隔：このデバイスが BFD Hello メッセージを送信する間隔。
- 必要最小受信間隔：このデバイスが別の BFD デバイスからの BFD Hello メッセージを受け付ける最小間隔。
- 検出乗数：転送パスの障害を検出するまでに喪失した、別の BFD デバイスからの BFD Hello メッセージの数。

BFD の障害検出

一度 BFD セッションが確立され、タイマー ネゴシエーションが終了すると、BFD ネイバーは、より速い速度の場合を除き IGP Hello プロトコルと同じ動作をする BFD 制御パケットを送信し、活性度を検出します。BFD は障害を検出しますが、プロトコルが障害の発生したピアをバイパスするための処置を行う必要があります。

BFD は転送パスに障害を検出したとき、障害検出通知を BFD 対応プロトコルに送信します。ローカルデバイスは、プロトコル再計算プロセスを開始してネットワーク全体の収束時間を削減できます。

ネットワークで障害が発生すると、次のことが発生します。

1. BFD 隣接ルータでの BFD ネイバー セッションが停止します。
2. BFD はローカル BFD プロセスに BFD ネイバーに接続できなくなったことを通知します。
3. ローカル BFD プロセスは BFD ネイバー関係を解除します。
4. 代替パスが使用可能な場合、ルータはただちにそのパスでコンバージェンスを開始します。



(注) BFD 障害検出は 1 秒未満で行われます。

BFD エコー機能

BFD エコー機能は、転送エンジンからリモート BFD ネイバーにエコー パケットを送信します。BFD ネイバーは検出を実行するために同じパスに沿ってエコー パケットを返送します。BFD ネイバーは、エコー パケットの実際の転送に参加しません。エコー機能および転送エンジンが検出の処理を行います。BFD はエコー機能がイネーブルになっている場合に非同期セッションの速度を低下させ、2 台の BFD ネイバー間で送信される BFD 制御パケット数を減らすために、slow timer を使用できます。また、転送エンジンは、リモート システムを含めないでリモート（ネイバー）システムの転送パスをテストするので、パケット間遅延の変動が少なくなり、障害検出時間が短縮されます。

BFD ネイバーの両方がエコー機能を実行している場合、エコー機能は非対称になります。

セキュリティ

Cisco NX-OS は BFD パケットを隣接する BFD ピアから受信したことを確認するためにパケットの存続可能時間（TTL）値を使用します。すべての非同期およびエコー要求パケットの場合、BFD ネイバーは TTL 値を 255 に設定し、ローカル BFD プロセスは着信パケットを処理する前に TTL 値を 255 として確認します。エコー応答パケットの場合、BFD は TTL 値を 254 に設定します。

仮想化のサポート

BFD は、仮想ルーティングおよび転送（VRF）インスタンスをサポートしています。

BFD の前提条件

BFD には、次の前提条件があります。

- BFD 機能を有効にする必要があります（[BFD 機能の有効化](#)のセクションを参照）。
- クライアントプロトコル上で BFD を有効にする場合は、そのクライアントプロトコルの BFD を有効にします。「[BFD for IPv6 の構成](#)」セクションを参照してください。
- クライアントプロトコル上で BFD を有効にする場合は、そのクライアントプロトコルの BFD を有効にします。
- BFD 対応インターフェイスでインターネット制御メッセージプロトコル（ICMP）リダイレクトメッセージをディセーブルにします。
- 設定作業とともに一覧表示されているその他の詳細な前提条件を参照してください。
- Cisco NX-OS リリース 6.0(2)A4(1) 以降、BFD for IPv6 がサポートされています。

注意事項と制約事項

BFD 設定時のガイドラインと制約事項は次のとおりです。

- BFD は BFD バージョン 1 をサポートします。
- BFD は、IPv4、IPv6、OSPFv2、BGPv4 およびスタティック ルートをサポートします。
- BFD は、シングルホップ BFD をサポートします。
- BGP の BFD は、送信元更新でシングルホップ eBGP および iBGP をサポートします。
- BFD は、レイヤ 3 インターフェイスとして、物理インターフェイス、ポートチャネル、サブインターフェイス、および VLAN インターフェイス（SVI）をサポートします。

- BFD は、ポート チャネル上の BFD の認証またはリンクごとの BFD セッションはサポートしません。
- BFD はレイヤ 3 隣接情報に応じて、レイヤ 2 のトポロジ変更を含むトポロジ変更を検出します。レイヤ 3 隣接情報が使用できない場合、VLAN インターフェイス (SVI) の BFD セッションはレイヤ 2 トポロジのコンバージェンス後に稼働しない可能性があります。
- ポート チャネル設定の制限事項

BFD で使用されるレイヤ 3 ポート チャネルでは、ポート チャネルの Link Aggregation Control Protocol (LACP) を有効にする必要があります。

SVI セッションで使用されるレイヤ 2 ポートチャネルでは、ポートチャネルの LACP を有効にする必要があります。

- SVI の制限事項
- ASIC のリセットにより、他のポートのトラフィックが中断され、他のポートでの SVI セッションがフラップする可能性があります。たとえば、キャリア インターフェイスが仮想ポートチャネル (vPC) の場合、BFD は SVI インターフェイスではサポートされず、ASIC のトリガーをリセットする可能性があります。BFD セッションが仮想ポート チャネル (vPC) ピア リンクを使用して SVI 経由で行われる場合、BFD エコー機能はサポートされません。vPC ピア ノード間で行われる SVI 経由のすべてのセッションに関して BFD エコー機能を無効にする必要があります。

Cisco Nexus シリーズ スイッチの SVI は、vPC を介して接続されたデバイスとの BFD ネイバー隣接関係を確立するように設定しないでください。これは、ネイバーからの BFD キーアライブが、vPC ピア スイッチに接続された vPC メンバー リンクを介して送信された場合、この SVI に到達せず、BFD 隣接関係が機能不全になるためです。

- トポロジを変更すると (たとえば、VLAN へのリンクの追加または削除、レイヤ 2 ポートチャネルからのメンバの削除など)、SVI セッションが影響を受ける場合があります。SVI セッションはダウンした後、トポロジディスカバリの終了後に起動する場合があります。
- BEX over FEX HIF インターフェイスはサポートされていません。
- BFD セッションが仮想ポート チャネル (vPC) ピア リンクを使用して SVI 経由で行われる場合 (BCM または GEM いずれかのベースのポート)、BFD エコー機能はサポートされません。SVI 設定レベルで `no bfd echo` コマンドを使用して、vPC ピア ノード間で行われる SVI 経由のすべてのセッションに関して BFD エコー機能を無効にする必要があります。



ヒント

SVI のセッションがフラップしないようにし、トポロジを変更する必要がある場合は、変更を加える前に BFD 機能をディセーブルにして、変更後、BFD を再度イネーブルにできます。また、大きな値 (たとえば、5 秒) になるように BFD タイマーを設定し、上記のイベントの完了後に高速なタイマーに戻すこともできます。

- Cisco NX-OS は、BFD パケット処理の CPU 負荷軽減のための、互換モジュールへの BFD 動作の分散は行いません。
- BFD はステートレス リスタート および インサービス ソフトウェア アップグレード (ISSU) をサポートしません。
- ポート チャンネルを介して到達可能なピアの BFD を有効にする場合は、ポート チャンネルで LACP を構成する必要があります。
- BFD エコー モードとユニキャスト リバース パス転送 (URPF) は相互に排他的であり、BFD インターフェイスで両方を有効にすることはできません。BFD のインターフェイスを構成する場合は、BFD エコーモードまたは URPF のいずれかを無効にする必要があります。
- IPv6 に対する HSRP、IPv6 に対する VRRPv3 は、BFD でサポートされていません。
- スタティック IPv6 ルートは、BFD でサポートされています。
- BFD エコー機能は、グローバル IPv6 アドレスを使用している場合にのみサポートされ、IPv6 リンクローカル アドレスを使用している場合にはサポートされません。

デフォルト設定

次の表に、BFD パラメータのデフォルト設定値を示します。

表 30: デフォルトの BFD パラメータ

パラメータ	デフォルト
BFD 機能	ディセーブル
必要最小受信間隔	250 ミリ秒
目的の最小送信間隔	250 ミリ秒
検出乗数	3
エコー機能	イネーブル
モード	非同期
ポート チャンネル	論理モード (送信元/宛先ペアのアドレスごとに1セッション)
slow timer	2000 ミリ秒
起動タイマー	5 秒

BFD の設定

このセクションは、次のトピックで構成されています。

設定階層

BFD は、グローバル レベル、VRF のレベル、インターフェイスまたはポート チャネル レベル、またはサブインターフェイス レベルで設定できます（物理インターフェイスとポートチャネルの場合）。VRF の設定はグローバル設定よりも優先されます。インターフェイスまたはポート チャネルの設定は、VRF またはグローバル設定よりも優先されます。サポートされているインターフェイス上での、サブインターフェイス レベルの設定は、サブインターフェイスの最適化がイネーブルになっていない限りインターフェイスまたはポートチャネル設定よりも優先されます。詳細については、「[BGP で BFD の構成](#)」を参照してください。

ポート チャネルのメンバである物理ポートについては、メンバポートはプライマリ ポートチャネルの BFD 設定を継承します。メンバー ポートサブインターフェイスは、マスター ポートチャネルの BFD 構成より優先させることができます。

BFD 設定のタスク フロー

BFD の設定には、次の作業を行います。

手順

ステップ 1 [BFD 機能の有効化](#)。

ステップ 2 [グローバルな BFD パラメータの設定またはインターフェイスでの BFD の設定](#)

BFD 機能のイネーブル化

インターフェイスとプロトコルの BFD を設定する前に、BFD 機能をイネーブルにする必要があります。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	グローバル設定モードを開始します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 2	feature bfd 例 : switch(config)# feature bfd	BFD 機能をイネーブルにします。
ステップ 3	(任意) copy running-config startup-config 例 : switch(config)# copy running-config startup-config	この設定変更を保存します。

グローバルな BFD パラメータの設定

デバイスのすべての BFD セッションの BFD セッションパラメータを設定できます。BFD セッションパラメータは、スリーウェイ ハンドシェイクの BFD ピア間でネゴシエートされます。

インターフェイスでこれらのグローバルなセッションパラメータを上書きするには、[インターフェイスでの BFD の設定](#)のセクションを参照してください。

始める前に

BFD 機能をイネーブルにします。[BFD 機能のイネーブル化](#)のセクションを参照してください。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : switch# configure terminal switch(config)#	グローバル設定モードを開始します。
ステップ 2	bfd interval mintx min_rx msec multiplier value 例 : switch(config)# bfd interval 250 min_rx 250 multiplier 3	デバイスのすべての BFD セッションの BFD セッションパラメータを設定します。インターフェイスで BFD セッションパラメータを設定することにより、これらの値を上書きすることができます。 <i>mintx</i> および <i>msec</i> の範囲は 250 ～ 999 ミリ秒で、デフォルトは 250 です。乗数の範囲は 3 ～ 50 です。乗数のデフォルトは 3 です。 デフォルト設定に戻すには、 no bfd interval コマンドを使用します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 3	bfd slow-timer interval 例 : <pre>switch(config)# bfd slow-timer 2000</pre>	スロー タイマーを設定します。この値は BFD が新しいセッションを開始する速度を決定し、BFD エコー機能がイネーブルの場合に非同期セッションの速度を低下させるために使用されます。指定できる範囲は 1000 ～ 30000 ミリ秒です。デフォルトは 2000 です。 デフォルト設定に戻すには、no bfd slow-timer コマンドを使用します。
ステップ 4	bfd startup-timer seconds 例 : <pre>switch(config)# bfd startup-timer 20</pre>	BFD 起動タイマーを設定します。BFD 起動タイマーは、BFD セッションの起動時間を遅らせることにより、ローカルおよびリモート ルータで使用されているルートがハードウェアに固定されるまでの時間を作ります。この機能を使用すると、より大規模なシナリオで BFD または VRF のフラップを防止できます。範囲は 0 ～ 30 秒です。デフォルトは 5 秒です。 bfd startup-timer 0 コマンドは、BFD 起動タイマーをディセーブルにします。no bfd startup-timer コマンドは、BFD 起動タイマーを 5 秒（デフォルト値）に設定します。
ステップ 5	exit 例 : <pre>switch(config)# exit switch#</pre>	EXEC モードに戻ります。
ステップ 6	(任意) show running-config bfd 例 : <pre>switch# show running-config bfd</pre>	BFD の実行構成を表示します。
ステップ 7	(任意) copy running-config startup-config 例 : <pre>switch# copy running-config startup-config</pre>	この設定変更を保存します。

インターフェイス上での BFD の設定

BFD機能をイネーブルにします。[BFD機能のイネーブル化](#)のセクションを参照してください。

始める前に

インターフェイスのすべての BFD セッションの BFD セッションパラメータを設定できます。BFD セッションパラメータは、スリーウェイ ハンドシェイクの BFD ピア間でネゴシエートされます。

この設定は、設定されたインターフェイスのグローバル セッション パラメータより優先されます。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	interface int-if 例 : <pre>switch(config)# interface ethernet 2/1 switch(config-if)#</pre>	インターフェイス設定モードを開始します。 ? キーワードを使用して、サポートされるインターフェイスを表示します。
ステップ 3	bfd interval mintx min_rx msec multiplier value 例 : <pre>switch(config-if)# bfd interval 250 min_rx 250 multiplier 3</pre>	インターフェイスのすべての BFD セッションの BFD セッションパラメータを設定します。このコマンドはグローバルな BFD セッションパラメータより優先されます。 <i>mintx</i> および <i>msec</i> の範囲は 250 ～ 999 ミリ秒で、デフォルトは 250 です。乗数の範囲は 3 ～ 50 です。乗数のデフォルトは 3 です。 デフォルト設定に戻すには、 no bfd interval コマンドを使用します。
ステップ 4	exit 例 : <pre>switch(config-if)# exit switch (config)#</pre>	インターフェイス コンフィギュレーション モードを終了します。
ステップ 5	exit 例 : <pre>switch (config)# exit switch#</pre>	コンフィギュレーション モードを終了し、EXEC モードに戻ります。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 6	(任意) show running-config bfd 例 : <pre>switch# show running-config bfd</pre>	BFD の実行構成を表示します。
ステップ 7	(任意) copy running-config startup-config 例 : <pre>switch# copy running-config startup-config</pre>	この設定変更を保存します。

ポート チャネルの BFD の設定

ポート チャネルのすべての BFD セッションの BFD セッション パラメータを設定できます。たとえば、ポート チャネルの 1 つのリンクの BFD セッションが稼働している場合、BGP などのクライアント プロトコルにポート チャネルが稼働していることが通知されます。BFD セッション パラメータは、スリーウェイ ハンドシェイクの BFD ピア間でネゴシエートされます。

この設定は、設定されたポート チャネルのグローバル セッション パラメータより優先されます。ポートチャネルのメンバー ポートは、メンバー ポートのサブインターフェイス レベルで BFD パラメータを設定しない限り、ポートチャネルの BFD セッション パラメータを継承します。詳細については、「[BGP で BFD の構成](#)」を参照してください。

始める前に

BFD をイネーブルにする前に、ポート チャネルの Link Aggregation Control Protocol (LACP) がイネーブルにされていることを確認します。

BFD 機能をイネーブルにします。[BFD 機能のイネーブル化](#)のセクションを参照してください。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	interface port-channel number 例 : <pre>switch(config)# interface port-channel 2 switch(config-if)#</pre>	ポート チャネル コンフィギュレーション モードを開始します。 ? キーワードを使用して、サポートされる数値の範囲を表示します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 3	(任意) bfd interval <i>mintx min_rx msec multiplier value</i> 例 : <pre>switch(config-if)# bfd interval 250 min_rx 250 multiplier 3</pre>	インターフェイスのすべての BFD セッションの BFD セッションパラメータを設定します。このコマンドはグローバルな BFD セッションパラメータより優先されます。 <i>mintx</i> および <i>msec</i> の範囲は 250 ~ 999 ミリ秒で、デフォルトは 250 です。乗数の範囲は 3 ~ 50 です。乗数のデフォルトは 3 です。 デフォルト設定に戻すには、 no bfd interval コマンドを使用します。
ステップ 4	exit 例 : <pre>switch(config-if)# exit switch (config)#</pre>	インターフェイスコンフィギュレーション モードを終了します。
ステップ 5	exit 例 : <pre>switch (config)# exit switch#</pre>	コンフィギュレーション モードを終了し、EXEC モードに戻ります。
ステップ 6	(任意) show running-config bfd 例 : <pre>switch# show running-config bfd</pre>	BFD の実行構成を表示します。
ステップ 7	(任意) copy running-config startup-config 例 : <pre>switch# copy running-config startup-config</pre>	この設定変更を保存します。

BFD エコー機能の設定

BFD モニタ対象リンクの一端または両端で BFD エコー機能を設定できます。エコー機能は設定された *slow timer* に基づいて必要最小受信間隔を遅くします。RequiredMinEchoRx BFD セッションパラメータは、エコー機能が RFC 5880 に準拠して無効の場合、ゼロに設定されます。*slow timer* は、エコー機能がイネーブルの場合、必要最小受信間隔になります。

始める前に

BFD 機能をイネーブルにします。[BFD 機能のイネーブル化](#)のセクションを参照してください。

BFD セッションパラメータを設定します。[グローバルな BFD パラメータの設定](#)のセクション、または[インターフェイスでの BFD の設定](#)のセクションを参照してください。

インターネット制御メッセージプロトコル (ICMP) のリダイレクトメッセージが BFD 対応インターフェイスでディセーブルであることを確認します。インターフェイスで **no ip redirects** コマンドを使用します。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	グローバル設定モードを開始します。
ステップ 2	bfd slow-timer echo-interval 例 : <pre>switch(config)# bfd slow-timer 2000</pre>	エコー機能で使用される slow timer を設定します。この値は BFD が新しいセッションを開始する速度を決定し、BFD エコー機能がイネーブルの場合に非同期セッションの速度を低下させるために使用されます。この値は、エコー機能がイネーブルの場合、必要最小受信間隔より優先されます。指定できる範囲は 1000 ～ 30000 ミリ秒です。デフォルトは 2000 です。 デフォルト設定に戻すには、 no bfd slow-timer コマンドを使用します。
ステップ 3	interface int-if 例 : <pre>switch(config)# interface ethernet 2/1 switch(config-if)#</pre>	インターフェイス設定モードを開始します。 ? キーワードを使用して、サポートされるインターフェイスを表示します。
ステップ 4	bfd echo 例 : <pre>switch(config-if)# bfd echo</pre>	エコー機能をイネーブルにします。デフォルトではイネーブルになっています。 エコー機能をディセーブルにするには、 no bfd echo コマンドを使用します。
ステップ 5	exit 例 : <pre>switch(config-if)# exit switch (config)#</pre>	インターフェイスコンフィギュレーションモードを終了します。
ステップ 6	exit 例 : <pre>switch (config)# exit switch#</pre>	コンフィギュレーションモードを終了し、EXEC モードに戻ります。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 7	(任意) show running-config bfd 例 : <pre>switch# show running-config bfd</pre>	BFD の実行構成を表示します。
ステップ 8	(任意) copy running-config startup-config 例 : <pre>switch# copy running-config startup-config</pre>	この設定変更を保存します。

BGP での BFD の設定

ボーダー ゲートウェイ プロトコル (BGP) の BFD を設定できます。

始める前に

BFD 機能をイネーブルにします。 [BFD 機能のイネーブル化](#) のセクションを参照してください。

BFD セッション パラメータを設定します。 [グローバルな BFD パラメータの設定](#) のセクション、または [インターフェイスでの BFD の設定](#) のセクションを参照してください。

BGP 機能をイネーブルにします。「[BGP 機能の有効化](#)」のセクションを参照してください。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	router bgp as-number 例 : <pre>switch(config)# router bgp 64496 switch(config-router)#</pre>	BGP を有効にして、ローカル BGP スピーカに AS 番号を割り当てます。AS 番号は 16 ビット整数または 32 ビット整数にできます。上位 16 ビット 10 進数と下位 16 ビット 10 進数による xx.xx という形式です。
ステップ 3	neighbor { ip-address } remote-as as-number 例 : <pre>switch(config-router)# neighbor 209.165.201.1 remote-as 64497 switch(config-router-neighbor)#</pre>	リモート BGP ピアの IPv4 アドレスおよび AS 番号を設定します。The <i>ip-address</i> 形式は x.x.x.x です。

PIM（Protocol Independent Multicast）での BFD の設定

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 4	bfd 例： switch(config-router-neighbor)# bfd	この BGP ピアの BFD をイネーブルにします。
ステップ 5	（任意） show running-config bfd 例： switch# show running-config bfd	BFD の実行構成を表示します。
ステップ 6	（任意） copy running-config startup-config 例： switch# copy running-config startup-config	この設定変更を保存します。

PIM（Protocol Independent Multicast）での BFD の設定

PIM（Protocol Independent Multicast）プロトコルの BFD を設定できます。

始める前に

BFD 機能をイネーブルにします。 [BFD 機能のイネーブル化](#) のセクションを参照してください。

PIM 機能をイネーブルにします。詳細については、『[Cisco Nexus 3000 スイッチ NX-OS マルチキャストルーティング構成ガイド](#)』を参照してください。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例： switch# configure terminal switch(config)#	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	ip pim bfd 例： switch(config)# ip pim bfd	PIM の BFD をイネーブルにします。
ステップ 3	interface type slot/port 例： switch(config)# interface ethernet 2/1 switch(config-if)#	インターフェイス設定モードを開始します。 ? キーワードを使用して、サポートされるインターフェイスを表示します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 4	(任意) ip pim bfd-instance [disable] 例 : <pre>switch(config-if)# ip pim bfd-instance</pre>	PIM インターフェイスの BFD をイネーブルまたはディセーブルにします。デフォルトではディセーブルになっています。
ステップ 5	(任意) show running-config pim 例 : <pre>switch(config)# show running-config pim</pre>	PIM の実行コンフィギュレーションを表示します。
ステップ 6	(任意) copy running-config startup-config 例 : <pre>switch# copy running-config startup-config</pre>	この設定変更を保存します。

OSPFv2 での BFD の設定

Open Shortest Path First Protocol (OSPFv2) で BFD を設定できます。

始める前に

BFD 機能をイネーブルにします。 [BFD 機能のイネーブル化](#) のセクションを参照してください。

BFD セッションパラメータを設定します。 [グローバルな BFD パラメータの設定](#) のセクション、または [インターフェイスでの BFD の設定](#) のセクションを参照してください。

OSPFv2 機能を有効にします。 [OSPFv2 の有効化](#) のセクションを参照してください。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	router ospf process-id 例 : <pre>switch(config)# router ospf 64496 switch(config-router)#</pre>	設定された ID で新しい OSPFv2 プロセスを作成します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 3	bfd 例 : switch(config-router)# bfd	この OSPFv2 ピアの BFD を有効にします。デフォルト値は [無効 (Disabled)] です。
ステップ 4	interface int-if 例 : switch(config-router)# interface ethernet 1/2 switch (config-if)#	インターフェイス設定モードを開始します。?キーワードを使用して、サポートされるインターフェイスを表示します。
ステップ 5	(任意) [no] ip ospf bfd disable 例 : switch(config-if)# ip ospf bfd disable	OSPFv2 インターフェイスで BFD をディセーブルにします。デフォルト値はイネーブルです。
ステップ 6	(任意) show running-config ospf 例 : switch(config)# show running-config ospf	OSPFv2 実行設定を表示します。
ステップ 7	(任意) copy running-config startup-config 例 : switch# copy running-config startup-config	この設定変更を保存します。

スタティック ルートの BFD の設定

インターフェイスのスタティック ルータの BFD を設定できます。Virtual Routing and Forwarding (VRF) インスタンス内のスタティック ルートでの BFD を任意で設定できます。

始める前に

BFD 機能をイネーブルにします。BFD 機能のイネーブル化のセクションを参照してください。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : switch# configure terminal switch(config)#	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 2	(任意) vrf context <i>vrf-name</i> 例 : <pre>switch(config)# vrf context Red switch(config-vrf)#</pre>	VRF 設定モードを開始します。
ステップ 3	ip route <i>route interface { nh-address nh-prefix }</i> 例 : <pre>switch(config-vrf)# ip route 192.0.2.1 ethernet 2/1 192.0.2.4</pre>	スタティック ルートを作成します。? キーワードを使用して、サポートされているインターフェイスを表示します。
ステップ 4	ip route static bfd <i>interface {nh-address nh-prefix}</i> 例 : <pre>switch(config-vrf)# ip route static bfd ethernet 2/1 192.0.2.4</pre>	インターフェイスのすべてのスタティック ルートの BFD をイネーブルにします。? キーワードを使用して、サポートされるインターフェイスを表示します。
ステップ 5	(任意) show ip route static [vrf vrf-name] 例 : <pre>switch(config-vrf)# show ip route static vrf Red</pre>	スタティック ルートを表示します。
ステップ 6	(任意) copy running-config startup-config 例 : <pre>switch# copy running-config startup-config</pre>	この設定変更を保存します。

IPv6 の BFD を構成する

IPv6 のグローバルな BFD パラメータの構成

始める前に

BFD パラメータを構成する際に、IPv4 または IPv6 アドレス ファミリを指定できます。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : switch# configure terminal switch(config)#	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	bfd [ipv4 ipv6] interval [interval min_rx milliseconds multiplier interval-multiplier] 例 : switch(config)# bfd ipv6 interval 50 min_rx 50 multiplier 3	デバイスの指定されたアドレス ファミリで、すべての BFD セッションの BFD セッション パラメータを構成します。 Tx および Rx 間隔の範囲は 50 ～ 999 ミリ秒です。 乗数の範囲は 3 ～ 50 です。

IPv6 のインターフェイス BFD パラメータの構成

始める前に

デバイスで BFD を有効にする必要があります。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : switch# configure terminal switch(config)#	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	interface type slot/port 例 : switch(config)# interface ethernet 1/2 switch(config-if)#	インターフェイス設定モードを開始します。 ? キーワードを使用して、サポートされるインターフェイスを表示します。
ステップ 3	bfd [ipv4 ipv6] interval [interval min_rx milliseconds multiplier interval-multiplier] 例 : switch(config-if)# bfd ipv6 interval 50 min_rx 50 multiplier 3	デバイスの指定されたアドレス ファミリで、すべての BFD セッションの BFD セッション パラメータを構成します。 発信および受信間隔範囲は、50 ～ 999 ミリ秒です。 倍率は 3 ～ 50 倍です。

OSPFv3 での IPv6 用 BFD の設定

- BFD 機能をイネーブルにします。[BFD 機能のイネーブル化](#)のセクションを参照してください。
- OSPFv3 機能を有効にします。「[OSPFv3 の有効化](#)」のセクションを参照してください。
- BFD セッションパラメータを設定します。「[IPv6 のグローバル BFD パラメータの構成](#)」のセクションまたは「[IPv6 のインターフェイス BFD パラメータの構成](#)」のセクションを参照してください。
- OSPFv3 機能を有効にします。

始める前に

Open Shortest Path First Protocol (OSPFv3) で IPv6 の BFD を構成できます。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : switch# configure terminal switch(config)#	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	router ospfv3 process-id 例 : switch(config)# router ospfv3 201 switch(config-router)#	設定された ID で新しい OSPFv2 プロセスを作成します。
ステップ 3	bfd 例 : switch(config-router)# bfd	この OSPFv3 ピアの BFD を有効にします。デフォルト値は無効です。
ステップ 4	(任意) show running-config ospfv3 例 : switch(config-router)# show running-config ospfv3	OSPFv3 実行設定を表示します。
ステップ 5	(任意) copy running-config startup-config 例 : switch(config-router)# copy running-config startup-config	この設定変更を保存します。

IPv6 スタティックルートの BFD の構成

インターフェイスのすべての IPv6 スタティック ルートの BFD を構成できます。

始める前に

- スタティックルートの両端にあるデバイスで BFD が有効になっていることを確認します。
- BFD セッション パラメータを構成していることを確認します。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	(任意) vrf context vrf-name 例 : <pre>switch(config)# vrf context Red switch(config-vrf)#</pre>	VRF コンフィギュレーション モードを開始して、IPv6 スタティック ルート上で BFD を構成します。 トラッキングするルートの VRF を指定します。
ステップ 3	ipv6 route route interface { nh-address nh-prefix } 例 : <pre>switch(config-vrf)# ipv6 route 1::5/64 ethernet 1/3 2::2</pre>	IPv6 スタティック ルートを作成します。 • ルート引数に IPv6 アドレスを指定します。 • ? キーワードを使用して、サポートされるインターフェイスを表示します。 • このスタティック ルートのネクストホップ (nh) アドレスまたはプレフィックスを指定します。
ステップ 4	ipv6 route static bfd network-interface { nh-address nh-prefix } 例 : <pre>switch(config-vrf)# ipv6 route static bfd ethernet 1/3 2::2</pre>	インターフェイスのすべての IPv6 スタティック ルートの BFD を有効にします。 • ? キーワードを使用して、サポートされるインターフェイスを表示します。

	コマンドまたはアクション	目的
		このスタティック ルートのネクストホップ (nh) アドレスまたはプレフィックスを指定します。
ステップ 5	(任意) show bfd neighbors 例 : switch(config-vrf)# show bfd neighbors	BFD ネイバーに関する情報を表示します。
ステップ 6	(任意) show ipv6 route static 例 : switch(config-vrf)# show ipv6 route static vrf Red	スタティック ルートを表示します。
ステップ 7	(任意) copy running-config startup-config 例 : switch(config-vrf)# copy running-config startup-config	この設定変更を保存します。

IPv6 の BFD エコー モードの構成

エコー機能はデフォルトで有効になっています。IPv4、IPv6、またはすべてのアドレスファミリーに対して無効にできます。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : switch# configure terminal switch(config)#	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	interface type slot/port 例 : switch(config)# interface ethernet 1/2 switch(config-if)#	インターフェイス設定モードを開始します。 ? キーワードを使用して、サポートされるインターフェイスを表示します。
ステップ 3	[no] bfd [ipv4 ipv6] echo 例 : switch(config-if)# bfd ipv6 echo	エコー機能をイネーブルにします。デフォルトではイネーブルになっています。

	コマンドまたはアクション	目的
		指定されたアドレス ファミリのエコー機能を無効にするには、このコマンドの no 形式を使用します。

IPv6 の BFD セッション エコー間隔の構成

BFD セッションのエコー Rx 間隔を構成できます。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : switch# configure terminal switch(config)#	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	interface type slot/port 例 : switch(config)# interface ethernet 1/2 switch(config-if)#	インターフェイス設定モードを開始します。 ? キーワードを使用して、サポートされるインターフェイスを表示します。
ステップ 3	[no] bfd [ipv4 ipv6] echo-rx-interval interval 例 : switch(config-if)# bfd ipv6 echo-rx-interval 500	BFD セッションのエコー Rx 間隔を構成します。この間隔は、50 ～ 999 ミリ秒の範囲で設定できます。 エコー間隔をデフォルト値の 250 ミリ秒に戻すには、このコマンドの no 形式を使用します。

IPv6 の BFD スロー タイマーの構成

エコーモードはデフォルトでイネーブルになっています。アドレスファミリに対して **slow-timer** 値を構成し、エコー モードを無効または有効にできます。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : switch# configure terminal switch(config)#	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 2	interface type slot/port 例 : <pre>switch(config)# interface ethernet 1/2 switch(config-if)#</pre>	インターフェイス設定モードを開始します。 ? キーワードを使用して、サポートされるインターフェイスを表示します。
ステップ 3	bfd [ipv4 ipv6] slow-timer [interval] 例 : <pre>switch(config-if)# bfd ipv6 slow-timer 6000</pre>	指定されたアドレス ファミリのエコー機能で使用するスロー タイマー（ミリ秒単位）を構成します。

IPv6 の BFD エコー インターフェイスの構成

ループバック インターフェイスをすべてのエコー フレームの送信元アドレスとして構成するには、次の作業を実行します。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	interface loopback number 例 : <pre>switch(config)# interface loopback 50 switch(config-if)#</pre>	ループバック インターフェイスを作成し、インターフェイスコンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 3	ip address ip-address mask 例 : <pre>switch(config-if)# ip address 192.108.1.27 255.255.255.0</pre>	インターフェイスの IP アドレスを設定します。
ステップ 4	ipv6 address { ipv6-address/prefix-length prefix-name sub-bits / prefix-length } 例 : <pre>switch(config-if)# ipv6 address 2001:DB8:c18:1::3/64</pre>	IPv6 アドレスをすべてのエコー フレームの送信元アドレスとして構成します。

BFD 設定の確認

BFD 設定情報を表示するには、次の作業のいずれかを行います。

コマンド	目的
show running-config bfd	実行 BFD コンフィギュレーションを表示します。
show startup-config bfd	次のシステム起動時に適用される BFD コンフィギュレーションを表示します。

これらのコマンドからの出力のフィールドに関する詳細は、「[Cisco Nexus 3000 シリーズ NX-OS インターフェイス コマンド リファレンス](#)」を参照してください。

BFD のモニタリング

BFD を表示するには、次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
show bfd neighbors [ipv4 ipv6] [application name] [details]	BGP などのサポートされるアプリケーションの BFD に関する情報を表示します。
show bfd neighbors [ipv4 ipv6] [interface int-if] [details]	インターフェイスの BGP セッションに関する情報を表示します。
show bfd neighbors [ipv4 ipv6] [dest-ip ip-address] [src-ip ip-address] [details]	インターフェイス上の指定された BGP セッションに関する情報を表示します。
show bfd neighbors [ipv4 ipv6] [vrf vrf-name] [details]	VRF の BFD に関する情報を表示します。

これらのコマンドからの出力のフィールドに関する詳細は、『[Cisco Nexus 3000 シリーズ コマンド リファレンス](#)』を参照してください。



第 22 章

『Configuring HSRP』

この章では、Cisco NX-OS スイッチでホットスタンバイ ルータ プロトコル (HSRP) を設定する方法について説明します。

この章は、次の項で構成されています。

- [HSRP について \(501 ページ\)](#)
- [HSRP の前提条件 \(507 ページ\)](#)
- [HSRP の注意事項と制約事項 \(507 ページ\)](#)
- [HSRP のデフォルト設定 \(508 ページ\)](#)
- [『Configuring HSRP』 \(508 ページ\)](#)
- [HSRP 設定の確認 \(519 ページ\)](#)
- [HSRP の設定例 \(520 ページ\)](#)
- [その他の参考資料 \(521 ページ\)](#)

HSRP について

HSRP はファーストホップ冗長プロトコル (FHRP) であり、ファーストホップ IP ルータの透過的なフェールオーバーを可能にします。HSRP は、デフォルト ルータの IP アドレスを指定して設定された、イーサネット ネットワーク上の IP ホストにファーストホップ ルーティングの冗長性を提供します。ルータ グループでは HSRP を使用して、アクティブ ルータおよびスタンバイ ルータを選択します。ルータ グループでは、アクティブ ルータはパケットをルーティングするルータです。スタンバイ ルータは、アクティブ ルータで障害が発生した場合、または事前に設定された条件が満たされた場合に、引き継ぐルータです。

大部分のホストの実装では、ダイナミックなルータ ディスカバリ メカニズムをサポートしていませんが、デフォルトのルータを設定することはできます。すべてのホスト上でダイナミックなルータ ディスカバリ メカニズムを実行するのは、管理上のオーバーヘッド、処理上のオーバーヘッド、セキュリティ上の問題など、さまざまな理由で適切ではありません。HSRP は、そうしたホスト上にフェールオーバー サービスを提供します。

HSRP の概要

HSRP を使用する場合、HSRP の仮想 IP アドレスを（実際のルータの IP アドレスではなく）ホストのデフォルト ルータとして設定します。仮想 IP アドレスは、HSRP が動作するルータのグループで共有される IPv4 アドレスです。

ネットワーク セグメントに HSRP を設定する場合は、HSRP グループ用の仮想 MAC アドレスと仮想 IP アドレスを設定します。グループの各 HSRP 対応インターフェイス上で、同じ仮想アドレスを指定します。各インターフェイス上で、実アドレスとして機能する固有の IP アドレスおよび MAC アドレスも設定します。HSRP はこれらのインターフェイスのうちの 1 つをアクティブ ルータにするために選択します。アクティブ ルータは、グループの仮想 MAC アドレス宛てのパケットを受信してルーティングします。

指定されたアクティブ ルータで障害が発生すると、HSRP によって検出されます。その時点で、選択されたスタンバイ ルータが HSRP グループの MAC アドレスおよび IP アドレスの制御を行うことになります。HSRP はこの時点で、新しいスタンバイ ルータの選択も行います。

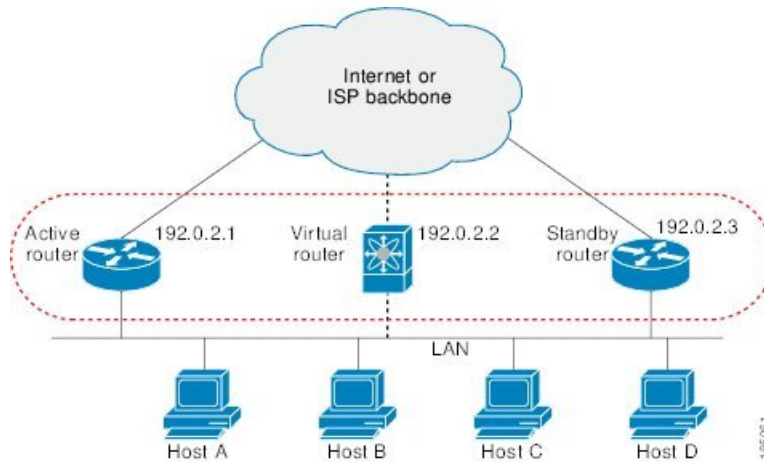
HSRP ではプライオリティメカニズムを使用して、デフォルトのアクティブ ルータにする HSRP 設定インターフェイスを決定します。アクティブ ルータとしてインターフェイスを設定するには、グループ内の他のすべての HSRP 設定インターフェイスよりも高いプライオリティを与えます。デフォルトのプライオリティは 100 なので、それよりもプライオリティが高いインターフェイスを 1 つ設定すると、そのインターフェイスがデフォルトのアクティブ ルータになります。

HSRP が動作するインターフェイスは、マルチキャストユーザデータグラムプロトコル (UDP) ベースの hello メッセージを送受信して、障害を検出し、アクティブおよびスタンバイ ルータを指定します。アクティブ ルータが設定された時間内に hello メッセージを送信できなかった場合は、最高のプライオリティのスタンバイ ルータがアクティブ ルータになります。アクティブ ルータとスタンバイ ルータ間のパケット フォワーディング機能の移動は、ネットワーク上のすべてのホストに対して完全に透過的です。

1 つのインターフェイス上で複数の HSRP グループを設定できます。

次の図に、HSRP 用に設定されたネットワークのセグメントを示します。仮想 MAC アドレスおよび仮想 IP アドレスの共有によって、2 つ以上のインターフェイスが単一の仮想ルータのように動作できます。

図 37: 2 台の対応ルータを含む HSRP トポロジ



仮想ルータは物理的には存在しませんが、相互にバックアップするように設定されたインターフェイスにとって、共通のデフォルトルータになります。アクティブルータの IP アドレスを使用して、LAN 上でホストを設定する必要はありません。代わりに、デフォルトルータとして仮想ルータの IP アドレス（仮想 IP アドレス）を使用して、ホストを設定します。アクティブルータが設定時間内に hello メッセージを送信できなかった場合は、スタンバイルータが引き継いで仮想アドレスに応答し、アクティブルータになってアクティブルータの役割を引き受けます。ホストの観点からは、仮想ルータは同じままです。



- (注) ルーテッドポートで受信した HSRP 仮想 IP アドレス宛のパケットは、ローカルルータ上で終端します。そのルータがアクティブ HSRP ルータであるのかスタンバイ HSRP ルータであるのかは関係ありません。これには ping トラフィックと Telnet トラフィックが含まれます。レイヤ 2 (VLAN) インターフェイスで受信した HSRP 仮想 IP アドレス宛のパケットは、アクティブルータ上で終端します。

HSRP for IPv4

HSRP ルータは、HSRP hello パケットを交換することによって相互に通信します。これらのパケットは、UDP ポート 1985 上の宛先 IP マルチキャストアドレス 224.0.0.2（すべてのルータと通信するための予約済みマルチキャストアドレス）に送信されます。アクティブルータは設定 IP アドレスおよび HSRP 仮想 MAC アドレスから hello パケットを得るのに対して、スタンバイルータは設定 IP アドレスおよびインターフェイス MAC アドレスから hello パケットを取得します。インターフェイス MAC アドレスは、バーンドインアドレス (BIA) のこともあれば、そうではないこともあります。BIA は、MAC アドレスの下位 6 バイトで、ネットワークカード (NIC) の製造元によって割り当てられます。

ホストはデフォルトルータが HSRP 仮想 IP アドレスとして設定されているので、HSRP 仮想 IP アドレスに関連付けられた MAC アドレスと通信する必要があります。この MAC アドレスは、仮想 MAC アドレス 0000.0C07.ACxy です。この場合、xy はそれぞれのインターフェイスに基づく、16 進数の HSRP グループ番号です。たとえば、HSRP グループ 1 は 0000.0C07.AC01

という HSRP 仮想 MAC アドレスを使用します。隣接 LAN セグメント上のホストは、標準のアドレス解決プロトコル（ARP）プロセスを使用して、関連付けられた MAC アドレスを解決します。

HSRP バージョン 2 では新しい IP マルチキャスト アドレス 224.0.0.102 を使用して hello パケットを送信します。バージョン 1 では、このマルチキャストアドレスが 224.0.0.2 です。バージョン 2 では、拡張グループ番号範囲 0 ～ 4095 を使用できます。また、新しい MAC アドレス範囲 0000.0C9F.F000 ～ 0000.0C9F.FFFF を使用します。

HSRP のバージョン

Cisco NX-OS は、デフォルトでは HSRP バージョン 1 をサポートしています。HSRP バージョン 2 を使用するようにインターフェイスを設定できます。

HSRP バージョン 2 では、HSRP バージョン 1 から次のように拡張されています。

- グループ番号の範囲が拡大されました。HSRP バージョン 1 がサポートするグループ番号は 0 ～ 255 です。HSRP バージョン 2 がサポートするグループ番号は 0 ～ 4095 です。
- IPv4 では IPv4 マルチキャスト アドレス 224.0.0.102 を使用して hello パケットを送信します。HSRP バージョン 1 では、このマルチキャストアドレスが 224.0.0.2 です。
- MAC アドレス範囲 0000.0C9F.F000 ～ 0000.0C9F.FFFF を使用します。HSRP バージョン 1 で使用する MAC アドレス範囲は、0000.0C07.AC00 ～ 0000.0C07.ACFF です。
- MD 5 認証のサポートが追加されました。

HSRP のバージョンを変更すると、Cisco NX-OS がグループを再初期化します。新しい仮想 MAC アドレスがグループに与えられるからです。

HSRP バージョン 2 では HSRP バージョン 1 とは異なるパケット フォーマットを使用します。パケットフォーマットは Type-Length-Value（TLV）です。HSRP バージョン 1 ルータは、HSRP バージョン 2 パケットを受信しても無視します。

HSRP 認証

HSRP のメッセージダイジェスト 5（MD5）アルゴリズム認証は、HSRP スプーフィングソフトウェアから保護し、業界標準の MD5 アルゴリズムを使用して信頼性とセキュリティを向上させています。HSRP は IPv4 アドレスを認証 TLV に含めます。

HSRP メッセージ

HSRP が設定されたルータは、次の 3 種類のマルチキャスト メッセージを交換できます。

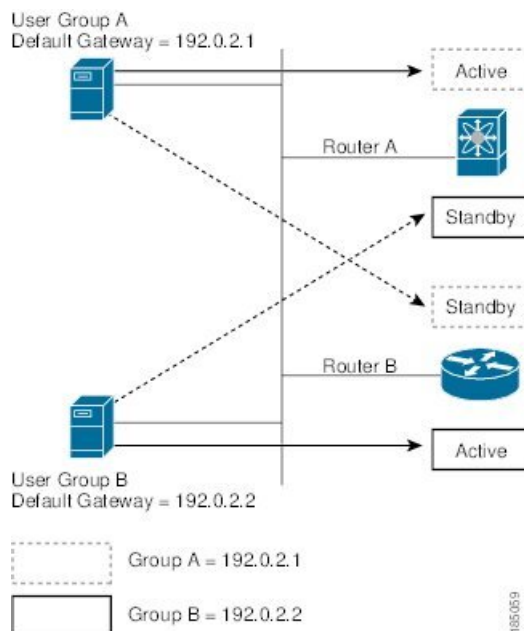
- hello : hello メッセージは、ルータの HSRP プライオリティおよびステート情報を他の HSRP ルータに伝えます。
- coup : スタンバイ ルータがアクティブ ルータの機能を引き受けるときに、coup メッセージを送信します。

- **resign** : アクティブ ルータは、アクティブ ルータとして機能する必要がなくなったときに、このメッセージを送信します。

HSRP ロードシェアリング

HSRP では、1 つのインターフェイスに複数のグループを設定できます。オーバーラップする 2 つの IPv4 HSRP グループを構成すると、期待されるデフォルト ルータの冗長性を HSRP から提供しながら、接続ホストからのトラフィックのロードシェアリングが可能です。以下の図では、ロード共有 HSRP IPv4 構成の例を示します。

図 38 : HSRP ロードシェアリング



HSRP ロードシェアリングの図には、2 台のルータ（A および B）と 2 つの HSRP グループが示されています。ルータ A はグループ A のアクティブ ルータですが、グループ B のスタンバイ ルータです。同様に、ルータ B はグループ B のアクティブ ルータであり、グループ A のスタンバイ ルータです。両方のルータがアクティブのままの場合、HSRP は両方のルータにまたがるホスト。どちらかのルータで障害が発生すると、残りのルータが引き続き、両方のホストのトラフィックを処理します。

オブジェクトトラッキングおよび HSRP

オブジェクトトラッキングを使用すると、別のインターフェイスの動作状態に基づいて、HSRP インターフェイスのプライオリティを変更できます。オブジェクトトラッキングによって、メイン ネットワークへのインターフェイスで障害が発生した場合に、スタンバイ ルータにルーティングできます。

トラッキング可能なオブジェクトは、インターフェイスのラインプロトコル ステートまたは IP ルートの到達可能性の 2 種類です。指定したオブジェクトがダウンすると、設定された値だけ Cisco NX-OS が HSRP プライオリティを引き下げます。詳細は、「[HSRP オブジェクト トラッキングの設定 \(514 ページ\)](#)」の項を参照してください。

仮想化のサポート

HSRP は仮想ルーティングおよび転送 (VRF) インスタンスをサポートします。デフォルトでは、特に別の VRF を設定しない限り、Cisco NX-OS はユーザーをデフォルトの VRF に配置します。

インターフェイスの VRF メンバーシップを変更すると、Cisco NX-OS によって HSRP を含め、すべてのレイヤ 3 構成が削除されます。

詳細については、「[レイヤ 3 仮想化の設定](#)」を参照してください。

HSRP サブネット VIP

インターフェイス IP アドレスとは異なるサブネットに HSRP サブネット仮想 IP (VIP) アドレスを構成できます。

この機能を使用すると、パブリック IP アドレスとして VIP を使用し、プライベート IP アドレスとしてインターフェイス IP を使用して、パブリック IPv4 アドレスを節約できます。IPv6 アドレスには、より大きな IPv6 アドレス プールが使用可能であり、ルーティング可能な IPv6 アドレスを SVI で設定して通常の HSRP で使用できるため、IPv6 アドレスには HSRP サブネット VIP は必要ありません。

また、この機能により、vPC ピアへの定期的な ARP 同期が可能になり、VIP サブネット内のホストに対して HSRP サブネット VIP が設定されている場合に、ARP が VIP をソースとして使用できるようになります。



-
- (注) HSRP サブネット VIP は、仮想ポート チャネル (vPC) トポロジで構成する必要があります。HSRP VIP 機能は、vPC トポロジを使用する HSRP でのみ動作します。
-



-
- (注) サブネット VIP 構成では、VIP アドレスはインターフェイス IP サブネットとは異なるサブネットにある必要があります。サブネット VIP 構成がない場合、VIP アドレスはインターフェイス IP サブネットの同じサブネットにある必要があります。
-

次に、VIP アドレスがインターフェイス IP サブネットの同じサブネットに構成されていないサブネット VIP アドレス構成の例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# feature hsrp
switch(config)# feature interface-vlan
switch(config)# interface vlan 2
```

```
switch(config-if)# ip address 192.0.2.1/24
switch(config-if)# hsrp 2
switch(config-if-hsrp)# ip 209.165.201.1/24
```

次に、VIP アドレスの不一致の例を示します。ここで、VIP アドレスは、インターフェイス IP サブネットの同じサブネット内にはありません。

```
switch# configure terminal
switch(config)# feature hsrp
switch(config)# feature interface-vlan
switch(config)# interface vlan 2
switch(config-if)# ip address 192.0.2.1/24
switch(config-if)# hsrp 2
switch(config-if-hsrp)# ip 209.165.201.1

!ERROR: Invalid IP address(Mismatch with IP subnet)!
```

次に、VIP アドレスの不一致の例を示します。ここで、サブネット VIP アドレスは、インターフェイス IP サブネットの同じサブネット内の VIP アドレスとともに構成されます。

```
switch# configure terminal
switch(config)# feature hsrp
switch(config)# feature interface-vlan
switch(config)# interface vlan 2
switch(config-if)# ip address 192.0.2.1/24
switch(config-if)# hsrp 2
switch(config-if-hsrp)# ip 192.0.2.10/24

!ERROR: Invalid IP address(Mismatch with IP subnet)!
```

HSRP の前提条件

HSRP の前提条件は、次のとおりです。

- HSRP グループを設定してイネーブルにするには、その前に HSRP 機能をスイッチでイネーブルにする必要があります。

HSRP の注意事項と制約事項

HSRP 設定時の注意事項および制約事項は、次のとおりです。

- 最小 hello タイマー値は 250 ミリ秒です。
- 最小ホールド タイマー値は 750 ミリ秒です。
- HSRP を設定するインターフェイスに IP アドレスを設定し、そのインターフェイスをイネーブルにしてからでなければ、HSRP はアクティブになりません。
- IPv4 では、仮想 IP アドレスは、インターフェイス IP アドレスと同じサブネットになければなりません。
- 同一インターフェイス上では、複数のファーストホップ冗長プロトコルを設定しないことを推奨します。

- HSRP バージョン 2 は HSRP バージョン 1 と相互運用できません。どちらのバージョンも相互に排他的なので、インターフェイスはバージョン 1 およびバージョン 2 の両方を運用できません。しかし、同一ルータの異なる物理インターフェイス上であれば、異なるバージョンを実行できます。
- バージョン 1 で認められるグループ番号範囲（0 ～ 255）を超えるグループを設定している場合は、バージョン 2 からバージョン 1 への変更はできません。
- Cisco NX-OS では、VDC、インターフェイス VRF メンバーシップ、ポート チャネル メンバーシップを変更したり、ポート モードをレイヤ 2 に変更した場合は、インターフェイス上のすべてのレイヤ 3 設定が削除されます。
- VXLAN 経由の HSRP は Cisco Nexus 3132Q-V、31108PC-V、および 31108TC-V スイッチでサポートされます。

HSRP のデフォルト設定

次の表に、HSRP パラメータのデフォルト設定値を示します。

表 31: デフォルトの HSRP パラメータ

パラメータ	デフォルト
HSRP	ディセーブル
認証	バージョン 1 の場合はテキストとしてイネーブル、パスワードは cisco
HSRP バージョン	バージョン 1
プリエンプション	無効
プライオリティ	100
仮想 MAC アドレス	HSRP グループ番号から生成

『Configuring HSRP』



(注) Cisco IOS の CLI に慣れている場合、この機能に対応する Cisco NX-OS コマンドは通常使用する Cisco IOS コマンドと異なる場合がありますので注意してください。

HSRP 機能のイネーブル化

HSRP グループを設定してイネーブルにするには、その前に HSRP 機能をグローバルでイネーブルにする必要があります。

手順の詳細

HSRP 機能をイネーブルにするには、グローバルコンフィギュレーションモードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
feature hsrp 例： switch(config)# feature hsrp	HSRP をイネーブルにします。

HSRP 機能をディセーブルにして、関連付けられている設定をすべて削除するには、グローバルコンフィギュレーションモードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
no feature hsrp 例： switch(config)# no feature hsrp	HSRP をディセーブルにします。

HSRP バージョン設定

HSRP のバージョンを設定できます。既存グループのバージョンを変更すると、仮想 MAC アドレスが変更されるので、Cisco NX-OS がそれらのグループの HSRP を再初期化します。HSRP のバージョンは、インターフェイス上のすべてのグループに適用されます。

HSRP のバージョンを設定するには、インターフェイスコンフィギュレーションモードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
hsrp version { 1 2 } 例： switch(config-if)# hsrp version 2	HSRP バージョンを設定します。デフォルトはバージョン 1 です。

IPv4 の HSRP グループの設定

IPv4 インターフェイスに HSRP グループを設定し、その HSRP グループに仮想 IP アドレスと仮想 MAC アドレスを設定できます。

始める前に

HSRP機能が有効になっていることを確認します（[HSRP機能の有効化](#)のセクションを参照）。

グループのいずれかのメンバインターフェイス上で仮想IPアドレスを設定すると、Cisco NX-OS によって HSRP がイネーブルになります。HSRP グループをイネーブルにする前に、認証、タイマー、プライオリティなどの HSRP 属性を設定する必要があります。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例： switch# configure terminal switch(config)#	コンフィギュレーションモードに入ります。
ステップ 2	interface type number 例： switch(config)# interface ethernet 1/2 switch(config-if)#	インターフェイス設定モードを開始します。
ステップ 3	no switchport 例： switch(config-if)# no switchport	そのインターフェイスを、レイヤ 3 ルーテッドインターフェイスとして設定します。
ステップ 4	ip address ip-address/length 例： switch(config-if)# ip address 192.0.2.2/8	インターフェイスの IPv4 アドレスを設定します。
ステップ 5	hsrp group-number [ipv4] 例： switch(config-if)# hsrp 2 switch(config-if-hsrp)	HSRP グループを作成し、HSRP コンフィギュレーションモードを開始します。HSRP バージョン 1 で指定できる範囲は 0 ～ 255 です。HSRP バージョン 2 で指定できる範囲は 0 ～ 4095 です。デフォルト値は 0 です
ステップ 6	ip [ip-address [secondary]] 例： switch(config-if-hsrp)# ip 192.0.2.1	HSRP グループの仮想 IP アドレスを設定し、グループを有効にします。このアドレスは、インターフェイスの IPv4 アドレスと同じサブネットになければなりません。
ステップ 7	exit 例： switch(config-if-hsrp)# exit	HSRP設定モードを終了します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 8	no shutdown 例 : <pre>switch(config-if)# no shutdown</pre>	インターフェイスを有効にします。
ステップ 9	(任意) show hsrp [group group-number] [ipv4] 例 : <pre>switch(config-if)# show hsrp group 2</pre>	HSRP 情報を表示します。
ステップ 10	(任意) copy running-config startup-config 例 : <pre>switch(config-if)# copy running-config startup-config</pre>	この設定変更を保存します。

例



- (注) 設定完了後にインターフェイスを有効にするには、**no shutdown** コマンドを使用する必要があります。

次に Ethernet 1/2 上で HSRP グループを設定する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# interface ethernet 1/2
switch(config-if)# no switchport
switch(config-if)# ip 192.0.2.2/8
switch(config-if)# hsrp 2
switch(config-if-hsrp)# ip 192.0.2.1
switch(config-if-hsrp)# exit
switch(config-if)# no shutdown
switch(config-if)# copy running-config startup-config
```

HSRP 仮想 MAC アドレスの設定

設定されているグループ番号から HSRP が導き出したデフォルトの仮想 MAC アドレスを変更できます。

HSRP グループの仮想 MAC アドレスを手動で設定するには、HSRP コンフィギュレーションモードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
mac-address string 例： <pre>switch(config-if-hsrp)# mac-address 5000.1000.1060</pre>	HSRP グループの仮想 MAC アドレスを設定します。ストリングには標準の MAC アドレス フォーマット (xxxx.xxxx.xxxx) を使用します。

仮想 MAC アドレスに BIA (バーンドイン MAC アドレス) を使用するように HSRP を設定するには、インターフェイス コンフィギュレーション モードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
hsrp use-bia [scope interface] 例： <pre>switch(config-if)# hsrp use-bia</pre>	HSRP 仮想 MAC アドレスにインターフェイスの BIA を使用するように、HSRP を設定します。 scope interface キーワードを使用すると、このインターフェイス上のすべてのグループに焼き込み MAC アドレスを使用するように HSRP を設定できます。

HSRP の認証

クリアテキストまたは MD5 ダイジェスト認証を使用してプロトコルを認証するように、HSRP を設定できます。MD5 認証ではキー チェーンが使用されます。

始める前に

HSRP 機能が有効になっていることを確認します ([HSRP 機能の有効化](#)のセクションを参照)。

HSRP グループのすべてのメンバに同じ認証およびキーを設定する必要があります。

MD5 認証を使用する場合は、キーチェーンが作成してあることを確認します。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例： <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	コンフィギュレーション モードに入ります。
ステップ 2	interface interface type slot/port 例： <pre>switch(config)# interface ethernet 1/2 switch(config-if)#</pre>	インターフェイス構成モードを開始します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 3	no switchport 例 : <pre>switch(config-if)# no switchport</pre>	そのインターフェイスを、レイヤ3ルーテッドインターフェイスとして設定します。
ステップ 4	hsrp group-number [ipv4] 例 : <pre>switch(config-if)# hsrp 2 switch(config-if-hsrp)</pre>	HSRP グループを作成し、HSRP 設定モードを開始します。
ステップ 5	オプション	説明
	コマンド	目的
	authentication text string 例 : <pre>switch(config-if-hsrp)# authentication text mypassword</pre>	このインターフェイス上で、HSRP のクリアテキスト認証を設定します。
	authentication md5 { key-chain key-chain key-string { 0 7 } text [timeout seconds] } 例 : <pre>switch(config-if-hsrp)# authentication md5 key-chain hsrp-keys</pre>	このインターフェイス上で、HSRP の MD5 認証を設定します。 キーチェーンまたはキーチェーンを使用できます。キーチェーンを使用する場合は、HSRP が新しいキーを受け付けるように、任意でタイムアウトを設定できます。指定できる範囲は 0 ～ 32767 秒です。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 6	(任意) show hsrp [group group-number] 例 : <pre>switch(config-if-hsrp)# show hsrp group 2</pre>	HSRP 情報を表示します。
ステップ 7	(任意) copy running-config startup-config 例 : <pre>switch(config-if-hsrp)# copy running-config startup-config</pre>	この設定変更を保存します。

例

次に、キーチェーン作成後に HSRP の MD5 認証を Ethernet 1/2 上で設定する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# key chain hsrp-keys
switch(config-keychain)# key 0
switch(config-keychain-key)# key-string 7 zqdest
switch(config-keychain-key) accept-lifetime 00:00:00 Jun 01 2008 23:59:59 Sep 12 2008
switch(config-keychain-key) send-lifetime 00:00:00 Jun 01 2008 23:59:59 Aug 12 2008
switch(config-keychain-key) key 1
switch(config-keychain-key) key-string 7 uaeqdyito
switch(config-keychain-key) accept-lifetime 00:00:00 Aug 12 2008 23:59:59 Dec 12 2008
switch(config-keychain-key) send-lifetime 00:00:00 Sep 12 2008 23:59:59 Nov 12 2008
switch(config-keychain-key)# interface ethernet 1/2
switch(config-if)# no switchport
switch(config-if)# hsrp 2
switch(config-if-hsrp)# authenticate md5 key-chain hsrp-keys
switch(config-if-hsrp)# copy running-config startup-config
```

HSRP オブジェクト トラッキングの設定

他のインターフェイスまたはルータの可用性に基づいて、プライオリティが調整されるように HSRP グループを設定できます。スイッチがオブジェクトトラッキング対応として設定されていて、なおかつトラッキング対象のオブジェクトがダウンした場合、スイッチのプライオリティはダイナミックに変更されます。トラッキングプロセスはトラッキング対象オブジェクトに定期的にポーリングを実行し、値の変化をすべて記録します。値が変化すると、HSRP がプライオリティを再計算します。HSRP インターフェイスにプリエンプションを設定している場合は、プライオリティの高い HSRP インターフェイスがアクティブ ルータになります。

HSRP では、トラッキング対象のオブジェクトおよびトラック リストをサポートします。トラック リストの詳細については、「[オブジェクトトラッキングの設定 \(22 ページ\)](#)」を参照してください。

始める前に

HSRP機能が有効になっていることを確認します（[HSRP機能の有効化](#)のセクションを参照）。

手順

	コマンドまたはアクション		目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>		コンフィギュレーションモードに入ります。
ステップ 2	オプション	説明	
	コマンド	目的	
	track object-id interface <i>interface-type number</i> { ip routing line-protocol } 例 : <pre>switch(config)# track 1 interface ethernet 2/2 line-protocol switch(config-track#</pre>	この HSRP インターフェイスが追跡するインターフェイスを設定します。インターフェイスのステート変化は次のように、この HSRP のプライオリティを左右します。 • HSRP コンフィギュレーションモードで、track コマンドで使用するインターフェイスおよび対応するオブジェクト番号を設定します。 • line-protocol キーワードを指定すると、インターフェイス	

	コマンドまたはアクション		目的
	オプション	説明	
		スがアップ 状態かどう かが追跡さ れます。ip キーワード を指定する と、イン ターフェイ ス上で IP ルーティン グがイネー ブルであ り、IP ア ドレスが設 定されてい るかどうか もチェック されます。	
	track object-id ip route ip-prefix/length reachability 例 : <pre>switch(config)# track 2 ip route 192.0.2.0/8 reachability switch(config-track#</pre>	ルートのトラッ キング対象オブ ジェクトを作成 し、トラッキン グ コンフィ ギュレーション モードを開始し ます。object-id の範囲は 1 ~ 500 です。	
ステップ 3	interface interface-type slot/port 例 : <pre>switch(config)# interface ethernet 1/2 switch(config-if)#</pre>		インターフェイス設定モードを開始します。
ステップ 4	no switchport 例 : <pre>switch(config-if)# no switchport</pre>		そのインターフェイスを、レイヤ 3 ルーテッドインターフェイスとして設定します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 5	hsrp group-number [ipv4] 例 : <pre>switch(config-if)# hsrp 2 switch(config-if-hsrp)#</pre>	HSRP グループを作成し、HSRP コンフィギュレーションモードを開始します。
ステップ 6	priority [value] 例 : <pre>switch(config-if-hsrp)# priority 254</pre>	HSRP グループでのアクティブ ルータ 選択に使用するプライオリティ レベルを設定します。有効な範囲は 0 ～ 255 です。デフォルトは 100 です。
ステップ 7	track object-number [decrement value] 例 : <pre>switch(config-if-hsrp)# track 1 decrement 20</pre>	HSRP インターフェイスの重み付けを左右する、トラッキング対象のオブジェクトを指定します。 <i>value</i> 引数には、トラッキング対象のオブジェクトで障害が発生した場合に、HSRP インターフェイスのプライオリティから差し引く値を指定します。範囲は 1 ～ 255 です。デフォルトは 10 です。
ステップ 8	preempt [delay [minimum seconds] [reload seconds] [sync seconds]] 例 : <pre>switch(config-if-hsrp)# preempt delay minimum 60</pre>	現在のアクティブルータよりプライオリティが高い場合に、HSRP グループのアクティブルータとして引き継ぐようにルータを設定します。このコマンドは、デフォルトでディセーブルになっています。指定できる範囲は 0 ～ 3600 秒です。
ステップ 9	(任意) show hsrp interface interface-type number 例 : <pre>switch(config-if-hsrp)# show hsrp interface ethernet 1/2</pre>	インターフェイスの HSRP 情報を表示します。
ステップ 10	(任意) copy running-config startup-config 例 : <pre>switch(config-if)# copy running-config startup-config</pre>	この設定変更を保存します。

例

次に、Ethernet 1/2 上で HSRP オブジェクト トラッキングを設定する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# track 1 interface ethernet 2/2 line-protocol
switch(config)# interface ethernet 1/2
switch(config-if)# no switchport
switch(config-if)# hsrp 2
switch(config-if-hsrp)# track 1 decrement 20
switch(config-if-hsrp)# copy running-config startup-config
```

HSRP プライオリティの設定

インターフェイス上で HSRP プライオリティを設定できます。HSRP では、プライオリティを使用して、アクティブ ルータとして動作する HSRP グループ メンバを決定します。

HSRP プライオリティを設定するには、インターフェイス コンフィギュレーション モードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
priority level [forwarding-threshold lower lower-value upper upper-value] 例 : switch(config-if-hsrp)# priority 60 forwarding-threshold lower 40 upper 50	HSRP グループでのアクティブ ルータ選択に使用するプライオリティ レベルを設定します。 level の範囲は 0 ～ 255 です。デフォルトは 100 です。

HSRP のカスタマイズ

必要に応じて、HSRP の動作をカスタマイズできます。仮想 IP アドレスを設定することによって、HSRP グループをイネーブルにすると、そのグループがただちに動作可能になることに注意してください。HSRP をカスタマイズする前に HSRP グループをイネーブルにした場合、機能のカスタマイズが完了しないうちに、ルータがグループの制御を引き継いでアクティブ ルータになる可能性があります。HSRP のカスタマイズを予定している場合は、HSRP グループをイネーブルにする前に行ってください。

HSRP をカスタマイズするには、HSRP コンフィギュレーション モードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
name string 例 : switch(config-if-hsrp)# name HSRP-1	HSRP グループの IP 冗長名を指定します。 string は 1 ～ 255 文字です。デフォルト スtring のフォーマットは hsrp-interface-short-name-group-id です。 たとえば、 hsrp-Eth2/1-1

コマンド	目的
preempt [delay [minimum seconds] [reload seconds] [sync seconds]] のようになります。 例 : <pre>switch(config-if-hsrp)# preempt delay minimum 60</pre>	現在のアクティブ ルータよりもプライオリティが高い場合に、HSRP グループのアクティブ ルータとして引き継ぐようにルータを設定します。このコマンドは、デフォルトでディセーブルになっています。指定できる範囲は 0 ～ 3600 秒です。
timers [msec] hellotime [msec] holdtime 例 : <pre>switch(config-if-hsrp)# timers 5 18</pre>	次のように、この HSRP メンバーの hello タイムおよびホールド タイムを設定します。 オプションの <i>msec</i> キーワードは、引数がデフォルトの秒単位ではなく、ミリ秒単位で表されることを指定します。タイマーの範囲（ミリ秒）は次のとおりです。 • hellotime : hello パケットを送信してから、次の hello パケットを送信するまでのインターバル。指定できる範囲は 255 ～ 999 ミリ秒です。 • holdtime : hello パケットの情報が無効と見なされるまでのインターバル。指定できる範囲は 750 ～ 3000 ミリ秒です。

HSRP をカスタマイズするには、インターフェイス コンフィギュレーション モードで次のコマンドを使用します。

コマンドまたはアクション	目的
hsrp delay minimum seconds 例 : <pre>switch(config-if)# hsrp delay minimum 30</pre>	グループがイネーブルになってから、グループに参加するまでに HSRP が待機する最小時間を指定します。指定できる範囲は 0 ～ 10000 秒です。デフォルトは 0 です。
hsrp delay reload seconds 例 : <pre>switch(config-if)# hsrp delay reload 30</pre>	リロード後、グループに参加するまでに HSRP が待機する最小時間を指定します。指定できる範囲は 0 ～ 10000 秒です。デフォルトは 0 です。

HSRP 設定の確認

HSRP の設定情報を表示するには、次のいずれかの作業を行います。

コマンド	目的
show hsrp [group <i>group-number</i>]	すべてのグループまたは特定のグループの HSRP ステータスを表示します。
show hsrp delay [interface <i>interface-type slot/port</i>]	すべてのインターフェイスまたは特定のインターフェイスの HSRP 遅延値を表示します。
show hsrp [interface <i>interface-type slot/port</i>]	インターフェイスの HSRP ステータスを表示します。
show hsrp [group <i>group-number</i>] [interface <i>interface-type slot/port</i>] [active] [all] [init] [learn] [listen] [speak] [standby]	ステートが active、init、listen、または standby の仮想フォワーダについて、グループまたはインターフェイスの HSRP ステータスを表示します。disabled を含めてすべてのステートを表示する場合は、 all キーワードを使用します。
show hsrp [group <i>group-number</i>] [interface <i>interface-type slot/port</i>] active] [all] [init] [learn] [listen] [speak] [standby] brief	ステートが active、init、listen、または standby の仮想フォワーダについて、グループまたはインターフェイスの HSRP ステータスの要約を表示します。disabled を含めてすべてのステートを表示する場合は、 all キーワードを使用します。

HSRP の設定例

次に、MD5 認証およびインターフェイス トラッキングを指定して、インターフェイス上で HSRP をイネーブルにする例を示します。

```
key chain hsrp-keys
key 0
key-string 7 zqdest
accept-lifetime 00:00:00 Jun 01 2008 23:59:59 Sep 12 2008
send-lifetime 00:00:00 Jun 01 2008 23:59:59 Aug 12 2008
key 1
key-string 7 uaeqdyito
accept-lifetime 00:00:00 Aug 12 2008 23:59:59 Dec 12 2008
send-lifetime 00:00:00 Sep 12 2008 23:59:59 Nov 12 2008
feature hsrp
track 2 interface ethernet 2/2 ip
interface ethernet 1/2
no switchport
ip address 192.0.2.2/8
hsrp 1
authenticate md5 key-chain hsrp-keys
priority 90
track 2 decrement 20
ip-address 192.0.2.10
no shutdown
```

その他の参考資料

HSRP の実装に関する詳細は、次の各項を参照してください。

関連資料

関連項目	マニュアル タイトル
VRRP の設定	VRRP の設定 （523 ページ）
HSRP CLI コマンド	『Cisco Nexus 3000 Series Command Reference』

MIB

MIB	MIB のリンク
CISCO-HSRP-MIB	MIB を検索してダウンロードするには、次の MIB ロケータ に移動します。



第 23 章

VRRP の設定

この章では、Cisco NX-OS スイッチ上で仮想ルータ冗長プロトコル（VRRP）を設定する方法について説明します。

この章は、次の項で構成されています。

- [VRRP の概要（523 ページ）](#)
- [VRRP の注意事項と制約事項（528 ページ）](#)
- [VRRP のデフォルト設定（529 ページ）](#)
- [VRRP の設定（530 ページ）](#)
- [VRRPv3 の設定（539 ページ）](#)
- [VRRPv2 設定の確認（544 ページ）](#)
- [VRRPv3 設定の確認（545 ページ）](#)
- [VRRP 統計情報の表示（546 ページ）](#)
- [VRRPv2 の設定例（546 ページ）](#)
- [VRRPv3 の構成例（547 ページ）](#)
- [その他の参考資料（548 ページ）](#)

VRRP の概要

VRRP を使用すると、仮想 IP アドレスを共有するルータ グループを設定することによって、ファーストホップ IP ルータで透過的フェールオーバーが可能になります。VRRP はそのグループのプライマリ ルータを選択して、仮想 IP アドレスへのすべてのパケットが処理できるようにします。残りのルータはスタンバイになり、プライマリ ルータで障害が発生した場合に処理を引き継ぎます。

VRRP の動作

LAN クライアントは、ダイナミック プロセスまたはスタティック設定を使用することによって、特定のリモート宛先へのファーストホップにするルータを決定できます。ダイナミック ルータ ディスカバリの例を示します。

- プロキシ ARP：クライアントはアドレス解決プロトコル（ARP）を使用して到達すべき宛先を取得します。ルータは独自の MAC アドレスで ARP 要求に応答します。
- ルーティング プロトコル：クライアントはダイナミック ルーティング プロトコルのアップデートを（ルーティング情報プロトコル（RIP）などから）受信し、独自のルーティング テーブルを形成します。
- ICMP Router Discovery Protocol（IRDP）クライアント：クライアントはインターネット制御メッセージプロトコル（ICMP）ルータ ディスカバリ クライアントを実行します。

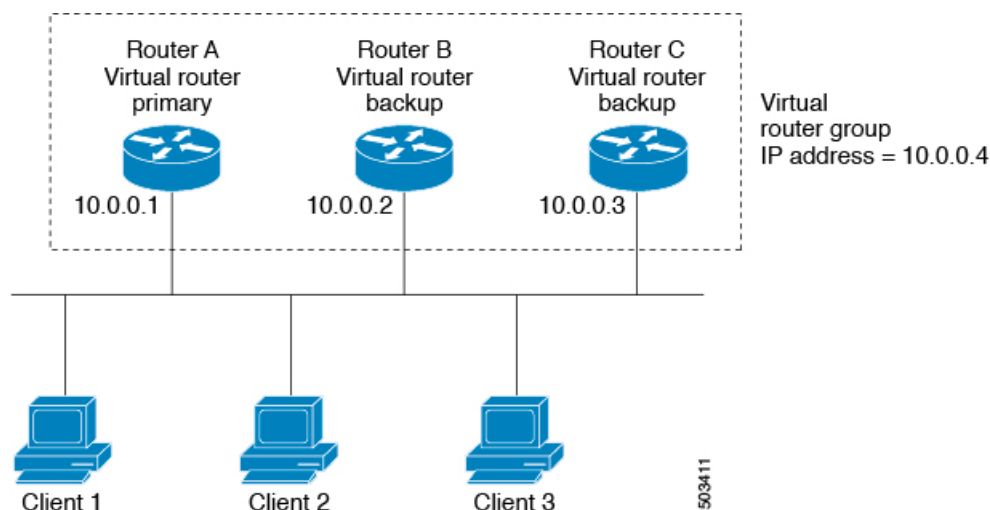
ダイナミック ディスカバリ プロトコルのデメリットは、LAN クライアントにある程度、設定および処理のオーバーヘッドが発生することです。また、ルータが機能を停止したときに、別のルータへの切り替え処理が遅くなる可能性があります。

ダイナミック ディスカバリ プロトコルの代わりに、クライアント上でデフォルト ルータをスタティックに設定することもできます。このアプローチでは、クライアントの構成および処理が簡素化されますが、シングルポイント障害が生じます。デフォルトゲートウェイで障害が発生した場合、LAN クライアントの通信はローカル IP ネットワーク セグメントに限定され、ネットワークの他の部分から切り離されます。

VRRP では、ルータ グループ（VRRP グループ）が単一の仮想 IP アドレスを共有できるようにすることによって、スタティック設定に伴う問題を解決できます。さらに、デフォルトゲートウェイとして仮想 IP アドレスを指定して、LAN クライアントを設定できます。

次の図は、基本的な VLAN トポロジです。この例では、ルータ A、B、および C が VRRP グループを形成します。グループの IP アドレスは、ルータ A のインターフェイス インターフェイスに設定されているアドレス（10.0.0.1）と同じです。

図 39: 基本的な VRRP トポロジ



仮想 IP アドレスにルータ A の物理イーサネット インターフェイスの IP アドレスが使用されるので、ルータ A がプライマリ（「IP アドレス オーナー」）になります。ルータ A はプライマリとして、VRRP グループ ルータの仮想 IP アドレスを所有し、送信されたパケットをこの IP

アドレスに転送します。クライアント 1～3 には、デフォルト ゲートウェイの IP アドレス 10.0.0.1 が設定されています。

ルータ B および C の役割はバックアップです。プライマリで障害が発生すると、プライオリティが最も高いバックアップルータがプライマリになり、仮想 IP アドレスを引き継いで、LAN ホストへのサービスが途切れないようにします。ルータ A が回復すると、これが再びプライマリ ルータになります。詳細については、「VRRP ルータのプライオリティおよびプリエンブション」のセクションを参照してください。



- (注) ルーテッドポートで受信した VRRP 仮想 IP アドレス宛のパケットは、ローカルルータ上で終了します。そのルータがプライマリ VRRP ルータであるのかバックアップ VRRP ルータであるのかは関係ありません。これには ping トラフィックと Telnet トラフィックが含まれます。レイヤ 2 (VLAN) インターフェイスで受信した、VRRP 仮想 IP アドレス宛のパケットは、プライマリ ルータに届きます。

VRRP の利点

VRRP の利点は、次のとおりです。

- 冗長性：複数のルータをデフォルト ゲートウェイ ルータとして設定できるので、ネットワークにシングル ポイント障害が発生する確率が下がります。
- ロード シェアリング：複数のルータで LAN クライアントとの間のトラフィックを分担できます。トラフィックの負荷が使用可能なルータ間でより公平に分担されます。
- マルチ VRRP グループ：プラットフォームがマルチ MAC アドレスをサポートする場合、ルータの物理インターフェイス上で、最大 255 の VRRP グループをサポートします。マルチ VRRP グループによって、LAN トポロジで冗長性およびロード シェアリングを実現できます。
- マルチ IP アドレス：セカンダリ IP アドレスを含めて、複数の IP アドレスを管理できます。イーサネットインターフェイス上で複数のサブネットを設定している場合は、各サブネット で VRRP を設定できます。
- プリエンブト：障害プライマリを引き継いでいたバックアップルータより、さらにプライオリティが高いバックアップルータが使用可能になったときに、プライオリティが高い方を優先させることができます。
- アドバタイズメント プロトコル：VRRP アドバタイズメントに、専用の Internet Assigned Numbers Authority (IANA) 規格マルチキャスト アドレス (224.0.0.18) を使用します。このアドレッシング方式によって、マルチキャストを提供するルータ数が最小限になり、テスト機器でセグメント上の VRRP パケットを正確に識別できるようになります。IANA は VRRP に IP プロトコル番号 112 を割り当てています。
- VRRPv3 の利点は次のとおりです。インターフェイス状態に基づく優先順位。
 - マルチベンダー環境での相互運用性

- IPv4 および IPv6 アドレス ファミリをサポートします。

複数の VRRP グループ

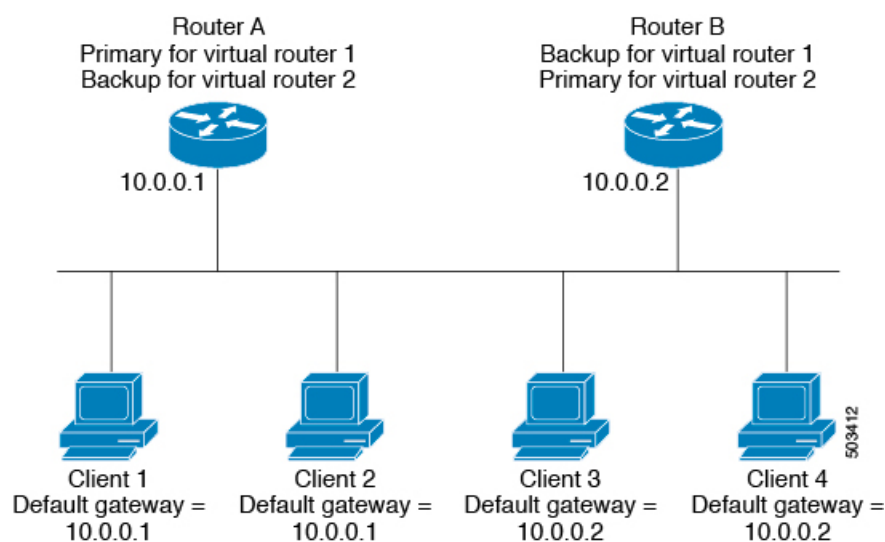
物理インターフェイス上で、最大255のVRRPグループを設定できます。ルータインターフェイスがサポートできるVRRPグループの実際数は、次の要因によって決まります。

- ルータの処理能力
- ルータのメモリの能力

ルータインターフェイス上で複数のVRRPグループが設定されたトポロジでは、インターフェイスはあるVRRPグループのプライマリ、および他の1つまたは複数のVRRPグループのバックアップとして動作可能です。

次の図のLAN トポロジでは、ルータ A と B がクライアント 1～4 のトラフィックを共有するように、VRRP が構成されています。ルータ A と B の一方で障害が発生した場合、もう一方がバックアップとして機能します。

図 40: ロード シェアリングおよび冗長構成の VRRP トポロジ



このトポロジには、オーバーラップする 2 つの VRRP グループに対応する 2 つの仮想 IP アドレスが含まれています。VRRP グループ 1 では、ルータ A が IP アドレス 10.0.0.1 のオーナーであり、プライマリです。ルータ B はルータ A のバックアップです。クライアント 1 と 2 には、デフォルト ゲートウェイの IP アドレス 10.0.0.1 が設定されています。

VRRP グループ 2 では、ルータ B が IP アドレス 10.0.0.2 のオーナーであり、プライマリです。ルータ A はルータ B をバックアップします。クライアント 3 と 4 には、デフォルトゲートウェイの IP アドレス 10.0.0.2 が設定されています。

VRRP ルータのプライオリティおよびプリエンブション

VRRP 冗長構成の重要な側面は、VRRP ルータのプライオリティです。各 VRRP ルータが果たす役割やプライマリ ルータで障害が発生した場合のアクションは、プライオリティによって決まるからです。

VRRP ルータが仮想 IP アドレスおよび物理インターフェイスの IP アドレスを所有する場合、そのルータはプライマリとして機能します。プライマリのプライオリティは 255 です。

プライオリティによって、VRRP ルータがバックアップルータとして動作するかどうかが決まり、さらに、プライマリで障害が発生した場合にプライマリになる順序も決まります。

プライマリ スイッチとバックアップ スイッチのプライオリティ値が同じ場合は、バックアップ スイッチの IP アドレスが上位になり、最初はプライマリ スイッチがアップ状態になります。このシナリオでは、バックアップ スイッチが起動しても、プライマリ スイッチの状態が妨げられることはありません。バックアップ スイッチがプライマリ スイッチになるのは、プライマリ スイッチがダウンした場合だけです。

たとえば、ルータ A が LAN トポロジにおけるプライマリであり、そのルータ A で障害が発生した場合、VRRP はバックアップ B が引き継ぐのか、バックアップ C が引き継ぐのかを判断する必要があります。ルータ B にプライオリティ 101 が設定されていて、ルータ C がデフォルトのプライオリティ 100 の場合、VRRP はルータ B をプライマリになるべきルータとして選択します。ルータ B の方がプライオリティが高いからです。ルータ B および C にデフォルトのプライオリティ 100 が設定されている場合は、VRRP は IP アドレスが大きい方のバックアップをプライマリになるべきルータとして選択します。

VRRP ではプリエンブションを使用して、VRRP バックアップルータがプライマリになってからのアクションを決定します。プリエンブションはデフォルトでイネーブルなので、VRRP は新しいプライマリよりプライオリティの高いバックアップがオンラインになると、バックアップに切り替えます。たとえば、ルータ A がプライマリであり、そのルータ A で障害が発生した場合、VRRP は（プライオリティの順位が次である）ルータ B を選択します。ルータ C がルータ B より高いプライオリティでオンラインになると、ルータ B で障害が発生していなくても、VRRP はルータ C を新しいプライマリとして選択します。

プリエンブションを無効にした場合、VRRP が切り替わるのは、元のプライマリが回復した場合、または新しいプライマリで障害が発生した場合に限られます。

VRRP のアドバタイズメント

VRRP プライマリは、同じグループ内の他の VRRP ルータに VRRP アドバタイズメントを送信します。アドバタイズメントでは、プライマリの優先順位と状態が伝達されます。Cisco NX-OS は VRRP アドバタイズメントを IP パケットにカプセル化して、VRRP グループに割り当てられた IP マルチキャスト アドレスに送信します。Cisco NX-OS がアドバタイズメントを送信する間隔はデフォルトでは 1 秒ですが、ユーザ側で別のアドバタイズインターバルを設定できません。

VRRP 認証

VRRP は、次の認証方式をサポートします。

- 認証なし
- プレーン テキスト認証

VRRP は次の場合に、パケットを拒否します。

- 認証方式がルータと着信パケットで異なる。
- テキスト認証文字列がルータと着信パケットで異なる。

VRRPv3

VRRP のバージョン 3 (VRRPv3) では、スイッチのグループで単一の仮想スイッチを形成して、冗長性を実現し、ネットワーク内のシングルポイント障害が生じる可能性を減らすことができます。これにより、仮想スイッチをデフォルトゲートウェイとして使用するよう、LAN クライアントを設定できます。スイッチのグループを表す仮想スイッチは、VRRPv3 グループとも呼ばれます。

仮想化のサポート

VRRP は仮想ルーティングおよび転送 (VRF) インスタンスをサポートします。デフォルトでは、特に別の VRF を設定しない限り、Cisco NX-OS はユーザーをデフォルトの VRF に配置します。

インターフェイスの VRF メンバーシップを変更すると、Cisco NX-OS によって VRRP を含め、すべてのレイヤ 3 設定が削除されます。

詳細については、「[レイヤ 3 仮想化の設定](#)」を参照してください。

VRRP の注意事項と制約事項

VRRP には、次の注意事項および制限事項があります。

- 管理インターフェイス上で VRRP を設定できません。
- VRRP がイネーブルの場合は、ネットワーク上のスイッチ全体で VRRP 設定を複製する必要があります。
- VRRPv3 ピアのグレースフルフェールオーバーを実行する場合は、まずプロトコルをシャットダウンしてからインターフェイスをシャットダウンします。インターフェイスをシャットダウンしても、インターフェイスがシャットダウンする前にピア間の迅速な移行が保証されるわけではありません。したがって、ホールド時間の期限切れに基づいて VRRPv3 フェールオーバーが発生する可能性があります。

- 同一インターフェイス上では、複数のファーストホップ冗長プロトコルを設定しないことを推奨します。
- VRRP を設定するインターフェイスに IP アドレスを設定し、そのインターフェイスをイネーブルにしてからでなければ、VRRP はアクティブになりません。
- Cisco NX-OS では、VDC、インターフェイス VRF メンバーシップ、ポートチャネルメンバーシップを変更したり、ポートモードをレイヤ2に変更した場合は、インターフェイス上のすべてのレイヤ3設定が削除されます。
- VRRP でレイヤ2 インターフェイスを追跡するよう設定した場合、レイヤ2 をシャットダウンしてからインターフェイスを再度イネーブル化することにより、VRRP プライオリティを更新してレイヤ2 インターフェイスのステートを反映させる必要があります。
- VRRPv3 設定時の注意事項および制約事項は、次のとおりです。
 - VRRPv3 は既存のダイナミック プロトコルの代替にはなりません。VRRPv3 は、マルチアクセス、マルチキャスト、またはブロードキャスト対応イーサネット LAN で使用するために設計されています。
 - VRRPv3 は、イーサネットおよびファストイーサネットインターフェイス、ブリッジグループ仮想インターフェイス (BVI)、ギガビットイーサネットインターフェイス、マルチプロトコルラベルスイッチング (MPLS) 仮想プライベートネットワーク (VPN)、VRF 認識 MPLS、VLAN のみでサポートされます。
 - VRRPv3 が使用中の場合、VRRPv2 は使用できません。VRRPv3 を設定するには、VRRPv2 設定を無効にする必要があります。
 - VRRPv3 ミリ秒タイマーは、絶対に必要な場合以外は使用しないようにし、使用する場合は慎重な検討とテストが必要です。ミリ秒の値は望ましい状況でのみ動作します。ミリ秒のタイマー値は、VRRPv3 も含めてサポートしている限り、サードパーティベンダーと互換性があります。

VRRP のデフォルト設定

次の表に、VRRP パラメータのデフォルト設定値を示します。

表 32: デフォルトの VRRP パラメータ

パラメータ	デフォルト
advertisement interval	1 秒
認証	認証なし
プリエンプション	有効

パラメータ	デフォルト
プライオリティ	100
VRRP 機能	無効
VRRPv3	無効
VRRPv3 セカンダリ アドレスの一致	イネーブル
VRRPv3 アドバタイズメント タイマー	1000 ミリ秒

VRRP の設定



(注) Cisco IOS の CLI に慣れている場合、この機能に対応する Cisco NX-OS コマンドは通常使用する Cisco IOS コマンドと異なる場合がありますので注意してください。

VRRP 機能のイネーブル化

VRRP グループを設定してイネーブルにするには、その前に VRRP 機能をグローバルでイネーブルにする必要があります。

VRRP 機能をイネーブルにするには、グローバル コンフィギュレーション モードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
feature vrrp 例 : switch(config)# feature vrrp	VRRP をイネーブルにします。

VRRP 機能をディセーブルにして、関連付けられている設定をすべて削除するには、グローバル コンフィギュレーション モードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
no feature vrrp 例 : switch(config)# no feature vrrp	VRRP 機能をディセーブルにします。

VRRP グループの設定

VRRP グループを作成し、仮想 IP アドレスを割り当て、グループを有効にすることができます。

VRRP グループに設定できる仮想 IPv4 アドレスは1つです。プライマリ VRRP ルータはデフォルトで、仮想 IP アドレスを直接の宛先とするパケットをドロップします。これは、VRRP プライマリがパケットを転送するネクストホップルータとしてのみ想定されているからです。アプリケーションによっては、Cisco NX-OS が仮想ルータ IP 宛のパケットを受け付けるようにする必要があります。仮想 IP アドレスに **secondary** オプションを使用すると、ローカル ルータが VRRP マスターの場合、これらのパケットを受け付けるようになります。

VRRP グループを設定した場合は、そのグループをアクティブにするために、グループを明示的に有効にする必要があります。

始める前に

インターフェイスに IP アドレスを設定していることを確認します ([IPv4 アドレッシングの設定](#)のセクションを参照)。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	コンフィギュレーション モードに入ります。
ステップ 2	interface interface -type slot/port 例 : <pre>switch(config)# switch(config-if)# interface ethernet 2/1</pre>	インターフェイス設定モードを開始します。
ステップ 3	no switchport 例 : <pre>switch(config-if)# no switchport</pre>	そのインターフェイスを、レイヤ3ルーテッドインターフェイスとして設定します。
ステップ 4	vrrp number 例 : <pre>switch(config-if)# vrrp 250 switch(config-if-vrrp)#</pre>	仮想ルータ グループを作成します。範囲は 1 ～ 255 です。
ステップ 5	address ip-address [secondary] 例 : <pre>switch(config-if-vrrp)# address 192.0.2.8</pre>	指定の VRRP グループに仮想 IPv4 アドレスを設定します。このアドレスは、インターフェイスの IPv4 アドレスと同じサブネットになければなりません。

	コマンドまたはアクション	目的
		secondary オプションは、VRRP ルータが仮想ルータの IP アドレスに送信されたパケットを受け付けて、アプリケーションに配信することをアプリケーションが要求する場合に限られます。
ステップ 6	no shutdown 例 : <pre>switch(config-if-vrrp)# no shutdown switch(config-if-vrrp)#</pre>	VRRP グループを有効にします。デフォルトでは、ディセーブルです。
ステップ 7	(任意) show vrrp 例 : <pre>switch(config-if-vrrp)# show vrrp</pre>	VRRP 情報を表示します。
ステップ 8	(任意) copy running-config startup-config 例 : <pre>switch(config-if-vrrp)# copy running-config startup-config</pre>	この設定変更を保存します。

VRRP プライオリティの設定

仮想ルータの有効なプライオリティ範囲は 1 ～ 254 です（1 が最下位、254 が最上位のプライオリティ）。バックアップのデフォルトのプライオリティ値は 100 です。インターフェイスアドレスがプライマリ仮想 IP アドレスと同じスイッチ（プライマリ）の場合、デフォルト値は 255 です。

始める前に

VRRP 機能が有効になっていることを確認します（[VRRP の設定](#)のセクションを参照）。

インターフェイス上で IP アドレスを構成していることを確認します（「[IPv4 アドレスの構成](#)」のセクションを参照）。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	コンフィギュレーション モードに入ります。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 2	interface interface -type slot/port 例 : switch(config)# switch(config-if)# interface ethernet 2/1	インターフェイス設定モードを開始します。
ステップ 3	no switchport 例 : switch(config-if)# no switchport	そのインターフェイスを、レイヤ3ルーテッドインターフェイスとして設定します。
ステップ 4	vrrp number 例 : switch(config-if)# vrrp 250 switch(config-if-vrrp)#	仮想ルータ グループを作成します。範囲は 1 ～ 255 です。
ステップ 5	shutdown 例 : switch(config-if-vrrp)# shutdown switch(config-if-vrrp)#	VRRP グループを無効にします。デフォルトでは、ディセーブルです。
ステップ 6	priority level [forwarding-threshold lower lower-value upper upper-value] 例 : switch(config-if-vrrp)# priority 60 forwarding-threshold lower 40 upper 50	VRRP グループでのアクティブ ルータ 選択に使用するプライオリティ レベルを設定します。レベルの範囲は 1 ～ 254 です。バックアップの場合、デフォルトは 100 です。インターフェイス IP アドレスが仮想 IP アドレスと等しいプライマリの場合は 255 です。
ステップ 7	no shutdown 例 : switch(config-if-vrrp)# no shutdown switch(config-if-vrrp)#	VRRP グループを有効にします。デフォルトでは、ディセーブルです。
ステップ 8	(任意) show vrrp 例 : switch(config-if-vrrp)# show vrrp	VRRP 情報を表示します。
ステップ 9	(任意) copy running-config startup-config 例 : switch(config-if-vrrp)# copy running-config startup-config	この設定変更を保存します。

VRRP 認証の設定

VRRP グループに単純なテキスト認証を設定できます。

始める前に

ネットワークのすべての VRRP スイッチで認証設定が同じであることを確認します。

VRRP 機能が有効になっていることを確認します（[VRRP の設定](#)のセクションを参照）。

インターフェイス上で IP アドレスを構成していることを確認します（「[IPv4 アドレスの構成](#)」のセクションを参照）。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例： switch# configure terminal switch(config)#	コンフィギュレーション モードに入ります。
ステップ 2	interface interface -type slot/port 例： switch(config)# switch(config-if)# interface ethernet 2/1	インターフェイス設定モードを開始します。
ステップ 3	no switchport 例： switch(config-if)# no switchport	そのインターフェイスを、レイヤ 3 ルーテッドインターフェイスとして設定します。
ステップ 4	vrrp number 例： switch(config-if)# vrrp 250 switch(config-if-vrrp)#	仮想ルータ グループを作成します。範囲は 1 ～ 255 です。
ステップ 5	shutdown 例： switch(config-if-vrrp)# shutdown switch(config-if-vrrp)#	VRRP グループを無効にします。デフォルトでは、ディセーブルです。
ステップ 6	authentication text password 例： switch(config-if-vrrp)# authentication text cisco123	単純なテキスト認証オプションを指定し、キーネーム パスワードを指定します。キーネームの範囲は 1 ～ 255 文字です。16 文字以上を推奨します。テキストパスワードは、英数字で最大 8 文字です。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 7	no shutdown 例 : <pre>switch(config-if-vrrp)# no shutdown switch(config-if-vrrp)#</pre>	VRRP グループを有効にします。デフォルトでは、ディセーブルです。
ステップ 8	(任意) show vrrp 例 : <pre>switch(config-if-vrrp)# show vrrp</pre>	VRRP 情報を表示します。
ステップ 9	(任意) copy running-config startup-config 例 : <pre>switch(config-if-vrrp)# copy running-config startup-config</pre>	この設定変更を保存します。

アドバタイズメントパケットのタイムインターバルの設定

アドバタイズメントパケットのタイムインターバルを設定できます。

始める前に

VRRP 機能が有効になっていることを確認します ([VRRP の設定](#)のセクションを参照)。

インターフェイス上で IP アドレスを構成していることを確認します (「[IPv4 アドレスの構成](#)」のセクションを参照)。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	コンフィギュレーション モードに入ります。
ステップ 2	interface interface -type slot/port 例 : <pre>switch(config)# switch(config-if)# interface ethernet 2/1</pre>	インターフェイス設定モードを開始します。
ステップ 3	no switchport 例 : <pre>switch(config-if)# no switchport</pre>	そのインターフェイスを、レイヤ 3 ルーテッドインターフェイスとして設定します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 4	vrrp number 例 : <code>switch(config-if)# vrrp 250</code> <code>switch(config-if-vrrp)#</code>	仮想ルータ グループを作成します。範囲は 1 ～ 255 です。
ステップ 5	shutdown 例 : <code>switch(config-if-vrrp)# shutdown</code> <code>switch(config-if-vrrp)#</code>	VRRP グループを無効にします。デフォルトでは、ディセーブルです。
ステップ 6	advertisement-interval seconds 例 : <code>switch(config-if-vrrp)# advertisement-interval 15</code>	アドバタイズメント フレームの送信間隔を秒数で設定します。有効な範囲は 1 ～ 254 です。デフォルト値は 1 秒です。
ステップ 7	no shutdown 例 : <code>switch(config-if-vrrp)# no shutdown</code> <code>switch(config-if-vrrp)#</code>	VRRP グループを有効にします。デフォルトでは、ディセーブルです。
ステップ 8	(任意) show vrrp 例 : <code>switch(config-if-vrrp)# show vrrp</code>	VRRP 情報を表示します。
ステップ 9	(任意) copy running-config startup-config 例 : <code>switch(config-if-vrrp)# copy running-config startup-config</code>	この設定変更を保存します。

プリエンプションのディセーブル化

VRRP グループ メンバーのプリエンプションをディセーブルにできます。プリエンプションをディセーブルにした場合は、プライオリティのより高いバックアップ ルータが、プライオリティのより低いプライマリ ルータを引き継ぐことはありません。プリエンプションはデフォルトでイネーブルです。

始める前に

VRRP 機能が有効になっていることを確認します ([VRRP の設定](#)のセクションを参照)。

インターフェイス上で IP アドレスを構成していることを確認します (「[IPv4 アドレスの構成](#)」のセクションを参照)。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : switch# configure terminal switch(config)#	コンフィギュレーション モードに入ります。
ステップ 2	interface interface -type slot/port 例 : switch(config)# switch(config-if)# interface ethernet 2/1	インターフェイス設定モードを開始します。
ステップ 3	no switchport 例 : switch(config-if)# no switchport	そのインターフェイスを、レイヤ3ルーテッドインターフェイスとして設定します。
ステップ 4	vrrp number 例 : switch(config-if)# vrrp 250 switch(config-if-vrrp)#	仮想ルータ グループを作成します。範囲は 1 ～ 255 です。
ステップ 5	shutdown 例 : switch(config-if-vrrp)# shutdown switch(config-if-vrrp)#	VRRP グループを無効にします。デフォルトでは、ディセーブルです。
ステップ 6	no preempt 例 : switch(config-if-vrrp)# no preempt	preempt オプションをディセーブルにして、プライオリティが上位のバックアップが使用されてもプライマリが変わらないようにします。
ステップ 7	no shutdown 例 : switch(config-if-vrrp)# no shutdown switch(config-if-vrrp)#	VRRP グループを有効にします。デフォルトでは、ディセーブルです。
ステップ 8	(任意) show vrrp 例 : switch(config-if-vrrp)# show vrrp	VRRP 情報を表示します。
ステップ 9	(任意) copy running-config startup-config 例 :	この設定変更を保存します。

	コマンドまたはアクション	目的
	<code>switch(config-if-vrrp)# copy running-config startup-config</code>	

VRRP インターフェイス ステート トラッキングの設定

インターフェイスのステート追跡機能では、スイッチ内の他のインターフェイスのステートに基づいて、仮想ルータのプライオリティが変更されます。トラッキング対象のインターフェイスがダウンしたり、IP アドレスが削除されると、Cisco NX-OS はトラッキングのプライオリティ値を仮想ルータに割り当てます。トラッキング対象のインターフェイスがオンライン状態になり、IP アドレスがこのインターフェイスに設定されると、Cisco NX-OS は仮想ルータに設定されていたプライオリティを復元します（[VRRP プライオリティの設定](#)を参照）。



(注) インターフェイス ステート トラッキングを動作させるには、インターフェイス上でプリエンプレションをイネーブルにする必要があります。



(注) VRRP はレイヤ 2 インターフェイスのトラッキングをサポートしていません。

始める前に

VRRP 機能が有効になっていることを確認します（[VRRP の設定](#)のセクションを参照）。

インターフェイス上で IP アドレスを構成していることを確認します（「[IPv4 アドレスの構成](#)」のセクションを参照）。

仮想ルータが有効になっていることを確認します（[VRRP グループの設定](#)のセクションを参照）。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例： <code>switch# configure terminal</code> <code>switch(config)#</code>	コンフィギュレーション モードに入ります。
ステップ 2	interface interface -type slot/port 例： <code>switch(config)#</code> <code>switch(config-if)# interface ethernet 2/1</code>	インターフェイス設定モードを開始します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 3	no switchport 例 : switch(config-if)# no switchport	そのインターフェイスを、レイヤ3ルーテッドインターフェイスとして設定します。
ステップ 4	vrrp number 例 : switch(config-if)# vrrp 250 switch(config-if-vrrp)#	仮想ルータ グループを作成します。範囲は 1 ～ 255 です。
ステップ 5	shutdown 例 : switch(config-if-vrrp)# shutdown switch(config-if-vrrp)#	VRRP グループを無効にします。デフォルトでは、ディセーブルです。
ステップ 6	track interface type number priority value 例 : switch(config-if-vrrp)# track interface ethernet 2/10 priority 254	VRRP グループのインターフェイス プライオリティ トラッキングをイネーブルにします。プライオリティの範囲は 1 ～ 254 です。
ステップ 7	no shutdown 例 : switch(config-if-vrrp)# no shutdown switch(config-if-vrrp)#	VRRP グループを有効にします。デフォルトでは、ディセーブルです。
ステップ 8	(任意) show vrrp 例 : switch(config-if-vrrp)# show vrrp	VRRP 情報を表示します。
ステップ 9	(任意) copy running-config startup-config 例 : switch(config-if-vrrp)# copy running-config startup-config	この設定変更を保存します。

VRRPv3 の設定

VRRPv3 の有効化

VRRPv3 グループを構成して有効にするには、その前に VRRPv3 機能をグローバルで有効にする必要があります。

VRRPv3 機能を有効にするには、グローバル コンフィギュレーション モードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
feature vrrpv3 例 : <pre>switch(config)# feature vrrpv3</pre>	VRRP バージョン 3 を有効にします。このコマンドの no 形式を使用すると、VDC で VRRPv3 が無効になります。 VRRPv2 が現在設定されている場合は、グローバル設定モードで no feature vrrp コマンドを使用して VRRPv2 設定を削除し、その後 feature vrrpv3 コマンドを使用して VRRPv3 を有効にします。

VRRPv3 グループの構成

VRRPv3 グループを作成し、仮想 IP アドレスを割り当て、グループをイネーブルにすることができます。

VRRPv3 グループに構成できる仮想 IPv4 アドレスは 1 つです。プライマリ VRRPv3 ルータはデフォルトで、仮想 IP アドレスを直接の宛先とするパケットをドロップします。これは、VRRPv3 プライマリがパケットを転送するネクストホップルータとしてのみ想定されているからです。アプリケーションによっては、Cisco NX-OS が仮想ルータ IP 宛のパケットを受け付けるようにする必要があります。仮想 IP アドレスに **secondary** オプションを使用すると、ローカルルータが VRRPv3 マスターの場合、これらのパケットを受け付けるようになります。



(注) VRRPv3 グループを構成した場合は、そのグループをアクティブにするために、グループを明示的に有効にする必要があります。

始める前に

- VRRPv3 機能が有効になっていることを確認します。
- インターフェイス上で IP アドレスを構成していることを確認します。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	コンフィギュレーションモードに入ります。
ステップ 2	interface interface -type slot/port 例 :	インターフェイス設定モードを開始します。

	コマンドまたはアクション	目的
	<pre>switch(config)# switch(config-if)# interface ethernet 2/1</pre>	
ステップ 3	[no] vrrpv3 number address-family { ipv4 ipv6 } 例 : <pre>switch(config-if)# vrrpv3 5 address-family ipv4 switch(config-if-vrrpv3-group)#</pre>	VRRPv3 グループを作成し、VRRPv3 グループ設定モードを開始します。範囲は 1 ～ 255 です。 このコマンドの no 形式を使用すると、そのサブモード内で定義されたすべてのコンフィギュレーションが削除されます。
ステップ 4	(任意) [no] address ip-address [primary secondary] 例 : <pre>switch(config-if-vrrpv3-group)# address 100.0.1.10 primary</pre>	VRRPv3 グループのプライマリ アドレスまたはセカンダリ IPv4 または IPv6 アドレスを指定します。 (注) VRRPv3 グループでセカンダリ IP アドレスを使用するには、まず同じグループでプライマリ IP アドレスを設定する必要があります。
ステップ 5	(任意) [no] description description 例 : <pre>switch(config-if-vrrpv3-group)# description group3</pre>	VRRPv3 グループの説明を指定します。最大 80 文字の英数字を入力できます。
ステップ 6	(任意) [no] match-address 例 : <pre>switch(config-if-vrrpv3-group)# match-address</pre>	アドバタイズメントパケットのセカンダリアドレスを設定したアドレスと照合します。
ステップ 7	(任意) [no] preempt [delay minimum seconds] 例 : <pre>switch(config-if-vrrpv3-group)# preempt delay minimum 30</pre>	オプションの延期時間を指定して、プライオリティの低いプライマリスイッチのプリエンプションをイネーブルにします。範囲は 0～3600 です。
ステップ 8	(任意) [no] priority level 例 : <pre>switch(config-if-vrrpv3-group)# priority 3</pre>	VRRPv3 グループのプライオリティを指定します。範囲は 1～254 です。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 9	(任意) [no] timers advertise interval 例 : <pre>switch(config-if-vrrpv3-group)# timers advertise 1000</pre>	アドバタイズメントタイマーを設定します (ミリ秒単位)。範囲は 100~40950 です。 (注) シスコは、このタイマーを 1 秒以上の値に設定することを推奨します。
ステップ 10	(任意) [no] vrrpv2 例 : <pre>switch(config-if-vrrpv3-group)# vrrpv2</pre>	VRRPv2 のみをサポートしているデバイスとの相互運用性を確保するために、VRRPv2 に対するサポートも同時に有効にします。 (注) VRRPv2 互換モードは、VRRPv2 から VRRPv3 にアップグレードするために提供されます。これは完全な VRRPv2 実装ではないので、アップグレードを実行する場合にのみ使用してください。
ステップ 11	(任意) [no] shutdown 例 : <pre>switch(config-if-vrrp3-group)# shutdown</pre>	VRRPv3 グループの VRRP 構成を無効にします。
ステップ 12	(任意) show fhrp [interface-type interface-number] [verbose] 例 : <pre>switch(config-if-vrrp3-group)# show fhrp port-channel 101 verbose</pre>	ファースト ホップ冗長性プロトコル (FHRP) の情報を表示します。 詳細情報を表示するには、 verbose キーワードを使用します。
ステップ 13	(任意) copy running-config startup-config 例 : <pre>switch(config-if-vrrp)# copy running-config startup-config</pre>	この設定変更を保存します。

FHRP クライアント前の初期化前遅延時間の構成

FHRP クライアントの初期化の遅延時間を構成できます。



- (注) すべての FHRP プロトコルで、アグレッシブ タイマーの使用は、CPU スパイクを引き起こし、制御パケット フローを増加させるため、推奨しません。VRRPv3 の場合、VRRP ノードの適切なフェールオーバーのために十分なインターフェイス 遅延/リロード 遅延を構成する必要があります。

この機能を構成するには、インターフェイス コンフィギュレーション モードで次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
fhrp delay \ minimum n [reload] seconds 例 : <pre>switch(config)# fhrp delay minimum 34</pre>	FHRP クライアントの初期化の遅延期間を指定します。指定できる範囲は 0 ～ 3600 秒です。 minimum キーワードで、インターフェイスが使用可能になった後の遅延時間を構成します。 reload コマンドで、デバイスのリロード後の遅延時間を構成します。

VRRPv3 コントロールグループの設定

始める前に

- VRRPv3 機能が有効になっていることを確認します。
- インターフェイス上で IP アドレスを構成していることを確認します。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	interface interface - type slot/port 例 : <pre>switch(config)# interface ethernet 2/1 switch(config-if)#</pre>	インターフェイス設定モードを開始します。
ステップ 3	[no] ip address ip-address mask [secondary] 例 :	インターフェイスの IP アドレスを設定します。 (注)

	コマンドまたはアクション	目的
	<code>switch(config-if)# ip address 209.165.200.230 255.255.255.224</code>	secondary キーワードを使用して、インターフェイスで追加の IP アドレスを構成できます。
ステップ 4	[no] vrrpv3 number address-family { ipv4 ipv6 } 例 : <code>switch(config-if)# vrrpv3 5 address-family ipv4 switch(config-if-vrrpv3-group)#</code>	VRRPv3 グループを作成し、VRRPv3 グループ設定モードを開始します。範囲は 1 ～ 255 です。
ステップ 5	(任意) [no] address ip-address [primary secondary] 例 : <code>switch(config-if-vrrpv3-group)# address 209.165.200.227 primary</code>	VRRPv3 グループのプライマリ アドレスまたはセカンダリ IPv4 または IPv6 アドレスを指定します。
ステップ 6	(任意) [no] shutdown 例 : <code>switch(config-if-vrrpv3-group)# shutdown</code>	VRRPv3 グループの VRRP 構成を無効にします。
ステップ 7	show fhrp [interface-type interface-number] [verbose] 例 : <code>switch(config-if-vrrpv3-group)# show fhrp port-channel 101 verbose</code>	ファースト ホップ冗長性プロトコル (FHRP) の情報を表示します。 詳細情報を表示するには、 verbose キーワードを使用します。
ステップ 8	(任意) copy running-config startup-config 例 : <code>switch(config-if-vrrpv3-group)# copy running-config startup-config</code>	この設定変更を保存します。

VRRPv2 設定の確認

VRRPv2 の構成情報を表示するには、次のいずれかの作業を行います。

コマンド	目的
show vrrpv2	すべてのグループについて、VRRP ステータスを表示します。

コマンド	目的
<code>show vrrpv2 vr group-number</code>	1 つの VRRP グループについて、VRRP ステータスを表示します。
<code>show vrrp v2 vr number interface interface-type port configuration</code>	インターフェイスの仮想ルータ設定を表示します。
<code>show vrrp v2 vr number interface interface-type port status</code>	インターフェイスの仮想ルータ ステータスを表示します。
<code>show fhrp [interface-type interface-number] [verbose]</code>	ファースト ホップ冗長性プロトコル (FHRP) の情報を表示します。
<code>show interface interface-type</code>	インターフェイスの仮想ルータ設定を表示します。

VRRPv3 設定の確認

show vrrpv3 コマンド出力のフィールドについては、次の表を参照してください。

コマンド	目的
>	ファイルにリダイレクトします
>>	追加モードでファイルにリダイレクトします
all	すべての VRRPV3 情報
brief	概要出力
detail	詳細出力
ethernet	イーサネット IEEE 802.3z
internal	内部コマンド
ipv4	IPv4
ipv6	IPv6
loopback	ループバック インターフェイス
port-channel	ポート チャネル インターフェイス
	ace
統計情報	統計情報の出力
VLAN	VLAN インターフェイス

コマンド	目的
	コマンド出力をフィルタにパイプします

たとえば、**show vrrpv3 statistics** コマンドを使用して、VRRPv3 統計情報を表示します。

```
# show vrrpv3 statistics
```

VRRP 統計情報の表示

VRRP の統計情報を表示するには、次のコマンドを使用します。

コマンド	目的
show vrrp vr number interface interface-type port statistics	仮想ルータ情報を表示します。
show vrrp statistics	VRRP の統計情報を表示します。

特定のインターフェイスについて、IPv4 VRRP 統計情報を消去するには、**clear vrrp vr** コマンドを使用します。

指定した IPv4 仮想ルータについて、すべての統計情報を消去するには、**clear vrrp ipv4** コマンドを使用します。

VRRPv2 の設定例

この例では、ルータ A とルータ B はそれぞれ 3 つの VRRPv2 グループに属しています。コンフィギュレーションにおいて、各グループのプロパティは次のとおりです。

- グループ 1 :
 - 仮想 IP アドレスは 10.1.0.10 です。
 - ルータ A は優先順位 120 で、このグループのプライマリになります。
 - アドバタイズ インターバルは 3 秒です。
 - プリエンプションはイネーブルです。
- グループ 5 :
 - ルータ B はプライオリティ 200 で、このグループのマスターになります。
 - アドバタイズ インターバルは 30 秒です。
 - プリエンプションはイネーブルです。
- グループ 100 :

- ルータ A は、IP アドレスが上位（10.1.0.2）なので、このグループのプライマリになります。
- アドバタイズ インターバルはデフォルトの 1 秒です。
- プリエンプションはディセーブルです。

ルータ A

```
interface ethernet 1/0
no switchport

ip address 10.1.0.2/16
no shutdown
vrrp 1
priority 120
authentication text cisco
advertisement-interval 3
address 10.1.0.10
no shutdown
vrrp 5
priority 100
advertisement-interval 30
address 10.1.0.50
no shutdown
vrrp 100
no preempt
address 10.1.0.100
no shutdown
```

ルータ B

```
interface ethernet 1/0
no switchport

ip address 10.2.0.1/2
no shutdown
vrrp 1
priority 100
authentication text cisco
advertisement-interval 3
address 10.2.0.10
no shutdown

vrrp 5
priority 200
advertisement-interval 30
address 10.2.0.50
no shutdown
vrrp 100
no preempt
address 10.2.0.100
no shutdown
```

VRRPv3 の構成例

VRRPv3 の次の構成例を参照してください。

```
interface Vlan20
vrrpv3 10 address-family ipv4
timers advertise 1000
priority 100
preempt
match-address
no vrrpv2
address 20.1.1.1 primary
address 20.1.1.5 secondary
vrrpv3 10 address-family ipv6
timers advertise 1000
priority 100
preempt
match-address
no vrrpv2
address fe80::1 primary
address 2011::5
```

その他の参考資料

VRRP の実装に関連する詳細情報については、次の項を参照してください。

関連資料

関連項目	マニュアル タイトル
Hot Standby Router Protocol の設定	『Configuring HSRP』 (501 ページ)
VRRP CLI コマンド	『Cisco Nexus 3000 Series Command Reference』



第 24 章

オブジェクト トラッキングの設定

この章では、Cisco NX-OS スイッチ上でオブジェクト トラッキングを設定する方法について説明します。

この章は、次の項で構成されています。

- [オブジェクト トラッキングについて \(549 ページ\)](#)
- [オブジェクト トラッキングに関する注意事項と制約事項 \(551 ページ\)](#)
- [オブジェクト トラッキングのデフォルト設定 \(551 ページ\)](#)
- [オブジェクト トラッキングの設定 \(551 ページ\)](#)
- [オブジェクト トラッキングの設定の確認 \(561 ページ\)](#)
- [オブジェクト トラッキングの設定例 \(562 ページ\)](#)
- [関連項目 \(562 ページ\)](#)
- [その他の参考資料 \(562 ページ\)](#)

オブジェクト トラッキングについて

オブジェクト トラッキングを使用すると、インターフェイス ラインプロトコル ステート、IP ルーティング、ルート到達可能性などの、スイッチ上の特定のオブジェクトをトラッキングし、トラッキング対象オブジェクトのステートが変化したときに対処できます。この機能により、ネットワークの可用性が向上し、オブジェクトがダウンした場合のリカバリ時間が短縮されます。

オブジェクト トラッキングの概要

オブジェクト トラッキング機能を使用すると、トラッキング対象オブジェクトを作成できます。複数のクライアントでこのオブジェクトを使用し、トラッキング対象オブジェクトが変化したときのクライアント動作を変更できます。複数のクライアントがそれぞれの関心をトラッキングプロセスに登録し、同じオブジェクトをトラッキングし、オブジェクトのステートが変化したときに異なるアクションを実行します。

クライアントには次の機能が含まれます。

- ホットスタンバイ冗長プロトコル (HSRP)

- 仮想ルータ冗長プロトコル (VRRP)
- Embedded Event Manager (EEM)

オブジェクトトラッキングは、トラッキング対象オブジェクトのステータスをモニタし、変更があった場合は関係クライアントに伝えます。各トラッキング対象オブジェクトは、一意の番号で識別します。クライアントはこの番号を使用して、トラッキング対象オブジェクトのステータスの変化したときに実行するアクションを設定できます。

Cisco NX-OS がトラッキングするオブジェクトタイプは、次のとおりです。

- インターフェイスラインプロトコルステート：ラインプロトコルステートがアップまたはダウンかどうかをトラッキングします。
- インターフェイス IP ルーティングステート：インターフェイスに IPv4 アドレスが設定されていて、IPv4 ルーティングがイネーブルでアクティブかどうかをトラッキングします。
- IP ルート到達可能性：IPv4 ルートが存在していて、ローカルスイッチから到達可能かどうかをトラッキングします。

たとえば、HSRP を設定すると、冗長ルータの 1 つをネットワークの他の部分に接続するインターフェイスのラインプロトコルをトラッキングできます。そのリンクがダウンした場合、影響のある HSRP ルータのプライオリティを変更できます。

オブジェクトトラッキングリスト

オブジェクトトラッキングリストを使用すると、複数のオブジェクトのステータスをまとめてトラッキングできます。オブジェクトトラッキングリストは次の機能をサポートします。

- ブール「and」機能：トラッキングリストオブジェクトがアップになるには、トラッキングリスト内に定義された各オブジェクトがアップ状態である必要があります。
- ブール「or」機能：トラッキング対象オブジェクトがアップになるには、トラッキングリスト内に定義された少なくとも 1 つのオブジェクトがアップ状態である必要があります。
- しきい値パーセンテージ：トラッキング対象リストに含まれるアップオブジェクトのパーセンテージが、アップ状態になるトラッキングリストの設定されたアップしきい値を上回っている必要があります。トラッキング対象リストに含まれるダウンオブジェクトのパーセンテージが設定されたトラッキングリストのダウンしきい値を上回っている場合、トラッキング対象リストはダウンとしてマークされます。
- しきい値の重み：トラッキング対象リスト内の各オブジェクトに重み値を割り当て、トラッキングリストに重みしきい値を割り当てます。すべてのアップオブジェクトの重み値の合計がトラッキングリストの重みアップしきい値を超えている場合、トラッキングリストはアップ状態になります。すべてのダウンオブジェクトの重み値の合計がトラッキングリストの重みダウンしきい値を超えている場合、トラッキングリストはダウン状態になります。

トラックリストの詳細については、「[ブール式によるオブジェクトトラックリストの設定](#)」を参照してください。

仮想化のサポート

オブジェクトトラッキングは仮想ルーティングおよび転送（VRF）インスタンスをサポートします。デフォルトでは、特に別の VRF を設定しない限り、Cisco NX-OS はユーザーをデフォルトの VRF に配置します。Cisco NX-OS はデフォルトで、デフォルト VRF のオブジェクトのルート到達可能ステートをトラッキングします。別の VRF のオブジェクトをトラッキングする場合は、オブジェクトをその VRF のメンバとして設定する必要があります（「[デフォルト以外の VRF に対してオブジェクトトラッキングを設定する](#)」の項を参照）。

詳細については、「[レイヤ 3 仮想化の設定](#)」を参照してください。

オブジェクトトラッキングに関する注意事項と制約事項

オブジェクトトラッキング設定時の注意事項および制約事項は、次のとおりです。

- 最大 500 のトラッキング対象オブジェクトをサポートします。
- イーサネット、サブインターフェイス、トンネル、ポートチャネル、ループバックインターフェイス、および VLAN インターフェイスをサポートします。
- HSRP グループごとに 1 つのトラッキング対象オブジェクトをサポートします。

オブジェクトトラッキングのデフォルト設定

下の表に、オブジェクトトラッキングパラメータのデフォルト設定を示します。

表 33: デフォルトのオブジェクトトラッキングパラメータ

パラメータ	デフォルト
Tracked Object VRF	デフォルト VRF のメンバ

オブジェクトトラッキングの設定



(注) Cisco IOS の CLI に慣れている場合、この機能に対応する Cisco NX-OS コマンドは通常使用する Cisco IOS コマンドと異なる場合がありますので注意してください。

インターフェイスに対するオブジェクトトラッキングの設定

インターフェイスのラインプロトコルまたは IPv4 ルーティングの状態をトラッキングするように Cisco NX-OS を設定できます。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例： <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	コンフィギュレーション モードに入ります。
ステップ 2	track object-id interface interface-type number { ip routing line-protocol } 例： <pre>switch(config)# track 1 interface ethernet 1/2 line-protocol switch(config-track)#</pre>	インターフェイスのトラッキング対象オブジェクトを作成し、トラッキング コンフィギュレーション モードを開始します。 <i>object-id</i> の範囲は 1 ～ 500 です。
ステップ 3	(任意) show track [object-id] 例： <pre>switch(config-track)# show track 1</pre>	オブジェクトのトラッキング情報を表示します。
ステップ 4	(任意) copy running-config startup-config 例： <pre>switch(config-track)# copy running-config startup-config</pre>	この設定変更を保存します。

例

Ethernet 1/2 上でラインプロトコル ステートのオブジェクトトラッキングを設定する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# track 1 interface ethernet 1/2 line-protocol
switch(config-track)# copy running-config startup-config
```

Ethernet 1/2 上で IPv4 ルーティング ステートのオブジェクトトラッキングを設定する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# track 2 interface ethernet 1/2 ip routing
switch(config-track)# copy running-config startup-config
```

ルート到達可能性に対するオブジェクトトラッキングの設定

IP ルートの存在および到達可能性をトラッキングするように Cisco NX-OS を設定できます。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例： <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	コンフィギュレーション モードに入ります。
ステップ 2	track object-id ip route prefix/length reachability 例： <pre>switch(config)# track 2 ip route 192.0.2.0/8 reachability switch(config-track)#</pre>	ルートのトラッキング対象オブジェクトを作成し、トラッキング コンフィギュレーション モードを開始します。 <i>object-id</i> の範囲は 1 ～ 500 です。IP のプレフィックス フォーマットは A.B.C.D/length です。length の範囲は 1 ～ 32 です。
ステップ 3	(任意) show track [object-id] 例： <pre>switch(config-track)# show track 1</pre>	オブジェクトのトラッキング情報を表示します。
ステップ 4	(任意) copy running-config startup-config 例： <pre>switch(config-track)# copy running-config startup-config</pre>	この設定変更を保存します。

例

次に、デフォルト VRF で IPv4 ルートのオブジェクトトラッキングを設定する例を示します。

```
switch# configure terminal  
switch(config)# track 4 ip route 192.0.2.0/8 reachability  
switch(config-track)# copy running-config startup-config
```

ブール式を含むオブジェクトトラッキングリストの設定

複数のトラッキング対象オブジェクトを含むオブジェクトトラッキングリストを設定できます。トラッキング対象リストには 1 つまたは複数のオブジェクトが含まれます。ブール式では、「and」または「or」演算子を使用して 2 種類の演算を実行できます。たとえば、「and」演算子を使用して 2 つのインターフェイスをトラッキングする場合、「アップ」は両方のイン

ターフェイスがアップであることを意味し、「ダウン」はどちらかのインターフェイスがダウンであることを意味します。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	コンフィギュレーション モードに入ります。
ステップ 2	track track-number list boolean { and or } 例 : <pre>switch(config)# track 1 list boolean and switch(config-track)#</pre>	トラッキング対象リスト オブジェクトを設定し、トラッキング設定モードを開始します。トラッキング対象リストのステータスがブール式に基づいて決まることを指定します。キーワードは次のとおりです。 • and : すべてのオブジェクトがアップである場合にリストがアップになり、1つ以上のオブジェクトがダウンの場合にリストがダウンになることを指定します。たとえば2つのインターフェイスをトラッキングする場合、アップは両方のインターフェイスがアップ状態であることを表し、ダウンはいずれかのインターフェイスがダウン状態であることを表します。 • or : 少なくとも1つのオブジェクトがアップであればリストがアップになるように指定します。たとえば2つのインターフェイスをトラッキングする場合、アップはいずれか一方のインターフェイスがアップ状態であることを意味し、ダウンは両方のインターフェイスがダウン状態であることを意味します。 <i>track-number</i> の範囲は 1 ～ 500 です。
ステップ 3	object object-id [not] 例 : <pre>switch(config-track)# object 10</pre>	トラッキング リストにトラッキング対象オブジェクトを追加します。 <i>object-id</i> の範囲は 1 ～ 500 です。オプションの not キーワードを指定すると、トラッキ

	コマンドまたはアクション	目的
		ング対象オブジェクトのステートが否定されます。 (注) 例では、オブジェクト10がアップのときに、トラッキング対象リストがオブジェクト10をダウンとして検出します。
ステップ4	(任意) show track 例 : <pre>switch(config-track)# show track</pre>	オブジェクトのトラッキング情報を表示します。
ステップ5	(任意) copy running-config startup-config 例 : <pre>switch(config-track)# copy running-config startup-config</pre>	この設定変更を保存します。

例

次に、複数のオブジェクトを含むトラッキングリストをブール「and」で設定する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# track 1 list boolean and
switch(config-track)# object 10
switch(config-track)# object 20 not
```

パーセンテージしきい値を含むオブジェクトトラッキングリストの設定

パーセンテージしきい値を含むオブジェクトトラッキングリストを設定できます。トラッキング対象リストには1つまたは複数のオブジェクトが含まれます。トラッキングリストがアップ状態になるには、アップオブジェクトのパーセンテージがトラッキングリストに設定されたパーセントしきい値を超えている必要があります。たとえば、追跡対象リストに3つのオブジェクトが含まれており、アップしきい値を60%に設定した場合は、2つのオブジェクト（全オブジェクトの66%）がアップ状態になるまで、追跡リストがアップ状態になりません。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例： switch# configure terminal switch(config)#	コンフィギュレーション モードに入ります。
ステップ 2	track track-number list threshold percentage 例： switch(config)# track 1 list threshold percentage switch(config-track)#	トラッキング対象リスト オブジェクトを設定し、トラッキング設定モードを開始します。トラッキング対象リストのステータスが設定されたしきい値パーセントに基づいて決まることを指定します。 <i>track-number</i> の範囲は 1 ～ 500 です。
ステップ 3	threshold percentage up up-value down down-value 例： switch(config-track)# threshold percentage up 70 down 30	トラッキング対象リストのしきい値パーセントを設定します。指定できる範囲は 0 ～ 100% です。
ステップ 4	(任意) object [object-id] 例： switch(config-track)# object 10	トラッキングリストにトラッキング対象オブジェクトを追加します。 <i>object-id</i> の範囲は 1 ～ 500 です。
ステップ 5	(任意) show track 例： switch(config-track)# show track	オブジェクトのトラッキング情報を表示します。
ステップ 6	(任意) copy running-config startup-config 例： switch(config-track)# copy running-config startup-config	この設定変更を保存します。

例

次に、アップしきい値が 70 % でダウンしきい値が 30 % の追跡リストを設定する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# track 1 list threshold percentage
switch(config-track)# threshold percentage up 70 down 30
switch(config-track)# object 10
switch(config-track)# object 20
switch(config-track)# object 30
```

重みしきい値を含むオブジェクトトラッキングリストの設定

重みしきい値を含むオブジェクトトラッキングリストを設定できます。トラッキング対象リストには1つまたは複数のオブジェクトが含まれます。トラッキングリストがアップステートになるには、アップオブジェクトの重み値の合計がトラッキングリストに設定されたアップ重みしきい値を超えている必要があります。たとえば、トラッキング対象リストに重み値がデフォルトの10である3つのオブジェクトがあり、アップしきい値を15に設定した場合、トラッキングリストがアップ状態になるには、2つのオブジェクトがアップ状態になる（重み値の合計が20になる）必要があります。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例： <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	コンフィギュレーション モードに入ります。
ステップ 2	track track-number list threshold weight 例： <pre>switch(config)# track 1 list threshold weight switch(config-track)#</pre>	トラッキング対象リスト オブジェクトを設定し、トラッキング設定モードを開始します。トラッキング対象リストのステートが設定されたしきい値重みに基づいて決まることを指定します。 <i>track-number</i> の範囲は 1 ～ 500 です。
ステップ 3	threshold weight up up-value down down-value 例： <pre>switch(config-track)# threshold weight up 30 down 10</pre>	トラッキング対象リストのしきい値重みを設定します。指定できる範囲は 1 ～ 255 です。
ステップ 4	object object-id weight value 例： <pre>switch(config-track)# object 10 weight 15</pre>	トラッキングリストにトラッキング対象オブジェクトを追加します。 <i>object-id</i> の範囲は 1 ～ 500 です。 <i>value</i> の範囲は 1 ～ 255 です。デフォルトの重み値は 10 です。
ステップ 5	(任意) show track 例： <pre>switch(config-track)# show track</pre>	オブジェクトのトラッキング情報を表示します。
ステップ 6	(任意) copy running-config startup-config 例：	この設定変更を保存します。

	コマンドまたはアクション	目的
	switch(config-track)# copy running-config startup-config	

例

次に、トラッキングリストのアップ重みしきい値を 30、ダウンしきい値を 10 にそれぞれ設定する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# track 1 list threshold weight
switch(config-track)# threshold weight up 30 down 10
switch(config-track)# object 10 weight 15
switch(config-track)# object 20 weight 15
switch(config-track)# object 30
```

この例では、オブジェクト 10 とオブジェクト 20 がアップの場合にトラッキングリストがアップになり、3 つのオブジェクトがすべてダウンの場合にトラッキングリストがダウンになります。

オブジェクトトラッキングの遅延の設定

トラッキング対象オブジェクトまたはオブジェクトトラッキングリストに対して、オブジェクトまたはリストがステータスの変化を開始したときに適用する遅延を設定できます。トラッキング対象オブジェクトまたはトラッキングリストは、ステータスの変化が発生したときに遅延タイマーを開始しますが、遅延タイマーが切れるまでステータスの変化を認識しません。遅延タイマーが切れると、Cisco NX-OS は再びオブジェクトのステータスを確認し、オブジェクトまたはリストが現在も変更されたステータスのままだった場合にだけステータスの変化を記録します。オブジェクトトラッキングは遅延タイマーが切れる前の中間的なステータスの変化を無視します。

たとえば、インターフェイスラインプロトコルのトラッキング対象オブジェクトがアップステータスであり、ダウン遅延が 20 秒に設定されている場合は、ラインプロトコルがダウンになると遅延タイマーが開始します。20 秒後にラインプロトコルがダウンになっていなければ、このオブジェクトはダウンステータスになりません。

トラッキング対象オブジェクトまたはトラッキングリストには、独立したアップ遅延とダウン遅延を設定できます。遅延を削除すると、オブジェクトトラッキングからアップ遅延とダウン遅延の両方が削除されます。

遅延は任意の時点で変更できます。オブジェクトまたはリストがトリガーされたイベントから遅延タイマーをすでにカウントしている場合は、次のようにして新しい遅延が計算されます。

- 新しい設定値が古い設定値より小さい場合は、新しい値でタイマーが開始します。
- 新しい設定値が古い設定値より大きい場合は、新しい設定値から現在のタイマーのカウントダウンを引き、古い設定値を引いたものがタイマーになります。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : switch# configure terminal switch(config)#	コンフィギュレーション モードに入ります。
ステップ 2	track object- id { parameters } 例 : switch(config)# track 2 ip route 192.0.2.0/8 reachability switch(config-track)#	ルートのトラッキング対象オブジェクトを作成し、トラッキング コンフィギュレーション モードを開始します。 <i>object-id</i> の範囲は 1 ～ 500 です。IP のプレフィックス フォーマットは A.B.C.D/length です。length の範囲は 1 ～ 32 です。
ステップ 3	track track-number list { parameters } 例 : switch(config)# track 1 list threshold weight switch(config-track)#	トラッキング対象リスト オブジェクトを設定し、トラッキング設定モードを開始します。トラッキング対象リストのステータスが設定されたしきい値重みに基づいて決まることを指定します。 <i>track-number</i> の範囲は 1 ～ 500 です。
ステップ 4	delay { up up-time [down down-time] down down-time [up up-time] } 例 : switch(config-track)# delay up 20 down 30	オブジェクトの遅延タイマーを設定します。指定できる範囲は 0 ～ 180 秒です。
ステップ 5	(任意) show track 例 : switch(config-track)# show track	オブジェクトのトラッキング情報を表示します。
ステップ 6	(任意) copy running-config startup-config 例 : switch(config-track)# copy running-config startup-config	この設定変更を保存します。

例

次に、ルートのオブジェクトトラッキングを設定し、遅延タイマーを使用する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# track 2 ip route 209.165.201.0/8 reachability
switch(config-track)# delay up 20 down 30
switch(config-track)# copy running-config startup-config
```

次に、トラッキングリストのアップ重みしきい値を 30、ダウンしきい値を 10 にそれぞれ設定し、遅延タイマーを使用する例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# track 1 list threshold weight
switch(config-track)# threshold weight up 30 down 10
switch(config-track)# object 10 weight 15
switch(config-track)# object 20 weight 15
switch(config-track)# object 30
switch(config-track)# delay up 20 down 30
```

次に、インターフェイスがシャットダウンする前後の `show track` コマンドの出力に表示された遅延タイマーの例を示します。

```
switch(config-track)# show track
Track 1
Interface loopback1 Line Protocol
Line Protocol is UP
1 changes, last change 00:00:13
Delay down 10 secs

switch(config-track)# interface loopback 1
switch(config-if)# shutdown
switch(config-if)# show track
Track 1
Interface loopback1 Line Protocol
Line Protocol is delayed DOWN (8 secs remaining)<----- delay timer counting down
1 changes, last change 00:00:22
Delay down 10 secs
```

非デフォルト VRF に対するオブジェクトトラッキングの設定

特定の VRF でオブジェクトをトラッキングするように Cisco NX-OS を設定できます。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	コンフィギュレーション モードに入ります。
ステップ 2	track object-id ip route prefix/length reachability 例 : <pre>switch(config)# track 2 ip route 192.0.2.0/8 reachability switch(config-track)#</pre>	ルートのトラッキング対象オブジェクトを作成し、トラッキング コンフィギュレーション モードを開始します。 object-id の範囲は 1 ～ 500 です。IP のプレフィックス フォーマットは A.B.C.D/length です。length の範囲は 1 ～ 32 です。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 3	vrf member vrf-name 例 : switch(config-track)# vrf member Red	設定されたオブジェクトのトラッキングに使用する VRF を設定します。
ステップ 4	(任意) show track [object-id] 例 : switch(config-track)# show track 3	オブジェクトのトラッキング情報を表示します。
ステップ 5	(任意) copy running-config startup-config 例 : switch(config-track)# copy running-config startup-config	この設定変更を保存します。

例

ルートのオブジェクトトラッキングを設定し、VRF Red を使用して、そのオブジェクトの到達可能性情報を調べる例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# track 2 ip route 209.165.201.0/8 reachability
switch(config-track)# vrf member Red
switch(config-track)# copy running-config startup-config
```

次に、トラッキング対象オブジェクト 2 を変更して、VRF Red の代わりに VRF Blue を使用してこのオブジェクトの到達可能性情報を調べるようにする例を示します。

```
switch# configure terminal
switch(config)# track 2
switch(config-track)# vrf member Blue
switch(config-track)# copy running-config startup-config
```

オブジェクトトラッキングの設定の確認

オブジェクトトラッキングの設定情報を表示するには、次のいずれかの作業を行います。

コマンド	目的
show track [object-id] [brief]	1つまたは複数のオブジェクトについて、オブジェクトトラッキング情報を表示します。
show track [object-id] interface [brief]	インターフェイススペースのオブジェクトトラッキング情報を表示します。
show track [object-id] ip-route [brief]	IPv4 ルートベースのオブジェクトトラッキング情報を表示します。

オブジェクトトラッキングの設定例

次の例は、ルート到達可能性に対してオブジェクトトラッキングを設定し、VRF Red を使用してルートの到達可能性情報を調べる方法を示しています。

```
switch# configure terminal
switch(config)# track 2 ip route 209.165.201.0/8 reachability
switch(config-track)# vrf member Red
switch(config-track)# copy running-config startup-config
```

関連項目

オブジェクトトラッキングの関連情報については、次の項目を参照してください。

- [レイヤ 3 仮想化の設定](#)
- [『Configuring HSRP』 \(501 ページ\)](#)

その他の参考資料

オブジェクトトラッキングの実装に関連する詳細情報については、次の項を参照してください。

関連資料

関連項目	マニュアル タイトル
オブジェクトトラッキング CLI コマンド	『Cisco Nexus 3000 Series Command Reference』
Embedded Event Manager の設定	『Cisco Nexus 3000 シリーズ システム管理コンフィギュレーション ガイド』

標準

標準	タイトル
この機能でサポートされる新規の標準または変更された標準はありません。また、既存の標準のサポートは変更されていません。	—



付録 A

IETF RFC

この付録では、現在の Cisco NX-OS リリースでサポートされている IETF RFC を示します。

- [IETF RFC \(563 ページ\)](#)

IETF RFC

BGP の RFC

RFC	タイトル
RFC 1997	<i>BGP</i> コミュニティの属性
RFC 2385	<i>TCP MD5</i> シグネチャ オプションを使用した <i>BGP</i> セッションの保護
RFC 2439	<i>BGP</i> ルート フラップ ダンピング
RFC 2519	ドメイン ルート間集約のフレームワーク
RFC 2858	<i>BGP-4</i> のマルチプロトコル拡張
RFC 3065	<i>BGP</i> の自律システム連合
RFC 3392	<i>BGP-4</i> による機能のアドバタイズメント
RFC 4271	ボーダー ゲートウェイ プロトコル 4 (<i>BGP-4</i>)
RFC 4273	<i>BGP-4</i> の管理対象オブジェクトの定義
RFC 4456	<i>BGP</i> ルート リフレクション: フルメッシュ内部 <i>BGP (IBGP)</i> の代替
RFC 4486	<i>BGP Cease</i> 通知メッセージのサブコード
RFC 4893	4 オクテット AS 番号スペースの <i>BGP</i> サポート
RFC 5004	1 つの外部から別の外部への <i>BGP</i> 最良パス移行の回避

RFC	タイトル
RFC 5549	IPv6 ネクスト ホップを使用した IPv4 ネットワーク レイヤ到達可能性情報のアドバタイズ
RFC 7606	BGP 更新メッセージの改訂されたエラー処理
draft-ietf-idr-bgp4-mib-15.txt	BGP4-MIB

ファーストホップ冗長プロトコルに関する RFC

RFC	タイトル
RFC 2281	『Hot Standby Redundancy Protocol』
RFC 3768	『Virtual Router Redundancy Protocol』

IP サービスに関する RFC

RFC	タイトル
RFC 786	UDP
RFC 791	IP
RFC 792	ICMP
RFC 793	[TCP]
RFC 826	『ARP』
RFC 1027	『Proxy ARP』
RFC 1591	『DNS Client』
RFC 1812	『IPv4 routers』

OSPF の RFC

RFC	タイトル
RFC 2328	『OSPF Version 2』
RFC 3101	『The OSPF Not-So-Stubby Area (NSSA) Option』

RFC	タイトル
RFC 2370	『 <i>The OSPF Opaque LSA Option</i> 』
RFC 3137	『 <i>OSPF Stub Router Advertisement</i> 』

RIP に関する RFC

RFC	タイトル
RFC 2453	<i>RIP</i> バージョン 2
RFC 2082	<i>RIP-2 MD5</i> 認証

翻訳について

このドキュメントは、米国シスコ発行ドキュメントの参考和訳です。リンク情報につきましては、日本語版掲載時点で、英語版にアップデートがあり、リンク先のページが移動/変更されている場合がありますことをご了承ください。あくまでも参考和訳となりますので、正式な内容については米国サイトのドキュメントを参照ください。